

IS—兎協奏曲—

ミストラル0

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

特に特典などもなくISの世界に転生してしまった天野雪兔。しかし、前世知識やメカオタ知識を用いてIS学園にて原作キャラを巻き込んで色々やったり原作イベントに巻き込まれたりするお話。

やりたいことをとりあえず書いた。そんな駄文ですがよろしく願います。

不定期更新です。

113話から122話まではINFINITE・CROSS—Z とのコラボシナリオとなっております。

142話よりINFINITE・GREASEとのコラボシナリオ第2弾となっております。

ります。

2020年未第二部スタート

<https://syosetu.org/novel/244271/>

目次

キャラ設定	1
オリジナル・改修系 I S 一覧	15
オリジナルキャラ設定	37
オリジナル I S 設定・募集系	49
アムドライバー編登場人物とオリジナルメカ	60
special 兔放送局 なぜなに I S (質問コーナーその1)	76
一章「兔、I S 学園に入学す」	
1 話 入学	88
2 話 クラス代表決定戦 兔、やらか	
す	
3 話 クラス代表決定戦 兔、チョコインをボコス	106
4 話 セカンド幼馴染と本音の頼み 兔、新たな友達を得る	118
5 話 打鉄式式とクラス対抗戦 兔、自重しない	134
6 話 決戦! 謎の I S 兔、乱入す!?	148
二章「兔と姉と訳有りの少女達」	
7 話 姉襲来!?! 新教師は俺の姉!?! 転入生は貴公子と黒兔 兔、色々あってパンクする	161

8話 姉弟対決！雪菜VS雪兔 兔、

貴公子の秘密を知る 220

9話 一夏と黒兔の因縁 兔、友達の

ために頑張る 182

10話 開催！学年別タッグトーナメ

ント!! 兔、疾風と共に 191

11話 決着！タッグトーナメント

兔、黒兔と激突す！ 203

12話 VTS強襲!?! 兔、人命救助

をする 220

13話 シャルロットの気持ちとデュ

ノア社の運命 兔、嫌がらせも妥協しな

い 230

三章「兔と夏と恋する季節」

14話 夏の準備と恋する乙女 兔、

デートに誘われる!?! 237

15話 初デートは何の味? 兔、エ

スコートする 245

16話 デートの終わりは事件ととも

に 兔、アクション映画の真似事をする

254

17話 守護者の剣 兔、親分の偉大

さを知る 261

18話 雪兔の1日 兔、観察日記

268

四章「兔師弟と紅椿 新たな力と暴走I

S

- 19話 夏真つ盛り！IS学園臨海学
校！ 兎、海に行く！ 279
- 20話 登場！篠ノ之束！激突、雪華
VS紅椿!? 兎、箒とガチバトル!?
- 288
- 21話 暴走！銀の福音 兎、提案す
る 306
- 22話 福音迎撃作戦！ 兎、ピンチ
に陥る!? 312
- 23話 少女達だけの戦場 兎、行方
不明になる!? 323
- 24話 白き騎士と白銀の翼 兎、覚
醒する!? 334
- 25話 語られる秘密と告白 兎、暴
露する 348
- 五章「兎とシャルと夏休み」
- 26話 二度目のデート！ミックスベ
リーは恋の味？ 兎、シャルとデートす
る 355
- 27話 とある夏の織斑家の食卓
兎、幼馴染達を焦らせる 367
- 28話 とある夏の織斑家の食卓
兎、そして主夫の実力 378
- 29話 夏のプールでの遭遇 兎、
プールに行く 385

- 30話 続、夏のプールでの遭遇 兔、他人のふりをする ————— 396
- 31話 新I Sは波乗りサーファー!? 兔、新たなI Sを作る ————— 407
- 32話 紅の舞と夏の花 兔、夏祭りに行く ————— 416
- 33話 夏の日の最後の思い出と暗躍する者達 兔、再びプールへ ————— 427
- 六章「兔と姉妹と学園祭」
- 34話 生徒会長と妹の再会 兔、学園最強との邂逅 ————— 438
- 35話 疾風は二度甦る 兔、会長と対話する ————— 448
- 36話 学園祭準備と亡国機業 兔、メタの準備を始める ————— 458
- 37話 学園祭開幕 兔、更識と一緒
に妨害工作に回る ————— 466
- 38話 戦う灰被り姫と王子と騎士 兔、演劇に巻き込まれる ————— 477
- 39話 シンデレラの幕引きと亡国の足掻き 兔、彼女との攻防 ————— 489
- 40話 雪兔VSエム 兔、マドカと戦う ————— 499
- 41話 王冠の行方と雪兔の後始末 兔、お説教（物理）する ————— 509
- 七章「兔とマドカとキャノンボール」

- 4 2 話 キヤノンボールと英中独三人
娘の頼み 兎、三人娘から依頼を受ける
518
- 4 3 話 新パッケージと思わぬ再会
兎、街で○○○と出会う
527
- 4 4 話 喫茶店の雪兎とマドカ 兎、
少女と話す
535
- 4 5 話 開幕！キヤノンボール・ファ
スト！ 兎、やはり自重しない
542
- 4 6 話 レーススタート！ 兎、本気
出す
551
- 4 7 話 一夏の誕生会 兎、一夏を祝
う
562
- 4 8 話 凶鳥の系譜 兎、マドカの専
用機を作る
570
- 4 9 話 おいでよ天災のラボ！ 兎、
ペットを飼う!?
578
- 八章「兎と襲撃のタッグマッチ」
5 0 話 専用機限定タッグマッチ！一
夏のパートナーは？ 兎、ハブられる
588
- 5 1 話 決定タッグパートナー！
兎、皆を鍛える
598
- 5 2 話 タッグマッチ開幕！ 兎、蹂
躪する
608
- 5 3 話 無人機再来！ 兎、特訓の成

果を見る ————— 618

54話 それぞれの戦い 兎、見学す

る ————— 629

55話 一夏の決意 兎、親友に技を

教える ————— 637

九章「兎と千冬と襲撃者」

56話 名も無き兵と守護者の剣

兎、罌を仕掛ける ————— 644

57話 我に断てぬもの無し 兎、ト

ラップで翻弄する ————— 651

58話 代表候補生のお仕事 兎、取

材を受ける ————— 658

59話 デイナーデートと亡国の思惑

兎、デイナーデートする ————— 667

60話 プロジェクト・フロンティア

兎、開拓への準備を開始する ————— 681

十章「兎と秋と体育祭」

61話 開幕！ I S 学園秋の体育祭！！

兎、走る ————— 686

62話 I S 学園体育祭開幕！ 兎、

彼女を応援する ————— 690

63話 激闘！ 玉打ち落とし！ 兎、

クールに決める？ ————— 696

64話 進め！ 軍事障害物走 兎、呆

れる ————— 702

65話 熾烈！ 女子だけの騎馬戦

兎、実況する

706

十一章「兎と京都と亡国機業」

66話 ランチタイムとアピール合戦

72話 新たなる専用機と闇夜の星座

兎、彼女のお弁当を食べる

兎、戦力増強を謀る

67話 ランチタイムパニック 兎、

73話 京都と風の戦乙女 兎、二代

堪忍袋の緒が切れる

目と邂逅する

68話 学園最強VS学園最凶 兎、

74話 復讐の蜘蛛と狂える獅子

公開処刑開始

兎、襲撃される

69話 レースにならない？二人三脚

75話 動き出す姉達と楯の意地

兎、見せつける

兎、戦闘狂と戯れる

70話 パン食い競走とコスプレリ

76話 狂える獅子対白き刃 兎、奥

レー 兎、仮装する

の手発動！

71話 体育祭の終わりと新たなる火

77話 折れた白刃と乱れる椿 兎、

種 兎、備える

もう1つの切り札を切る

738

787

- 78話 舞い戻る白刃ともう一人の
助っ人 兎、チエックメイトする
796
- 79話 夕風燈夜とトリニティモード
兎、ダメ押しする ———— 807
- 80話 少年少女の休息 兎、シャル
ロットに連れ回される ———— 817
- 十二章 「兎と異世界とアムドライバー」
81話 夢への一步と御披露目会
兎、師弟で移動拠点を作る ———— 827
- 82話 ヒーロー達との邂逅 兎、異
世界に行く ———— 833
- 83話 ネオアムジャケットと新たな
力 兎、ジョイとやらかす ———— 845
- 84話 月夜の攻防と進化する力！
兎、大改修に取り掛かる ———— 857
- 85話 セラの心とパフの真意 兎、
妹分に隠し玉を与える ———— 868
- 86話 妹の決断と姉の選択 兎、お
説教再び ———— 883
- 87話 潜入、ミュネーゼ・タウン
兎、キャシーをおちよくる ———— 892
- 88話 復活のDと新バイザー 兎、
色々と企む ———— 906
- 89話 頑固親父とニルギースの過去
兎、ガン||ザルデイに会う ———— 915

- 90話 真実の行方と恋の行方 兎、
ガン||ザルデイと話す 927
- 91話 凶弾の行方と目覚めた獣
兎、逃走中 937
- 92話 ロシエットの逆襲 兎、出番
無し!? 944
- 93話 雪兎の取引と二つ目のピース
兎、取引をする 950
- 94話 護るべきものと機械仕掛けの
獣達 兎、大盤振る舞いする 961
- 95話 ケーナ防衛戦、獣の蹂躪 兎
師弟、反省する 965
- 96話 パフ再び、ダラート潜入作戦
965
- 97話 ダラート潜入作戦その2
兎、交渉する 978
- 98話 3つ目のピースと覚醒の淑女
兎、女同士の戦いに戦慄する 987
- 99話 開戦!アムドライバーVS
ジャステイスアーミー! 兎、喧嘩両成
敗する 1002
- 100話 断罪と究極の力 兎、論破
する 1014
- 101話 究極の神VS創生の破壊神
! 兎、神に挑む!? 1021

102話 See You Again

n 兎、元の世界に帰る 1034

幕間《EXTRA》

EXTRA—01 天災と兎の出会い

1043

十三章 兎と聖夜と聖剣と

103話 冬休みとシャルロットの誘

い 兎、彼女の故郷へと誘われる

1051

104話 旅は道連れ、欧州旅行?

兎、欧州に立つ 1057

105話 父と娘の再会 兎、歓迎さ

れる 1067

106話 お墓参りとフランス観光

兎、双子と再会する 1074

107話 聖剣の脅威と亡国の影

兎、疑う 1083

108話 激突する宇宙 兎、宇宙へ

109話 駆ける蒼き閃光 兎、ぶち

ころがす 1099

110話 突入! 聖剣(エクスカリ

バー)! 兎、シャルと暴れる 1105

111話 聖剣VS聖剣 兎、ぶった

斬る 1115

112話 後片付けと新たな仲間

兎、暗躍する ————— 1132

十四章 兎と龍とシャルロット

113話 交わる世界 兎、龍と遭遇

する ————— 1137

114話 雪兎VS龍我!? 兎、龍と

喧嘩する ————— 1141

115話 ライダーシステムと万城龍

我の謎 兎、解析する ————— 1151

116話 龍我の平行世界での日常

兎、龍に何かを作る ————— 1158

117話 異邦からの襲撃者 兎、龍

とは別行動 ————— 1167

118話 交差する拳とクローズナツ

コオ! 兎、龍に新・装・備を与える

1189

119話 ランチボックスパニックと

復讐の毒蜘蛛 兎、龍を連れ出す

1208

120話 毒蛇の策略と憤怒の鮫

兎、龍と共闘する ————— 1220

121話 雪兎、怒りのEXCEED

(白い魔王) 兎、龍の援護をする

1233

122話 送別会と龍我の帰還 兎、

龍との別れと再会の誓い ————— 1247

十五章 兎と学年末トーナメント

- 123話 織斑計画と月の落とし子
 1268 兎、拾い物をする
- 124話 学年末恒例！学年別トーナメント!! 兎、はりきる
 1278 兎、
- 125話 金と黒、譲れない想い
 1285 解説する
- 126話 女貴公子VS天空の支配者
 1295 兎、女の底力を知る
- 127話 目覚める九尾と吼える白虎
 1303 兎、爆笑する
- 128話 鈴の本気とエリカの意地
 1309 兎、笑い疲れてお休み
- 129話 兎妹VS小兎、武士道と
 1374
- ビックリ箱 兎、解説を譲る
 1314 130話 蒼穹の支配者と紅き荒鷲
- 兎、準備運動開始
 1322 131話 ヒーローの条件 兎、観戦する
- 132話 恋人対決！雪兎VSシャルロット！ 兎、解説される
 1340 133話 晶VS聖、流星煌めく 兎、彼女と観戦する
- 1356 134話 真の幼馴染決定戦!? 箒対鈴
 1364 ! 兎、見守る
- 135話 蒼と白の再戦！ 兎、調べ
 1374

- 136話 波乱の準決勝！ 兎、秘密を知る | 1381
- 137話 大暴走!?! 赤月現る！ 兎、見守る | 1389
- 138話 決勝戦！雪兎VS一夏！ 兎、ちよつぴり本気出す | 1406
- 139話 決着！決勝戦 兎、新たな札を切る | 1422
- 十六章 兎と春休み
- 140話 春休みと新たな仲間 兎、名付ける | 1430
- 141話 マテリアルズ、パワーアップ？ 兎、準備する | 1442
- 142話 戦闘中の説得は割りと同じ | 1449
- 兎、勘違いされる | 1449
- 143話 天災(ディザスター)VS天才(ジーニアス) 兎、天才とバトる | 1462
- 144話 ハザードを止める 兎、賭けに出る | 1475
- 145話 巡り会う者達 兎、奇妙な縁を感じる | 1484
- 146話 兎式異世界交流と新・発・明 兎、交流する | 1491
- 147話 フルフルとピキピキ 兎、遭遇する | 1503

- 148話 誓いと決意 兎、ホクホク
 する ————— 1524
- 149話 パラレルボトル奪還作戦・
 序 兎、やっぱりやらかす ————— 1534
- 150話 パラレルボトル奪還作戦・
 破 兎、プロスを弄る ————— 1555
- 151話 侵攻！難波重工！ 兎、本
 領發揮する ————— 1571
- 152話 簪、決意の力！ 兎、サポ
 トに回る ————— 1596
- 153話 議論する兎と誓いの拳
 (ナツクル) 兎、送迎する ————— 1618
- 154話 雪舞う町を訪ねて 兎一
 味、旅行する ————— 1635
- 155話 雪と兎と温泉旅館 兎、遭
 遇する ————— 1644
- 156話 巫女姫と旦那様 兎、危険
 を感じる ————— 1652
- 157話 和菓子VS洋菓子 兎、巻
 き込まれる ————— 1665
- 158話 スキー場の兎達 兎、雪で
 はしゃぐ ————— 1676
- 159話 桜舞う季節 兎一味、帰還
 断章―とある前日談― ————— 1688
- 1681

キャラ設定

天野雪兎：あまのゆきと

身長：168

体重：62

誕生日：2月3日

趣味：機械弄りと読書

苦手なもの：蛙などぶよぶよしてる生き物

イメージCV：櫻井孝宏 or 犬飼貴丈（桐生戦兎）

本作の主人公

転生者ではあるが、神様に会った訳でもなく特典などのチートスキルは持っていないがどういう因果か一夏らと知り合い何だかんだあつてIS学園に入ってしまった。

前世がメカオタだったせいかわ姉を通じて知り合った束に弟子入りしてしまうなど原作にない行動をいくつも取っており、そのため原作と少し相違が生じているが、そのことに関しては「自分や姉というイレギュラーが生まれて主要人物と知り合っている時点で原作から外れているから」「それでもターニングポイント的な出来事は変わってない」

という理由から原作の世界というより原作に程近い平（眼りなく近く集てしなく速い世界）行世界と認識している。

転生チートはしていないが前世知識を用いて色々やらかしており、過去に「拡張領域内のパッケージ（パック）を入れ換えあらゆる状況に対応する万能機」というコンセプトのISを考案しており、専用機はそれを束が具現化したものである。元々エンジニア志望だったためか整備技術等も束仕込みというハイスベックな上にシャルロットと同じ「ラビット・スイッチ高速切替」が使える等のリアルチート。

また、AGEシステムを元に武装・パッケージ（パック）設計システム・EVOLs systemまで開発している。

家事スキルは一人暮らしは問題無いレベルで、苦手なのは女性と付き合い方。

イメージイラスト

チビキャラの雪兎

専用機：雪華（せつか）

束が雪兔の考案したコンセプトを元に白式と同時期に作成した3，5世代に該当するIS。戦闘中のパッケージ（パック）換装を主としており本体には両腕にマウントしたビームブレード兼ビームガン以外に武装を付けず拡張領域を限界まで増やしパックを最大4つまで持ち込めるようにしており、パック換装によりあらゆる状況に対応できる。またEVO L systemにより蓄積したデータから新たな武装やパックが設計されるため一度食らった手は二度は食らわれない。初期からあるパックは汎用型試作パック〔T：トリアル〕近接型破砕作業パック〔S：ストライカー〕射撃型パック〔G：ガンナー〕の三種。パックを換装すると装甲の一部が追加装甲と同じ色に変化する。後にシヤルロットは本体のデータを譲り受けて専用機が3，5世代機に改修されることになる。

待機形態はチェーンブレスレット。

二次移行したことで「極限化」という単一仕様能力を発現している。「極限化」はエネルギー消費が加速する代わりに機体出力や速度を1.5倍にするという能力で、発動時は各パックと同じ色の粒子を放出する。パックの一部も二次移行に合わせて強化させている。

また、拡張領域まで増加し保有できるパックの最大数が4から6に増えた。

雪華第三形態【雪月華】

無人コア内蔵自律型追加補助外装【白月】と武装合体した事で第3移行した雪華。アドヴァンスドを複数同時装備というところでも能力を持つ化け物ISで、その戦闘能力は既存のISを容易く蹂躪する程。白月のおかげで保有パック数が10を超え、通常のパックとアドヴァンスドの区分なく1つ分としてカウント出来るようになった。また、アドヴァンスドをも凌駕するエクシード(Exceed:極限)というカテゴリーのパックも使用可能になった。エクシードは一種類ずつしか持ち運び出来ないらしい。アマドライバー編までの段階ではNo. 01〜06までのエクシードが存在する。

【T:トライアル】

情報収集用の汎用試作型パック

バックパックにスラスタ、右肩にリーダーユニット、左肩に小型ミサイルポッド、脚にサブスラスタを追加し、ソードライフルとシールドで武装した基本形態。追加装甲の色は白。

二次移行後はソードライフルが二つになった。

【S:ストライカー】

近接型破碎作業パック

宇宙空間でのデブリ等の排除を目的に作成された重機のようなパック。バックパッ

クに大型スラスタ・右腕に大型クロー・パイルバンカー・ドリル・ブースターを複合した多目的シールドブースターを、左腕にはアンカークローを、脚に大型サブスラスタを、腰に作業用サブアームを装備する。初期型パックでは最も堅く、最もロマンに溢れている。追加装甲の色は重機イメージから黄色。

二次移行後は左腕のアンカークローがシールドブースターに内蔵式になり、左腕には雪羅の荷電粒子砲とシザーズクローを内蔵した別のシールドブースターが増設された。

【G：ガンナー】

射撃型パック

小型レールキャノンを両肩や脚のミサイルポッド兼サブスラスタ等の固定装備の他にアサルトライフルやガトリングガンなど銃器メインのパック。その全力射撃はまさに鉄の雨。追加装甲の色は赤。

雪華の追加パック

【W：ウィザード】

対遠隔操作武装用パック。グラスパービットによる遠隔操作武装の乗っ取りにより相手を無力化することを想定して設計されたパックで、ブルー・ティアーズや打鉄式データの反映されている。

ローブ状のミサイルコンテナに背面のグラスパービット、手持ち武装のビームハル

パーを持ち、魔術士や死神を彷彿させるデザインをしている。

学年別トーナメント用の切り札として温存しておくはずが、姉・雪菜との模擬戦のために使用することになり、その存在が明らかになった。セシリアにとつては偏向射撃を用いない限り天敵となるパック。イメージカラーは紫。イメージは、デスサイズと革命機の6号機。

〔J：イエーガー〕

対ラウラ戦に備え開発させた高機動強襲型パック。白式や打鉄式式を上回る機動力を備えたウイングバインダーとブルー・ティアーズのスターライトmk.Ⅲを凌駕する超高出力のバスターライフルを持つ。バスターライフルはカードリッジ式で連射可能という化け物のようなパックでラウラ以外が相手でも高い制圧力を誇る。武装がバスターライフルに全振りなのでバスターライフルが使えなくなると高機動白兵戦しかできない（十分脅威）のが欠点。装甲の色はブルー・ティアーズと同じ蒼。モデルとなったのは自爆大好きでおなじみのウイングガンダムの〔EW〕仕様。

福音戦で第二形態となった際にバスターライフルは砲身の下に新たに小型のバスターライフルをマウントしたバスターライフル改にバージョンアップした。

【B：ブレード】

紅椿戦で使用した近接特化型のパツク。

打鉄・参式をベースに白式や打鉄式式のデータを反映させて設計された。肩の非固定浮遊部位は大型スラスタを内蔵した装甲で、背面のスラスタと合わせて高い機動力と二重瞬時加速を可能にしている。

武装は高周波ブレードの刀が二本に零式と護式・斬艦刀を合わせたような大太刀の他、近接用のものを中心としたもので肩のスラスタを用いた変幻自在の動きで相手を翻弄しつつ斬りかかることを主眼に開発された。

イメージはフルメタアナザーのブレイズ・レイヴン1号機と白式と参式を足して割った感じ。装甲の色は藍色。

【F：フォートレス】

福音戦でシャルロットがリヴァイヴ・カスタムE.V.O.Lで使用した防衛砲撃型。パツク。

肩の非固定浮遊部位に大型シールドを備え、システム補助付きの大型シールドビット【アイギス】を持ち防御力はパツクシリーズでもトップクラス。また、一二〇口径大型バズーカ【グランドスラム】や高周波の刃を持つ砲撃槍【ハルバートカノン】などの武装

を持つ。

防衛戦や味方の盾役、支援砲撃などを得意とする。単機でもその堅牢さで中々墜とすのが困難で長期戦向きの機体でもある。雪華が装備した場合、機動力も持ったため非常に厄介な機体と化す。

カスタムEVO L仕様は灰色だが、雪華仕様はカーキ。

アドヴァンスドパック

雪兎が二次移行後に開発した通常のパック二つ分以上の拡張領域を使用する強力なパック。今までの通常パックがアルファベット一文字だったのに対して二文字以上で表示される。アドヴァンスドパックは何れも複数分の拡張領域を使うだけあって化け物じみた性能をもつ。

〔LA：ライトニング・アサルト〕

キャノンボール・ファストのために雪兎が設計していた超高機動型仕様パック。両肩にリンドヴルムより大型のミサイル内蔵型シールドブラスターキャノンを、腰にシールドブラスタービットを、背面に大型ウイングバインダーを四つと大型ブラスター、ウイングバインダーに装備された四基のブレードガンビットを持つ。脚部も大型のアー

マードブースターになっていく。シールドブースターキャノンと腰シールドブースタービット、背面装備に脚部のアーマードブースターから構成される装備群を「フレスベルグ」という。武装もランパードランチャーのプロトタイプ【ガングニール】を装備する。大型ウイングバインダーには衝撃砲の空圧技術を応用したエアロスラスターが使われている。鈴達三人のパッケージはこのパックの装備を分割して個別に調整し直したものを装備したものである。使用する拡張領域は三つ分でカラーリングは黒と黄色の某雷光の執務官カラー。

また、このパックはTR-5と同じく単機での大気圏離脱と再突入能力を持ち、成層圏からの弾丸機動による襲撃を可能にしている。

モデルはブラックサレナ、TR-1ヘイズルイカロスユニット装備、TR-6、ヴァイスセイヴァーの三機。

【LF：ルシフェリオン】

某魔法少女のゲーム及び劇場版三作目に登場する星光の殲滅者を模したアドヴァンスド。本家よろしくの超高出力型で、その一撃は正に一撃必倒。近接格闘と中・遠距離砲撃戦を得意とし、ダリル&フォルテペアを瞬殺する。ダリル&フォルテ戦では使わなかったが【ルシフェリオン・ドライバー】という本家の砲撃形態を模した砲撃槍を持ち、

これから繰り出される「真・ルシフェリオン・ブレイカー」はアリーナのシールドをも容易くぶち抜く威力を持つ。

【CF：コールド・フレイム】

楯無の制裁に使われたアドヴァンスド。ギリシャのコールド・ブラッドの上位互換に相当する「分子活動の活性・停滞化」を操る。武装はヒートショーテル、コールドショーテル、シールド内蔵型ヒートロッド、右手に輻射波導等の装備で近・中距離を制し、遠距離では炎と氷を使った遠距離攻撃やビットで敵を翻弄する。また、左手に絶対零度を、右手に輻射波導を纏いそれらを合わせて物質を崩壊させる「ハザードインパクト」というえげつない技を持つ。

モデルはコードギアスの紅蓮聖天八極式等。

【YK：エルシニアクロイツ】

【LF：ルシフェリオン】と同じく某魔法少女のゲーム及び劇場版三作目に登場した闇を統べる王を模したアドヴァンスド。主に重力操作系の遠距離攻撃を得意とする広域殲滅型。戦闘だけでなく、管制能力も高く前線指揮等もこなす。流石は王様。武装はビームカノン【アロндаイト】、4基のビームカノンビット【ランスロット】、ダガー

ビット「プリンガー」と少なく感じるが前述した重力操作攻撃が強力過ぎてちつとも安心出来ない。

また、「LF：ルシフェリオン」や「VF：バルニフィカス」と合体しトリニティモードになる際にはベースとなる。

【VF：バルニフィカス】

【LF：ルシフェリオン】と同じく某魔法少女のゲーム及び劇場版三作目に登場した雷刃の襲撃者を模したアドヴァンスド。高機動と近接戦闘に特化したアドヴァンスドで、瞬間速度であればアドヴァンスド最速。蒼雷を操り、蒼雷に触れたものを行動不能にして最速で最大威力の攻撃を叩き込む戦法を得意とする。武装は複合武装の「ライトニング・スラッシュシャー」と補助ビット武装「レヴィ」（チヴィットのレヴィ）だけ。スラッシュシャーは本家と同じく斧、大剣、鎌になる。レヴィはまんまレヴィのような性格を使用おり厄介極まりないが普段は使っていない。レヴィはISを展開していなくても使用出来る。チヴィットは後にISから分離させて単独行動が可能に。

【SF：スピリットフレア】

他のマテリアルズ同様に砕けえぬ闇を模したアドヴァンスド。背面の魄翼を模した

翼状の大型アーム「マテリアルウイング」と両手から放つ「ヴェスパーリング」が主な攻撃方法。「マテリアルウイング」等による防御力はアドヴァンスド随一だが、攻撃力もやはりアドヴァンスドということで「マテリアルウイング」から放たれる大型ビームサーベル「エターナルセイバー」等高いものを備える。しかし、その最大の特徴は広域にナノマシンを散布し、それを介してエネルギーを奪い取るというナインテイルの上位互換機能を持つ。他のダークマテリアルズのアドヴァンスドと合体することでそれぞれの特性を得て更に手がつけれなくなる。更にトリニティモードを超えるカルテツモードが存在するんだとか・・・少しは自重しろ。

【SG：ソウルゲイン】

ソウルゲインを模したアドヴァンスド。近接格闘特化のアドヴァンスドで、気のようなエネルギーを利用出来る。技は四聖獣と麒麟をモチーフにしており、必殺技に当たる麒麟は絶大な威力を誇る。実はオーバーリミット技として麒麟・極がある。

【VS：ヴァイサーガ】

ソウルゲインと同じくヴァイサーガを模したアドヴァンスド。こちらは五大剣による斬撃に特化したタイプで、技のモチーフは火、水、地、風、光などの属性。必殺技で

ある光刃閃は「音を超え、光に迫る」とされる超高速連続斬り。マントが特殊合金繊維で編まれており、並みの攻撃ならばマントで弾ける。

EXCEED

雪兎の最新の切り札。ジョーカーその能力は未知数。アムドライバー編まででNo.01〜0

6まで存在することが判明しているが、何れも開発者たる雪兎すら完全制御出来ないじゃじゃ馬らしい。展開可能時間もかなり短く、雪兎曰く「常に極限化してるといふん……いや、あれより酷い」とのこと。雪兎も余程の事がなければ使わない。使用後は大体筋肉痛になる。

01:EXCALIBUR

某騎士王を模したEXCEED。対聖剣用に開発した。聖剣の出力制御が出来ず必ず最大威力で放たれる為対人では使えない。

02:RAISING

某魔砲少女とあるガンダムを模したEXCEED。ブレイカーがヤバいことに……魔王繋がりに。

ストライクカノンやフォートレス装備のフォーミラ仕様なのはにサテライトシス

テムを組み込んだ最大火力が破格のEXCEED。別世界の束こと束スタークが最初の被害者。

03：NEO

蒼の魔神を模したEXCEED。詳細不明。

04：タナトス

タロットの死神を模したEXCEED。詳細不明。

05：???

詳細不明

06：GENESIC

破壊神を模したEXCEED。というか、まんまジェネシックガオガイガー。使い方は独自のものが多い。シャルロットに手を出したガン||ザルデイの制裁に使用された。

オリジナル・改修系 I S 一覧

打鉄・改

雪兎が廃棄処分になっていいる打鉄の外装を回収し、束から貰ったコアを移植して改修した I S で、実質的にスペックは 2，5 世代機に該当する。訓練機同様にパーソナライズされていないので誰でも I S 適性さえあれば使える。

見た目は縁取りが紅い打鉄だが、中身は雪兎の手で大幅にアップデートされている。実は肩の非固定浮遊部位に隠しサブスラスターが内臓されており、初期の打鉄式式並みの機動力がある。武器は対ビームコーティング刀が二刀とアサルトライフルが一丁。爆裂反応装甲シールドが一つ。主に紅椿入手前の筈が雪兎から借り受けて使用している。

打鉄式式（雪兎監修版）

打鉄式式を雪兎監修で大幅に改修した I S。雪兎が E V O L s y s t e m を用いて大きく手を加えており、荷電粒子砲【春雷】は肩の非固定浮遊部位でなく腰部にサブアームで固定されており、二つの連結の仕方で広範囲殲滅モードと一点突破貫通モードに切

り換えられるようになっていく（もちろんそのままでも使える）。最大の特徴でもあったマルチロックオンシステムに対応した高性能誘導ミサイル【山嵐】は追加装甲にも同様のミサイルを内蔵することで殲滅力を上げており、逃げ切るのは至難。追加装甲に【山嵐】用のミサイルと打鉄・改同様に追加サブスターを持つため機動力も高い。しかし、扱いにはかなりの技量を必要とし、雪鬼の指導を受けた簪でもやつとのようなだ。【春雷】の改修に用いたデータはバスターとセラヴィーの武装。追加装甲はパッケージすることも可能で、別の追加装甲なども雪鬼は考えているようだ（ただ、拡張領域の関係で雪華のように瞬時に換装などはできないらしい）。

式式専用パッケージ【白雷】

【山嵐】用のミサイルを内蔵した追加装甲を大型化し、荷電粒子砲【春雷】を大型化して砲身の下部にグレネードランチャーを追加した複合砲【白雷】に換装した砲戦型パッケージ。【白雷】の火力はチャージに時間がかかるがバスターライフルを上回る。チャージ中にもグレネードは射てるので、グレネードで牽制しつつチャージすることも可能。機動力は低下したが制圧力は増している。

式式専用パッケージ【剣山】

ミサイルを内蔵した追加装甲の代わりにサブアームと大型ブレードを内蔵した追加装甲を装備し近接戦に対応させたパッケージ。全てのブレードが【夢現】と同じ高周波

ブレードのため、このパッケージを装備した式式に近付くのは無謀と言っている。肩の非固定浮遊部位に追加されたブレードは、鉄のようになっており、安全装置を解除していると相手を挟み切ることも可能というところでも装備を持つ。また【夢現】を【F・ウォー・トレス】のハルバートカノンと同じ砲撃槍【夢幻】に換装してある。肩の鉄状のブレードで相手を拘束して【春雷】を0距離で撃ち込むという戦法を行える。

式式専用パッケージ【暴風】

追加装甲を機動力特化型に換装した高機動パッケージ。【B・ブレード】や参式のスラストアーや、【J・イエーガー】のウインググバインダーを参考に作られているためその機動力は正に暴風。ミサイルをバラ撒きながら高速飛翔するという戦術を得意とする。

打鉄・参式（通常カラー）

雪兎が打鉄・改を再改修した I S。白式や式式、そしてベースとなった改の蓄積データと半ば冗談で組み込んだ超闘士の参式、参式斬艦刀のデータで魔改造された I S。肩の非固定浮遊部位にスラストアーと装甲の一体化したものを、背面には白式同様の大型スラストアーを持つことで防御力と機動力を合わせ持つ。武装は改の対ビームコーティンク刀が二振りとアサルトライフル、爆裂反応装甲シールドまでは同じだが、大型ドリルブラスターアーム（ドリル部位が射出可）や参式斬艦刀を追加しており、大幅に強化さ

れた。特に参式斬艦刀は大型モードにすればその名の通り艦艇を一刀両断することすら可能というキチガイ武装であり、並みの操者では満足に振るうことすら叶わない。推進力が大幅に強化された理由もこの斬艦刀を振るうために行われたと言っても過言ではない。当初は箒がテストをしていたが、箒が紅椿を入手してからはコアとカラーリングを変更し、織斑千冬に預けられた。通常カラーは打鉄・改と同じくグレーに紅の縁取り。

打鉄・参式（千冬仕様、または親分カラー）

打鉄・参式のISコアとカラーリングを変更したIS。完全に千冬仕様となっており、箒の時につけられていたリミッターが外され完全体となった機体。カラーリングは親分カラーとも呼ばれる参式のゼンガー・ゾンボルトカラーで親分カラーに違わぬ活躍を見せる……かも？ 本作でもトップ5で敵に回してはいけないIS。

不知火（打鉄のカスタム機）

打鉄を軽装にし、速度特化にカスタムされた機体。

とある企業があるISのデータを元に打鉄を改修した機体で、軽装化して容量を増した拡張領域から多彩な装備を取り出して様々な状況に対応するようにしている。第2世代機ではあるが、状況次第では第3世代にも匹敵する性能を持つ。形状は肩や腰回り

を小型化したり軽量化した打鉄。色はダークグレー。

シルフィオーネ

天野雪菜専用機の天災お手製の第3世代 I S。反射反応装甲というチートじみた装備により無類の速さを誇る I S で、第3世代兵器は背面の非固定浮遊部位のリフレクションビット。背面のビーム攻撃をリフレクションビットによって反射させて行うオールレンジ攻撃が唯一の武装。反射反応装甲は受けた衝撃を任意の方向に弾くというもので、物理攻撃は反射反応装甲、光学兵器はリフレクションビットで反射することで無力化することができる。但し、扱いには高度な演算処理能力が必要で本作で扱えるのは束と雪菜くらいのもの。イメージは某学園都市最強のあの方である。なお、白式との相性はイメージモデルの方と某不幸少年並みに悪い。

ラファール・リヴァイヴ・カスタム E V O L

雪兎が所持するパーソナライズしていないもう一つの I S。ラファール・リヴァイヴのカスタムモデルの一種で、シャルロットのカスタム II 同様に固定武装を除いて拡張領域を増設した仕様。カスタム E V O L とつくように E V O L system で改修したものらしく、パック換装システムを汎用化するテストベッドとして利用されている。そ

のため、基本スペックは通常のラファール・リヴァイヴとあまり変わらない。固定武装がカスタムⅡより少ないのと色が白に変更されているため別のISに見える。

見た目は背面の非固定浮遊部位のないラファール・リヴァイヴ。

パックは初期の雪華と同じく三種（雪華のものの簡易版）あるが色は全て灰色に統一してある。

時々一夏の特訓などで雪兎が使っているらしい。

ウエーブ・ライダー

雪兎がサーフボードから着想を得て開発したIS。専用の展開装甲武装〔バイザーボード〕を用いた高機動型万能機で擬似第4世代機という特殊な試作機。バイザーボードは白式の雪片式型を参考にしており、複数のバイザーボードが存在することから紅椿と雪華の中間に位置するISでもある。バイザーボードは分離・変形・合体によって本機の武装になり、その姿を変える。初期のバイザーボードは近接戦用の〔ソードダイバー〕、射撃戦用の〔シャープガンナー〕、更なる高機動を目指した〔ソニックレイダー〕の三種。

モデルとなったのはエウレカのニルヴァーシユなど、アムドライバーのバイザーシステム、ヒュツケバインMk.Ⅲのガンナーとボクサー。カラーリングは白ベースに部分

的な装甲がライトグリーン。

ナインテイル

特訓メンバーの中で専用機がないのが本音だけになってしまったので雪兎が本音に与えた特殊な I S。世代的には第 3 世代機だが、戦闘用というよりサポート用で紅椿のように速度は遅いがシールドエネルギーを譲渡できたり、戦闘中に味方を修理用ナノマシンで修理したりすることができるかなり変則的な I S。エネルギーの譲渡は背面の尻尾のような部分で行い、逆に吸収すらでき、これがこの I S の第 3 世代武装「九尾」である。九本の尻尾を用いたオートガードやエネルギーの吸収・譲渡により味方のサポートに徹するが、タッグ戦などでパートナーやエネルギーの吸収・譲渡により味方のサポートを吸収し戦闘不能にできるといふ反則スレスレな武装（吸収の上限が自身のシールドエネルギーの上限なので吸収も無限に出来る訳ではない）。その代わり拡張領域が「九尾」で埋まっており、追加武装は装備できず、攻撃武装は「九尾」のみというピーキーな機体になった。ラウラのレーゲンとは A I C の特性もありパートナーとしての相性がいい。

見た目は狐の着ぐるみの延長線上のような姿だが、背面の「九尾」があるため初見のインパクトは凄まじい。

ネタとして作られたはずが高性能機になっている。

ラファール・リヴァイヴⅡS（スゴン・シャルロット機）

雪兔がリヴァイヴを改修して作り上げたシャルロット専用機。スゴンはフランス語の「第2」から二度目の再誕という意味で付けられた。雪華のデータを流用しており、世代は雪華と同じ3，5世代に当たる。

雪華同様に装甲切換に対応したⅠSで性能的には初期の雪華と同クラスの性能を持ち、雪華とハードポイントの位置を同じにすることで雪華用に作られたパックを全て使用できるようにしてある。

また、拡張領域を更に拡張しており、保有できるパック数は4。

ハードポイント以外のデザインはリヴァイヴを発展させたものにしており、カラーリングは雪華における「T：トリアル」に該当するパック「C：カスタム」時はカスタムⅡと同様のカラーリングだが、パック換装でオレンジの部分がパックのカラーに変化するようになっていいる。

「C：カスタム」はカスタムⅡと似た武装で背面に大型スラスタ三基とサブアームが二基、左腕に「灰色の鱗殻」を改修した新型のシールド内蔵式リボルビング・パイルバンカー（ユニコーン・クレスト）「一角獣の紋章」を持ち、共通装備として雪華のソードライフルを発展させた二丁

の専用のソードアサルトライフル「グリフォン」やカスタムⅡの時に使っていた武装の一部を継承している。「C・カスタム」だけでも十分に第3世代機と互角なのだが、装甲切換が可能であるため汎用性は高く、劣化版のバックを使用する量産試作機としてデュノア社に提出した劣化版のリヴァイヴⅡすら一対一でリヴァイヴを蹂躪できる性能を持つ。

〔AG:アンジュルグ〕

リヴァイヴⅡS専用のアドヴァンスド。女性的なフォルムの鎧を纏ったヴァルキリーを模したアンジュルグをベースにしており、弓からエネルギーを実体化させた矢を放てるイリリュージョンアロー、ビームと実体化エネルギー刃を切り替えて使えるミラージュ・ソードを主兵装とする。必殺技であるファントムフェニックスは矢を不死鳥のように変化させて放つ攻撃で凄まじい威力を発揮する。初登場は別のSSとのコラボ中にその別のSS中でという異色なものだった。

ラファール・リヴァイヴⅡ

雪兎がデュノア社に送ったリヴァイヴⅡSの簡易版もしくは劣化版といえるIS。

リヴァイヴからの改修が容易であり、装甲切換を使用する量産試作機。その性能はリヴァイヴ自体が準第3世代機と呼ばれていただけに高水準でイグニッションプランへ

のトライアルにも食い込めるレベルの機体。普通のIS操者でも十分に扱えるが、高速切替持ちが用いるとその厄介さが跳ね上がるといふ。パックはタイプ1、タイプ2などとの程度簡易的な仕様らしく、雪華やリヴァイヴⅡSほどの高性能パックは再現出来ていない。タイプ1は「C:カスタム」の簡易版で背面スラストが二基に減っており、「二角獣の紋章」はオミットして大型シールドを装備する。カラーリングはリヴァイヴと同じカラーで固定されている。デュノア社で作られた試作1号機は雪兎の元に送られ、雪兎が真耶用にカスタムした簡易パック・タイプSPを装備させて真耶に貸し出された。

タイプSPは原作10巻で真耶が使用したりヴァイヴのカスタム型と同様の仕様をパワーアップさせた鬼仕様。

ラファール・リヴァイヴⅡC（カテリナ機）

アレシアの姉・カテリナ用にカスタムされた青いリヴァイヴⅡ。CはカスタムのC。専用武装として双銃剣・大剣に組み換えれるヴァリアブル・リッパを装備する他、全体的に性能を強化しているが、特にスラスト出力は大幅に強化されている。パックは基本のタイプ1の他に「J:イエーガー」モデルのタイプJ、「G:ガンナー」モデルのタイプGを搭載している。

甲龍専用総合強化型パッケージ【嵐龍】

雪兎が鈴の要望で作成した総合強化型パッケージ。左右の衝撃砲【龍咆】を取り外し、それを半分の大きさに縮小した【龍玉】を左右に三つずつ装備する。それを龍の腕を模したサブアームとワイヤーで制御する形でオールレンジ対応にした。【龍玉】は小型化されてはいるが、三基による連射や連動させることで【龍咆】よりも強力な衝撃砲を放てる。また、圧縮した空気自体を壁として射撃攻撃を弾く【嵐壁】や背面に回して衝撃砲をスラスター代わりにして加速できる疑似瞬時加速【龍翔】、六基全部を連動させて放つ最大威力の衝撃砲【覇龍咆哮】など衝撃砲を幅広く活用出来るようになっていた。また、龍の頭部を模したアンカークローの付いた籠手【龍顎】が追加されており、これも衝撃砲の原理を利用した方法で射出できる。

【龍顎】はアルトローンのドラゴンハングをワイヤー式にしたもの。
煌龍

甲龍が二次移行した I S。その際に【嵐龍】を取り込んでおり、左右の小型龍咆【龍玉】が三つから四つに増え、背面には龍の翼を模した大型スラスターを得た。更に二本の大型青龍刀だった双天牙月は刀身が少し細身の刀刃になり鋭さを増した。

双刀【炎龍・氷龍】はそれぞれヒートブレード・コールドブレードになっており、翼

状の大型スラスターには電撃を放つ機能が追加されており、「龍玉」を含め四属性を操る力・単一仕様能力【四聖龍】を発現している。煌はかがやく、きらめくを意味する。

ブルー・ティアーズ専用高機動射撃型パッケージ【エンジェル・フェザー】

雪兎がセシリアの依頼で作成した高機動型パッケージ。「ストライク・ガンナー」の欠点であったビットの固定化を解消すべく設計された。ビットをサイレント・ゼフィルスと同様の六基に増設し、背面の翼のようなサブアーム兼スラスターである「フェザーバインダー」にマウントさせている。スカート部分には追加スラスター兼シールドビットであるシールドブースターを二基装備する。ビットはマウントしたままでもサブアームを使つて前面に向けて射撃が可能になっており、高機動型といいながら総合性能も強化されているが、その分扱いが困難になっている。また、ライフルもスターダスト・シューターを発展させ、実弾用の砲身をレーザー用の砲身の下に増設し側面の装甲を砲口部分にスライドさせることで槍にもなる「ランパードランチャー」までオマケで装備している。これにより高機動突撃という近接技まで使えるようになった。インターセプターは一々展開しては遅いということと両腕に籠手と一体化させる形で装備した。

「フェザーバインダー」はヒールのフィンファンネルのマウントを。「ランパードラン

チャー]はヴァイスリッターのオクスタンランチャーとアツシュセイバーのハルバートランチャーを参考に行っている。

ブルー・ティアーズ・ガブリエル

ブルー・ティアーズが「エンジェル・フェザー」を取り込んで二次移行した姿。翼状のビットマウントが大型化し、それに伴いビットも大型化。火力も当然上昇しており、かつてのスターライトmk.Ⅲに匹敵する。また、刃も備えて斬撃も行えるようになった。ランパードランチャーも槍の部分が大型化し、「LA・ライトニング・アサルト」のガングニールと同様に複数砲門を使った拡散攻撃も可能に（偏向射撃も可）。ガブリエルは四大天使の中で水の元素を司る天使から。

シュヴァルツエア・レーゲン専用高機動型パッケージ「アンシユラーク・シルト」

雪兎がラウラの依頼を受けて作成した高機動型パッケージ。アンシユラーク・シルトはドイツ語で「突撃盾」を意味する。右側にあつた大型レールガンを外し、両側に可動式大型シールドブースターキャノン「リンドヴルム」を装備する。「リンドヴルム」には内蔵型レールキャノンがあり、また背面から伸びるサブアームに大型ガトリングガン「ゲヴィッター」を装備する。ラウラに合わせシンプルな強化だが、十分に強力なパッケージである。雪兎の遊び心で「リンドヴルム」には眼帯を着けた黒い兎のイラストが描かれている。

【リンドヴルム】は飛竜、【ゲヴィッター】は大嵐を意味する。

参考にしたのは兎の部隊章繋がりでTR-6のシールドブスターキャノンなど。

シュヴァルツエア・レーゲン・インレ

シュヴァルツエア・レーゲンが「アンシユラーク・シルト」を取り込んで二次移行した姿。両肩のシールドブスターキャノンに大型レールガンが融合して大型化。眼帯の部分にスカウターのようなものが追加され、ヴォータン・ルージュエ発動時に限るが、ワイヤーブレードの先からAICを展開出来るようになっていた。更にそのワイヤーブレードに高周波振動を加えることで切断能力までも付与している。また、二次移行時に雪兎のデータベースからTR-6のデータを参照してバージョンアップしており、追加装甲形態のモード・インレと高機動形態のモード・ハイゼンスレイに切換が可能。他にもTR-6関連の装備を持つ。インレとは児童文学作品「ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち」にあるうさぎ語で月を意味する単語。

フツケバイン

凶鳥の語源となった鳥の名を冠するマドカ専用機。

本来はマドカの自衛用だったのだが、マドカの要望と雪兎がかなり自重せず組んだためとんでもISとなった。高機動型で背面に専用マルチウエポンバインダー「レーヴァ

テイン」を持つ。その他の武装はファンクスラッシュャー×2、ビームブレード×2、ソー
ドライフル改「レイヴン」、ダブルハンドガン「ヴァイス&シユヴァルツ」、高周波ダガー
「ドラグバイト」×4、小型シールドブースター兼ソードガンビット「ソードブレイカー」
×4、腕部内蔵型アンカーショット「ステインガー」等と多彩で、特にマルチウエポン
バインダー「レーヴァテイン」は背面では大型スラスター、武装としては大剣、双剣、レー
ザーキャノンになり、バイザーボードのように乗ったり出れる複合兵装。

マドカの能力と相まって並み代表候補生では相手にならない実力を発揮する。黒騎
士より相性がいいらしい。

カラーリングは黒、赤、金のトロンベカラー。

デザインは凶鳥の眷族であるエクスパインにタクティカルアームズを背負わせたよ
うな機体。

月光

ミュウ専用に使われた兎用 I S。サイズは普通の少女と変わらないサイズだが、脚部
は高周波ブレード、推進装置内蔵機械鎧「ラビット・スタンプ」など近接格闘特化した
武装を持つ。

白牙

神宮寺晶専用機として開発されたIS。白虎を模したISで腕にあるナツクルガードによる打撃、収納式の高周波爪による斬撃、掌の砲口から放たれる龍咆を参考にした圧縮空気砲、人という脛の部分のブレードを用いた蹴り等を主体とする近接格闘型。また、背面に二基の大型可動式スラストと尻尾型の多層スラストを持ち、複雑な高速移動を可能にしている。零距离で放つ圧縮空気砲である【虎咆穿】は戦車くらいであれば軽く吹き飛ばしてその装甲を丸めた紙屑のようにしてしまいう威力を持つ。【S：ストライカー】と【B：ブレイド】がベース。

ガト・グリス^{灰猫}

エリカIIピーリ専用機。機動力を損なわない大きさのクローアンカー内蔵シールドと銃身が折り畳み式になっていてスナイパーライフルとアサルトライフルを切り換えて使用出来るマルチレンジライフルを主に各ハードポイントにスラスト付きミサイルポットや索敵用のレドームを装備している。また、マドカの【フツケバイン】のヴァイス&シユヴァルツを元で作成した短双剣タイプのソードライフルとも言えるガンブレードや超遠距離狙撃用電磁投射式オーバーレンジライフル【アルテミス】等を装備する。【G：ガンナー】と【J：イエーガー】のデータを元になっている。

ロッソ^赤・アクイラ^鷲

アレシアルロッタ専用機。剣を用いた近接斬撃仕様。籠手に内蔵されたアームブレードや楯無も使っている蛇腹剣、リヴァイヴⅡにも装備されているソードライフル「グリフォン」の派生系で銃身の下に弧を描くように刃が付けられた双銃剣「アクイラ」、投擲用遠隔操作武器のヒートチャクラム、鋭い刃のような翼状のシールドとスラスタの役割も持つ「カッポット・デイ・アアラ（イタリア語で翼の上着）」など近・中距離系の武装中心。「J：イエーガー」と「B：ブレイド」のデータを元になっている。

リリコンバージュ

カロリナⅡゼンナーシユタット専用機。リリコンバージュとはスウェーデンの国花であるドイツ鈴蘭のことで、花言葉は純潔、純愛、幸福の訪れを意味し、花と実にコンバラトキシシという毒を持つ。このISの特徴は背面にあるサブアームで大型の複合武装シールド「ストール^大・ブラード^き」で、背面では大型スラスタ、シールドとしては表面にバリアフィールドを展開可能で、そのバリアフィールドを利用したバリアフィールドタックルやブレード状にバリアを展開したバリアブレードとしても利用できる。その他の武装としては左腕と一体化している複合武装「グスタフ」を持つ。その構成は

シールド、サブマシンガン、レーザーブレード、杭を射出することもできる小型パイルバンカーの四つ。他にもアサルトライフルと槍を組み合わせたシヨットランスを装備しており遠近のバランスの良い機体。「S:ストライカー」と「F:フォートレス」のデータの流用機。

白式・白鳳

白式が雪兎の開発した無人コア内蔵自律型追加補助外装「白鳳」を取り込み三次移行した姿。

デュアルコアによる高出力化、雪片式型の強化系である「煌月白牙」と小太刀になった「雪片参型」や雪羅も強化され「雪羅式型」に、更に零落白夜を応用した攻防機一体兵装エナジーウイング「新月」など雪兎の想定外のキチガイIS化した。また、本来の第3形態である「ホワイト・テイル」に発現する真の単一仕様能力「夕風燈夜」も発現しており、紅椿の補助無しでも無双出来る機体になってしまった。

自律型追加補助外装である「白鳳」は分離して一夏のサポートまで可能。白式本体の外装も一夏が八葉一刀流を学んだせいか灰の機神「ヴァリマール」に近いものに変化している。まだ一夏が未熟故に本来のスペックを引き出しきれていないが、雪兎曰く「乗りこなせるようになったら最終形態の紅蓮とアルビオンを越えんじゃね？」とのこと。

【白鳳】のコアの人格はイタズラ好きの甘えん坊。

ワンダーランド

東用の自衛兼工作補助用 I S。不思議の国のアリスに登場するキャラクターをこちや混ぜにしたようなデザインの I S で多目的ナノマシンと重力制御、八本のサブアームを持つ。第4世代相当の I S で兎師弟の合作という悪夢の機体。雪兎曰く「ターンシリーズとグランゾンと天竜神の複合機」というキチガイコラボしたこの作品で敵に回してはいけない I S の一つ。

鋼^{ハガネ}

雪華や打鉄シリーズをベースに開発した量産仕様 I S。装甲切換に対応した I S で近接仕様【村正】狙撃仕様【種子島】装甲強化仕様【防人】高機動仕様【隼】のバックを持つ。また、四種のバックをフル装備した【武神】という形態も存在するが、並みの搭乗者では扱えない。指揮官機として【白銀】^{シロガネ}、隠密仕様機として【黒鉄】^{クロガネ}というバリエーション機が存在する。本機は主に I S 学園用として配備され、後に自衛隊にも配備される。

風舞

蘭用に雪兎が作成したIS。風舞の全長と同じサイズの巨大な扇状の専用装備【風神】を二つ持つ。【風神】は衝撃砲を応用したもので、表面に風を圧縮・解放する事で風を操り鎌鼬や竜巻等を発生させる事も出来、強度も優れるため打撃武器としても利用可能。一応、第3世代機に該当する。元々は蘭がIS学園に入学した際に渡すように作っていたが、アムドライバーの世界に転移したため蘭の護身用にと予定を前倒しして完成させた。

外装のイメージは巫女。待機形態は髪留め。

第2部以降登場IS

エクストリーム

プロジェクト・フロンティアにて開発された第4世代IS。その最大の特徴はEVO Systemを内蔵しており、常に装備の追加・改修が可能という点でもIS。聖剣事変後に作成され、3人目の男性操者の専用機となる。モデルはエクストリームガンダム。

テストメント

エクストリームと同時期に開発された第4世代 I S。エクストリームとは異なりテスタメントは雪華や白式、リヴァイヴⅡ等から得たデータを元に開発した自律型追加補助外装を複数使い分けるタイプの I S。

その他

E V O L s y s t e m

雪兔が考案し束が形にした雪兔専用ツールその1。

雪兔が入手したデータを最適化し、新たな武装やパックを設計する雪兔を支えるトンデモツール。

原作キャラが酷い目（メタ張られる）のは大体コイツのせい。

s t o r a g e & f a c t o r y

雪兔専用ツールその2。

余剰のパックや材料などストレージできる電子端末。

E V O L s y s t e m で設計した武装やパックをストレージ内の材料で組み立ててしまう代物。二次移行などで I S が増築改造するのを参考に作ったと思われる。

雪兔がボンボン新しいパックを取り出せたり、打鉄式があっさり完成したのはコイ

ツが原因。

storage

雪兎の storage & factory の storage の機能だけを持つツール。シヤルロットのリヴァイヴⅡS用のパックや簪の式式専用パッケージを格納する用に雪兎が作ったもの。

おまけ

蒼龍

雪兎が INFINITE・CROSS-Z の万城龍我用に開発した専用機。

武装は普段は両肩のアーマーになっていて、ネイルグロブで、ブースターが内蔵されており、ロケットパンチ、ブーストパンチが可能。また、変形してドラゴンモードとボードモードになる事が出来、両方ともクローズとなった龍我のサポートが出来る。

ドラゴンモードはクローズドラゴンとリンクしており、クローズドラゴンが操作出来るようになっていて。また、腰のアーマーの横にフルボトルを差すスロットがあり、フルボトルを装着する事でそのボトルの力を使う事も出来る。

オリジナルキャラ設定

天野雪菜：あまのゆきな

身長：165

体重：60

誕生日：10月10日

趣味：カラオケ、雪兔の料理を食べること

苦手なこと：料理、家事

イメージCV：川澄綾子

雪兔の実姉。両親が既に他界しているため、金銭的に天野家を支えていた。しかし、雪兔も束の弟子となり自分で稼ぐようになったため次第にISの事以外は駄目姉になりつつある。唯一の肉親である雪兔を溺愛しており、基本的に余程のことがない限り雪兔の頼みは断らない。IS操者としては適性：A+で高速の妖精の二つ名を持つトップレーサーでもある。現在はIS学園に教師として赴任している。専用機は束の作成した第3世代IS〔シルフィオーネ〕

容姿は焦茶色のポニーテールでイメージはBLAZBLUEのマイ・ナツメ

宮本聖：みやもとひじり

身長：159

体重：？

誕生日：12月7日

趣味：お菓子作り、ぬいぐるみ集め

苦手なこと：激しい運動

イメージCV：種田梨沙

1年2組に所属する生徒。学年別タッグトーナメントにて原作の箒に代わりラウラのパートナーを勤めた少女。最初はラウラとパートナーになったことを不幸に思っていたが、最後は雪兎のバスターライフルの一撃からラウラを庇い、ラウラを改心させるという偉業を成し遂げた。その後、ラウラと友人となったのをきっかけに雪兎達と交友を深めることになる。

両親がパティシエで本人もお菓子作りが趣味だがIS適性がA―だったことでIS学園に入学することになった。

成績は平凡ではあるものの状況判断能力は高く、覚悟を決めた時の行動力は専用機持ちに匹敵するものを持っている。雪兎達との特訓に参加してからは実力を上げており、

ランク戦などでは場合によっては専用機持ちに勝つことすらある。

箒が紅椿を手にし、参式が千冬の手に渡ったことで雪兔の試作ISのモニターをすることになり、専用機持ちのいざこざに巻き込まれていく。

乗機は最初は打鉄、後に雪兔の試作IS「ウエーブ・ライダー」を使う。

容姿はスパロボZのセツコを黒髪にし、丸眼鏡を着けた感じ。

後にクラス再編により1組に編入した。

二村千春：ふたむらちはる

某ブランドの服飾デザイナー。雪兔が雪菜の代表候補生としてのモデル仕事の付き添いで出会った女性。

雪兔と結託してシャルロットの着せ替えショーで店の売り上げを上げるような強かな面を持つ。

稟忍：なつめしのぶ

身長：168

体重：？

誕生日：1月10日

趣味：天体観測

苦手なこと：恋愛関係

イメージCV：水瀬いのり

IS学園に通う二年生で、雪兔のスポンサーをしている企業の社長令嬢。雪兔とはビジネスライクな関係ではあるが、出会いはナンパされていた忍を雪兔が助けたのがきっかけ。企業は宇宙開発系の事業をしており、雪兔の協力によりISを二機所有している。束のISの開発目的であった宇宙開発に賛同しており、軍事転用や女性権利主義者がISを我が物顔で使っていることを嫌悪している。女性ではあるが女性権利主義を否定している。企業所属のIS操者でもあり、実力は二年生の中でも楯無には劣るがトップクラス。企業の持つISの一機を専用機として与えられており、使用機体は打鉄のカスタム機である【不知火】

容姿は肩までの黒髪で後ろの一房だけ尻尾のように長く束ねている。

ミユウ

白いロップイヤー（♀）

好きなもの：人參、雪兔、束、クロエ、マドカ、お昼寝、特訓メンバー（鈴を除く）
嫌いなもの：鈴、お昼寝の邪魔をするやつ

束から雪兎が預かったスーパー兎。人語を理解し、兎とは思えないスペックの運動神経をしており、対人格闘までこなすUSAGIである。

名前の由来はミュータントな兎から。

意識表示は思ったことを表示できるプラカードなどで行う。

その愛らしさから来て数日で1年1組のマスコットの座を獲得する。

鈴とは初対面の時に色々あつて敵視している。

兎のくせに専用機まで持っているらしい。

神宮寺晶：じんぐうじあきら

身長：162

体重：？

誕生日：9月1日

趣味：運動全般、格闘技、プロレス観戦、動物観察、編み物

苦手なこと：勉強（主に文系）

イメージ：CV：花村怜美

元2組でクラス再編の際に1組に編入した空手部の次期エースと評される少女。その近接格闘能力は雪兎やラウラからも絶賛されるレベル。空手部に所属してはいるが

空手に限らず様々な格闘技に精通しており、それらを複合した総合格闘技を主体とした戦闘スタイルを取る。意外にも可愛い動物等を好み、休日には動物園に通っているらしく、ミユウとも仲が良い。また、手先も器用で編み物も得意なんだとか。

エリカIIピリー

身長：155

体重：？

誕生日：8月30日

趣味：射撃、料理、園芸

苦手なこと：絵

イメージCV：藤田咲

スペイン出身。元3組の生徒で専用機は持つてはいないもののクラス代表だった生徒で実力は十分なのだが、国の国家代表が去年代替わりしたばかりなので国家代表よりはプロジェクト・フロンティアの方が活躍の場があると判断して志願したらしい。料理は素材から拘るタイプで、野菜やハーブ等は自分で育てている。

アレシアIIロッタ

身長：157

体重：？

誕生日：5月4日

趣味：食べること、園芸

苦手なこと：食事制限

イメージCV：佐藤聡美

イタリア出身。簪と同じ4組の生徒で明るい印象の娘。戦闘スタイルは二本の短剣による近接格闘。二つ上の姉であるカテナも代表候補生でその筆頭らしく、姉とは違う道に進みたいと志願したんだとか。特技は大食い。エリカとは元々園芸部仲間であレシアは花を好んで育てている。

カロリナIIゼンナーシユタツト

身長：142

体重：？

誕生日：月日

趣味：機械弄り、プログラミング

苦手なこと：早口言葉

イメージCV：野村真悠華

スウエーデン出身。5組から来た生徒で先の二人はそれぞれ前衛・後衛型なのに対し

どちらもこなすバランス型。口数が少なく、また表情の変化も少ないので手を動かしたりして感情表現を行う。代表候補生ではあったが雪兔が作るISやパッケージ類に興味があるらしく、整備・開発方面でも色々学べるかもしれないと志願したとのこと。先日の体育祭ではコスプレリレーで着ぐるみを着ていたらしい。ちなみに鈴やラウラより身長が低いせいで小・中学生と間違われるのが悩み。雪兔に弟子入りし、アムドライバーの世界でジョイやジャックと知り合った事で完全に雪兔の同類と化す。本音とは親友。

コラボゲストキャラ

万城龍我：ばんじょうりゆうが

身長：175

体重：69

誕生日：？月？日

趣味：バッテイングセンターで打ちっぱなし

苦手なもの：頭を使うこと

イメージCV：赤楚衛二

概要

『INFINITE・CROSS―Z』における主人公。改造手術を受けている途中に何故か目を覚まし、逃走する途中でISを動かしてしまいIS学園に入学する。

改造手術を受ける以前の記憶が一切なく、ポケットに入っていた名前だけ書かれた身分証明書から彼が万城龍我という名前であることが発覚した。

熱血で感情の起伏の大きい性格をしており、こう見えて割と責任感がある。また、かなり馬鹿でデリカシーがなく、そのせいで周りを呆れさせることがしばしばある。

かなり喧嘩っ早い上に思い込みが激しく、始めて雪兎と遭遇した時も勘違いから喧嘩をふっかけた。

オープンな本人とは反してかなり謎が多く、未だイマイチ分かっていない事が多い。

炊事、洗濯、掃除などの家事スキルは壊滅的で、一人暮らしを始めたら即座に死んでしまう。

専用機：蒼龍

詳しくはオリジナル・改修系IS一覧を参照。

変身ライダー：仮面ライダークローズ

身長：197.0cm

体重：109.9kg

パンチ力：27.6t

キック力：33・7t

ジャンプ力：57・7m（ひと跳び）

走力：3・2秒（100m）

変身方法

絡繰り仕掛けの小型ドラゴンである『クローズ・ドラゴン』の背中に『ドラゴンフルボトル』を挿し、それを『ビルドドライバー』に装着してハンドルを回して変身する。

戦闘スタイル

ボクシングとプロレスを足して2で割ったような、インファイト主体の戦闘スタイル。

身体能力自体は中の上程度ながらも、常人離れた反射神経と判断能力や周りの物を使って即席の武器を作ったりして戦う。（例としては、鉄パイプや自動販売機）

龍我は記憶が全くないのだが、それでもこれだけ戦うことが出来ることも大きな謎のひとつになっている。

第2部以降の登場人物

天野紫音：あまのしおん

雪兎達がとある違法施設で保護した中性的な容姿をした少年で第3の男性IS操者。施設に入れられる前の記憶が無く、行く宛がなかったため雪菜が保護観察者となり、IS適性が発覚した事でIS学園に入る事になる。記憶に関しては半ば諦めており、過去よりも現在を重視している。紫音という名前も記憶と共に名前を失っていたので雪兎が付けたもの。第2部において雪兎と並ぶ第2の主人公。

容姿はリリカルなのはシリーズのトーマの髪を少し長くして薄紫にした感じ。
使用ISはエクストリーム。

イクスIIシアハート

新一年生首席合格者の少女。真面目な優等生タイプだが、押しに弱く流され易い。しかし、これと決めたことは絶対に曲げない頑固さも合わせ持つ。イギリス出身でセシリアとは旧知の仲。

容姿はPSO2のマトイを金髪にしたもの。

使用ISはテストメント。

新藤レオン：しんどうれおん

母親が日本人とアメリカ人のハーフでクォーターの少年。父親は既に亡くなってお

り母親も病気がちで入院して、生活費をバイトで稼ぐ苦学生だったが、IS適性が見つかればIS学園に入学する第4の男性操者。人前では常に明るく振る舞ってはいるが、根は寂しがり屋。紫音とルームメイトになり親友になる。

容姿はBLACKCATのトレイン。

使用ISは黒雷。

ルークIIファイルス

福音の操者・ナターシャIIファイルスの実弟。聖剣事変後に姉や家族と共に日本に渡り、IS適性が発覚した事でIS学園に入学することになった第5の男性操者。姉の通じて雪兎達と面識を持つ。

容姿はティルズオブデイズニーのリオンを金髪にし、表情を少し柔らかくした感じ。

使用ISはシルバリオファンク。

オリジナル I S 設定・募集系

投稿者 ムリエル・オルタ さん

I S 名 シュヴァルテア・ローズ (和名 黒い薔薇)

開発元 ドイツ

特徴 スラスタ一部分に増設されたジャマーシステムや実弾と B T 兵器の併用

武装 ロケットランチャー付きビームサブマシンガン

ビームマグナム

ガトリングガン (実弾)

6 連装マイクロミサイル

何世代機 第 3・5 世代 (白式とは別次元だが)

単一仕様能力 デストロイモード (展開装甲 色は金色) 注意: 使った場合絶対防御では防ぎきれない G がかるため、非常時以外は使いたくない。

パッケージ フルアーマーパッケージ (実弾ビーム兵器がてんこ盛り)

バンシエパッケージ

Florid Scharlach
緋の鮮紅

参考 ガンダム（シナンジュ、ガンダムユニコーン、ガンダムユニコーンバンシイ、ヤクトドーガ（武器）、ローセン・ズール）

修正案←

IS名 黒雷

開発元 欧州・P F（プロジェクト・フロンティア）共同

特徴 対誘導兵器試験用武装と誘導兵器の両立

武装 変更はガトリングガンが実弾・ビーム混合

単一仕様能力 電光石火（雪華の極限化の速度特化版）

パッケージ アーマードタイプG（フルアーマーユニコーン）、アーマードタイプV（バンシイ、バンシイ・ノルンのアーマード）

説明 イグニツションプランとの合同開発機。フランスのリヴァイヴII、ドイツのシュヴァルティアシリーズ、イギリスのBTシリーズ、イタリアのテンペスタ等の欧州諸国のISの技術とP Fの技術を結集したイグニツションプランの集大成と言える機体。聖剣事変後に開発された機体だが、最大加速に並の操者では耐えられない事が判りP F預りとなる。後に四人目の男性適合者に高い耐G適性があったため、彼の専用機として提供された。

解説

雪兎「まんまユニコーンシリーズの複合型って感じの I S だな」

作者「面白そうだったのでイグニッションプラン関連機にしてみた」

雪兎「コンセプト的に混ぜるとそんな感じになるんだよなあ」

作者「この機体には第 2 部に登場予定の新たな男性操者の三人組の一人に使わせる予定だ」

雪兎「ああ、あの後輩達か・・・ちなみにその内の一人には俺の試作機に乗ってもらおう」

作者「最後の一人のは丁度良さそうなのが他の投稿にあつたのでそつちの時に説明する」

投稿者 上海・人形 旧桜花繚乱 さん

I S 名 WF (ホワイトフォックス) 和名 純狐

開発元 プロジェクト・フロンティア

世代 第 3 世代

特徴 普段は緑の機体に薔薇のツルが巻き付いていて、赤いヘッドセット

単一仕様能力時に全身の装甲が銀と紫の間の様な色になり機体性能が 3 倍から 5 倍になるが、精神状況によって上下する

見た目は頭以外の全てが銀と紫の様な色になり、ヘッドセットから銀色の糸状セ
ンサーが髪

の様に伸び、腰くらいまでの長さがある

単一仕様能力 妖狐純化 装甲が全て淡い紫の着物になる（防御性能が倍程）

深緑にピンクの斑点のラフレシア型大型シールドビットを4機、オジギソウ型モーニ

ングスター、鳳仙花型レーザービットが追加

使った後は反動で全身筋肉痛になる

武装 薔薇のツル型鞭 名称薔薇鞭（ローズウィップ）

竹型レールガン 名称竹砲（バンブーレール）

ドングリ型砲弾 名称団栗弾（エイコーンシェル）

オナモミ型榴弾 名称臬耳弾（カカルバルハウイトウサ）

単一使用能力発動時

ラフレシア型耐ビームシールド 名称魔界のラフレシア（デモンズラフレシア）

ラフレシア型耐実弾シールド 名称冥界のラフレシア（アンダーラフレシア）

オジギソウ型モーニングスター 名称魔界のオジギソウ（デモンズミモザ）

ホウセンカ型レーザービット 名称魔界のホウセンカ（インペイションビット）

修正案←

I S 名 ミステリアス・ガーデン

特徴 植物型の誘導兵器や近・中距離武装を使用する特殊型。部分的にフェイズシフト装甲を採用しており、機体出力の調整でカラーリングが変化する。他にも対実弾・対ビームの積層型シールド等、防御に秀でた性能を持つ。

単一仕様能力 月下ノ華園 一定時間機体出力を上げ、一部の武装の特殊機能を解放する。また、機体出力の向上によりフェイズシフト装甲のカラーも変化し、一部の装甲が可変する。火事場のクソ力みたいなもので長時間の使用は機体・操者共に大きな負担となる。

説明 とある新入生用に雪兎達によって開発された I S。攻めよりも守りに特化した性能を持つが、単一仕様能力を使えば攻勢にも回れる。

解説

雪兎「幽白の蔵馬をモチーフにした I S との事だ。武装も植物が元なものオンリーとユニークなコンセプトな機体だった」

作者「名前はナインティルと被りそうだったのでこちらで変更しました」

雪兎「単一仕様能力に含まれてたカラーチェンジはフェイズシフト装甲で再現する事にしたが、名前と単一仕様能力以外はあまり変更点はなかったな」

投稿者 アサルト さん

IS名 白牙試作型（試作兵装搭載型）

開発 メタルグリフォン社

特徴 全身装甲の機体でスラスタ―背中と脚部に搭載されており、特に背中のスラスタ―はバックパックを搭載して巨大になっている、また、特殊な耐熱対弾装甲をつけたため防御力と高機動の確保に成功したが機体自体かなり大型化しておりコストがかなり高い機体になった

武装 30mmマシンガングレネードランチャー搭載型（実弾）

152mmガンランチャー改修型バズーカ（様々な特殊弾頭が搭載できる）

20mm対空シエルカノン（背中の巨大スラスタ―に2機ほど固定装備としてついており簡単に言えば自動照準で散弾が近接信管のショットガン）

試作プラズマカノン（右腕に搭載しており、射撃にしたり剣の形にして格闘に使用することも可能だがエネルギーは独立型のバッテリーであまり長く使えない、エネルギーが切れた場合はパージすることが可能）

ヒートエーンソー

サブアーム二本（本来は武装交換など戦闘サポート用だが格闘にも使用可能になっている）

単一仕様能力 高速演算戦闘モード

背中のバックパックに搭載された小型スーパーコンピュータにより敵の動きや弾道を高速で演算したり、それによる武器の適材適所の対応を高速でできるようにするシステム（搭乗者からは敵の動きや周りの動きがスローモーションに見えるようになる）使用後は背中のバックパックの一部が開きそこから排熱する

モデル 頭部ジム・ストライカー

胸部オーバークワッドのバステイオン

脚部陸戦型ガンダム

背中のバックパックガンダムmk-2

を参考にして

設定 本機はもともと新型のEOS「H・A・C・S」を開発するための試作機だったが女性権利者の圧力によりISに路線変更せざる得なくなつた機体でもともと拡張性が凄まじかつたためか八つ当たりの感じで様々な機能を搭載した結果リミッターつけた状態で第3・5世代の性能を持つことに成功した

なお本機を開発した企業はこれらのデータをもとにまだ「H・A・C・S」をまだ作る気である模様。

修正案←

IS名 シルバリオフアング

開発元 アメリカ（メタルグリフォン社）

説明 元々は京都にて雪兎達に破壊され国連に提出された機械戦乙女マシナリー・ヴァルキュリアの残骸をメタルグリフォン社が解析し試作していたEOS。だが、支援者の女性権利主義者達の圧力でISに仕様変更を余儀なくされた機体で、全身装甲からISに改修した際にいくらか装甲を削つてはいるが通常のISに比べて装甲が多く機械的なイメージが強い。ISコアと操者の脳波を連動させ高速演算を行い、最適解の行動を指示したり、高速思考を補助する「エニグマ」（雪兎曰く劣化ゼロシステム）という機能を搭載しており、ISコアとの相性次第ではシルバリオ・ゴスペルすら圧倒出来るらしい。武装はほとんどが試作品ではなく既存の量産物で、試作品は試作型プラズマチェインソーや試作型プラズマガンのみ。サブアームやフレキシブルスラストター等の装備も充実している。メタルグリフォン社はこの機体の運用データから新たなEOSを開発するつもりらしい。しかし、皮肉にも本機は聖剣事変後にアメリカのとある国家代表（ナターシャ）の弟：：つまり男性操者が使用する事になる。

解説

作者「ぶつちやけ、コイツの修正案が一番難産だった」

雪兎「一番修正したからな、コイツは・・・しかも、コイツに関しては俺も開発に

はノータッチだしな」

作者「ちなみにこの世界ではシルバリオ・ゴスペルのアメリカ側の開発責任者がこのメタルグリフォン社になるから機体も操者の姉弟・姉妹になるんだわ」

雪兎「これ書いてる時点では俺もナターシャさんとは面識無いんだ。それに俺はアメリカと仲悪いし……この辺に関しては元の世界に帰還後の聖剣事変で語ると思うからお楽しみ」

作者「ハードル上げんな！まあ、原作の聖剣編に相当する聖剣事変が原作よりかなり大事になる予定です。ナターシャとその弟君もそれに巻き込まれる形で I S 学園に関わる事になります」

雪兎「今ある構想だけでも結構大事だな」

投稿者 武御雷参型 さん

型式 RCW I—X001 プラテストウ

武装 20口径50mm単装砲 二基

15口径90mm散弾銃 一基

対 I S 用六連装ミサイルポット 二基

レーザー重斬刀 一振り

量子変換武装

六銃身ガトリング砲 四基

型式については某国機業を英訳した結果、Ruined Country Weaving Industryの頭文字を取って使っています。

機体名については、英訳で抗議を意味します。

武装については、デインを基に構成し、ミサイルに関しては、ザクファントムを採用しています。レーザー重斬刀については、シグーデーパーアームズを使っています。六銃身ガトリング砲に関しては、シグー専用アサルトシユクラウド装備の物を流用しています。

最後に、機体のモチーフになったのは、ゲイツRです。

ゲイツRの腰部に装備されているレール砲を単装砲に載せ換え、基本武装として散弾銃を持つと言うスタイルです。

レーザー重斬刀は、折り畳み式の物を採用し、腰部後方に横付けされています。

ミサイルポットは、バックパックとしてスラスト一体の物です。

六銃身ガトリング砲を装備時は、散弾銃が量子変換され、両腕、両肩部に二基つつ装備される形です。

単装砲は、アサルトシユクラウド装備時にも使えます。但し、レーザー重斬刀は使えま

せん。と言うか、取り外せません。腕にガトリング砲が付いてるんだもん。引っ掛かるしね

修正点←

I S 名 ブラテストウ・リブラ
抗議する天秤

追加装甲が最初から装備に変更し途中でページ出来るようにした。

解説

雪兎「これは元々メツセージをくれた武御雷参型さんに依頼して作成してもらった I S だな」

作者「なので変更点も名前と追加装甲の使い方くらいなんだわさ」

雪兎「本編では山田先生のリヴァイヴⅡにやられてあんまし強敵感なかったけど、夏達とだったら優位に立てたんじゃね？」

作者「そうだね、相手が・・・間が悪かったんだよ」

雪兎「コイツに関しては聖剣事変辺りでもう一度出てくる予定らしい」

作者「残りの星座の連中も出さなきゃ・・・」

雪兎「・・・がんばれ」

アムドライバー編登場人物とオリジナルメカ

アムドライバー編登場人物

ジェナスⅡデイヤ

アムドライバーの主人公。熱血漢で民間人を救うアムドライバーを志すいかにもな主人公キヤラで、近接系の装備を得意とする。口癖は「やっちやるぜ!」「GET RI DE!」「撃つ!」など。熱くなると周りが見えなくなる癖があるものの、ピュアアムドライバーのリーダー的存在となる。シーンの死でロシエットに対し殺意を抱くも、その殺意溢れる自身の姿に自己嫌悪に陥るが、ゼアムの力で容易く人を消すガンⅡザルデいの姿を見てかつて憧れたガンⅡザルデいを打倒する事を決意する。そのガンⅡザルデイとの最終決戦ではイヴァンの決死の一手でフルゼアムを完成させガンⅡザルデイとの死闘に勝利した。

ラグナⅡラウレリア

ジェナスと同じスクール（養成所）出身のアムドライバー。ジェナスとは反対に射撃を得意とするスナイパー。チャライ印象があるが、心優しい一面を持つ。アムドラサポーターであり、工作員だったシシーと恋仲になるも、直後にロシエットにシシーを殺

され復讐に走ろうとするが失敗。その後、一時離脱するも自分の護るべきものを思い出し戦線に復帰した。

セラⅡメイ（メイナード）

ジェナスやラグナと同期のアムドライバーの少女。

兄・ジオナサンⅡメイナードの死に疑念を抱き、その真相を知る為にアムドライバーになった。原作ではエーリックを誤って殺してしまったり、恋仲となったシーンを殺されたりと多くの死と向き合わされる。

シーンⅡピアース

ジェナス達が所属していたキャンプ・リトルウイングのNo. 1アムドライバー。最初はキャシーに言われるがまま人気取りの為のバトルをしていたが、デイグラーズとの戦いに敗れ挫折を味わうもジェナス達や途中で知り合ったニコラのおかげで立ち直りジェナス達のいい兄貴分となった。キャンプではロシエツトとK・Kと共にユニットを組んでいたが、デイグラーズによってキャンプ崩壊後はジェナス達と行動を共にする事となり、キャシーと共にJAに寝返ったロシエツト達とも敵対する事になる。原作ではキャシー達との決戦の最中キャシーを説得中にキャシーもろともロシエツトに刺され死亡。ピュアアムドライバー唯一の戦死者であり、その死はジェナスやセラは勿論、ピュアアムドライバーとその協力者達に大きな傷を残した。

ダークIIカルホール

タフトとコンビを組むベテランアムドライバー。若手ばかりのピュアアムドライバーのまとめ役。打撃等の近接戦闘を得意とする。暴走しがちなジェナス達のストッパー。戦闘中はやたらと擬音を多様する。

タフトIIクレマー

ダークとコンビを組むベテランアムドライバー。奇抜な喋り方をするが子供の相手が好きだったり、ダークに装備のメンテの重要性を説いたりする事も。とある一件で女装してからは女装に目覚めた。

ジヨイIIレオン

ジェナス達ピュアアムドライバーのローディ（メカニック）。若いながらその腕前は一流で、たった一人で全員の装備のメンテと新装備の開発をしてきた。近年ネットでは「人間AGEシステム」とまで言われている。雪兎の同類。

イヴァンIIニルギース

アムテクノロジの開発者であった兄・カペリIIニルギースをアムテクノロジの独占の為に殺され復讐の為に生きていた男。最初はジェナス達の敵として立ちはだかったが、ジェナス達とガンIIザルデイに接触してゼアムのピースを集める為に協力するようになり、最後はジェナス達の起死回生の一手の為にジェナス達を裏切ったと見せかけ

てガンⅡザルデイからフルゼアムのデータを奪いジェナスに託した。

シヤシヤ

イヴァンと行動を共にする少女。高い戦闘能力を持つがやや天然。ジェナスに強い興味を抱いている。シーンの死とロシエツトを殺そうとした事で落ち込むジェナスをデートに連れ出して励ました。最後は行方不明になったイヴァンを探しに一人旅立った。

マリーⅡフアステイア

ジャーナリストでピユアアムドライバーの協力者の一人。ジェナス達の活躍を報道し、彼らのサポートバジエツト（活動資金）調達に貢献した。

ニツクⅡキーオ

マリーとコンビを組むカメラマン。時折トレーラーの操縦も行った。

シシーⅡクロフト（シルヴィアⅡクラフトン）

アムドラサポーター兼工員だった少女。最初のピースの受け渡し役。ラグナと恋仲になるもロシエツトに殺害された。

パフⅡシヤイニン

シーンと人気を二分するパフユニットのリーダー。

セラの兄・ジョナサンとはコンビを組んでいた仲で、ジョナサンの失踪直前にセラの

事を託されていた。

ジュリールブルーム、ジュネールブルーム

パフユニットに所属する双子のアムドライバー。見分けはサイドテールの向き。空
気キャラでもある。

ジャックルホンジョー

パフユニットのローディ。メカニックの腕前はジョイに劣らない。

キャシールモルトン

元シーンユニットのローディ。JAに寝返つてからはロシエツト達やデイグラーズ
を使つて何度もジェナス達を襲撃する。ゼアムの存在を知つてからはシムカやガン
ザルデイと手を組み、JAの指導者ジャンルピエルルジノベゼを暗殺し連合軍を率い
たが、シーンと共にロシエツトに殺害された。

ロシエツトキツス

童顔な元シーンユニットのメンバー。JAに寝返つてからは執拗にシーンやジェナ
スを狙つたり、非道な行いを平然としたりした。我儘な子供そのものといった未熟な精
神故に嘸ませ犬なキャラではあるが、原作ではシシー、キャシー、シーンを手にかけて
いる。それが崇りジェナスに殺されかけるがK・Kに助けられ、二度とアムジャケツ
トを着ない事を条件に見逃される。大体悪いのはコイツ。

クックⅡカーランド(K. K.)

元シーンユニットのメンバー。ロシエットと共にキャシーに誘われてJAに寝返るもキャシーの手駒扱いされる。割りと空気な人。主にロシエットのお守りが仕事。ジノベゼ暗殺時にはジノベゼの乗る飛行機を撃ち落とすのに躊躇いを見せるも実行した。

シャドーⅡエーリック

イヴァンに兄を殺されその恨みからロシエット達とチームを組んでジェナス達を襲撃する。

原作ではシシーを人質にとるも事故でセラに射たれて死亡した。セラにトラウマを、ロシエットに復讐心を抱かせた。

ランデイⅡシムカ

連邦評議会議員でウイルコット派のNo. 2。元アムドライバーでもあるが、今はその面影は無い。ジェナス達に支援する代わりに利用したり、他にも裏で様々な工作をしていた。ウイルコット議長死後にガンⅡザルデイやキャシーと手を組み連合軍を結成する。ガンⅡザルデイの目を盗みゼアムジャケツト部隊を作りガンⅡザルデイに反旗を翻すもそのデータは偽物で直後ガンⅡザルデイによって殺害された。

バーロツクⅡウイルコット

連邦評議会議長。人間同士の争いを止めようとバグシーン・アムドライバー計画を承

認する。ほとんど派閥議員の傀儡と化していたが、娘のシエリルがアムドライバーとなりJ Aに殺されてからは戦いをやめようとするもシムカらの圧力で叶わなかった。ジェナス達との邂逅へてムーロンの決戦ではシムカの制止を振り切って戦い、最後はJ Aを道連れに地下のミサイルを爆破して散っていった。

ジャンⅡピエールⅡジノベゼ

J Aのボス。連邦評議会議員で、ウイルコットを失脚させるためにイヴァンと手を組みアムドライバー計画の真実を暴露するが、イヴァンと違い力による支配を目論んだため決別する。J A発足後はキャシーらを使って連邦アムドライバーを追い詰めるが、キャシーがゼアムを隠している事を知ったがために乗っていた輸送機をキャシーの命を受けたK・Kに狙撃され死亡する。

ガングリッドIIダイグラーズ

度々ジェナス達ピュアアムドライバーの前に立ち塞がった男。当初はバイザー無しでエツジバイザーを纏ったシーンを圧倒する実力を見せたが、一度ジェナス達に敗れて以降は嘯ませ犬のような存在に。しかし、その実力は本物で最終戦ではネオアムジャケットとはいえたった一人でピュアアムドライバー達を圧倒。ネオボードバイザーを装備したジェナスをアムギア（アムドライバーの装備）無しで相手にしても力負けしなかった。戦闘狂ではあるが、正々堂々と戦う男で、キャシーが人質を取りピュアアムド

ライバーが反撃してこないと知ると勝手に人質を解放したりもした。それが原因でキャシーの怒りを買って、仕掛けてあった爆薬で崖に落とされ生死不明となった。ケケという鼻型の自作ロボットを連れており、力だけではなく技術力も兼ね備えていたようだ。尚、ケケは一度ラグナに射たれて破壊されたが、ネオケケとして復活している。

ガンザルディ

アムテクノロジ研究者の一人でファーストアムドライバーだった男。アムテクノロジの独占を狙う連邦評議会に狙われ雲隠れしていたが、ジェナス達と出会いゼアムのピースを集めるよう指示を出した。しかし、ジェナス達がゼアムジャケットを自分に無断で作成した事等からシムカやキャシーと対ピユアアムドライバー連合を結成し敵対する。ゼアムを揃え「静寂こそ平和。それを阻む者は理由が何であれ排除する」と宣言し、自分こそが神と世界を支配しようとするがピユアアムドライバーに阻まれ、マグマへと落下し死亡した。

用語

アムテクノロジ

アムドライバー計画のために開発された技術。

アムエネルギー

アムマテリアルから抽出される謎のエネルギー。アムドライバーの世界ではエネルギーはこれに一本化されており、そのせいで後述するゼアムによって大惨事に陥る。

アムマテリアル

アムジャケツト等の素材兼エネルギー資源。

アムジャケツト

アムドライバーが纏うワードスーツ。各所にハードポイントがあり、そこに各種武装（アムギア）を装着することでカスタムすることが出来る汎用性の高い装備。ネオアムジャケツトはこれの背面にエネルギー供給用のチューブシステムを組み込んだバックパックを装着したものだ。雪兎はこれにIS由来の瞬間装着機能や拡張領域を追加し、ゼアム対策としてエネルギーコンバータを組み込んでネオアムジャケツト改へと魔改造する。

バイザー

Binary Silhouette Armorの略で乗り物としてのビークルモードとアーマーのブリガンディモードの二形態に変形する。当初は高額装備のために数は少なかったが、開発、強奪、借りパク、譲渡などで数を増やしていった。

ビーストバイザー

雪兎がIS由来の技術を用いて開発したバイザー。従来のビークルモードとブリガ

ンデイモードに加え独自に自律行動が可能なビーストモードに変形する。簡易型の劣化ISコアを内蔵しており、アムドライバーが操作しなくても独自に行動出来る（余程の事が無い限りアムドライバーの操作が優勢される）。ゼアムジャケットの作成を止めた代わりに開発したという経緯もあってゼアムジャケット並の性能を持つ。これによりロシエットをはじめとしたJAは蹂躪される事になる。雪兎もこのバイザーをジェナス達が直ぐに使いこなすとは思ってもおらず、紅椿と同じ無段階移行によるリミッターを掛けていたが、ジェナスは初戦で全解放モードを使いこなし雪兎を驚愕させた。

ゼアム

究極のアムテクノロジー。使い方次第で世界を救うも滅ぼすも自在なんだとか。作者の推測ではその本質はアムエネルギーの増幅と集約。

ゼアムジャケット

ゼアムを用いたアムジャケット。凄まじい性能を誇り、未完成でもネオアムジャケットを蹂躪する程。機能としては……

1. アムエネルギーの増幅
2. 浮遊・飛行能力
3. アムエネルギーによる粒子分解
4. アムエネルギーの集約（支配）

ジェナスのゼアムジャケットはピース2つをジョイが解析して作成したもので完成度が低く当初は1の効果しか使えなかった。一方で半分のピースを所持していたガンⅡザルデイのものは3まで使用出来、フルゼアムとなつてからは4の力で全世界のアムエネルギーを吸収してエネルギー恐慌を引き起こした。これに反発した市民がデモを行ったが、ガンⅡザルデイによつて都市毎消滅させられた（この攻撃は丸1日のチャージが必要らしく連発不可）。最後はジェナスとガンⅡザルデイのフルゼアム同士の戦いとなり双方のゼアムジャケットを消滅した。

オリジナルバイザー

ドリルランスバイザー

ランスバイザーを改修し、先端をドリルにしたバイザー。

バーストバイザー改

バーストバイザーに拡張領域を付与し、ミサイルを即補充出来る用に改修したバイザー。

ジェットバイザー〔ペガサス〕

バーストバイザーのプロトタイプであるエアバイク型のバイザー。後にジェットバイザー〔ペルセウス〕になる。

ドラグバイザー〔ドラグーン〕

ジェナス用に開発されたビーストバイザー。ボードバイザータイプでネオボードバイザー〔ソードダンサー〕のデータを元に作られた。単独飛行が可能で、翼にそれぞれ大型ソードが装備されており、尻尾も有線式遠隔操作が可能なテイルブレードになっている。竜の頭部には荷電粒子砲まで内蔵しており遠距離にも対応。その分扱いが難しくなっているのだが、ジェナスは初戦であっさり使いこなしたため雪兎にバグキャラ（人外・同類）認定される。モデルはモンハンのバル・ファルクと鉄血のハシユマル。

チェイスバイザー〔ガラム〕

ラグナ用に開発されたビーストバイザー。モトバイザーやネオクロスバイザー2号機等のバイク型バイザーの発展機で2砲のハイビームキャノン〔イフリート〕、6連ミサイルポッド×2、ガトリングガン×2と重装備ながら高い機動力を誇る。ビーストモードは狼型でトパスを容易く噛み砕く高周波振動のバイブレーションファンングやネイルクロー、バイク形態のホイールを利用したホイールギアなど近接戦装備も充実している。モデルはゾイドのケーニツヒウルフ。

ウイングバイザー〔ストームウイング〕

セラ用に開発されたビーストバイザー。ストームバイザーをベースにミサイルポッドなどを追加した。機首のビームキャノンはバスターライフルに変更され、ビームサー

ベルを内蔵したシールドも装備している。まんまウイングガンダム。後にパフにもカラーリング違いのものを作成する。セラカラーが白とオレンジで、パフカラーが黒とオレンジ。

ストライクバイザー〔シーザー〕

シーン用に開発されたビーストバイザー。ビーストバイザーの中で唯一装甲切換を実装したバイザーで、近接のエッジ、砲撃のランドとそれぞれエッジバイザーとランドバイザーの特性を持つものと新造された高機動型のインパルスと防御型のプロテクションの4形態を使い分ける事が出来る。元々ビーストバイザーはシーンの死亡フラグ回避用に作られたらしくシーザーは正に守護獣と言える。モデルは装甲切換の元ネタであるライガーゼロ。ビークルモードは戦車型。

スピアバイザー〔スピアヘッド〕

ダーク用に開発されたビーストバイザー。ドリルランスバイザーをベースにしたカジキ型で、ブリガンデイモードはランスバイザーに酷似しているが、右腕と一体化していたランスを取り外して背中マウント出来るよう改修してある。両腕にはホイールガンドレットを装備しており、それによる打撃戦も可能。機首のドリルランスは展開してクローにもなり、内部に射出可能なバンカーバスターを備えている。撃ち込む際には左腕のホイールガンドレットを右腕のランスに接続する。モデルはダイガードのノツ

トパニツシャー。

ブラストバイザー「ブラストホーン」

タフト用に開発されたビーストバイザー。バイソンと装甲車を組み合わせたデザインで装甲を展開する事で砲撃形態になり、面制圧砲撃を行う。バーストバイザーのミサイルも搭載しており、火力は非常に高い。また、ビーストモード時の頭部はブリガンデイモードではホーンシールドとなり、それを使ったシールドタックルは強烈。モデルはゾイドのデイバイソン。

ジェットバイザー「ペルセウス」

ペガサスの完成版。イヴァン用に改修したビーストバイザー。エアバイク形態の機首がビーストモードやブリガンデイモード時はガンランスとして使用出来る。他にもビームを反射するリフレクトシールドを備える。ブリガンデイモードの外見は騎士だが高機動。ビーストモード時にも騎乗出来る。

フライトバイザー「エアロフライヤー」

シャシャ用に開発されたビーストバイザー。エアバイザーを改修したもので、ステルス機とエイを組み合わせた外見をしている。エイの尻尾にあたる部分が蛇腹剣とレイピアを組み合わせたウィップサーベルになっている。ブリガンデイモードはシャシャの要望で背面に背負って手足に装甲が少しく程度のものだが、シャシャの機動力を最

大限に活かすよう工夫がされている。また翼を巨大なブーメランとしても利用出来る。
 フロートバイザー〔ワイズ〕

ジャイロバイザーを改修したビーストバイザー。ジャイロバイザーでは背面にあるため前屈みにならないと使えないプロペラが変形したビームキャノン・レーヴァテインをベースをオスプレイ型にし、両サイドに取り付けた事で威力こそ落ちたが前屈みならず発射出来るようにし、ISのPICを組み込んで一時的に浮遊出来るようにして空中からも発射可能に改良した。また、両サイドに取り付けた事でプロペラを回転する刃にして攻撃したり、手裏剣のように飛ばしたり、プロペラをバスタークローにしたり、プロペラを前方に向けて竜巻を発生させたりとやれることが多彩になった。ビーストモードは鼻型。モデルはゾイドのナイトワイズとバーサークフューラー。ムーロンとダラートでのピース回収とケーナ防衛のために3つに部隊を分けた際にダラート組に協力したパフユニットにパフのストームウイングと共に報酬として2機譲渡しジュリとジユネの双子が使用した。

アーマードギア

雪兔が開発した

Expected Operation Seekerの一種。性能的にはネオアム

外骨格

攻性機

動

装

甲

ジャケットと同等。

アーマードギア1号機

セラを追ってミュネーゼに潜入した蘭を追うために弾が雪兎から借り受けた。ゲシユペンストシリーズをこつちやにした機体。

アーマードギア2号機

数馬用に雪兎が作った自衛用パワードスーツ。見た目はアムジャケットにガンダムアストレイ（ブルーフレーム）の装甲を追加したようなデザインのもの。ブルーフレーム系の装備を使用出来る。他にも独自装備としてアムドライバーのライドボードに似たサブフライトユニット・フローターシールドを装備する。

special 兎放送局 なぜなにIS (質問
コーナーその1)

「3・2・1・・・わあー！なぜなにIS始まるよ〜」

雪兎「という訳で始まってしまいました、質問コーナー」

シャル「・・・結構早くやれたね、このコーナー」

雪兎「そりゃあ、お気に入り登録して下さい下さってる方々からそれなりに質問いただいたからな」

シャル「雪兎、メタいよ・・・」

雪兎「知らん、ここは本編とは別時空・・・つか、某青い部屋だよな、ここ」

シャル「そ、それよりゲストの人待たせてるんでしょ？」

雪兎「こんな世界に遊びに来たいっていう奇特なゲストがな・・・今回は初回という事もあって本編からは俺とシャルの二人だけ。あとは別世界のゲストが数人来る予定だ」

シャル「数人？一人じゃないの？」

雪兎「三人+ α ？」

シャル「+α? 四人じゃなくて?」

雪兎「何か一人? 人間じゃないのいるからな」

シャル「そ、そうなんだ・・・」

雪兎「それじゃあ、最初のゲストだ。『仮面ライダー学園 学園一の落ちこぼれに俺が憑依してビルドになっちゃった話』より戦場学兎だ。」

学兎「ども、戦場学兎です」

シャル「どうも」

学兎「こつちにもシャルロットがいるのか」

シャル「もしかして別の世界の僕を知ってる?」

学兎「ああ、万城龍我ってやつのとこのシャルロットをな」

雪兎「あの脳筋んとかか」

学兎「ん? 知り合いなのか?」

雪兎「ちよつとこつちの世界で世話してやった関係だ」

※113話〜122話参照

学兎「おっと、忘れるとこだった。ウチの作者や仲間達から質問預かってるぞ」

雪兎「ネタバレにならない範囲で答えるさ」

学兎「安心しろ。今回はそういう質問は無いから・・・え〜つと、まずは俺から『好

きな仮面ライダーは？」

雪兎「仮面ライダーときたか・・・好きなライダーはバースやG-3とかかな？」

シャル「あゝ、武器とか付け替えたりするからかな？」

雪兎「正解。あとは変身者の伊達さんや氷川さんが好きつてのもある」

学兎「なるほど・・・次は楓子から『一番苦戦した相手とか聞きたいかな』だよ」

雪兎「銀シルバリオ・ゴスベルの福音と東スタークだな」

シャル「福音の時は本当に心配したんだからね？」

学兎「福音か、意外だな」

雪兎「今の俺なら苦戦はしないだろうけど、当時はアドヴァンストも対福音用のメタ装備も無かったんでな。本当に死ぬかと思っただぜ」

学兎「じゃあ束？スタークとやらは？」

雪兎「それは単純にこっちの手読まれて対策されていったからな・・・」

シャル「それ、雪兎のいつもの戦法だよな？」

雪兎「まんまやり返された形だな」

学兎「よく勝てたな・・・」

雪兎「ちよつとブチギレて質と量の暴力でねじ伏せた」

学兎「（こいつ敵に回すのだけはやめよう）つ、次は雷華の質問だな、『雪兎君は休日

に何をしてるんですか?」

雪兎「休日かぁ……」

シャル「その質問は僕が答えるよ。休日でも雪兎は相変わらずだよ。用事が何も無ければ今まで収集したデータの整理か新しいアイデアまとめたり、一夏達の特訓の相手をしたり、録画してたアニメや特撮みたりしてるよ」

学兎「や、やけに詳しいな……」

シャル「僕は雪兎の彼女だからね」

雪兎「あとはシャルとデートぐらいか?」

学兎「ご馳走様です。次は美咲だな。『スクラツシユドライバーと生身で使いたいフルボトルは?』」

雪兎「フルボトルか……スクラツシユなら掃除機と扇風機、生身ならラビットとペンギンだな」

学兎「掃除機と扇風機とラビットはわかるが……ペンギン?」

雪兎「ああ、何か予想つかないからな!」

学兎「あく、それ、判る気がする。実験してみたくなるよな」

雪兎「そうそう!」

シャル「はいはい、そういうのは収録終わってからにしようねえ?」

雪兎・学兎 「あつ、はい」

学兎 「次というか、最後の質問だな、これはウチの作者から『雪兎君にとって、ヒーローとは?』」

雪兎 「ヒーローねえ……信念を貫く者、かな?」

学兎 「信念?」

雪兎 「正義や悪なんて人それぞれだろ? ヒーローってのはそんな自分の正義っていう信念を貫いたやつの事だと俺は思ってる。こんな風に考えるのは前に知り合ったやつにそういうやつがいてな、そいつの影響だ」

学兎 「なるほど」

シャル 「学兎君の質問も終わったみたいだし、次のゲストに登場してもらいましょうか。あつ、学兎君も引き続きよろしくね」

学兎 「はい」

雪兎 「次のゲストは『転生したらエボルトに乗っ取られて勝手に色々されてた件』から石動龍兎と相棒のエボルトだ」

龍兎 「石動龍兎だ、つて、エボルトは?」

エボルト 「俺はここだ!」 ↑ 仮面ライダーエボルのぬいぐるみ

龍兎 「エボルト!? 何やってんだ、お前」

エボルト「何か気付いたらこのぬいぐるみに入ってたんだよ」

雪兎「あつ、その犯人俺な。一人で二人分喋ったらややこしいだろ？」

龍兎・エボルト「なるほど」

龍兎「あつ、このぬいぐるみ持って帰っていい？」

雪兎「元よりお土産のつもりで用意してたからいいぞ」

シャル「人間じゃないって、そういう事だったんだ・・・」

龍兎「そんなじゃあ、質問といこうか。まずは俺から『一番好きなベストマッチとポトルは？』」

雪兎「今度はベストマッチか」

雪兎「・・・ペンギンスケーターかな？」

エボルト「また意外なベストマッチがきたな・・・」

雪兎「あのネタ臭が逆に面白いなって」

龍兎「ポトルの方は？」

雪兎「同じくペンギン。あのいかにもペンギンって感じがいい」

シャル「雪兎、ペンギン好きなんだ・・・意外」

雪兎「そんなに意外か？」

シャル・雪兎・龍兎・エボルト「「うん、意外」」

雪兔「即答かつ息ピツタリかよ!？」

エボルト「雪兔のペンギン好きはおいといて、今度は俺だ『ビルド関連のドライバーやトリガー、武器など全て含めて一番好きなアイテムは?』」

雪兔「トランスチームガンだな。あの音声がいい」

シヤル「ドライバーじゃないんだ?」

雪兔「デザインや銃で変身つてのがいいんだよ」

龍兔「お前、わかってんなあ」

エボルト「デイケイドよりデイエンドの方が好きだろ?お前」

龍兔「そんなじゃあ、最後にウチの作者から『雪兔君が最も尊敬しているライダーとその変身者は?』」

雪兔「仮面ライダースカルと鳴海荘吉だな」

龍兔「おやっさん!？」

エボルト「また渋いのがきたな」

雪兔「だってあの生き様格好よくね?翔太郎があの人の子になったのよく判るし」

学兔「トランスチームガン好きな理由つて、まさか・・・」

雪兔「鳴海荘吉リスペクトですが、何か?」

龍兔「ガチのおやっさんファンだな、こいつ」

雪兔「そういや、龍兔はスカルも変身してたよな？くそ羨ましい。あの名言まで引用してるし」

シャル「今日は雪兔の意外な一面をよく見る日だね・・・」

エボルト「これは俺も想定外だぜ」

雪兔「これさ、次のゲストの質問とも被るし、そろそろ最後のゲストにも来てもらったら？」

雪兔「・・・そうだな。最後のゲストは『INFINITE・STAR』より石動惣一だ」

惣一「うん、何かすっげーカオスな現場に呼ばれたな」

雪兔「まあ、四作品分のキャラ大集合だしな」

龍兔「ふと思ったが、名前に『兔』ってつくの三人もいるよな、ここ」

エボルト「確かに・・・雪『兔』、学『兔』、龍『兔』だもんな」

惣一「・・・ところで、俺呼ばれたの質問するためだよな？」

シャル「ごめんなさい。ほら、三人とも謝って！」

三兔「すみませんでした」

エボルト「名前まで三兔にまとめられてるw」

惣一「まあ、いいや・・・まずは話題に挙がったウチの作者の質問な、『仮面ライダー

で好きなセリフは?』何かもう答え出てる気がするが」

雪兎「鳴海荘吉の『俺は自分の罪を数えた・・・さあ、お前の罪を数えろ』だな」

一同「「うん、知ってた」」

雪兎「ですよねえ」

惣一「まあ、あれが名言なのは認めるが、お前どんだけスカル好きなんだよ・・・」

雪兎「ダブルドライバー買った後、トリガーマグナム買う前にスカルマグナム買うくらいには」

惣一「・・・ガチだな、こいつ」

シャル「そういうえば、他の平行世界に行った時用に作ってる偽装装備の一つに黒い銃型の変身アイテム作ってたような・・・」

学兎「えっ!?マジで?後で見せて!」

雪兎「いいぜ」

龍兎「俺もちよつと興味あるな・・・」

惣一「兎つて名前につくやつはこんなんばつかか?」

シャル「雪兎に限っては平常運転だよ」

惣一「そうか・・・次の質問いいか?」

雪兎「すまんすまん」

惣一「『なつてみたい怪人とかいるか?あと、好きな変身アイテムとかあるかい?これは仮面ライダー以外でもいい』」

雪兎「怪人か・・・なるとしたらグリードかな?俺ってどんな欲望の怪人になるか見てみたい」

学兎「うわあ、一番厄介そうな怪人選んだな」

龍兎「しかも、グリードならセルメダルでヤミー増やせるしな」

惣一「自分の興味ある事に突っ走るにはある意味グリードらしいかな?」

雪兎「好きな変身アイテムはライダー系ならロストドライバー。それ以外となると、
電脳超人グリッドマンのアクセプターや勇者司令ダグオンのダグコマンダーだな。戦
隊系ならキョウリウウジャヤーのガブリボルバー」

シャル「またマニアックなのがきた!」

エボルト「お前、前世昭和生まれだろ?そのセレクトは」

雪兎「おう、昭和63年生まれだが?」

龍兎「実質昭和最後の年じゃねえか!」

学兎「というか、電脳超人グリッドマン?」

雪兎「昔の円谷作品の一つだ。最近のウルトラマンのフォームチェンジの先駆けとも
言えるサポートメカとの合体する電脳空間で戦うヒーローだ」

シャル「あつ、この前簪さんと一緒に見てたやつ？」

雪兎「ああ、今度時を超えてアニメ化するらしくてな、おさらいしてたのさ。しかも、グリッドマンの声優は当時と同じ緑川さんだぞ！胸熱さ」

龍兎「じゃあ、勇者司令ダグオンは？」

雪兎「こいつは勇者王ガオガイガーや勇者特急マイトガインと同じ勇者シリーズの作品で、高校生が宇宙犯罪者と戦うシリーズだ。これの最大の特徴はそれまで超AIという人工知能を持ったロボット達がメインだったのに対し主人公達が変身・メカとの融合合体・更に強化形態への合体というプロセスを使っているところだな」

惣一「雪兎、お前、本当にロボットの事になると饒舌になるな・・・」

雪兎「まあ、死んでも治らなかったロボット馬鹿だからな、俺は」

一同「「うん、何か納得した」」

雪兎「さてと、質問は以上だな？」

シャル「何かすぐくぐダグダしてたけど、楽しんでもらえたでしょうか？」

雪兎「質問はまだまだ募集してるからどんどん投稿してくれよな」

シャル「ゲストの皆にはそれぞれお土産があるから後で持って帰ってね？」

ゲスト一同「「はい」」

雪兎「という訳で今回は俺、天野雪兎と」

シャル「シャルロットIIデユノアと」

学兎「戦場学兎」

龍兎「石動龍兎&」

エボルト「エボルト」

惣一「そして石動惣一でお送りした」

雪兎「・・・次にゲストに困ったらあの脳筋引っ張ってくるか」

一章「兎、IS学園に入学す」

1話 入学

インフィニット・ストラトス

I S

元々は宇宙開発用ワードスーツとして開発された本来は女性しか使えないはずの兵器。その操縦者を育成するための学校・IS学園。そこに男なのにISを起動させてしまった二人の少年がいた。

「なあ、雪兎。俺達何でこんなところにいるんだ？」

その片割れ織斑一夏は隣にいる幼馴染の一人・天野雪兎あまのゆきとに問うた。

「……一夏、お前が試験会場間違えてISなんか起動させたからだろうが」

そう女性しか起動できないはずのISを試験会場を間違えて起動させてしまった一夏はその瞬間「ISを起動させた男」となってしまった。なら他にもISを起動できる男性はいるのではないかと同年代の男性を対象に適性検査が行われ、何故か雪兎もISを起動してしまい二人まとめてIS学園に強制入学させられてしまったのだ。

「それにしても幼馴染が揃ってISを起動しちまうとはな」

「……」

暢気な一夏に対し雪兎は当初困惑していた。

（何で俺までIS学園入っちゃってんの!?俺、主人公補正とかないはずなんですけどー！）
 実は雪兎は転生者である。ただし、神様とかに会った訳でもなく普通に事故で死んだかと思えば赤ん坊になっていたのだ。そしてこの世界がインフィニット・ストラトス I S の世界だと気付いたのは小学生になった頃。隣の席になったクラスメイトが織斑一夏だったのを知った時だ。

（てつきり弾や数馬と同じモブキャラかと思ってたのに・・・まあ、IS使えんのは嬉しいんだけどさ、元読者としては）

誤算と言えば誤算だが、ある意味嬉しい誤算だった。なにせ雪兎は前世の頃からこのライトノベルは読んでいたし、元々ロボットなどが好きだったのだ。そんな雪兎がISに関わろうとしない訳がない。幸い姉が開発者である篠ノ之束と交遊があったために一時期束に弟子入りしていた程だ。

「同じ男同士、しかも知り合いが一緒ってだけでも気が楽だぜ」

「だな、IS学園はほとんど女子校みたいなもんだしな」

何度も言うが本来ISは女性しか起動できない。その為IS学園に通う生徒も女性ばかりだ。そんな中に男二人で放り込まれるのだ。原作で一夏一人で放り込まれることを思えば気も楽だろう。だが・・・

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「.....」

入学式のあとのSHRで二人は思い知る。女子校に男子が紛れ込むというのがどれだけ女子の興味を引くかということ。

（居心地悪っ！）

四方八方からの好奇の視線は容赦なく二人に突き刺さっており、大変居心地が悪かった。

「では、次は天野雪兔君」

「へっ?」

「聞いてなかったんですか? 出席番号順で自己紹介をしてもらってるんですが、次は天野君の番ですよ?」

「す、すいません!」

副担任である山田真耶にそう言われ雪兔は慌てて立ち上がる。

「あ、天野雪兔と言います。趣味は機械弄りと読書。一年間よろしくお願いします!」
何とか無難に自己紹介を終え席着くと鋭い視線を感じる。

(ん?この方角にいんのは確か……)

原作の知識を思い出し視線のする方を向くと

(やっぱり箒か)

そこにいたのはもう一人の幼馴染・篠ノ之箒だった。その視線は今自己紹介をしている一夏と雪兔に交互に向けられており、箒の方を向いた雪兔と目が合った。なので雪兔は軽く手を振ってみると箒は慌てて視線を逸らす。

(六年振りだったのに冷たいなあ)

そんなことを考えていると脳天に鋭い痛みが走る。

「あだあ!? 一体何が……」

頭を押さえつつ振り向けばそこには笑つてない笑みを浮かべた幼馴染の姉にしてこのクラスの担任である織斑千冬が出席簿を片手に立っていた。隣の席の一夏も同じように頭を押さえていることから一夏が自己紹介でやらかした直後のようだ。

「……お久しぶりです。織斑先生」

「久しいな、天野。だが、余所見は感心せんな」

「す、すいません」

姉同士・弟妹同士が同じ年とあつて雪兔・一夏・箒と同じく雪兔の姉の雪菜・千冬・束も幼馴染で親友なのだ。それ故に雪兔は千冬とも面識があつた。

（箒のやつ、千冬さんに気付いて目を逸らしたのか……）

噂（どこのとは言わん）の出席簿アタックの痛みはSHRが終わるまで消えることはなかつた。

「久しいな、二人とも」

SHRが終わり休み時間になると箒が二人に声をかけてきた。

「その声……箒か？」

「ああ、雪兔の方はさっきのSHR中に気付いたようだがな」

「あつ、それでさっき余所見してたのか！」

先程の一件を思い出し一夏はボンと手を打つ。

「そういうこつた。おかげでヤバいの一発もらったがな」

「ああ、あれは痛かつた」

「あれはお前達が悪い」

六年振りだというのに三人は昔のように笑い合う。

「そういえば、箒、去年、剣道の全国大会で優勝したつてな。おめでとう」

「なんでそんなこと知ってるんだ」

一夏がそういうと箒は顔を真っ赤にし一夏に詰め寄る。

「いや、新聞載ってたし」

「ゆ、雪兔まで」

その休み時間はそんな話で盛り上がった。

2話 クラス代表決定戦 兎、やらかす

「ちよつと、よろしくて?」

箒と話した次の休み時間。再び二人に声がかかった。

(このタイミングってことは……チョロコットか)

「へ?」

声をかけてきたのは読者からはチョロコットなどの愛称で呼ばれることもあるイギリスの代表候補生・セシリア・オルコットだった。

「訊いてます?お返事は?」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ?」

「まあ!なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら?」

(やつぱこの時のこいつは好きにはなれないなあ……)

雪兎はこのセシリア・オルコットのことを原作を読んだ当初はあまり好きではなかった。なので、できればこの時期の彼女とは雪兎は接したくなかったのだ。

「そのの貴方もですわ!わたくしが声をかけているのですのよ!お返事ぐらいなさった

らどうなのかしら?」

「……はあ、まずは自分が何者なのかくらい名乗れよな。こいつはその手の知識全然ないからあんたが何者なのかわかってないんだよ、イギリスの代表候補生」

「そ、そんな代表候補生ですわよ!?!」

確かに代表候補生ともなれば下手なアイドルよりメディアへの露出が多く知らぬ者も少ない。しかし、この織斑一夏という男はその手のことへの関心があまりなく「代表候補生?」と代表候補生の存在すら知らなかったのだ。

「国家代表ならともかく代表候補生なんて他国ではこんなもんさ。あと話しかけられただけで光栄に思われたきや織斑千冬ブリュンヒルデくらいの知名度になって出直してこい、セシリア・オルコット代表候補生」

「ぬぐぐぐぐぐ……」

それだけ言うくと雪兎は「話しはもう済んだ」と言わんばかりに話しを切った。そんな雪兎にセシリアはハンカチを噛み悔しがりながら自分の席へと戻っていった。

「雪兎、お前相変わらずだなあ……ところで代表候補生ってなんだ?」

「読んで字の如くISの国際大会とかの国家代表の候補生のことだよ。さっきの娘はイギリスの代表候補生で名前はセシリア・オルコット。貴族生まれのお嬢様で、専用機はイギリスのイグニッションプランの第3世代機の試作機ブルー・ティアーズ。〔BT兵

器」っていう光学兵器の試験運用機の1号機だ」

「み、妙に詳しいな……」

「俺は元々エンジニア志望だぞ？それにあの人の弟子でもある。各国の試作機やその操縦者・代表候補生についてはそれなりに調べてる」

「へー、なら今度色々教えてくれよ」

「まあ、今後実技試験とかで当たることもあるだろうしな。傾向と対策くらいは教えてやる」

そうこうしている間に休み時間は過ぎていった。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

その授業は千冬が教壇に立っていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな
(確かここで一夏が推薦されてセシリアがキレて決闘になるんだっけか?)」

「なあ、雪兎。これってクラス長決めるようなもんか?」

雪兎が原作の流れを思い出そうとしていると隣の一夏が質問してくる。

「似たようなもんかな? クラス対抗戦とか矢面に立つ仕事も多いらしいけどな」

「自薦他薦は問わないぞ」

その一言を聞き早速一人の生徒が挙手をする。

「はいっ。私は織斑君を推薦します!」

原作通り一夏が真っ先に推薦され「私も!」と次々に声上がる。この時、他人事のように振る舞っていたことを後に雪兎は後悔することになる。

「私はアママ (多分、雪兎のこと) がいいと思う」

そんなことを言い出したのは原作5巻まで一夏に本名を覚えてもらえなかったダボダボの袖の少女・布仏本音だった。

「……はっ?」

「だってあまあま、せつしー（セシリアのこと）論破してたし」

どうやらさつき雪兎とセシリアのやり取りを見ていたらしい。伊達に更識の従者の家系ではないようだ。

「確かに織斑君より頼りがいはありそうよね」

「言われてみれば……」

「……雪兎。俺、さりげに貶されてね？」

ドンマイ一夏。

クラスが一夏か雪兎かで盛り上がる中、それを面白く思わない生徒が一人。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

それはイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットだ。それも当然だろう。代表候補生である自分ではなく物珍しさから男である一夏と雪兎が候補に上がったのだ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！」

この時点で大多数を占める日本人のクラスメイトを敵に回しかねない発言である。

「わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

IS技術の修練というのはわかるが、イギリスも島国である。

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」
自意識過剰ではあるが、「実力トップが」というのも間違っではない。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛でー」

IS学園を日本に作らせた国連だの国際機関に言えと言いたいところだが、ここですとうとう一夏がキレた。

「イギリス大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

この発言で一夏がどれだけキレているかわかる。だが、ここでセシリアは原作にない雪兎にとつて逆鱗に触れる発言をしてしまう。

「そ、そういう日本だつて大したことありませんじゃありませんの! IS発祥の国だといふのに未だに第3世代機の一機もないじゃありませんか!!」

その瞬間、教室の温度が5度ほど下がったと後にクラスメイトは語る。一夏も隣から発せられる冷気に冷静さを取り戻した程だ。

「おい、イギリス人。てめえ、何言つてんのかわかつてんのか、おいっ!」

そう、雪兎までもがぶちギレたのだ。世界最高峰の頭脳と呼ばれた篠ノ之東の弟子にしてエンジニア志望の彼が今の発言にキレない方がおかしい。しかし、愚かにもセシリアは発言を撤回せず、むしろ火に油を注いでしまう。

「じ、事実ではありませんか」

この時、二人以外のクラスメイトの心は一致していた。

((セシリアの馬鹿!))

「よろしい、ならば戦争だ。織斑先生、俺はこの決着に決闘を所望します」

「う、受けて立ちますわ!」

こうして一週間後にクラス代表決定戦という名の決闘が決まった……
約織斑一夏一名の意
見を無視して。

「という訳で特訓パートだ」

そして放課後。一夏は雪兎に連行され連れられ空いているアリーナにやってきた。

「俺の意志は!?!」

「知らん。というか、あそこまで言われて悔しくないのか? 一夏」

「く、悔しいけどさあ……」

「なら見返してやろうではないか!」

「お前、キャラ違くない!?!」

セシリアにぶちギレて若干キャラ崩壊しつつある雪兎だが、実を言うとぶちギレなくとも元より一夏を特訓するつもりだったたりするのだが。

「そもそも訓練機も借りてないのにどうやって特訓すんだよ?」

一夏の言うとおりの二人は訓練機を借りて来ていない。まあ、そうすんなりと借りれる物でもないのだが。

「心配するな。お前の専用機は俺が最終調整してたし、俺も専用機持ちだ」

「ちよっ!?!何さらつと重大発言してんのさ!?!つか、俺の専用機!?!」

「いやー、お前の専用機作るって言ってた倉持技研の連中がさ、お前の専用機作るために他の娘の専用機作るの投げやがったくせにちっとも完成させねえもんだから束さんがぶんどって完成させて最終調整のために俺が預かってたんだ」

「さらにやべえことぶっちゃけやがった!」

開発を投げられた生徒会長の妹は泣いていい。というか倉持技研が馬鹿なのである。「で、俺の専用機つてのはどこにあるんだ?」

雪兎のは既に待機形態なのはわかるが、アリーナにそれらしいものは見当たらない。「ああ、ちよつと待ってろ」

そう言うとき雪兎は指はパチリと鳴らす。すると、上から巨大な卵のようなものが轟音と共にアリーナに降ってきた。一夏のすぐ隣に。

「あ、あ危ねえじゃないか!」

「ちゃんと地面に対して寸止めだし、当たらないよう計算したぞ?」

「そういう問題じゃねえよ! お前のそういうところ束さんに似てきたよな・・・」

あの天災の弟子となればこうなるのも無理はないのかもしれない。「悪い悪い」と明らかに思っていないだろうことを言いつつも卵状のカプセルを量子転換で片付け、織斑一夏の専用機【白式】が姿を現す。

「こいつが兎印のお前専用機【白式】だ」

「これが俺の専用機・・・」

「さてと、さつさとフィッティングとフォーマット済まずで。それが終わったら俺は準備があるから一次移行するまで慣らしでもしていてくれ」

「お、おう」

並のエンジニアより手早く正確にそれらの作業を終えると雪兎は投影型キーボードを操作し準備とやらを始めた。

「訓練機も借りずにアリーナに向かって何をしているのかと思えばこういうことか」

「なんだ、箒も来たのか」

そこに二人を心配したのか箒もアリーナにやってきた。

「心配は無用だったようだな」

「俺が無策で代表候補生に挑むとでも？」

「お前はそういう奴だったな」

ちなみにこの会話の間、雪兎の手は止まってははいない。

「そうだ、丁度良い。箒、こいつで一夏の慣熟の手助けをしてくれないか？」

ふと、雪兎は思い付いたように箒に刀の柄だけのようなものを投げ渡す。

「何だ、これは？」

「前に廃棄処分になった打鉄を外装だけ貰って俺の持ってたコアを入れて改修した打

鉄・改」

またしても雪兎はさらつととんでもない発言をする。

「お前、持ってたって・・・ああ、姉さんか」

目の前の幼馴染が誰天災の弟子であったことを思い出し、姉経由で入手したのだろうと察する。そして姉のことで少々複雑な思いを抱く筈。

「いいのか？これはお前の専用機ではないのか？」

「いんや、そいつは訓練機とかと同じでパーソナライズしてねえから誰でも使えるぞ。色々弄ったから少しピーキーかもしれないが」

「それくらいなら問題ない。では少し借りるぞ」

そう言つて筈は縁取りが紅い打鉄・改を展開し一夏の方へ飛んでいった。

(俺は問題なさそうだが、やっぱ原作通り姉妹間は複雑か・・・)

キーボードを叩きながら雪兎はここにはいない師匠である妹大好きのスコン兎のことを思った。

3話 クラス代表決定戦 兎、チヨロインをボコす

「一夏、箒、一度戻って来てくれ」

「わかった」

「うむ」

白式が^{ファーストソフト}二次移行を終えた頃、雪兎も準備ができたのか二人を呼び戻した。

「やけに時間かかってたけど、何の準備してたんだ？」

「俺の専用機じゃセシリアの専用機の真似事は難しいからちよつとしたオプションの準備をな」

そう言うとう雪兎は4つの球体を実体化させる。

「ブルー・ティアーズの最大の特徴はBT兵器と呼ばれる光学兵器だ。4つの自律機動兵器と中・遠距離用のライフルを用いた射撃戦特化の機体でな。ビットでの誘導、ライフルでトドメつてのが彼女の得意パターンだ」

つまり4つの球体はビットに類する武装なのだろう。

「あと、ミサイルも2基あるからビットを何とかしても油断するなよ？」

「お前、ほんとにどこでそんなこと調べたんだよ……」

「公開されてる情報と実機を見ればある程度は推測できる」

原作知識というカンニングもあるが雪兎のメカオタとしての知識と束仕込みの知識である程度推測できるのは本当だ。

「二夏の白式には近接用のブレード【雪片式型】しか武装がない。まあ、当たりや一撃必倒レベルなんだがな」

ワンオフ・アビリティ
「単一仕様能力【零落白夜】か」

先程、一次移行を終えた時に表示された白式の力。普通、単一仕様能力は二次移行後セカンドシフトに発現するもののだが白式は一次移行の段階でそれが使えるのだ。しかし、【零落白夜】はシールドエネルギー無効化という強力極まりない効果の代わりに自身のシールドエネルギーを消費するという欠点を抱えていた。

「なので一夏がすべきことは『いかに相手の攻撃を掻い潜り、一撃必倒の攻撃を確実に当てるか』ってことになる」

「なるほど……しかし、それでは私はあまり手伝うことはできそうにないな」

箒もどちらかというところと近接よりの戦闘スタイルなためセシリア対策の模擬戦は難しいだろう。好意を寄せる幼馴染の役に立てそうにないと、箒は少し落ち込む。

「それでもないぞ。このビットは外部操作もできるから箒に操作してもらおうかと思っ
てたんだが」

「私はその手の武装の扱いは慣れていないのだが……」

「ISを操作しながらやれってわけじゃないし、操作はかなり簡略してある。それに箒が手伝ってくれれば俺も一夏のモニタリングがしやすいからな。手伝ってくれると助かる」

「そ、そこまで言うのなら仕方ない。手伝ってやろう」

「サンキューな、箒」

幼馴染達に頼られ嬉しいくせにツンデレ発言をする箒に雪兎は内心「ツンデレ乙」な
どと思いつつも自身のISを展開する。

「はい、【雪華】」

そのISは白式と同じ白い装甲を持つが、所々の装甲の色が灰色になっており、汎用機として傑作機とも呼ばれた第二世代機ラファール・リヴァイヴのようにハードポイントが多数設けられた機体だった。

「ビットは箒に任せるから装備は標準でいいか……装備展開【T：トライアル】」

すると、各ハードポイントに白い装甲が追加され、灰色だった装甲も白く変化していった。

「雪兎、お前、今何をした？」

通常、ISは二次移行などでしか姿形を変化することはない。例外としてパッケージ

などの装備もあるにはあるが、今の雪華のように瞬時に行われるものは今現在発表されているISには存在しない。

「こいつは装甲切換アーマーチェンジっていう俺が考案した特殊機能だ。まだ試作段階だから雪華にか搭載してねえんだがな」

「切換というからには他にもいくつか種類があるのか？」

「今のところはこの『T：トリアル』を含めて3つだな」

「随時と厄介な機能だな、それは」

箒はその機能の有用性に気が付いたようだ。

「何が厄介なんだ？」

「考えてもみろ。戦闘中に相手の戦闘スタイルが突然全く違うものに切り替わるのだぞ？これが厄介以外のなんだというのだ」

「うわぁー、確かにそれは厄介だ」

一夏も箒に言われその厄介さを理解する。確かに近接戦闘していたと思えばいきなり距離を取って遠距離戦闘を強いてくるなど厄介過ぎる。

「さてと、試合まであまり時間はないから今回は多少付け焼き刃にはなるがビットと遠距離射撃への対策といかに接近戦闘へ持ち込むかの二点に絞ってやるからな」

「おうー」

そして迎えたクラス代表決定戦当日。

「逃げずに来たことは誉めて差し上げますわ」

一夏が白式を纏いアリーナに向かうと、既にセシリアがブルー・ティアーズを纏って待ち構えていた。

「最後のチャンスをおあげますわ」

試合は既に始まっているがセシリアは六七口径特殊レーザーライフル〔スターライトmkⅢ〕の砲口を下げたまま一夏に話しかけてきた。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

明らかな上から目線の発言に一夏は呆れるよりも笑みを浮かべる。

「そういうのはチャンスとは言わないな。それに、一週間前の俺ならそうなる可能性も高かったと思うがー」

そういうと一夏は一気にセシリアとの距離を詰め雪片式型を振るう。

「油断し過ぎじゃないか？」

「くっ！いきなり攻撃してくるなんて卑怯ですわ」

「試合はもう始まってんだぜ？卑怯も何も無いだろ？」

まさか先手を取られるとは思ってもみなかったセシリアだったが、そこは代表候補生。紙一重で雪片式型を回避し距離を取ろうとする。

「させるか！」

だが、一夏がそれを許さないとセシリアを追う。

「ブルー・ティアーズ！」

そこでセシリアは4基のビットを展開し一夏を近付けまいと妨害する。

「それも読めてたぜ！」

しかし、雪兎達との猛特訓で鍛えた一夏には通用せず、瞬く間に2基のビットが切り

伏せられる。

「な、何故!? 彼は初心者のはず・・・」

いきなりの劣勢にセシリアは焦っていた。無理も無い。初心者で素人と侮っていた一夏に想定とは逆に一方的に攻められるなどと誰が予想出来ただろうか。その後もミサイルやビットで妨害を入れるも一夏を引き離すことができずセシリアは劣勢を強いられていった。

「天野のやつ、オルコット対策のみに重点を置くことでそれなりに形にしてきたか」

試合を管制室で見っていた千冬は一夏の動きを見て雪兎が行った特訓の内容を把握したようだ。

「すごいですね。たった一週間でここまで仕上げてくるなんて・・・」

これには真耶も千冬同様感心していた。

「これは勝負あつたな」

最後のビットが切り伏せられ、苦し紛れでミサイルを放つも一気に距離を詰めた一夏は零落白夜を発動。ミサイルで少しダメージを受けたものの、結果は一夏の圧勝という大判狂わせという結果に見学していたクラスメイト達も驚きを隠せなかった。驚いていなかったのは特訓に付き合っていた雪兎と箒くらのものだろう。

「先手を取れたのが大きかったな。最初にライフルで牽制してビットを展開してりやもう少し良い試合になってたのに」

「ああ、明らかに相手が油断していてくれたのが救いだったな」

クラスメイト達と試合を見ていた雪兎と箒はそう今の試合を評価する。

「それでお前は大丈夫なのか？ここ一週間の間、一夏の特訓ばかりでお前は何もしていなかったように思えるが」

「問題無い。BT兵器が真価を發揮しているならともかく、今の彼女に負ける気はしな
くない」

「BT兵器の真価？」

「ああ、BT兵器は【偏向射撃】フレキシブルというレーザーを自在に曲げて変幻自在の射撃を行うというコンセプトで開発された兵器だ。だが、彼女はまだ偏向射撃を行える程BT兵器を使いこなせてはいない」

「お前はどこまで知っているのやら・・・知らぬことの方が少なそうだ」

「そんなことはない。知っているのは俺が知っていることだけさ」

『次の天野対オルコットの試合は30分後に行う』

管制室の千冬からそうアナウンスがあると雪兎は「準備がある」とピットへと向かっていった。

30分後、一夏に負けたシヨックから何とか立ち直ったセシリアがアリーナへ向かうと雪兎は既に雪華を展開しセシリアを待っていた。

「お待ちせしましたわ」

「いや、そこまで待つてはいないさ。それよりちゃんと万全なんだろうな？一夏に負けてシヨックのまま試合したから負けました、とか言い訳されては敵わん」

「見損なわないうでいただきたいですわ。このセシリア・オルコット、そのような言い訳はいたしませんわ！」

装備も予備。パーツがあつたようでブルー・ティアーズに不備は見当たらないし、見たところセシリアにも不調は見受けられない。

「そうか。なら安心してやれそうだ」

そう言うとき雪兎は雪華に「T：トリアル」とは異なる装備を展開させる。

「S：ストライカー」お前の力、見せつけてやろう」

展開されたのは黄色の装甲に右腕に備え付けられた巨大なシールドのような武装。装甲の色や装備から重機のような印象を受ける。見たところ近接戦用のようだ。

「二度も無様は晒せませんわ。いきまますわよ、ブルー・ティアーズ！」

先程の試合のこともあつてかセシリアは慢心などはせずぐさまビットを展開しライフルで雪兎を狙い射つが。

「ふんっ！」

雪兎はシールドを前面に展開しその一撃を弾く。

「ならー」

「遅い！」

「なっ!?!」

ならばとビットでのオールレンジ攻撃を仕掛けようと動きを止めた隙を逃さず、雪兎は左腕に備え付けられたアンカークローを伸ばしセシリアを捕まえ引き寄せさせる。

「悪いが速攻で決めさせてもらう。シールドバンカー展開！」

セシリアを引き寄せつつも右腕のシールドを變形させ中から大型の杭打機バイルバンカーを展開する。

「そ、それはまさか！」

第二世代機の装備の中でも最大の攻撃力を誇る武装に灰色の鱗殻グレー・スケール、通称盾殺シールドピアースしと呼ばれるものが存在する。それは通称通り盾をも貫く威力を誇る。雪兎が展開したそれはその改良型ともされる彼オリジナルの武装で元は宇宙空間でのデブリ粉砕用。その威力は盾殺しをも上回る。

「こいつはこの『S:ストライカー』のとつておきだ。持っていていけ！『星屑砕き』!!」
スターダスト・フレイカー

轟音を響かせて炸裂した一撃はブルー・ティアーズのシールドエネルギーを食らい尽くしたつた一撃で戦闘不能にしてしまった。また、絶対防御という安全装置で怪我こそ負わなかったものの、その有り余る衝撃は絶対防御を抜けセシリアを気絶させる程のものであった。

4話 セカンド幼馴染と本音の頼み 兎、新たな友達を得る

クラス代表決定戦はセシリアの二敗と雪兎の棄権により一夏が代表となることで決着した。この際、一夏はかなりごねたのだが、一応、原作通りに鈴とぶつけるために雪兎とセシリアが結託し無理矢理クラス代表の座を押し付けた。

「お前ら、いつの間に仲良くなったんだよ……」

「一夏さんの方が伸び代があると雪兎さんと意見が一致しただけですわ。それに敗者であるわたくしに代表の座は相応しくありませんもの」

先の試合で二人のことを見直したセシリアはそれ以降友好的になり積極的に二人と接するようになった。雪兎やクラスメイトからすればセシリアが一夏にホの字なのは火を見るより明らかだったのだが、一夏は全く気付いていない。

「それはそうと、クラス対抗戦に向けて特訓しねえとなあ」

「そうだな。この前の試合はオルコット対策での付け焼き刃。みっちり仕込んでやらねば」

「そういうことでしたらわたくしも協力させていただきますわ。クラス代表に負けられ

てはわたくしも舐められてしまいますもの」

ここに雪兎・箒・セシリアの三人による一夏コーチ陣が結成された。原作と違い箒とセシリアが対立していないのは雪兎が原因で、この二人を対立させても迷惑を被るのは一夏であり、特訓の時間も減るからといがみ合う二人にぶちギレかけた雪兎が30分にも及ぶ説教をしたこともあつて箒とセシリアの二人はできるだけ雪兎の前では対立しないという協定を結んでいる。決してお仕置きと称して特訓中にバンカーを叩き込まれたからではない・・・はずである。

「今日中に瞬時イグニッションフースト加速くらいは習得してもらうぞ。あれのあるなしで戦術の幅が違うからな」

「確かに一夏の取れる戦術を考えれば有用だな」

「零落白夜の一撃必倒の攻撃を生かすには良い考えだと思えますわ」

本当に原作よりも優秀なコーチ陣に囲まれ一夏の特訓の日々は続く。途中で代表就任パーティーや新聞部の取材もあつたがその辺は原作とあまり変わらなかつただけ言つておこう。

「そういうや中国から転入生が来たらしいよ。しかも代表候補生なんだつて」

そんなある日、クラスでそんな噂が流れた。

(もうそんな時期か、確かその代表候補生つて・・・)

原作を知る雪兎はその転入生の正体を思い返し少し憂鬱になる。

「織斑君、頑張つてねー」

クラス対抗戦に出る一夏に檄を飛ばすクラスメイト達。それもそのはず。

「フリーパスのためにもね!」

そう、一位のクラスには学食デザートの半年フリーパスが配られるのだ。それに女子が食いつかない訳がない。

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて1組と4組だけだから、余裕だよ」

しかも、その4組の生徒の専用機は未完成。実質専用機を持っているのは我らが1組だけ。クラスメイトはそう思っていた。

「ーその情報、古いよ」

そこに待ったをかける声が響く。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

そう自信満々に言うのは。

「鈴……? お前、鈴か?」

「聞き慣れた声だと思えばやっぱりお前か、凰鈴音」

「久しぶりね、一夏に雪兎」

そう、二人の筈とは別の幼馴染・凰鈴音だった。

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「キヤラに合っていないな。そういうのはせめてもう少し身長が欲しいところだ」

「んなつ・・・!?なんてこと言うのよ、アンタ達は！特に雪兎！また身長のこと言ったわね!!」

二人の言葉にやつと普段通りの言動に戻る鈴だったが・・・

「鈴、後ろ」

「へ？」

雪兎の指摘で後ろを振り返るとそこには出席簿を片手に立つ千冬の姿があった。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

雪兎の指摘も虚しく出席簿アタックの餌食となる鈴。「また後で来るから逃げるんじゃないわよ!」と捨て台詞を残し二人目の幼馴染との再会はぐだぐだなまま終わりを告げた。また、その後の授業で鈴の存在が気になって仕方なかった筈とセシリアは仲良く出席簿アタックの餌食となったのだった。

(これも全部一夏(さん)のせいだ(ですわ)!!)

授業に集中できてない貴女達が悪い。

「お前のせいだ」

「あなたのせいですわ」

「何でだよ……」

午前の授業も終わり昼休み。授業が終わって早々二人は一夏に詰め寄る。午前中の授業で真耶からは5度も注意を受け、千冬から3度も出席簿アタックを食らったのこの二人は全く懲りていなかった。一夏が不憫でしようがない。

「言いたいことも分からんではないが先に食堂へ行かないか？詳しい話はそんなときにし

「やる」

「むう、お前がそう言うなら仕方ない」

「雪兎さんに免じて許して差し上げますわ」

件のOHNASHIがあつたせいかわ雪兎に対して強く出られない二人は仕方なしにと食堂へと移動を開始する。

「雪兎、お前が友達でほんとによかつたよ」

「気にするな。それよりも俺達も食堂へ急ぐぞ」

他にもクラスメイトが何名かついてくるがいつものことだ。食堂に移動した一行は券売機で思い思いのメニューを選ぶ。一夏は日替わりランチ、箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチ、そして雪兎は……

「カツカレーうどん定食？」

なんとも変わったメニューを注文していた。

「カレーうどんに丼ご飯と揚げたてのカツ……」

そこにミニサラダという「どんな構成だ！カレーうどん食つてから丼ご飯にカツと残ったカレーかけて食えと!？」とどこぞのメダロッターが突っ込んだ程のメニューである。

「まさかこの食堂にこの伝説のメニューがあるとは思わなかつたぜ」

作る方も作る方だが、頼む方も頼む方である。

「待つてたわよ。一夏、それと雪兎！」

そこに仁王立ちで待ち構えていた鈴がいた。

「そこ邪魔、待つてたのはわかるがそこは他の人の邪魔になる」

「あつ、すいません」

「それと、何でラーメン？待つてる間に伸びるだろうが」

「ごもつともです・・・じゃなくて！何で早く来ないのよ！」

「お前の都合など知らんし、約束してた訳でもないだろうが」

「うぐぐぐぐ・・・」

雪兎に一方的に言い負かされ悔しそうにする鈴。

「お前らは相変わらずだなあ」

一夏には少し前までよく見ていた懐かしの光景だ。

「さてと、鈴弄りはこの辺にしといて、あそこのテーブルが空いたし移動しようぜ」

丁度空いたテーブルへ移動し一行は席に着く。

「で、一夏、雪兎、そろそろどういう関係なのか説明してくれないか？」

「そうですわ！一夏さん、まさかこの方と付き合っただけじゃないか?!」

他のクラスメイトも興味津々のようで聞き耳をたてている。

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。何でそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

鈴、憐れである。

「幼馴染……?」

そこで怪訝そうな顔をするのは二人の幼馴染であった箒だ。

「あー、えつとだな。箒が引越していったのが小四の終わりだっただろ? 鈴が転校してきたのは小五の頭だよ」

「でもって中二の終わりに国に帰ったもんで会うのは一年ちよつと振りという訳だ」

所謂「入れ違い」というやつである。

「箒をファースト幼馴染とすれば、鈴はセカンド幼馴染ってことだ」

その後、互いに自己紹介をするが女子三人の間に火花が散っていたのは気のせいではないだろう。こうして後に一夏ラバースと呼ばれるものの中の三人がここに集結したのだった。

「ねえねえ、あまあま。ちよつといいかな?」

それを余所にカツカレーうどん定食を食す雪兎にのほほんさんこと布仏本音が声をかけてきた。

「どうした、布仏」

「本音でいいよー、三年にお姉ちゃんもいるから紛らわしいし」
「わかった。で、何の用だ？」

これまでクラス代表に推薦してきたくらいしか関わっていなかった本音が個人的に声をかけてくるとは思ってもみなかった雪兎だったが、とりあえず話を聞くことにした。一夏達は一夏達で盛り上^修が^羅つ^場ているっほいので放置だ。

「あまあまってI Sのこと詳しいよね？」

「まあ、I Sに乗れるってわかる前からエンジニアになろうと色々勉強してたしな」

「あの専用機もあまあまが考えたんだよね？」

セシリア戦の後にクラスメイトに色々聞かれた際に答えたことを覚えていたらしい。

「そんなあまあまにお願いがあるんだよ」

「お願い？」

それは雪兎にとって意外なものであった。

放課後、雪兎は一夏の特訓を箒とセシリアに任せ（若干不安なもの）、I Sの整備室を訪れていた。

（更識簪、ねえ……）

本音の頼みとは先も話題に上がった専用機を持たない日本の代表候補生にして4組のクラス代表に選ばれた更識簪に関することだった。彼女と幼馴染で従者という関係にある本音は未だに完成していない簪の専用機「打鉄式式」について手を貸して欲しいと雪兎に頼んできたのだ。

『あまあまがおりむーの特訓で忙しいのはわかるんだけど手を貸して欲しいんだよ』

流星にクラス対抗戦には間に合わないとは思うが手伝って欲しいと真剣に頼まれ、雪兎はその頼みを聞き入れた。

（でも、簪って最初に出てくんの七巻の全学年専用機持ちタッグマッチの時だったよな？ フライイングじゃね？）

そう、簪は一夏の専用機〔白式〕の開発により倉持技研によって開発を凍結された〔打鉄式式〕を一人で完成させようとしており、姉である楯無の依頼でタツグを組むべく一夏が接触する原作七巻より登場する娘だ。

（まあ、原作崩壊なんて今更か……俺と姉さんがいる時点で原作崩壊もいいところだしな）

突然だが雪兎には年の離れた雪菜という姉がいる。雪菜は主に原作六巻などでお馴染みのキャノンボールファスト等のレース系競技で活躍する選手で二つ名は「ラビッド・フェアリー高速の妖精」と呼ばれる程のトッププレイヤーである。スタートダツシユからゴールまで何人足りとも寄せ付けぬそのレースっぷりは親友のブリュンヒルデ織斑千冬すら賞賛するレベルである。そんな姉がいるせいか、簪が姉である楯無に劣等感を抱く気持ちもわからなくはない。本音の頼みを聞いたのもそんなところがあつたのも理由の一つだ。

（打鉄式式にも興味が無いと言ったら嘘になるしな）

このメカオタクからすれば未知のメカに触れられるというだけで手伝う理由としては十分なのだが。

（えーっと更識簪はどこかなって）

とりあえず声をかけてみようかと簪の姿を探すと整備室の隅で一人黙々と作業をする簪を見つけた。

簪 s i d e

「更識、簪さんで間違いない？」

「誰？」

突然後ろから話しかけられ私は警戒しつつも声のする方を向く。

「俺は1組の天野雪兎、訳あってI S 学園に来た男子の一人だ」

話しかけてきたのはI S 学園に二人だけいる男子の片割れだった。「1組」と聞き、少し顔をしかめるも打鉄^織式凍結^斑の原因ではないとわかると私は少しだけ警戒を解いた。

「あー、やつぱり一夏のやつのこと怒ってる?」

「……悪いのは彼じゃない。悪いのは倉持技研」

「だよな。君の専用機引き受けておきながら一夏がIS使えるとわかった途端にそれを勝手に凍結しちまって一夏の専用機に掛かりきりになっちまうんだもん」

その発言に私は少し驚いた。天野雪兎のことは織斑一夏のことと共に何度か噂は聞いていたが、まさか自身の友人のことより私のことを気遣う発言をしたからだ。

「まあ、その白式も中途半端にしやがるクソ共がこの国一番っていうんだから情けない」
しかも国の最高峰の研究機関をボロクソに言っているのだ。流石の私も「そこまで言うか」と倉持技研をほんの少しだけ擁護したい気分になった。

「技術者つてのは最後まで責任持つて仕上げてこそなんだよ。それも出来んような半端者は国が許そうと俺が許さん」

そんな私の気持ちを読んだかのように彼は続けてそう言う。
「で、その打鉄式式、完成できそうなのか?」

おそらく1組にいる幼馴染本音に聞いたのだろう。彼は目の前に展開された未完成の私の専用機【打鉄式式】を見ながら訊ねる。

「貴方には関係ないこと!」

「悪い、聞き方が悪かったな」

ついキツイ言い方をしてしまったが、彼は特に気にした様子はない。

「君はこいつを一人打鉄式で組もうとしてるんだって？」

「それが何か？」

「どうしてとは聞かない。だけど、君一人じゃ危なっかしい。一技術者としても少しばかり見過ごせないな。あつ、その配線逆だぞ」

何故か彼はそんなことを言ってきた。

「本音に言われてやめさせにきたの？なら帰って！」

彼も他の人達と同じでお姉ちゃんと私を比べるんだと私は先程よりも強く拒絶するが、彼は全く引かなかった。それどころかとんでもないことを言い出した。

「それは出来ん相談だ。本音に頼まれたのは事実だが、理由については聞いてないし、さつきも言ったが一技術者としてこれは見過ごせないんだ。それに少しお詫びつてもある」

「お詫び？」

「倉持技研から未完成の白式を回収して完成させたのはうちの師匠でな。そんなき俺と師匠で倉持技研の連中に結構キツイこと言ってしまったってな。君の打鉄式が凍結解除にならなかつたのそれが理由じゃないかと……」

「え？」

思わず素で返してしまった程だ。だが、驚くのはまだ早かった。

「あと、君の姉さんの楯無先輩だっけ？彼女のＩＳも一人で組んでねえぞ？あんな複雑なＩＳ一人で組めんのなんて俺の師匠の篠ノ之束くらいだっつえの」

篠ノ之束。世界で知らぬ者はいないとされるＩＳの開発者。その弟子だと彼は言ったのだ。そしてお姉ちゃんのＩＳ「ミステリアス・レディ」がお姉ちゃん一人の手で作られたものではないと。

「篠ノ之博士の、弟子？」

「ああ、俺の専用機もあの人のお手製だぞ？まあ、基礎設計は俺がやったけどな」

「お姉ちゃん一人で、作ってない？」

「多分、三年の布仏虚先輩とかの手を借りたんじゃね？あの人も本音と同じで楯無先輩の従者なんかだろ？」

それを聞いて私は何故か全身の力が抜けたような気がした。いや、実際に抜けたのだろう。今までお姉ちゃんが一人でやってきたと思っていたことがそうではないと言われて気が抜けてしまったのだ。

「大丈夫か？簪……いきなり名前で呼んじや失礼か」

「ううん、大丈夫。お姉ちゃんと被るし」

「なら簪って呼ばせてもらおうわ。代わりに俺のことは雪鬼でいい」

「うん、雪兎」

力が抜けへたりこんでしまった私の手を取り、雪兎は少し嬉しそうな顔をしていた。

「でき、簪。俺と友達になってくれねえか？」

「どうして？」

「いや、友達を手伝うって大義名分があれば俺もこいつ打鉄式仕上げるの手伝えるかなあーと」
「ぶっ」

この時、私は久しぶりに笑った。そして私はこの変わった人・天野雪兎と友達になった。

5話 打鉄式式とクラス対抗戦 兎、自重しない

寮の自室。男子同士ということで同室になっている二人は夕食後、互いに放課後何をしていたか話していた。

「特訓はいつもの調子か・・・」

「ああ、何であの二人だけになると途端に駄目になるんだ？あいつら」

雪兎というストッパーがいないと箒とセシリアは原作通りに自分の考え方を押し付けるような教え方になるため、特訓があまり進まないらしい。

「それでお前はどこに行ってたんだけ？」

「ん？前に専用機凍結された娘の話したろ？あの娘んところ」

「ぶー!？」

それを聞き一夏は口にしていた緑茶を吹き出す。

「汚いなあー、ちゃんと拭いとけよ?」

「おう・・・じゃなくて!何でその娘のところ行ってんだよ!？」

一夏も専用機凍結の間接的原因であるため気にはしていたのだが、このフットワークの軽い友人は早速接触してきたらしい。

「いやー、本音に頼まれて」

「本音?」

「布仏本音、クラスメイトの名前くらい覚えとけよ……あののほほんとしてる娘だよ」
「ああ!!のほほんさんか!でも何で?」

原作通りのほほんさんで記憶していたようだ。

「その娘と幼馴染なんだとよ。それで未完成の専用機を一人で組もうとしてるから様子を見てくれないかって」

「そうだったのか……」

「んで友達になった」

「どこをどうしたらそうなるんだよ!?友達になるの早くね!」

急展開過ぎて一夏も突っ込むことしかできない。一夏が話を聞いた限りでも重そうな背景を抱えていそうな少女とどうしたらすぐに友達になれるのだろうか。

「しばらくその娘、簪っていうんだが。簪の専用機仕上げようと思うから特訓は簪とセシリアに一任するわ。あっ、簪には打鉄・改預けるから訓練機の心配は要らんぞ」

「ちよっ!?!あの二人だけだと特訓にならないってさつき言ったじゃんか!」

簪は感覚的、セシリアは細かい理論的なことしか言わないので間を取ってくれる雪兎
がないのは一夏にとって

死活問題なのだ。

「焦ってるな？ 鈴と揉めでもしたか？」

「うぐっ」

「そんでクラス対抗戦での勝ち負けに何か賭けた？」

「ぐはっ」

「はあー、この唐変木は・・・」

原作だと試合前にあるやり取りだが雪兔がカマをかけてみたら見事にフライングしてやらかしていた。

「で、何があった？」

「実は・・・」

ここで例の「毎日酢豚を」の件で怒らせ賭けの話になったらしい。

（俺が同室になった影響か？ まあいい、こっちは誤差の範囲だから大筋に影響はないだろう）

どうせ無人ISの乱入で賭けはお流れになるのだし問題ないと雪兔は判断する。

「結論から言うとお前が悪い。大体予想つかないか？ 「毎日」ってのは「ずっと」って意味でもあんだぞ？」

「あ、やっぱり？」

「それを「おごつてくれる」と勘違いするとか……鈴でなくてもキレルわ」

それこそ「どこをどうしたらそうなるんだよ!？」である。

「とりあえず、勘違いしてたことは試合の後にでも謝つとけ。ただし!それで付き合う付き合わないまで決めるなよ?そこで好きでもない、この場合はlikeじゃなくてloveの方な、娘と付き合ってみろ。すぐにすれ違い起きて破局すんぞ」

「お、おう……なんか実感込もってね?」

「一般論だ一般論。とりあえず後悔するような選択はすんなよ?」

「わかった」

これで少しは唐変木さが治ればいいのだが、生憎雪兎もそこまでは期待していない。

そこは伊達に(箒や鈴より長く)幼馴染をやつてはいない。

「あと、特訓メニューは二人に送つとくからそれやつとけ」

「サンキューな」

翌日、クラス対抗戦の相手がいきなり鈴の2組と判明し、箒とセシリアがまたあーだこーだ言っていたが、昨夜は特訓メニユーや箒の打鉄式式の組み上げプランを練っていて寝不足気味の雪兎に一喝されて静かになった。

「天野君って、やっぱり頼りになるね」

「そーだよねー。それにISの操縦も上手いし」

「なんてクラス代表辞退したんだろ？」

二人を止められなかった一夏の株がほんの少し落ちたのはある意味仕方ないのかもしれない。

「あまあま、かんちゃんはどうだった？」

そんな雪兎が少し恐かったのか、または箒が今も自分を拒否していないか？などを考えていたのだろうか？本音が恐る恐る雪兎に声をかける。

「……本音か、何とか友達にはなったよ。式式に關してももう一人で全部やろうなんては考えてないと思うぞ。しばらく手伝ってやる約束もしたしな」

「ほ、ほんと!？」

たった一日なのに成果を出してきた雪兎に本音は驚く。

「なんなら今日一緒に会いに行くか? 多分、簪も気にしてんじやねえか?」

「いい、いく!」

尻尾があればブンブンと振っている姿が幻視できる程本音は嬉しそうだ。

「何の話だ?」

雪兎と本音という珍しい組み合わせに箒は何事かと訊ねる。セシリアも興味があるのか箒と共に雪兎達のところへやってくる。

「ちよつとな、二人の共通の友人の話さ」

「いつの間にそんな方が?」

「昨日。今はちよつと事情があつて紹介できないが、また向こうの事情が片付いたら紹介するよ」

この時、その話を聞いていたクラスの雪兎ファンクラブ（非公認、一夏のもある）の面々はいつの間にか抜け駆けしていた本音とその友人（簪）に激しく嫉妬したとかしいとか……

放課後、約束通り本音を連れて雪兔は簪のいる整備室を訪れた。

「よっ、簪」

「いらっしやい、雪兔。それに本音も」

「かんちゃん……」

今まで拒絶されてきたこともあつて以前のように声をかけてきてくれた簪に本音は涙ぐんでいた。

「ごめんね、本音。今まで心配かけて」

昨日雪兔に諭されていかに本音が自分を気にかけてくれていたかを思い返し簪は謝った。

「かんちゃーん!!」

そこからは普段の本音からは想像もできないくらい号泣して抱きついた簪の制服を濡らしていた。

この時、生徒会長と虚の姉二人も密かに物陰で涙ぐんでいたのを雪兎は見逃さなかった。

「ありがとう、あまあま」

数分後、ようやく泣き止んだ本音は雪兎に頭を下げる。

「礼を言うのはまだ早いだろ？ 打鉄式式も何とかするんだから」

しかし、雪兎の本命は打鉄式式の完成。ここで引き下がる訳がなかった。

「最終調整とかは對抗戦には間に合わないから對抗戦には訓練機で出てもらうことになっちまうが、手は尽くさせてもらおうぜ」

そう言つて雪兎が取り出したのは少し大きなノートPC型の端末。しかも簪達の見たこともないモデルのものであった。

「それは？」

「こいつは俺のI Sが収集したデータから新たな武装やパッケージを設計してくれる便利ツール【E V O L s y s t e m】さ」

「え？」

ここにきて雪兎はまたしてもとんでもないものを持ち出してきた。

「打鉄式式のデータを入力すればそれを最適化してくれるだろうからそれに合わせて機体をチューンすればかなり進むと思うんだが」

「いいの？ そんなの使わせてもらつて」

「気にすんなつて、友達だろ？」

そう言つて簪から許可を取ると雪兎は打鉄式式のデータを端末に入力していく。

「打鉄は防御に重点を置いてたが、式式の方は機動系か……デザインは白式に似てるっ

てか白式が式式のデータを流用したのか……ならこっちのデータも追加して……ん？つてことはあのプランも使えるな……武装は荷電粒子砲にマルチロツクオンシステムによる高性能誘導ミサイルに高周波ブレードの薙刀か……マルチロツクオンはあの機体のデータを参照して……パーツはまだストレージに残つてたよな？足りなきや東さんに頼むか……ふっふっふっ、久しぶりに腕が鳴るじゃねえか！」

データを入力しながらイキイキとした雪兎に少し引く簪と本音だったが、これが天野雪兎の素なのだろう。本当に楽しそうに作業をする姿に頼もしさを感じた。

その時、二人はまだ気付いていなかった。雪兎という劇物を投入したことで打鉄式式がとんでもないことになっていることに。コンセプトと武装の種類は同じだが、倉持技研が当初設計したものは全く別の機体になっているということに。

クラス対抗戦当日。打鉄式式の開発は雪兎の暴走によって随分と進んだが、結局クラス対抗戦には間に合わなかった。

「調子はどうだ？」

開発に一区切りをつけた試合に出る白式のメンテを前日に行っており、その具合を訊ねる。

「ああ、バッチリだ。流石は雪兎」

やはり開発者の弟子の名は伊達ではない。

普段はオートメンテナンスに任せてはいるが、今回の対抗戦に合わせ珍しく雪兎が自分から買って出たのだ。そこには原作通りなら試合中に乱入してくる無人I Sのことを知っている雪兎の知らせれない罪悪感と親友が無事でいてほしいと願う気持ちが含まれていた。

（あとはいざって時に備えておくか）

「来たわね、一夏」

「鈴、負けねえぞ」

対峙する二人は。

『それでは両者、試合を開始してください』

そのアナウンスと共にそれぞれの得物を構え激突する。白式の雪片式型と甲龍の双天牙月のぶつかり合いは甲龍に軍配が上がり弾き飛ばされるもセシリアに教わったクロス・グリップ・ターン
三次元跳躍旋回ですぐさま立て直し次に備える。すると、甲龍の肩にあるアンロックユニット
非固定浮遊部位の装甲がスライドする。

『【衝撃砲】？』

『空間に圧力をかけて砲身を生成し、余剰分の衝撃を見えない弾丸として発射する。筒単に言えば広範囲空気砲かな？』

雪兎から事前に聞かされていた甲龍の第3世代兵器のことを思い出し、咄嗟に回避行動を取る一夏。

「へえー、【龍咆】を初見で避けるなんてやるじゃない。と言つてもどうせ雪兎の入れ知恵でしょ？」

「まあな、ほんとにあいつには頭が上がらないぜ」

全方位射角という恐ろしい兵器ではあるが、発射の一瞬に大気のブレが生じるため、それを感知できれば理論上回避は可能だ。雪兎は鈴対策としてハイパーセンサーがそれを感知したら即座に反応できるように特訓メニューを組んでいたのだ。

（付け焼き刃ばつかなのは俺が未熟だから。なのにあいつはいつも俺に勝てる可能性をくれる・・・これで負けたら男が廃るし、あいつに並べねえ！）

親友と並び立つという目標のためにも一夏は負けられなかった。だから、箒やセシリアから可能な限り技術を学んだ。それが一夏を大きく成長させていた。

（くう、一夏のくせに！ほんとあの白兎雪兎は敵に回すと厄介よね！）

次々と龍咆をかわす一夏に鈴は鈴は苛立ちを募らせ次第に砲撃の精密さを欠いていく。

（チャンスは一度きり・・・だが、その一撃で決める！）

そして、鈴の砲撃に隙を見つけた一夏は瞬時^{イグニッション・ブースト}加速で一気に距離を詰めようとするが。

ズドオオオオナーという轟音と共にアリーナの遮断シールドを貫いてアリーナ中央に何かが降り立った。

(なんだ、あいつは……)

それは全身装甲^{フル・スキーン}のISらしき人型だった。

6話 決戦！謎のIS 兎、乱入す!?

「遮断シールドがレベル4に設定、アリーナの全屏がロックされています!」

「三年の精鋭チームにシステムクラックを行わせていますが手間取っているようです!」

「アリーナの生徒達がパニックを起こして扉へ詰めかけています。このままでは怪我が!」

「織斑君! 凰さん! 返事をしてください!」

次々に寄せられる報告を聞きながら真耶は必死に一夏と鈴に退避を勧告するも二人は聞き入れようとはせず、生徒の避難のため謎のISと交戦を開始してしまう。

「一体どうしたら……」

「落ち着け山田先生」

「織斑先生! なんで落ち着いていられるんですか!?!」

実の弟が襲われているというのに妙に冷静な千冬を見て真耶は問う。

「確かに事態は最悪に近い。だが、不幸中の幸いとも言おうか。アリーナには天野が

ら!」

「天野君? 彼一人で一体何がー」

「だから落ち着け山田先生。あいつはあの束の弟子だぞ? そろそろ……」

「あ、アリーナの扉のロックが解除されました! えっ? でも精鋭チームはまだ……」

何故急に扉が開いたのか? それを疑問に思っていると管制室に通信が入る。

『とりあえずアリーナ内の内部隔壁と扉はアンロックしました。でも外部隔壁と出入り口のロックは別口……多分あのI S から発しているプログラムで秒数単位でパスワードが変えられてるよう解除できませんでした』

「上出来だ、天野」

通信を入れてきたのは雪兎だった。更に言えば三年の精鋭が手こずっていたアリーナの扉のロックをあつという間に解除していたのだ。

「ついでで悪いがアリーナにいる織斑と風の二人のことも頼めるか?」

『遮断シールドぶち抜いていいならやりますよ?』

遮断シールドのレベル4ともなれば並のI S では突破は不可能なレベル(零落白夜などの例外はあるが)。それを雪兎は容易く「抜ける」と言い切った。千冬が慌てていなかったのは雪兎の実力をよく知っていたからに他ならない。

「出来れば穏便にいききたいところだが緊急事態だ。特別に許す」

『了解しました。では少し荒っぽくやるんで、観客席の生徒の退避が完了次第突入しま

す」

そう言うと雪兎は通信を切ってしまう。

「だ、大丈夫なんですか!?!それに今彼とんでもないこと言いませんでした!?!レベル4の遮断シールドをぶち抜くだなんて!」

「安心しろ。あいつはあの天災の弟子で高速の妖精ラビッド・フェアリの弟だ。それに私の弟弟子でもある」

「あ、なんだかその面子を聞いたら急に安心しました」

ISの開発者で世界有数の天災・篠ノ之束、第1回モンド・グロツソ優勝者・織斑千冬、最速のIS乗りと名高い天野雪菜、最強(凶)の世代と呼ばれたこの三人の弟子・弟分が普通な訳がない。

そして、この三人と面識の有った真耶から不安感が抜けていった。

「さてと、生徒も退避終わったようだし俺もそろそろいきますか」

三年や教師の誘導で観客席の生徒が退避したのを確認すると雪兎は雪華を展開し遮断シールドの前に立つ。

「[S:ストライカー]リミットリリース。フルブレイカーモード起動」

雪兎のその言葉で右腕のシールドが大きく展開し、セシリアを破った時に使用した杭打ち機バイルバンカーが姿を現す。だが今回はそれだけではなかった。撃ち出す杭に高出力のバリアフィールドを展開させ、それを大きく振りかぶって構え、遮断シールドに杭を叩き込んだ。

「これで本当の全力全壊! 限界突破 星屑 破砕!!」

それは謎のISが遮断シールドを破ったのとは比較にならない轟音をあげて遮断シールドを文字通りぶち抜いた。

少し時間は遡る。一夏と鈴は摩耶からの通信を切り謎のISと対峙していた。

「くそっ、なんなんだよこいつは」

何度か攻撃を加えてみるも遮断シールドを破ったであろう高出力ビームと人が乗っているとは思えない動きに翻弄され一夏と鈴は疲弊し、二人のISのシールドエネルギーも底をつきかけていた。

「・・・でも、何か変だよな、あいつ」

「変って何よ?」

「あいつの動きって何かに似てる気がするんだよ」

「コマとか言わないわよね?」

「そりゃあ見たまんまだろうが。あー、なんていうかな。昔自動車メーカーが作った人型ロボットあつたらろ?」

「いたわね。工場見学で雪兎がやけに興奮してたのを覚えてるわ」

「あれに似てないか?」

「言われてみれば・・・それに私達が会話してる時はあんまり攻撃してこないし」

「もしかしてあいつはー」

『無人機だ。あのI Sに生体反応は無い』

「ゆ、雪兎!」

一夏と鈴が謎のI Sの正体を探っていると雪兎から通信が入った。

『お前らの予想通りさ。ありゃコアの周りに細工して無人機として改造したものだろ
う』

「それ、ほんとなの!」

『俺がそんなくだらん嘘をつくとも?』

「そうね。あんたはこの手の分野で嘘は言わないもんね」

雪兎が断言する以上、あのI Sは無人機なのだろう。

『さつきアリーナの扉のロックは解除した。観客席の生徒が避難完了次第、俺もそつちに加勢する』

「遮断シールドは？」

『織斑先生の許可は取ったからぶち抜く』

「で、俺はどうすればいい？」

『多分、俺がシールドをぶち抜こうとすると妨害行動に出るはずだ。それを邪魔してくれ。その後は俺がやる』

「オツケー、こっちはシールドエネルギーがギリ貧だから任せるわ。美味しいところ譲ってあげるんだからちやんと決めなさいよ？」

『ああ、文句出ねえくらいに決めてやるよ』

そして観客席の避難が完了し雪兎の合図で二人は謎のISの注意を雪兎から逸らし、雪兎は限界突破星屑破砕で遮断シールドをぶち抜きフィールドへと降り立つ。

「待たせたな。幼馴染二人の試合を邪魔してくれた礼はキツチリ利子つけて返してやる」

そう言つて雪兎は雪華を装甲切換アーミー・チェンジさせる。黄色から赤へと色合いを変えたそのISは両手にはシールドと一体化したガトリングガンが、他にも各ハードポイントに多数の銃器を搭載している。

「釣りはいらん。全弾持つていけ」

雪兎は敵向かつて距離を詰めながらミサイルやガトリングガンにサブアームで保持

したアサルトライフルなどを敵に向けて容赦なく叩き込む。その光景に一夏と鈴は哑然となる。無理もない。それは鉄の雨とも思える圧倒的物量による面制圧攻撃だったからだ。

「な、何よ、あれ……」

「まるで動く弾薬庫だな」

無人機もこれには成す術もなくただの的と化していた。元よりこの狭いアリーナというフィールドで雪兎の使う面制圧を得意とする射撃武装運用試作型パック【G：ガンナー】の相手をするのは無謀であった。しかも、雪兎は高速^{ラビッド・スイッチ}切替という技能を有しており、これにより瞬時に弾を拡張領域より補充できるので。正直な話、これが無人機でなく有人機であつたなら絶望もいいところである。

「これくらいやつときゃいいかな?」

無数の弾丸を撃ち込まれ砂煙の中から現れた無人機は見るも無惨なことに両手の武装は木つ端微塵、脚や推進部も逃走防止のために破壊、コアがあると思われる胸部以外は破壊し尽くされていた。それを確認すると雪兎は無人機へと近付き残骸を回収する。「任務完了。あー、久しぶりにぶっぱなしたからスッキリしたぜ」

この時、一夏と鈴は思った。「こいつだけは本気で怒らせちゃ駄目」だと。

こうして後に無人I S襲撃事件と呼ばれる事件は幕を閉じた。残骸は無論I S学園に事件の原因究明の手掛かりとして引き渡された。

「ほんと今回の事件は雪兎がいなかったらヤバかったんだな」

事件を改めて振り返り一夏はそう感じた。

「まあ、アリーナの損害はあの無人機より雪兎のI Sによるものの方が大きかったそうだがな」

その当の本人は自主的にアリーナの修繕を行っているらしいが。

「それでも何もできなかったわたくし達よりはご活躍されていましたわ」

アリーナの扉のロック解除に一夏と鈴の救出と相手無人機のコア確保。これを一人でやったというのだから恐ろしい。

「俺も精進しないとな」

「その通りだ」

「わたくしもお手伝いしますわ」

「一夏がどうしてもって言うんなら手伝ってあげなくもないわよ?」

一夏も鈴と和解したようでラバーズの面々はいつも通り騒ぎ出す。

「ふぁー、朝っぱらから元気なことだ」

一方、アリーナの修繕などで寝不足気味の雪兎は取り戻した平穏を噛み締める。だが、これはこれから続く波乱の物語の一幕にすぎないことを知るのはほんの一握りの者達だけであった。

IS学園の地下にある関係以外立ち入ることのできない特別な場所で例の無人機の解析は行われていた。

「やはり無人機のコアは未登録のものか」

「ええ、各国のコアとデータを照合してみましたが該当するコアはありませんでした」

「……」

「織斑先生？何か心当たりでも？」

「いや、ない。今はまだ……な」

「ゆー君元気にしてるかなあー?」

その女性が変わったISを纏っていた。紺色の必要最低限と言える装甲と背後に妖精の羽を思わせる非固定浮遊部位を持つIS。それを操るのは高速の妖精ラピッド・フエアリと呼ばれる最速のIS操者・天野雪菜。今現在彼女はレースの真つ最中なのだが、周りに他の選手の姿は無い。そう、彼女は現在単独首位を独走していた。

「いっくんやほーきちちゃんにりんちゃんもいるって聞いたし大丈夫か。ちーちゃんもいるしね」

そこでようやく二位の選手が雪菜を視界に納める。

「追い付いたぞ、天野雪菜!」

「やつときたんだ。やつば第2世代相手じゃこの娘の本気にはついてこれないか」

そう、彼女が纏うISは第3世代機しかし、そのISはこの国が作ったものでもなかった。たった一人の天災がたった二人の親友の内一人に作った彼女専用機なのだから。

「悪いけど今回も私が勝たせてもらうね。今日の試合に勝ったら私のお願いを叶えても

らう約束してるんだから」

「お願いだと?」

「うん、I S 学園の教師前からお願いしてたんだけど中々OKもらえなかったんだよねー。それじゃ。チャオー」

そして再び加速していく雪菜を二位の選手は悔しそうに見送った。

「待っててねー、雪兔。今、お姉ちゃんが会いに行くから!」

二章「兎と姉と訳有りの少女達」

7話 姉襲来!?!新教師は俺の姉!?!転入生は貴公子と黒兎
兎、色々あってパンクする

6月初頭の日曜日。久しぶりに外出許可をもらい一夏と雪兎は共通の友人・五反田弾の家を訪れていた。

「これで終いだ」

「ちよつ?!?!そこでアストラルとか容赦無さすぎるだろ!」

今は雪兎と弾が対戦格闘ゲームで盛り上がっている（負け抜けの二勝先取ルール）。
どうやら弾は雪兎にフルボッコにされたようだ。それもそのはず。この格ゲー、雪兎が前世の時から学校の先輩や友人とやり込んでいたゲームだったのだ。また、雪兎の前世の時にあったゲームやアニメ・マンガは何故かこの世界にも存在し（原作であるISやそれに関するものは流石になかったが）、雪兎は前世で培ったそのゲームスキルを無駄に発揮していたのだ。

「お前、ほんとに久しぶりにやるのかよ……ってか、そのキャラはインチキ過ぎね?」

雪兎が使っていたのは人間サイズの人形を連れた魔術士の少女。一つ前のタイトルから参戦したキャラだ。弾が使ったのはバランスの取れた所謂主人公キャラなのだが、本当に一方的にボコられていた。

「使い勝手のいい主人公使つといてそれか？まあ、他のキャラでも勝てなくはないが……もう一戦するか？キャラはお前が指定してもいい」

「言つたな！ならこいつだ！」

結果は弾の惨敗。年季が違い過ぎたと言う他ない。

「ちくしょー、何でそのコマンドあつさり成功させてんだよ……」

複雑怪奇なコマンドの必殺技で止めを刺されたのか弾は項垂れる。

「そーいや、どうなんだ？IS学園って。女の園なんだろ？いい思いしてんじやねえか？」

「してねえよ。むしろ女子ばかりで居心地が悪い」

「嘘をつくな、一夏！メールを見た限りじや楽園じやねえか！」

「それでもないぞ、弾。トイレは校舎内に数ヶ所しかないし、クラス以外の女子の目も三分の一くらいが色物扱いだ。少数派だが、嫌悪する視線を向けてくるものもある」

「嫌悪？何でまた」

「女性権利向上を主張してる団体あるだろ？」

「あー、「ISに乗れる女性は選ばれた存在」だの「ISに男性が乗るなんて穢らわしい」とか言ってる連中のことか」

「そそ、そんな連中に毒されてる生徒もいてな」

「・・・苦勞してんだな、お前も」

「俺は?」

「一夏、お前は少し周りを気にしろ」

箒、セシリア、鈴の三人からは少なくとも好意を寄せられている一夏に雪兎と弾は辛辣だった。更に言えばこの五反田家にも一夏に好意を寄せる少女がいる。

「お兄!さつきからお昼出来たって言ってるじゃん!さつきと食べにー」

このドアを蹴り開けてきた少女、五反田弾の一つ下の妹・五反田蘭。彼女も一夏にホの字の少女だ。どうも弾一人だと思つてドアを蹴り開けてみればそこに憧れの一夏とその友人の雪兎がいたので固まつてしまったようだ。普段のラフな格好をしていたのも理由の一つだろう。

「い、いい、一夏さんに雪兎さん!」

「あ、久しぶり。お邪魔してるよ」

「久しぶり、蘭ちゃん」

「お兄、何でお二人が来るって教えてくれなかったのよ!」

この後、弾が一夏達が来ているのを何で言わなかったのかと蘭に問い詰められて、お昼をご馳走になったり、蘭がIS学園に受験すると聞いたり、中々に充実して休日を通り越した。

休み明けの月曜日。教室はとある噂で持ちきりだった。女子の間だけで噂になっていたことではあったが、雪兎は簪経由でそれを知る。噂をまとめると・・・

「今月の学年別トーナメントで優勝すれば一夏か雪兎の好きな方と付き合えるらしい

よ」

というものだった。

（あれ？それって箒が同室だった時に部屋の振り分け直しで引越すことになって、そんなときに言った言葉が原因じゃなかったっけ？）

しかし、一夏の同室になってるのは雪兎なのでそんなイベントはなかったはずだ。雪兎が首をかしてげいと明らかにパニックしている箒が雪兎のところにやってくる。

「ゆ、雪兎、どうしよう」

この一言で雪兎は知らぬうちに別の場所で箒が「優勝したら付き合ってもらおう」発言をしたことを察した。あとは原作同様伝言ゲームの要領で広まっていくうちに「優勝したら一夏か雪兎と付き合える」という内容に変わってしまったのだろう。

「俺か一夏、もしくは箒、お前が優勝するしかないな」

「わ、私が優勝?!」

「俺は好きでもない娘と上辺だけの付き合いなんてゴメンだからな。その点、俺や一夏ならお流れになるだろうし、箒なら俺に被害は及ばん」

セシリア、鈴にも同じことが言えるが、今日の前にいるのは箒なので彼女に合わせて話を進める雪兎。

「しかし、箒の打鉄式も完成してるから結構敵しいトーナメントになりそうだな」

「箒か・・・彼女は強敵だな」

そう、雪兎が手を貸していた打鉄式も先日無事に完成し、一夏や箒達とも顔を合わせ友人関係を結んでいる。その時、一夏が簪に謝ったり色々あったがそこは何れ話すでしょう。

「打鉄・改は借りられるか？」

「少しアップデートしておきたいから少し待っててくれ。トーナメント前までには慣らしが出来るようにしとく」

「いつもすまない」

「気にするな。こっちとしてもデータ取りさせてもらえてるんだ。逆にありがたいくらいや」

そうこうしている間にSHRの時間が迫ってきたので箒を自分の席に戻らせ残りの時間を雪兎はトーナメントをどうやり過ごすか考えることにした。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します!しかも二名です!それに加え新しい先生も赴任されました!」

「はっ?」

「「「え、えええええ!?!」」」

クラスメイト達は噂にもなっていないなかった情報に。雪兎は転校生ではなく赴任してきたという教師に驚く。

(このタイミンで来んのって、シャルルとラウラだよな?新しい先生?そんなの知らないんだけど!?)

「では、入ってきてください」

真耶の言葉で教室に入ってきた三人。フランスからきた三人目の男性操者という触れ込みで転入したシャルル・デュノア、ドイツからやってきた黒兎隊長ラウラ・ボーデヴィツヒ、そして……

「おいおい、嘘だろ……なんで姉あねさんが」

それは雪兔の姉・天野雪菜だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願ひします」

転校生の自己紹介はフランスのシャルルから始まった。

「お、男……?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を——」

「きや……」

「はい?」

「きやああああ——っ!」

三人目の男子。しかも守ってあげたくなる系の貴公子の登場に教室が沸く。

「これで三人目!」

「熱血系の織斑君に頼れるお兄さんポジの天野君ときて今度は守ってあげたくなる系……これで一組の布陣は完璧だわ!」

雪兔は知らぬ間にクラスのお兄さんポジになっていた。まあ、勉強のわからないところはなんだかんだで親切に教えてくれるし、箒達一夏ラバーズの抑え役でもあり、先のクラス対抗戦の乱入騒ぎを解決したのも雪兔だ。それにどこから漏れたのか簪の専用機の件も伝わっており、頼れる兄貴分というポジションを獲得するに至ったようだ。ち

なみに五反田蘭も「実の兄より役に立つ」と中学時代はお世話になっていたんだとか。
「……………」

一方のドイツからきたラウラはというと、無言だった。無関心というふうにも見えるが、雪兔にはシャルルに対する騒ぎのように呆れているような雰囲気すら感じられる。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

しかし、千冬が一言かけるとすぐに姿勢を正す。

「ここではそう呼ぶな。それに私はもう教官ではないし、お前もここでは一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼ぶように」

「了解しました」

軍人のような（実際ラウラは軍人だが）やり取りにクラスメイト達は静まりかえる。

「ラウラ・ボーデヴィッツヒだ」

ただそれだけ簡潔に言うのと、「これで終いだ」と言わんばかりに元の休めの姿勢に戻る。

「あ、あの、以上ですか？」

「以上だ」

そして最後は……………

「えー、この度I S学園に赴任することになりました天野雪菜です。弟のゆく……ゴホン、雪兔と同じ名字だから気軽に雪菜先生と読んでね」

「えっ？天野君のお姉さん？」

「それに天野雪菜ってまさか高速の妖精!?」
ラビッド・フェアリ

「それに今、雪菜先生、天野君の呼び方言い直してなかった？」

「これにラウラで一度沈静化したクラスが再び沸いた。」

（何やってんだあの姉は!!）

そんな中、ラウラはクラスを見渡し一夏を視界に捉えるとスタスタと近付いていき、バシインツ！と一夏の頬を平手打ちで叩いた。

「私は認めない。お前があの人弟であるなどと、認めるものか！」

「い、いきなり何しやがる！」

「ふんっ」

こうして一組に新たなメンバーが加わったが、その初会合は一波乱も二波乱も起きそうなるものであった。

その後、シャルルの世話を同じ男子ということ引き受けた一夏と雪兎はすぐに更衣室に移動（女子が教室で着替えるため）しながら野次馬と化した他の生徒達を掻い潜ることとなり、グラウンドに着いたのは本当にギリギリの時間だった。

「黛先輩め……こっちは時間ねえってのにしつこいわ!」

「それを何とかしちやっつた雪兎って、さりげに凄いね……」

「雪兎だからな」

数少ない男子ということで互いに名前呼びすることとした三人は雪兎の活躍で新聞部のエース黛を退けたが、そのせいでかなり疲弊していた。

「今日は戦闘を実演してもらおう。やってもらおうのは……凰、オルコット、お前達にやってもらおう」

選ばれた鈴とセシリアはお互いに火花を散らしていたが相手はなんと真耶だった。元代表候補生ということもあってその実力は本物だ。鈴とセシリアは終始翻弄されたまま一度も攻撃を当てられずに撃墜されてしまう。しかも、真耶が使っていたのは教員用の何のカスタムもされていないラファール・リヴァイヴ。普段のアワアワしている姿しか知らなかった生徒達は大いに驚くこととなる。

「さて、存外早く終わってしまったからもう一戦いけそうだな……天野、お前もやってみるか?」

「……相手次第ですね。織斑先生とやれだなんて言われたら流石に辞退しますよ?」
「いや、お前の相手はアレだ」

そう言って千冬が上を指すとそこには妖精のようなISを纏った雪菜の姿があった。

「……ちよつと待て、いくらなんでも生徒相手にガチ装備で挑むとか何考えてんだ姉
!」

8話 姉弟対決!雪菜VS雪兎 兎、貴公子の秘密を知る

「ゆーくん、久しぶり」

「久しぶり、じゃねえよ。バカ姉。そのIS、学生相手に使うもんじゃねえだろ……」
久しぶりの姉弟の会話はそんな罵倒から始まった。

「第3世代IS【シルフィオーネ】そんなもん持ち出しやがって」

「ゆーくんだつて【雪華】使つてるじゃない。それに勝とうと思つたらお姉ちゃんもこの娘持ち出すよ」

第3世代IS【シルフィオーネ】雪菜専用機として開発された天災^{東さん}お手製のISだ。

装甲は必要最低限と一見貧弱そうに思えるこの機体だが、そのリソースの大半は装甲の表面にある発光パーツと非固定浮遊部位^{アンロックユニット}に割り振られており、拡張領域^{バサスロット}も最低限しかない。ある意味では白式と同じようなものだ。そしてその機能こそこの機体が不落の最速IS足る由縁でもあるのだ。

「【反射反応装甲】は厄介過ぎる」

「【反射反応装甲】とはその装甲にかかる負荷を任意の方向に弾くことができるという」

んでもない代物なのだ。しかし、一度に反射できる方向は一方だけで弾くタイミングなどの見極めが難しく、反射の計算処理などが常人では不可能なレベルのもので使いこなせるのは世界で雪菜と束くらいのものだろうとすら言われている。雪菜は主に瞬間^{クニツシヨクノフダト}加速によってかかる負荷を別方向に向け加速し続けたり、方向転換したりするのに使っている。つまり、一度瞬間加速を使われると追い付けなくなると言うレースでは悪魔のような機体なのだ。当然、攻撃も反射できるので防御性能も高い。

「でもほとんど攻撃方法ないよ？」

「その数少ない攻撃方法も厄介だろうが」

シルフィオーネの数少ない攻撃方法は背面の非固定浮遊部位から放たれるビーム攻撃。しかも、羽がりフレクシオンビットというビームを反射するものでそれによるオーレンジ攻撃を可能にしている。ブルー・ティアーズの偏向射撃^{フレキシブル}より断然使い勝手はいい。

「ほんとなんて機体作るんだよ、あの人は……」

この機体を破るにはオールレンジ攻撃を掻い潜り反射反応装甲以外の部位を攻撃するか、零落白夜のようなバリア無効化攻撃くらいしか攻略法が存在しないのだ。ちなみに、ブルー・ティアーズにはその機体特性上天敵と言つていいレベルで、余裕で完封出来る。

「仕方ない……トーナメントまで使うつもりはなかったが、こいつを使わせてもらう。来い【W:ウィザード】!」

なので雪兔はトーナメント用に用意していた新たなパック【W:ウィザード】を展開した。その装甲の色は紫で、肩と背面に大型のローブのような非固定浮遊部位を持つパック。そして手にする武器はビームの刃を持つ大鎌。それを纏った雪華はその名の通り魔法使いを彷彿させる。

「それ、新しいパック?」

「ああ、セシリアのブルー・ティアーズと簪の打鉄式式のデータを元に作った今の俺が姉さんに対抗できる可能性がもつとも高いパックさ。悪いが今回は勝たせてもらおうぞ、姉さん!」

「私もこの娘を持ち出した以上、それにお姉ちゃんの意地にかけても勝つよ!」

そして二人の模擬戦は始まった。

「いけ、グラスパービット!」

先手を取ったのは雪兔だった。シルフィオーネはその特性上、攻撃展開速度に難があるため(リフレクションビットを展開してからしか攻撃できないため)どうしても先手を相手に譲ってしまう傾向があるのだ。対して雪兔が展開したグラスパービットは雪菜を取り囲むように展開させるだけでいい。

「雪兎、この娘に光学兵器は通用しないのは知ってるよね？」

「当たり前だ。そいつの設計に俺も咬んでるからな」

そう、シルフィオーネに使われている技術は雪兎の前世にあったアニメ等の知識を束が実用化したもの。当然そのスペックは把握済みである。

「言つとくがグラスパービットに攻撃機能なんざ付いてねえぞ？」

「えっ？」

^{グラスパー}「支配者の名の意味を見せてやるよ！」

そういうと雪兎は多数のミサイルを同時展開し雪菜に向けて放つ。

「それくらい！……って、ええええええ！」

対して雪菜はリフレクションビットを展開しビームで迎撃しようとするもリフレクションビットが上手く機能せずミサイルで撃ち落とされてしまう。

^{グラスパー}「支配者って、そういう意味!？」

「そう、このグラスパービットは相手の遠隔操作系兵器のコントロールを文字通り支配するフィールドを形成できるのさ！」

簡単に言えばサイコジャマーみたいなものである。このグラスパーシステムはブルー・ティアーズや打鉄式式に対抗するために作られた装備。ビット自体の耐久値は低いので通常火器を使われればあっという間に潰されるが、遠隔操作武器オンリーのシル

ファイオーネやビットを多様するブルー・ティアーズには天敵と言つていい装備だった。「メタ装備とかズルくない!？」

「一応これ制御下に置くのに演算能力かなりいるんだぞ。それに……対策してないやつが悪い! 拡張領域に少し空きあんだから銃の一個や二個入れとけよ!」

「だってこの娘、銃器の好き嫌い激しいんだもん!」

こうして姉弟対決は雪兎のメタ装備による完封というあんまりな結果で終わった。

「うわぁーん、ちーちゃん。ゆうくんがいじめるよー」

「ちーちゃん呼ぶな! 織斑先生と呼べ、この馬鹿者! それに天野の言う通りメタ対策くらいしておけ!」

試合後、弟にフルボッコにされた姉が親友に泣きつき出席簿アタックの餌食になり、なんとも締まらない授業となってしまった。

「雪兎さんのあれ……わたくしにもメタ装備になってますわよね?」

そして、自身の専用機と似たようなコンセプトの機体が完封されセシリアが震えあがることになったのだが、御愁傷様である。

その日の放課後。

「部屋割りの変更?」

「はい。デュノア君の部屋なんですけど、転入したばかりですのでお二人のどちらかと同室になってもらって補佐してあげて欲しいと」

教室に残された一夏と雪兎は真耶からそんなお願いをされた。

「もちろん、残った方の引越し先は一人部屋ですよ。流石に男女が一緒の部屋というのは色々問題ですし」

(いや、原作では普通にやってたよな!?!それにシャルルは本当はシャルロットって女の子だから同室って結構ヤバイんですけど!?!)

原作知識でシャルロットの秘密を知る雪兎は内心すごく焦っていた。

「そういうことだったら面倒見のいい雪兔の方が適任だよな?」

「はい、私もそう思います!」

「ちよっ!?!」

そうこうしてる間に一夏と真耶の間で話がついてしまい雪兔がシャルルの同室となってしまうった。

(マジかよ!?!俺がシャルルと同室だ?!?!正体知ってるっていうのがこんな形で仇となるなんて……)

原作知識とはこういう時に不便であると雪兔は思った。

「これからよろしくね、雪兔」

「……おう」

結局、シャルルの正体を勝手にバラす訳にもいかないのです。承せざるを得なかった雪兔のテンションは凄まじく低かった。

「大丈夫？ 僕が同室になったの迷惑だった？」

「そんなことはねえよ……ちよつと思ふことがあつてな。それに今日は色々ありすぎた」

「はは、その色々の一つとしてはなんとも言いづらいね」

「まあ、同室になったんだ。何かあつたら遠慮なく言えよ？ 俺にできることなら手を貸してやる……どんなことでもな」

「うん！ 頼りにさせてもらうよ、雪兔」

その眩しいくらいの笑顔に雪兔はある覚悟を決めた。

「……あと、この部屋にいる時は無理はしなくていいからな、シャルロット」
「えっ？」

突然隠していた本名を呼ばれ固まるシャルロット。

「な、なな、何でそれをつ!？」

「俺はお前が女だって知ってるし、親に言われて俺と一夏のデータ取りにきたのも知っ

てる。情報の出所は訳あって言えないが、別にそれを理由に脅す気もねえし、ここから追い出す気もないよ」

「ど、どうして?」

「そんなことする理由がねえし、友達をそんな形で売るなんてのはクズのすることだ」

「と、友達……?」

「違ったか?俺は少なくともシャルロットを友達だと思ってるんだが」

「ううん!僕もだよ!」

「ま、そうこうことだ。俺はシャルロットがしたいってことを尊重するし味方でいてやる。だから本当に困ったことがあればちちゃんと言えよ?」

「うん!ありがとう、雪兎!」

こうして雪兎とシャルロットは秘密を共有する関係になった。

(さてと、あとはデュノア社の馬鹿共をどうしてやるかだな)

そして雪兎は密かに友^{シャルロット}達にこんなことをさせているデュノア社への嫌がらせをすることを心に誓うのだった。

9話 一夏と黒兎の因縁 兎、友達のために頑張る

雪兎とシャルルシャルロットが秘密を共有した翌日。

この日から雪兎達の一夏強化特訓にシャルルも加わることとなった。

「助かるよ。今までまともな説明できんの俺と簪くらいだったんだ」

「うん、シャルル君の説明はわかりやすいから私も楽」

「そんなことないよ。雪兎は要点がすっかりまとまってるし、簪さんも教え方上手いと思うよ」

「「うぐぐぐぐぐ……」」

コーチとして簪達も下手ではないのだが、簪は擬音だらけ、セシリアは色々細かすぎ、鈴は感覚的、と三人は説明に向いていなかったのだ。その点、雪兎、簪、シャルルは親切丁寧で一夏もやり易かった。

「白式は雪片以外の武装を嫌う傾向にあるが、別に絶対に使えないって訳じゃないんだ。持ち主が使用許可を出してれば一時的に使うこともできる。白式みたいな極端なのは姉さんのシルフィオーネくらいだからタッグ戦とかで武装を共有する場合とか状況は限られるがな」

「二度使ってみればどういうものかもわかるから対処がしやすくなるし、機会があれば色んな武装を使ってみるといいよ」

「一夏はいきなり専用機だったみたいだから専用機じゃなくて訓練機でそういうのを使ってみるのもいいかもね」

「なるほど……」

シャルルから銃を借り試し撃ちをしてみた一夏は三人の説明を聞き納得する。

「もしかしたら二次移行セカンド・シフトしてそういう武装が増える可能性もあるからやっておくとい

い」

「二次移行ってそんなに変わるのか？」

「まだ実例が十件もないから何とも言えないが、長所を伸ばす特化型とか、弱点を補うように機能が追加されるパターンもあつたみたいだから可能性はあるんじゃないか？」

（原作通りなら技量が半端なく必要になるんだがな）

「あと、お前らも一夏にばっかかまけてないで自分のメニューもやれよ？ トーナメントで無様な姿を晒しても俺は知らんからな」

「うぐっ!?!」

そう実は一夏だけでなく箒達にも雪兎それぞれ課題を与えている。雪兎、簪、シャルルはこのメンバーの中で行う模擬戦での成績が良いため一夏の指導に回っているのだ。

ちなみに下から一夏、箒、セシリア、鈴、シャルル、簪、雪兎の順で専用機の無い箒は仕方ないとしてもセシリアと鈴の勝率は少し問題である。雪兎はほぼ全員に対するメタ装備があるし、簪の打鉄式式もかなり凶悪な性能を誇るため勝率は高い。それに第2世代機の改修型で食いついてくるシャルルの技量も中々のものである。

「箒は一夏程じゃないが銃器の扱いが雑だし、セシリアはインターセプターの即時展開と近接対策。鈴は近接と射撃の切り換え・・・他にもトーナメントまでに改善できるところは多いんだ。徹底的にやるぞ。怠けようもんならどうなるかわかってるな？」

少し前に模擬戦で改善がされていなかった時はメタ装備（箒には「G：ガンナー」で近付けさせず完封、セシリアには「W：ウイザード」でライフル以外を封じてチマチマ攻撃、鈴には「S：ストライカー」のアンカークロウで捕まえて延々と振り回してバンカー）で延々と模擬戦を繰り返すという鬼畜の諸行だったのを思い出し、箒達はすぐに自分のメニューへと戻っていった。

「……おいでなすつたか」

しばらくするとアリーナが騒がしくなり、もう一人の転入生ラウラ・ボーデヴィツヒが専用機「シユヴァルツエア・レーゲン」を纏って姿を現した。

そして、ラウラは一夏の姿を見つけると開放回線で声を飛ばす。

「おい」

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

ラウラが一夏を敵視するのは第2回モンド・グロツソで千冬が優勝を逃したのが一夏のせいだったからだ。その時、一夏は謎の組織（後に亡国機業の仕業と判明）に拐われ千冬は決勝戦を辞退してまで一夏の救出に向かった。その際、手を貸してくれたのがド

イツで、その見返りとして千冬は一時ドイツで教官をしていたのだ。ラウラは千冬の指導を受け心酔するようにすらなった。そんな千冬の経歴を汚した一夏をラウラは認められなかったのだ。

「また今度な」

一夏もそれを承知の上で戦う気は無いと返すが。

「ふん。ならばー戦わざるを得ないようにしてやるー」

ラウラは問答無用と左肩の大型レールガンを一夏に向けて放つも、それは間に割り込んだ雪兎の「S：ストライカー」の大型シールドに阻まれた。

「随分と血の気の多いやつだな、ラウラ。ボーデヴィツヒ。挨拶代わりに対ISアーマー用徹甲弾とはな。こいつじゃなきやただじゃ済まなかつたぞ?」

「天野雪兎か、お前には用はない。そこをどけ」

「お前にはなくても俺にはある。ダチを守るって理由がな」

「貴様っ!」

ラウラの「貴様になくても私にはある」をそっくりそのまま返す形で雪兎はラウラと対峙する。

「……今お前とやり合うのは割りに合いそうになさそうだ。今回は引いてやる」

「次はちゃんとアポとってから来るんだな」

「ふんっ！」

ラウラはISを待機状態にするとアリーナから去っていった。

「すまない、雪兎。助かった」

「いや、気にすんな。だが、あのラウラってやつ、そのうちまたちよつかい出しに来るぞ」

「ああ、そうだな」

（あつぶねえ・・・原作と違っていきなり徹甲弾とか、原作通りシヤルロットが庇ってたらヤバかったな）

とりあえず退かせることはできたが、雪兎は原作とは違うラウラの攻撃に内心ヒヤヒヤしていた。

（これは最悪のパターンも想定しといた方がいいな）

原作以上の何かが起こる気がして雪兎はトーナメント、いや、ラウラ対策として用意していたある物の完成を急ぐことにした。

「雪兔、放課後からずつと険しい顔してるけど、ボーデヴィツヒさん関係?」

「ああ、あいつ、徹甲弾とか持ち出してきたからな。次は何やらかすかわかったもんじやない」

原作通りであれば少しして鈴とセシリアが大怪我をするあの事件が起こるはずだ。それを知っていて黙っていられる程雪兔は薄情ではなかった。

(そのため一夏以外も鍛えてたんだ。あとはタッグパートナーとかがどうなるかってとこだな)

その後、学年別トーナメントが先日の無人IS襲撃事件のせいでタッグマッチになり、原作では一夏とシャルロットがペアとなるのだが……

「そういえば、今度のトーナメントってタッグ戦になるんだよね?」

「ここでもう一つ想定外の事態が起きていた。そう、タッグトーナメントという告知が原作より早く行われたのだ。一夏は例によって箒達三人からタッグを組めと迫られて

おり、簪は幼馴染の本音と組むと聞いている。雪兎はまさかシャルロットと同室になるとは思っていなかったのでペアに関してはノータッチだった。

「より実戦的な状況を想定してつてやつだったな」

「雪兎はもうペア決めたの？」

この聞き方は「もし決めていないんだったら僕と組んでよ」のパターンではないかと雪兎が思っている。

「もし決めていないんだったら僕と組んでよ」

一字一句間違わずシャルロットは雪兎の思っていた通りの言葉を口にした。

「お、俺と？」

「うん、同室で時間も合わせ易いし、何より僕が女の子だって知ってるしね。他の人だとそここのところが……」

「あー、確かにやりづらいわな」

「だからお願い！僕と組んでよ」

雪兎としてはありがたい申し出だが、そうなると一夏が誰と組むのか完全に予想がつかない。一番確率が高いのは筈だろうが、そうなると必然的にラウラが一般生徒と組むことになるのだろう。雪兎はその哀れな一般生徒の武運を祈った。

「ダメ？」

その様子を否定的に捉えたのかシャルロットが上目遣いでそう聞いてくる。

「あーもう、そんな顔するな！困ったら手を貸すって約束したろ？」

「じゃ、じゃあ！」

「ああ、俺がペアを組んでやんよ。やるからには優勝以外ないからな」

「うん！」

こうして雪兎はシャルロットとペアを組むことになった。後日、それを聞き箒達にペアになることを迫られる一夏が「雪兎とシャルルの裏切り者ー！」と叫ぶことになったとか。

しかし、その数日後。雪兎の努力も虚しく原作通り鈴とセシリアはラウラにISを大破させられトーナメント出場を辞退することとなった。

10話 開催!学年別タッグトーナメント!! 兎、疾風と共に

学年別タッグトーナメント当日。

トーナメント表が公開され、一夏・箒ペアはAブロック、簪・本音ペアはBブロック、雪兎・シャルルペアはCブロック、そしてラウラは抽選により二組の宮みやもと本聖のじりという生徒とペアでDブロックとなっていた。

(かなり原作から変わったなあ・・・そろそろ原作知識も通用しないかもな)

「綺麗にバラけたね」

「ああ、しかも順調にいけば一番最初にあいつと当たるのは俺達だ」

各ブロックを勝ち上がるとAブロックはBブロックと、CブロックはDブロックの代表と当たることになる。見た感じ一夏達や簪達がそんな簡単に負けるとは思えないのでこの二組のどちらかが決勝に上がってくるだろう。

「雪兎、負けんなよ」

「一夏、お前こそちゃんと勝ち上がってこいよ」

「私も負けない」

「簪もやる気だな。だが、私も負けるつもりはない」

「僕だって皆が相手でも簡単には負けないよ」

一夏、雪兎、簪、箒、シャルルの気合は充分。ただ、本音は一人場違い感がして一人あわあわしていたが。

「……」

（私、何か悪いことしたかなあ……）

一方、ラウラとペアになった聖は途方に暮れていた。専用機持ちの代表候補生とペア

になれたのはラッキーであったが、そのペアになったラウラは聖のことなど試合に出るための付属品くらいの認識しかしておらず、聖は凄く居心地が悪かった。

「おい」

「は、はひー!」

「宮本と言ったな? お前は何もするな。ただ私の邪魔にならないよう隅にようっている」

「は、はい」

(うう、もうやだあー)

聖の受難はもう少し続く。

Aブロック

「はあっ！」

「きやつ!?!」

今日の箒はいつもと違った。気迫は勿論、中学の剣道の試合の時のように八つ当たりの剣を振るう訳でもなく、怒りに身を任せた剣でもなく、真っ直ぐ、鋭い剣筋で相手を圧倒していた。

「ま、まだよー！」

相手のリヴァイヴは近接戦では勝てぬと悟り、距離を置いてアサルトライフルで攻撃するが。

(この程度、雪兎の弾幕に比べれば！)

するりとそれ避け、箒は自分の間合いへと再び持ち込む。

「くっ！」

だが、相手もすぐに近接ブレードを取り出し応戦する。

(こんなもの、鈴の双天牙月に比べれば軽い！)

「はあっ!!」

打鉄・改の対ビームコーティング刀が二振り振り抜かれ相手のリヴァイヴのシールド

エネルギーを削り切る。

「悪いな。今の私はこんなところで負ける訳にはいかんだ」

「箒、お疲れ」

一夏も相手を下したのか箒を労う。

「それにしても今日の箒は凄いな」

「何、負けられない理由がある。それだけだ」

実は箒、鈴やセシリアと今回のタッグトーナメントが終わってから改めて一夏と付き合う権利を賭けた試合をすると決めており、他の有象無象に優勝を譲るつもりはなかったのだ。別に鈴やセシリアを待つてやる必要などないのだが、そこはこの真面目武士道少女、抜け駆けなど己の矜持が許さなかった。

「そうか、なら俺も頑張んなきゃな」

一撃必倒の一夏と気迫の乗った箒を止められるペアは残念ながらAブロックにはいなかった。

Bブロック

「かんちゃんー！」

「いけー！【山嵐】ー！」

一方のBブロックの簪・本音ペアは本音が防御、簪が攻撃、と役割分担して試合をしていた。打鉄式式は攻撃を決めてしまえば普通の訓練機など相手にならず、装備を防御重視で固めてひたすら簪を守ることに専念するという運用法で経験の少ない本音でも何とか簪の僚機を務めていた。

「【春雷】モードB。本音、退避して！」

「がってんー！」

止めは荷電粒子砲【春雷】の広域攻撃モードの一撃で相手ペアを撃墜。このペア、幼馴染というだけあって連携は中々である。

「そういえばかんちゃん」

「何、本音」

「優勝したらかんちゃんはどっちとお付き合いするの？」

「えっ？」

突然の本音の言葉に簪がフリーズする。

「やっぱ、あまあま？あれは絶対ゆーりよー物件だよ？」

「な、なな、何言ってるのよ!?雪兎はただの友達でー」

「じゃあ何で顔真っ赤なの？」

「本音ー!!」

本音がいる以上、どうしても締まらないのは仕方ないだろう。

C ブロック

「雪兎！」

「おう！」

連携という意味ではこのペアが一回りも二回りも抜きん出ていた。雪兎は装甲切換アーモア・チェンジで多彩な戦術を繰り広げ、シャルルも膨大な拡張領域に納められた武器を的確に使用してくる。それをパートナーの行動に合わせ常に最適解の動きで行ってくるのだ。厄介と言う他ない。一年生でこんな真似ができるのはこの二人くらいのもだろう。

「やっぱ、シャルルがペアだとやり易いわ。援護が的確で助かる」

「それはこっちの台詞だよ。雪兎もこっちに合わせてくれるから凄くやり易いし」

まるで長年ペアを組んでいたパートナーのような二人の連携は一年生は勿論、上級生や教師陣すら絶賛するレベルでいつの間にか優勝候補筆頭にあげられていた。

Dブロック

「・・・私、いる意味あるんでしょうか?」

Dブロックはタッグマッチのはずなのにラウラの独壇場であった。聖は文字通り隅に追いやられ相手二人をラウラが蹂躪する試合が続いており、聖は自身の存在意義を見失っていた。

「もう、ボーデヴィツヒさん一人でいいじゃないですか・・・成績とかもうどうでもいいので帰らせてください」

聖、君は泣いていい。相手のペアにすら相手にされず隅で小さくなる彼女の乗る打鉄からは哀愁が漂っていた。

結局、各ブロックの代表は番狂わせが起こることなく一夏・箒ペア、簪・本音ペア、雪兎・シャルルペア、ラウラ・聖ペアが勝ち残った。

「まあ、予想通りと言うかなんというか……」

「そうだね。明日の準決勝と決勝も頑張ろう、雪兎」
「ああ、シャルロットとなら負ける気がしねえよ」

学年全員の試合となればいくらか早く決まっても1日で終わる訳がなく、準決勝と決勝は翌日の2日目に行われる。だが、雪兎にとつては物凄くありがたかった。

(それにしても今日は箒が大分頑張ってくれたからデータがかなり蓄積できたな)

それはもう獅子奮迅の活躍だった。正直、「我に断てぬもの無し!」とか言い出してもおかしくないレベルだった。

(いっそのこと参式作る? 液状形状記憶合金つて東さん作ってたよな?)

打鉄が超闘士化しそうである。

(簪からも打鉄式式の戦闘データ回してもらえだし、タッグトーナメント様々だな)

雪兎はE V O L s y s t e mの關係上、データが蓄積されれば新しいパックや武装を手のできるの、こういうのは大歓迎だった。

(新しいパックも完成したし、ラウラ対策は充分だと思いたいが、少し念を入れとくか)
「シャルロット、リヴァイヴの拡張領域に空きあるか?」

「うん? 少しならあるけど・・・」

「明日のボーデヴィツヒ対策でこんなもん用意したんだが・・・」

「うわ、雪兎は容赦ないなあ」

「でもA I C対策はあるだろ? シャルロットのリヴァイヴは基本的に実弾メインだし」

「確かにこれならA I Cで防げないとは思うけど・・・雪兎のメタっぷりはある意味感心するよ」

「わかつてることを対策して何が悪い。逆に対策してなくて詰むなんて俺からすれば怠慢だからな。セシリアは国の方針であの装備オンリーでやれってことらしいから同情

するわ」

「うん、雪兎が敵じゃなくて良かったよ」

この男は敵に回すと厄介すぎるとシャルロットは改めてそう思った。

11話 決着!タッグトーナメント 兎、黒兎と激突す

!

学年別タッグトーナメント準決勝第一試合。

一夏・箒ペアVS簪・本音ペア

「お互い悔いのない試合にしようぜ、簪」

「うん。でも、負けない」

この対決、一夏・箒ペアは二人とも超がつく近接メインなのに対し、簪の打鉄式式中・遠距離型。本音という壁役がいるが、一夏の白式には零落白夜というバリア無効化攻撃があるため有効とは言いにくい。一夏達からすれば本音をさっさと片付けて二人で簪の撃破を狙いたいところだ。しかし、簪がそれを許すかと言えばそんなことはない。

「【山嵐】!」

最初に山嵐で二人を分断、一夏を簪が、箒を本音が相手することで一夏達の狙いを崩す。そして、箒を本音が止めている間に一夏を遠距離で仕留める作戦に出る。

「やっぱ、そう簡単にはやらせてくれないか」

「一夏の零落白夜は厄介。でも、当たらなければ意味はない！」

二砲の春雷から放たれる荷電粒子砲が一夏を追い詰めんと迫るが、ギリギリのところ
でかわされていく。

「そう焦るなよ。もつと試合を楽しもうぜ！」

春雷の連射が止まる隙を突き一夏は瞬時加速で一気に距離を詰め、零落白夜を発動させる。雪兎との特訓で零落白夜の展開スピードは以前と比べかなり早くスムーズになつており、簪が咄嗟に薙刀を展開していなかったらそこで簪は脱落していたことだろう。

「やっぱ、しののんも強いよー」

「私の攻撃をキツチリガードしている布仏も中々やるではないか」

一方の本音も箒の攻撃をしつかりガードし、箒の足止めをこなしていた。防御に絞つたからこそその芸当であり、反撃などは全くできないのだが。

「思ったより良い試合するじゃん、あいつら。特に本音」

「うん、あの箒の剣を止められるなんて布仏さんもやればできるんだね」

「酷い言われようだが、本音は元々整備科志望であることを考えるとこういう評価になるのも無理はない。」

「こりや、簪が一夏を仕留めるまで本音が耐えられるかが勝敗を訊そうだな」

「逆に布仏さんがやられれば一夏と箒の2対1になるからね」

地味に勝負の行方を握ることになってしまった本音。

(ん?一夏のやつ・・・なるほど、そう来るか)

そんな中、硬直した試合を動かしたのは一夏だった。

(俺が簪にやられるか簪がのほほんさんを倒すか、どつちが早いかって感じだな)

あまり認めたくはないが今の一夏に簪を打ち破る一手は思いつかない。だが、簪に任せつきりというのも一夏には認められないことであつた。

(せめて簪と俺の立ち位置が逆なら……いや、雪兎ならそういう状況にするよな、絶対に)

あの親友はことその手のことに関しては恐ろしく頭が回る。ならばこの状況を彼ならどうするだろうか？一夏はそれを考えた。

(加速性能は白式と打鉄式は互角。じゃあ、打鉄と打鉄・改は？打鉄・改だよな……なら)

『簪、頼みがある』

一夏は戦況を変える一手を打つべく簪に個人回線プライベート・チャンネルである頼みごとをする。それは……

「ふ、二人同時に瞬時加速!?!しかもそれを利用して相手を入れ替えた!?!」

この大胆な作戦にシヤルルも驚いた。そう一夏が考えた作戦は一瞬の隙を突き、二人同時の瞬時加速で入れ替わるというものだったのだ。

「やるじゃんか、一夏。確かに俺もお前のその状況ならその手を打つな」

簪の打鉄式式は確かに強力だが、簪の使う打鉄・改なら短時間であれば足止めは可能だ。その間に当初の予定通り本音を先に沈め2対1に持ち込む。一昔前の一夏なら思いつきもなかったであろう作戦に簪・本音ペアは隙を見せてしまった。そう、決定的な隙を。本音が撃墜され、一夏と簪の波状攻撃を受けて簪もついに撃破されてしまっ

た。

「面白い試合だったぜ。一夏、箒。次は」

「僕らの番、だね」

一夏達の見せた試合に雪兎とシャルルも気合が入った。

（あと一つ勝てばやつと戦える。織班一夏だが）

一方のラウラは一夏が決勝まで勝ち上がってきたことに胸の奥にある感情が高ぶるのを感じつつも次の試合は今までのようにはいかないだろうと軍人としての勘がそう告げていた。

(天野雪兎・・・やはりやつが立ち塞がるか)

あの最強の世代と呼ばれたうちの天災・篠ノ之束の弟子にして高速の妖精の二つ名を持つ天野雪菜の弟、そしてラウラが教官と慕う織斑千冬の弟弟子という間違いなく同世代最強の男。そんな男が何故あの織斑一夏を庇うのか? ラウラはそれが疑問だった。

(何れにせよ立ち塞がるというのなら打ち破るまでだ!)

そんなラウラとは対照的に聖はもう帰りはかった。

(私、何もやってないのにもう準決勝だよ・・・「寄生だ」とか言われてるよね?)

何故、この娘はここまで卑屈になれるのだろうか? ちなみに他の生徒からはラウラが凄すぎて認識すらされていなかったりする。聖、君はやっぱり泣いていい。

そんな両ペアの試合はアリーナにいる全ての者の想定外の結末を迎えることになるのだが、それを知るのは密かに妹の活躍を眺め(盗撮)ひゃっはーする天災だけであつた。

準決勝第二試合。

雪兎・シャルルペアVSラウラ・聖ペア

「ボーデヴィツヒ、悪いが一夏と戦うのはもう少し延期させてもらうぜ」

「ふん、お前のISが如何に強力だろうとこのシユヴァルツェア・レーゲンの敵ではない
！」

「そういうのは負けフラグって言うんだぜ」

「それに雪兎ばかり気にしていると痛い目を見るよ」

「第2世代機アンテイックに何ができる」

「量産化の目処の立たない第3世代機ルキよりは動けると思うよ」

試合前からの壮絶な舌戦に一人蚊帳の外にいる聖は「もう帰りたい……」と涙目
だった。

『試合開始！』

「悪いが最初から飛ばしていくぜ！」

開幕直後、雪兎は展開していた「G：ガンナー」でいきなり面制圧射撃を繰り出す。「ちっ!」

容赦の無いその攻撃にラウラはワイヤーブレードで聖を自身の後方に放り投げるとAICを展開し何とかそれを耐えきる。

「ほらほら、こつちがお留守だよ!」

すると今度は側面からシャルルの射撃がラウラを襲う。

「くっ!」

「AICは確かに強力だがよ、流石に全方位には張れないよな!」

(こいつら、停止結界の弱点を!)

メタに定評のある雪兎がそんな弱点を見逃す訳がなく、ラウラはいきなり窮地に陥る。

「シユヴァアルツェア・レーゲンが停止結界だけのISと思うな!」

しかし、ラウラも軍人としてそこそこの修羅場を潜り抜けてきた猛者。大型レールガンやワイヤーブレードを用いて牽制し、態勢を立て直す。

「やっぱ、一筋縄じゃいかんか・・・じゃなきゃこいつを用意した甲斐がねえもんな!」

そう告げて雪兎は雪華に新たなパックを展開させる。その色は蒼。セシリアのブルー・ティアーズと同じ蒼天を連想させる色のパックだった。

「J: イエーガー」 お前を倒す切り札だ」

狩人イエーガーの名を冠したそのパツクの最大の特徴はブルー・ティアーズのスターライトmk. IIIを凌駕する大型のライフル。しかもこのライフル、ただのライフルではない。

「ターゲット、ロック。fire」

放たれたのは超高出力ビーム。そうこのライフル、元になつたのは自爆がお家芸と化したとある機体を使用したバスターライフルというものだった。光学兵器はAICでは防げない。尚且つ一撃で仕留める火力を求めた結果、セシリアのブルー・ティアーズをベースに打鉄式式の春雷や白式の機動力を合わせ持つ機体としてこの「J: イエーガー」は設計された。しかも、このバスターライフルは「EW仕様」のためカードリッジで連射も可能というえげつない代物だった。カードリッジも高速切替で補充が容易である雪兎にとって問題なのは連射のし過ぎによる砲身の過熱化くらいものだ。

「くつ、そんなものまで用意していたとはっ」

これは流石のラウラも想定外の事態であり、大いに焦つた。雪兎のバスターライフルを警戒すると意識の隙間を縫うようにシャルルが攻撃を仕掛け、シャルルの攻撃をAICで防ぐために足を止めれば雪兎のバスターライフルの餌食となる。そう、雪兎・シャルルペアの必勝パターンにラウラは既に追いやられていたのだ。

「余所見してる時間はあげないよ、黒兎さん」

「さあ、舞い踊りな。終わ^{エンド}り無^{レス}き円舞^{ワルツ}曲という絶望の中で!」

「さ、流石は雪兎さんですわ……あの動き、わたくしのブルー・ティアーズの理想形ですわ」

「しかもあの高出力ライフル……ほんとあいつだけは敵に回したくないわ」

「ええ、あのメタ装備の展開に関して雪兎さんの右に出る方はいないでしょうね」

怪我で不参加となったセシリアと鈴も試合の映像を見て改めてそう思った。こうなるといくら自分達に大怪我をさせたラウラとはいえ同情したくなってくる。

「かんちゃん。私、どうしてもあまあまに勝つ光景が想像できないよ」

「雪兎に勝とうと思ったたら初見で情報無しの一撃しか無理だと思う。時間をかけたり、何度もやるのは愚策。絶対に対策したメタ装備使ってくるから」

「だね……」

「お姉ちゃんでも怪しいかも」

どうすれば勝てるんだ、あんなやつ！状態である。情報と時間を与えてしまえば現状の特化型のISではまず彼には勝てない。かなり特殊なISを使う簪の姉にして学園最強の称号を持つ生徒会長・更識楯無なら初見で何とかレベル。想像するだけでも恐ろしい。

(何、あの子。噂は聞いてたけど、ちよっとトンデモ過ぎない!?)

その生徒会長本人も試合を見て唖然としていた。現役軍人すら手玉に取るその戦術眼に徹底したメタ装備。学年最強と噂される実力は確かである。

(私対策とかどんな装備で来るか予想がつかないわね……出来れば敵に回したくないわ)

学園最強からもそう評価される雪兎はやはりトンデモないやつだった。

しかし、ここでほぼ全ての人間が忘れている存在がいた。聖である。そう、あまりにも存在感が無さすぎて雪兎達からもパートナーであるラウラにも忘れられていた聖である。

(何、この人外魔境……)

空からはバスターライフルが降り注ぎ、地上ではシャルルがこれでもかと弾丸をバラ撒き、それを必死に捌くラウラ。聖の居場所はやはりアリーナの隅であった。

(早く帰りたいよ……)

そんな中、試合はだんだんラウラが追い詰められていく展開だ。

(早く帰りたいけど……何もせずに負けるのは嫌だなあ)

ラウラには「何もするな」とは言われたが、聖にも意地があつた。

(どうせ負けるならせめて一矢報いてやる!)

この彼女の決意がラウラの運命を変えることになるとは誰も想像してはいなかった。

ラウラはもう正直なところ限界間近だった。頼りのA I Cが封じられ回避行動と牽制をするぐらいしかさせてもらえない一方的な攻防。ここまで一方的なのは随分と久しぶりのことであつた。以前、千冬にも「選ばれた人間気取りか?」と言われたが全くもってその通りだ。世界は広がった。この国には「井の中の蛙」という言葉があるが、ラウラは正にその「蛙」であつたのだ。

(そんな私が、見下すことしかしていなかった私が勝てるはずもなかったのだな)

とうとう心が折れてしまったラウラは動きを止めてしまう。そして、それ雪兔が見逃すはずがなく、バスターライフルの銃口がラウラを捉える。

「これで終わりだ！」

誰もがそう思った。だが、放たれたバスターライフルの一撃はラウラには届かなかった。

「えっ?」

何故なら、ラウラの前に会場中から忘れさられていた聖が、ラウラを庇うように立ち塞がっていたのだ。

「宮本っ!?! どうしてお前が!」

自分の代わりにバスターライフルの直撃を受け大ダメージを負った聖にラウラは困惑していた。

「あは、はは、ごめんね．．．動くなつて、言われてたけど、何も、せず、に、負け、るのは、嫌、だったから」

「何故だ! 何故私などを庇った!?!」

「ボーデ、ヴィツヒギ、んは、そうで、もなかつ、たかも、しれない、けど、私は、ボー、デヴィツ、ヒさんのパートナー、だから」

それを聞いてラウラは知らぬうちに涙をこぼしていた。

「馬鹿者……」

あれだけ辛く当たっていたのに迷わずパートナーだからと告げた聖にラウラは負けた。精神的に、ラウラはこの少女にすら劣っていたと認めた。

「私の負けだ」

こうして準決勝第二試合は聖の脱落とラウラの敗北宣言により雪兎達の勝利という結末を迎えた。

『認めん……我はこのような結末など認めん!』

だが、ラウラのISの内に潜んでいたそれはその結末を認めなかった。

12話 VTS強襲!?! 兎、人命救助をする

『認めん！我は認めんぞー!!』

決着がついた。そう思っているとラウラのISに異変が生じた。

「な、何だこれは!?!」

突如ISの装甲がドロドロと溶け始め操者であるラウラを飲み込み姿を変えていく。

「ゆ、雪兎！あれって」

「ちつ、ありやVTSだ。宮本って娘がいい仕事したから発動しないと思ってたんだがなあ」

原作では一夏への対抗心が力を求め、それをトリガーにして起動するよう仕組まれていたものだが、何故かはわからないがラウラの意思を無視して起動し暴走しているようだ。

「VTSって条約で禁止されてるはずじゃ……」

「どの国にも「そんなもん知るか」っていう傍迷惑なやつがいるってことさ。さて、どうしたもんかね」

近くにいた聖はラウラが咄嗟にこちらに投げ飛ばしているため巻き込まれずに済ん

だが、ラウラは取り込まれてしまっている。

「雪兎!」

そこに一夏と箒、それと簪が駆けつけてきた。

「雪兎、あれは……」

「VTSだ。一夏、お前の予想通りあれの元になったのはブリュンヒルデ時代の織斑先生だ」

「やっぱり……」

VTSが模倣したのは世界最強と言われたブリュンヒルデとその愛機。何より姉を尊敬している一夏がそれに気付かない訳がない。

「ここからは普通は先生達の仕事だ。だが、一夏。お前はそれで満足か?」

「いや、これは俺達の役目だ! そうだろ? 雪兎」

「そうだ、ここからは試合じゃねえ。人の試合に割り込んできやがったやつと俺達二人の喧嘩だ!」

一夏と雪兎が二人で立ち向かうことを決意するが。

「雪兎、パートナーである僕のこと忘れてない?」

「そうだと二人とも。私だっている」

「私も手伝う」

シャルル、箒、簪も協力を申し出た。

「お前ら……多分、反省文とか山盛りだぞ？」

「皆でやればそれくらいすぐだよ」

「つたく、そんじゃせつかく改心した馬鹿を取り返しにいくとしようやー！」

「「おう！」」

ここにタッグトーナメント上位五名によるスペシャルチームが結成された。

「雪兎！やつが動き出したぞー！」

このVTS、原作の時のように攻撃や武器に反応するプログラムではなく周囲を無差別に攻撃するものになっているようだ。

「簪は俺と共に牽制射撃！箒は一夏の護衛！シャルルはその援護！一番重要なオフエンズは一夏、お前に任せる。零落白夜で決めてこい！それじゃあ、各自散開！」

「「了解！」」

雪兎は引き続き「J：イエーガー」でバスターライフルを構え、簪も直列接続のモードAで春雷をVTSに向ける。

「fire」

二砲の超高出力砲をVTSはバックステップで回避するもシャルルはそれを読んでいた。

「そうくると思ってたよー！」

両手のアサルトライフルから弾丸をバラ撒きながら距離を詰め左腕のシールドに隠された武装、雪兎の「S：ストライカー」と同じパイルバンカー【灰色の鱗殻^{グレイ・スケール}】のりボルバー機構が唸りを上げ四連撃を叩き込む。

「いくぞ、一夏！」

「おう！」

シャルルが態勢を崩したところで箒と一夏が迫る。しかし、VTSもただでやられてやるつもりはないと模倣した雪片を振るうが。

「その程度！」

「千冬姉に比べたら!!」

箒が二刀で受け止め、一夏が雪片式型で払いのける。

「やれ！一夏!!」

「はああああ!!」

零落白夜を展開し放たれたその一刀はVTSの装甲を引き裂き、中からラウラがこぼれ落ちた。

「よつと、これで終わりか?」

解放されたラウラを一夏が受け止めるとVTSは再び蠢き始める。

「ちっ、往生際が悪すぎだろ！」

「離れる、一夏！中に人がいねえなら、こいつのフルパワー焼き尽くす！ご丁寧にＩＳコアも分離してくれたみたいだしな！」

どうやらラウラと一緒にＩＳコアまで分離してしまったらしく、ラウラの手にそれらしき結晶体が握られていた。ラウラもただで取り込まれてやった訳ではなかったらしい。

「Ｊ：イエーガー」リミットリリース！バスターライフル最大出力！！」

その言葉と共にバスターライフルから勢いよくカードリッジが三つ射出された。

「ボーデヴィツヒにはお前みたいなのがもう必要ねえんだよ！！消えされ、バスターライフルオーバーバースト！！」

それは天から落とされた裁きの焰。ＶＴＳはその焰に吞まれ跡形もなく焼き尽くされたのだった。

「・・・やっぱ雪兎は敵に回したくないわ」

「「うん」」

一夏達はその光景を目に焼き付けながらそう思ったんだとか。

「まったく、この馬鹿者共が」

その後、雪兎達はやっぱりというか千冬よりお説教と反省文の束を受け取る羽目になつた。

「しかし、よくやった。怪我人が試合中の宮本以外出なかつたのは天野の状況判断が適切だったからだろう。教師達だけでは鎮圧するのにもう少し時間がかつたやもしれん。今回の件は正式にドイツに抗議がいくだろう」

「ボーデヴィツヒのやつはどうなるんですか?」

「あいつは力に吞まれず己を見失わなかつた。VTSはどうして起動したかは知らんが今回の件に関しては不問になるだろう」

「そうですか」

「お前は相変わらず身内には甘いな」

「そこは姉弟子に似たんでしょうね」

「ふっ、言うようになったな、この弟子が」

こうしてVTS事件と呼ばれる事件は幕を閉じた。トーナメント決勝はあんなことがあつたせいか中止となり、当然、「優勝すれば……」というあの話もお流れとなつたのは言うまでもないだろう。

（結局、負けちゃつたかあー）

今回の事件で一番の被害者と言えるのはラウラを庇つて病室送りになつた聖だろう。

しかし、パートナーを庇つたあの行動は周りから好評を受け、今回の事件で一番株を

上げたのも彼女だった。

(そういえばボーデヴィツヒさんは大丈夫だったのかな?)

VTSというヤバいものに取り込まれかけたと聞いていたので(他言無用と念を押さ
れている) 聖は少し心配であった。

「宮本聖の病室はここであつているな?」

すると、聖の病室にそのラウラがやつてきた。

「ボーデヴィツヒさん!? もう動いても大丈夫なの!」

「私は元軍属だぞ? あれくらいでどうにかなるものか!」

「そっか」

「私よりもお前の方が重症だろうが、あの高出力砲の直撃を受けたのだぞ?」

「そうでした」

VTSに取り込まれたのとバスターライフルの直撃。どっちもどっちである。

「まったく、お前は危なっかしいやつだな」

「あははは」

「さて、ここにきたのはまずお前に詫びを入れるためだ。すまなかつた」

「ええっ!? ボーデヴィツヒさんが謝るようなことはないよ!」

「いや、仮にもコンビを組んだ相手を信用せず単独で突撃した挙げ句ピンチを救われた

のだぞ？謝って当然だ」

あの時は一夏のことと冷静さを欠いていたが、ラウラは本来軍人として冷静な方だ。それがあの体たらくである。ラウラはそれをずっと気にしていたのだ。

「なら私もごめんね。大して役にも立てないパートナーで」

「そんなことはない！何度も言うがお前は私をあの一撃から救ってくれたのだ。あの威力を目の当たりにしてそれができる宮本が役立たずのはずがあるまい」

何故かラウラの聖への評価が異様に高い気がするのはいさだらうか？

「そしてもう一つの要件だが・・・宮本聖、お前をIS学園における私の副官に任ずる！異論は認めん」

「はっ？」

これには聖もどうしてそうなったかわからなかった。

「つまりは、だな・・・私と友人になってくれ、という意味だ。それぐらい察しろ」（えっ？何この可愛い生き物。お持ち帰りしていい？）

少し照れながらそう言うラウラは聖にとってドストライクだった。

「あと、私のことはラウラと呼べ。私もお前のことは聖と呼ばせてもらう」

「うん！よろしくね、ラウラ」

これにより聖も専用機持ち達はいざこざに巻き込まれていく運命を辿ることになる

のだが、この時の聖にそんなこと知るよしもなかった。

13話 シャルロットの気持ちとデュノア社の運命 兎、嫌がらせも妥協しない

トーナメントから数日後、聖も病室を出て日常へと復帰（二組では何故か英雄扱いされていた）シラウラも一夏と和解。とりあえず表面化していた問題は片付いた。一方まだまだ解決していない問題もあった。シャルロット

（束さんに賄賂（箒）に関するアレコレ）贈って頼んだ甲斐あったな）

雪兎がデュノア社に行った嫌がらせとは束にお願ひしてデュノア社の不正などの情報を入力し、「社会的に殺すよ？」と脅すというものだった。やることが鬼畜である。

（これでデュノア社はシャルロットのことで色々言えまい）

そんなことすれば社会的に抹殺される。更に言えばシャルロットのこと自体口にするれば自爆行為である（シャルロットを男子と偽り男子のデータを盗ませようとしていた）ため、

デュノア社は詰んでいた。これにはデュノア社も大慌てで必死に雪兎へ「何でもしなすからそれだけは！」と言ってきた（無論、言質は取った）。これでシャルロットがデュノア社と縁を切りたいと言い出しても問題なくなつたのだ。

(その辺はシャルロットに任せるか)

そう考え食堂に向かうと真耶が一夏とシャルルに何か話しかけていた。

「おっ、話をしてればいいところに」

「何かあったのか?」

「ああ!大浴場の件、前に話してたよな?」

「男子にも大浴場使わせてくれって言うあの話か?」

そこで雪兎は「そんな話あったなあ」と思い出す。

(あれ?それってシャルロットが女の子ってバレル前の話だから……ああ!!あの一緒に入浴するとかいうあのイベントか!!)

「今日は定期的に行われているボーラー点検の日だったので女子も元々使えなかったんですが、早めに点検が済んだので男子に使ってもらおうという話になりました」

(ヤバいな……一夏はシャルロットが女の子って知らねえし、かといって行かないと変に怪しまれかねん)

「という訳で今日は男子でトーナメントお疲れ様会しようぜ」

(どうしたものか……)

シャルルもどうしようと雪兎を見ている。

「一夏、俺とシャルルはまだ少し用事があるから先行っててくれ」

「うん？少しくらいなら待つぞ？」

「いやいや、お前、大浴場入るの楽しみにしてたる？先にゆつくりしてこいよ！」

「そ、そうだよ、一夏。ゆつくりしておいでよ！」

「二人して何か怪しくないか？」

「こんな時に限って鋭い一夏。その鋭きをもっと周りの女子に向けてやってくれ。

「何でもないって。なっ、シャルル？」

「う、うん、そうだよ！」

「そこまで言うならそうさせてもらおうよ」

何とかその場しのいだ二人は食事を終えると一旦部屋に戻った。

「ふー、一時はどうなるかと思っただぜ」

「ありがとね、雪兎。おかげで助かったよ」

「気にすんなって・・・ああ、そういうえばデュノア社の件だが」

「デュノア社の件って例の僕が男子って偽って学園に来てる件だよな？」

その時、シャルロットは何故か凄く父親が心配になったという。こんなことになつて
いる原因とも呼べる人物のはずなのにとても心配になったのだとか。理由は勿論・・・
「ちよつとデュノア社脅してシャルロットが女子として学園通つて良いって言質取つて
きた」

「……」

流石のシャルロットもこれには言葉を失った。まあ、普通に考えて一学生がどうしたら外国の一流企業を脅せるのかという話だが、そこは雪兎である。この天災の弟子であるこの男ならこのくらい造作もないのだろう。

「ついでに例え離縁しても代表候補生として支援するって約束も取り付けといた」

「……あははは」

もうシャルロットからは乾いた笑いしか出なかった。

「まあ、その辺を決めるのはシャルロットに任せるよ。このまま男子としても、女子ってばらして通い直すことにしたとしても俺はシャルロットのその意思を尊重する」
(あー、もう！何で君はそう僕が悩んでいたことをあつさり解決しちゃうかなあ)

そんなことを思いつつもシャルロットの表情は次第にニヤケてきていた。

「ねえ、雪兎。何でそこまでしてくれるの？」

元々は父親に言われた通りデータ取りのつもりで接触しただけだった。

「ん？友達が困ってるのを俺がほっとけるとも？」

最初に同室になったあの日も雪兎は同じようなことを言っただけでシャルロットを助けてくれた。

「それにシャルロットみたいにかわいい女の子が男子のふりして青春を浪費するってのは

勿体無いだろ？」

「か、可愛いって!?!ば、僕が!?!」

「ほんとクラスの連中の目は節穴だよなあ。こんな可愛い娘が男子な訳あるかよ」

「か、可愛い……僕が可愛い……」

そしていつの間にかシャルロットは雪兎の傍にいたいと思うようになっていた。

「シャルロット?」

「は、はひ!?!」

「すぐに答えは出さなくていい。でも、お前が女子だったからってクラスの連中はお前を嫌ったりはしないよ。するやつがいたら俺が何とかしてやる」

「うん……」

頼りになり安心出来る雪兎の傍にずっといたいと……

数日後。

「今日は、ですね．．．皆さんに転校生を紹介します。転校生といますか、すでに紹介は済んでいるといいますか、ええと．．．」

真耶の言葉にクラスのひとつの生徒が首を傾げた。

（やつぱ、そつちを選んだか）

この中で事情を知るのは雪兎と事前の説明をしておいた教師三人だけだ。何故かその時千冬と雪菜にやたらニヤニヤされたのを雪兎は疑問に思っていたが。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした」

「「ええええええ!」「」」

当然クラスは大混乱である。

「お、おい、雪兎．．．この前、大浴場に来なかった理由って」

「珍しく察しがいいな。そういうことだ」

「いつから知ってたんだよ!?!」

「始めからだか?普通に考えてみる。あんな美少女が男子な訳あるか」

「「「あつ」」」

雪兔のその一言でクラスメイトは納得してしまった。

「つてことは天野君は全部知つててデュノアさんを助けてたつてこと!?!」

「やばつ、天野君、男前すぎる・・・」

「愛、だね」

原作の一夏の時に比べて評価が段違いであつた。

「改めて、これからもよろしくね、雪兔」

そう言つてシャルロットは雪兔の頬に唇をつけた。

「えっ?」

「「「きゃああああ!!」」」

その歓声はシャルルとして転入してきた時以上のもので雪兔は「鼓膜が破れるかと

思った」と後に語つた。

三章 「兎と夏と恋する季節」

14話 夏の準備と恋する乙女 兎、デートに誘われる

!?

6月下旬。梅雨も明け、夏らしい日射しが眩しくなってきたある休日。天野雪兎はI
S学園に程近い大型ショッピングモール「レゾナンス」の一角で一人頭を抱えていた。

「……どうしてこうなった？」

それは先日のことであった。

シャルロットが女子として正式にI S学園に通うようになって再び部屋割りが再編され一夏と雪兎は再び同室となった。

「おかえり、一夏」

「ただいま、雪兎」

と云ってもシャルロットが原作と同じくラウラと同室となり、一夏が雪兎の部屋に戻ってきただけなのだが。

「まさかシャルロットが女子だったとはなあ」

「いや、気付けよ……そんなだから唐変木とか言われんだぞ？」

原作でもキングオブ唐変木とか言われてた気もするレベルの一夏に何を言っても無駄な気もするが、雪兎はそう言う他なかった。

「そういえば雪兎ってI Sじゃ剣術全然使わないよな？」

そう、雪兎は一夏同様にブリュンヒルデと呼ばれた織斑千冬の弟弟子であつたはずなのに今まで雪兎は試合などでは一切剣術を使っていなかったのだ。

「単に使う機会がないだけだ。一応、鍛練は続けてる」

「つてことはまだ切り札残ってんのかよ……お前ってほんとに底が見えないな」

「俺にだつてできないことはあるぞ?それに料理とかの家事スキルはお前には勝てん」

そうは言うが、一般的な男子高校生より遥かに高いレベルではある。

「そんなので勝つてもなあ」

「ならタッグトーナメントでつけられなかった決着、今度のランク戦でつけるか?」

「望むところだ」

ランク戦とは雪兎達が行っている特訓中におけるランキング戦のことで、最近では機体スペックに依存しないよう訓練機同士で行っている。ちなみに、現在特訓に参加しているのは雪兎、一夏、箒、セシリア、鈴、簪、シャルロット、本音、ラウラ、聖の十名。これに時々ではあるが雪菜が指導役で参加してくれている。

「じゃあ、ランク戦で負けたやつが勝ったやつの言うことを一つ聞くってことで」

「一夏、お前その賭け何連敗中だよ」

「今度こそは勝つ!」

「俺がメタだけだと思ふなよ?」

そう、この話が原因だったのだ。これが何故か他のメンバーにもバレ、ランク戦優勝者が他のメンバーに一つ命令できるということになってしまい、珍しく凄まじいやる気を見せたシャルロットに雪兎が敗北するという結果となりシャルロットが優勝した。そして、シャルロットが望んだことは……

「雪兔、今度僕とデートしてください！」

だったのだ。女子とカミングアウトしたあの日も雪兔にキスをしていることからシャルロットが雪兔に好意を寄せているのは周知レベルの話なのだが、まさかこんな手でデートに誘ってくるとは雪兔も想像していなかった。

「今度の休日、レゾナンスの噴水のある広場に10時に集合だからね！」

それはもう周囲の他のメンバーが「ご馳走さまです」と口を揃えた程にシャルロットはご機嫌だったのだ。それに優勝者の命令でもあるし、雪兔もシャルロットが嫌いではないため断る理由もなくデート当日を迎えてしまったのだ。

(時間は・・・9時20分。早く出過ぎたか)

女子を待たせてはいかんと早めに出たはいいが、少し早く来すぎたようで雪兔は少し待つことになった。そして話は冒頭に戻るのだが・・・

(デートなんて前世でも経験ねえーぞ!?)

雪兔が頭を抱えた理由はこれだった。雪兔は前世では没個性もいいところの彼女いない歴〓人生の人間だったのだ。それが生まれ変わった程度でどうにかなるものでも

なく、むしろ考え込むタイプの雪兎はどうすればいいのかと悩んだ挙げ句、よりにもよって弾に相談し「リア充爆発しろ!」というお言葉を頂戴したくらいだ。

「ごめん、待った?」

そうこう悩んでいるうちにシャルロットが集合場所にやってきた。時間は9時30分。どうやらシャルロットも待ちきれずに早く来てしまったのだろう。

「……いや、そんなに待ってないよ。俺も少し前に来たところだ」

気がつけば雪兎はそんな台詞を口にしていた。

「そっか、でもごめんね。せっかくのデートなのに僕は制服姿で」

「仕方ないだろ。今までシャルは男装してたんだから女子っぽい服なんて持ってこれなかったんだろ?」

「う、うん……それより、今シャルって」

「……デートなんだろ?なら、普通に名前と呼ぶより愛称で呼んだ方がそれっぽい気がするな……嫌だったか?」

「ううん!そんなことないよ!えへへ、シャルか……」

どうやらお気に召したようでシャルロットは可愛らしくにやけていた。

(ダメだ……こんな表情されたら男は勝てん。ヒロインの中で女子力トップと言われた実力は本物だった!)

しかも、それが自分に向けられているのだ。これで落とせないのはあの
キングオブ唐変木織班夏くらいのものだろう。

「それに服なんて今から買いに行けるだろう？ なんなら買ってやろうか？」

「苦手とか悩んでおきながらいざとなるとこんな台詞をポンポン吐く辺り雪兎も大概である。」

「い、いいの？」

「ああ、それくらい男の甲斐性ってやつだ」

実は雪兎も代表候補生程とは言わないがそれなりの資産を持っている。理由はEVOLsystemで開発した武装の技術を一部とある企業に売っておりその技術料として多額の金額を毎月貰っているのだ。ちなみに雪兎のスポンサーも引き受けており、雪兎が持つEVOLsystemに並ぶチートツール「storage&factory」に使う資材もこの企業から一部提供して貰っている。

「なら雪兎のコーディネートに期待してもいい？」

「うっ、俺はそういうの姉さんにしかしたことないからあんま過度な期待するなよ」

「うん！」

「雪兎、あんだだけ不安だ不安だ喚いといてちゃんとやれてんじやんか」

「本当にあの人に苦手なことなんてあるんでしようか？」

「私を知る限り蛙とかぶよぶよしてる生き物に触れないくらいよ？」

「えっ？なにそれ、ちよつと意外」

「あまあま蛙苦手なんだ」

「ああ、昔に近所のワルガキが雪兎の顔にウシガエル張りつけてそれ以来トラウマらしい」

「ほう、それはいいことを聞いた。いつか仕返しでやってー」

「やめといた方がいいわよ、それ。やったワルガキなんだけど。翌日に学校の玄関で全裸で赤いペンキまみれにされた挙げ句縛りつけにされて吊るされてたらしいから」

「「「「」」」」」

「よし、俺達も買い物に行こうか」

後ろで今度誕生日を迎える筈へのサプライズでプレゼントを買いに来ていた（ついでに雪兎達の様子見）一夏達がそんな会話をしていたとは雪兎達は知るよしもなかった。

15話 初デートは何の味? 兎、エスコートする

まず雪兎達が向かったのは女性物の服が売られているエリア。ISの普及に伴い女尊男卑が蔓延ること世界では女性物のエリアが圧倒的に広い。しかも、下手に女性物のエリアに男性が足を踏み入れると見知らぬ女性に命令され、断れば警備員を呼ぼうとする。そして「この人に暴力を振るわれました」などと言われようものなら問答無用で御用という理不尽すらあるのだ。なので、男性連れでこのエリアに足を踏み入れるのであれば連れの女性がしっかり側にいておかないと何をされるかわかったものではない元の世界のことを知る雪兎には魔境と言つていい場所だった。

「頼むから離れないでくれよ? 昔、姉さんと来たときにはぐれちまって、姉さんと客がめちゃくちゃ揉めてエライ目に遭ったんだ」

雪兎も既にその洗札を受けていた。その時は雪菜が代表候補生ということもあり雪兎達の言い分が正しいとわかり客の方が迷惑行為で店に起訴されたという珍事で終わったのだが。

「な、なら・・・えい」

ならば、とシャルロットは雪兎の左腕に抱き付き両手でしっかりとホールドする。

「じゃ、シャル!?それはいくらなんでも歩き難くないか?」

「だ、大丈夫だよ!それに今日はデートなの!これぐらい当たり前だよ!」
「そ、そういうもんか?なら仕方ない」

女性関係に疎い雪兎はシャルロットの言い分を信じそのまま買い物へ。

「うわあ、この服、可愛い・・・」

「確かに、これって〇〇ってブランドの新作だったか?」

「よく知ってるね、雪兎」

「姉さんが昔モデルの仕事とかやってた時、付き添いでブランドの人と知り合ってたな」

「ふーん。雪菜先生とねえー」

「ちよっ!?!シャルロットさん!?姉さんは姉弟だぞ!そんなんでスネられたら学園の話題とかオールアウトじゃねえか!」

「っーん」

「うわあ・・・いきなりこれかよ」

「あれ?そこにいるのは雪兎君?」

するとそこに店員と何か話していた女性が雪兎に声をかけてきた。

「えっ?あつ、千春さん!お久しぶりです」

千春は先の雪菜がモデルをした時に現場にいたデザイナーの女性で、その時に色々と

話す機会があつて知り合った人だ。フルネームは二村千春である。実は雪兎、こういう知り合いが結構いる。師匠の束と違い人の繋がりにはばかにできないと、そこそこ人脈はある方なのだ。

「あら？ そつちの娘は彼女？ また可愛い娘捕まえて」

「ま、まだ彼女つて訳じゃ・・・」

「ほうほう。アプローチ中？ でもその制服IS学園のだよね？ 勿体無い！ デートならもつといい服着ない」と！

「ええつと、その・・・」

千春のデザイナーとして何かに火がついてしまったようだ。

「ええ、彼女ちよつと訳有りて私服をあまり持つてこれなかつたんですよ。そこでデートですのでプレゼントしようと思つてたんですが」

「なるほどなるほど。雪兎君、予算はおいくら？」

「このくらいなら・・・千春さんのところならこのくらいはいるでしょう？」

「ふんふん。これなら・・・彼女のコーディネート私に任せない？」

「お願いしても？ 俺つてそういう経験無いんでちよつと困つてたんですよ」

「あー、それで私のとこのブランドを見てたのね？」

「ええ、数少ない知り合いのブランドですから。その経緯を話したらスネられちゃつ

て」

「あらあら、青春してるわねえ、雪兎君」

そうこうしている間に雪兎と千春の間で何か決まっちゃった。

「ゆ、雪兎？」

「心配すんなって、千春さんはデザイナーでセンスもいい人だから」

こうしてシャルロットはしばらく千春に着せ替え人形にされるも、雪兎が毎回ちゃんと感想を言ってくれるので途中からノリノリになり、それを見ていた一般客が挙つてそのブランドの服を買い、売り上げがかなり伸びたんだとか（千春と雪兎の狙い通りに）。その後、その内の何着かを雪兎がシャルロットにプレゼントし、その中でも最も気に入った服に着せ替えたシャルロットは機嫌を直してくれた。

「すいません。お仕事中だったのに」

「いいのよ、シャルロットちゃん。おかげさまで今日の売り上げ大分増えたから」

本当に強かな人である。

「雪兎君、この娘。大事にしなきゃ駄目よ？」

「わかつてますって、こんな俺がいいって言ってくれる娘ですよ？」

（ふしゆー）

「ん？シャル!?大丈夫か、顔真つ赤だぞ!？」

「雪兎君、ほどほどにしてあげなさいよ」

「どっちですか!」

シャルロットの恋はある意味前途多難であつた。

「大丈夫か、シャル?」

「う、うん、もう大丈夫。次は水着だね」

先程の雪兎の不意打ちから何とか復帰したシャルロットは更なる難所・水着売り場へと雪兎を誘う。

「シャルはスタイルいいし、選ぶの大変そうだな」

「そ、そうかな？」

「これとか似合いそうだな」

「どれどれ？」

そう言つて雪兎が選んだのは特に捻つた訳でもないオレンジのビキニだった。

「そ、そうゆうのが好きなの？」

「い、いや、シャルに似合いそうだったな、と・・・ん？あの水着は」

その時、雪兎の目に飛び込んだのは原作でシャルロットが着ていた水着だった。

（そーいや、アニメでもあの水着似合つてたよなあ）

「あの水着が気になるの？」

そんなことを思っているとシャルロットがその水着を手取る。

「あつ、確かにこれもいいなあ」

「・・・絶対に似合う。それは保証する」

「どうしたのいきなり？まだ試着もしてないのに」

「すまん、それを着てるシャルを少し想像した」

「・・・雪兎のえっち」

「ぐはっ」

生で聞くその台詞は結構な破壊力があつたそうだ。

結局、水着は雪兎が選んだものと原作のもの二つを買い、他にも次の臨海学校の準備なども済ませ、休憩のため二人がやってきたのはオープンテラスのあるカフェだった。

「ふう、これで買い物は全部か？」

「そうだね、これで臨海学校も大丈夫だよ。でも、デートって言うっておきながら買い物ばっかでごめんね？」

「いいって、色んなシャルが見れて俺は楽しかったから」

「うう、僕は少し恥ずかしかったよ」

「どれも可愛いかったぞ?」

「もう!雪兎はそうやって僕を弄ぶんだから」

「割りと言面に答えたつもりなんだがなあ」

この二人、これでまだ付き合っていないんだぜ?付き合ったら一体どうなることやら。

「さて、荷物もこstorage&factoryい つにしまったし、次は何しようか」

「ほんと、雪兎のツールつてとんでもないよね……」

「ん?でも、これつてISの拡張領域の応用だしな……こういう技術こそ普及しなきゃいかんと思うんだがなあ。エコバッグよりエコだぜ?」

「確かに……雪兎つて、そういうところ変わつてるよね」

「他の連中が気付かないだけだと思ってるんだがなあ」

拡張領域をエコバッグと同列で語るなど言いたい。

「そーいや、シャルはリヴァイヴどうするんだ?」

今は待機状態でシャルロットの首にかけられたペンダントトップになっている彼女の愛機ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ。タッグトーナメントまでは問題なかったのだが、皆のISは箒や本音、聖といった専用機持ちでない者以外は全員第3世代以上のISの所持しており、ランク戦などでは雪兎を除くとシャルロットが抜きん出ているが、専用機戦になると少し押され気味になることも少なくなってきた。これ

は雪兎の特訓の成果とも言えるのだが、シャルロットの場合、リヴァイヴが若干シャルロットに合わせられなくなってきているのだ。

「やっぱり改修はしてるけど第2世代機で第3世代機の相手は難しくなってきたのかな？ 皆が成長してると思えばいいんだろうけど・・・」

「俺が弄つても多分、少しの延命措置レベルだろうな」

二次移行でもすれば別なのだが、二次移行で強化されるのは精々1〜2世代分。第3世代機が二次移行するのと第2世代機が二次移行するのではやはり差があるのは否めないのだ。

「いつそのこと第3世代機に改修しちまった方が早いかな。いや、むしろシャルのリヴァイヴは雪華よりだし、雪華のデータ使って第3、5世代機にするのも・・・」

またしてもとんでもない言葉がポンポンと・・・

「ゆ、雪兎？」

「お、おう、悪い癖だな。またやっちゃったか」

「とりあえずまだいいよ。本当にどうしようもなくなったら雪兎にお願いするから」

「ああ、任せろ」

「じゃあ、この話はここままで！ そろそろ行こっか」

二人のデートはもう少しだけ続く。

16話 デートの終わりは事件とともに 兎、アクション映画の真似事をする

カフェを後にした二人は再びレゾナンスを回ることにした。

「そういや、シャルって何の部活入ったんだ？」

「僕？僕は料理部だよ。ラウラは茶道部だって」

「料理部ってまた家庭的というかなんとというか……ラウラはもうわかりやすいな」

料理するのが得意というシャルロットと副官の影響か日本文化マニアなラウラ。どちらもわかりやすい選択だ。

「箒は剣道部、セシリアはテニス部、鈴はラクロス部で簪はアニメ研究部、本音は生徒会の手伝いらしいし、聖は園芸部だったな」

聖が名前呼びなのは特訓メンバーになってすぐに他のメンバーも名前で呼んでいるのだからという理由だ。

「そうゆう雪兎は？」

「俺か？俺や一夏は色々問題があって部活やってないんだ」

「あつ、皆がどの部活に入れるか揉めたんだ……」

「そういうこと。だから俺と一夏は今は無所属って訳だ」

これに関してはまた何れに。

「ひったくりよ!!」

すると、突如そんな声があがった。

「あっちの方からだ!」

二人が声のする方へ向かうと下のフロアでバッグを盗られた女性と逃げる男の姿が目に入った。

「ちっ、ああいうのがいるから女も増長するってのに!」

雪兎はそう言うのと吹き抜けになっているフロアの階段の手摺に乗って滑るように降りていき、先回りするべく走り出す。

「待ってよ、雪兎!」

シャルロットも雪兎を追って走り出した。

「どけどけー！」

ひつたくり犯はショッピングモールの出入り口を目指し一直線に走っていた。そこに仲間が車を待機させている手筈になっている。そこまで逃げ切れればと、半ば成功を確信したその時であった。

「悪いがここから先は通行止めだぜ？」

「盗んだバッグを返してもらおうよ！」

一組の男女が立ち塞がった。

「じゃ、邪魔するじゃねえ!!」

そうやって男は隠し持っていた大型のアーミーナイフを取り出し突き出すも。

「構えが悪い。それに突き出す位置も悪い。掴まえてくれって言ってるようなものだ」

相手が悪すぎた。男女の内の男・雪兔が素早くナイフを持つ腕の手首を掴み、そのまま捻りあげて床に叩き伏せる。その際に手放したバッグを女・シャルロットが回収する。

「シャル、外に多分仲間の車があると思う」

「大丈夫、そつちはもう通報して確保してもらったから」

「ナイス。そんじや、あとはこいつを警備員に引き渡して任務完了か?」

「そうだね」

「お、おまえら一体・・・」

「ん?俺達か?俺達は通りすがりの学生さ。この近くにある学園のつていやわかるだろ?」

「この近くの?でも貴様は男・・・!?お前はまさか!」

「そういうこつた。運が悪かつたな」

その後、警備員が雪兎達の元にやってきて男の身柄を引き渡すと軽く調書などを取られたが迅速な犯人の確保と犯人の仲間とおぼしきグループを捕らえられたことで感謝された。しかも、このひったくりグループは似たような事件を他にも数件やらかしていた常習犯だったのだ。

「ほんと運が悪かったんだな、あのひったくりグループ」

「みたいだね。それにしても良かったよ。バッグ取り戻せて」

「盗られた女性、凄く感謝してたもんな」

何でも亡くなった旦那のからプレゼントされた大事な物が入っていたらしく、女性は二人に何度も礼を言っていた。

「亡くなった旦那さんのこと、本当に愛してたんだね……」

「あっ」

シャルロットは愛人の娘。母親は多分、旦那であるデュノア社の社長を恨んだりしてはいないだろうが、娘であるシャルロットは今でも父親にあまりいい印象を持ってはいないのだろう。

「シャル……」

「心配しなくても大丈夫だよ。ちょっとお母さんのこと思い出したただけだから」

事情は知っていたつもりだったが、シャルロットの心の闇は雪兎が思った以上に深かった。

「無理はすんなよ？辛かったら遠慮無く俺に言え・・・俺はお前の傍にいてやるから」
「うん、ありがと、雪兎」

手を繋ぎ直し、帰ろうかと思ったその時、雪兎の目にある物が映った。

「シャル、ちよつとここに寄ってかないか？」

そこはブレスレットやネックレスなどのアクセサリーが売られている店だった。

「アクセサリー？珍しいね、雪兎がこんなお店入ろうなんて」

「ちよつとな」

すると雪兎は何かを手に取るとレジへと向かう。

「何を買ったの？」

そうシャルロットが訊ねると、雪兎は買ったばかりのそれをシャルロットに手渡した。

「今日の記念ってやつだ。大した値段するもんでもないけどな」

「くれるの？」

「ああ」

「開けて見ても？」

「いいぜ」

中に入っていたのはチェーンブレスレットと呼ばれるチェーンで出来たブレスレットで、一ヶ所にアメジストと思われる宝石がついているものだった。

「これって……」

それにはシャルロットも見覚えがあつた。雪兔の雪華の待機形態はチェーンブレスレット。そして、雪兔のプレゼントしてくれたものと同様に一ヶ所だけ水色の宝石のよなものがついたデザインで、というよりほとんど同じデザインのチェーンブレスレットだった。

「……何か雪華に似てるなつて思つてさ。お揃いみたくていいかなあ、なんて」

「ありがとう。これ大切にするね！」

「大切にするのもいいがちゃんと着けてくれよ？お揃いなのもそうだが、シャルに合ふと思つてプレゼントしたんだから」

「うん！」

その笑顔はその日一番彼女らしくて良い笑顔だった。

17話 守護者の剣 兎、親分の偉大さを知る

デートから数日経ち、臨海学校も目前になってきたある日。珍しく一夏と雪兎を除く特訓メンバーで食堂にやってきていた。

「えへへ……」

「シャルロット、最近機嫌いいわね」

「ああ、例のデートの日からずっとあんな感じだ」

鈴の問いにラウラが答える。

「時々、あのプレスレット見てニヤニヤしてるな」

「プレゼントじゃないですかね？雪兎さんそういうのママそうですし」

「雪兎さんはIS、いえ、ロボットのことで以外に関しては割りと紳士ですものね」

箒、聖、セシリアの三名もシャルロットのプレスレットを見て雪兎のプレゼントと看破する。

「そういえば箒さん、最近は普通の打鉄なんですか？いつも雪兎さんの打鉄・改借りてらしたよね」

「ああ、なんでもデータが大分集まったからここで大規模な改修を行うと言ってな」

その言葉に集まっていたメンバーの顔がひきつる。

「……それ、絶対雪兎のやつが何かやらかすわよ」

「あまあま、こうゆうの自重しないからねえー」

「「「「「「」」」」」」」

本当に嫌な予感しかなかった。

そして、放課後。雪兎は皆とは別に一人きりで別のアリーナを貸し切つてあるISSの試験をしていた。

「打鉄・参式、起動」

それは集まった打鉄・改や白式などの運用データから雪兎が独自に開発していたIS
【打鉄・参式】の試験だった。

「ふむふむ。起動した感じは問題なさそうだなっと！」

「ほう、それがお前が最近弄っていたISか」

「あれ？織斑先生。どうしたんですか？」

そこにやってきたのは雪兎の担任でもある織斑千冬だった。

「何、お前がアリーナの貸し切り申請をしていたのを知ってな。監視のようなものだと思っておけ」

無理も無い。雪兎は千冬の親友にして世界規模の問題児・篠ノ之束の弟子である。何をやらかすかわからないので見張りにきたということらしい。

「まあ、構いませんよ。ちよつとこの参式固有の武装が危ないから貸し切りにしてもらっただけですから」

「危ない？」

「ええ、武装としてでなく振り回すのに広いスペース必要なんで他の人がいると危ないんですよ」

「なるほどな。で、その武装というのは？」

「こいつです。参式斬艦刀といいます」

そう言って雪兔が拡張領域から取り出したのは通常のIS用の刀より刃渡りの長い一本の刀だった。

「言うほど危険には見えんが……」

「通常形態ではね」

「そういうことか」

雪兔が参式経由で斬艦刀に指示を送ると刀の鍔に当たる部分が開き、中から液状の金属が流れ出すと刀身を覆っていき、参式を纏った雪兔よりもはるかに長い巨大な両刃の剣へと変貌した。

「こんなの周りに人いたら振れないでしょ？」

「だが、そんなもの使えるのか？」

「一応、理論的にはこいつのパワーアシストがあれば振れるはずなんですがつっ！」

一度持ち上げ地面に向かって振り下ろすと、地面には接していないというのに空気が震える。

「ヤバいな、これ……普通に振り下ろすだけで並みのISだったら一撃だよ」

「違うない。だが、それを振るうにはかなりの技量が必要そうだな。ちよつと貸してみろ」

「えっ?」

「打鉄・参式といったか？暮桜を使っていた私が直々に評価してやると言ったんだ」
「……是非、お願いします」

参式を待機状態に戻すと雪兎はそれを千冬に渡した。

「少し離れていろ」

そう言つて千冬は参式を纏うと斬艦刀を取り出す。

「なるほど、液状形状記憶合金か。また変わったものを作る」

そして、説明もしていないのに斬艦刀を大太刀モードに変形させる。

「先程の大剣にこの大太刀、ほう投擲を前提にした形状まであるのか」

（えー、なんでこの人もう使いこなしてんの!?)

流石は世界のCHIHUYUである。

「この推進力はこの剣を活かすためのものか。中々に考えられているじゃないか」

気に入ったのか千冬は大太刀モードの斬艦刀を軽々と振るう。生身でIS用の刀と
か振り回してしまふような方である。使用できる前提で作られた参式でなら斬艦刀も
振るえよう。そこからしばらく千冬の剣舞が続いた。ファンが知れば大荒れ間違い無
しのことだろう。

「すまないな、天野。中々動かしていて気持ちのいいISだった」

「そう言っただけならば一技術者としては幸いですよ」

「だが、あれは一般に使わせるのであればリミッターはかけておけ、特にあの斬艦刀にはな。あれは加減を知らねば容易く人を殺めかねん」

「勿論。俺は人殺しの道具を作りたい訳じゃありませんから」

「ならいい。ではな、また機会があれば使わせてくれ」

そう言うと千冬はアリーナから出ていった。

「やっぱ、一度は世界を取った人はちげーわ。それと、これを普通に使ってた親分もやっぱやべえー……俺でも振り回されかけたぞ」

改めて雪兎は偉大な先人二人に敬意を表するのであった。

後日、箒にもこの参式を使わせてみたのだが……

「な、何なんだこの剣は!?こんなものまともに振るえるか!」

「だよな、俺も振り回されかけた。織斑先生は普通に振れてたんだがなあ」

と、やっぱり斬艦刀に振り回され、それを観客席で見っていた一同はやはり千冬を敵にしてはいけなさと改めて世界最強の実力を思い知ることになった。一部、「流石は教官!」とズレた発言をしていた黒兎もいたが。

18話 雪兎の1日 兎、観察日記

臨海学校の数日前のある1日。

雪兎の朝は割りと早い。技術者系は普通、遅くまで色々やっていて朝が遅いイメージがあるが、雪兎は基本的に翌日に疲れは残さないようにしている。師匠の束は何日も徹夜とかが普通でそれを反面教師にしているらしい。

「一夏、朝練いくぞ」

「お、おう」

ここ数年の間バイト等で鈍った一夏の身体を鍛え直すべく、雪兎と一夏は朝練を行っている。最近は箒やシャルロット、ラウラなども一緒に行っており、おかげで一夏も大分昔の感覚を取り戻しつつある。

「おはよう、雪兎」

「おはよう、シャル。箒、それにラウラも」

「うむ。おはよう、雪兎」

「今日も早いな。それに比べて嫁は……」

雪兎はあのデート以降、シャルロットのことをシャルと呼んでいる。どうもじっくり

くる、とのことで本人も嬉しそうにしているので問題はない。ラウラも特訓のメンバーに加わった際に他人行儀になる必要はないとメンバーに名前呼びを許しており、すっかり仲間というイメージがついている。それとラウラは原作同様一夏に助けられた際に精神的邂逅があったらしく。気が付けば一夏を嫁呼ばわりしている。何度か一夏が訂正を試みたが結局は直らなかつた。

「すまん、遅くなつた」

「遅いぞ、嫁。お前はただでさえ皆に遅れを取っているのだ。ならば少しはフィジカル面で挽回するようにせねば」

「うっ、痛いところを・・・」

「悔しいと思うならもう少し気合を入れる、一夏」

ラウラの加入は一夏を鍛える面でも本当にありがたく、軍人として蓄積されたその技量は中々に貴重な戦力だった。

「よし、それじゃあ今日も朝練はじめっぞ」

朝練のメニューはランニングの後にラウラの指導による対人組み手、箒や雪兎による剣術指南などでシャルロットやラウラも一緒にこなせるよう調整されている。

「雪兎、お前はまた腕を上げたな？」

「指導者が優秀だからな」

「いや、私など教官に比べたらまだまだだ。そういえば貴様も教官の教えを受けたことがあったのだったな？」

「一応は弟子だからな。どこぞの弟はあの体たらくだが」

「まったくだ。やはり我々が鍛え直してやらねば」

この会話は雪兎とラウラの対人組み手の最中に行われている。二人とも軽く流すつもりでやっているが、他のメンバーからしたらとても会話などできないレベルだ。

「雪兎って技術者志望なんじゃなかった？」

「あいつ、昔から筋が良くてな。千冬姉ともよくやってたんだよ」

「私達の世代で織斑先生についていけたのはあいつくらいだ」

やはりあの細胞からオーバースペックとすら語る天災の弟子はこちらもハイスペックだった。

朝練後は一度シャワーを浴びてから朝食。一夏同様、雪兎も朝はしっかり取る方である。それから学園で授業。

「えーつと、この問題は．．．．天野君」

「はい、その答えは．．．．」

天災の弟子が学園の授業などで苦戦などするはずもなく、スラスラと問題を解いていく。

「これでいいですか？」

「はい、正解です」

成績も学年主席。こいつ、本当に欠点ないの？ってレベルである。

昼休み。雪兎は一夏同様に自炊も出来るため、週に数回全員でお弁当会のようなこともしている。

「鈴、また中華の腕上げたな。だが、他の分野では負けん」

「くつ、雪兎も玉子焼きのクオリティまた上げてきたじゃない」

「ほんとだ、雪兎の玉子焼き美味しい」

「雪兎って定番のメニューなら弁当屋のクオリティで出してくるからなあ」

「流石に普段から主夫してたやつには負けるわ」

一夏は料理や家事という分野においてはメンバーの中ではトップである。無駄に女子力が女子を上回っている。

「ゆ、雪兎、僕も作ってみただけど、どうかな？」

すると、シャルロットが雪兎に自分の作った料理の試食をお願いする。

「ん？ほうほう、これまた定番中の定番、肉じゃがが、どれどれ……ん、いけるな。味もしっかり染みてる。シャルの料理、俺は好きだぞ」

よし！とシャルロットが握り拳を作り喜びを露にすると、一同は「今日もご馳走さまです」と手を合わせるのであった。ちなみにセシリアは最初の時に雪兎から徹底的に駄目出しを食らっており、原作のようなどんでも料理はしなくなつたものの、まだ上手いとは言えず、目下修行中である。この時の雪兎は一同から救世主扱いされていた。

「ラウラ、今日のプリンはどう？」

「うむ、聖のプリンは好きだぞ、私は」

「私も私も！」

一方で聖もデザート作りに関してはかなりの腕前で、何でも両親がパティシエなんだとか。ラウラと本音は着々と聖に餌付けされている。

午後の授業も終わっていつもの特訓が始まるが、「部活にもちゃんと顔は出しておけ」と以前に雪兔がメンバーに言っており、全員が揃うのは週に数回だ。今日はその全員が揃う日ようだ。

「今日の相手はつと」

「げっ、雪兔とじゃんか」

「げっ、とはなんだ。鈴」

特訓で行う模擬戦の相手はくじ引きで決めており、今回の雪兔の相手は鈴だった。

「あんた、メタしか張らないじゃないのよ！そんなやつと当たったら、げっ、とも言いたくなるわよー！」

「そうか、メタ張るから負けると、お前はそう言うんだな？」

「それがどうかしたの？」

「なら今回はメタ装備は使わずにやってやろう」

「えっ？ いいの？」

「構わん。俺もメタだけとは言われたくないからな」

そう言っつて雪兔は雪華を【T：トライアル】で起動する。

「今日こそ勝ってやるんだから！」

「悪いがそう簡単には負けんぞ?」

その試合はそう時間もかからず決着した。無論、雪兎の勝利だ。

「龍咆に依存し過ぎだ。確かにあれは強力な兵器だが、さつきみたいに速射にすると威力が落ちて強行突破しやすい。そこで近接戦に上手く切り替えるか龍咆の威力を時々強い混ぜたりして距離保つか考えないと」

「うぐつ」

その辺は現在の鈴の課題である。

「お前の甲龍は比較的燃費もいいし、攻守のバランスもいいんだから。それに見えない攻撃つてのもさつき言ったように威力をばらして撃つても気付かれ難いつて利点があるんだ。決して弱くない。もう少し自信を持ってつて」

「うう・・・」

使用者より効果的な運用を相手に指摘され凹む鈴。しかも言っていることは分かりやすくすぐに実践できるとあつて余計に凹む。

「雪兎さんつてメタ張らなくても十分強いですよね・・・」

「じゃなきやランク戦で上位にいない。雪兎のメタはちゃんと技量があつて成立するものだから」

「簪の言う通りだ、聖。あいつ程の技量がなければあれほどの装備郡を使いこなすなど

不可能だ。そういう意味でも雪兎と並び立てるのはシャルロットくらいのもだろう」

「やっぱり、似た者夫婦？」

「ほ、本音?! 何言ってるのさ!?!」

「おー、しゃるるん顔真っ赤ー」

そんなこんなで特訓の時間も過ぎていく。

「ふう、今日も終わったな、雪兎」

「おう、今日も良いデータが取れたぜ」

1日の終わりに雪兎はその日得たデータをまとめて今後の特訓などに活用できるよ

うにしている。このマメさが雪兎の持ち味と言ってもいいだろう。

「そろそろ次のパックの設計も終わることだし、臨海学校で試すとするか」

「うげ、また新しく増えんのかよ。またパターンのバリエーション増えて読み辛くなるな。で？今度はどんなやつなんだ？」

「今度は近接型だ。前の参式とかのデータを使ったやつだ。千冬さんが使ってくれたのが良かった。あの人のデータは貴重だからな」

「そういえば千冬姉も使ったんだったな、アレ。確かに千冬姉ならアレも使えるか」

アレとは参式斬艦刀のことだ。やはりアレは並みの人間に使いこなせるものではなかったらしく、箒も参式は使うが斬艦刀は使わないようにしているくらいだ。

「明日も早いし、そろそろ寝るか」

「おう、それじゃ、お休み」

「ああ、お休み」

こうして雪兎の1日は終わる。

とある天災のラボ。
「ん？この着信音は」

四章「兎師弟と紅椿 新たな力と暴走 I S」

19話 夏真っ盛り! I S学園臨海学校! 兎、海にい

く!

7月6日、臨海学校当日。

「海っ! 見えたあっ!」

トンネルを抜け窓から海が覗くとバスの中でクラスメイト達が声を上げる。

「テンション高いなあ、まあ、海って何かテンション上がるのはわかるけど」

「そうだね。皆、普段は学園から出ることがないからそれもあるんじゃない?」

「かもな」

しかも、初日の日中は自由時間となっており、海で遊びたい放題なのだ。遊びたい盛りの高校生にテンションを上げるなどという方が無理があるだろう。

「雪兎は楽しめないの?」

「ん? ああ、ちよつと心配事があつてな」

そう言うのと、雪兎は箒の方を見る。

「箒がどうかしたの？」

「箒というかな。明日、箒の誕生日だろ？あの人何かやらかさないか心配でな」

「あの人って、篠ノ之東博士のこと？」

「そう、俺の師匠でもある東さんな。あの人、箒の誕生日だから何かしそうでな」

そう、箒大好きなああの東が何もしないというのはあり得ない。それについて先日、雪兎にも東から「近い内に会いに行くよー」とメールが来ていたのだ。それで箒の誕生日間近となれば、この日以外ないだろう。

（原作なら確か紅椿持ってくんのこの時期だったはず）

紅椿、現行のISを遥かに凌駕する第4世代IS。東が自重の一切をせず作り上げた箒の為のISだ。

「ほう、面白い話をしているな？」

「お、織斑先生」

「やっぱ気になります？あの人こと」

「先日のVTSに関してあいつに問い合わせてな。あの件は無関係だったそうだな」

「あれ、あの人嫌いな類いですしね。むしろ、作ってたところ殲滅とかする方ですよ？」

あんなの無粋だ、とか言い出して色々やってそうである。

「確かにな。それで、やはりあいつは来るのか？」

「近い内に会いに行くよ、とメールが来てました。なので多分明日かと」

「そうか」

それだけ聞くと千冬は自分の席へと戻っていく。

「雪兎、話を聞いた限りだともものすごい人みたいだね・・・」

「本物見たらもつと驚くと思うぞ。あと、あの人は身内認定してない人は基本的にどうでもいいって人だから注意してな」

「うん、覚えとくよ」

そして、一同は三日間お世話になる旅館・花月荘に到着した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「よろしくお願いしまーす」」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね。あら、こちらが噂の……?」

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男子じゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけですよ。挨拶をしろ馬鹿者共」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「天野雪兎です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

そんなこんなで女将さんの景子に挨拶をした後に一夏と雪兎の二人は教員の隣の部屋に宛がわれた男子部屋に荷物を置き、別館で着替えて海に行くことにした。途中、筈と出会いどつかで見たことのあるウサミミを見つけたが、雪兎と筈はスルーして海へと向かった。その後、人参型の何かが降つてきた気もしたが、雪兎はスルーした。

「さてと、俺は何をしようか」

「雪兎ー!」

海岸に出た雪兎に後ろからシャルロットがやってきた。

「おっ、そっちの水着にしたのか。やっぱ似合ってるな、その水着」

シャルロットの着ていた水着は原作で着ていた水着だった。

「あ、ありがとう、雪兎」

「そーいやラウラは一緒じゃなかったのか?」

「うん、さつきまでは一緒だったけど聖さんが連れていくからって」

「そっか、聖なら大丈夫だろう」

原作のシャルロットの役目は聖が引き受けたようだ。

「なら、一緒に泳ぐか？」

「うん！」

それからしばらく二人で泳いでいると海岸の方が騒がしい。

「また一夏か・・・あいつの周りはいつもあんななんだな」

「みたいだね。アレはセシリアと鈴かな？」

「あの二人は・・・もう少し仲良くできんのか、まったく」

「あつ、雪兔さんにシャルロットさん！一緒にビーチバレーしませんかー！」

すると、聖が雪兔とシャルロットをビーチバレーに誘う。

「ビーチバレーか、シャルはどうする？」

「せっかくだしやろっか、雪兔」

チームは雪兔、シャルロット、榎灘（クラスメイト）のチーム対、一夏、ラウラ、聖のチームである。

「ふっふっふっ。7月のサマーデビルと呼ばれたこの私の実力を・・・見よー」

そう言うだけの実力はあるようでききなり鋭いジャンピングサーブが一夏のチームを襲う。

「任せろ!」

だが、原作と違い早々に照れ状態から復帰していたラウラが拾い上げ。

「一夏さん!」

「おう!」

聖がトスを上げ一夏がスパイクを放つ。

「任せて!」

しかし、こちらもシャルロットがレシーブで上げ。

「天野君、お願い!」

「任せろ! しゃあ!」

樽灘、雪兎と繋ぎ鋭いスパイクが飛ぶ。

「やるな、雪兎!」

「勝負というからには負けられん!」

その後も激しい打ち合いとなり、気付けばギャラリーが周りを囲っていた。

「随分と白熱してるな」

「織斑先生!」

更に千冬や真耶も参戦して試合は更に加熱していった。

「こんなところにいたのか、箒」

「雪兔か」

箒の姿が見えないと思ひ探してみれば箒は崖の上で一人佇んでいた。

「束さんのことか？」

「やはりお前にはお見通しか」

「明日は箒の誕生日だもんな。あの人が何もしいなんて思えないだろ？それに近い内に会いに行くよ、ってメールが来てたからな」

「そうか」

「まだ許せないのか？束さんが」

箒はISを開発したことで何度も引つ越しを繰り返すことになる生活を強いられるようになり、一夏と離ればなれになったことで束のことを少なからず憎んでいた。それを察して雪兔はそう訊ねた。

「恨んでいないと言えば嘘になる・・・しかし」

「頼んだのか、自分の、自分専用のISを」

「ああ、やっぱりお前は何でもお見通しだな」

「いや、あれだけライバルが専用機持ちばかりじゃそう思うのは無理ないだろう?」

確かに今は雪兎の打鉄・参式を借りているが、それは借り物に過ぎない。だから欲したのだろう自分の専用機を。

「それを悪いとは俺は言わない。だが、専用機持ちには責任つてのがある。それだけは忘れんなよ」

雪兎はそれだけ言うど箒の元を去っていった。

「専用機持ちの責任……」

雪兎に言われたそれが箒の心に深く突き刺さるように残った。

20話 登場！篠ノ之束！激突、雪華VS紅椿!! 兎、箒とガチバトル!?

夕食では刺身に小鍋、山菜の和え物が二品、赤だしの味噌汁にお新香というメニューだった。しかも、刺身はカワハギとI S 学園は随分と羽振りがいいようだ。

「雪兎、さつきはどこ行ってたの?」

隣に座るシャルロットが自由時間の最後に行方を眩ませていた雪兎に訊ねる。

「ちよつと箒に野暮用がな」

「それってバスで話してた?」

「そういうことだ。それより食おうぜ。こんなの滅多に食えないんだから」

「うん、僕も雪兎にお箸の使い方習っておいてよかったよ」

シャルロットは雪兎と同室だった時から正座や箸の使い方などを習っており、難なく雪兎の隣を確保している。というより雪兎の隣は既にシャルロットの指定席というのが1年1組の暗黙の了解になりつつある。

「つ……う……」

一方、一夏の隣のセシリアはかなり無理をしているのかうめき声を上げていた。

「あそこまでいくと健気だよな」

「うん、本当に練習しててよかったよ」

この時ほどシャルロットは正座が苦でないことに感謝したことはないんだとか。

「無理はすんなよ?そんなときは俺も一緒に移動してやつから」

「う、うん、大丈夫だよ(雪兎はほんとにナチュラルに僕を落としかるから油断できない)」

一夏にもこれくらいの気遣いができれば、と一部のヒロイン達が思っていたとかいとか。また、シャルロットが雪兎と同室になった影響か、セシリアのあーんのシーンはお流れとなっていた。頑張れ、セシリア。

「ふう、やっぱ温泉は違うな」

「ああ、さっぱりしたよ」

男子の入浴時間は限られているので二人はさっさと入浴を済ませ部屋に戻る。教員部屋の隣なので女子達も遠慮しているのか、男二人で寛いでいた。

「そーいや明日の準備ってしてあるのか？」

明日の準備とは臨海学校の主目的である「ISの非限定空間における稼働試験」のものではなく箒の誕生日のことだ。一夏や雪兎は特に国や企業から新型装備が送られてくる訳でもないため（一夏は拡張領域が無いので装備不可能だし、雪兎は自前で用意しているため）、そっち方面は特にやることがないのだ。

「ああ、雪兎は何を用意したんだ？」

「俺はこのカーボンファイバー製の竹刀だ。壊れ難いつて評判のやつ」

「なるほど、俺はリボン、かな？」

「あー、なるほど。お前らしいわ」

その一方、女子達はというと・・・

「あの一、何で私達呼び出されたんでしようか?」

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの五人は何故か教員部屋に集められていた。箒がいけないのは友達止まりだからだろう。

「いや、何、お前らはあの二人に好意を寄せているだろう?」

「だからちよつと色々聞いてみたかったのよね」

そう千冬と雪菜の二人はぶっちゃけた。

「それとほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ」

だが、順に箒、シャルロット、鈴、ラウラ、セシリアに不満はなかったので交換会は開かれなかった。

「「「い、いただきます」」」

全員が口をつけたのを確認すると、千冬はニヤリと笑った。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの!？」

「ううん、ちよつとした口封じよ。ね、ちーちゃん」

「だから、ちーちゃんと呼ぶな」

そう言つて二人が取り出したのは星のマークがキラリと光る缶ビールであつた。

「口封じつて……」

「私達だつてお酒は飲むのよ?」

「いや、今は仕事では……」

「口止め料は払つたぞ」

そう、先程の飲み物はそういう意味であつた。

「さて、本題だ。お前ら、あいつらのどこがいいんだ?」

全員、「あいつら」が誰を指しているかわかつていた。箒達四人は一夏。シャルロットは雪兎のことに他ならない。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしただけです」

箒、鈴、セシリアのコメントである。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

そんなことをしれつと言う辺り、千冬も中々意地悪である。

「一言わなくていいです!」

それをはっはっはつとからかう千冬。もう酔ってないだろうか?

「で、お前は?」

次に一夏に惚れている最後の一人、ラウラに矛先が向く。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろ」

容赦無さすぎませんか?

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

恐らく精神的な強さのことだろう。

「まあ、強いかは別にしてだ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい」

休日になまにしてもらっているらしい。

「とういわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ。女ならな、奪うくらい気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

一方、シャルロットは……

「ぼ、僕は……やさしいところ、です。いつも雪兎は僕にやさしくしてくれて」

「だよねー、ゆうくんやさしいもんね」

「だから、いつの間にならずと傍にいたいなって……な、何言ってるんだろう、僕」

顔を真っ赤にしてそう言うシャルロットに雪菜はうんうんと頷きながらとんでもないことを口走った。

「もうゆうくんと付き合っちゃえよ。私はシャルちゃんみたいな義妹なら大歓迎だよ？」

まさかの姉公認である。そして、いつの間にかシャルちゃん呼びである。

「え、ええー!?!」

「だって、シャルちゃんならゆうくん任せても安心できそうだし。そうだ！お姉ちゃんって呼んでもいいんだぞ？」

「きゅ、きゅー……」

あまりのことにシャルロットはオーバーヒートしたかのように倒れてしまう。

「雪菜、ほどほどにしといてやれ」

「私は本気なんだけどなあー」

そんなこんなで夜は更けていった。

翌朝。各種装備試験運用の為、訓練機グループと専用機グループで分かれることになった。専用機持ちは個人でデータ取りを行わなければならない為、当然の処置だ。しかし、その専用機グループの中には何故か箒の姿もあった。

「専用機持ちは揃ったな」

「・・・どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年振りかなあ。おつきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

「がっつ!とどこから取り出したのか箒が日本刀の鞘で束をぶつ。」

「殴りますよ」

「な、殴つてから言ったあ・・・し、しかも日本刀の鞘で叩いた!ひどい!箒ちゃんひどい!」

いきなり久しぶりに再会した妹にセクハラ発言するから悪い。

「え、えつと、この合宿では関係者以外ー」

「んん? 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えつ、あつ、はいつ。そ、そうですね・・・」

真耶が色々言おうとするもあつという間に論破されてしまう。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

いかにもテキトーな自己紹介だったが、それでようやく一回はこの人物が篠ノ之束であると理解する。

「雪兔、僕は雪兔の忠告聞いててよかったと思つたよ」

「言つたら？驚くつて」

「うん、想像以上だった」

そこで東は雪兔の存在に気付き手を振る。

「やあやあ！我が弟子よ！久しぶりだね」

「この前会つたのは春休みに白式と雪華受け取つた時だから3ヶ月ぐらい振りですかね？」

「そうだねー、もうそれくらい経つんだあ」

「クロエは連れて来なかつたんですか？」

クロエとは東が保護して娘のように可愛がつている少女のことだ。

「うん、くーちゃんはお留守番しててさ。それよりも、あれから色々作つてたみたいだけど？」

「後で見せますよ。それとこれ筈の最新のデータです。使いますよね？」

「流石は我が弟子！それではお見せしよう！さあ、大空をご覧あれ！」

「このパターンはもしかや……」

すると上空から銀色の金属塊が降ってきた。

「やっぱりかー！」

一夏が何か叫んでいるがとりあえず無視する方向で。そして、その金属塊が開く中には……真紅のISSが鎮座していた。

「じゃじゃーん!これぞ箒ちゃん専用機こと【紅椿】!全スペックが現行ISSを上回る束さんお手製ISSだよ!」

紅椿、ある意味でISSの一つの到達点とも呼ばれるISSがそこにあつた。

「さあ!箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか!我が弟子がデータくれたからすぐに終わるよ!」

そう言うのと6枚もの空中投影ディスプレイを展開し、あつという間に作業を終わらせる束。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ」

やはり天災は格が違った。

「あの専用機つて篠ノ之さんがもらえるの……?身内つてだけで」

「だよねえ。なんかずるいよねえ」

どこからともなくそんな声上がるも。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな?有史以来、世界が平等であつたことなど一度もないよ」

そう束に言われて作業に戻っていく。その後も一夏の白式や雪兎の雪華のデータも

見て興味深そうに眺めていたり、箒の試運転をしたりしていると。

「さてと、紅椿の試運転も一段落したところで……ゆうくん、紅椿と戦ってみない？」
「えっ?」

「師匠としては弟子のゆうくんが育てた雪華の力。データじゃなくて実際に見てみたくなっちゃってね」

「そういうことですか……なら弟子としては受けざるを得ませんね」
こうして、紅椿VS雪華という師弟の1Sがぶつかることになった。

(ここで紅椿とやれるとはな……師匠の作った万能型の最高峰とやれるなんて技術者冥利に尽きるぜ)

雪兎はこの試合、かなり乗り気だった。それだけ雪兎にとって束は大きな存在だった。

(雪兎の雪華か……何度も模擬戦は行っていたが、その性能をフルに発揮させたかと言えばそうではなかった。だが、この紅椿なら!)

対する箒も手にした紅椿という力を試す絶好の機会であると闘志を燃やす。

「悪いが、箒。紅椿相手なら俺も加減は一切しねえからな?」

「望むところだ、雪兎。今日こそはお前から一本取ってやる!」

『それではー、試合開始!』

束の合図で両機は一斉に動き出した。

「いくぜ【J:イエーガー】!」

初っぱなから雪兎はバスターライフルで紅椿を狙うも、紅椿は思った以上の速さで動きそれをかわす。

「確かにそのバスターライフルは脅威だが、当たらなければどうということはない!」

そう言い右に持つ雨月で突きを放ち無数のレーザーが雪兎に迫る。

「機動性なら【J:イエーガー】も負けてねえよ!」

だが、雪兎に簡単に当たるはずもなくレーザーは空を切る。

「なら次は……来い【W：ウィザード】！」

雪兎はバスターライフルが通じないとわかるとバックを【J：イエーガー】から【W：ウィザード】に切り換える。

「前はグラスパーしか使わなかったからな！展開しろ、デイフェンサー！」

展開したのはグラスパーとは違う円盤状ビットだ。

「数を展開しても無駄だ！雨月！」

それに対し箒は再び雨月のレーザーを放つが。

「かかったな！」

雪兎がデイフェンサーと呼んだビットの表面は鏡のようになっていた。

「鏡面……まさかつ!？」

「そのまさかだよ！」

雪兎の周囲に並んだデイフェンサーは雨月のレーザーを数回反射させると箒へと跳ね返す。

「ちつ、簡単には落とされてくれないか」

「その程度、セシリアのオールレンジ攻撃に比べれば楽勝だよ」

「ならば、空裂！」

今度は左の空裂で带状の斬撃を飛ばしデイフェンサーを撃墜する。

「なるほどね、確かにそっちは反射出来るん。でも、斬撃を飛ばせんのはそっただけじゃないぜー!」

雪兎が大鎌・ビームハルパーを振るうと、ビームでできた刃そのものが飛び、箒は慌てて空裂で相殺する。

「なるほど、そちらは刃自体が飛んでくるのか!」

「ああ、こつちも何回でも飛ばせるぜ!」

それからは飛ぶ斬撃と隙を縫うような近接戦を両者は繰り返す。

「紅椿、束さんの自信作なだけはあるな」

「はあ、はあ、これでも追い付けないか・・・やはりお前は強いな」

まさか「W:ウイザード」で近接戦がここまでできるとは箒も思っておらず、思いの外苦戦していた。

「せっかくだ。お前に俺の新しいパックを見せてやるよ」

「ここにきて新型だど!」

「こいつはお前や織斑先生のおかげで出来たパックだ。初戦は箒で試すつもりだったよ。来い【B:ブレイド】!」

現れたのは深い藍色の鎧武者のような追加装甲を持つISだった。

「参式や白式のデータを元に作った近接特化パック〔B・ブレイド〕だ。久しぶりに剣術勝負といこうか、箒！」

その加速はその鎧武者の姿からは想像もつかない速さを持つて箒の紅椿に迫る。

「くっ、何て加速だ。その肩の非固定浮遊部位は参式と同じか！」

「^ゴ名答っ！」

そして、雪兎も紅椿同様に二本の刀を構え斬りかかる。

「こいつは式式の薙刀と同じ高周波ブレードだ。あんまし受けるとその刀、叩き折るぜ！」

「また厄介なものを！」

雨月や空裂のレーザーで接近されないよう戦う箒だが、雪兎はそれを難なく掻い潜り斬撃を浴びせていく。

「空裂！」

再度空裂を振るうもレーザーは放たれない。

「エネルギー武器の使い過ぎだ！一夏と同じで武器性能の把握が疎かだぞ、箒」

そして喉元に雪兎の剣が突き付けられ試合は決着した。

「また私の負けだな、雪兎」

「まあ、経験の差ってやつだ。もっと経験を積んでまた来な。いつでも相手になるぜ」

た。試合は雪兔の勝利。しかし、紅椿はその圧倒的な性能を周囲に知らしめるのであつ

21話 暴走！銀の福音 兎、提案する

雪兎と箒の模擬戦が終わり、再び評価試験へと戻ろうとすると、真耶が慌てて千冬の元にやって来た。

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

その慌てようは今までの比でなく、それだけで非常事態だとわかる。

「どうした？」

「こ、こっつ、これをつ！」

渡された端末を見て千冬の表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

その内容だけで十分に厄介事である。

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていたー」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

（きたか、福音事件……）

紅椿と模擬戦というイレギュラーはあったが、原作通り福音の暴走事件が起きたよう

だ。

「――全員、注目!」

真耶が他の先生へ連絡をしに離れた後に千冬は特殊任務行動になるため試験は中止、専用機持ち以外は各自旅館の部屋での待機が命じられた。そして、専用機である雪兎達は旅館の一番奥の宴会用の大座敷・風花の間に集められた。

「では、現状を説明する」

千冬の説明では二時間前にハワイ沖で試験稼働中だったアメリカとイスラエルの共同開発軍用 I S シルバリオ・ゴスベル【銀の福音】が突如暴走。衛星による追跡の結果、ここから二キロ先の空域を通過することが判明し、I S 学園の上層部によりここにいるメンバーでの対処が命じられたとのこと。しかも、教員は訓練機による空・海域の封鎖に回ることになり、直接の対処は専用機持ちが行うということになった。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「はい」

真つ先に手を挙げたのはセシリアだった。

「目標 I S の詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外するな。情報漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

そして開示された情報は……

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのI Sと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようすわね」

「攻撃と機動の両方に特化した機体ね。厄介だわ。しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超える。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

「ですね。しかも、近接でのワンアプローチワンキル……やれるのは」
そこで皆の視線が一夏に集中する。

「え……?」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ!」

アタッカーは一夏で決定。問題は一夏をどうやって福音のところまで連れていくか

だ。白式は零落白夜に全エネルギーを集中させるため移動に割くエネルギーが足りないのだ。

「天野、お前の【J:イエーガー】はどうだ？」

「セシリアのパッケージよりは稼働データもありませんし、バスターライフルに使うエネルギーを全部回せば不可能ではないですが……」

「どうかしたのか？」

「どうせ聞いてるんでしょう？ 言いたいことがあるなら出てきてください。東さん」

「ありやいや、ゆうくんにはバレてたか……」

すると、天井裏から東が姿を現す。

「東……お前というやつは」

「その作戦は待ったなんだよー！ 私の頭の中にもっといい作戦がナウ・プリンティング！」

「……出て行け」

頭を押さえ、東に退去を命じるも東がそれを素直に聞き入れる訳がなく、言葉を続ける。

「聞いて聞いて！ ここは断・然！ 紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

そこから紅椿が第4世代ISであり、展開装甲という装備によるパッケージ換装を用いない万能機であると説明がされる。それを調整すればスピードは確保できるという。

「展開装甲……それはまるで」

「俺の雪華の上位互換ってとこさ。俺の雪華が常時パッケージ換装を行えることによる万能機化がコンセプトなら、紅椿はそれを必要としない万能機なのさ。まあ、紅椿並みの高性能万能機はそうそう作れんだろうがな」

「どういうこと？」

「燃費だ。束さんのことだから何か考えがあるんだろうが、一戦した俺から言わせてもらうと紅椿は白式並みに燃費が悪い。長期戦には向かない」

「流石は我が弟子、やっぱりそこに気付いちやったか」

「まあ、一撃で決めれば二人のコンビで出るのが現状では一番確率が高いが、予備プランは必要だと思う」

「となると、第一陣を織斑、篠ノ之の二名。二陣に天野とオルコット、それと後一人とあったところか」

「そうなりますね。出来れば精密射撃が可能なメンバーがいいかと」

一夏の二撃目を補佐するためには射撃型の方が都合がいいのだ。

「ならばデュノア、お前が行け」

「えっ? ぼ、僕ですか!」

「お前が残りのメンバーで一番精密射撃に向いている。それにお前と天野のコンビネーションはタッグトーナメントで実証済みだ。選出理由としては十分だろう」

「は、はい」

こうして対福音のメンバーはファーストアタックを一夏と箒が担当し、万が一に備え雪兎・セシリア・シャルロットが補佐に付くことになった。

「セシリア、オートクチュール(専用パッケージ)のこと、今回は高機動パッケージ・ストライクガンナーを指す)の調整は悪いが俺がやる。時間が惜しい」

「お願いしても? 雪兎さんなら万全の状態にしてくれると信頼していますわ」

「任された。早速やるぞ」

そして、雪兎はブルー・ティアーズを、束が紅椿の調整を行うこととなり、急ピッチで作業が開始されたのだった。

22話 福音迎撃作戦！ 兎、ピンチに陥る!?

セシリアのブルー・テイアーズの調整を終え、出撃準備をする雪兎達。雪兎自身も「J:イエーガー」以外のパックも用意し、万が一に備えていた。

（福音の性能を考えれば対抗できるのは「W:ウィザード」と「B:ブレイド」くらいだな）

「雪兎、準備は大丈夫？」

「ああ、シャルの方こそ大丈夫か？」

「……ちよつと不安だけど、皆が一緒だから」

「そうか、俺達は万が一のオマケだけど、何かあってもお前は俺が守るよ」

「う、うん……」

（一応、模擬戦で箒の慢心は折つといたが、やっぱりまだ安心はできないな……原作通りならこの出撃で一夏は）

原作では一夏と箒の二人で行う作戦は初撃を外してしまう。更に封鎖区域に船舶が侵入し、それを放置して作戦を優先しろという箒に一夏が反発。それで隙を作ってしまった箒を庇って一夏は撃墜されてしまう。そして、立ち直った箒ら五人の専用機持ち

が無断で出撃しピンチになるも二次移行した白式で駆けつけた一夏と単一仕様能力・ワン・オフ・アビリティ絢爛舞踏を目覚めさせた筈との連携で福音を撃破する。そういう流れだったはず。

(俺というイレギュラーがいる以上、何かしらの変化があるかもしれない。それは覚悟してはいたんだがな)

「雪兎?」

「何でもない。そろそろ作戦開始時間だ。行こう」

「うん」

雪兎は不安が残るのを隠しつつ、集合場所へと向かった。

時刻は十一時半。砂浜に出撃する専用機持ち五人が揃う。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「行きますわよ、ブルー・ティアーズ」

「来て、ラファール・リヴァイヴ」

「行くぜ、雪華【J：イエーガー】」

そして、それぞれが専用機を展開し、五機のISが並ぶ。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

そう言う箒だが、その表情はどこか嬉しそうで雪兔の不安が増す。

「セシリア、シャル。俺達はあくまで補佐だが、ファーストアタックが失敗したらすぐに

二人の援護に入る」

「ええ、お任せください」

「僕も頑張るよ」

「心配は要らない。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろう?」

「ああ、そうだな。でも箒、先生達も言ってたけどこれは訓練じゃないんだ。実戦では何が起きるかわからない。十分に注意してー」

「無論、わかっているさ。ふふ、どうした?怖いのか?」

やはり箒は浮かれ過ぎているような気がしてならない。

「そうじゃねえつて。あのな、箒ー」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいれればいいや」

今の箒には一夏の言葉すら満足に届いていない。これには流石の一夏も不安を隠せないようだ。

(箒のやつ……これは本当にヤバそうだ)

原作やアニメで見た時もそうだったが、一夏も箒も一歩間違えば死んでいた可能性すらあった。だから雪兎は何があってもいいようにやれることはやったつもりだ。雪兎にとつて一夏と箒はかけがえのない幼馴染なのだ。

『天野』

そこで雪兎にプライベートチャンネルで千冬が声をかけてきた。

『先程、織斑にも言ったがー』

「箒、ですぬ?」

『ああ、万が一の時は頼む。だが、お前も私の生徒だ。無理はするな』

「はい。わかりました」

通信を終えると、雪兎達は一夏達に続いて出撃した。

「束さん、本当に自重せずに作ったなあ、紅椿」

「瞬時加速とほぼ同じスピードですわね……一夏さんが乗っているというにも関わらず」

「篠ノ之博士が提案したのも納得だよ。あのスピードなら福音に接触できる」

一夏達の後方を追う雪兎達は改めて紅椿のデタラメさを実感していた。

「暫時衛星リンクより情報照合完了。目標と白式の位置確認。そろそろ接触するぞ」

そこで紅椿は更に加速し、白式も零落白夜を起動。そこから瞬時加速で福音へと斬りかかる。しかし、福音は最高速のまま反転し、それをかわし迎撃モードに移行した。

「ファーストアタック失敗!これより援護行動に移る!行くぞ、二人共!」

「わかりましたわ」

「うん、わかった!」

迎撃モードになったことで移動速度が落ちた為、雪兎達はすぐさま一夏達の元へと向かう。だが、零落白夜の稼働時間を気にして大振りになってしまった一夏の隙を福音は見逃さなかった。

「しまっー」

福音が持つ多方向推進装置の翼は砲口も兼ねた装備であり、そこから幾重もの羽のような光の弾丸が白式に撃ち出された。

「ぐうっ!?!」

その弾丸は接触と同時に爆せてダメージを与える。何とか致命傷は避けたものの、その圧倒的な連射速度で放たれるそれに一夏と箒は回避しながら二面攻撃を仕掛けるがかすりもしない。

「一夏っ!」

そこでようやく雪兎達が到着し、ビットを機動力強化に回した代わりに装備された大型B Tレーザライフル【スターダスト・シューター】と雪兎の背中に乗るシャルロットのアサルトカノンが福音の攻撃を中断させた。

「遅くなった！これより援護に入る」

「助かる！」

そこからは雪兎達後衛組が射撃で福音を牽制し、その隙を突いて一夏と箒が攻撃を仕掛けるが、流石は軍用ISというべきか。福音は多方向推進装置と弾幕のような光弾で一夏達を寄せ付けない。

(こいつ、やっぱり暴走と言う割には行動が的確過ぎる。ということとは認識を操作されて周り全部が敵に見えるのか？だとしたらこいつの行動もあらかた理解できる)

雪兎がそんなことを考えている間に箒が一夏の攻撃をする隙を作るが、直後、それは起きてしまった。何と一夏は攻撃のチャンスを棒にして封鎖しているはずの区域に入り込んでいた密漁船と思われる船に向かって放たれた福音の攻撃を切り払ったのだ。

「何をしている!?!せつかくのチャンスにー」

「船がいるんだ！海上は先生達が封鎖したはずなのに・・・ああくそつ、密漁船か！」
更にエネルギーが尽きたのか零落白夜の刃が消え、展開していた装甲が閉じてしま

う。
「馬鹿者！犯罪者などを庇って・・・。そんなやつらはー！」

「箒!!」

「ツーー!?!」

「箒、そんなーそんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」
「わ、私、は……」

一夏のその言葉で箒は自分が何を言っていたのか気付き、動揺して動きを止めてしまふ。それは実戦では致命的な隙である。

「箒さん!」

その隙を見逃さなかった福音は先程から脅威となっていた箒へとその光の弾丸による雨を放つ。

「箒ーっ!!」

それを一夏は自身のシールドエネルギーが尽きかけているのにも関わらず箒を庇う。

「一夏っ!!」

シールドエネルギーの不足により絶対防御が十分に機能せず、一夏は大ダメージを負い撃墜されてしまう。しかし、そこで福音の攻撃は止まない。

「二人はやらせないよ!」

そこにリヴァイヴ専用の防御パッケージ「ガーデン・カーテン」に装備された実体とエネルギーの二つのシールドで構成された複合防御壁でシャルロットが福音と二人の間に割って入る。

「くっ……」

しかし、その防御も福音の波状攻撃には耐えきれず次第にリヴァイヴはボロボロになっていく。

「もう少し、もう少しだけ耐えて！リヴァイヴ」

「シャルっ！」

そこで雪兎はバスターライフを展開し福音の注意を引く。

「くそっ！作戦は失敗だ！セシリアは箒と一夏を回収してシャルを連れて離脱してくれ！」

「ゆ、雪兎は?!」

「俺はお前らの撤退の時間を稼ぐ。どうやら福音さんは俺達をただじゃ逃がしてくれねえらしい」

「でも！」

「悪い、俺一人なら後からでも離脱できるが、皆がいちや難しいんだ。それにシャル、お前のリヴァイヴももう限界だろう?」

「雪兎……」

「それに約束したろ?お前は俺が守るって」

「シャルロットさん、ここは雪兎さんに任せましょう。今のわたくし達では足手まとい

にしかなりませんわ」

「……わかった」

セシリアの言葉もあつて、シャルロットも何とか撤退に賛同する。

「でも、絶対に戻ってきてよ!」

「ああ、俺が簡単にやられるかよ」

そう言うのと雪兎は福音の注意を引くべく福音へと向かっていき、セシリアとシャルロットは箒と箒に抱かれた一夏を連れて戦域から離脱していった。

「さてと、もうしばらくお相手願おうか、銀の福音!」

そして、雪兎の孤独な戦いの幕が上がった。

数時間後、何とか撤退を終えた一同は千冬から雪鬼の雪華の反応がロストしたことを伝えられた。

23話 少女達だけの戦場 兎、行方不明になる!?

「あの馬鹿者が……」

千冬は指令室となつている宴会場で静かに呟く。一夏が撃墜され、その後、雪兎により速やかに撤退が決断された。しかし、一夏達の撤退を支援するために雪兎は一人殿として福音の元に残った。結果的に一夏達は撤退に成功するも一夏は重傷、そして殿として残った雪兎の反応はロストしてしまった。

「ちーちゃん、ゆうくんはきつと生きてるよ」

「当たり前だ。あいつはお前の弟で、私の弟弟子で、あのバカの弟子だ。そんな簡単にくたばるものか」

そう口にする千冬からも心配はすれど雪兎を信頼しているのが感じられる。

「問題はあいつらの方か……」

「一夏……」

重傷を負い未だに目を覚まさない一夏の傍で箒は己の至らなさに、雪兎達がいなければ自分も同じようになっていたという可能性に自分を責めていた。

「私は……一夏、雪兎、お前達に救われる価値があったのだろうか……」

しかも、その雪兎は生死・行方ともに不明なのだ。セシリア達に連れられ撤退した際にそれを聞かされ箒の心は失意のドン底に叩き落とされた。紅椿を手にして舞い上がっていたばかりに幼馴染二人がこうなってしまった。そう箒が考えるのもある意味自然なことだった。

「雪兎……絶対に戻らなくて約束したじゃないか」

もう一人、雪兎のロストで落ち込む少女がいた。シャルロットである。しかし、シャルロットには疑問に思っていることがあった。

（雪兎はもしかしてこうなることを知ってたんじゃないか……）

そう思った理由は作戦会議や出撃前にやたら一夏達が失敗することを懸念していたこと。密漁船がいたことにもあまり驚いていなかったこと。一夏が撃墜されたというのに冷静に撤退の指示を出していたこと。そして……

「これを渡したのもこうなるってわかってたからなの？」

シャルロットの手にある白い剣十字のペンダント。雪兎がシャルロットに渡してい

たパーソナライズをしていないリヴァイヴを装甲切換対応機として改修したラファール・リヴァイヴ・カスタムEVOLである。本来は今日の稼働試験でシャルロットが装

甲切換を使えるか確かめるために貸し出されていたものだったが、シャルロットには雪兎がこの事態を見越していたのではないかと考えるには十分なものだった。

「僕の時も雪兎は色々知ってた。なら、雪兎は今までも色々知っていて、それに対して対策をしていた？」

そう考えると色々と納得がいく。雪兎が行っていた特訓も全体のレベルアップを図り、今回のような事態にも対処できる力を付けさせるつもりだったと推測できる。このことに気付いているのはおそらくシャルロットただ一人だろう。

「帰ってきたら聞かなきゃいけないこと増えちゃったなあ」

ならば雪兎がそう簡単にやられる訳がない。シャルロットは最も信頼する想い人から託された剣十字を握りしめ、涙を拭って立ち上がる。

「僕が、僕達がやるんだ。それで雪兎を探すんだ」

「こちらは問題なかったようですわね」

「セシリア？」

部屋を出るとそこにはセシリアの姿があった。

「シャルロットさん、わたくし達はもう一度福音の攻略に挑むつもりです。シャルロットさんはどうなさいますか？」

「愚問だよ、セシリア。僕もやる。このまま負けたままなんて雪兎のパートナーを名乗れなくなっちゃうよ。それでメンバーは？」

「ええ、鈴さんやラウラさん、それに簪さんも参加するそうですわ。簪さんは今、鈴さん

が説得に向かってらっしやいますわ」

全員雪兎が鍛えてきたメンバーだ。ならば不可能ではないはずだ。

「見せて差し上げましょう。わたくし達の力を」

「うん。僕達がやるんだ」

こうして少女達だけによる第二次福音迎撃作戦が教師達には黙って計画されるのであった。

箒の説得を終え、ラウラが黒兎隊が保有する衛星で福音の居場所を突き止めた。どうやら雪兎との交戦の後にその場にとどまり続けているらしい。

「待つてなさいよ。一夏と雪兎の借りは私が返してやるわ」

機能増幅。パツケージ【崩山】を装備した甲龍を纏う鈴。

「今度は負けませんわ」

前回同様【ストライク・ガンナー】を装備したブルー・ティアーズに乗り込むセシリア。
ア。

「私も全力でいく」

打鉄式で気合を入れる簪。

「見せてやろう、私達の実力を」

砲撃。パツケージ【パンツァー・カノニア】を追加したシュヴァルツェア・レーゲンを展開するラウラ。

「もう私は間違えない!」

二度と過ちは犯さないと誓い紅椿を出す簪。

「雪兎、力を貸して」

修復中のカスタムⅡの代わりに雪兎から渡された白いカスタムE.V.O.L.を使用するシャルロット。

「さあ、行くこう!」

少女達は自ら戦場へと向かう。少女達だけの戦場へと……

「こ、この反応は?!」

指令室で福音の様子を監視していた真耶は福音へと近付く六つの反応を感知した。

「あの馬鹿どもが……」

「あちやー、待機命令無視して行っちゃったかあ」

無断出撃で福音の元へと向かう少女達に千冬や雪菜は溜め息をつきつつも、彼女らが通信を遮断し止まるつもりがないとわかるととりあえず事態の静観を決めた。

「帰ってきたら覚悟しておけよ、小娘ども」

海上二〇〇メートルの位置で静止していた福音は何かを察知し顔を上げると、そこに超音速で飛来した砲弾が頭部に直撃する。

「初弾命中。続けて砲撃を行う」

左右に装備された八〇口径レールガン「ブリッツ」による連続砲撃が放たれ福音を襲う。ただ、福音もそれを黙って受ける訳がなく、翼のエネルギー弾で半数を落としながらラウラに接近するが。

「セシリアー！」

それをステルスモードになっていたセシリアが「スターダスト・シューター」で迎撃する。

「簪さん！ シャルロットさん！」

「任せて！ いけ【山嵐】！」

「いくよ【G：ガンナー】！」

更にそれを打鉄式式の山嵐とカスタムEVOのG装備による面制圧射撃が襲い、福音はラウラへの接近を諦め全方位にエネルギー弾を放った後、離脱を試みるが。

「させるかあ！」

海中から接近していた紅椿と甲龍が現れ砲口を倍増し、熱殻拡散衝撃砲となった龍砲が赤い炎のような弾丸を吐き出す。しかし、福音を討つには足らず、福音は再びエネルギー弾の弾幕を展開する。

「箒……つちに！ 【F：フォートレス】！」

展開装甲のエネルギー消費を抑えるべく機能を限定した紅椿をカスタムEVOL用に開発された防御パック【F：フォートレス】に装甲切換えし、備え付けられた大型シールドビット【アイギス】で守る。その防御力は【ガーデン・カーテン】のシールドを遥かに凌駕しており、要塞フォートレスの名に違わぬ堅牢さを発揮した。

「これはお返しだよ！」

そしてエネルギー弾の返礼として腰のサブアームで固定した一二〇口径大型バズーカ【グランドスラム】による砲撃を放つ。

「こつちも食らえ【春雷】」

簪も春雷の広域砲撃モードで反撃する。

「動きさえ止まれば！」

そこに鈴が双天牙月で切り込み、エネルギー弾のダメージと引き換えに福音の片翼を奪う。

「はっ、はっ……！どうよーぐつ」

片翼となった福音だが、すぐに態勢を立て直し鈴の左腕に回し蹴りを叩き込む。脚部のスラストーによる加速された蹴りは左腕のアーマーを砕き、鈴を海へと墜とす。

「鈴！おのれっ！」

激昂した簪は雨月と空裂で福音に斬りかかるが、福音は両腕でそれを掴み腕を広げ、残った片翼の砲口を簪に向けエネルギーチャージを始める。

「させるか！」

簪も紅椿を縦に一回転させ脚の展開装甲から刃を出し、踵落としての要領で福音を海に叩き落とした。

「はあ、はあ、はあ……」

「無事か!？」

珍しく慌てたラウラが駆けつけ、乱れた呼吸の簪に訊ねる。

「私は……大丈夫だ。それより福音はー」

誰もが勝利を確信するも、その瞬間、海面が強烈な光と共に吹き飛び、その中心に青い稲妻を纏った福音の姿があった。

「!? まずいーこれはー第二形態^{セカンド・シフト}移行だ!」

その姿は斬られた片翼の代わりに光の翼を生やし、腕や脚からも小さな光の翼を生やした光の天使を彷彿させる姿だった。

24話 白き騎士と白銀の翼 兎、覚醒する!?

第二形態となった福音は先程までとは違うプレッシャーを放っており、各IISは操縦者へ警鐘を鳴らす。しかし、福音は速く、ラウラが足を掴まれる。

「なにつ!？」

「ラウラ!？」

シャルロットがすぐに助けようとF装備の近接武装である先端に高周波ブレードの刃と砲口をもつ槍「ハルバートカノン」で突撃するが、福音は空いている片手でそれを受け止める。

「よせ!逃げろ!こいつはー!」

そこでラウラは福音の光の翼に包まれエネルギー弾の零距离射撃を食らい、ズタズタにされ海へと落下する。

「ラウラ!よくもラウラをつ!!」

怒ったシャルロットもハルバートカノンから砲撃を繰り返すが、福音も腕と脚の翼からエネルギー弾を放ち相討ちとなってシャルロットも吹き飛ばされる。

「あの性能……いくら軍用機と言えど異常ですわ!」

セシリアも一度距離を取って狙撃に回ろうとするが、両手足の翼を用いた瞬時加速で一気に距離を詰められ回し蹴りで海面に叩き飛ばされた。

「セシリアー！」

簪は再び山嵐による広域攻撃を行おうとするが、またしても瞬時加速で接近した福音の光の翼で砲撃され墜とされてしまう。

「私の仲間を．．．よくも！」

簪は再び福音に斬りかかり、展開装甲も使って連撃を浴びせるも途中で展開装甲の多用でエネルギー切れを起こしてしまいラウラと同様に光の翼による抱擁を受けてしまった。

(すまない．．．一夏、雪兎．．．)

少し時間は遡り、箒達が福音と交戦を始めた頃。

「うう……」

雪兎は福音との交戦に敗れ、近くの小島に漂着していた。

「……ここは……くつ、近くの小島か。運がいいやら悪いやら」

雪兎のダメージも酷いものだったが、雪華の負ったダメージはそれ以上に深刻なものだった。

「くそつ、時間的に箒達が福音とやってる頃だつてのに俺は動けないのか!？」

すると、雪華が突如輝き出す。

「これって……」

『貴方は力を求めるのですか?』

雪華から声が聞こえた。

「雪、華……なのか?」

『貴方は何のために力を求めるのですか?』

「俺は、守りたいんだ」

『何をですか?』

「世界中の全部なんて不相应なことは考えちゃいねえよ……でも、俺の手の届く範囲

を、イレギュラーであるはずの俺を、天野雪兎という存在を認めてくれたあいつらを
守って一緒に戦いたいんだ」

『マスターはイレギュラーなんかじゃありませんよ?』

「何?」

『マスターはちゃんとこの世界のここに存在しています。彼ら同様に私も貴方を認めて
いるのですから』

「雪華……」

突然の雪華の言葉に雪兎は思わず涙をこぼす。

『マスター、貴方はいくのですね?』

「……ああ、俺は戻らないといけない。あいつらだけじゃまだまだ頼りねえからな。
力を貸してくれ、雪華」

『はい!行きましょう、マスター!』

そして光が消えると雪華の姿が少し変化していた。

「これって……第二形態移行?」

そう、雪華もまた第二形態へと至っていた。第二形態となった雪華はパツクの装着箇
所等は変化していないものの、装甲の一部が多層式になっており、スペックも大幅に上
昇しており、更に単一仕様能力まで発現していた。

「単一仕様能力【エクストリーム極限化】だと？またピーキーな能力発現しやがって……」

その能力はかなりとんでもないものだった。

「奥の手つてとこだな、こいつは。さてと、そろそろいくぜ、相棒！」

一夏と違い怪我は治ってはいないが、雪兎は最低限の応急処置を済ませると新しくなった雪華を纏い、福音の元へと向かった。

雪兎が福音の元へ辿り着くと、既にこちらも第二形態へと至った白式・雪羅を纏った一夏が福音と対峙していた。

「グッドタイミングってやつか、これは？」

「ゆ、雪兎!？」

一夏に続いて雪兎まで現れ、箒は涙を堪え切れなくなっていた。

「お前も第二形態移行したんだな？」

「ああ、お前も随分とピーキーそうにバージョンアップしてるじゃねえか？」

すると、一夏は箒の方を見てから言う。

「雪兎、少し任せていいか？」

「なるほど、そういうことか。少しだけだぞ？お前と違って俺はあんましダメージ回復してねえんだ」

「悪い、すぐに戻る！」

そして一夏は箒の元へと向かった。

「よお、福音さんよ。さっきの借り、返しにきたぜ」

先程は一夏達が撤退後〔W・ウィザード〕で交戦し撃墜されたため、雪兎は再び〔J・イエーガー〕を展開していた。

「第二形態になったのはお前だけじゃないってのを教えやるよ！」

瞬時加速で迫る福音を雪兎は〔J・イエーガー〕の機動力だけで回避すると二つになった砲口を持つバスターライフルを福音の背中に向ける。

「こいつは前とは一味違うぜ？」

双発となったバスターライフル、バスターライフル改が火を噴き、福音を吹き飛ばす。

「やっぱ改ともなると威力がちげーわ」

何とか光の翼で防御したものの、福音はその威力に雪兎の警戒レベルを上げる。

「俺を警戒すんのはいいんだけどよ……後ろも気にした方がいいぜ？」

そんな福音の背後から一夏が雪片式型を片手に斬りかかる。間一髪のところ福音は回避するが、続けて左腕に追加された雪羅のクローモードで切り裂き福音にダメージを与える。

「待たせたな！」

「ほんとにピーキーそうだな、それ」

「荷電粒子砲に零落白夜のシールドとクローの複合兵装【雪羅】だ」

「ピーキー過ぎる……」

「そういうお前のそれ、砲口が二つになってないか？」

「砲口だけじゃなくて分離して二丁にもなるぞ」

そう言ううと雪兎はバスターライフル改の下にある小型のバスターライフルを分離させ両手で構える。

「小型は連射が効いて、大型の方は今まで通りよ！」

一夏に説明しながら小型の連射で牽制しつつ、大型で福音にダメージを与える雪兎。

「こっちも忘れんなよ！」

ついでとばかりに一夏も荷電粒子砲を放つ。これには堪らず福音は再びエネルギー弾の掃射を開始する。

「もうそいつは食らわねえ!」

だが、零落白夜のシールドを得た一夏にエネルギー弾が通用する訳もなく、掃射を防ぐと四基に増設し大型化したスラストダブル・イグニッションによって二段階瞬時加速が可能になった白式が福音に迫る。

「瞬時加速が使えんのは白式だけじゃねえぞ!」

雪華の「J:イエーガー」もウイングバインダーが大型化しており、翼を広げた雪華も瞬時加速で福音の背後へと回り、腕部にマウントされたビームブレードを展開し、一夏と共に斬りかかるが、福音は光の翼を繭のように丸めて自身を包む。

「雪兎っ!」

「わかってる!」

その福音の行動に嫌な予感がした二人は攻撃を中断し距離を取る。すると福音は翼を回転しながら開き、全方位にエネルギー弾を撒き散らす。その範囲内には回復しきっていない鈴達の姿があり、一夏はそれを庇おうとするが。

「それは僕の役目だよ!」

態勢を立て直したシャルロットがアイギスを展開し、それを防ぐ。

「一夏、こっちは僕が何とかするから！雪兔と一緒に福音を！」
「わかった！」

「雪兔にはこれが終わったら色々聞きたいことがあるから！」

「話せる範囲なら答えてやるよ！」

「今度こそ約束だからね！」

「ああ、もう約束は破らねえよ!!」

鈴達の心配が要らなくなり、一夏と雪兔は再び福音へと向かった。

(一夏が駆けつけてきてくれた・・・雪兔も戻ってきてくれた)

それだけで箒は嬉しさを飛び越え、胸が熱くなるのを感じた。そして、戦う二人を、いや、一夏を見て箒は何より強く願った。

(私は、共に戦いたい。あの背中を守りたい!)

その願いに呼応するかのように紅椿の展開装甲から黄金の粒子が溢れ出す。

「これは……!?!」

それは単一仕様能力【絢爛舞踏】展開装甲を通じエネルギーバイパスを形成、溢れ出すように回復したシールドエネルギーを接触した機体にも分け与えることのできるというとんでもない能力だった。

「まだ、戦えるのだな? 紅椿……ならば、行くぞ! 紅椿!」

紅き椿は再び飛翔する。未だ戦っている幼馴染の元へと。

「くっ、きりがない」

一夏は何度も福音の光の翼を零落白夜で切り裂いているが、二撃目は毎度かわされ、斬られた翼はすぐに再構築されてしまう。雪兎も同様で、バスターライフル改で翼を撃ち貫くもすぐに再構築されてしまうため、二人のISのシールドエネルギーは既に二割を切っており、稼働時間も残り少なくなっていた。

(ちっ、これじゃ奥の手も使えねえ)

福音のエネルギー残量がわからず、このままではエネルギー切れになってしまうと、二人が焦燥にかられる中、金色の光が二人に近付いてきた。

「一夏！雪兎！」

「箒?!」

それは戦線に復帰した箒だった。

「ダメージはいいのか？」

「私は大丈夫だ。それより二人共、これを受け取れ！」

そう言っつて二人のISに紅椿が触れると凄い勢いでシールドエネルギーが回復していく。

「箒、それがお前の単一仕様能力か？」

「ああ、これが私と紅椿の力だ」

「これなら俺も奥の手を出せる!」

「奥の手? まさかお前も!」

「そのまさかだ。一夏、俺が隙を作る。だから最後はお前が決める! いくぜ、相棒! 【極限化】 起動!!」

その瞬間、雪華の装甲が展開していき蒼い粒子を纏う。

「それは、展開装甲!」

「フルドライブ!」

そして、今までとは比べものにならない速度で福音に迫るとすれ違い様にビームブレードで切り裂き、それを繰り返す。その姿はあまりにも速く、粒子を放出しながら行うせいか残像すら見え、また再構築が間に合わず福音は徐々に光の翼を失っていく。

「一夏っ!」

「おとおおおっ!!」

光の翼を完全に失った直後、一夏は最大加速で零落白夜の刃を福音の腹部に突き刺しシールドエネルギーを削り切る。エネルギーを失いISのアーマーが消失し、操縦者と思われる女性がISスーツ姿で残され、それを極限化を解いた雪兎が無事に受け止め、箒にその女性を預ける。

「終わった、のか？」

「ああ、俺達の勝ちだ」

長い戦いが終わった。

「雪兔っ！」

すると、雪兔の元にシャルロットが駆けつける。

「シャル、か……」

「心配したんだからねっ！つて、雪兔？」

そこでシャルロットは雪兔の様子がおかしいことに気付く。

「す、まん……ちよつ、と、無理、しす、ぎた、みたい、だわ……後、は、任せ、た」

極限化の超加速で応急処置をしていた傷が開いたのか、雪兔は気を失い雪華も消失してしまう。

「ゆ、雪兔!?!」

すぐさまシャルロットがそれを受け止めるが、雪兔の怪我はとてもじゃないが戦闘などしていいものではなかった。

「は、速く戻らないと!!」

こうして福音の暴走事件は幕を閉じた。旅館に戻った一同を待っていたのは救護

チームと怒りのオーラを纏った千冬であり、大怪我をしている雪兎を除くメンバー全員はそのお説教と学園に帰ってからの懲罰用トレーニングと反省文というお決まりの罰だった。

25話 語られる秘密と告白 兎、暴露する

「……知らない天井だな」

目覚めて早々元の台詞とは少し違うが転生者がよく使うテンプレの台詞を口にする雪兎。やはりこの手の場面になれば言ってみたい台詞なのだろう。

「ここは病室？つてことはあの後すぐに移送されたのか。それはさておき……」

あれだけの無茶をやらかしたのだ。病室送りの妥当と言ったところだろう。そこで雪兎はあることに気付いた。

「何でシャルがここにいるんだ？」

見れば眠っていた雪兎の足元の辺りにもたれ掛かるようにシャルロットが眠っていたのだ。

「……ん、あれ？僕いつの間に……」

「おはよう、シャル」

「おはよう、雪兎……えっ？雪兎？」

「おう、心配かけたな」

目を覚ましたシャルロットは雪兎が起きているのを知ると目に涙を浮かべながら雪

兎に飛びついた。

「雪兎ーっ!」

「うごっ!」

「雪兎! 夢じゃないよね!?! ほんとに雪兎だよね!?!」

「シヤ、シヤル……苦し、い……それに、傷に、響く……」

雪兎がそう言いながら懸命にタップするとシヤルロットは慌てて雪兎を解放した。

「ご、ごめん! あれから3日も寝たきりだったから、つい……」

「3日か、それは心配かけたな」

あれから雪兎は3日も寝ていたらしい。それは確かにシヤルロットでなくとも心配になるだろう。

「そ、そうだよ! 僕、物凄く心配したんだからねっ!」

それはもう、毎日千冬の懲罰用トレーニングメニューをこなした後に病室に来る程だ。ちなみに雪兎への罰は目を覚ましてから一週間の病室軟禁である。

「すまん、これからはこういうのはなるべく控えるよ」

「なるべく? 控える?」

「あつ、いえ、ないよう努力します!」

そう言わせるだけの何かがその時のシヤルロットにはあった。

「まったく、これは僕がすっかり見張ってないと安心できないよ」

「信用ねえな、俺……それはそうと、何か聞きたいことがあったんじゃないのか？」

そこで雪兎は福音戦の時にシャルロットが言っていたことを思い出す。

「うん……雪兎、雪兎は今回のこと、こうなるって知ってたよね？」

「気付いたか」

「うん、僕の時も雪兎は情報源は明かせないって言ってたけど、僕のこと詳しく知ってた。だから気が付いたんだよ」

「これで二人目だな、気付かれたの」

実は雪兎は何れ誰かにバレるのを覚悟していた。その上で気付かれた以上はシャルロットにも事情を話すことを決めた。

「他にも気が付いた人がいたの!？」

てつきり自分だけだと思っていたシャルロットは雪兎のその言葉に酷く動揺していた。

「束さんだよ。まあ、「聞いちゃったらつまらないから聞かないけど」とか言って詳しくは聞いてこなかったがな」

「な、なるほど……」

束であれば納得だと、シャルロットは落ち着きを取り戻す。

「聞きたいって言うんなら話すが、結構無茶苦茶な話だから信じるか信じないかはシャルに任すわ」

「う、うん……」

そしてシャルロットは予想もしていなかった雪兎の秘密を知る。

「説明が難しいから簡単に結論だけ言うのだな。俺、実は転生者ってやつなんだわ」

「転生者？それってよく創作とかであるあの転生？」

「そつ、俺は一回別の世界で死んで、こつちの世界で天野雪兎として生まれ変わったつてことだ」

「そ、それと今回や僕のこととどういう関係が？」

転生のことはとりあえず置いておいて肝心な雪兎がそれらのことを知っていた件の説明がまだだ。

「こういうのはちよつとシャル達には申し訳ないんだが……」

そう前置きして雪兎が口にしたのは転生よりもとんでもないことだった。

「前の世界にな、この世界を題材にした小説ライトノベルがあつたんだよ。『ISヘインフィニット・ストラトス』ってタイトルの小説がな」

「えっ？」

これにはシャルロットも驚いた。無理もない。まさか自分たちの世界が小説の世界

だった、などと言われているいそうですかと言える訳がないのだ。

「その舞台がIS学園で主人公が一夏だった。俺はそれを読んでたからある程度のごことは知ってたんだ。つて言っても俺というイレギュラーが増えて細かいところは大変わかってるけどな」

「それが……雪兎の秘密？」

「ああ、これが俺の秘密だ。話したのはシャルが初めてだがな」

あまりの内容にシャルロットが絶句していると雪兎は少し寂しそうな顔をする。

「やっぱ信じられないよな？こんな話。それに、俺は結局一夏を見殺しにしかけたんだ。そんな俺が仲間面とかおかしいよな」

「そ、そんなことないよ！」

そんな雪兎を見てシャルロットは何故か物凄く腹が立った。

「そんなことない！雪兎は知ってたから皆が立ち向かえるように皆を鍛えてたんでしょ！色々対策を練ってたんでしょ！」

「シャル……」

「僕のことだつて本当は別のやり方があったんだらうけど、雪兎は僕のこと助けてくれたじゃないかつ！」

雪兎は驚いた。シャルロットが今にも泣きそうな顔で必死にそう言ってくれたから

だ。

「あんまり僕を見くびらないで欲しいよ、雪兎。僕はそんなことで雪兎を嫌いになんかなれないよ……僕はそんな雪兎も引つ括めてもう大好きなんだからっ!!」

そして、さらつとシャルロットは更なる爆弾を投下した。

「えっ?」

好意を寄せられていたのは知っていたが、まさかここで告白されるとは思つてもみなかった。むしろ、雪兎は先程の話で嫌われるとすら思っていたのだが、恋する乙女にそんな細かいことは関係なかったのだ。

「雪兎は僕のこと嫌い?」

その聞き方は狡いと雪兎は思った。こんな聞き方をされて嫌いだと言える訳がない。

「あー、もう降参だ、シャル。だからそんな捨てられた仔犬みたいな顔はやめてくれ」

「……まだ雪兎の返事聞いてない」

今日のシャルロットはいつになく積極的だった。

「好きだよ。俺も……」

雪兎は観念した。この娘にはおそらく一生、いや生まれ変わつても勝てないな、と。

「シャル、いや、シャルロット。こんな俺と付き合ってくれるか?」

「うんっ!」

その時のシャルロットの表情は今ままで一番輝いて見えた。

「覚悟してよね、雪兔。僕は結構独占欲強いし甘えん坊でしつこいよ?」

「問題ねえよ。シャルこそ覚悟しとけよ。俺は恋愛経験なんざねえから加減できねえからな」

こうして二人はどうとう付き合うこととなったのだった。

五章「兎とシャルと夏休み」

26話 二度目のデート!ミックスベリーは恋の味?

兎、シャルとデートする

一夏達の懲罰用トレーニングメニューも終わり、雪兎も一週間の病室軟禁を終え退院。休み前の中間テストも終わり、終業式を終え、IS学園は夏休みに入った。それぞれ国に帰省する生徒もいるため寮に残った生徒の数は割りと少ない。寮に残っている生徒はそれぞれ事情があつて帰省していない生徒や日本でも家が遠く帰り難い生徒がほとんどだ。

そして、雪兎の周りとはというと……

箒は重要人物保護プログラムの関係で引越してばかりだったため帰省する意味がなく、セシリアやラウラは代表候補としての仕事があるため少ししたら帰省するそうだ。鈴は帰省することを止め寮に残るらしい。簪はまだ姉との関係がギクシヤクしているため彼女も帰省せずに残るそうだ。本音は簪が残るため自分も残ると言っているらしい。聖は実家が遠いので帰省は延期だそうだ。一夏と雪兎は実家が近いため一度

帰省するという。最後にシャルロットは実家のデユノア社が例の件で大慌てな状況なため帰省は任意で構わないと言われているため今は帰省せずに寮に残っている。

一夏の家に程近い雪兎の実家の前に妙にソワソワしたシャルロットの姿があった。

(今日は家にいるって言ってたよね?)

雪兎も既に両親が他界しているため雪菜と二人暮らしなのだが、雪菜が代表候補生だった関係上、雪兎の家も割りと立派だったりする。

(か、彼女だもんね。彼女が彼氏の家を訪ねるのは普通だよね?)

先日正式に雪兎と付き合うことになったシャルロット。そのことは雪兎が退院した

翌日にはクラスはおろか学園中の噂になっていた。それで一夏ラバーズがかなり慌てた(特に幼馴染二人)のだが、その話は何れ機会がある時にしよう。

(で、でも、雪兔には今日いくって言ってないし……)

迷惑にならないだろうか?などとシャルロットが考えていると。

「ん?シャルか?どうしたんだ、こんなところで」

「えっ?」

後ろから雪兔の声がした。

「ゆ、雪兔?」

「よっ。来るなら連絡してくれば良かったのに」

「ど、どど、どうして、雪兔が後ろに!」

「いや、家に食材とかの備蓄無かったからちよつと買い出しにな。にしてもどうしたんだ?」

「う、うん、雪兔が帰省するって聞いて、雪兔の家ってどんなの何だろうって思って、したら雪兔に会いたくなっちゃって……来ちゃった」

この娘。相変わらず男がやられたらドキツとする仕草が妙に様になっている気がする。雪兔もそんなこと言われて内心悶えていた。

「そ、そうか。上がってけよ。外、暑かったら?」

「う、うん」

色々と悩んではいたが、雪兎の思わぬ登場でシャルロットは当初の目的である雪兎の家に上がることに成功した。

「その辺で適当に座つててくれ、今飲み物出すから」

「うん」

居間に通されたシャルロットは置いてあるソファ―に腰かける。

「悪いな、麦茶くらいしか冷たいのなくて」

「ううん、気にしないで。僕がいきなり来ちゃったからなんだし」

「すごいやシャルは帰省しなかったんだな？」

「うん、帰ってもお母さんのお墓参りぐらいしかすることなくてね。そつちは次の長期休みに行くつもり」

「そうか、その時は俺も一緒に行つていいか？シャルのお母さんにも挨拶したいし、何よりシャルの育つた場所を見てみたい」

「うん！その時は一緒行こつ！」

そんな約束を交わし、その日は二人で雪兎の家で過ごした。なお、その際に雪兎が作つた昼食を食べ、シャルロットが改めて料理の勉強をしようとしたんだとか。

その翌日。二人はデートしていた。どうも駅前のデパートで秋物の服が出始めているらしく、先取りして買って置きたいと言うシャルロットに連れられる形ではあったが、雪兎もシャルロットと出かけるのは嫌いではなかったので問題はなかった。

「ごめんね、この前ラウラと服を買いに来たときはラウラのばかり買っちゃって僕のはあまり買えなかったんだ」

「ラウラって、やっぱ私服とか全然持つてねえの?」

「うん、パジャマすらもね・・・」

「なるほど、俺が同室だからやってねえけど、一夏が一人部屋だったら確実に潜り込んでいるな。その格好で」

「そういう知識もやっぱりアレで？」

「まあな、二人が買物行ったエピソードもあつたからな」

秘密を暴露して以来、雪兎は時々こういう話をシャルロットにするようになった。それはシャルロットが雪兎が無茶しないように知識を共有したいと言い出し、大きな事件などは覚えている限りシャルロットに伝えてある。だが、日常的なエピソードはこういう時だけ口になっているのだ。

「一応、確認なんだが、@クルーズって店で昼食取つた？」

「そこもお話になってるんだね……って、ことはその後のことも」

「メイドと執事の衣装着てバイトして強盗撃退したことか？」

「やっぱり知ってたんだ……」

これは結構シャルロットにとつて苦い思い出だったので雪兎に知られていたのは少しシヨックだった。

「……俺はメイド服のシャルを見て見たかつた」

「えっ？」

「いや、あそこの制服ってクラシックタイプの正統派のメイド服だから結構好きでな」

「ミニスカメイドより？」

「あれは何というかメイドじゃない気がしてならないんだ」

雪兎の意外な好みが発覚した。

「それに、そんな衣装着たシャルを他の男に見せたくない」

「ゆ、雪兎……」

そして、またしても雪兎の不意討ちが炸裂し、シャルロットは顔を真っ赤にする。

「面白いやクレープは食ったのか?」

「クレープ?それは食べてないかな」

「ここで細かな違いが出ていることがわかる。」

「そうか、なら後で行くか」

「そのクレープ屋さんに何かあるの?」

「ああ、女子が好きそうなおまじないがな」

それ以上は雪兎は語らなかった。

服の買い物を終え、二人は@クルーズとは別のカフェで昼食を取ることにした。@クルーズは以前のことでもあつてシャルロットとしては入り辛いらしい。

「このパスタ、結構美味しいね」

「そうだな、つと、シャル、顔にソースついてる」

「えっ?どこどこ?」

「じつとしてろ。とつてやるから」

そう言うとき雪兎はシャルロットの頬についていたソースを自分の指で拭い、それを自分で舐めとる。

「な、なな、な・・・」

「あつ、すまん、つい」

「う、ううん!ありがとうございます!」

なんとも恋人っぽいやり取りにシャルロットはまた顔を真っ赤にする。

「・・・ちよつと御手洗いに行つてくる」

それは雪兎もだったらしく、雪兎は恥ずかしさからか少し席を外す。

(いいなあ、こういうの。恋人になったって実感がするよ)

付き合う前からそうではあったが、この二人。かなり甘々である。

「聞いた?城址公園のクレープ屋さんの話」

すると、シャルロット的には聞き逃せない話題を隣のテーブルの女性達が始めた。

「聞いた聞いた。そのクレープ屋さんでカップルでミックスベリーのクレープを食べると幸せになれるって話でしょ?」

「でも、いつも売り切れらしいのよねえ」

(雪兎が言ってたクレープ屋さんって、もしかしてこのクレープ屋さん?)

雪兎は「女子が好きそうなおまじない」と言っていたので間違いないだろう。

(雪兎もそういうの気にするんだ)

シャルロットはまだ知らなかった。「いつも売り切れ」というミックスベリーの秘密を。

シャルロットの推測通り、雪兎が行こうとしていたクレープ屋は城址公園のクレープ屋であった。

(やつぱりあのおまじないのクレープ屋さんだったんだ)

シャルロットはそれを知り、今日はミックスベリーは残ってないかなあ、と胸を弾ませてクレープ屋へと向かう

「すいませーん、クレープ二つください。ミックスベリーで」

「何だ、その噂もう知ってたのか」

「さっきのカフェで話してるのが聞こえてね」

しかし、店主である二十代後半であろう無精髭ながら人懐っこい顔の男性は申し訳なさをそうに言う。

「ああー、ごめんなさい。今日、ミックスベリーはおわっちゃったんですよ」

「あ、そうなんですか。残念だなあ」

だが、そんなシャルロットを見て雪兎は笑みを浮かべると店主に注文をする。

「なら、イチゴとブルーベリーを一つずつ」

すると、店主も雪兎の顔を見て含み笑いをしながら注文を受けた。

「ここは俺が奢るから機嫌直せって」

明らかに残念そうにしているシャルロットに雪兎はイチゴのクレープを差し出す。

「うん……あつ、このクレープ、美味しい」

ミックスベリーを食べられなかったのは残念だったが、そのクレープは絶品だった。

「だろ?こつちも食ってみろよ」

そう言つて雪兎は今度は自分のブルーベリーのクレープを差し出す。

「う、うん……こつちも美味しい」

間接キスっぽくて少し恥ずかしかったが、ブルーベリーのクレープも美味しいかった。そして雪兎はシャルロットにある種明かしをする。

「どうだ?ミックスベリーのお味は?」

「えっ?あーっ!ストロベリーとブルーベリー!?!」

そう、あのクレープ屋にミックスベリーというメニューは元から存在せず、ストロベリーとブルーベリーを二人で分け合つて食べるからこそ「幸せのミックスベリー味」の噂の真相だったのだ。

「そ、そういうことだったんだあ……すっかり騙されたよ」

「ははっ、ただミックスベリーを食べるだけで幸せとかじゃ雰囲気出ないだろ?だからこんな噂が生まれたんだと思うぜ」

きつとこれを思い付いた人はロマンチストだったのだろう。

「それにあの店主、メニューにないミックスベリーを売り切れつて言つて誤魔化してるから真相を知ってるのは注意深く店を確認してるやつくらいだろうな」

先程の店主の含み笑いはそういう意味だったのである。

「それはそうと、俺にもミックスベリー食わせてくれないか？」
「うんっ！」

そして二人は発案者の思惑通りに二人でクレープを分け合って幸せそうな顔をして
いた。

27話 とある夏の織斑家の食卓 兎、幼馴染達を焦らせる

これはとある夏休みの1日のことだ。

その日、雪兎の家に再びシャルロットが訪れていた。今回はちゃんと事前に連絡を入れており、前回のような入れ違いは発生しなかった。

「そろそろ昼か、今日はどうする？また俺が作ろうか？」

「雪兎に作ってもらってばっかじゃ申し訳ないし……そうだ！雪兎、僕に料理教えてくれない？」

前回、雪兎の料理の腕に自身の女子力に危機感を抱いたシャルロットはせっかく手本のなる人が目の前にいるのだから教えてもらおうという結論に至ったようだ。一緒に料理もできるし、雪兎の好みも知れる良い機会でもある。

「俺でいいのか？料理ならあの主夫（旦那）の方が上手いぞ？」

「僕は雪兎に教えて欲しいの！わかるでしょ？」

「……何か付き合うようになってからシャルotteって結構積極的だよな」

「だめ？」

「だからその眼はやめろ、それは俺に特攻だぞ！」

すつかりシャルロットに攻略されてしまっている雪兔。やはりシャルロットは手強い。一夏ラバーズがシャルロットが雪兔狙いでどれだけ安心したことか。

「教えるよ。それだと食材が足りないな・・・買い出し行くか？」

「うん」

そして雪兔とシャルロットは近くのスーパーまで買い物に行くことにしたのだが・・・

「何故わたくしに料理をさせていただけませんの！」

スーパーにやってくる、どこか聞き覚えのある声が出た。

「またやらかしてやがんのか、あいつら……」

「みたいだね」

そこには以前より改善したとはいえ料理下手なセシリアを宥める一夏達の姿があった。

「そうか。今日だったのか、あれ」

「あつ、これも読んだことあるお話なの？」

「ああ、ちよつと時間が夕食と昼食って違いはあるが誤差の範囲だろうな」

そう、これは原作四巻であった「恋に騒がす五重奏」もしくはアニメのアンコールディスク「恋に焦られる六重奏」のエピソードだろう。

「どうするの？」

「ほつといても気付かれるだろうし、こっちから出向くか……セシリアは流石に放置できん」

セシリアは放っておくと以前のようなことをやりかねないと懸念し、一夏の胃袋のためにも加勢することを決めた。

「悪いな、せつかく二人つきりだったのに」

「ううん、それはまた今度でも大丈夫だよ。それより僕もセシリアを止めないとマズイ気がするよ」

セシリアの料理はそれだけの飯テロ（意味は本当にテロである）をやらかした前科があるのだ。

「おい、お前ら。もう少し静かに買い物できんのか」

「おつ、雪兎か！良いところに。雪兎もセシリアを止めてくれ」

「わかつてる。セシリア、お前、またOHANASHIされたいのか？」

雪兎のその言葉で騒いでいたセシリアが動きを止め、ゆっくり油を注していないポットののようにギツギツと雪兎の方を振り返る。

「ゆ、雪兎さん．．．それに、シャルロットさんも．．．何故ここに？」

「僕達もお昼ご飯を作ろうと思って買い物に来てたんだけ」

「そういえばシャルロットは雪兎の家に行っていたのだったな」

そこでシャルロットと同室のラウラが納得したとばかりに手をポンつと叩く。

「ほんと、あんた達ラブラブよね．．．」

呆れたようにそう言う鈴だが、内心は滅茶苦茶焦っていた。まだ知り合って半年も経っていないのにあつさりと呼き合い始めたこの二人の進展具合を見て長年幼馴染をやっているのに一夏を攻略できていないことに鈴は最近焦りを感じ始めていたのだ。

「二人揃って買い物なんて．．．まるで夫婦だな」

「ふ、夫婦だなんて．．．」

箒の言葉で顔を赤らめるシャルロットに箒もまた鈴同様に焦りを感じていた。

(「やっぱり一夏を攻略するにはあいつ雪兎を味方に引き入れるしか・・・」)

一夏の幼馴染同士とあつてか、二人の心境は似たようなものだった。

「ほんとお似合いだよな、お前達は・・・俺も彼女欲しいよ」

そう呟く一夏だが、今周りにいる四人の誰かに「付き合ってくれ」と言えば即OKが出るなどとは思っていないのだろう。だからこの唐変木は・・・。ちなみに、今の「彼女欲しい」発言はラバーズ達にもちゃんと聞かれており、「我こそは！」と闘志を燃やしている。

「ほんと一夏つてたまにわざとやってるんじゃないかって思う時があるよね・・・」

「その台詞、今聞くことになるとは思わなかったわ」

先のシャルロットの台詞は原作だと学年別トーナメントの後に一夏がやらかした後に言われる台詞である。

「前にも言ったよ?その時、雪兎はいなかったけど」

やはり一夏はやらかしていたようだ。

「はあ・・・さてと、お前はどうぞ夕食の時間くらいまで一夏ん家に居すわるつもりなんだろ? ついでだ、夕食の分の食材も買っていったらどうだ?」

「いいアイデアね、雪兎!」

「うむ。流石だな、雪兔」

雪兔の提案は渡りに船と幼馴染の二人がグツジョブと内心雪兔を褒め称える。

「セシリア、お前は俺が監視する。前みたいなことやってみろ……どうなるか、わかっているな？」

「は、はいっ！」

以前、セシリアの料理のあまりの酷さに堪えかねた雪兔が指導した時にセシリアは色々やらかしており、その際に受けた制裁はセシリアにとってトラウマレベルで身に染みんでいた。

「雪兔の料理か、嫁やシャルロットからある程度聞かされてはいたが」

「俺なんてその主夫には劣るつての。俺は精々自炊できる程度だつて」

そうは言うが、雪兔の料理の腕は店を開ける程度にはあり、それを知る筈達からすれば謙遜もいいところである。本当に一夏と雪兔の家事能力は下手な女子など比較にならないレベルであり、何人もの女子が自らの女子力と比較し絶望したことから。

「でも雪兔が参加してくれるなら色々と安心だな」

「そうか？でも、一夏の家のキッチンで全員は料理できないだろうし、昼食は女子に任せ俺達男子はそのフォロー。夕食は俺達二人が作るつてのはどうだ？」

「それいいかもな。流石は雪兔」

この雪兎の提案に女子達全員は再びグツジョブを送るのだった。

「よし、全員作りたいメニューを教えてください。料理が被らないよう調整したり必要な食材の計算とかしたいからな」

雪兎の参戦で混迷に陥りそうだった織斑家の食卓の平和は守られるのであった。

何度か雪兎自身も言っているが、一夏と雪兎では料理の腕自体は一夏に軍配が上がります。しかし、それが教えるとなると評価は一変し雪兎に軍配が上がる。学園でのISの特訓などの指導がいい例だろう。教え方は初心者でもわかり易く、言われた通りに調理すれば並みの女子よりは上手く作れる程だ。

「さて、食材も揃ったし始めようか」

ちなみに、セシリアが買おうとした使用用途不明な調味料や隠し味に使おうとしていただるう食材は全て雪兔によって徹底的に除去されている。セシリアは不満そうだったが雪兔の一睨みで沈黙した辺り、彼女が雪兔をどれだけ恐れているかがわかる。それほど雪兔の制裁がトラウマだったのだろう。

「調理を始める前に言っておく。料理は愛情などとよく言われるが、それは最低限の腕前があつて始めて通用する言葉だ。間違つても「最初に口にして欲しいから」と味見をしないことでも、「隠し味に」などと入れてどうなるかもわからないものを入れることでもない」

織斑家のキッチンに整列させられた女子達に雪兔が口にする言葉は約一名、セシリア・オルコットに深く突き刺さっていた。

「料理本の写真の通りにならないのも、これはプロが美味しそうに見えるよう素材を厳選し、プロの腕前で調理したからできるものであり、見よう見まねで作ったやつに全く同じものが作れる訳じゃない。それだけは心に留めて調理をしてくれ」

明らかに雪兔の言葉はセシリアを狙い射ちしにきている。本当に以前何をやらかしたのだろうか？まあ、雪兔はよほどのことがなければ優しく丁寧に教えてくれるので他の四人は思ひ思ひの料理を作っていく。

「雪兔、これはこんな感じでもいいの？」

「ああ、そんな感じだ。あと、油を使う時は慎重にな？周りに人がいる時は特に油が跳ばないようゆつくりと低い位置から入れるんだ。手に油が跳ぶのが怖いなら菜箸かトングを使うといい」

「うん、ありがとう」

「どう致しまして、っと！」

シャルロットに指導していた雪兎は突然どこから取り出したのか果物ナイフをセシリアの手元に当たらないギリギリのところに投擲する。

「おい、セシリア。お前、今何をしようとした？」

セシリアが手を伸ばそうとしていたのは元々織斑家にあつたタバスコの瓶だった。

「お前が作ろうとしているハッシュドビーフにそれは不要だと俺は言つたはずだよな？」

「も、申し訳ありません！」

怒る雪兎のオーラがとてもではないがセシリアに反論を許さない。

「見事な投擲技術だ。あれも今度教えてもらおう」

一方のラウラはその雪兎の投擲技術に感心していた。先程の雪兎の投擲はラウラから見ても取り出してから投擲するまでに一切の無駄がなく狙いもかなり正確だった。

「ノールックであれとか中学の時より腕上げてるわね……」

鈴はその投擲技術に戦慄している。どうやら中学時代にも果物ナイフでこそないものの、投擲はかなりの腕前だったようだ。

「調理前に言ったことをもう忘れたのか？ 見ていないからなどと余計なことはするな、いいな？」

「は、はひっ！」

こうして雪兎の監視下の元、セシリアは一切余計なことはできなかつた。やろうとする度に果物ナイフが飛んでこれば誰でも諦めるだろう。

そして、全員の料理が完成した。

「何とか無事に全員完成させれたな」

「約一名、部屋の隅で震えてるやつがいるがな」

結局、あれからセシリアは諦めるまでに数回雪兎の投擲を放たれ、盛り付け後に部屋の隅で恐怖からガタガタ震えていた。本当に以前の指導で雪兎は何をしたのやら。

（（雪兎の前では絶対に料理で余計なことはしないでおう））

それを見て女子達が学んだのはその一点だった。

「そんじゃ、一夏、試食を頼む」

「お、おう。雪兎監修ならよっほど大丈夫だろうけど」

それぞれが作ったのは・・・

箸がカレイの煮付け、セシリアがハッシュドビーフ、鈴が肉じゃが、シャルロットが唐揚げ、ラウラがおでん（マンガ）である。何れも原作のものとは完成度が違った。特にラウラのおでんなどはマンガで見まんまではあるものとても美味しそうだった。特セシリアのハッシュドビーフも普通に美味しそうな程だ。あのセシリアにまともな料理を作らせた雪兎の指導力は確かに本物だ。

「うん、どれも旨いな。これなら全員いい嫁さんになれると思うぞ」

「良かったな、主夫のお墨付きだぞ？」

その言葉に女子達は揃って安堵したのだった。

28話 とある夏の織斑家の食卓 兎、そして主夫の実力

「騒がしいと思つたらお前達か」

一夏による料理の試食が済み、全員で昼食にしようとする。寮長の関係上、滅多に帰つて来なかつた千冬が帰宅した。

「千冬姉お帰り。お昼は？まだなら今皆で作つたところだから一緒にどうだ？」

「そうだな、せっかくだ。少しいただこうか」

ここにまた原作とは違うことが起きた。

「作つたのは箒達だけど雪兎が指導してくれたから皆旨いぜ」

「ほう、雪兎がか。それは期待できそうだ」

ここにきて一夏ラバース最大の障害とも言える千冬がそれぞれの料理を評価することになった。しかも雪兎の指導でハードルがかなり上がったと見える。

((((どうしてこうなった!))((

女子達の内心はそんなところだった。

「カレイの煮付けに肉じゃが、唐揚げにハッシュドビーフ、そしておでんか・・・おで

んはラウラ、お前だろう?」

「はっ、その通りであります!」

一発でラウラがおでんを作ったのが見破られた。

「このカレイの煮付けの味付けは篠ノ之か。それと肉じゃがは凰だな?」

煮付けの味付けに覚えがあつたのか箸が作つたのを見抜き、鈴の性格もよく知つてるため、肉じゃがの食材の切り方から鈴のものであると気付いたようだ。

「この唐揚げはデユノアだろう? 雪兎のよく作る味付けだ。となるとこのハツシユドビーフはオルコツトか」

流石は世界最強のIS操者にして主夫一夏の姉。誰が何を作つたのかあつという間に看破してみせた。

「流石は千冬さん、お見事です」

「雪兎が手を加えてはいるだろうが、全員十分合格圏内だ。誇つていいぞ、小娘ども」
「!!!!!!」

千冬からの思わぬ好評価に女子達は驚きながらも喜んだ。

「まあ、この二人はある意味で別格だ。普通的女子じゃ比較対象にもならん。だが、研鑽を怠るなよ?」

「!!!!!!はっ!」

その後、全員で昼食を食べ、千冬は用事があるからとまた出掛けていった。

「こりや、気を利かされたな」

「みたいだね。箒達も大変だね」

雪兔とシャルロットは用事があるというのは嘘で箒達が千冬がいると落ち着かないだろうと気を遣ったのを見抜き、二人で微笑み合った。

「さて、夕食まで時間あるし、何かゲームでもしないか？」

一夏の提案に全員が賛同し、雪兔がどこから取り出したのか、某ゲームキャラクター達がボードゲームで色々競うパーティー系ゲームをゲーム機本体ごと取り出し、皆でプレイする事になった。

「あつー！そこでそうくるの!？」

「ふふ、この手のゲームはこうした方が有利なのだよ」

「ちよつ!?!ここでこのゲーム!？」

「あつ、これ俺が得意なやつだ」

「しまった!?!それはこのための布石だったのか!？」

「甘いよ。そんな手が私に通じる訳ないでしょ!」

「そ、そんな!?!わたくしが最下位なんて・・・」

ちなみに某電鉄系ゲームもあったが、あれは下手するとリアルファイトに発展しかね

ないのでやらなかった。

「さてと、そろそろ夕食の準備をするか」

「だな」

時間もそこそこ経ち、一夏と雪兎が夕食の準備のため立ち上がる。

「二人は何を作るの？」

「それなんだが、俺達は二人で合作にしようってことになってな」

「メニューはオムライスのデミグラスソースだ」

「これまた技量が問われるメニューだった。」

「一夏、ライスの方は任せていいか？」

「おう、ならオムレツの部分とソースは雪兎の担当だな」

そして始まった二人の調理はまるでオープンクッキングのように見る者を魅力した。

「雪兎、ライスはこんな感じでもいいか？」

「ああ、ソースも出来たし、一夏はライスの盛り付けを頼む。今から上にのせるオムレツの方をやる」

その手際に無駄がなく、女子達は思わず見入ってしまう。

「やはりレベルが違う……」

「こ、これが主夫の領域ですの……」

「うわあ、また一段と差つけられちゃってる……」

「これが二人の本気……」

「鮮やかな手並みだ……」

それぞれ間近で見ると二人の調理に戦慄する。これが自分達の目指す目標なのかと。

「よし、完成だ！今日のオムレツは満足いく出来だ」

「久しぶりに雪兎と作ったけど俺も満足いく出来だよ」

出来上がったオムライスは店で出されるような出来映えのものだった。

「さあ、御上がり」

「「「いい、いただきます」」」

二人に促され女性達はそれぞれオムライスを口にする。

「うわあ、なにこのオムレツのトロトロ加減・・・」

「中のライスもソースや卵に合わせて味付けされてる・・・」

「こんなオムライス初めて食べたよ・・・」

「ほ、本国の料理人にも劣りませんわ・・・」

「おかわりはあるか？」

概ね好評である。

「よし」

「やったな、雪兎」

これには一夏と雪兎も満足そうな顔をしていた。

「雪兎、このオムレツ、普通のと少し味付けが違うけど何か隠し味に入ってるの？」

「ああ、それはこれさ」

そう言つて雪兎が取り出したのは色んな出汁などによく使われる味の●の粉末だつた。

「えっ？そんなの入れるの!？」

「これを入れるとちよつと和風っぽくなつてな。ソースをこれに合うように調整するの

苦勞したんだよ」

「それ、俺も最初は驚いたんだよなあ。でも、大体日本じゃどの家庭にもあるからな、それ」

「隠し味ってのはこういうのを言うのさ」

他にも一部の県でよく使われていた中華スープの素なども炒飯の味付けに使えたりと色々な使い方が出来る。この辺は雪兎の前世の母親がよくやっていたのを雪兎はよく覚えていた。

「雪兎の料理ってそういう」どの家庭でも出来ます」的なのだから話聞くとほんと役に立つのよねえ」

「流石は食文化の盛んな日本だな。今度クラリツサにも教えてやろう」

その後、クラリツサが日本の料理バトル系のマンガにドハマリすることになるのだが、それはまた別の話である。

29話 夏のプールでの遭遇 兎、プールに行く

「雪兎、プールに行かない？」

雪兎はあの食事会から数日後に実家から寮に戻った。何でもI・S関係でやることがあるらしい。そんな寮に戻った翌朝、寮の食堂でシャルロットと朝食を食べていると、突然シャルロットがそんなことを言い出した。

「プール？　そういうや先月に新しいプールがオープンしたとか誰か言ってたな」

「うん、そこ。行ってみたい？」

「今年は臨海学校の時しか泳いでなかったもんな」

「雪兎が選んでくれたもう一着の方の水着も着てないし、ね？」

そう、以前買った雪兎が最初に見ていた水着は結局披露する機会がなかったのだ。

「そうだな・・・行くか」

せっかく買った水着が勿体無いし、雪兎もその水着を着たシャルロットを見てみたかったということもあり、雪兎はシャルロットの誘いを受けることにした。

（よし、雪兎とプールデートだ！）

シャルロットもそう意気込み準備をしてプールに向かったのだが・・・

「あれ？雪兎さんにシャルロットさんじゃないですか」

「ほんとだ。あまあまとしやるるんだ」

「あつ（察し）」

プールの入り口で私服姿の聖、本音、簪の三人と鉢合わせた。

「み、皆も来てたんだ……」

考えることは皆一緒らしい。

「簪と本音はわかるが、聖も一緒とは珍しい」

「ひじりんは私が誘ったんだよー。いつもお菓子くれるお礼に」

「そーいや、お前は聖に餌付けされてたな……」

そう言われ雪兎はラウラと一緒によく聖からお菓子を貰っていたのを思い出す。

「私は趣味で作ってたから別に気にしてなかったんですけどね」

「いや、聖のお菓子は十分金取っていいレベルだぞ」

両親がパティシエというだけはある。

「だから今日は私達が聖を誘ったの」

「なるほどな」

すると、今度は本音の方が訊ねる。

「そういうあまあまとしやるんはデート?」

「う、うん」

「一応、夏のデートの定番だからな」

恥ずかしがるシャルロットに対し雪兎は堂々と言い切った。

「流石は雪兎さん……堂々と言いましたね」

「お、おおう……」

「雪兎ならこれくらいやる」

あまりに堂々と言い切るものだから聖と本音も思わず後退る。

「そういう訳だから俺達は行くな。シャル、また中で落ち合おう」

「う、うん」

そう言うのと雪兎は入場料を支払い（さりげなくシャルロットの分まで）、更衣室へと行ってしまった。それからシャルロットも慌てて更衣室へと向かっていった。

「さっさとシャルロットさんの分まで払って行きましたよ？」

「うん、しかも、かなり自然にやってる」

「私、あまあまを甘くみてたよ……」

雪兎の何気無いその行動に三人は驚きつつも、遅れて三人も入場料を支払い更衣室へと向かった。

更衣室を出てシャルロットを待っていると……

「ん？そこにいるのは雪兎じゃねえか？」

「弾？お前こそこんなところで何やってんだ？」

続いて遭遇したのは友人の弾だった。

「俺か？俺はここのバイトさ。オーブンしてあんまり経ってねえから臨時でバイト雇ってんだよ」

「あー、なるほどな」

「そういう雪兎こそ一人でこんなところ来るなんて珍しいじゃねえか」

「いや、一人じゃなくてな・・・」

「雪兎、お待たせ！」

そこに薄いオレンジ色のビキニ型の水着に白いパレオを着けたシャルロットがやってきた。

「おう、やつぱり見立て通り似合ってるぞ、シャル」

「えへへ、そうかなあ？」

「お、おい、雪兎。その美少女は一体・・・？」

「そういや言っただけじゃなかったな。この娘はシャルロット、俺の彼女だ。シャル、こいつは俺と一夏、それと鈴の共通の友人で五反田弾だ」

「シャルロット・デュノアです。よろしくね」

雪兎がシャルロットを紹介すると弾が石のように固まる。

「弾?」

「か、彼女だとおおおおお!!雪兎!いつの間にそんなの作ってやがったんだよ!」

「先月始め頃かな?」

「それ、俺が学園のこと聞いた一ヶ月後じゃねえか!?その間に何があつたんだよ!?つか、前にデートがどうこう言つてたのはこの娘か!」

まあ、前に会つた一ヶ月後に友人が突然彼女作つてれば弾でなくてもそう思うだろう。そして、初デートの時に相談されていたことを思い出す。

「シャルやラウラつて千冬さんの元教え子が転入してきたりタツグトーナメントがあつてシャルと組んだり・・・後は機密事項に抵触すつから言えんが色々あつてな」

「ラウラつてこの前一夏と一緒にいた眼帯着けてる娘だよな?相変わらず濃い学園生活してやがんな。先月始め頃つていうと臨海学校とかいうやつの後か?」

「一夏辺りにでも聞いたのか?まあ、その通りだ」

どうやら弾は雪兎とシャルロットの初デートの際に他のメンバーと一緒にいた一夏と遭遇していたらしい。

「それにしてもこんな美少女捕まえやがって、羨ましいぞ」

「美少女・・・雪兎も前に言つてたけど僕つて美少女なのかな?」

「しかも、僕つ娘かよ!?お前のハイスペックっぷりは彼女にまで適応されんのか!」

「落ち着け、弾。シャルが少し引いてる」

「おお、すまん。改めまして、俺は五反田弾だ。気軽に弾って呼んでくれ。苗字は妹と被るからな」

「妹？」

「俺らの一個下の娘で蘭っていうんだ。そういや蘭ちゃんもIS学園志望なんだっけか？」

「ああ、来年にはお前らの後輩になるかもだからよろしく頼むわ」

その後、弾はそろそろバイトに戻ると言って去っていった。

「弾って面白いけど妹想いのいい人だね」

「もう一人、数馬ってのがいるが、そいつはまた何れな」

御手洗数馬、もう一人の共通の友人である彼は原作にすらほとんど登場していないキャラだったので雪兎も知り合った当初は驚いたものだ。

「さてと、そろそろ俺達もプールに行くか」

「うん！」

弾と遭遇して少し時間を食ったが、二人はプールへと向かった。

流れるプールを堪能し、次はどのプールへ行こうかと二人が思っていると。
「あれ？雪兎さん？」

今度は弾の妹の蘭がいた。

(どんなエンカウント率だよ・・・)

「よっ、蘭ちゃん」

「今日は一夏さんは一緒じゃないんですね」

「俺だって四六時中あいつと一緒にいねえって」

「雪兎、この娘が蘭ちゃん？」

「はい、私が蘭です。もしかしてシャルロットさんですか？」

「なんだ、一夏達から聞いてたのか？」

「はい、このお会いした時に」

弾とは違い、蘭は一夏達シヤルロツトのことを聞いていたらしい。弾が離れているに聞いて、弾だけ聞いていなかっただけかもしれないが。

「ラウラさんと一緒に転入されたフランスの方なんですよね？」

「うん、そうだよ」

自己紹介も不要ということだ。雪兎は気になっていたことを訊ねる。

「すごいや蘭ちゃんはどうしてここに？」

「お兄がここでバイトしてるんですけど、この前、このグループ優待券を貰ったらしくて、それで学校の友達と来たんです」

蘭がそう言うのと近くのプールで手を振っている友達と思われる女子達がいた。そして、雪兎達の姿を見つけると傍にやってくる。

「蘭、その人ってもしかして……」

「実のお兄さんよりお兄さんらしいって言う雪兎さん？」

「蘭、お前は俺をどう友達に紹介してるんだよ……」

優待券をくれた弾が哀れすぎる。

「あははは……お兄って、誉めるとすぐに調子乗るから」

「だわな」

(すまん、弾。否定できん)

「すいません、お二人つてお二人だけでいらしたんですか？」

すると、友達の一人がそんなことを訊ねてきた。

「そうだが？」

「も、もしかしてお付き合いされてるんですか!？」

「・・・うん、そうだよ」

シャルロットがそう答えると少女達はきゃーきゃーと騒ぎ出す。

「はいはい。そのくらいにしときなさいよー。他のお客さんもいるんだから」

「そ、そうだった」

「それにお二人にも失礼でしょ？」

「す、すいませんでした」

学校で生徒会長をしているらしい蘭は騒ぎ出す友達を静め雪兔達に謝らせる。

「へえー、生徒会長してるって聞いてたけど、しつかりやれてるんだな」

「そ、そそ、そんなことないですって!」

「おー、会長が照れてる・・・好きな人は別にいるって聞いてたけど、お兄さん代わりでこれなら本命はもつと凄いいだろうなあ」

「ほどほどになっ?」

いつものクラスメイト達のようなやり取りに雪兎は微笑みながら少女達に注意する。

「蘭ちゃん俺にとつても妹みたいな娘だからこれからも仲良くしてやってくれよ?」

「「それはもちろん!」」

その後、IS学園への受験でわからないことがあれば頼ってくれとだけ言つて蘭達と別れた。

30話 続、夏のプールでの遭遇 兎、他人のふりをする

蘭達と別れてから雪兎達がやってきたのは波を人工的に再現し、サーフィンを楽しめるというプールだった。

「サーフィンか、一度やってみたかったんだよなあ」

「僕も初めてかも」

という訳でインストラクターから指導を受けられるそうなので二人は早速申し込んでみようと受付に向かうと。

「雪兎？」

サーフボードを持った女性が雪兎に声をかけてきた。

「あれ？忍先輩？」

サーフボードを持った女性はIS学園の二年生で雪兎が技術提供する代わりにスポンサーをしてきている企業・棗宇宙開発局の局長の娘である棗忍だった。

「雪兎、知り合い？」

「ああ、前に技術提供する代わりにスポンサーやってくれてる企業があるって言ったろ？そこの娘さんで学園の棗忍先輩だよ」

「シャルロット・デュノアね。棗忍よ、よろしく」

「よろしくお願ひします、棗先輩」

「今日はデート？」

「そんなところですよ。先輩はサーフィン出来るんですか？」

「うん。子供の時からやってるから。二人もやるの？」

「初心者だと言うと教えてくれるというのでお言葉に甘え指導を受けることに。」

「おつ、結構バランス取るの大変なんだな、これ」

「うん、思ったより難しいね」

「でも、雪兎もシャルロットも結構筋がいい」

「忍の言う通り、二人はあつという間にコツを掴むと小さな波でならちゃんとサーフィンできるようになっていた。」

「これ、結構面白いな(そういや昔見たアニメにサーフィンっぽい装備したパワードスーツやロボットのいたな)」

「サーフィンをやってみて、「やっちゃやるぜ!」とか「I can fly!」とか叫んでるアニメを思い出す雪兎。」

(もしかしたらISにも応用できないか?)

帰ったら早速シミュレートしてみようと雪兎は考えた。

「雪兔、また他の事考えてない？」

「わ、悪い、シャル。ちよつと面白そうなアイディア浮かんで」

「もう！デートなんだから僕の事を考えてよね」

「今日はもうデートに頭切り替えるから、な？」

少しむすつとするシャルロットだったが、雪兔がそう言うと言と機嫌を直したようだ。

「噂通りのラブラブぶり。いい彼女」

「ほんと勿体無いくらいいい彼女ですよ、シャルは」

「ゆ、雪兔ー！」

「ご馳走さま」

一通りレクチャーを受けた後、まだ続けるという忍とは別れ二人はそろそろ昼食を取ろうと屋台などが並ぶコーナーへと向かった。

「おつ、お二人さんも昼食か？」

「よつ、弾。さつきぶり」

屋台では弾がバイトしていた。弾も家が五反田食堂という食堂をしていることもあつてかそこそこの料理が出来る。なのでこのバイトには雪兎も納得していた。

「さつき蘭にも会つたぞ。優待券くれてやつたんだつて？」

「ああ、俺はバイトとか家の手伝いとかで忙しくて使えそうになかつたからな。家族か本人同伴限定だったし、丁度良いかなつてな」

「なんだかんだ言つて蘭には甘い弾なのだ。」

「それより何か食うんだろ？丁度空いてきたところだから今ならささつと作れるぜ」

「そうか、なら焼きそば一つと・・・」

「あつ、僕も同じのを」

「焼きそば2つな、少し待つててくれ」

「そう言ううと弾は慣れた手つきで焼きそばを作っていく。」

「流石は五反田食堂の跡取りだな」

「まだまだだよ。うちのじーさんにはまだまだ敵わねえつて」

「厳さんはな……またあの野菜炒め食いたいぜ」

「ならまた顔出しにこいよ。じーさんも雪兔のこと気に入ってるからな。はいよ、焼きそば2つだ」

プール内に手荷物を持って入るのは面倒ということ、このプールではリストバンド型の防水電子マネー端末が貸し出されており、予めチャージしておけばプール内の施設全てで使えるようになってる。もちろん、残額は返却時に返金される仕組みだ。そのリストバンドで雪兔は焼きそば2つの代金を支払う。

「毎度ありー」

「おつ、あつちのテーブルが空いたみたいだし行こうぜ」

「うん」

（また雪兔に払われちゃった）

今日は入場料といい、さっきのサーフボードのレンタル代といい、今の焼きそばといい、全部雪兔に支払われてしまっている。しかも、ごく自然とやっているため、シャルロットが何か言う暇すらなかった。

「あつ、飲み物買い忘れたなあ……」

「な、なら僕が買ってくるよ！」

両手が塞がっている雪兔を見てチャンスと思ったシャルロットはそう言うどドリン

クコーナーまで走っていった。

シャルロットside

(何飲むのか聞かずに来ちゃったけど、雪兎だったら烏龍茶かな?)

慌てて何を飲むか聞かずに来てしまったが、雪兎が食堂でよく飲んでいたものを思い出して僕はドリンクコーナーでドリンクを購入する。

「ねえ、その彼女。俺らと遊ばない?」

すると、あまりにも前時代過ぎる言葉と共に数人の男性が僕を囲んでいた。

「いえ、連れがいますので……」

「おっ? 女の子かな? ならその娘も呼んで」

「か、彼氏です」

「けっ、男かよ……そんな飲み物を買に行かせるような男なんてほつとい俺らと遊ぼうぜ？」

連れが男だとわかると、男は僕の手を掴んで連れて行こうと手を伸ばすが……

「おい、てめえら誰の女に手出そうとしてやがるんだ？」

鬼の形相をする雪兎がその男の手を掴み捻り上げる。

「い、いてててて!!」

「な、何だ、こいつ!!」

「その娘の彼氏だよ……てめえら、覚悟は出来てんだろうな？」

その時の雪兎の表情はラウラを取り込んでいたVTSを消し炭に変えた時と同じくらい怒りに染まっていた。

「あ、相手は一人だ!や、やっちまえ!!」

「お、おう!ぐべらっ!!」

「一人じゃねえぜ?雪兎、俺も加勢させてくれや」

さらにバイトしていたはずの弾まで現れ一撃で男の一人をのしてしまう。

「いいのか?騒ぎ起こしたらバイトクビにならねえか?」

「チーフには許可貰った。むしろ責任はこっちで取るからやってこいってよ」

「へえ、いい人じゃねえか」

そんな話をしてる間にも二人は男達を一人ずつノックアウトしている。

「さあ、てめえらの罪を数えろ」

それからものの数分で男達はボコボコにされ、チーフと思われる人が呼んだ警備員に連れて行かれてしまった。その後、バイトのチーフの人からは謝られてしまった。

「ごめんなさいね。オープンしたばかりでまだまだ警備体制が甘くて」

「い、いえ、ちゃんと助けてもらいましたから・・・」

「ほんといい彼氏を持ったわね。うちの弾くんのお友達だったみたいだから加勢させたけど必要なかったかしら？」

「いや、チーフ。雪兎だけにやらしてたらボコボコどころか半殺しでしたよ？」

どうやらあれでも加減した方らしい。そう思うと、僕が雪兎にどれだけ大切にされていたかがわかる。

「すいません。ちよつと彼女に手出されてカツとなっていました・・・弾が来なかったらマジで半殺しにしましたよ」

「いいのよ。あんなやつら放置しておいたらここの評判にも関わるところだったわ。それに他のお客さんからも貴方は格好良かったって言われてたわ」

確かにあの時の雪兎は物凄く格好良かった。今も心臓がドキドキしているくらいだ。

「そうですか・・・まあ、シャルが無事で何よりだったよ」

「雪兎。お前、ベタ惚れじゃねえか」

「悪いかよ。初めての彼女だぞ？大切にしておいたり前だ」

その後も観ていたお客さん達に冷やかされながらも僕は幸せな気分です少し冷めた焼きそばを食べたのでした。

side out

昼食の時にちよつとしたトラブルがあつたが、気を取り直して昼からも遊ぼうとプールに繰り出すと・・・

『さあ！第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！』

さつき出場者を募集していたレースが始まったらしい。景品が「沖縄ペア五泊六日チケツト」ということもあってシャルロットも出場したが、何故か男性は受付で弾かれる（弾曰くおそらく水着美女だけでやらせたのだらうとのこと）ということ。出場は出来なかった。しかし、出場者の中に見覚えのあるペアの姿があった。

「あれって、鈴とセシリアだよね？」

「だよな・・・シャル、この場を離れるぞ」

「えっ？どうしたの、雪兎」

「この話も読んだことがあるのを思い出した・・・俺の記憶が正しければあの二人がまたやらかす」

雪兎がそう言うと、スタートと同時に鈴とセシリアのコンビは妨害工作に出た。プールに突き落とすのはもちろん、時には他の出場者の水着を奪いプールから出られないようにされたり（この時、雪兎はシャルロットに目を塞がれた）している。

「最後に鈴がセシリアを踏み台にしてゴールするんだが、それでセシリアがキレてISで乱闘騒ぎになる」

「・・・」

目隠しされながらそう雪兎が呟くと、丁度、鈴がセシリアを踏み台にしゴールのフラッグを掴んだ。

「逃げよっか、雪兎」

「ああ、他人のふりだ……俺達は関係ない」

始まった乱闘騒ぎを背に雪兎とシヤルロットは我関せずとばかりにその場を離れ
プールから脱出するのであった。

31話 新ISは波乗りサーファー!? 兎、新たなISを作る

プールでの乱闘騒ぎの中、脱出した雪兎とシャルロットは景色のいいレストランで食事をしてデートを終えた。騒ぎを起こした二人は何故か全てを真耶の代わりに迎えた行つた一夏のせいにして@クルーズで高級パフェを奢らせたいが、後日、雪兎とシャルロット、そして簪達の証言により一夏も流石に理不尽だとキレて数日二人は口を聞いて貰えなかったそうだ。そして、雪兎達がそこでデートしており、邪魔されたことへの意趣返しだと知ると二人揃って泣きついてきた。などと色々あったが、今は平常運転だ。セシリアとラウラも一週間ほど帰省しているし、一夏もまだ実家のため、雪兎の部屋は静かである。

「よし、こっちの調整はこんなもんか」

今やっているのは箒が紅椿を手に入れ使われなくなった打鉄・参式の調整だった。雪兎は後に起こるとある事件に備え参式のある人物に渡すため調整し直していたのだ。

「今日は千冬さん、学園に来てたよな?」

その人物とは千冬であった。原作では彼女の専用機である暮桜はとある理由で凍結

処理がされており、千冬は今はISを所持していないのだ。先日の鈴とセシリアの起こした事件の後始末の書類とかで出勤していたと雪兎は記憶している。

「受け取ってもらえるかな？」

そんなことを考えながら雪兎は職員室へと向かった。

「失礼します。織斑先生はいらっしゃいますか？」

「ん？天野か、珍しいな。お前が休みに私を訪ねてくるなんて」

訪ねてきた雪兎を千冬は物珍しそうに見た後、入室を許可し自分のデスクへと呼んだ。

「ちよつと渡したいものがありました」

「渡したいもの?」

「これです」

そう言つて雪兎は再調整を終えた参式を千冬に手渡した。

「これは・・・参式か? 何故これを私に?」

「箒も紅椿を手に入れて使い手がいなくなりまして・・・他の人ではちよつと手に余るISなので預かつていただけないかと」

「お前は今後何か起きると思つているのだな?」

雪兎の思惑はあつさり千冬に見抜かれた。

「バレました?」

「何年お前と付き合ひがあると思つている。確かに今年に入つてからトラブルに事欠か
んし、備えておくことも必要だろう。だが、何故私に?」

「暮桜、今は使えないんですよ?」

「・・・束にでも聞いたのか? まあいい、確かに今は暮桜は使えん。しかし、それでも
訓練機ぐらゐは使えるぞ?」

「それじゃ間に合わない事態のためにも現状切り札とも呼べるこいつは織斑先生に持つ
ていて欲しいんです」

いつになく真剣な雪兎に千冬は参つたと息をつき参式を受け取る。

「……わかった。お前がそこまで言うなら受け取ろう」

「コアは初期化して再調整してあります。整備が必要な時は俺に言ってください」

「お前が何を危惧しているかは知らんが、この剣を預かる以上は何とかしてみせよう」
こうして守護者の剣は世界最強の手へと渡った。

翌日、千冬は真耶を伴って早速アリーナで参式を試すことにした。すると、パーソナライズやフィッティングが開始され参式は名実共に千冬の剣となった。

「あいつ、やってくれたな……」

しかも、先行して千冬のデータがある程度入っていたのかあつという間にパーソナライズとフィッティングは終了した。そこで千冬はあることに気付く。

「ん？前とカラーリングが違う？」

そう、以前は打鉄と変わらぬカラーリングだったのに対し、今の参式は所謂親分カラー、ゼンガー・ゾンボルトが使用していたものと同じカラーリングになっていたので。更に出力調整も千冬の癖に合わせてあり、このISならば一夏達専用機持ち達が束になつてかかっても負ける気がしなかった。

「こんなものを私に渡すとはな・・・その信頼、応えねば大人の恥だな」

それからしばらく参式を動かしていたが、その規格外つぷりに真耶が絶句していた。

その頃、雪兎は先日アイデアを得た新たなISの設計に取り掛かっていた。

「雪兎、それってこの前プールで考え事してた時の？」

丁度、部屋を訪れていたシャルロットは画面に表示される一風変わったISの設計データをみてそれがサーフィンをしていた時に雪兎が着想を得たものだと気付いた。何故なら、そのISに装備された特殊な装備はまるでサーフボードのような形状をしていたので。

「ああ、昔、前世でこんな装備で飛んでるロボットとかのアニメが流行ったことがあつてな」

しかも、このサーフボード、分離・変形・合体によつて様々な武装へと変貌するのだ。「雪片式型と同じ擬似第4世代武装【バイザーボード】だ。こいつも別のアニメから着想を得た装備さ」

この【バイザーボード】複数の種類があり、状況に応じて切り換えれるので雪兎の雪華と紅椿の中間という印象を受ける。

「ほんと、雪兎の前世の世界って凄いこと考える人がいたんだね・・・」

こんなアイディアがあちらの世界ではゴロゴロ転がっていたのだと思うと、シャルロットはその世界に束のような科学者がいなかったことが幸いに思えてくる。絶対にとんでもないことになっていただろう。

「基礎設計は終わったな。あとは束さんにデータ送って評価してもらつてからテスター

「探さない」と

「自分でやらないの?」

「いや、雪華のやつが最近自分以外のIS使うの気に入らないらしくてな」

声を出してそう言うってくるのではなく、他のISを使った直後は何故か展開速度が遅くなるのだ。

「ランク戦の訓練機とかは許してくれるんだが、参式とかカスタムEVOL使うと露骨に反応鈍くてさ」

「嫉妬してるんじゃないの?」「自分じゃ不満なのかー!」って

「シャルもそう思う?」

ISは装備というより相棒・パートナーという表現がしっくりくる。そのため他のISにホイホイ乗り換えられては機嫌も損ねるといふものだ。

「だから誰かテスターになってくれるやつ探さないといけないんだ。俺もこれ以上相棒の機嫌損ねたくねえし」

そういう訳で新たなISには新しいテスターが必要なのだ。

「相棒と言えばシャルのリヴァイヴはもういいのか?」

「うん、一応修復は終わってるんだけどね」

どうも最近シャルのリヴァイヴも反応が悪い時があるらしい。

「ちよつと貸してくれ、調べてみる」

「お願い」

待機状態のペンダントを雪兔に渡すと、雪兔は専用のスキャナーのような機械にリヴァイヴを入れE V O L S y s t e mのメンテナンス画面を開く。

「はあ？何だこりゃ？」

すると、リヴァイヴから妙なエラー反応が出ていた。

「おいおい、こいつは……」

更に調べてみると、そのエラーの内容はリヴァイヴ自身からの要望だった。

「シャル……リヴァイヴのやつ、こんなこと言ってるんだが」

『現状の機能では所有者の技能についていけません。性能向上の為、雪華とのデータリンクをお願いします』

「どういうこと？」

「多分、二次移行するだけじゃシャルの能力に合わせれないから俺の雪華のデータを使わせてくれて言ってるんだと思う」

よほど前回の福音との戦いが、最後まで主と戦えなかったことが悔しかったらしい。

「リヴァイヴ……」

「なあ、シャル。リヴァイヴ、しばらく俺に預けてくれないか？俺、こいつを改修してや

りたんだ」

「ここまで主思いなリヴアイヴをみて、雪兎は心動かされたようだ。

「僕からもお願いしていい？あつ、でもデユノア社にはなんて言おう・・・」

「そつちは俺で何とでも出来るから心配するな。んじゃ、リヴアイヴはしばらく預かるぞ？」

その時、画面に新たな文字が表示された。

『よろしくお願いします』

「任せろ。お前は俺が完璧に改修してやる」

こうしてシャルロットのリヴアイヴは新たな力を得るべく雪兎の元へと預けられたのだった。

32話 紅の舞と夏の花 兎、夏祭りに行く

シャルロットside

リヴァイヴの改修作業を始めて数日。雪兎は朝練や食事の時以外は部屋で作業をし続けるようになった。それだけ雪兎はリヴァイヴの改修に気合を入れているということなんだろうが、僕は少し心配になっていた。

「はあ……」

「なんだ、雪兎はまだ部屋に籠っているのか？」

そして僕はラウラに電話で相談していた。

「うん、僕が頼んだことでもあるから無理はしないでって言いたくて」

「そういうことなら教官や嫁、それにあいつの姉に相談したらどうだ？」

「うん、そうしてみよう」

ラウラの提案を聞き、僕はまず雪兎のお姉さんである雪菜さんを訪ねた。

「あー、ゆうくんがまた何かしてると思ったらシャルちゃんのことあるらしく、前は無理矢理モデルの仕事に

雪菜さん曰く、雪兎は時々ああなることがあるらしく、前は無理矢理モデルの仕事に同行させて気分転換させたらいい。その時出会ったのが僕の服を見繕ってくれた千春

さんなんだとか。

「この時期なら……やっぱり。シャルちゃん、実は今日、篠ノ之神社で夏祭りやつてるんだ」

「篠ノ之神社？もしかして箒の？」

「そつ、ほーきちちゃんの実家だよ。今は叔母さんの雪子さんが管理してるはずなんだ」

そこで夏祭り……確かに気晴らしにはいいかもしれない。

「でも、今のゆうくんだと、シャルちゃんに誘わせても出てくるとは……よし、いつくんに連れ出させよう！それに夏祭りだったら浴衣だよねー。よし、家に私のお古があつたはず」

そんなことを考えていたらあつという間に僕は雪菜さんに拉致され天野家へと連行されるのだった。

side out

「雪兔、夏祭り行こうぜ」

「はあ？」

リヴァイヴの改修作業をしていると、一夏が突然部屋に戻ってきてそんなことを言い出した。

「今日、篠ノ之神社の夏祭りなんだよ。久しぶりに一緒行かないか？」

「いや、他の女子達を誘ってやれよ」

「セシリアとラウラはまだ帰ってきてないし、他の皆も都合がつかないんだとさ」

「箸は？」

「多分、手伝いに行ってるんじゃないか？近いうちに顔出すって言ってたし」

鈴辺りなら暇してそうなのだが、前の騒ぎのせいではばらく寮で謹慎なんだとか。せつかくのチャンスを……自業自得である。

「仕方ない。俺も世話になってたし、顔くらい出すか」

「シャルロットは誘うのか？」

「そうだな……ん？姉さんからメール？」

『シャルちゃんはおちよつと借りてくから』

どういふことだつてばよ？

「シャルは姉さんに拉致られたらしい」

「雪菜さんならそこまで心配しなくても大丈夫なんじゃないか？ シャルロットのこと気に入つてゐるみたいだし」

そう、臨海学校の後くらいから雪菜はシャルロットを「シャルちゃん」と呼び、えらく気に入つてゐるみたいなのだ。雪兎としては姉と彼女が仲が良いことはむしろ歓迎なので良いのだけれど。

「作業詰まつてる感もするし、気晴らしがてら行くとしますか」

ということだ。雪兎は一夏と共に篠ノ之神社へと向かうのだつた。

「これは夢だ！そうに違うない！」

「……忘れてた。夏祭りはこの話だったんだ」

一夏と一緒に篠ノ之神社の夏祭りに訪れた雪兎は箒の叫びでこの話は箒メインの話だったことを思い出していた。ちなみに、箒が叫んでいる理由は自分の和装を一夏に似合っていると云われて錯乱しているのだ。

「一夏、後はお前に任すわ」

「ちよっ!?逃げるのかよ、雪兎！」

面倒になってきたのと、箒の邪魔をして馬に蹴られたくない雪兎は一夏を残しその場を離脱した。

「まったく、一夏はもう少し女子の気持ちを理解するべきだな」

「そう言う雪兎は僕の気持ちを理解してほしいかな？」

「えっ?」

聞き覚えのある声が後ろからして雪兎は後ろを振り返る。

「しゃ、シャル?なんでここに?ってか、その浴衣は……」

そこにいたのは雪菜に連れて行かれたはずのシャルロットだった。しかも着ているのは紺色の浴衣でよく似合っていた。

「ふふ、似合う？雪菜さんが昔着てたのくれたんだ……わつとと」

「危ない！」

慣れない下駄で一回転したせいとか、シャルロットがバランスを崩して転びかけるも、雪兎がシャルロットの手を掴み抱き寄せる。

「ゆ、雪兎!?!」

「慣れない格好でそんなことするからだ……つたく、せつかく似合ってる浴衣汚れちまうだろ？」

「う、うん」

抱き寄せたことと、似合っていると言われたことでシャルロットは顔を真っ赤にして雪兎にしがみついていた。

「姉さんのやつ、シャルを拉致したのはこういう訳か……ってことは一夏の誘いも姉さんの仕込みか。はあ、何やってんだよ、あの姉は」

「雪菜さんは悪くないよ！僕がー」

「わかつてる。俺を心配して姉さんに相談したんだろ？まったく俺ってやつは学習してないな……」

自覚症状があつたのか雪兎は申し訳なきそうにシャルロットに謝る。

「心配かけてごめん？どうもこういう時は周りが見え難くなつてな」

「ううん、元はと言えば僕のリヴァイヴの問題だし」

「それでもだ。彼女に心配かけさせるようじや彼氏としてまだまだだよ、俺は」

そうやってしばらく互いに謝り続けるが、きりが無いということと最後に互いにごめんなさいと謝って終えることにした。

「さてと、せっかく夏祭りに来てるんだ。一緒に回ろうぜ」

「うん！」

屋台や出店を回ったりしていたところで蘭を探す弾に出くわしたりもしたが、特に問題もなく二人で祭りを回った。

「そろそろ神楽舞か」

「神楽舞って、神様に踊りを奉納するっていうあれ？」

「それさ。今年は箒が舞うんだってさ。見に行くか？」

「うん」

神楽舞が行われる舞台へと向かうと、既に多くのお客さんが集まっていた。その中には一夏の姿もある。

「始まるぞ」

子供の頃にも一夏や雪兎は箒が舞うのを見たことがあるが、今舞っている箒はとても綺麗だった。神楽鈴や扇もしっかり扱えており、幼馴染という鼻屑目を除いても目を惹

かれる舞だった。それは同性のシャルロットも同じようで、舞う箒の姿をうつとりと眺めていた。

「雪兎、ちよつと想像以上だった」

「ああ、俺も小さい頃の箒の舞を見たことあったけど、別物だったよ……シャルが彼女じゃなきゃ惚れてたわ」

雪兎にとつてはシャルロットの浴衣姿の方がインパクトがあつたようだ。

「そろそろ花火の時間だな」

「オススメの場所とかあるの？」

「あるにはあるが……今日はあいづらに譲つてやろうか」

「そうだね。今日は箒頑張つてたもんね」

「おつ、始まつたな……」

幼馴染同士が知る穴場があるのだが、雪兎は今日は幼馴染二人にその場所を譲つてやることにした。それに、シャルロットの浴衣姿の方が気になつて今日の雪兎は花火に集中出来そうになさそうだからだ。

(どうしようもなく惚れてんな、俺)

当初はそんなつもりは全くなかつたのだが、今では隣にいる愛らしい恋人にすつかり夢中になっていると雪兎は自覚し、花火を楽しそうに見るシャルロットの横顔を見つめ

る。

「雪兔、どうしたの？」

見つめられていたことに気付いたシャルロットが訊ねる。

「いや、ちよつとな。例年通りだと次は連続だぞ」

そう言つてシャルロットに前を向かせる。その横顔を見ながら雪兔はあることに気付く。

（あれ？　そういうシャルが再転入してきた時に頬にキスされてから俺の方は何もしてな
くね？）

そう、この二人、付き合っているというのにキスはその時の一回きりなのだ。

（タイミング今までなかったけど、この雰囲気つて絶対そういう雰囲気だよな？）

恋愛経験のない雪兔でもそれくらいはわかったようだ。そうこう考えている間に花

火は最後の大連続に入っていた。

（流石にここは人目あるから帰りにしよう）

雪兔にシャルロットのように人目のある場所でキスはまだハードルが高いらしい。

花火も終わって、二人はシャルロットの着替えの関係もあつて今日は雪兎の家に向かつていた。

「綺麗だったね、花火」

「あ、ああ、そうだな」

シャルロットばかり見ていたため、雪兎は花火なんてちつとも見ていない。

「来年もまた絶対に来ようね」

「おう、今度は俺から誘うよ」

家も近くなり人気も少なくなってきたところで雪兎は繋いでいたシャルロットの手を引き再びシャルロットを抱き寄せた。

「えっ、雪兎!?!なー」

突然のことにシャルロットも驚くが、雪兎は少し強引にシャルロットの唇にキスして言葉を遮る。

「……悪い、さつきやられっぱなしなの思い出してやり返したくなった。嫌だったか？」

「……嫌じゃなかった」

腕の中で顔を真つ赤にしてそう言うシャルロットは反則なくらい可愛かった。

「けど、ズルいよ、雪兔……もう一回して」

「えっ？」

「もう一回ちゃんとキスしてほしい……だめ？」

もう一度と言うシャルロットのおねだりに雪兔は黙って唇を合わせることで答えた。

33話 夏の日の最後の思い出と暗躍する者達 兎、再びプールへ

夏休みもあと数日となり多くの生徒が学園へと戻り始め一学期のような賑やかさが戻ってきたある日のこと。

「ウオーターワールドで縁日イベント?」

先日、雪兎とシャルロットがデートし、鈴とセシリアが騒ぎを起こしたあのプールで縁日イベントが開催されるらしい。幸い、鈴とセシリアは出禁は食らっていないかつたので参加出来そうである。

（つてことはアニメ二期の方のイベントが採用されたのか……本当にごちゃ混ぜだな、この世界は）

「雪兎もシャルロットと一緒にどうだ?」

そして、一夏はアニメ同様に親しい知り合いに片っ端から声をかけているようだ。

「ウオーターワールドは前に一回行つたが、結構良いとこだったぞ。鈴とセシリアにとってはどうかは知らんが」

「あのプールか。前は俺は色々あつて行けなかつたし、行つてみたかつたんだよなあ」

「それはそうと、一夏は誰に声かけたんだよ？」

「とりあえずいつもの特訓メンバーと弾と数馬とか中学の時の仲間と蘭かな？ 弾達は他に予定あるらしくて駄目だったけど」

「あいつらも誘ってたのかよ。確か中入に灯下と人里だったよな？」

フルネームは中入江文、灯下枝理、人里花梨という鈴を含めた中学で仲の良かったグループの女子の名前だ。

「ああ、この前皆で集まろとした時、鈴が風邪で流れちまったろ？ だから集まれないかなあと思ったんだが」

鈴が風邪引いた云々はアニメのDVDに付いていた特典の書き下ろし小説の話だ。その日は結局、一夏が鈴の看病に行き、残りのメンバーでカラオケに行つたのだ。その時、何故か箒達のキャラソンが各声優の名前で、主題歌が普通に存在し雪兎が大いに驚くことになり、更に弾が雪兎に彼女が出来たことを暴露して問い詰められたりしたが、いい思い出である。

「そーいや、俺もあいつらにシャルに会わせろとか言われたな・・・」

中学では彼女なんて興味も無いと言わんばかりの態度をしていた雪兎が入学して半年もせずに作つた彼女である。気にもなろう。

「で、どうするっ？」

「わかった。俺もシャル誘っていくよ」

一夏のように変な誤解を与えぬようしつかり説明することだけ決め雪兎はシャルロットを誘うことにした。

(アニメのエピソードってことはあいつらが動き出すのもこの時期か……ってことはあの人もそろそろ動くのか)

今まで接触することがなかったあの組織と学園最強の生徒との接触が間近に迫っているのを感じ、雪兎は少しだけ気を引き締めるのであった。

集合場所にはむすつとしたラバーズ四人と少々呆れている簪、聖、本音の三人と少しおめかししたシャルロットがいた。

「一夏、お前さ、何て説明した？」

「これに一緒に行かないかって」

そう言つて一夏はイベントのチラシを取り出す。

「はあー、お前はなあ、いつも説明不足なんだよ……そういうのが何人迷惑被つてると思つてるんだ」

「「うんうん」」

雪兎の言葉は頷くラバーズ。

「す、すいません」

そんなこんなはあつたが。一同はウォーターワールドへと向かつた。

「それにしてもよく出禁食らわなかつたな、お前ら」

「そ、その話はもうしないでいただけますか」

「私達だつて反省してるわよ」

あの事件の後、千冬による改修前の参式との時間無制限試合と反省文、そして国への弁解という罰のフルコースを受け大いに反省させられた二人にはあの事件はトラウマ化していた。

「学園ならともかく外でIS展開とか何やつたらそうなるんだよ」

「うっ」

言えるはずがない。景品の沖縄旅行を廻つて争つたなどは二人は口にできなかつた。下らなすぎる。

「お前ら、さつさとしないと置いてくぞ」

さりげにプールを楽しみにしていたラウラが皆を急かす。

「ラウラ、プールは逃げないから」

「しかし聖、遊ぶ時間は減るぞ」

「おりむー、あまあまも早く！」

「本音、恥ずかしいからもつと落ち着いて」

そんなこんな賑やかに雪兎達はウォーターワールドへと入場していった。

「相変わらず色々あるプールだよな」

一部を鈴とセシリアに破壊されていたというのにもう修繕されている。仕事の早い業者がいたのだろう。

「お前ら、遊ぶのは自由だが、IS学園の生徒として恥ずかしくない行動を心掛けるように」

水着に着替えた一同に雪兎は注意する。

「特に鈴とセシリアは前科があるからな」

「うぐっ」

言い返せず俯く二人。

「それじゃ、いくか」

アニメのようにセシリアの抜け駆けがないため皆で平和にプールを回ることに。スライダーのペア滑りは雪兎はシャルロットと、一夏はラバース全員と一回ずつやったり、聖はラウラと、簪は本音と滑っていた。

その頃、イギリスの某IS研究施設。セシリアのブルー・ティアーズを開発した施設である。

「侵入者確認！至急応援をー」

「ふんっ！」

「がはっ」

その施設に侵入した何者かは警備の兵士を気絶させ、その施設で開発されていた S、BT 二号機【サイレント・ゼフィルス】を手にする。

「随分と呆気ないものだな。まあいい、サイレント・ゼフィルス。確かにいただいた」
その侵入者の正体は織斑千冬そっくりの少女だった。

プールで遊んだ後、雪兎達はプールでレンタルしている浴衣に着替えて縁日イベントの会場を訪れていた。

「結構本格的なんだな」

「おっ、射的だな」

昔ながらの射的の出店を見つげ皆で挑戦することに。

「わたくしの得意分野ですわ!」

そう豪語するだけあり、セシリアはペンギンのぬいぐるみを一発で射ち落とす。

「おー!」

「僕も射撃は得意だよ」

「私も軍で一通り訓練したしね」

「私も」

続いてシャルロット、鈴、簪も景品を射ち落としていく。

「縁日のスナイパーと呼ばれた俺の實力、見せてやろう」

そう言うとき雪兎は正面からでなく斜めから白い猫の置物を狙い射ち、跳弾した弾で近くの狐のぬいぐるみまで射ち落とす。

「はあ!?!何よそれ!?!」

「あえて硬い置物に当てて跳弾させましたの!?!」

普通の射的ではあり得ない光景に鈴とセシリアが驚愕する。

「またやつてるよ……あいつ、子供の頃にもああやって射的屋泣かせてたよな」

「ああ、それで毎年雪兎と射的屋の戦いが祭りの名物化していたな」

「あれ、昔からやってたんだ」

篠ノ之神社での夏祭りを知る一夏、箒、シャルロットの三人は少し呆れている。どうやら先日の夏祭りでも名勝負をしていたらしい。しかもシャルロットが見ていたので余計に雪兎が張り切つてしまい、射的屋が泣いていた。

「雪兎、すまぬが手を貸してくれ」

その実力を買つてラウラが雪兎に助けを求める。ラウラが狙っていたのは一抱えもある招き猫のぬいぐるみだった。

「ラウラ、左の耳を狙つてバランスを崩せ。そこに俺が射ち込んで落とす」
「わかった」

雪兎の言う通りに左の耳を射つてラウラがバランスを崩すとすかさず雪兎が招き猫の眉間を射ち抜き招き猫を転倒させた。

「す、すごっ!?! 本当にあれ落とししましたよ!?!」

「感謝するぞ、雪兎」

よほど欲しかったのか、ラウラは素直に雪兎に礼を言う。すると、射的屋のおじさんが雪兎を見て何か納得したように頷いていた。

「兄ちゃんやるねー。噂には聞いてたが、射的屋泣かせの白ウサギつて兄ちゃんのことだったのか」

またえらく大層な二つ名までついていたようだ。

「この白猫はシャルに、狐は本音にやるよ」

雪兎は取った景品をシャルロットと本音に渡す。

「ありがとう、あまあま」

「大事にするね、雪兎」

その後、たこ焼きやわたあめ、かき氷といった定番の食べ物を食べ、最後に配られていた線香花火をしたりして雪兎達は夏の最後のイベントを楽しんだのであった。

「さてと、そろそろ私も彼らに接触するでしょうかしら」

今までは陰ながら見ているだけであつたが、もう少ししたら行われる学園祭のこともあつて彼女はとうとう雪兎達への接触を決めた。

「それに、彼には色々とお礼をしなきゃいけないしね」
そう言つて生徒会長・更識楯無は雪兎と一夏の写真を見て微笑むのであった。

六章 「兎と姉妹と学園祭」

34話 生徒会長と妹の再会 兎、学園最強との邂逅

夏休みも終わり二学期を迎えたIS学園。

雪兎達の特訓も再開され一学期の時よりもハードなものになっていた。

「うへー、休み前よりハードになってね?」

「ハードにしてるぞ?二次移行してから白式の追加武装・雪羅はお前が今まで使ってたタイプは改装だからな、その扱いに関するものを増やしたからだろう」

「僕のもハードになってるよね?」

「シヤルは改修中のリヴァイヴを問題なく扱えるようにカスタムE.V.O.Lで装甲切換をメインにメニューを組んでる。福音の時はある程度使ってたが、俺からして見ればまだまだ粗いからな」

「あの一、何で私まで?」

「聖には今度新型のテストをしてもらいたいからな。そのためのメニューだ」

件の新型ISのモニターに雪兎が選んだのは聖だった。特訓メンバーということもあって信用出来るし、このところの成績を見ても十分にモニターに適していると判断し

たのだ。

「し、新型ですか!？」

「今度持つてくるから頼むな。専用機扱いになるから申請の書類とか手間をかけさせるが」

「い、いえ!この時期に代表候補生でもないのに専用機持ちになるとか恐れ多いといいますか……」

「担任にはもう許可貰ったぞ? 聖なら安心だよ」

実は聖、既に代表候補生とあまり変わらぬ実力があるのだ。そこで、雪兎の知り合いである棗のところまで企業代表候補にしては? という話も出ており、名実共に専用機持ちの仲間入りになりそうなのだ。

「せ、先生まで……」

「聖、安心しろ。お前は私のパートナーも務めたのだ。きつと大丈夫だ」

メニューが特にハードになっていたのはこの三人だった。無論、雪兎自身は別で二次移行して向上した性能の把握の特訓しているため更にハードなのだが。

「教官の指導に比べればまだ楽な方だぞ?」

そんな中ピンピンしているのはラウラと雪兎くらいのもだった。

「これよりハードとかどんなのよ……」

「でも、確実にレベルアップはしてる」

「ええ、わたくしもBT兵器の稼働率が上がってきていますわ」

「私も大分紅椿の扱いに慣れてきたな」

雪兎の課すメニューは個人に合わせて徹底的に行われるため、成長がそれなりに実感できていた。

「またいつあんな事件があるかわからないからな。今月は学園祭で部外者の立ち入りもある。もしもに備えて鍛えておけよ」

「あまあまが言うと言説得力あるよー」

そんなこんなで特訓がハード化する中、雪兎には少し懸念事項があった。

（そろそろあの人々が接触してくる頃だけど、簪がいるからな……どうなることやら）
本音とは和解したものの、簪は未だに姉である楯無とは和解できていなかったのだ。

「引越し？」

そんなある日、雪兎と一夏に真耶から言い渡されたのは雪兎の部屋の引越しだった。

「はい。天野君が今デュノア社から依頼を受けて行っている作業も一人部屋の方が効率はいいだらうと学園側から打診がありました」

そう、リヴァイヴの改修はデュノア社からの依頼という形で雪兎に託されていた。改修の件をデュノア社に連絡したところ「こちらからの依頼という形でも願います。です。どうかよろしく願います」と逆にお願ひされてしまったくらいだ。それほどイグニッションプランでの遅れが酷いのだろう。一応、改修後のデータは好きに使っていいと言ったおいたのでデュノア社は再び咲くことはできるだろうが……シャルロットのリヴァイヴは雪兎が生産面を度外視して作っているので劣化版にはなるだろうが新生リヴァイヴがデュノア社の最後の希望なのだろう。社長も雪兎の本気を知って改心したらしく。雪兎とシャルロットが付き合っていると知るとシャルロットへの全面的な援助を約束してくれたくらいだ。

(つてか、これ。絶対に十蔵さんと更識動いたろ?)

一夏の護衛と特訓の件で原作では楯無が一夏の部屋に転がり込むのだが、今は雪兎が同室のためそれが出来ない。だからもつともらしい理由をつけて雪兎を別室に引越させるという手に出たのだろう。十蔵さんというのはIS学園の本来の学園長で用務員に扮している男性のことだ。

「俺は別に構いませんよ。確かに夜遅くまで作業することもありますから一夏に迷惑かけずに済みますし」

今後起こるだろうラウラや楯無の侵入イベントは一夏に頑張ってもらおうことにし、雪兎はその引越しを了承した。これが雪兎も学園祭のとあるイベントに巻き込まれる伏線とは雪兎も思ってもみななかったのだが。

翌日。一夏は放課後になっても特訓に姿を現さなかった。

「一夏、どうしたんだろう?」

(引越して早々か、動くのがお早いことで)

皆が心配しているのを他所に一夏は遅れてやってきた。

「お姉ちゃん……」

そう、生徒会長・更識楯無と共に。一夏の様子から察するに既に勝負に負けて専属コーチになると決まったのだろう。

「あつ、会長」

「あら? 簪ちゃんに本音ちゃんもいたのね」

だが、雪兎としてはこんな早く楯無が動くとは思ってなかった。何故ならまだ生徒集会も学園祭の話も出ていないからだ。楯無の専属コーチ発言にラバーズは少し不満そうな顔をするが相手は上級生で生徒会長。誰も何も言えなかった。ただ簪は納得がいかないとはかりに楯無を睨んでいたが。

(やつぱりまだ簪は楯無さんのことは納得してないか)

この姉妹の溝はまだ埋まっていはいないようだ。そんなことを考えていると楯無は雪兎を見つけ近付いてきた。

「天野雪兎君ね？」

「何ですか？更識楯無生徒会長」

「へえ、まだ一年生にはほとんど顔を見てせなかつたんだけど、君は私を知ってるのね？」

「お噂はかねがねつてことですかね？それで何の用でしょうか？」

「そうね。雪兎君、君は一夏君にどんな特訓をさせていたのかしら？」

「こんな感じですかね？」

雪兎はそう言つて一夏のトレーニングメニューを投影スクリーンに表示して見せた。

「なるほど……流石は篠ノ之博士の弟子ね。一夏君の白式についてかなり正確に把握しているわ」

「メンテナンスとかも俺が担当してますからね」

「虚が欲しい人材だつて言つてるだけはあるわね」

「貴女が動いたということはそのうちだと思つていいんですよ？」

「!?なるほど、君はそこまで知つてるのね。君とはまた近いうちにお話したいわね。出来れば二人で」

「生徒会長のご指名と有らば。ですが、数日お待ちを。こちらにも優先することがありますので」

優先することとはシャルロットのリヴアイヴのことだ。

「わかったわ。じゃあ、後日連絡をもらえるかしら？」

「連絡の必要がありますか？ 当面の間は貴女が一夏のコーチをするんでしょ？ 俺は技術者なのでお手並み拝見させてもらいますよ」

「そう？ なら都合のいい時は教えてね？」

その日は少し練度の確認をして特訓は終了となった。

疲れて先に帰った一夏といつの間にかいなくなった楯無を除くメンバーで雪兎は今後のことを話し合うことにした。

「簪、姉さんと会うのが辛いなら特訓を2グループに分けてやってもいいが」

「ううん、これは私の問題だから……. そうですね、雪兎は私の実家のこと知ってたんだ？」

「まあな、ちよつと調べたからな」

「簪、お前も姉と仲が悪いのか？」

「……. うん、ちよつとね」

その後、簪から二人の経緯について語られた。一応、雪兎も友達になった時に聞いていたため、少しだけ自身の推測も交えて補足を入れていたが。

「そういうことだったのか…….」

「雪兎からも色々聞いてお姉ちゃんの考えは一応わかってるつもり。でも、私はまだ納得はできてないの」

今までが今までだったため、箒同様に仲直りし辛いのだ。

「あんたも複雑な事情があったのね」

「俺は姉さんと喧嘩なんて滅多にしねえからあんま力になれなくてな」

「そんなことない。式式のこと雪兎にはお世話になったから」

「そういうことなら私も協力しよう」

同じく姉のことで悩む簪は箒に共感したらしく、協力を約束した。

(まあ、原作みたく変なすれ違いは起きてねえからまだマシな方なんだがな)

あれは楯無が変に干渉したのが悪いので早いうちに雪兎が干渉したのが今回は良い方向に作用したようだ。

(まったく、東さんといい、会長といい不器用なんだから……俺の出来る範囲で悲劇は覆してやる！)

雪兎は絶対に姉妹を仲直りさせると、雪華に誓った「手の届く範囲の仲間を守る」という誓いを果たすべく、雪兎は陰ながら動くことを改めて決意した。

35話 疾風は二度甦る 兎、会長と対話する

楯無が特訓に一夏のコーチとして参加するようになって数日。とうとう新生リヴァイヴが完成した。更に聖にモニターをしてもらうI Sとオマケで作っていた特殊装備のI Sも同時期に完成した。

「まさかデュノア社がこんなまで送ってくるとは思わなかったが……」

ついでにデュノア社に提出しておいた完成したリヴァイヴの量産試作機のデータを送ったらコアを除いた試作1号機を送ってきたのだ。

「コアはカスタムE V O Lに使う分を初期化して回して誰かにモニターしてもらおうか……確か山田先生もリヴァイヴ使ってたよな？」

元代表候補生で実力も確かで信用も出来る人物なので丁度良いかもしれないと雪兎は考える。

「さてと明日の放課後にも御披露目しますか」

翌日、特訓メンバーが揃ったところで雪兎が全員を集めた。

「全員呼び集めてどうしたんだ？」

「もしかして、完成したの？」

「ああ、リヴァイヴと新型二機がな」

「二機？ 聖用の機体だけではないのか？」

「いや、聖に新型渡すと本音だけ訓練機ってことになるだろ？ だからオマケで作ったやつだ」

そう言つて雪兎が取り出したのはリヴァイヴの待機状態であるペンダントと黄緑色の珠のペンダントと黄色のカチューシャだった。

「まあ、オマケと言つても手は抜いてないから安心しろ」

それぞれをシャルロット、聖、本音に手渡す。

「名前はそれぞれ、『ラファール・リヴァイヴⅡ』^{スコン}、『ウェーブ・ライダー』、『ナインテ

イル」だ」

「来て、リヴァイヴⅡS!」

「いくよ……ウエーブ・ライダー」

「おいでませ、ニンテイル!」

三人がⅡSを展開すると、シャルロットはカスタムⅡと似ているがシルエットは雪華に近いⅡSを。聖のウエーブ・ライダーは細身だが各所にハードポイントを持ち、大きなサーフボードのような武装を装備した白いボディに黄緑色の装甲を纏ったⅡSを。本音は着物のような黄色の装甲と何より特徴な9本の尻尾を持つⅡSを身に纏っていた。

「おー!あまあま、この子可愛いね」

「イメージは九尾の狐と狐巫女だ」

ぴよこぴよこ動く耳とゆらゆら揺れる尻尾が狐らしさを表現している。

「こつちのはサーフアー?」

「【バイザーボード】っていう専用武装だ。三種類拡張領域に入れてある。変形したり分離して本体武装にもなるぞ」

「雪兎、バイザーボードという武装はまさか……」

「箒は気付いたみたいだな?あれは雪片式型と紅椿の中間みたいな展開装甲武装だ。つ

まり、ウェーブ・ライダーは疑似第4世代機なんだよ。もちろん束さんにも意見もらって作ったから完璧だぜ？」

「またとんでもない機体のモニターになってしまった……」

そうは言うが聖は嫌そうな顔はしていない。

「これが、新しいリヴァイヴ……」

「とりあえずシャルが使い慣れてたカスタムIIの装備を発展させたパック〔C：カスタム〕を装備してるが、雪華と同じパックが使えるようにしてある。シャル用の各パックとStorageも作ってあるからパックの入れ替えはそれでやってくれ。今はカスタムEVOLと同じパックをインストールしてあるから」

「それじゃあ……〔G：ガンナー〕！」

すると、オレンジだった装甲が赤くなりパックが〔G：ガンナー〕に換装される。

「色まで変わるんだ……」

「そいつはシャル仕様のII Sだけの機能だ。量産試作機はリヴァイヴと同じカラーだよ」

「はあ!?!もう量産試作機までできてんの?」

「ああ、II Sの簡易版とも劣化版ともいえるやつがな。この前、コアのない外装だけの試作1号機がデユノア社から送られてきてな」

「あんた、もうデュノア社乗っ取ってない？」

事実、デュノア社では雪兎が開発主任の席を与える準備があるとかないとか。

「流石は篠ノ之博士の弟子ね……この短期間にこれだけのISを三機も開発するなんて」

「これには楯無も驚愕していた。

「リヴァイヴⅡSは雪華の応用ですし、実質新規で作ったのは二機ですけどね」

「そういえば試作Ⅰ号機はどうなさるんです？」

「リヴァイヴⅡは山田先生にでも貸し出そうかなど。山田先生も元代表候補生ですし、使ってるISもリヴァイヴでしたから」

「流石は雪兎。自重とか全然してない」

「自重なんてしても守りたいもの守れん。そんなことなら俺は自重なんてしないよ」

「雪兎らしい」

式式の時のことを思い出し、簪は何か納得したように頷いた。

「式式の時のパッケージもいくつか出来たから今度試しといてくれ。ほい、簪用のsto

rage」

「ありがとう、雪兎」

「簪までパワーアップするのか……これまで以上に気合を入れねば」

「わたくしも早く偏向射撃を習得しなくては」

四人がいきなりパワーアップしたことで特訓に気合を入れる筈とセシリア。

「私も今度雪兎に頼もうかなあ．．．．．本国に確認取る」

雪兎の改修で大きく化けたリヴァイヴを見て自分にも何か作ってくれないかなあ、と考える鈴。

「聖、少し模擬戦をしてみないか？新しい機体の性能を見てみたい」

「お願いしていい？私もこの子に慣れておきたいから」

ラウラは聖の専用機の性能が知りたいらしく、早速模擬戦を始めていた。

「反応速度も良い．．．．．これなら僕も自信を持つて雪兎のパートナーを名乗れるよ！」

「当たり前だ。そのリヴァイヴⅡSは雪華並みの俺の傑作機だぞ？」

シャルロットも新しくなったリヴァイヴの反応にご機嫌だ。

「あまあまー。この子ってどんなISなのー？」

「今から説明してやるよ」

本音も整備科志望ではあるもののやはり自分のISというものには憧れがあったらしく、はしゃいでいた。

「オートクチュール．．．．．専用パッケージまで用意してたんだ。今のが攻撃と機動力メインだとするとこのパッケージは．．．．．」

簪も storage に入れてあるパッケージのデータを見ながら新たな戦術を考え始める。

(本当にあの子は生徒会に欲しいわね……一夏君と一緒に引き込んだじゃおうかしら?)
そんな中、楯無も雪兎をどうにか味方にできないか考え出すのであった。

新型の御披露目も済み、雪兎は楯無を部屋に招いて話をすることに。

「それで話とは?」

「貴方に回りくどい話が必要なさそうね。生徒会に入ってくれないかしら?」

「俺の監視と引き込みですか?」

「やっぱりお見通しみたいね」

楯無の考えを雪兎は正確に見抜いていた。

「今日見せてもらった新型もそうだけど、君の技術力と観察眼は出来れば敵に回したくないの」

「俺も更識みたいな暗部組織は敵に回したくありませんよ」

「なら了承ってことでいいのかしら？」

「断つても一夏みたいに負かして会長権限使うんでしょ？」

「君相手だったら私でも簡単には勝てないと思うわ・・・私の I S の情報だって少しは知ってるんでしょ？」

「まあ、簡単に負けてやるつもりはありませんよ」

互いにそこまで意地を張るつもりがないのか雪兎は割りとあっさり生徒会の手伝いを了承した。

「出来れば整備部か料理部とかにも参加したかったですけどね」

「整備は確かに君なら大歓迎でしょうね。料理部は彼女さんかしら？」

「そんなところです」

「その辺はまた何とかするわ」

そこまで話すと楯無は姿勢を正した。

「ここから生徒会長としてではなく私個人としての話よ・・・簪ちゃんのこと、色々助

けてくれてありがとう」

簪のことを気にしてはいたが、自分が動くとは逆効果だと知って動けずにいた楯無は雪兎に感謝していた。

「あれは本音に頼まれて、俺個人も打鉄式に興味があつたから手伝っただけですよ」

「それでもよ……君が友達になつてくれるまで簪ちゃんは色々無理をしてたわ。あのまま一人でやっていたらいつか大きな事故を起こしてたかもしれないし」

事実、原作では飛行テスト中にエラーを起こして墜落。一夏が傍にいなかったら大怪我をしていただろう。

「そんなに心配ならちゃんと話し合えば良かったのに……どうも俺の周りの姉という人種は不器用なんですから」

「うぐっ」

「簪も今は貴女のことをそこまで嫌つてはいませんよ。ただ、今は貴女が簪をどう思っているのかわからなくて距離が掴めないだけですから」

「そう……」

「そつち関係は簪の友達として関係修繕に協力しますよ」

「うん、ありがとう」

どうも楯無は原作通り簪のことになると弱気になつてしまうようだ。

「そんなに弱気にならないでくださいよ、学園最強の名が泣きますよ？俺は一夏のことを貴女に任せます。だから簪のことは任せてください」

「これじゃあどつちが年上かわからないわね。一夏君はことは任せなさい。代わりに簪ちゃんのこと、お願いね？」

こうして雪兎と楯無の対話は終わった。雪兎の部屋を出た楯無はどこか憑き物が落ちたように気が楽になっていた。

「さてと、気も楽になったことだし、今度は一夏君に噂のマッサージしてもらって身体の方も解してもらおうかしら？」

頼りになる後輩を得て楯無は嬉しそうに現在居座っている一夏の部屋へと戻っていくのだった。

36話 学園祭準備と亡国機業 兎、メタの準備を始め

楯無と対話した翌日、全校集会にて学園祭の話が出たため、その日のホームルームで出し物を決めることになったのだが……

「何で学園祭の出し物の投票で一位になった部に俺が入ることになってるんだよ……」
結局何の部活にも入っていない一夏は景品にされていた。尚、雪兎は事前に生徒会所属で本人の希望から整備部と料理部も兼任ということが発表され集会が少し荒れたが、千冬の一喝で静かになった。雪兎の役職は原作で一夏がなる予定だった副会長である。

「一夏、それよりもクラスの出し物を何とかするべきだ」

何故なら……『織斑&天野のホストクラブ』『……とツイスターゲーム』『……とポツキー遊び』などと原作通りまともな案が何も出ていなかったのだ。

「却下！」

「……えーっ?!」

「言いたいことはわからんこともないが俺達二人への負担が大き過ぎるわ!あと今の案だと客に対して対応する人数も合わん!まともな案を出さないなら問答無用で休憩所

にするぞ!!」

非難の声は雪兎の一喝で沈黙した。正論過ぎて先程の案を強行出来る理由がなかったのだ。

「ならば、メイド喫茶はどうだ？」

そこでラウラが意見を述べた。

「確かに客受けもいいし、飲食店での経費回収も出来るな」

「そうだ。それに招待客もいるのだから休憩所としても需要があるはずだ」

普段のラウラからは想像できない意見にクラスメイト達は少々驚いていたが、実現性などを考えれば今までの案より随分とまともで、クラスメイト達はラウラの案に割りと乗り気である。

「メイド服については私にツテがある。その二人の執事服も含めて借りられないか聞いてみよう」

ツテとは@クルーズのことだろう。どうやらラウラはあの制服が少し気に入っているようだ。

「なら、1年1組はメイド喫茶・・・いや、御奉仕喫茶だな。それで決定でいいな？」

「「はーいー!」」

こうして1組の出し物は御奉仕喫茶に決定した。

「クラス委員、俺なんだけど……」
クラス委員である一夏を半ば無視して。

その日の特訓終了後、一夏と楯無とメイド服の件を連絡しにいったラウラを除くメンバーは食堂に集まっていた。

「ーという訳で、会長も簪とは仲直りしたいんだってよ」
面と向かつては言えないと言う楯無に代わり、雪兔が先日のお話を一同に聞かせていた。

「お姉ちゃん……」

信じたいけどまだ信じ切れないといった表情を見せる簪だが、少なくとも否定的では

なさそうだ。

「俺が話してみた感想だが、会長つてどうも説明下手つていうか言葉が足りないというか……」

「あー、なんとなくあまあまが言ってることわかるよー」

「うん、今のは私にもよくわかった。お姉ちゃんつていつも肝心なところ言わないから……」

つまり、「簪が大事だから」その一言さえ伝えていればこんなややこしい事態にはならなかったのだ。

「束さんの場合は大事つてのは伝えくれてるが、本心的なもんが見えなくて信用できない……違うか、簪」

「う、うむ、その通りだ……」

簪と束の場合は束の普段の態度のせいかな本音が見え難く、どこまで本気なのかかわからないのだ。

「俺が二人に言えるのはもう少し姉を信用してやれつてことと、もう少し話をしてみろつてことくらいだ」

「簪はすぐに会えないからまた何れつてことになるけど。簪はすぐ近くにいるんだ。明日、特訓の後くらいに時間取つてもらおう俺から言つておくから少し話してみろよ」

「うん、雪兔がそう言うなら私、お姉ちゃんと話してみる」

「つて話になりました。なんで、少し簪とちやんと話してやってください」

食堂での話し合いを本人達の許可を得て雪兔は楯無に伝えた。

「ごめんね。こんなメツセンジャーみたいなことさせて」

「そう思うならさっさと仲直りしてください。それで俺の仕事が一つ片付くんですか
ら」

「はい、善処します」

「この手の話だと楯無は何故か雪兔に強く出れない。

「……それと、学園祭の時に一夏に接触してくる企業の人間がいたら警戒しておいてください。おそらく、最近起きているIS強奪グループの人間です」

「聖ちゃんや本音ちゃんも貴方の新型を持つてるけどそっちはいいの?」

「俺がそんなこと対策してないけども? 盗難防止措置はしてありますし、出来るだけ他の専用機持ちと一緒に行動するよう言っております。でも、一番狙われるとしたら一夏です」

「わかったわ。私の方も警戒はしておくわ」

(亡国機業、俺がいる限り悪いがお前らに好き勝手はさせねえからな)

楯無との話を終えて雪兎が部屋に戻ると部屋の前にシャルロットの姿があった。

「シャル？どうしたんだ、一体」

「うん、ちよつと雪兎に聞きたいことがあって」

「とりあえず部屋に入れよ」

他人には聞かせられない話題だと察した雪兎はシャルロットを部屋に招き入れた。

「それで？」

「うん、前に雪兎が言つてたIS強奪犯の話だよ」

以前、雪兎は自身を知る原作知識で起きた大きな事件について大まかに聞かされてお
り、学園祭で起きる一夏襲撃事件についても聞いていたのだ。

「犯人グループは亡国機業っていう全貌がわかってない組織だ。俺が知ってる構成員は
四人でスコール、オータム、エム、レインで、今回動くのはオータムとエムだ。使用I
Sはアメリカの第2世代「アラクネ」とイギリスの「サイレント・ゼフィルス」だ」

「!?サイレント・ゼフィルスってセシリアのブルー・ティアーズの……」

B Tシリーズ2号機であるサイレント・ゼフィルスが奪取されているという雪兎の言
葉にシャルロットは驚愕する。

「亡国機業つてのはそういう組織なんだ。まあ、使用機体さえわかれば対策のしよ
うなんていくらかでもあるからな」

すると、雪兎は投影モニターにアラクネとサイレント・ゼフィルスのデータを表示す

る。

「アラクネはデータがあつたから詳細まではつきりしてる。そして、サイレント・ゼフィルスは俺の記憶通りならブルー・ティアーズと同じ対応でいけるはずだ。まあ、偏向射撃も使ってくるから警戒は怠るなよ?」

「偏向射撃ってブルー・ティアーズのBT兵器が最大稼働した時に使えるっていうあれだよ?」

「ああ、それを苦もなく扱うやつが亡国機業にはいる。そいつがエムだ。それで、一夏に接触してくる巻上礼子を名乗る女がアラクネを使うオータムだ」

そんな組織すらメタを張ろうとするのが雪兎なのだ。

(悪の組織っぽいけど、亡国機業って組織の人達には同情するよ・・・)

理由は不明だが、各国のISを強奪している亡国機業。となれば次に一夏の白式や雪兎のISが狙われるのは無理もないだろう。だが、相手が悪過ぎたのだ。このメタに定評がある雪兎に事前に使うISを把握されるというのがどれだけ致命的なことなのか、亡国機業はこの学園祭で思い知ることになる。

37話 学園祭開幕 兎、更識と一緒に妨害工作に回る

雪兎が設けた更識姉妹の話し合いの場によつて姉妹が抱えていたすれ違いも解消され、姉妹の仲は改善された。長年簪との仲に悩んでいた楯無は雪兎に感謝のあまり抱きついてしまい、シャルロットが嫉妬のあまり楯無を雪兎ごと射とうとするという事件もあつたが、それ以外は特に問題なく学園祭の準備は進んでいた。

「シフトはこんなもんか……」

クラス委員として様々な準備に終わっていた一夏に代わり、雪兎が人員配置や休憩時間のシフト、厨房担当への指導などを行っていた。休憩時間のシフトにはラバーズ達の色々言つてきたが、休憩時間をずらして1組の三人は一夏と少しずつ回れるように調整して黙らせた。鈴？違うクラスまでは手が回らないので一夏に投げておこう。あと、クラスの善意で雪兎とシャルロットは同じシフトで休憩時間に入れるのだが……

「すまん、シャル。一緒に回ることに自体は出来そうなんだが生徒会の見回りも兼ねることになりそうだ」

そう、一夏への襲撃を警戒し雪兎も楯無に協力して見回りをすることになっており、シャルロットとゆつくり学園祭デートとはいけそうにないのだ。

「う、ううん。それはあの話を聞いた時から覚悟はしてたから……（亡国機業め……一年に一回しかない学園祭デートのチャンスだったのに）」

先日亡国機業に同情していたことも忘れ、シャルロットは亡国機業への徹底した妨害を決意する。

（恋する乙女の邪魔をするとどうゆうことになるか……たつぷり教えてあげるよ）

この時、作戦を前日に控えたオータムとエムが背筋に悪寒を感じたんだとか。

学園祭当日。1年1組の御奉仕喫茶は大盛況だった。それもそのはず、学園で二人しかいない男子である一夏と雪兎が接客をしており、その姿が執事服なのだ。これが受けないわけがない。雪兎にはシャルロットという彼女がいるのは既に学園の常識になり

つつあるが、せめて接客を受けるだけでも、という生徒は少なくはないのだ。また、店員とちよつとしたゲームをして勝つと一緒にツーショット写真が撮れる。そして、料理は全て雪兔監修ときた。これで盛況にならない方がおかしい。

「三番テーブルにサンドイッチ二つお願いします！」

「五番テーブル、ロールケーキとアイスティーのセット三つです」

「りよ、料理長！ヘルプです！」

途中、鈴が自分のクラスの中華喫茶の制服で来店したり楯無が新聞部の黛薫子を連れてやってきたりもしたが、雪兔は料理長として注文を捌きながらあることを警戒していた。そしてそれは楯無が一夏の代わりをするからと休憩に入ろうとしていた時に訪れた。

「ちよつといいですか？」

その女性は出来る営業担当といった印象を受ける出で立ちで一夏に接触してきた。

(来たか……)

雪兔はすぐにシャルロットと楯無にアイコンタクトで知らせる。

「失礼しました。私、こういう者でー」

「すいません、店内でそのようなことは遠慮願えませんか？」

名刺を渡そうとする女性をシャルロットがトレイで遮る。

フトクリームを持った客（当然仕込み）にぶつかられたり、その他諸々の手でオータムは徹底的に妨害を受けた。

（何なんだよこの学園はああああ!!）

これだけ自分にはかり色々起きては雪兎の推測通り我慢強くないオータムはぶちギレる寸前であった。それが全て雪兎と楯無の手平の上だったと知ったら作戦など無視して暴れ回ったことだろう。

（くそつ、こうなったら・・・）

そして、オータムは雪兎達の予定通り強引な手段へとやり方を変えることにした。

少し時間は遡り、とある三人がIS学園の正門にやってきていた。

「ついに、ついに、ついにっ！女の園、I S学園へと……来たああああ!!」

「気持ちわかるがもう少し落ち着けよ、弾」

「お兄、うるさい」

それは一夏が招待券を渡した弾と雪兎に招待券をもらった数馬、そしてシャルロットに招待された蘭の三人だった。原作では弾だけだったのだが、雪兎が「数馬も誘ってやるか」と招待券を送り、弾だけ誘って蘭を誘わないのは不公平ということで誘う相手のいなかったシャルロットが蘭に招待券を渡したのだ。

「仕方ねえだろ？I S学園なんてこんなことでもなけりや来れねえんだから」

「そりやそうだけだよ」

少しがつつき過ぎではないだろうか？

「ここで一夏の迎えを待つ手筈だったよな？雪兎とは夏休みに会ったけど一夏とは卒業以来だな」

「シャルロットさんには後でお礼言わなきゃ」

そんなことを話していると。

「そのの貴方達」

I S学園の制服を来た三年生の生徒が声をかけてきた。

「「は、はいー」」

「貴方達、誰かの招待？一応、チケットを確認させてもらっていいかしら？」
「ど、どうぞ」

生徒にそれぞれチケットを見せる三人。

「あら？配布者は織斑君に天野君、それからデユノアさんね」

「知り合いなんですか？」

「織斑君と天野君のことを知らない生徒はいないわ。それに天野君はデユノアさんとの噂もあるし、一緒に生徒会で仕事してるもの」

声をかけてきた生徒は生徒会会計を務めている布仏虚。本音の姉だった。

「そ、そうなんですか」

この時の弾は挙動不審だった。何故なら虚は弾の好みのタイプの女性だったからだ。

(な、何か話題は……)

「あ、あのっ！」

「何かしら？」

「いい天気ですね！」

「そうね」

この時、弾は自分の会話センスに絶望していた。そんな弾を不思議そうに眺めながら虚は「楽しんでいってね」と言い残し去っていった。

「ドンマイ、弾」

「はあー。お兄、あの人雪兎さんの知り合いなんだから後で聞いてみたら？」

弾のあまりの落ち込みように流石の蘭も同情したのか、微かではあるが希望を与える。

「お、おう……」

それから三人は一夏が来るのを大人しく待つのであった。

それから一夏と合流した三人はしばらく一夏と学園祭を回り、蘭の希望で1年1組の教室を訪れた。

「おっ、来たな三人共」

「いらつしやい」

「あつ、雪兔さんにシャルロットさん！」

そんな四人を丁度休憩時間になったらしい制服姿の雪兔とシャルロットが出迎えた。

「写真で見せてはもらつたけど、すげえ美少女じゃねえか、雪兔の彼女……おっと、自己紹介がまだだったな。一夏と雪兔の友人の御手洗数馬だ。よろしく」

「シャルロット・デュノアです。こちらも雪兔達から話は聞いてるよ」

「シャルロットさん、チケツトありがとうございます」

「ううん、僕は誘う相手いなかったから丁度良かったよ。今日は楽しんでいってね」

「はい！」

原作と違い一夏を取り合う仲ではないためか二人は割りと仲が良い。容姿が似ていれば姉妹と言われても違和感無いレベルだ。

「一夏、すまんが休憩終了だ。会長も生徒会の方に行つて人手が足りなくなりそうなんだ」

「わかった。それじゃあ、三人共、俺は仕事戻るけど楽しんでいけよ」

雪兔と入れ違いで仕事に戻る一夏が去ると、蘭が雪兔に先程の生徒・虚について訊ねた。

「生徒会所属の三年生？ ああ、虚さんか」

「やっぱり知り合いだったか」

「虚さんがどうかしたのか？って、弾。なんだそのすがるような顔は」

「あー、どうもうちのお兄がその虚さんに一目惚れしたらしくって」

（あー、原作でもそんなことあったなあー。アニメだと虚さん自体出ないから削られたエピソードだったな）

「虚さんって言うのか・・・」

「こりや重症だな。何やった？」

「何か話そうとして「いい天気ですね」って」

「・・・ドンマイ、弾」

（原作通りなら虚さんも弾のこと気にしてたはずだし、虚さんへちよつと探り入れとくか）

弾に訪れたせっかくの春なのだ。友人として応援しようと雪兎は思うのだった。

「ところで雪兎はシャルロットさんと休憩か？」

「ああ、クラスメイトが休憩時間合わせてくれてな」

「それなら邪魔するのは野暮だな」

「悪いな」

「いや、チケットくれただけでも感謝してるって」

「じゃあ、楽しんでけよ？」

「おう。雪兔もな」

「そんなやり取りをして雪兔達も弾達と別れて学園祭を回ることにした。

38話 戦う灰被り姫と王子と騎士 兎、演劇に巻き込まれる

雪兎とシャルロットは弾達と別れた後、見回りを開始した。途中でオータムが一夏を連れ込むと思われる生徒会の出し物【シンデレラ】の行われるアリーナもチェックし、雪兎はとある仕掛けを施していた。

「よし、これでいいな」

「どうしてそこまで思い付くのかなあ」

それは更衣室のセキュリティに細工がされると細工されたように見せかける仕掛けで、実際は細工を無力化するという代物だった。それは一夏を隔離しようとするオータムに対する仕掛けだ。

「この手のやり口は束さんの教えだ。ちゃんと会長にも許可取ったから問題無い」

「で、演劇中に一夏がいなくなつてここに反応があれば救援にいくつてことでもいいの？」

「ああ、俺はもう一人の方を相手にするからオータムはシャルロットに任せる。アラクネのスペックは把握してるな？」

「誰に言ってるの、雪兎。そつちこそサイレント・ゼフィルスの相手でしょ？」

「ブルー・ティアーズの強化仕様程度で俺がやられるとでも?」

今回は福音の時のような強化フラグなどもないので雪兎は最初から一切遠慮するつもりはない。シャルロットもリヴアイヴⅡSの扱いにも慣れアラクネとオータムのデータは頭に入っている。その上、二人はそれぞれ新たなパックまで準備している。どう考えてもオーバーキル前提である。

「オータムはいざとなったらアラクネからコアを抜いて自爆させてくると思うから注意しろよ?」

「うん」

「さて、そろそろ演劇の方の準備にいかねえとな」

「まさか僕達まで出ることになるとはね」

実は雪兎とシャルロットも演劇で役があるのだ。その役とは王子の護衛という原作にない役だった。

「……何か嫌な予感がしてなんののだが」

「そ、そうかな?」

雪兎が何か不穏なものを感じ取るとシャルロットは雪兎から目を逸らした。

(……まさか、な)

雪兎はある可能性に至るが、それを否定する。しかし、この時シャルロットをちゃん

と問い詰めておかなかつたことを雪兎は後に後悔することになる。

シンデレラ。誰もが大抵聞いたことのあるお伽噺の一つで、義理の母とその娘である義理の姉二人にいじめられていたシンデレラが魔法の魔法でドレスアップして舞踏会に行き王子のハートを射止めるが、魔法の制限時間である12時が過ぎ慌てて帰ろうとする中、ガラスで出来た靴を落とす。王子はその持ち主を妃にするとシンデレラを探し見事結ばれる。要約するとこんなお話だ。黒い原文の方だと色々凄まじいらしいがそこは置いておこう。シンデレラストーリーなどと言う言葉が生まれる程有名なこのお伽噺だが、更識楯無が生徒会の出し物として改変された演劇「シンデレラ」はとんでもない内容だった。

- 1、シンデレラはスパイである。
- 2、シンデレラは数々の舞踏会をくぐり抜けた歴戦の兵士である。
- 3、シンデレラが舞踏会に参加する目的は王子の王冠に隠された国の機密情報を奪取するためである。

色々突つ込みどころ全開である。そんな王子役選ばれたのは原作通り織斑一夏。原作と違うのは王子に二人の護衛役がいることだった。一人は護衛の騎士である雪兎（舞踏会なので軍服）。もう一人はメイド兼護衛のシャルロット。護衛は劇中にオータムを警戒するためであり、本当に護衛なのだ。

「雪兎、シンデレラって何だったっけ……」

劇の前説をする楯無のナレーションを聞き、王子の衣装を身につけた一夏が呟く。

「気にしたら負けだ。とりあえず王子はその王冠を守ることだけ考えていてください」

「護衛は僕達がしますから」

原作通りに一人で五人を相手にするよりは遥かにマシな状況ではあるが、四人共原作より強くなっているため油断はできない。

「はあっ！」

そんな中、一番最初に仕掛けてきたのは鈴だった。鈴は偏月刀を片手に一夏に襲いかかるも雪兎が何処からか取り出した片刃の直刀で弾くと、弾かれて後方に跳んだ鈴にハ

ンドガン（弾はゴム弾）で追撃する。

「わつとつと、相変わらず容赦ないわね、あんた」

「仮にも護衛だ。手は抜かん」

「た、助かったよ、雪兎」

「油断大敵ですわ!」

鈴の襲撃を防ぎ、一夏が気を緩めた瞬間、一夏を潜んでいたセシリアの狙撃（ゴム弾）が襲うも、今度はシャルロットが防弾シールドで弾丸を弾く。

「僕がいるのを忘れちゃ困るよ、セシリア」

「今のは完璧な奇襲だったはず!」

「僕達が狙撃ポイントを予めチェックしてないとも?」

「ま、まさか鈴さんの襲撃の直後から死角のカバーを!」

そう、オータムへの仕掛けを行った際についてこの舞台の下見もしており、セシリアが潜んでいた狙撃ポイントなどは全てチェック済みだったのだ。

「セシリア達には悪いけど、これも仕事だからね」

そう言うのとシャルロットはシールドを量子変換してアサルトライフル（ゴム弾）に持ち変えるとセシリアのいる狙撃ポイントを攻撃する。

「高速切替!?!それ、反則なんじゃ」

「護衛対象の一夏は攻撃手段ないからな。人数差のハンデとして会長の許可は貰ってる」

「直刀をしまいもう一丁ハンドガンを取り出した雪兎は容赦なく鈴に発砲する。

(やつぱりこのコンビ厄介すぎいい!!)

用意周到、抜群のコンビネーション、そして雪兎は近接よりの万能型、シャルロットは射撃よりの万能型と穴も少ない。一方の鈴達は互いに王冠を狙うライバル同士であるためコンビネーションなど皆無である。どちらが有利かなど火を見るより明らかだろう。

「やはりこうなったか」

「私達も参加させてもらおうか」

そこに姿を現したのは箒とラウラの二人だった。

「げっ、箒、ラウラ」

「来ましたわね」

こうして四人のシンデレラがこの場に揃う。

「やつぱさうなるよな」

「でも、僕達が簡単に抜けるとは思わないでね?」

しかし、雪兎とシャルロットも負けるつもりはないよう各々武器を構える。

「これ、絶対シンデレラじゃない……」

そんな中、一夏の虚しい声が響くのだった。

その後も激しい戦いが繰り広げられていた。

「そろそろ弾切れじゃないの?」

「問題無い」

ハンドガンの弾切れを狙っていた鈴だったが、雪兎はマガジンを外しそのまま落としながら量子変換し、新たなマガジンを同じ位置に出すとガンスピンをさせてマガジンを嵌め込む。

「ガンスピリロード!? あんた何処の魔王様よ!」

そう、その技能は某奈落から這い上がった魔王様が得意としていたリロード法だったのだ。

「練習したら出来た」

「これだからあんたは!」

「やはりお前は厄介だな」

雪兔が相手になっているのは鈴とラウラで、ハンドガンで片方を牽制しつつ、もう片方を直刀で抑える雪兔。

「そんなんじや一夏の王冠は獲れんぞ」

攻めあぐねている鈴とラウラに今度は二刀流となった雪兔が斬りかかる。

「くっ、当たりませんわ」

一方で少し離れたところでシャルロットの相手をする箒とセシリアもシャルロットを攻略出来ずにいた。

「シャルロットが強敵なのは知っていたが、ここまでとは……」

高速切替による武器交換があるとはいえ、二対一で攻めきれないとは思っていないなかった箒とセシリア。雪兎と並び立とうとするシャルロットの成長は凄まじかった。

「これくらい離せば十分かな？」

「はっ!?!い、一夏さんは!?!」

「これがお前の狙いか!?!」

気付けば箒とセシリアは一夏を見失っていた。

「そういうことさ。じゃあ、僕はそろそろ雪兎と合流しないといけないから」

「ま、待てっ!」

その声も虚しくシャルロットはスタングレネードで行方を眩ませてしまう。

「は、嵌められましたわ」

「くそっ、一夏を探すぞ!」

スタングレネードの閃光から回復すると二人は再び一夏を探しに舞台を駆けるので

あつた。

「シャル、お疲れ様」

「雪兎もね」

シャルロットが箒とセシリアを撒いて事前に打ち合わせていた合流ポイントに向かうと既に一夏と雪兎の姿があつた。どうやら雪兎も鈴とラウラを撒いたらしい。

「め、目が……」

一夏は雪兎の放つた閃光玉の光をまともに食らってしまったのかム○カのようなことを呟いている。

「ふう、やっと落ち着けるぜ」

「鈴とラウラの相手してたんだもんね、当然だよ」

雪兎を労いつつ、シャルロットはハンカチを取り出して片手で雪兎の汗を拭おうとするが……

「おい、シャル。その手はなんだ？」

残るもう片方の手は雪兎の胸にあるブローチを狙っていた。

「な、なんのことかな？」

すると突然、楯無のアナウンズが入る。

『実は護衛の少女の正体は某国のスパイ。しかし、彼女はもう一方の護衛の少年に恋をしてしまい、それが本国にバレてしまった少女は護衛の少年が持つもう一つの機密情報を隠したブローチを奪えば見逃してもらえると言われ少年のブローチを密かに狙っていたのだ』

微妙にシャルロットの境遇に似た解説が入り、味方だと思っていたシャルロットまでもが雪兎の敵となってしまう。

「雪兎、ごめんね……」

「シャル……まさか、部屋割りか！」

ここで雪兎は事前に仕込まれていた事態の全貌を知る。そう、今の雪兎の部屋は一夏と同様に一人で部屋を使っている。それを利用して劇を盛り上げるべく楯無はシャル

ロットに雪兔のブローチを奪えば再び雪兔と相部屋にしてもいいと悪魔の囁きをして
いたのだ。

「謀ったなあ！更識楯無いいいいいい！！」

そして、舞台上に雪兔の絶叫が響くのであった。

39話 シンデレラの幕引きと亡国の足掻き 兎、彼女との攻防

楯無 side e

『謀つたなあ！更識楯無いいいいいい!!』

舞台上で雪兎君の絶叫が響く。すると、本音ちゃんが少し青ざめた表情でこちらを見る。

「かいちよー、ちよつと今回はマズイかもよー」

「……もしかして、私、彼の逆鱗に触れちゃった?」

「うん、前におりむーやりんりに聞いたんだけど……」

そこで私は「顔面ウシガエル事件」と呼ばれる事件の顛末を聞かされた。

「……マズイわね」

更に集めた情報では一夏君に想いを寄せる専用機持ちの娘達がクラスで問題行動を起こすと雪兎君は罰として時間無制限試合（メタ装備）×十数回というえげつないメニューで心を折りにくるらしく、気の強い彼女達でも雪兎君には逆らわないそうだ。私に対しても簡単には負けなそうだったので私の霧纏ミステリアス・レイディの淑女レイディに關しても情報を持つ

ているに違いない。そう考えると私も顔が青ざめているのだと自覚する。

「か、かいちよー．．．あまあまから伝言。「後で覚えておけよ、更識楯無」だそうです」

コアネットワーク経由で連絡がきたらしく、本音ちゃんの I S 【ナインテイル】の待機状態であるカチューシャに狐耳が生えている。

（ヤバい、間違いなく彼は怒ってる）

「お嬢様、ここは変に誤魔化さずに謝った方が賢明かと」

虚の言う通り普通に謝るのが最善だろう。

「うん、今回の件は後でちゃんと謝ります」

そう誓い、私は舞台上を映すモニターに視線を戻した。

side out

「雪兎、そのブローチを渡して！そうすればまた二人一緒（の部屋）にいられるんだよ！」

楯無の甘言に唆されたシャルロットは雪兎にダガーとハンドガンを手を雪兎に言う。

「シャル、なんでそんな甘言に乗ったんだ！」

「仕方ないじゃないか！僕は雪兎とずっと一緒にいたいんだもの！」

始まった二人の戦いは互いに学生とは思えないガチ戦闘で閃光から回復した一夏や雪兎の絶叫を聞いて駆けつけた箒達も介入出来ないものだった。また、一夏はその二人のど真ん中に位置しており、そこに突入する勇気は箒達にはなかった。

「雪兎は僕と一緒（の部屋）は嫌なの!？」

「そんなこと言ってねえだろっ！俺が気に食わないのはその為にこんなことしてることだよ！」

下手に突入すれば間違いなく二人の銃弾の雨と投擲された刃の餌食になるだろう。一夏に当たらないのは単に彼らが一夏に当たらないように配慮して攻撃しているからだ。この二人の技量が他と隔絶しているのがよくわかる。

「僕には会長の提案を飲むこうするしか雪兎と一緒（の部屋）にいられないのに！」

「そんなことしなくたって俺はお前と（恋人として）いられる！だからもうそんなことは

やめろ！」

「ゆ、雪兎……僕、僕はっ！」

雪兎が必死に説得するもシャルロットは今さら止める訳にはいかず涙を流しながらも雪兎のブローチを狙うべく雪兎に突撃する。

「この馬鹿がつー！」

それを雪兎は二丁のハンドガンでシャルロットの武器を射ち落とし抱き締める。

「雪兎、僕……」

「何も言うな。悪いのはこんなことをお前に命じた馬鹿共だ。お前は悪くない」

「うわああああん！」

雪兎は優しく抱き締められシャルロットはどうとう泣き出してしまふ。

(シャルを泣かせてただで済むと思うなよ？ 更識楯無……)

実はこの演劇、観客席や学園のモニターなどで観られており、今までの一夏を巡る騒動より雪兎とシャルロットの一幕の方が観客受けしていた。特に文芸部などは「この一幕を切り取って物語書けないかしら？」などと考えていたくらいだ。しかし、ここですつの問題が発生した。

「あれ？一夏は？」

そう、一夏が消えていたのだ。

「あの弾幕の中でどこへ……」

「シャル」

「うん」

そして、泣き止んだシャルロットは雪兎の言いたいことを理解すると行動を開始した。

その一夏はというと巻上礼子ことオータムに連れられて雪兎の仕掛けが施された更衣室にいた。

「ここまで来れば大丈夫だろう」

「貴女は……あの時の」

ちゃんと自己紹介出来ていないため巻上礼子という偽名すら知らない。まあ、キレかけのオータムは巻上ではなくオータムとしての素の話し方をしているため一夏もすぐには気付かなかつた。

「何で俺を？」

「なんだ、お前は気付いてなかったのか……私はな、お前の白式をいただきにきた悪の組織の美女だよ！」

そう言うところからアラクネの特徴でもある蜘蛛の脚のようなサブアームがスーツを突き破って現れる。

「くそっ！」

白式を展開して対抗しようとするが……

「下がってて、一夏。彼女の相手は僕がするから」

そこにシャルロットが姿を現す。

「て、てめえ！ どうやってここへ!？」

「ああ、雪兔っていつもこんな気分だったんだ……学園祭には外部の人間が来るんだよ？ 君達亡国機業みたいなのが入り込んでくるのなんてお見通しだよ。対策してないとも思ってた？」

「そんな馬鹿なっ!?! ってことはあの邪魔も全部……」

「ご名答。全部僕らの妨害だよ。そこで君が怒り心頭でこんな手荒な真似することも全部雪兎と楯無さんの手の平の上さ」

「あ、相変わらずえげつねえ……」

敵対するものへの容赦の無さは尋常ではない。だが、その肝心の雪兎の姿が見えないことに一夏は疑問を持つ。

「あれ？雪兎は？」

「ああ、雪兎ならもう一人来るだろうお仲間の相手をしに行つたよ。こつちは僕に任せ
てね」

「た、たかが一人で何ができる！」

援軍がシャルロット一人だと知り、侮られていると感じたオータムが吼えるが彼女は
まだ理解していなかった。

「たかが一人？一人で十分だよ。そのIS、アラクネの対策はちゃんとしてきてるから」
「な、何だと……？」

ここでオータムは漸く事態の深刻さに気付いた。相手は自分達亡国機業が動くのを
知っていた。更に自分の行動まで完全に先読みされ、使用するISすらバレている。つ
まり、戦う前から詰んでいるということだ。

「言つたよね？全部雪兎と楯無さんの手の平の上つて」

そう言つてシャルロットはリヴァイヴⅡSを展開する。

「ラファール・リヴァイヴ? いや、違う、そのⅠSは一体……」

オータムは未知のⅠSを目にし硬直してしまふ。対してシャルロットは手始めに【G・ガンナー】を展開し、シャルロットはシールドガトリングとリヴァイヴⅡ用のソーダアサルトライフル【グリフォン】を両手に構える。

「さあ、蹂躪を始めようか?」

学園祭デートという雪兔との一時を邪魔された乙女の怒りがここに炸裂する。

「簡単にやられないでね? 歓迎の準備はしっかりしてきたから」

そう笑顔で言うシャルロットだが、眼が笑っていない。そして、オータムに更衣室のことなど考えていない鉄の豪雨が襲いかかった。

ズガガガガガ!!

「くそがあああああ!!」

これには堪らずオータムはアラクネを動かし回避行動に移る。途中、サブアームからレーザーを放とうとするも、サブアームを攻撃態勢にした瞬間にサブアームが射たれていく。それが繰り返されアラクネは最大の特徴であるサブアームを削られていく。

「う、嘘だろ!?!」

「何度言わせるのかな? 僕はちゃんと対策してきたって言ったよな?」

そのままアラクネはどんどんサブアームを失っていく。

（やべえ、シャルロットがキレてる……）

いつになくシャルロットの攻撃のキレがよく、見ていただけの一夏にもシャルロットがガチギレしているのがわかった。

「こ、こんなはずじゃ……」

サブアームを全て失い、アラクネはオータム自身の手足以外残っていなかった。

「くそっ！」

そこでオータムは撤退することを決めるが、シャルロットが逃がすはずもなく「J：イエーガー」に換装するとオータムの前に先回りし「グリフォン」のソードを突き付ける。

「逃げられるとでも?」

「戦闘中にパッケージ換装だ?!まさかそのISはフランスで開発された新型の……」

「オリジナル原型だよ?亡国機業のオータムさん」

現在の機体を凌駕すると言われているフランスの新型の原型であるISに第2世代機であるアラクネで勝てるはずもなかったのだ。

「チクシヨウ!!」

そして追い詰められたオータムはアラクネからコアを抜き取りアラクネの自爆シー

ケンスを起動させ、アラクネを乗り捨てる。

「シャルロット！」

「大丈夫！これも想定済みだから」

一夏はアラクネが自爆シーケンスに入ったことを知り、シャルロットに警告するが、それすらも雪兎達には読まれていた。今度は「W：ウィザード」に換装し、グラスパービットでアラクネを囲い、アラクネのシステムを支配して自爆シーケンスを停止させ、オータム本人もライフエンサーで囲い逃げ場を奪う。

「チエックメイト、だね」

シャルロット対オータムの戦いは完全にメタを張っていたシャルロットの圧勝にて終わり、オータムは剥離剤リムーバーを使う間も与えられず捕らえられたのだった。

40話 雪兎VSエム 兎、マドカと戦う

マドカside

『エム、オータムが捕まったわ』

その通信は私がIS学園に向かっていて途中にきた。

「そうか。あれだけ大きな口を叩いておいてこの様か」

『救助に向かってくれる?』

「拒否権などないのだろうか?了解した」

私の体内には監視用のナノマシンが投与されている。そんな私が逆らえる訳がない。

『でも、篠ノ之束博士の弟子、天野雪兎とは出来れば交戦しないで。彼は不確定要素が強すぎるわ』

天野雪兎。織斑一夏と同時期に発見された二人目の男性IS操者にしてISの開発者である篠ノ之束の弟子とされる人物だ。彼に関しては学園内にいるスパイですら全貌を把握できておらず、高い戦闘能力と開発力、そして謎の情報収集力を併せ持つ異才。オータムに関してても彼が何かしら手を打ったのだろう。となれば……

「スコール、それは無理な話だ。既にこちらが捕捉されている」

そう、彼は私が何処から来るのか知っていたかのように私を待ち受けていた。

『何ですって!?!今すー』

「スコール?通信妨害か」

この時、私は気付くべきだった。コアネットワークを用いた通信が通信妨害されると
いうのがどういことかということを、そして今、私が使用する I S が
どのような I S だったのかということをして・・・

s i d e o u t

少し時間を遡り、シャルロットを一夏の元に向かわせた雪兎は楯無や千冬との打ち合
わせ通りにセシリアと鈴を連れて哨戒に出ていた。

「セシリア、お前には言っておかないといけないことがある」

「今、この場でということは襲撃犯に関することですか?」

「ああ、今回の襲撃者は亡国機業という組織の連中だ」

「それって最近、各国のISを強奪してるといって……」

「その通りだ、鈴。俺の独自の情報網でその連中は先日イギリスのとある施設を襲撃したという情報が入った」

「まさか!?!」

「ここでセシリアは何故雪兎が自分にその話をするのか理解する。」

「BT2号機【サイレント・ゼファイルス】それが強奪されたISの名だ」

「BTってセシリアのブルー・ティアーズの……」

「ああ、同じコンセプトの機体だ。だが、試験用のブルー・ティアーズに対してサイレント・ゼファイルスは実戦用だ。この意味がわかるな?」

「それであんたは【W:ウィザード】で来たわけね」

「祖国の、それも自身のISと縁のある機体がある機体があるのと知り項垂れるセシリアに対し、鈴は雪兎が装備したパックが何を警戒してのものかを察する。」

「それもあるが、もう一つこいつで通信妨害を張るためだ。お仲間連絡取られると面倒だからな」

「あんだ、本当に容赦ないわね……」

「ついでに言うところの通信妨害エリア内ではコアネットワーク経由の通信とか全部出来なくなるから二人は範囲外にいてくれ。特にセシリア、お前のブルー・ティアーズはビットも使えなくなる。だからすまんが鈴と他の警戒に当たってくれ」

「……サイレント・ゼフィルスのことはお任せしても？」

出来れば自身で取り戻したいところだが、「W・ウィザード」の性能は学園では雪兔の次に熟知していると言つてもいいセシリアは邪魔になると判断し雪兔にサイレント・ゼフィルスのことを託す。

「可能なら奪還するが、最悪の場合は破壊する。それだけは承知しておいてくれ」

「わかりましたわ。破壊されたとしても祖国へは私が説明しましょう」

「助かる」

そう言うのと雪兔は高度を上げ「W：ウィザード」の広域センサーでマドカの位置を調べる。

（そこか）

そして、マドカのサイレント・ゼフィルスをセンサーに捉えると指令部で指揮を取る千冬に連絡を取る。

「織斑先生、こ（W：ウィザード）いつのジャミングフィールドを使います。以後は通信が出来ませんので

「了承を」

『わかった。やはり敵は早速投入してきたか』

雪兎がジャミングフィールドを使うのは打ち合わせで説明されている。そして、それが何を意味しているのかを千冬も悟る。

「ええ、おかげで準備が無駄にならずにすみましたよ」

『そちらはお前に一任する。とつとと片付けてこい』

「了解！」

通信を終えると雪兎は二次移行によって進化した「W・ウィザード」の力を解き放つ。

「いくぜ、グラスパー！」

進化したグラスパービットは別々であったデیفエンサーを取り込み支配と反射のビットを一体化させた装備だ。攻撃機能こそ相変わらず存在しないものの、ジャミングフィールドの生成や耐久性の向上により、より凶悪な能力を発揮する。そのグラスパーを広域展開し、ジャミングフィールドを展開してマドカを待ち構える。そして、マドカも雪兎の存在に気付き接近してくる。

「さあ、宴を始めようか。織斑マドカ」

マドカ side

スコールとの通信が途絶えて程なくして私は天野雪兎と対峙した。彼の装備は紫色のローブのような装甲と魔導師の杖を連想させる武装をもつISだった。

「天野雪兎だな？」

「そう言うお前は織斑マドカだな？」

「!？」

これには流石の私も驚いた。初対面であるはずなのに目の前の彼は組織でも知る者が少ない私の本名を迷いもなく口にしたらからだ。この男は危険だ。そう私の本能が警鐘を鳴らし、私はすぐさま攻撃を仕掛けようとビットを起動させようとするが、ビットは微動だにしない。

「な、何故だ!？」

今までこんなことは一度もなかった。ビットの部分展開や偏向射撃すら使える私に何故かサイレント・ゼフィルスは応えない。

「どうした？お得意のビットでも不調か？」

(思念誘導通信の不調？そんなはずは……思念誘導通信!!)

それを見てニヤリと笑みを浮かべる彼を見て漸く私は自分の失態に気付いた。先程のスコールとの通信途絶。そう、コアネットワーク経由の通信すらジャミングするフィールド。これが意味するものは……

「そのIS……対誘導兵器特化武装か!？」

「ご名答。そのサイレント・ゼフィルスの主兵装は六基のBT兵器のビットとシールドビット、そして実弾・BT兵器を兼ねたスターブレイカー。確かに強力なISだ。だが、その長所たるビットと偏向射撃を封じられてどこまで戦える?」

彼は私がサイレント・ゼフィルスを使用してここに現れることを予測し、サイレント・ゼフィルスに対して最悪の相性を持つ誘導兵器封じの武装を用意していたのだ。スコールが戦うなど言っていた意味がよくわかった。

「舐めるな!」

しかし、私は負ける訳にはいかない。残されたスターブレイカーで攻撃を仕掛けるも彼は容易くそれを回避する。偏向射撃も思念誘導を必要とするため通常の射撃しか行

えないため高出力の代わりに連射性能を落としたスターブレイカーでは彼を捉えきれない。

「その程度か？偏向射撃が使えるとはいえ、やはりお前にそサイレント・ゼフィルスい、つは向いてないな」

確かにこの機体は奪取した機体であるため私の専用機という訳ではない。しかし、私がこの機体で勝てなかったのはスコールくらいのもので決して弱い訳ではない。ピットだってだれよりも上手く使える自信はあるし、偏向射撃だつてすぐに習得してみせた。なのに、彼はこのサイレント・ゼフィルスを私には向いていないと言い切つた。

「つまらん。亡国機業つてのは他人が作つた強力な兵器がなければ何も出来ない無能集団なのか？その程度で俺のいるIS学園に攻めてきたのか？はつきり言つて失望した」

スターブレイカーの射撃をかわしながら彼は酷くつまらなさそうな表情を見せる。

「興が冷めた。出直してこい……極限化、起動」

そう言うのと彼のISは紫色の粒子に包まれ残像を残す程の加速で私に近付くといつの間にか二本に増えた杖のような武装は先端からビームの刃を生やした大鎌へと変貌し、サイレント・ゼフィルスを斬り刻んでいく。

「……織斑マドカ、お前が本当に成したいことがあるのならそんな借り物のISなんざ使わず自身の力で成すんだな」

初めての惨敗。意識が途切れようとする中、最後に聞いた彼の言葉には何故か温かさ

を感じた。

s i d e o u t

「エムー！」

マドカを打ち倒した雪兎が彼女を確保しようとする、雪兎の想定外の人物が姿を現した。

「ちっ、その金ぴかの趣味の悪いISは……まさかあんたまで出てくるとはな」

それは金色のIS「ゴールデン・ドーン」を纏った亡国機業の幹部スコール・ミューゼルだった。

「やっぱり私のことも知っていたようね、天野雪兎」

マド力を両手で抱え、背面にある巨大なサブアームを向け、スコールは雪兎と対峙した。しかし、スコールは交戦の意識はないようだ。

「ここは退かせてもらえないかしら？」

「……なら、次のキャノンボール・ファスト。こいつへの手出しをやめてもらおうか？」

スコールの提案に雪兎は条件を出す。

「私達がそんな口約束を守るとでも？」

「その場合、お前らが地獄を見ることになるぞ？」

「……わかったわ」

天災の弟子である雪兎の言葉である。下手をすれば今後接触を考えている束の心情にも影響が出ると考えたスコールはその条件を飲んだ。

「ならとつとに行け。出来ればもう俺の前に姿を現すな」

スコールがマド力を連れて去ると雪兎はジャミングフィールドを解除して千冬に連絡を取る。

「すいません、撃退は出来ましたが思わぬ援軍が来て取り逃がしました」

『……そうか、わかった。帰投しろ』

こうして雪兎と亡国機業の初の接触は終わりを告げた。

4 1 話 王冠の行方と雪兎の後始末 兎、お説教（物理）する

「すいませんでした!!」

雪兎が舞台に戻ると真つ先に楯無が土下座で謝罪してきた。

「反省はしてるみたいですね？」

「そ、それはもう!」

「なら俺からは一つの罰で許しましょう」

罰と聞き、楯無が少し震えるも許してもらえると知り安堵する。だが、安堵するのは少し早かった。

「織斑先生と時間無制限試合一回で」

「・・・えっ?」

「楯無さんくらいの実力があれば織斑先生と試合しても瞬殺はないでしょう? 丁度、参式の稼働データ欲しかったんですよ」

そう、千冬クラスになると相手が出来る操者など限られている。その点、楯無ならば十分なデータが取れるだろう。また、その試合のデータからミステリアス・レイデイの

データも取れる。雪兎からすれば一石三鳥な提案だった。勿論、楯無にとっては絶望案件なのだが……

「さ、参式ってあの大きな剣持つてるISよね？」

「はい。先日、織斑先生にお渡ししました」

「……」

あの規格外ISに元世界最強の組み合わせである。絶望しない方がおかしい。

「織斑先生には既にお願いしておきました。「参式の慣らしに丁度いい。失望させるなよ？学園最強」だそうです」

（終わった……）

いくら学生ながら国家代表に選ばれる実力のある楯無と言えど、この組み合わせは泣きたくもなろう。これ以降、楯無はシャルロットへのちよっかいはしまいと誓うのだった。

一夏の王冠に関しては雪兎への謝罪の際に楯無が全てを自供し、一夏が守り抜いたためにドロ―となった。また、オータムの乱入のせいでも一般参加が行われなかったために投票権は返却されたのだが、何故か投票で一位になったのは生徒会だった。理由は雪兎とシャルロットの一件である。あれが予測以上に受けたらしく、投票数はダントツだったんだとか。

「そんな訳でシャルロットちゃんにはこれを進呈します」

そう言つて何とか絶望から復帰した楯無はシャルロットにカードキーを手渡した。

「こ、これって……」

「うん、雪兎君の部屋のカードキーよ」

「おいこら、何勝手に人の部屋のカードキー渡しとるんじゃ!」

「だって、シャルロットちゃんはおれとこれ取つてきたもの」
ブローチ

ユーリが抗議すると楯無は雪兎の胸についていたはずのブローチを取り出す。

「はあ? 何でそれが……もしかして!?!」

「ごめんね、雪兎」

実は雪兎に抱きしめられた時にシャルロットはちやつかりブローチを盗っていたのだ。

「なんてこった……」

一応ルール通りブローチを手に入れていたとなつては雪兎もこれ以上抗議する訳にもいかず、大人しく決定を受け入れることに。

「またよろしくね、雪兎」

((シャルロット恐るべし))

ちやつかり目標を達成していたシャルロットにその場にいた全員が戦慄していた。

結局、本当に雪兎とシャルロットは相部屋となった。真耶からは「ふ、不純異性間交

遊はいけませんよー」等と言われもしたが、シャルロットがシャルルと偽っていた頃と大した違いはなく、特に問題は起こってはいない。

「今回はシャルにまんまとやられたよ」

「恋する乙女を甘く見ちゃ駄目だよ？雪兎」

「よく思い知ったよ」

原作通りとはいけなかったものの学園祭の投票で一位となった生徒会に所属することになった一夏。しかし、副会長の席は雪兎が既におり、一夏は庶務として生徒会に加わることとなった。

「それにしても一夏だけでなくシャルまで生徒会に引き込むとはな」

「僕が雪兎の手伝いがしたいって言ったんだよ」

さらに、副会長補佐という名目でシャルロットも生徒会に入ることとなり、生徒会は布陣はある意味で万全なものとなったと言える。また、原作のような手段ではなく正当な投票結果であったため、各部活動もそこまで文句を言うことはなかったらしい。

「そういうえば文芸部の人達には驚かされたよね」

「あれか・・・確かにびびったわ」

そう、あの演劇での一幕を小説にしたいから許可をくれと文芸部の部長と副部長が揃って頭を下げてきた時のことだ。名前等はちゃんと変えると言っていたため雪兎達

はそれを承諾したが、その時の喜びようは凄かった。何でも部長は最近スランプ気味だったらしく、あ的一幕を見たおかげでスランプを脱せそうだと言っていた。

「驚いたといえば虚さんもだがな」

虚はやはり原作通り弾のことが気になっていられるらしく、雪兎や一夏に弾のことを色々聞いていた。普段はあまり表情を変えない虚が恋する乙女のような顔をしていたのは幼馴染更識姉妹や妹の本音も驚く事態だった。

「弾も良い人だし、上手くいくといいね」

「だな。一友人としても応援したいところだな」

この短い期間に実に色々なことがあったものである。

(捕らえたオータムからアラクネのコアは回収したが、まさか護送中にオータムに逃げられるとはな)

その後、学園から護送される際に護送車が襲撃を受けオータムは脱走したと千冬から報告を受けている。

(まあ、アラクネはこつちにあるから当面は何も出来ないだろうがな)

アラクネはアメリカカとしては返して欲しいが、返却を要求すると強奪されたことが露見してしまうため言い出すことが出来ず、修理という名目で現在は雪兎が保管している。

（千冬さんは返却するつもりないみたいだし、参式も作つたし今度はアレ作ってみるか・・・）

こうしてアラクネだったISは雪兎によつて新たな形を与えられることになるのであつた。

逃げ出したオータムは何とかスコール達と合流に成功し、隠れ家に戻ることが出来た。

「くそっ！何なんだよ、あのガキ共はっ!!」

「落ち着きなさい、オータム」

「だけだよお！」

「今回の件で貴女の顔はあちら側に知られてしまったわ。それにエムのサイレント・ゼファイルスはボロボロ、貴女のアラクネは取られてしまった。しばらくは大人しくせざるえないの」

しかし、亡国機業が受けた今回の損害は酷いものだった。スコールの言う通り、サイレント・ゼファイルスは雪兎によりこつぴどくやられ、オータムは助け出せたもののアラクネを失ってしまったのだ。

（彼には借りが出来てしまったわね）

ある意味で雪兎が出した条件が亡国機業には救いだったとも言える。雪兎はやろうと思えばスコール達の隠れ家を襲撃できた。しかし、雪兎は次のキャノンボール・ファストを邪魔しない限り手は出さないとやった。つまり見逃されたのだ。

（エムの様子も少しおかしいようだし、しばらくは大人しくしていきましょうかしら）

そう考えるとスコールはまだ荒れているオータムを宥めるべく、彼女を自室へと誘うのだった。

（天野、雪兎……あいつは一体何なんだ？）

マドカは天野雪兎という人物のことがよくわからなかった。そして、最後に投げかけられられ言葉が耳を離れない。

『……織斑マドカ、お前が本当に成したいことがあるのならそんな借り物の I S ならんぞ使わず自身の力で成すんだな』

（あれはどういう意味だったのだろうか？それにやつは私の願いも知っているような感じだった）

マドカにはわからなかった。何故彼は敵であるはずの自分にそのようなことを告げたのか？次に会ったら答えてくれるのだろうか？そんなことばかり考えていた。

（こゝ、これではまるで私が彼に会いたいと思っっているようではないか!?!）

結局、答えはわからずマドカはらしくもなくベッドの上でのたうち回るのであった。

七章 「兎とマドカとキャノンボール」

42話 キャノンボールと英中独三人娘の頼み 兎、三人娘から依頼を受ける

学園祭も終わり、9月も後半に差し掛かったある日。

「一夏の誕生日って9月だったんだ」

「ああ、今月の27日だ」

いつものように食堂で昼食をとっていると、セシリアとラウラの二人には聞き捨てならない話題が飛び出した。

「何だ、話してなかったのか？一夏」

「ああ、別に大した話題でもないだろう？」

「はあー、お前はもう少し視野を拡げろ。一応、今年も弾達とお前ん家で祝う予定なんだからいつものメンバーくらいには連絡しとけよ」

相変わらずの唐変木っぷりである。

「助かったぞ。雪兎にシャルロット。お前達夫妻に話を聞かねば私とオルコットは当日

近くになって慌てるどころだった」

「夫妻っ!?!」

「恋人同士で同室。その上、保護者も既に公認なのだろうか？夫妻と変わらぬではないか」

「そんなことより一夏さんの誕生日のことですわ！」

「そんなことって……」

学園祭以来、どうも雪兎とシャルロットは最早学園一のカップル扱いされており、料理部で一緒に料理する姿など仲睦まじい夫妻にしか見えないと言われている。

「嫁の誕生日を知っていて黙っていた二人よ。何か弁明はあるか？」

「そう言われぬ幼馴染故に当然一夏の誕生日を知っていた筈と鈴は目を逸らす。

「どうせ抜け駆けするつもりだったんだろ？器の小さいやつめ」

「うぐっ」

雪兎の言葉が深く筈と鈴に突き刺さる。

「そういえば、あまあまの誕生日は？」

「俺か？俺は2月3日だ。鈴は11月6日だったよな？」

「よく覚えてたわね」

「僕は10月4日だよ」

「わたくしは12月24日ですわ」

「あつ、セシリアも12月なんだ。私も7日なんだ」

「私は3月1日だったはずだ」

「私は6月2日だよー」

「私は1月20日」

「へえー、皆バラバラなんだな。まとめると・・・」

布仏本音 6月2日

篠ノ之箒 7月7日

織斑一夏 9月27日

シャルロット・デュノア 10月4日

風鈴音 11月6日

宮本聖 12月7日

セシリア・オルコット 12月24日

更識簪 1月20日

天野雪兔 2月3日

ラウラ・ボーデヴィツヒ 3月1日

「つて感じか？」

「だね。本音はもう過ぎちやつてるけど、他の皆はお祝い出来そうだね」

簪の提案に全員が賛成し、誕生日の話はここまでにして一夏の誕生日の日に行われるもう一つの催し【キャノンボール・ファスト】へと話題は変わる。

「一夏の誕生日の話もいいが、お前らはキャノンボールの準備してんのか？」

【キャノンボール・ファスト】ISで行われる何でもありのレース競技のことだ。昔はキャノンボールと言えば公道を用いた走り屋達の非合法のレースのことを差すが、今ではこの競技のことを差す単語となっている。

「僕と雪兎は高機動パックがあるし、一夏と箒は調整だけだけど、皆は？」

「私はこの前雪兎に貰ったパッケージに高機動パッケージがあつたからそれを使う予定」

【暴風】か、あれはキャノンボール用に用意したパッケージだし、妥当だな」

そう、簪には雪兎がリヴァイヴのお披露目の時に渡した storage に【白雷】【剣山】【暴風】という三種のパッケージが渡されており、簪はその中の高機動仕様である【暴風】を使う予定だった。

「私のライダーは高機動バイザーを使えばいいのかな？」

「ただでさえあなたのライダーは速いのに高機動仕様なんてのもあんの？」

「うん、まだ使ったことないけど。スペックデータなら紅椿クラスだよ」

「またとんでもない伏兵がいたな」

聖のウエーブ・ライダーは元々高機動戦仕様なのだが、更に速度特化したバイザーボード「ソニックレイダー」が存在する。そのトップスピードは通常のアーリーナでは使えない所がなく、今までお蔵入りしていたらしい。

「私のナインテイルはキャノンボールには向いてないんだけどがんばるよ」

一方で本音のナインテイルは専用装備【九尾】に拡張領域をほとんど食われており、武装が追加出来ない仕様であるためキャノンボールは不向きと言っている。武装は入らないも残っている拡張領域はお菓子などの入れ場になっているそうだ。そして……

「わたくしには一応、ストライク・ガンナーがありますけれど」

「私も一応本国から高機動仕様パッケージ【風】が来る予定よ」

「私は姉妹機の高機動パッケージを借りることになっている」

セシリア、鈴、ラウラの三人はそれぞれ専用パッケージを使う予定だったのだが、ナインテイルを除くメンバーのISと比べると力不足であると感じていた。

（この前本国には一応許可貰ったし、駄目元で聞いてみようかしら？）

（わたくしのストライク・ガンナーも以前調整していただきましたし、本国から許可も得ましたから雪兎さんにお力添えをお願いできないでしょうか……）

（あのパッケージはクラリッサの物だしな……ここは本国の許可もあることではあるし、雪兎に頼むのも一手か）

そこで、以前から考えていた雪兎の助力を得られないかと、三人は同じことを考えていた。何せこの雪兎はあの束の弟子である。その技術の一端でも手に入るならイギリス、中国、ドイツの三国も許可くらい出すというものだ。問題は交換条件に何を要求されるかということと、雪兎が作成する以上は雪兎にスペックデータを把握されるということだが、二つ目はメンバーの過半数が雪兎の手が加わったISであるためあまり関係ないかもしれない。

「ねえ、雪兎。ちよつとお願いがあるんだけど」

そんな中、初めに話を切り出したのは幼馴染である鈴だった。

「お願い？」

「うん。私の甲龍のパッケージの件んだけど・・・私にも何か作ってもらえない？」

「ず、狡いですわ、鈴さん！雪兎さん、私にもお願いできませんか!？」

「ついでで申し訳ないのだが、私もお願いできまないだろうか？」

「いや、本国の許可とかはー」

「二既に取つてあるわ／ありますわ／ある!」

「ならいいんだが・・・どんなパッケージにするかは俺の一存で構わないか？要望があれば予め言っておいてくれ」

幸いにも雪兎は乗り気のように三人は一安心する。

「とりあえず鈴からな」

「私は高機動つて縛りはいらなからもう少し衝撃砲の扱いを何とかしたいわ」

鈴は雪兎に以前から言われている衝撃砲の扱いについてももう少し使い勝手をよくしたいらしい。

「衝撃砲か、なるほど丁度考えてた装備があつたからそれを応用したパッケージにしてみるよ」

「ありがとね、雪兎」

「次はセシリアだな」

「わたくしはストライク・ガンナーをベースにビットも扱えるパッケージがいいですわ」

一方のセシリアは元々ストライク・ガンナーというパッケージがあるため、その発展型を依頼する。ストライク・ガンナーはビットをスカート部分に固定することでビットを封印する代わりに機動力を得るパッケージだ（アニメでは何故かビットを使っていた）。そのためセシリアは高機動とビットの両立を求めたようだ。

「ストライク・ガンナーは確かにブルー・ティアーズの特色を殺すパッケージだからな……考えてみるよ」

「よろしくお願いしますわ」

「次はラウラか」

「私は借り物というのが少しな……停止結界も高機動戦では扱うのが難しいから無視してくれて構わない」

ラウラはクラリツサのシユヴァルツエア・ツヴァイクのパッケージを借りるというところに思うところがあるようで、専用であることが条件のようだ。A I C に関しては高機動下で一つのことに集中するというのが危険なことを理解しているため考慮しないようだ。

「A I C は変なところに欠点あるからな……じゃあ、ラウラの戦闘スタイルに合わせてつてことでいいな？」

「すまない。お前も自分の準備があるだろうに我ら三人のパッケージまで頼んでしまつて」

「水くさいこと言うなよ。俺達は仲間だろ？それに俺はもう大体調整終わってるし、三人のパッケージももう大体の構想はまとまったからな」

「「「早っ!」」」

これには一同も驚きである。

「鈴に関しては元々丁度いい装備があつたし、セシリアは前にストライク・ガンナー調整した時のデータもある。ラウラのもちよつと面白い装備を思い付いたからそれを使う予定だ」

やはり天災の弟子は伊達ではなかった。すると。

「雪兎、面白そうな話をしてる」

「忍先輩？」

そこに棗忍が通りかかった。

「実は私も雪兎にお願いがあった」

「忍先輩もですか？」

「その宮本聖の使うバイザーボード。あれを一つ私にも作って欲しい。無理そうなら基礎データだけでもいい」

そう、元々バイザーボードは忍とサーフィンをしていて思い付いた武装だ。忍が興味を持ったのも不思議では無い。

「展開装甲を積んでない試作品なら一つ余ってますけど……」

「それでいい。譲って」

「いいですよ。元々局に提出するつもりでしたし、忍先輩とサーフィンして思い付いた武装なんでお礼に差し上げますよ」

「感謝するわ」

こうしてセシリア、鈴、ラウラはそれぞれ専用パッケージの作成を。忍は試作品のバイザーボードを譲ってもらうこととなったのだった。

4 3話 新パッケージと思わぬ再会 兎、街で〇〇〇と出会う

三人の依頼から三日が経ち、三人のパッケージが完成した。その日の放課後、雪兎は早速三人をアリーナに集めた。

「もう出来たの!？」

「パッケージだけだからな。丸々一機作るよりは簡単だったぞ?。」

「いや、普通は一人でIS作ったりしないから」

「それはともかく。ほれ、お前らのstorageだ」

それぞれ専用機と同じカラーのstorageを鈴、セシリア、ラウラの三人に渡す雪兎。

「今回もいい仕事をしたと自負してる。材料費と依頼料は国に請求すればいいんだよな?。」

雪兎が三国に要求したのは材料費と依頼料、そしてそれぞれのISと作られたパッケージの運用データの収集許可であった。作成する段階でどうしても各機のデータが必要になったので要求したのだが、完成パッケージのデータを提出する代わりに三国は

それを許可した。その程度で最先端技術のデータが手に入るなら安いものだ」と判断したのだろう。

「はい。国からはそう聞いていますわ」

「どれどれ、どんなパッケージになったのかしら……えっ？何よこれ」

「ほう、こうきたか……気に入った」

「この装備は……わたくし、試されていますの？」

それぞれパッケージのデータを見て鈴は驚き、ラウラは笑みを浮かべ、セシリアは自身の技量を問われていると察する。

「そんじゃ、早速試してみてくれ」

そう言われ三人はパッケージをインストールさせISを展開する。

鈴の甲龍は肩の衝撃砲が小型化され左右三基ずつになっており、両腕に龍の頭を模したアンカークローの付いた籠手が追加されていた。

「衝撃砲の小型化とか本国でもまだできないっていうのに……」

セシリアのブルー・ティアーズは天使のような翼が与えられ、ビットが二基、シールドブースタービットが二基増設。そして、BTレーザーと実弾と馬上槍を融合したランチャー。更に偏向射撃を補助する強化型ハイパーセンサーなど大幅なアップデートがされていた。

「これはわたくしの技量を問われる装備ですわね」

ラウラのシユヴァルツエア・レーゲンは肩の大型レールキャノンを外し、左右に大型のシールドブラスターキャノンを装備し、背面にサブアームで固定された大型ガトリングガン装備していた。しかも、シールドブラスターキャノンには眼帯をした黒兎のマークまでついている。

「いいぞ。特にこの兎のマークが気に入った」

それぞれ新しくなった装備を確かめ、その想像以上のスペックに驚いていた。

「何、あの六基連動衝撃砲【覇龍咆哮】って……あれ、本当に龍咆哮の威力？」

試しに放った左右の六基を連動させて放つ衝撃砲【覇龍咆哮】の威力に啞然とする鈴。

「これだけの装備を高機動中に制御するのは難しいですわね……ハイパーセンサーが強化されてなかったらできませんわ」

強化されたハイパーセンサーと今までの特訓のおかげでセシリアも増えたビットの制御ができた。また、ビットを制御していない時であれば偏向射撃も僅かながら行えるようになっていた。

「これが雪兎謹製装備か……雪兎とシャルロットはこんなクセの強い武装を切り換えながら戦っているのか。それは強いはずだ」

ラウラも雪兎の作った装備を使うことで雪兎とシャルロットの強さの一端を知る。

「どうだ？どっか不備はなかったか？」

「無いわよ。でも、これはちよつと凄すぎだわ」

「ええ、問題ありませんわ。扱うのが少し大変になりましたが、これは雪兎さんがわたくしなら扱えると考えて作成された装備。必ずや使いこなしてみせますわ！」

「うむ、問題は無い。正直、ここまでとは思っていなかった」

「そうか、満足してくれたなら技術屋冥利に尽きるよ」

鈴達も満足したようだ。こうして鈴達三人も雪兎の魔改造装備を手に入れるのであった。

その数日後の休日。雪兎は珍しく一人で街にやってきていた。理由は忍の父親が局

長の棗宇宙開発局に顔を出すためだった。

「ご無沙汰してます、棗局長」

「やあ、雪兎君。先日は忍が無理を言っつてすまなかったね」

「いえ、忍先輩にも言いましたけど元から局にもデータを渡すつもりでしたから」

この棗宇宙開発局はＩＳコアを二基所有しており、一基は国内トリアル用、もう一基は当初の開発理由であった宇宙開発用のＩＳに当てられている。

その国内トリアル用のコアは現在打鉄を高機動仕様に改修した【不知火】として局長の娘である忍が使用している。先日の試作バイザーボードはこの不知火に装備される。

「いつもすまないね・・・で、今日は資材の補充かな？」

「ええ、ちよつとパッケージやパックに試作機と一度に大量に作ったもので」

「相変わらずだねえ、君は」

その後、storageに資材を補充してもらう間、世間話をしつつ開発したいいくつかのデータを棗局長に渡し、雪兎は棗宇宙開発局を後にした。

「さてと、今日はシャル置いて来ちまっただから何かお土産買わないとなあ」

そんなことを考えながら歩いていると、人混みの中に少し浮いた格好をする少女の姿があった。

（あれって……マドカ？）

そう、その少女とは先日交戦したばかりの織斑マドカだった。そんな雪兎の視線に気付いたのかマドカは振り返り雪兎の姿を見つけると目を見開いて驚いていた。

「な、何故お前がここに……」

「お前、ちよつと馬鹿だろ？」

「な、何だと!？」

「だってお前さ、前はゼフィルスのバイザー着けてたから顔バレしてないのにそんなこと言ったらバレバレじゃないか」

「!？」

「どうやら本名を知られていたことから顔もバレていると（間違っではない）思ったようで、雪兎の指摘を聞いて顔を青くする。

「そんな顔すんなって。別に今お前をどうこうするつもりなんざねえよ」

「何故だ？」

「お前、まだゼフィルス直ってねえだろ？ そんなやつを一方的にやるほど俺は落ちぶれてねえぞ」

「あれだけ盛大にやってくれてよく言う」

「あれは万全の相手を滅多打にして鼻と心を折るからいいのであって、万全でない弱いもの虐めなんで俺はせん」

「そちらの方がよほど質が悪い気が……」

雪兎の言い分を聞きマドカは呆れながらも青くしていた顔色を戻していた。

「次に敵対した時はまた全力で相手してやるけど、今はただ街中で知り合いに会った程度だ。何もせんさ」

「そうか」

「あと、俺の周囲だけジャミング張ってるから監視は気にしないでいいぞ。ジャミングって言っても俺との会話を傍受できただけだが」

「……お前は本当に規格外なのだな」

体内のナノマシンのこともバレていたことにマドカはもう驚くより呆れていた。また、こんな会話ではあるが、マドカは楽しんでいるという自覚があった。

(やはりこの男は不思議だ。何故かこの男との会話は不快にならない)

「立ち話も何だしその喫茶店にでも寄るか?」

「お前の奢りなら付き合おう」

「それくらいは出すさ。誘ったのはこっちだからな」

そんなこんなで雪兎とマドカという奇妙な組み合わせで二人は喫茶店へと入っていきのだった。

4 4 話 喫茶店の雪兎とマドカ 兎、少女と話す

喫茶店に入った二人は角のテーブル席に座り、店員にアイスコーヒーを頼むと話を始めた。

「前にお前は言ったな、本当に成したいことがあるのならそんな借り物の力など使わず自身の力で成せ。と……あれはどうゆう意味だ？」

「大体わかっているんじゃないか？お前はそもそも千冬さんのクローンの失敗作として破棄された存在だろ？」

「やはり知っていたか」

そう、マドカは千冬のような実力者を量産しようなどという狂気の研究の産物だった。

「それが千冬さんを超えたいと願うならお前が証明すべき力は亡国機業みたいな組織では手に入らん」

「かもしれない……では、サイレント・ゼフィルスが私に向いていないというのは？」
「そつちはおつと簡単だ。千冬さんが近接よりの万能型なのに対してマドカはオールラウンダーだろ？近接も射撃もバランスのいいIS、しかも高機動型なら尚いいかな？そ

んなお前が遠距離特化のゼフィルスじゃ能力の半分は殺してるようなもんだ。相性のいいI Sさえ使えればお前は間違いなく国家代表クラスの能力はある」

「.....」

雪兎の思わぬ高評価にマドカは驚く。事前にある程度情報を知っていたとはいえ、あの一戦で雪兎はマドカの実力を正確に見抜いていたのだ。

「どうした？」

「いや、何故お前はそこまで私をかってくれるのかわからなくてな」

「俺は評価は平等にするぞ？お前んとこのオータムとかいう馬鹿は調子にさえ乗らなきゃ強いんだろうけどな」

「違うない」

オータムが聞けば激昂しそうな会話である。

「あと、俺はお前を千冬さんのクローンとして評価してる訳じゃない。さっきの評価は織斑マドカとしての評価だ」

「!？」

これにはマドカもかなり驚いた。今までマドカは研究所では千冬の失敗作として、亡国機業ではただ力がある駒としてしか扱われておらず、織斑マドカとして見られたことはほとんどなかったのだ。

「そもそも、双子ですら育った環境とかで全然違うつてのにクローン作っただけで千冬さんと同じ能力を期待するとか馬鹿なのか？あの人がどんな努力してたかとか、お前がどれだけ頑張ったかとか全部無視して失敗作だのどうでもいい扱いとか消えればいい」

雪兎の表情には明らかな怒りがあつた。雪兎は前世の頃からマドカの扱いには少し腹を立てており、こうして接してみてもそれが再燃したようだ。

「……」

そんな雪兎に呆氣に取られるマドカ。

「おっと、すまんすまん。お前に言つてもしょうがないことだったな」

そしてマドカは納得した。この天野雪兎という男は自分を織斑マドカを個人として見てくれる存在なのだ。

「お前もＩＳ学園の生徒だったら専用機組んでやったんだがなあ」

これは雪兎の偽りない本音だった。

「もし、そんなことがあればお前を頼るとしよう」

そんな都合のいい未来があるとはマドカは思わなかったが、気付けばそんな言葉を口にしていて。

「そういえば……お前、通信端末持つてる？」

「ああ、一応支給されたのがあるが」

「ちよつと貸せ」

そう言うのと、雪兎はマドカの端末に何かを送信する。

「よしつと」

「これは？」

「今度のキャノンボールの観戦チケットだ。あつ、スコールには一応言ったが、それ使つて襲撃とかすんなよ？複製とかもやったらすぐバレるからやるな」

「どうしてこれを私に？」

「なんとなくだ。あと、そんな格好で来るなよ？絶対不信がられる」

「これしか服は持つてないのだが……」

その言葉に今度は雪兎が驚いた。

「はあ？亡国機業つてやつは……よし、今から買いに行くぞ」

「しかし、私は金をー」

「俺が払う。流石にこれは見過ごせん」

そう言うのと喫茶店でコーヒー代を支払うと雪兎はマドカの手を引き服屋に直行する。

「すまないがこいつに見合う服を三着ほど頼む。予算は気にしないでいい」

「かしこまりました」

「ちよつ!？」

店員にマドカを引き渡し、マドカはしばらく店員の着せ替え人形と化した。

「……戻った」

マドカが隠れ家に戻ると、マドカはげんなりした顔をしていた。

「あら、遅かったわね……。どうしたの？その服」

スコールがマドカを出迎えると、そこには可愛らしい服を着たマドカの姿があった。

「天野雪兎に買って貰った」

「はあ？……。今、何て言ったの、エム」

予想外の名前に流石のスコールも驚く。

「街で偶然やつに出会って、今度のキャノンボール・ファストに招待されて、服がいつものしかないと言ったら問答無用で買って押し付けられた」

買った後、せっかくだからそのまま帰れと言われ着替えさせられたまま帰されたのだ。

「……」

マドカはどうしてこうなった？という顔をしているが、それはスコールも同じだった。

「どうかしたのか？って、お前、なんだその格好？」

今度はオータムが出てきてマドカの格好を見て首を傾げる。

「天野雪兎に偶然会って押し付けられたそうよ」

「はあ？」

何故そうなる!?!とオータムの顔にはそう書いてあった。

「しかも、キャノンボール・ファストにまで招待されたそうよ」

「ああ、それでそんな格好を……って、あのガキはどんな神経してやがんだ！」

その日の彼女達は雪兎の行動が読めず、しばらく三人揃って頭を抱えるのであった。

一方、その亡国機業を困惑させた雪兎はまた何か作っているようだった。

「ゆ、雪兎。それって……」

そのモニターを覗き込んでシャルロットは絶句する。

「これがキャノンボールでの俺の切り札さ」

「鈴達の依頼をあつさり受けたと思ったら、そういうことだったんだね……」

シャルロットが見つめるモニターにはこう表示されていた。

『超高機動型アドヴァンスドパック【L A : ライトニング・アサルト】と……』

45話 開幕！キャノンボール・ファスト！ 兎、やはり自重しない

9月27日、キャノンボール・ファスト当日。

マドカ side

キャノンボール・ファスト当日。私は天野雪兎の言う通りカジュアル系の物を着て髪型をポニーテールにし、帽子を被って会場を訪れた。

「賑わっているようだな」

このチケットは普通に入手しようなものならかなりの値段がするらしい。しかも今年は織斑一夏と天野雪兎という男性操者がいるとあってか抽選の倍率もはね上がったらしい。

(確か、入り口で端末のチケットを見せればいいのだったな)

招待客用の入り口に向かうとそこには私と同じくらいの歳と思われる赤髪の少女がいた。

「えっと、どうすればいいんだっけ？」

どうやら私と同じ招待客のようだが、招待者がちゃんと説明しなかったのか、あたふ

たしている。

「貸してみろ」

「ふえ？」

見ていられなかった私は彼女の端末を操作しチケットを表示させる。

「これを見せればいい。ではな」

少女に端末を返すと私は自分の端末でチケットを見せて指定された席へと向かった。

「あれ？貴女はさっきの・・・」

席に座って開幕を待っていると、先程の少女が私の隣にやってきた。どうやら彼女の席は私の隣だったようだ。

「さつきはありがとうございます」

「かしこまらなくていい、見たところ同い年だろう」

「うん、そうさせてもらうね。私は蘭、貴女は？」

「・・・マドカだ」

別に名乗る必要はなかったのだが、私はこの蘭という少女に気付けば名前を教えた。この出会いが後の私の運命を大きく変えることになるとは、まだ私は気付いていなかった。

s i d e o u t

訓練機を使った一般生徒の部門が終わり、とうとう専用機持ち出番が来た。今年は一

夏や雪兎の影響で専用機持ちが多く十人もいるのだ。それ故に多くの観客がこのレーズに注目していた。

「そういえば今日はあ父の人も来るんだったつけ・・・」

「そうなのか?」

「うん、僕のリヴァイヴⅡSと雪兎を見に来るって連絡があつたよ」

「そうか」

「雪兎はだれか招待したの? 一夏は蘭ちゃんを招待したみたいだけど」

「俺は最近知り合ったやつだな」

そう雪兎が言うときシャルロットの目が途端に鋭くなる。

「女の子でしょ?」

「何でわかつた?」

「なんとなく、女の勘かな?」

「マジか・・・でも、そいつはどっちかっていうと妹分みたいなやつだから安心しろ。」

俺が好きなのはシャルだけだから」

「も、もうっ!雪兎つたら・・・」

今度は顔を真っ赤にして照れるシャルロット。

「あー、はいはい。そのバカップルはどこも構わず見せつけないの!」

「雪兎、本当に変わったよなあ・・・」

「そうだな。私を知る雪兎はあまり女性にあんな甘い言葉は使わない男だったのだが・・・」

「女の子よりメカ！って感じだったもんね・・・どうしてこうなったのやら」

雪兎をよく知る幼馴染三人は昔の雪兎を知っているだけに今の雪兎の姿は想像できなかつた。

「さて、今日は私も本気で勝ち狙いに行きます！」

レース競技ということもあつてか聖も珍しくやる気に満ちている。

「私も新しいパッケージを手に入れたからな。負けんぞ　、聖」

ラウラも気合十分のようだ。

「本音は結局どうするの？」

「私とナイちゃんは適当に頑張るよ」

「まあ、布仏さんは仕方ありませんわね」

「それでは皆さんI Sの展開をお願いします」

係員の誘導し従いそれぞれI Sを展開する。

「来い！白式!!」

「いくぞ！紅椿!!」

「来なさい! 甲龍【嵐龍】!!」

「行きますわよ! ブルー・ティアーズ【エンジェル・フェザー】!!」

「出るぞ! シュヴァルツェア・レーゲン【アンシユラーク・シルト】!!」

「来て! 打鉄式【暴風】!!」

「おいでませ! ナイちゃん!!」

「私も! ウェーブ・ライダー!!」

「続くよ! ラファール・リヴァイヴⅡS【J:イエーガー】!!」

そうして雪兎を覗く九人のISが並ぶ。

「それじゃあ、真打ち登場といくか・・・出る、雪華【LA:ライトニング・アサルト】!!」

「「「「「「えっ?」」」」」」」

てつきり雪兎も【J:イエーガー】と思っていたシャルロットを除く八人は雪兎が纏う新たなパックを見て驚愕する。

「ちよつと、あのパックって・・・」

「鈴さんですか。では、わたくしの見間違いではありませんわね・・・」

「なるほど、通りで我々のパッケージが早く完成した訳だ」

その中でも鈴、セシリア、ラウラの三人はそのパックに見覚えがあった。そう、自身

が雪兎に依頼したパッケージだ。

「そういうことだ。三人のパッケージはこの『L A : ライトニング・アサルト』の装備を流用して作ったんだからな」

そのパックは、肩にはラウラのリンドヴルムをより大型にしたシールドブースターキャノンが、腰にはセシリアと同じシールドブースタービットを備え、背面のウイングバインダーに四基のブレードガンビットを持ち、推進部は衝撃砲の流用であるエアロスラスター。更にセシリアの持つランパードランチャーのプロトタイプである『ガングニール』まで装備したてんこ盛りパックだった。そのカラーリングは黒と黄色の二色である。

「それ、今までのパックと何か違うよね？」

「その通りだ簪。こいつはアドヴァンスドパックと言って、従来のパックの複数分の拡張領域を使用するパックだからな。ちなみにこいつは三つ分だ」

「またとんでも装備を……」

やっぱり雪兎は自重なんてしていなかった。

「わたくし達ですらこのパッケージを物にするのに苦労したというのに……」

「あれは間違いなく操者を選ぶぞ」

「うん、僕にはまだ無理だったよ……」

「シャルロット。それ、マジ?」

あの器用なシャルロットですら持て余すと聞いて一同は言葉を失う。

「あまあま、ガチだ」

「当たり前だろ?このキャノンボール・ファストは姉さんの得意種目なんだ。弟の俺が恥ずかしい姿は見せれないからな」

(((((そういやそうだった!!))))))

そう、雪兎の姉・雪菜はこのキャノンボール・ファストでは無敗の高速の妖精ラビッド・フェアリーの二つ名を持つプロレーサーだ。それ故に雪兎は張り切っているようなのだ。

「ヤバい、雪兎が本気とか色々ヤバいつて!」

「不幸だよ……」

「わたくし達のパツケージの複合型……」

「僕は一回だけ稼働テスト付き合ってたけど……本気でヤバいよ」

「シャルロットがそこまで言うとなると……」

「あのパツクを運用できる雪兎が異常」

「開幕ぶつぱで逃げ切れば……無理ね」

「あれ、白式並みに燃費悪そうだよなあ」

「絢爛舞踏が使えれば……」

やはり雪兎の本気はとんでもなかったのであつた。

46話 レーススタート! 兎、本気出す

『レーススタート!!』

スタート直後に行動を起こしたのは鈴だった。背面に六基の龍玉を回し龍翔を発動して周りを吹き飛ばしながらスタートダッシュを決める。

「よし、これなら!」

「読んでたぞ、鈴」

「ソニックレイダーの方が速かったね」

「J:イエーガー」の性能に助けられたよ」

しかし、雪兎、聖、シャルロットの三人はそれをかわして鈴と並ぶ。

「げっ!?!」

「悪いが俺も本気でいくぞ!」

雪兎がそう言うのとシールドブースターキャノンの装甲の一部がスライドし、ミサイルが現れる。

「な、内蔵式ミサイル!?!」

「持ってけ!」

打鉄式式の山嵐に匹敵するミサイルの雨に鈴は龍玉を雪兎に向けて圧縮した空気の壁【嵐壁】でガード、シャルロットと聖は回避しながら迎撃する。

「あばよー！」

その隙に雪兎は二重瞬時加速で一気に距離を空けてしまう。

「ついでにこれも持つていけ」

更に加速中に振り返り、ガードで身動きを止めた鈴にガングニールを向け、レールガンを撃ち込む。

「ちよっ!？」

慌てて嵐壁でガードするも、嵐壁に触れた瞬間弾丸が破裂し閃光が鈴を襲う。

「うわあー、あのタイミングで閃光弾とかえげつない……」

「僕達もブーツとしてたらやられるよ」

高機動用のバイザー越しとはいえ真近くで閃光弾を食らったために鈴は視界を失いバランスを崩す。その間に鈴に足止めされた後発組が次々と鈴を抜いていく。

「鈴もやってくれたが、雪兎も恐ろしいな……」

「ああ」

「おお、やられてしまうとは情けない。えい」

挙げ句に視界を失っている間にナインテイルにシールドエネルギーを吸われ、鈴は

あつという間にリタイヤとなった。

「本音、意外と怖いことを……」

つまり、下手に雪兎に近付くと行動不能にされてナインテイルにエネルギーを吸われるという恐ろしいコンボが成立したのだ。

マドカ side

「前門に兎の皮を被った何か、後門に九尾と言ったところか」

レースの様子を見て私はそう思った。あの布陣、打ち合わせしていたとは思えないが、あの九尾のようなI Sの操者の性格を雪兎が把握していて行ったと見るのが正しそうだ。

「相変わらず雪兎さんは容赦ないなあー」

「何だ、蘭もあいつの知り合いだったのか？」

「はい。そう言うマドカも？」

どうやらこの蘭という少女も雪兎の関係者らしい。

「ああ、最近知り合つてな・・・今日もあいつが招待してくれたんだ」

「あー、そつちも相変わらずなんですな・・・」

「？」

「私は相談に乗ってもらつたり、色々助けてもらつてて、実の兄より兄らしい人といひますか・・・」

その蘭の言葉に私は納得する。確かに私も色々と話したり、服を買いに連れていかれたり、雪兎からはどこか兄つぼさを感じていた。

「兄か・・・確かにそんな感じだな」

そんな中、再びモニターへと視線を移すと血縁^織上では兄に^夏当たる男の姿が映る。「私を招待してくれたのはあの織斑一夏さんなんですよ」

そう言う蘭の表情は私にもわかるくらいに恋する乙女の顔をしていた。

side out

あれから新たに脱落したのはセシリアだった。どうやら機体制御で手一杯のところを雪兎に狙撃されてバランスを崩して吹っ飛び、本音のナインテイルに吸われたようだ。

「なんか本音のやつ誰かがやられるのを待つてないか?」

「うん、そんな気がする」

偶然できた布陣とはいえ、雪兎も本音も互いに利用しない手はないというところなのだろう。

「しかも、雪兎のやつ。我々をおちよくっているな……」

そう、雪兎はあえて後ろ向きで飛びながらガングニールでこちらを狙っているのだ。コーナーなどでは機体を一回転させ、エアロスラスターの噴射口を砲口にして小さな衝

撃砲までバラ撒いてくるのだ。

「それに、雪兎はまだビットやシールドブラスターキャノンを使ってない……あれまで使われたら本当に何もできなくなるよ」

一度、そのフルスペックを相手にしたシャルロットも警告する。そう、今現在、雪兎と本音の除く全員はいかに雪兎を攻略するまで限定という同盟を結んでいたのだ。

「全員で一斉に攻めてもあのミサイルと衝撃砲を食らってやられるな」

「ああ、しかも、下手に動きを止めれば後ろのニンテイルにやられる」

「かと言って本音を先に墜とそうとすると雪兎は絶対に本音ごと私達を墜とすよ?」

「では、あの時と同様に私が一夏を乗せて行くのはどうだ?」

「雪兎に一度使った戦術が通じるとは思えないんだけどなあ」

考えれば考えるほど雪兎のラスボスっぷりがわかる。

「多方面からの波状攻撃で隙を作ってシャルロットのバスターライフルが一夏の0距離での荷電粒子砲が確実だろう」

「それしかないか……」

こうして対雪兎同盟の反撃が始まる。

「やっぱりそうきたか」

散開して波状攻撃を仕掛けようとする一夏達を見て、そして観客席に蘭と並んで観戦

しているマドカを見つけると雪兎は笑みを浮かべた。

「いくぜ、相棒……見せてやるよ、これが【L A : ライトニング・アサルト】の力だ！」

最初に斬りかかってきた箒の紅椿をガングニールのランスモードで弾き、急かさず攻めてきた聖の進路をシールドブースタービットで阻害してシールドブースターキャノンを構えるラウラにレールガンモードのガングニールを放つ。更に上からグリフォンを射ちながら突撃してくるシャルロットをエアロスラスターの衝撃砲で迎撃し、動きを止めたところを雪羅を構えた一夏が瞬時加速で突っ込んでくるが、シールドブースターキャノンで返り討ちにすする。

「どうした、それで終わりか？」

「ま、魔王……」

聖は思わずそう呟くが今の雪兎は正に魔王の如くといったところだ。

「それなら今度はこちらからいくぞ?」

すると、ガングニールのランスモード時に穂先となる部分が開きボウガンのような形に変形する。穂先の内側にはいくつもの砲口が存在し、それを一夏達に向ける。

「!? 皆! 逃げて!!」

それが何かを知るシャルロットは皆に警告する。

「遅い！スプレッドバースト!!」

全ての砲口から一齐に発射された拡散レーザーが一同に襲いかかる。

「まだそんなのまで隠してたのかよ!?!」

回避が間に合わないと思った一夏は雪羅のエネルギーシールドを展開してガードするが……

「計算通りなんだよ、ミサイルフルバースト!!」

そこで動きを止めてしまった一夏に無数のミサイルが放たれた。

「ちよっ!?!」

「一夏!?!」

爆炎に包まれた一夏はシールドエネルギーを失い脱落。残されたのは箒、シャルロット、ラウラ、聖、簪の五人。だが、魔王^雷の攻撃はまだ終わっていないかった。ランチャーマードに変形させたガングニールでランスチャージをラウラに食らわせ、そのまま0距離射撃でラウラを聖の進行先へと吹き飛ばす。

「きやあ!?!」

「うわあ!?!」

そこにランスチャージ中に放っていたミサイルの雨が降り注ぎラウラと聖も脱落。

「ラウラ！聖！」

「機体性能と技量が違い過ぎる……」

「簪!」

残りは三人。だが、そこで忘れていたもう一人の敵が簪に迫る。

「えっ?」

「かーんちゃん! 捕まえた!」

そう、本音のナインテイルだ。

「しまった!?!」

ナインテイルに取り付かれ打鉄式式はシールドエネルギーを奪われていく。

「俺も忘れんなよ?」

気付けば雪兎は箒の目の前におり、ガングニールを一突きする。

「くっ!」

何とか雨月と空裂で防ぐも再びランチャーモードとなったガングニールの砲撃で箒も吹き飛ばされる。丁度そこで簪の打鉄式式のシールドエネルギーはナインテイルに吸い尽くされた。

「あとはシャルだけか」

「ぼ、僕は簡単にはやられないからね!」

その後、シャルロットは善戦したものの、雪兎の使う「LA:ライトニング・アサル

ト」と「J:イェーガー」では地力に差がありすぎてあえなく撃墜された。結果、雪兎と本音以外が全滅というとんでもない幕引きとなった。

「……地獄を見る。誇張でも何でもなかったという訳ね」

観客席でそれを見ていたスコールはその圧倒的な力に以前雪兎が言っていたことが事実だったと理解する。

「……彼と協力関係結んで良かった」

シャルロットの父親であるデュノア社社長も雪兎と敵対しない道を選んだ過去の自分を誉めたかった。

「またとんでもないの作ったねえ……」

棗局長は「LA:ライトニング・アサルト」の性能を見て改めて雪兎のとんでもなさを知る。

「あれはきつと兎の皮を被った災害だ」

雪兎の高機動時バイザーが兎の頭部を模したような形をしており、某試験部隊と同じ兎のエンブレムを見て誰かがそう眩き、雪兎の二つ名が決まった。『ラビット・デイズスター兎の皮を被った災害』と。

また、このレース以降、雪兎のアドヴァンスドパックスシリーズは余程のことがない限り使用を控えるようにと学園から通達があつたんだとか。

47話 一夏の誕生会 兔、一夏を祝う

キャノンボール・ファストは結局雪兔と本音の勝利に終わり、続く二年生のレースも試作バイザーボードを手にした忍の圧勝で終わった。三年生？ああ、あのダリルとかいうアメリカ代表候補生が圧勝していた。

「「一夏／君／さん、誕生日おめでとう！」」

その後、予定通り一夏の誕生会が織斑家で開催されたのだが、そのメンバーは……主役の一夏、箒、鈴、セシリア、ラウラのラバースに雪兔、シャルロット、聖、簪、本音の特訓メンバーと楯無、虚の生徒会メンバーに新聞部の薫子、更に中学の友達である弾と数馬に弾の妹の蘭、一夏の姉である千冬と一緒にになった真耶に雪菜、そして……蘭に連れられてきたマドカだった。

「マドカ、お前は どうしてここに？」

「いや、チケットの礼を言わねばと蘭に話したら今日はここで集まるからと連行された」

「そうか……」

色々とイレギュラーなことが発生していて流石の雪兔も困惑している。

「なあ、その子。千冬姉に似てないか？」

そんな中、一夏が気付かなくていいことに気付く。

「言われてみれば……」

「その娘、雪兎の知り合いらしいな。どこのどいつだ？」

流石に千冬は誤魔化せないようで、明らかにマドカを敵視している。

「ゆーくん、怒らないからお姉ちゃんに説明してくれないかな？」

雪菜も何かを察したらしく雪兎とマドカに逃げ場はなかった。

「……マドカ、お前さ。こつち側来る気ねえ？」

「何をいきなり」

「こつち側に来てくれるならお前は俺が何とかしてやるから」

「……どのみちこのままでは組織には戻れんだろう。好きにしろ」

流石のマドカもこの人数と人員は厳しいらしく両手を上げて降伏する。

「本人の承諾も取ったんで説明するが……最初に言っとく。こいつのことは俺に預けてもらえないか？」

「どういう意味だ、雪兎」

「まあ、大体の人は察してると思うが、このマドカは先日のサイレント・ゼフィルスの操者で亡国機業の一人だ」

「「「えっ!?!」」」

「といつても体内にナノマシン入れられて従う他なかったらしいんだがな……今は俺が無効化してるから安心してくれ」

「お前はレースのアドヴァンスドといい、どれだけ私を驚かせれば気が済むんだ……」
「いやー、今日のレース見せて少しは気が変わって組織抜けてくれるようにしようかと思つてたんですけど、蘭が連れて来ちゃったんで前倒ししようかと」

「お前、そんなこと考えてたのか……」

「これにはマドカも呆れている。」

「だが、亡国機業の手の者となるとそう簡単にはー」

「マドカ、ゼフィルス持つてる？」

「修理は終わったから持つているが……」

「その返却を条件に取引しようかと」

「雪兎君、もしかしてサイレント・ゼフィルスを手土産に組織から亡命させる気？」

「そういう訳です、楯無さん。そういうの得意でしょ？」

そう、雪兎がマドカに接触した理由はこれだった。本来なら黒騎士事件の時に取っまえてやるつもりだったのだが、先も言った通り蘭のファインプレーで前倒しになったのだ。

「それより、何で千冬姉に似てるんだ？」

「クローンか」

ラウラは何か思い至ることがあったのかマドカが千冬のクローンであるとは見抜いた。

「そうだ、私は織斑千冬を、ブリュンヒルデを量産しようなどという下らない研究の産物だ」

「「!?」」

これには何となく察していた千冬達以外も絶句する。当然だ。これはVTSなんて比べ物にならない問題だったからだ。

「なるほどね、ゆうくんがマドカちゃんを庇うのはそういう理由なのね」

「そういう訳さ、姉さん。こいつは失敗作だの名前なんてどうでもいいだのと存在を認められなかったんだ」

未だに一個人として扱われないマドカを雪兎はどうか世界に認めさせたかったのだ。

「……雪兎、お前の言いたいことはわかった。だが、これはある意味で私の問題でもある。お前一人に背負わせては教師としても姉弟子としても失格だ」

「それじゃあー!」

「保護責任者はお前と私と更識楯無として処理する。ゼファイルスに関してはオルコツト、お前も手を貸してもらおうぞ」

「わかりましたわ。サイレント・ゼフィルスが穩便に祖国に戻るのでしたらわたくしが説得してみせますわ。雪兎さん、貴方はわたくしとの約束を果たしていただきました。次はわたくしの番です」

「千冬さん、セシリア……」

千冬は教師・姉弟子としてセシリアはゼフィルスを取り返してくれたことへの返礼として協力を約束してくれた。

「戸籍はどうする？ちーちゃんクロンみたいだし、やっぱりちーちゃんここで？」

「ちーちゃん言うなど言っているだろう……マドカと言ったな？希望はあるか？」

「……私はこいつのところがいい」

「えっ？」

「織斑千冬は何れ超える目標だ。それに、そこのだらしないやつを兄とは呼びたくない」

「この娘、俺に対してなんかキツくない？」

こうしてマドカは亡国機業からの亡命者として雪兎達の保護下に入ることとなった。ついでに戸籍は雪兎の妹という扱いになり、蘭と同年ということ、来年度IS学園に入学させるまでは学園で保護ということになった。

「こ、これからよろしく頼むぞ、に、兄さん」

「とんだ妹ができちゃったな……」

その後、この話は口外不可ということが言い渡され、その後、一同は誕生会へと戻っていった。この面子、案外神経が図太い。

それぞれのプレゼントは、箒が着物、鈴が手打ちのラーメン、セシリアがティーセット、ラウラがナイフ、シャルロットが時計、弾と数馬がそれぞれのオススメのバンドのCD、蘭が手作りケーキ、楯無が小型の護身用スタンガン、簪が好きなアニメの総集編のディスク、聖がクッキー、本音がオススメのお菓子詰め合わせ、虚は好きな日本茶の茶葉、薫子がどこで知ったのか一夏が写真を撮るということで新しいカメラ、千冬はトレーニング用のリストバンド、真耶が入浴剤とバリエーション豊かである。

「何だ、俺がトリなのか？」

「うん、何だか雪兔の後だと皆霞んじやいそうで……」

「「うんうん」」

シャルロットの言葉に全員が頷く。

「まあいいか……俺はこれだ」

そう言つて雪兔が取り出したのは簪と同じく映像ディスクだった。

「それは？」

「過去のモンド・グロツソの中から俺が選りすぐりの試合を解説付きでまとめた総集編ディスクだ」

思つたより普通であつた。

「一夏の参考になりそうな試合をまとめた一夏エディションと千冬さんの試合をまとめた千冬エディションもあるぜ」

「ぶーっ!？」

この不意討ちに千冬が噴き出す。

「やっぱ姉弟とあつて参考になる試合が多くつてな」

「おお！助かるぜ、雪兔」

「「「やっぱり雪兔に持つてかれたー!!」」」

ラバーズが何か言っているが無視である。その後も皆でケーキを食べたり、弾と虚が

いい雰囲気になったり、一夏にラバーズが誰のプレゼントが一番だったか聞いたり賑やかに誕生会は過ぎていった。

48話 凶鳥の系譜 兎、マドカの専用機を作る

マドカを保護してから数日後。雪兎は千冬に呼び出されていた。

「マドカの専用機ですか？」

「そうだ。あいつの護身用にI Sを持たせることになったのだが、あいつはお前が作ったのじゃなきや嫌だどごねてな」

今は雪兎謹製の腕輪でナノマシンを無力化しつつ、体内のナノマシンを除去する薬を飲んでいるマドカだが、サイレント・ゼフィルスを返却したため自衛手段が無い。そこでI Sを持たせようという話になったのだが。

「あー、マドカのやつ、前に生徒だったら専用機組んでやるって言ってたの覚えてたんだ」

「そういう訳だ。責任を持つてあいつに作ってやれ……ただし、少しは自重しろよ？」

「アドヴァンスド程やらかすつもりはありませんが……」

「あれには各国も言葉を失っていたぞ？まあ、自国の最新鋭機が手も足も出んなどとは笑えん話だ」

あのレースを見た各国のお偉いさん達は雪兎を兎ラビットの皮を被トった災害と呼び、絶対に敵デイズスター

対するな！と各代表候補生に厳命したんだとか。

「……あれでもアドヴァンスドシリーズでは一番マシな方だったんですけど」

「あれでマシとはな……やはり天災の弟子は天災か」

千冬は雪兎の規格外つぷりに頭を抱えるも、本家天災に比べたらまだマシだと割り切る。

「くれぐれも問題を起こすなよ？イギリス、中国、ドイツ、フランス、ロシアは黙ってはいらぬが、警察国家を自称するあの国はまだマドカのこととやかやく言ってこんとも限らん」

「あの国ですか……黙らせる手段は無いんですけど、面倒なのでやりませんが」
そう、かの国の代表候補生のとある秘密を知る雪兎は黙らせようと思えば簡単にできたのだ。

「本当にお前達師弟というやつは……あの国を黙らせるなどどんな手段を使う気だ？」
「あの国の代表候補生の秘密を知ってる……そんなところです」

「私にも言えんことか？」

「いえ、今はまだ言っても確証とかないので逆に面倒なことになるから言えないだけです。まあ、個人的に脅したりはできませんが」

「確かにお前は兎ラビットの皮を被ディザスターった災害だな」

「その二つ名はあまり好きじゃないんですけどねえ」

そして、雪兎は去り際にこういい残した。

「あの国、もう少し警戒しといてください。そのうち絶対にあの無人機のコアとか白式にちよつかい出しにくると思うので」

「なるほど、それで私にだけでなく山田先生にまでアレを……」

「出来れば先生方で何とかしてください。俺は身内に手出されて穏便に済ます程気は長くないんで」

「わかった。お前が動くまでもなく終わらせてやる。お前が作ったこの剣参式でな」

職員室を後にした雪兎は早速部屋にマドカを呼び、専用機の話をすることにした。

「という訳でお前の専用機は俺が用意することになった。なんか要望あるか？」

「また雪兎がとんでもないものを作る気がしてならないよ……」

一応、シャルロットがストッパーとしてついてはいるが安心は出来ない。

「兄さん、既に草案くらいは出来ているのでしよう？まずはそれを見せてください」

そして、マドカは雪兎の妹になった以降は雪兎などにはこうして敬語を使うようになった。一夏などには相変わらずぶつきらぼうな態度を取るが、シャルロットには「義姉さん」と呼んでくるのでシャルロットもマドカを気に入っているのだが。

「基礎フレームまでは出来てるからな。ほれ」

そう言つて雪兎はモニターにそのISのデータを表示する。そのISの名は……
「【フツケバイン】……相手に凶事をもたらす鳥ですか？」

「高機動系のフレームにマルチウエポンバインダーか……他の武装もマドカに合つて
ると思うよ」

ちなみにマドカも雪兎達について朝練や放課後の特訓にも参加している。セシリアなどはマドカに偏向射撃のコツなどを聞いてかなりレベルアップしており、一夏も誕生会で渡した映像ディスクのおかげか動きが大分よくなっていた。その際に一度リヴァイヴIIを使わせてみたのだが、雪兎の推察通り千冬とは違った戦闘スタイルを好むマド

かにフツケバインはマツチするように設計されていた。

「マドカを除くと特訓メンバーじゃ俺かシャルくらいしか使いこなせないピーキーな仕様ではあるが、常識の範疇でマドカに合わせようと思っただらこうなった」

「確かにアドヴァンスドシリーズ程無茶苦茶ではないけど……」

実はシャルロットも【L.A:ライトニング・アサルト】以外のアドヴァンスドパツクのデータを見せてもらっているのだが、何れもとんでもないキチガイパツクだった。

「兄さん、これも追加して欲しいんですが……」

すると、マドカは別のモニターに表示してあった試作品の武装に目をつけ、雪兔に着けてもらえないかと頼む。

「試作型シールドブースタービット【ソードブレイカー】をか？まあ、ゼフィルスのビットを使えたんだから使えなくはないだろうが……」

その後も雪兔とマドカが意見を交わし、シャルロットが二人の意見をまとめながらフツケバインの設計を進めていった。

数日後、完成したフツケバインのお披露目は放課後の特訓の時間に行われた。

「こい、我が凶鳥！フツケバイン！」

マドカの声に応えるようにマドカをフツケバインが覆うように姿を現す。

「へえ、マドカの専用機はそんなISなのか」

装甲の大部分が黒で、所々が赤く、縁取りや細かいパーツが金で構成されたフツケバイン。その最大の特徴は背面にマウントされたマルチウエポンバインダー「レーヴァテイン」だ。マドカはビットを扱う要領でレーヴァテインを手元を持つてくると大剣へと変形させる。

「可変武装か、聖のバイザーボードに似ているな」

「二応、バイザーボードと同じように乗ったりも出来るぞ。マドカ、他の武装も使ってみろ」

そう言うのと雪兎はアリーナの機能を操作してターゲットを出現させる。

「まずはお前からだ【ヴァイス&シュヴァルツ】」

レーヴァテインを背面に戻して取り出したのは腰にマウントしてあるホルスターに納められた白と黒の二丁拳銃【ヴァイス&シュヴァルツ】だった。白のヴァイスがリボルバータイプ、黒のシュヴァルツがマガジンタイプのハンドガンだ。それでマドカは次々とターゲットを撃ち抜いていく。

「拡張領域があるのにわざわざホルスターがあるのには意味があるの？」

「まあ、見てろって」

その理由はすぐに明らかになった。それぞれ弾を射ち尽くしたのかヴァイス&シュヴァルツをホルスターに戻すとガシャンという音と共にすぐさまリロードが完了する。

「自動装填機オートリローダーか……」

そう、高速切替を持たない人間でも高速リロードを可能にする自動装填機能を持つホルスターだったのだ。続いてマドカが取り出したのは雪兎やシャルロットが使うのと同じソードライフル系の武装ソードライフル改【レイヴン】だった。

「ふっー」

その名の通り漆黒の翼のようなレイヴンを剣と銃のモードを切替ながらターゲットを破壊していくマドカ。更に腕部内蔵のアンカーショット【ステインガー】も使いター

ゲットに撃ち込んで引き寄せてからレイヴンで斬り刻む。最後にシールドブースタービット「ソードブレイカー」を起動させてターゲットを破壊しつつレーヴァテインをビームキャノンモードにしてターゲットを破壊すると、腕部に取り付けられたもう一つの武装、三刃のブーメランのようなファンングスラッシャーを手にし、最後のターゲットに投げつけ破壊した。

「すごい……」

「あれだけの武装を使いこなすマドカさんもすごいですが、あのフツケバインというISもとんでもないISですわね」

「ああ、装備の一つ一つが洗練されたデザインで無駄が無い。性能も文句のつけようがないな。あれを量産されたら厄介だ」

「しかも、あれでまだ拡張領域に余裕ありそうな感じよ？汎用性も高いんじゃない？」

「何だか参式とはコンセプトが逆な印象があるね」

代表候補生達の評価も上々である。

「よし。マドカ、ちよつと模擬戦でもするか？」

「はい！」

それから雪兎、の雪華と模擬戦になったのだが、その凄まじい戦闘に一同は負けていられないと刺激を受けるのであった。

49話 おいでよ天災のラボ！ 兎、ペットを飼う!?

マドカの件は未成年であること、マドカの境遇、ナノマシンによる監視があったことなどとマドカがサイレント・ゼフィールス強奪時に殺しをしていないこと、サイレント・ゼフィールスはちゃんとイギリスに返却されたこと、亡国機業の情報を話したこと、そして何よりも雪兎と千冬が保護するということもあって多くの国が保護観察という処分を認めた。キャノンボール・ファストで雪兎の脅威を目の当たりにして雪兎が保護すると言っているマドカをどうしようという国は表立ってはいないだろう。

そんなこんながあったがマドカは最近ではすっかり特訓メンバーとも親しくなってきたて皆の妹分というポジションを獲得していた・・・。実力は雪兎やシャルロット、楯無に並ぶレベルなため他のメンバーもマドカに負けていられないとレベルアップに励んでいる。

そんなある日、雪兎の端末に珍しい人物から連絡があった。

『はろはろー。やあやあ我が弟子よ、元気にしてるー?』

それは雪兎の師匠でありISの開発者・篠ノ之束だった。

「珍しいですね、束さんが電話してくるなんて」

『そうだねー。ところで今度の土日は空いてるかな?』

「予定は特にありませんけど・・・」

『では久しぶりに私のラボに来て欲しいんだよ。あつ、座標データは雪華に送っとくから』

「いいですよ。クロエやあいつにも会っておきたかったところですから」

『それじゃあ、よろしくねー』

こうして、雪兎は約半年振りに東のラボへと赴くこととなった。

「確かこの辺のはずなんだが・・・」

そして土曜。雪兎は千冬からの依頼という名目でISでの飛行許可を取って東の移

動ラボである原子力潜水艦「吾が輩は猫である、名前はまだない」のいると思われるエリアにやってきた。

『来たね！ちよつと待って』

すると東から通信があり潜水艦が浮上してくる。

『いつものところから入ってねー』

ハッチが開き、雪兎は慣れたようにハッチから中へと入っていく。

「やあやあ。よく来たね、我が弟子よ」

「来ましたよ、師匠」

「「いえい！」」

まずはハイタッチを交わす師弟。

「そういえば面白い娘を拾ったんだって？」

「マドカのことですか？」

「そうそう、ちーちゃんクロンって聞いているけど、どんな娘？」

それからしばらくマドカや箒、一夏の近況を話していると……

「お久しぶりです。雪兎兄様」

「クロエか、久しぶり。半年振りか？」

東のラボにいるもう一人の住人クロエ・クロニクルが兎（ロツパイヤー）を抱いてやつ

てきた。

「ミュウも久しぶりだな」

「きゅ」

この兎、ただの兎ではない。何処ぞの施設で実験動物になっていた兎なのだが、人語を理解するくらい賢いのだ。それを施設を叩き潰した東が面白がつて連れて帰ったのがこのミュウと名付けられた兎なのだ。ちなみに名前の由来はミュータントな兎から。

「雪兎兄様、また料理の腕が上がりました」

「へえー、なら後で食べさせてもらおうか」

「はい。東様は美味しいとしか言ってくださいませんから雪兎兄様にちゃんと評価していただきたいです」

「本当に我が弟子には感謝してるよ。ゆうくんがクーちゃんにお料理教えてくれたからラボでも毎日美味しい料理が食べられるんだから。それよりもクーちゃん、私のことはお母さんと呼んでいいんだよ?」

「いえ、東様は東様です」

「またやってんですか、そのやり取り」

東はことある毎にクロエに「お母さん」と呼ぶように言っているのだが、クロエにとつて東は恩人であるためか「東様」と呼んでいる。一方で雪兎は料理などを教えたりして

いたらいつの間にか「雪兎兄様」と呼ばれるようになっていた。

「それで、今回の呼び出しの理由は何なんですか？」

「それなんだけどね。ゆうくんが収集したデータと……みゆうちゃんをしばらく預かってほしいんだよ」

「はあ？ ミュウをですか？」

「ちよつと忙しくなりそうだね」

「おそらく専用機限定タッグマッチに出てくるゴーレムⅢ達のことだろうか？ と雪兎が考えると。」

「やっぱりゆうくんは色々知ってるみたいだね」

「!？」

東は心を読んだかのような指摘をする。

「前は聞かなかったけど、東さんが当ててみせよう！ ズバリ、ゆうくんはこの世界について色々知ってるよね？ 外の世界でこつちのこと知って生まれ変わった。違うかな？」

「東さんはそういうオカルトじみたこと信じないと思ってたんですが……正解ですよ」
転生者であることを看破され、雪兎は大人しくそれを認める。

「まあ、私としてはあまり認めたくないけどゆうくんという実例がいちゃね……で、

何処まで知ってるの?」

「この後東さんがやろうとしてること……今年の冬近くのことまでですかね?そこまでしか本で出てなかったの」

「本か、つてことはライトノベルか何かかな?」

「大正解ですよ。でも俺というイレギュラーがいたんで色々変わってますし、アニメとかにもなつててそのエピソードも混ざつてたりしますからもうあまり当てにはならないと思います」

「そっか、でもイレギュラーっていうのは少し違うんじゃないかな?」

「えっ?」

「ゆうくんはちゃんとこの世界の住人だよ。君を私は認めてる」

「東さん……前に雪華にも言われました」

「おっ?二次移行の時かな?」

「はい」

「とりあえず今はゆうくんが何を何処まで知ってるかまでは聞かないよ。聞いちやつたらやっぱりつまらないもの」

前回と同じく東はそう言う。

「多分、ゆうくんにとっての本番はここからじゃないかな?」

「俺にとつての本番？」

「そつ。きつとこれからはゆうくんの知らない事ばかりのはず。だから油断はしちや駄目だよ。」

「はい、わかってますよ」

「よろしい。ではみゆうちゃんのこともよろしくね？ちーちゃんには連絡しといたから」

「根回し済みでしたか・・・まあ、ミュウなら手間はかからないからいいですけどね」
何せ下手な子供より賢い兔だ。ちゃんとやって聞かせれば問題無いだろう。

「じゃあ、ついでにコレも手伝ってもらおうかな？」

そうやって束はモニターにゴーレムⅢと思われる無人機のデータを表示する。

「それ、やっぱ束さんが作ったやつかよ!？」

「だっていつくんや箒ちゃんを強くしようと思つたら百の模擬戦より一回の実戦でしょ?」

「だから天災なんて呼ばれるんですよ・・・」

「そういうゆうくんだって兔ラビットの皮を被ディザスターった災害だっけ?そう呼ばれてるじゃん」

どっちもどっちである。

「これさあ、前に作っておいたやつなんだけど。今のゆうくんだと全部一人で殲滅出来

「ちやうよね? それじゃあ意味ないからもっと強化しようと思つててね」

「まあ、こいつら程度なら俺でなくとも殲滅されますね・・・千冬さんに」

「あの打鉄・参式とかいうISでならちーちゃんでもやれるね・・・」

二人の脳裏に参式でゴーレムIIIを叩き斬る千冬の姿が浮かぶ。

「・・・俺が協力したことはバラさないでくださいよ?」

雪兎としても楯無や簪が怪我をしないのであればあの襲撃はレベルアップにもつてこいのシチュエーションのため、少し協力することに。

「あつ、束さん。千冬さんには参式渡してるんで暮桜は無理に封印解除しなくて大丈夫ですよ」

「そうだね。あれがあれば必要ないかもね」

「あと、クロエをお使いに出す時は十分注意してくださいね。亡国機業とかいう馬鹿が人質とかにしようと思致るかもしれないので」

「くーちゃんを? わかった注意しておくね。万が一そんなことしたら私自ら殲滅してあげるよ」

さりげにワールドページや亡国機業との邂逅も潰しにかかる雪兎。本当に亡国機業は泣いていい。

その後、クロエの料理を食べてからミュウを連れて雪兎は学園に戻った。

「お帰り、雪兎……って、どうしたの、その兎」

「束さんが預かってくれて渡された兎。名前はミュウって言うんだ」

「きゅ」

すると、「よろしくな」と言っているのか前足を上げてシャルロットに挨拶するミュウ。

「……えつと、もしかしてこの子。人の言葉分かるの？」

「きゅっ」

『その通り』

今度は何処からともなくプラカードを取り出したミュウ。

「.....」

「そのプラカードは楯無さんの扇子と同じ原理な」

「うん、雪兎が連れてきた兎だし、普通じゃないのは予想してたけど。ここまですは僕も予想してなかったよ」

こうして雪兎とシャルロットの部屋に新たな住人が増えたのであった。

八章 「兎と襲撃のタツグマツチ」

50話 専用機限定タツグマツチ！一夏のパートナーは？
兎、ハブられる

ミュウが学園にやってきた翌日の昼休み雪兎達と昼食を取ろうとマドカが授業中はマドカに預けられているミュウと共にやってきた。

「兄さん、昼食の時間だ」

「きゅ」

「あつ、マドカちゃんいらっしやい。って、それ兎？」

マドカもすっかり1年1組の生徒にはお馴染みとなつているが、ミュウを見るのは初めてであるため驚く。そもそも学園に兎はいなかったはずなので驚くのも無理は無い。

「兄さんの兎でミュウという」

「きゅ」

『ご主人がお世話になっております』

すると、ミュウはプラカードを出して挨拶する。

「えっ?」

普通に考えて兎がプラカードなんか出して挨拶したら驚くに決まっている。

「ん?その兎ってミュウなのか?」

そんな中、以前にも雪兎に預けられた時に会っている一夏がミュウに近付く。

「やっぱりミュウだ。久しぶりだな」

「きゅ」

『あつ、一夏だ』

ミュウも一夏を覚えていたのかマドカの腕の中から飛び出すと一夏に飛び付いた。

「おっと、相変わらずだな、お前は」

「雪兎が動物を飼っていたとは初耳だな」

「正確には束さんのところから預かっているというのが正解だ」

「何、姉さんの?」

「きゅ?」

『貴女が箒?』

「あ、ああ、私が箒だ」

すると今度は箒に飛び付くミュウ。

「きゅ」

『よろしくなの、箒』

「ああ、よろしくな、ミュウ」

早くも箒とも打ち解けようだ。

その後、屋上でお弁当会となったのだが・・・

「げっ！ミュウじゃない」

「きゅ」

『久しぶりなの、雌猫』

そう、鈴もミュウとは面識があり、何故かこの一人と一羽は物凄く仲が悪いのだ。

「こっちも相変わらずだな」

しかし、鈴以外のメンバーとは仲良くなった模様。

「あんた達は知らないのよ、そのバグ兎の本性を……」

「きゅっ!」

『失礼な!元はと言えば雌猫が悪い!』

どうも鈴がミュウに何かしたのが原因っぽい……

「ふん!」

鈴には言う気は無さそうだ。

その日の午後、全校集会にて専用機持ち限定タッグマッチの開催が知らされた。しかし、雪兎だけは一人で参加が言い渡される。

「何で俺だけ？」

「お前がキャノンボールでやり過ぎたからに決まっているだろうが、馬鹿者」

不思議そうにしていると千冬の主席簿アタックが久しぶりに雪兔に炸裂した。

「……そういう訳ですか」

「その代わり、アドヴァンスドの使用は許可してやる」

「つまり仮想敵をやれと？」

「そういう訳だ」

この瞬間、専用機持ち達の、特にキャノンボールでボコられた一同の表情が凍る。あのアドヴァンスドシリーズが解禁される。つまり、あのキャノンボールでの悪夢が再びということだ。

「マズいな、まだあれに対抗する手段は……」

「シャルロットさんの話ではアレ以外にもアドヴァンスドはあるとのこと……」

「つまり、アレよりヤバいのが出てくるかもってこと？」

(ガクガクブルブル)

「シャ、シャルロット？何故震えているんだ？」

「他のアドヴァンスドはアレよりヤバいのね……」

「不幸だよ……」

「うん、無理だねー」

特訓メンバーは未知のアドヴァンスドを、シャルロットは以前に見たアドヴァンスドシリーズの性能を知るが故に身体が震えていた。

「……」

「先輩?」

そして、震えている生徒はもう一人いた。

(ヤバい、何故だか知らないが身体が震えてしようがない)

震えていたのはダリル・ケイシーという三年生でアメリカの代表候補生だった。そして、このダリル・ケイシー。本名はレイン・ミューゼルといい、あのスコールの姪で亡国機業のスパイでもある。それゆえなのかアドヴァンスド解禁の知らせを聞いた雪兎の笑みに物凄く悪寒を感じたのだ。

(ん?何か視線が……!?)

そして視線を感じてそちらを向くと、犬歯を剥き出しにして笑う雪兎の顔があった。

(……ヤバい、これバレてんじゃね?)

そう思わずにはいられないダリル。何故なら、以前から雪兎達の情報を得ようと周りを嗅ぎ回っていたのだが、ダリルは中々雪兎達に接近する機会を得ることが出来ずにいたのだ。そこであの笑みである。全てを見透かすような雪兎の視線にダリルは恐怖を

感じるのであった。

その日の放課後、早速一夏のパートナーを賭けてラバーズ達が言い争いや一夏に迫ったりしている・・・

「きゅ」

一夏の前にミュウが立ち塞がる。

「ミュウ？」

「きゅっ！」

『そんなことばかりしてるから選んでもらえないんじゃないの？』

グサツ！とプラカードに表示された言葉がラバーズに突き刺さる。

「きゅ」

『迫るのは脅迫してるってこと。一夏が怯えてる』

「「「「.....」」」」

「きゅきゅ」

『パートナーになりたいならタッグマッチでパートナーになる利点をちゃんと示してお願ひするの。少しはシャルを見習うの!』

兎に説教される女子四人という謎の光景が出来上がっていた。

「ミュウちゃん凄い.....あの四人を止めた」

だが、ここで一人キレるラバーズがいた。

「一夏は私と組めばいいのよ!」

鈴だ。ミュウと対立する鈴は一夏に手を伸ばそうとするが。

「きゅっ!」

そこにミュウのジャンピンググローリングソバットが鈴の顔面に直撃し、吹っ飛ばされる。

「「「「えっ?」」」」

「やったわね!このバグ兎!!」

そして鈴はついいつもの癖でISを部分展開してミュウに殴りかかってしまう。

「あつ、やばっ!？」

鈴も途中で気付いたのだがもう遅い。しかし、鈴の攻撃がミュウに届くことはなかった。

「「「えっ!?!」」」

何故ならミュウを何処からともなく現れた白い機械の腕がガードしていたからだ。

「きゅ」

『今の私じゃなかったら危なかったの』

「人の台詞真似してんじゃないわよ! って、その腕つてまさか……」

「きゅ!」

『来るの! 束ご主人特製 I S 【月光】』

ミュウが鳴くとミュウの周りに透明の球体が現れ、それに先程の腕や脚自体がブレードになっている脚部に兎を模した頭部、背面にスラスターを持つマドカくらいの大サイズの小型 I S 【月光】が出現した。

「「「う、兎が I S に乗ってる!?!」」」

そう、ミュウが束の興味を引いた最大の理由はミュウが I S を使えることなのだ。つまり、ミュウは世界でたった一羽の I S 操者兎なのだ。

「しかもあれ、モビルトレースシステム使ってるな。脚のブレードからして近接格闘型

か……」

そんな中、雪兎は一人。月光に使われてる技術を観察していた。

「きゅ」

『雌猫、かかってこいなのだ!』

「上等じゃない!今日こそ人間様の力を思い知らせてやるわ!!」

その後、ミュウVS鈴の戦いが繰り広げられたのだが、小回りが効くミュウに翻弄された鈴が敗北するという結果に終わった。

「きゅ」

『笑止、なの』

「[[[[兎つえー]]]]」

やはり束が気に入っただけあってミュウも細胞単位で普通の兎ではなかったのであつた。

51話 決定タッグパートナー！ 兎、皆を鍛える

専用機持ち限定タッグマッチは文字通りタッグ戦。千冬に言われてソロプレイとなった雪兎を除き、それぞれペアを組むことになったのだが……

「まさかお前も出ることになるとはな……」

「前みたいに雪兎と組みたかったけど織斑先生の指示じゃ仕方ないよね」

「私も出来れば兄さんと組みたかった」

「きゅ」

『頑張つて、シャル、マドカ』

そう、マドカまでも参加することになったのだ。しかも、シャルロット・マドカチームというんでもペアで。その他のメンバーはというと……

「頑張ろうぜ、箒」

「うむ（少し複雑だが、よしとしよう）」

前回組んだという理由で一夏・箒チーム。

「鈴さん、今回は一時休戦ですわ」

「そうね、セシリア。私達を選ばなかったことを後悔させてあげるわ！」

選ばれなかった怨み（完全に逆怨み）でセシリア・鈴チーム。

「一夏君と組めなかったのは残念だったかもだけど、私はまたラウラと組めて嬉しいよ」
「悪いな、聖。今回は前回のような失態は犯さん」

ラウラは親友である聖とチームを組み。

「本音、頑張ろう」

「うん、かんちゃん」

「私も簪ちゃんと組みたかった」

「たつちゃんとは私が組んであげる」

簪は本音と組み、楯無は意外にも友達だった忍と組むことになった。そして、原作通りのダリルとフォルテのイージスコンビにソロの雪兎で計八組15名が競うことになる。

（原作より増えたよなあ・・・専用機持ち）

原作一卷でもセシリアが言っているが、専用機持ちというのは一種のエリートであり、学生の時点でそれを保有するというのは極少数である。それが一夏（と雪兎）という起爆剤がいたためにセシリア、鈴、シャルロット、ラウラといった専用機持ちの代表候補生が入学してきたのだ。更に雪兎の関与で聖や本音も専用機持ちになった。それを考えれば一年生に専用機持ちが10名もいる今年は間違いなく異例のことだろう。

「さてと、皆の様子でも見てくるか」

普通ならこの期間中は各自が特訓を行うため雪兎が様子を見に行くのは偵察になるのだが、一年生の専用機で現在雪兎が関与していないISは無いと言つてよく、更に言えばメタ装備やアドヴァンスドというキチガイシリーズを持つ雪兎にまともにやつて勝てるのは特訓メンバーも思つてはいるはずがない。そこで、他のメンバーに勝つためにもそれぞれが雪兎に特訓メニューを組んでもらつてゐるのだ。

シャルロット・マドカペアの場合。

「行くよ、マドカ」

「ああ、シャル姉さん」

二人とも戦闘スタイルが似ていることもあつて特に問題はなく、ひたすらコンビネーションを鍛える特訓を雪兎は課していた。

「この二人ならまず大丈夫だろ」

この二人に限つて言えば技量はメンバーの中でもトップクラスであるため雪兎はあまり心配はしていない。片や雪兎の雪華と同じスペックを持つリヴァイヴⅡSを操るシャルロットに、片や凶鳥の名を冠する自重無しのフツケバインを乗りこなすマドカだ。間違いなく優勝候補だろう。雪兎も流石にアドヴァンスド無しでこのペアはキツイ。

一夏・箒ペアの場合。

「はあっ！」

「くっ！また太刀筋がよくなってきたな、一夏」

「ああ、雪兎のくれたあのディスクで色々学んだからな」

そう、一夏は誕生日に雪兎から貰ったあのディスクを何度も見返してその技術を吸収しており、朝練で取り戻しつつある昔の勘も合わさって急激に成長していた。その一つが千冬が試合で使っていた戦術「先の先、後の先」を体現した抜刀術だ。零落白夜は確かに消耗が激しい。では、千冬はどうしていたのか？簡単だ。一撃で決めてしまえばいい、とばかりに瞬時加速と抜刀術の合わせ技による一撃必倒の斬撃。やはり姉弟と云うべきか一夏にはこれが一番合っていたのだ。

「あとは雪羅も使いこなせば完璧だろう」

「雪兎に言われるまであの使い方は思い付かなかったよ」

「零落白夜のクローで掴んでの継続ダメージとはな・・・盲点だった」

雪羅の一番有効な使い方はクローで斬ったり、0距離で荷電粒子砲を射ったりするよりクローで掴み続けることだった。一人目を瞬時加速からの抜刀術で瞬殺し、二人目を零落白夜のクローで掴み続ける限り絶対防御を強制発動させ続けてシールドエネルギーを削る。自身のエネルギーが少なくなったら荷電粒子砲で吹っ飛ばしてからか常時紅椿が接触し絢爛舞踏で回復。雪兎が二人に教えた戦術だ。それは実に雪兎らしいえげつない戦術だった。

（簪と本音にも似たような戦術教えたしな）

セシリア・鈴ペアの場合。

「お前らは機体相性はいいんだからもつと連携を鍛えろ」

こちらにもシャルロット・マドカペアと同じく連携を重視したメニューだった。連携に関しては以前の真耶との模擬戦の時にも散々言って聞かせたが、この二人のISは確かに相性がいい。近接に強く、衝撃砲という攻撃手段を持つ甲龍。ビットによるオールレンジ攻撃と偏向射撃を可能とする遠距離型のブルー・ティアーズ。上手く立ち回れば衝撃砲で牽制しつつスナイプすることで相手は近付くことも出来ずやられるか、ビットで翻弄されているところを衝撃砲や双天牙月でバツサリ、という戦術が使える。

「この連携、使えるわね。セシリア」

「ええ、まるで鳥籠バードケージですわ」

「ふうふうふうふう……」

「やっぱりお前ら仲良いよな?」

ラウラ・聖ペアの場合。

「静と動、お前らはある意味対極にいるI Sを使うペアだな」

A I Cによる停止と防御を得意とするラウラと、バイザーボードで縦横無尽に駆け抜ける聖は普通の連携は難しいと考えた雪兔が二人に与えた戦術は……

「あえて連携をせずに相手を分断しろ」

その対極に位置する戦闘スタイルから逆にそれを利用して敵を分断して一対一にして各個撃破というものだった。

「なるほど、停止結界は一対一なら非常に有効だからな」

理想としてはラウラがAICで一人を止め、その間に聖がもう一人を潰して残りを二人で叩くというもの。原作でラウラ戦の一夏とシャルロットがやった戦術だ。

「私無視してラウラに向かつていったら私がソニックブーストアタックで突っ込んで蹴散らせればいいんだよね？」

「高速移動によるバリアアタックか……」

ソニックブーストアタックとは某神聖十字軍製のロボットなどが使った高速移動時に形成されるブレイクフィールドによる突撃技などのバリア系を攻撃に転用した技を再現した技で、バイザーボードに特殊なフィールド発生装置が積んであり、高速移動時にそれを展開して敵を蹴散らすのだ。この手の攻撃は割りと昔からアニメ等で存在し、その有用性は実証済みだ。

「こつちも問題なさそうだな」

簪・本音ペアの場合。

「なるほど・・・そうきたか」

二人の戦術はこうだ。まず、簪がオートクチュールである【剣山】の大型クローで相手を拘束し、本音のナインテイルの九尾で打鉄式にエネルギーを供給しながら相手のシールドエネルギーを食らい尽くす。単純だが有効な戦術だった。

「この前のレースを参考にした」

「私も頑張る！」

「少し入れ知恵したとはいえその戦術に至るとはな・・・」

この戦術、一夏と箒のものに似ているが、大型クローによる拘束があるためこちらの方が確実性は高い。ただ、もう片方の相手を拘束しつつ簪が相手しなければならぬのがネックだが、拘束した相手を盾にする戦術も雪兎は教えておいた。

「うん、やっぱり雪兎はえげつない」

「あまあまつて本当に敵にしたくないね……」
特訓メンバーはこんな感じだ。

そして、タッグマッチ当日。トーナメント表が公開された。

「へえー……少しは楽しめそうじゃん」

一回戦で雪兎と当たった不幸なペアは……ダリル・フォルテペアだった。

52話 タッグマッチ開幕！ 兎、蹂躪する

注目のタッグマッチ第一回戦第一試合は唯一ソロで参加となった雪兎と三年生のダリル・二年生のフォルテペアの試合だった。

「まさかこんな早くお前と当たるとはなあ」

「先輩、しかもあの装備はおニューっぽいッスよ？」

雪兎が事前に相手の情報を調べ尽くしてからくるタイプだということから考えて雪兎の装備は対ダリル・フォルテ用に用意したものだと二人は考えていた。

「先輩方、準備はいいですか？」

そんな雪兎が纏っているパックは濃い紫と赤紫色のパーツで構成されている。これといった武装は見当たらないが、両腕を大型のガンドレッドで覆っており、手も白式の雪羅のクロードモードと同じくらいに大型化されていることから近接格闘型と推測されるが「L A：ライトニング・アサルト」のようになってんこ盛りではないことにダリルは少し疑問を抱く。

「お前、オレ達にはアドヴァンスドとやらを使う気がねえってか？」

「いいえ、こいつもちゃんとアドヴァンスドですよ……」【L F：ルシフェリオン】、こ

いつのこと甘く見てると痛い目見ますよ?」
ルシフェリオン
「明星?」

その頃、観客席では・・・

「うわあー、雪兎やる気だよ」

「シャルロット、そんなにヤバいのか?あのルシフェリオンってのは」

雪兎の試合は見ておくようにと千冬に言われて他のメンバー総出で観戦していたのだ。

「うん、ルシフェリオン、バルニフィカス、エルシニアクロイツ、スピリットフレアって
いう四種類のパツクはダークマテリアルズってカテゴリーに入るアドヴァンスドパツ

クで、性能的にはライトニング・アサルトより上位のパックだよ」

バルニフィカスはバクテリアで傷、エルシニアは感染症の一種を意味する単語だ。スピリットフレアは播らめく炎を吐くものを意味する。どれもかなり厄介なものを意味しており、暗黒物質ダークマテリアルというカテゴリー名からも普通ではないとわかる。

「ルシフェリオンは明星。特性は一撃必倒の超火力仕様なんだよ」

「つまり、この試合は……」

「うん、瞬きなんかしたら見逃すよ？」

『試合開始！』

そのアナウンスと共に最初に動いたのは雪兔だった。

「なっ!?!」

いきなりの瞬時加速で雪兎はダリルが纏う「ヘル・ハウンド」の懐に飛び込むとその大きな手でダリルの頭部を掴み地面に押し倒すように叩き付ける。

「あがつ」

「先輩っ!?!」

「まだ終わりじゃねえぞ?」

そして、そのまま再び瞬時加速で地面に叩き付けたダリルを押し付けながら直進し引き摺っていく。

「自慢の【イージス】も展開する時間なきや意味ねえわな? 止めだ、デイザスター・ヒート」

最後に雪兎はダリルを持ち上げると掌にある砲口から爆炎を放ちアリーナの壁まで吹き飛ばされたダリルはあつという間に戦闘不能になってしまった。

「なっ……!?!」

「鉄壁とか言うからどんなもんかと思えばこの程度か……」

その声には明らかな失望が感じられた。

「次はあんたの番だ。フォルテ・サファイア」

「くっ!」

雪兔がフォルテに視線を向け瞬時加速で迫るとフォルテはすぐさま正面に氷壁を作り出してブロックしようとするも。

「誰が直進しか出来ないなんて言った？」

声が出したのは背後からだった。

「ひいつ!?!」

「今のは……個別連続瞬時加速!?!」
リボルバー・イグニッション・ブースト

雪兔が行ったのは氷壁に当たる前に横方向に瞬時加速を行い軌道修正をし、更にもう一度瞬時加速を重ねてフォルテの背後へ回るといふものだった。これは複数のスラスタを用いた連続瞬時加速で方向転換までこなす神業だったのだ。

「何よ、アレ……あんなのどうしろって言うのよ」

「……」

鈴は雪兎の変態的な神業に戦意を落とすが、一方で一夏は試合を食い入るように観ていた。

「くっ、それならこれでどうツスカ!!」

なんとか雪兎の魔の手を逃れたフォルテは自身の周りを氷壁のドームで覆い隠し全面防御を展開する。しかし、それは悪手だった。

「終わったね」

「どういうことだ？あの氷壁は彼女達の得意とする鉄壁だぞ？そんな簡単に破れはー」

「言ったよね？ルシフェリオンは超火力仕様だつて」

「ちよつと待ちなさいよ・・・あのパック、アドヴァンスドとか言いながら全然装備無いわよね？」

「じゃあ、複数分のパックの容量は何処に使われたの？」

そう、アドヴァンスドは通常のパックの複数分の容量を使用する装備。だが、ルシフェリオンにそんな容量を使っているようには見えない。

「ルシフェリオンに使われた容量はいくつつ分だ？」

「四基分……雪兎はそう言ってたよ」

ライトニング・アサルトよりも一つ多い。つまり、その分のほとんどもを火力に回したということになる。そして、その火力は氷壁のドームに引きこもったフォルテへと向けられる。

「確かに終わったな……」

雪兎は氷壁のドームを見て酷くつまらないものを見た顔をする。

「正直、マドカの時以上の失望だな、これは……これでアテナの楯とは笑わせる」
そう言いながら雪兎は右手の掌を氷壁に向ける。

「……コードSLB起動」

すると掌の砲口に超高温の炎が集束されていく。

「疾れ明星、全てを灼き消す焰と変われ……ルシフェリオン・ブレイカー!!」

放たれた焰は氷壁など無かったかのように容易く氷壁を貫通すると、そのまま中にいたフォルテをアリーナの壁へと叩き付けた。絶対防御によって守られていたからフォルテ自身はなんともないが、彼女のIS【コード・ブラッド】の装甲の表面は黒焦げになっており、その威力の凄まじさを物語る。

「……これを防ぐつもりだったのなら楯じゃなくて城壁でも用意しておくんだつたな」
試合は当初はもう少し拮抗した試合が予測されていたが、結果は雪兎の圧勝。それも蹂躞と言つていい圧倒的な試合だった。そして、雪兎は試合後に観戦している一夏に視線を向けた。

「・・・やっぱりか」

「どういうことだ、一夏」

その視線の意味を理解した一夏に箒は説明を求めろ。

「この試合なんだけどさ・・・雪兎は俺に見せてくれたんだよ。俺が目指す頂きを」

そうこの試合、雪兎は初めからダリルとフォルテなど眼中にはなく、一夏が目指すべ

き戦闘スタイルの極地を見せつけることが目的だったのだ。

「待ってやがれ・・・絶対に追い付いてやる!」

この一夏の決意が白式にある決断をさせることになるとはこの時は誰も思いもしていなかった。

53話 無人機再来！ 兎、特訓の成果を見る

雪兎の圧倒的な試合の後、残りの試合が始まろうとしていたが……

「うわあっ!?!地震!?!」

突如アリーナが大きく揺れる。

『全生徒は地下シェルターへ避難！繰り返す、全生徒はーきゃあああっ!?!』
教師が避難勧告のアナウンスを入れるが、その時、再びアリーナが揺れる。

「一体何が……」

その揺れの原因は数体の I S だった。それぞれ試合前で待機していた専用機持ちを狙ったものと思われ、各アリーナに二、三体ずつ黒いボディでバイザーを着けた明らかにマネキンと思われる何かが乗っているような不気味な I S が現れ攻撃してきたのだ。

「何だ、あれは……」

「前に雪兎君が倒した無人機に似てる」

だが、そのデザインは……

「あれって、『ムラクモユニット』?」

そのデザインに一夏は見覚えがあった。そう、以前に弾の家でプレイしていた対戦格闘ゲームに登場する『ムラクモユニット』と呼ばれる人型兵器で、 λ 、 μ 、 ν の三基がゲーム中には登場する（もう一体ムラクモユニットと思われるキャラも存在する）。アリーナを強襲してきた I S は本体の次元接触用素体の少女をマネキンのようなものに変え、手足のユニットを I S っぽく大型化したようなものだった。この二機の違いは色、そして腕と背面のブレードだったパーツが爪と砲身になっていることだろう。

「一夏! 迎撃するぞ!」

「聖、私達もいくぞ!」

このアリーナにいたのは一夏、箒、ラウラ、聖の四名。この無人機を仮にゴーレム α 、 β とし四名は I S を展開して迎撃に移った。

一方、鈴、セシリア、シャルロット、マドカのいるアリーナには鋏のようなシザークローを持つγとパイルバンカーを持つδにチャクラムのようなものを持つεの三機が襲撃して来ていた。

「何よこいつら……」

「前のクラス代表戦の無人機に似てはいますけど……」

「ともかく、他の生徒が避難する時間を稼がなきゃ！」

「何であろうと敵であるならば倒すまでだ！」

簪、本音、楯無、忍のいるアリーナにはチエーンソーを持つぐ、トンファーを持つη、
螳螂の鎌のようなものを持つθの三機が現れる。

「これって・・・」

「あの時の無人機？」

「随分と強化されてるみたいね」

「みたい」

「あいつが警戒していたのはこいつらか！」

突如現れた無人機達に指令室にいた千冬はすぐに自身も参式で迎撃に向かおうとするが……

「織斑先生！まだ別の無人機が！」

真耶がそう言い反応を調べると雪兔のいたアリーナに三機、更に上空に二機の無人機がいた。

「くそっ！天野、お前は出られるか？」

『幸いダメージもないので出られます……織斑先生は上空の二機をお願いします』

「無理はするなよ？足留めで十分だ」

『了解……でも、倒してしまっても構わないのでしょうか？』

明らかに危機的状況だというのに雪兔は某錬鉄の英雄のようにそう言う。

「構わん、私が行くまでに片付けば他の援護に向かえ！」

千冬も無人機ごとときでやられるとは思っていないようで少し冷静さを取り戻しそう指示する。

「束さん、俺殺しにきてないよな？」

千冬との通信を切り雪兎が対峙したのはえ、μ、νと思われるゴーレム。ダリルとフォルテは雪兎がボロボロにしまったので出られないことを考えると雪兎が三対一で一番不利な状況だ。

「調子にのってムラクモシリーズ全部作るんじゃないかなかったわ・・・」

そう、このムラクモシリーズは雪兎が束のところまで改修したゴーレムなのだ。それぞれの武装は雪兎の創作ではあるが、元のゴーレムⅢをフルボッコ出来る性能はある。しかも限りなく原型の武装を再現した武装を持つため能力は高い。

「少し勿体ない気もするが、あいつらの援護もせにやいかんし、速攻でいくぞ?」

そう言ううと雪兎は再び「LF：ルシフェリオン」を纏い瞬時加速で一気に距離を詰める。μの胸部を貫手で貫く。原型と違い少女の姿をしていないからか雪兎に躊躇いはない。

「お前が一番厄介だからな」

遠距離での封殺を得意とするμのコアを抜き取り機能停止させると雪兎はすぐに後方に跳ぶ。すると、雪兎が先程いた場所を左右からソードビットが飛ぶ。

「あつぶねえ!」

えとりのソードビットを避けつつ、レへと接近した雪兎はレの放った蹴りを受け止め逆に投げ飛ばし胸部を貫きコアを抜き取る。

「二体目。やつぱりあいつ先潰して正解だったな」

順番を間違えていればソードビットとμの射撃で封殺されていた可能性を考え雪兎はゾツとする。そこにえのソードビットが迫る。

「ちっ、少しは休ませろっての!」

それを雪兎はルシフェリオンの固有武装である大型の槍のような武装を取り出しソードビットを薙ぎ払う。

「ルシフェリオン・ドライバー!ぶち抜けっ!」

そしてそのままに接近して胸部を突く。

「三体目つと……少し時間かかったな」

ちやつかり三体分のコアをゲットしておいてこれである。

「さてと、他の連中の様子を見に行くとしますか」

そう言うのと雪兎はルシフェリオンからイエーガーへとパックを切換て他のアリーナへと向かった。

一夏達はそれぞれ二人で一機の無人機を相手になっていた。一夏と箒が近接型の α を、ラウラと聖が砲戦型の β を相手にしている。

「くっ、いっ、硬い」

「下手に近付けばあの爪のビットで狙われ、隙を見せれば強力な一撃……厄介な相手だ」

何度か α と切り結んでいる一夏と箒だが、思った以上に α の爪を用いた格闘戦能力とネイルビットが二人を苦しめていた。

「雪兔ならどうしただろうか……」

そこで一夏の脳裏を過つたのは先程の雪兔の試合だった。

「一か八か……箒、援護を頼む！」

「一夏!?!」

そう言うとき一夏はいきなり α へと向かっていく。 α もそれを感知すると一夏にネイルビットを飛ばし迎撃しようとするが。

「今だ!」

突然一夏の姿が消え、 α が周りを見回す。

「こつちだ!人形野郎っ!!」

その隙に背後へ回っていた一夏は零落白夜を起動させ α を一刀両断する。

「ふう、なんとかなったか……」

「一夏!今のは雪兔の……」

「ああ、瞬時加速で背後を取る技。なんとか物にしたぜ」

そう、一夏がやったのは雪兎がフォルテに対して使った瞬時加速の応用技。それを一夏は一回見ただけで覚え、物にしてしまったのだ。

「おかげでエネルギーはほとんど使っちゃまったがな」

瞬時加速二連打と零落白夜でエネルギーを使い果たしてしまった一夏は苦笑する。

「まったく、お前というやつは……」

そんな一夏に呆れつつも徐々に強くなっている一夏に箒は嬉しさを感じていた。

一方でラウラと聖はというと……

「捉えた!」

砲戦型の β になんとか接近したラウラがA I Cで β の動きを止め。

「私だつてやってみせる！」

近接戦仕様のバイザーボード【ソードダイバー】で動けない β へと迫り、ボードから降りて加速させたボードを掴み敵に叩き込むウェーブ・ライダーの元となったアニメで使われる高等テクニック【ボードタック】で β を貫く。

「よしー」

「やったな、聖！」

それは丁度一夏が α を倒したのと同じタイミングだった。

「一夏のやつ、ちゃんと見てたみたいだな……それに聖もボードタックとかどこで覚えたんだよ」

一夏達の様子を見に来た雪兔だったが、既に α と β は二組に撃破されていた。

「まあいつか、次のアリーナに行くか」

一夏達の成長を見届けつつも雪兔は別のアリーナへと向かうのであった。

54話 それぞれの戦い 兎、見学する

雪兎が次に訪れたのは鈴、セシリア、シャルロット、マドカのいるアリーナだった。

「あの二人がいるからここはそんなに心配してねえんだけどな・・・」

そう、このアリーナにいるシャルロットとマドカは特訓メンバーの中でもトップクラスの実力を持つ二人。雪兎のように瞬殺とはいかないまでも負けはしないと雪兎は考えていた。そして、鈴とセシリアも連携さえしつかりすれば負けはしないと踏んでいた。

「やっぱりこのメンバー相手じゃ三機でもキツイか・・・」

見れば最後まで残ったチャクラムを持つεがマドカのフツケバインのレーヴァティンで両断されるところだった。

少し時間は遡り、突如 γ 、 δ 、 ϵ が現れアリーナは騒然となる。

「何よこいつら……」

「前のクラス代表戦の無人機に似てはいますけど……」

鈴とセシリアにとっては苦い思い出となっている無人機襲撃事件。それと似た I S の出現に雪辱戦と闘志を燃やす鈴とセシリア。

「ともかく、他の生徒が避難する時間を稼がなきゃ！」

（雪兎から聞いてたのと違う無人機？）

「何であろうと敵であるならば倒すまでだ！」

今回が初の遭遇となるシャルロットとマドカだが、シャルロットは前に雪兎が言っていた原作の無人機との違いに少し困惑していたが、すぐに切り替えて現場の指揮をとる。

「僕と鈴とマドカでそれぞれ一機ずつ、セシリアはそれぞれのフォロー……いける？」

「この面子じゃそうなるわよね」

「わかりましたわ」

「了解だ、義姉さん」

そしてシザークローの γ は鈴、バンカーの δ はシャルロット、チャクラム持ちの ε はマドカが担当することに。

「いけ！龍顎！」

七機では狭いアリーナで誤射の危険のある衝撃砲は使えないため、鈴はアンカークロー【龍顎】と双天牙月しかまともに使えない。対する γ は両腕のシザークローと背面のシザービットで攻撃してくるので鈴の方が不利と言える。だが、それは一対一の場合であり。

「はあっ！」

精密狙撃を得意とするセシリアがフォローに回りシザービットを撃ち落としていくことで戦況は鈴の方に傾きつつあった。

「所詮は無人機のパターン化した動き。であればわたくしにも」

セシリアのビットで逃げ場を失いとうとう鈴の龍顎が γ を捕らえる。

「ナイス、セシリア！そいやつと！」

そして、鈴はその捕まえた γ を何故か放り投げる。しかし、鈴とて何も考えずそんなことをした訳ではない。

「 γ こつちもいくよー！」

放り投げられたγに向かってシャルロットも【一角獣の紋章】で突き刺したδを吹き飛ばしγにぶつけ……

「鈴！」

「いくわよ！【覇龍咆哮】!!」

二機まとめて六基連動衝撃砲【覇龍咆哮】を上から撃ち込み、地面にクレーターを作りつつ二機をスクラップへと変える。

「相変わらずえげつない威力よね、コレ……」

「うん、絶対防御なかったら受けたくないね」

一方、マドカはいくつものチャクラムを操るεを相手にしていたが……

「その程度か？」

軽々しくレーヴァティンを振るい全てのチャクラムを両断すると一気に距離を詰めてεをも両断する。

「拍子抜けだな……」

あつさり片付いてしまったことに落胆するマドカだったが。

「よっ、援護に来てみたが……必要なかったみたいだな」

「当然でしょ？」

「兄さんの方は？」

「こつちも三機だ。あの二人は出れなくて一人だったけど、面倒だったから速攻で片付けたわ」

「相変わらず規格外ですわね．．．」

「雪兎だからね」

最早特訓メンバーの中では雪兎が規格外という式ができていた。

「この分だと簪達の方も片付いてそうだな．．．」

「その様子ですと一夏さん達も？」

「あつちはまだ片付いてる。二機だけだったしな．．．他は三機ずつだったみたいだが」

「雪兎がアドヴァンスド使わなきゃ一夏達も三機だったんだろうなあ．．．」

雪兎一人に対し三機投入する相手の気持ち但至少だけ理解できた四人。

「他にも二機いたけど、織斑先生も参式で出たしな」

「「「えっ?」」」

もう一人の規格外も出ていたと知り、四人も驚く。

「今頃は真つ二つだろうなあ．．．」

その頃、当の簪達はというと……

「ご馳走様でしたー」

無人機のうち二機は既に簪の打鉄式「剣山」の大型クローで拘束されナインテイルによってシールドエネルギーを吸い尽くされ機能停止していた。

「ISの無力化という点においては本音のナインテイルは優秀」

残る一機も楯無のミステリアス・レイディの清き熱情クリア・パッションによる爆破攻撃でボロボロになったところを試作バイザーボードに乗った忍の不知火のブレードで両断される。

「ふう、スッキリしたわ」

「たつちゃん、ストレス溜まってる？」

「こちらは楯無がいたことと、簪との仲が拗れていなかったことが幸いし、見事に無人機は鎮圧されていた。」

「ほう、二機も確保したか」

「あつ、織斑先生」

そこに上空の二機を片付けた千冬が降りてきた。

「かんちゃんと私が連携したんだよー」

「なるほど、布仏のナインテイルの九尾か・・・使えるな、その装備は」

「ええ、本家の方でもこのまま譲ってもらえないか検討中らしいですよ」

この戦いで回収されたコアは雪兎が三つで学園が五つ（残りはスクラップ同然らしい）となったが、そのことは前回同様秘匿されることになった。元々雪兎の持つコアは束から貰った476外のものではあるが、それ以上にコアが存在すると知られれば各国がそれを求めて争うことは目に見えているからだ。

「IS学園め……今に見ていろ」

しかし、そんな中、IS学園がコアを秘匿していると気付いたある国はとある手段に手を出した。

「名も無き兵たちを出せ。無人機のコアと白式、それを奪取するのだ」
それが兔の皮を被った災害の逆鱗とも知らずに……

55話 一夏の決意 兎、親友に技を教える

二度目の無人機襲撃事件は色々と原作との違いはあつたが怪我人も大きな問題なく解決した（襲撃前のダリルとフォルテを除く）。それでも各専用機の受けたダメージは少なくないたため一年生の専用機と忍の不知火は雪兎が、楯無のミステリアス・レイディは楯無と整備科がそれぞれ修理することに。ダリルとフォルテは専用機のアップデートも兼ねて一時帰国して修理するらしい。

「で、頼みたいことってのは何だ？」

そんな中、一夏は雪兎の部屋である相談をしていた。

「それなんだが・・・特訓のレベルを上げてくれないか？」

「急にどうした？それに今のお前の担当は楯無さんだろ？」

「それとは別にこの前のタッグマッチの時の技とかちゃんと教えて欲しいんだ。頼む、この通り！」

確かに雪兎は前のタッグマッチで一夏に見せるような試合をした。まさか無人機戦で早速使うとは雪兎も思ってもみなかったが、どうやら一夏は己の目指す戦闘スタイルをそこに見たらしく、改めて雪兎に教えを乞うたのだ。そのせいか一夏は土下座までし

て雪兎に頼み込んでいる。

「だあー！もうわかったから土下座はやめろ」

「よっしゃー！」

「とはいえまだ白式とかは修理中だしなあ……先にあっち教えるか？」

連れていかれたのは武道場。一夏にとっては箒に鍛えられたり、楯無にボコボコにされたりした思い出深い場所である。

「こんなところに連れてきて何をするんだ？」

「一夏、お前に一つ技を教えておく」

そう言つて雪兎は試し切りで使われる的を用意する。

「見せるのは一回だけだ……見逃すなよ？」

それしてから離れた場所に立つと一気に距離を詰めてすれ違い様に抜刀し的に切り落とす。

「……八葉一刀流、四の型【紅葉切り】」

雪兎が使つたのは某軌跡シリーズにて一夏と同じ中の人が演じるキャラも使う八葉一刀流の技だった。

「他にもいくつか知ってる技はあるが、今の一夏に必要なのはこの紅葉切りだろう」

「紅葉切り……」

「ほれ、やってみ」

そう言い雪兎は使っていた特殊合金製の打刀を一夏に渡す。

「練習用に作ったやつだから簡単には歪まないから遠慮なく使え」

「お、おう」

それから何度か一夏も試してみるが太刀筋が悪いのか中々両断できない。

「はあ、はあ、はあ……」

「少なくとも半分以上は切れてるから最初にしては上出来か」

普通の抜刀術ですら半分切れるのは素人にしては上出来な方であると考えればダツ

シユからすれ違い様に行う紅葉切りでここまで出来れば上出来な方だ。

「その打刀は暫く貸してやるから練習してみな」

「わかった」

こうして雪兎の手により一夏は原作とは違う新たなスタイルを学んでいく。

「で、お前もか、白式」

修理中の白式用のモニターに表示された文字を見て雪兎は苦笑する。

『私にもどうにか追加装備を付けませんか？』

似た者主従とでも言うのか以前のリヴァイヴのように雪兎に改修を願う白式。

「拡張領域無いのにどうやって追加装備する気だよ？そもそもお前は好き嫌い多すぎだろ」

白式は使用許可した武装を使うことですら機嫌を損ねる気難しいISなのだ。それが自ら追加装備を願うなど雪兎からすれば驚くべきことだ。

「まあ、拡張領域の方は試作してるアレ使えば何とかなるか……でも武装はどうする気だ？」

すると、白式はモニターに雪兎が試作していたいくつかの武装を表示する。

「お前、どんだけ一夏にハードモードさせる気だよ……」

確かに今の白式にある欠点を埋める武装ではあるが、一夏の操縦技量を超える代物に

なりそうである。

「しようがねえな、アドヴァンスドシリーズでやる予定だったあつちも組み込むか……」
雪兎が新たにモニターに表示したのは今までに無い新たなカテゴリーの武装だった。

「これの試作機の一つを回してやる。お前の我が儘で追加するんだから拒否とかすんなよ。」

こうしてリヴァイヴに続き白式までもが雪兎によつて新たな姿へと変貌を遂げるこ
ととなるのであつた。

一夏 side

雪兎にあの技を見せてもらってから数日が経つた。その日も俺は雪兎に借りた打刀

を手にあの技〔紅葉切り〕を習得すべく特訓に励んでいた。

「はあ、はあ、はあ……」

幸いなことに雪兎の打刀は強度だけならば既存の刀に喧嘩を売っているようなところでもないもので、どれだけ振るつても歪み一つ無いのでいくらでも練習することができた。

「もう一度っ！」

雪兎の動きを思い出し、的の懐に飛び込んで抜刀。

「はあっ！」

それは今までと違いスツと打刀を振り抜けた。

「……できた」

見れば切り口こそ荒いが、確かに的を両断していた。

「ほう、あいつに習ったのか」

すると、そこに千冬姉が近付いてきた。

「千冬姉……見てたのなら声くらいかけてくれよ」

「織斑先生と呼べと言っているだろうが……」

そう呆れたように言っているが、その時の千冬姉は少し嬉しそうに見えた。

「八葉一刀流、その名の通り八つの型から成るあいつが篠ノ之道場とは別で学んだ剣ら

しい。その中でも紅葉切りは確かにお前にピッタリの剣だろう」

「ああ、雪兎も今の俺に必要な技だって言ってた」

初めて使う技なのに何故かこの紅葉切りはしっくりくる感じがする。

「上手くいかないのはお前の体重移動が雑だからだ。貸してみろ」

打刀を受け取ると千冬姉は雪兎と寸分も変わらない紅葉切りで的を両断する。

「体重移動がしつかりしないから軸が振られて剣筋が荒くなるんだ。普通の抜刀術とは異なり相手との距離を詰めながらの抜刀だ、そこを怠るな」

それだけ言うと千冬姉は打刀を俺に返し武道場を去っていった。

「体重移動と軸か・・・」

それから俺は下校時刻ギリギリまで何度も剣を振るい千冬姉のアドバイスのおかげか確実に的を両断できるようになった。

side out

九章「兎と千冬と襲撃者」

56話 名も無き兵と守護者の剣 兎、罘を仕掛ける

無人機襲撃事件から数日が経ち、修理のためISを預けている専用機持ち達は暇をもて余していた。一方で雪兎はその修理中のISについて千冬に呼び出され説明をしていた。

「では、まともに動かせるのはお前の雪華と私の参式、それと山田先生のリヴァイヴⅡに楯無のミステリアス・レイディだけか」

「ええ、ダメージこそあまり無いですが、実戦稼働となるとフルメンテはしておきたいですね」

「そうか……」

「せっかくですし、あのEx^外pe^骨cted^格Op^攻er^性ati^機on^動Seek^装er^甲略してEOSでしたっけ？あれの試験運用でもやらせたらどうです？」

「ああ、あの国連が寄越した玩具のことか……いいかもしれない」

「まともに動かせるのはラウラくらいでしょうけどね」

EOSにはISのようにPICなどの補助機構がなく、パワーアシストはあれど稼働

時間や能力は I S には劣り、E O S 千機で I S 一機と同等とすら言われている。そのため使用したことがあるのは本格的に軍属経験のあるラウラくらいのものなのだ。

「お前もあれくらい余裕だろう?」

「俺はあんな不細工なの使うくらいなら自作しますけどね。というか作ってありますよ?」

「お前というやつは……今回は国連の寄越したやつを使い。データ取りの必要があるらしいからな」

「了解しました」

その日の実習で早速 E O S の試験稼働を行ったのだが、雪兎の予想通りまともに動か

せたのは雪兎以外ではラウラだけだった。

「お、重い……」

「ISと同じに考えるからそう感じるんだ。はい、終了」

全員で模擬戦を行うも一夏は早々に雪兎の足払いを食らい転倒、そこにペイント弾を食らいリタイア。セシリアは銃の反動に慣れる前にラウラに転倒され、ペイント弾の掃射を受けてリタイア。鈴もラウラの隙を狙い殴りかかるも簡単に回避されてつまづいて転倒してリタイアした。

「残るは箒とシャルロットに雪兎か」

「箒とシャルなら終わったぞ」

「言われて見てみれば箒とシャルロットは既にペイント弾まみれになっていた。

「やはりお前もこれE.O.Sの扱いに慣れていたか……」

「まあな、というか、これより少し小型なもん自作してたら東さんに目を付けられてね」

「……お前はやはり弟子になる前から規格外だったのだな」

雪兎が東の弟子となった意外な理由がここで発覚する。というか、どこにそんな部品をかうお金があつたのやら。

「つうわけで決着つけるか、ラウラ」

「そうだな」

それから二人の壮絶なEOS戦が始まるが、結局決着はバッテリー切れでドローという結果となった。

その翌日、突然学園の電源が落ちる。それどころか防御シャッターが降り、緊急用電源にも切り換わらず、非常電源も点かない。雪兎の部屋は雪兎個人で緊急用電源を持っていたため無事だった。

「来たか」

「みたいだね」

この襲撃を予期していた雪兎は部屋のセキュリティレベルを上げ皆の専用機を納めたケースを手に部屋を出る。

「全員の storage に通信機能付けといてよかったわ」

「そういえばこの前一夏達にもあげてたもんね」

そう、今まで渡していなかった一夏や箒にも storage を渡していたのだ。当然、緊急用の装備も入れてある。

『全員聞こえているな？各自、地下のオペレーションルームへ集合。今からマップを転送する。防壁に遮られた場合、破壊を許可する』

そして、またしても I S 学園は何者かの襲撃を受けるのであった。

全員が地下のオペレーションルームへと到着するとそこには千冬に真耶、それに雪菜の姿があった。

「全員揃ったな？それでは現状の説明をする」

千冬の説明から今 I S 学園は何者かによってハッキングを受けていること。同時に何者かが侵入して来ていることが説明される。

「I S 学園は独立したシステムで運用されているが、どうやら内部から干渉する為の装置を設置されたらしい。信じたくはないが内通者がいるとみて間違いないだろう」

しかもハッキングは常時行うものではなくウイルスを送り込む為のものらしく、装置を取り外してもすぐに復旧できるものではないらしく、電腦ダイブを用いて撃退すること。

「天野と更識姉妹に布仏、それと棗以外の八名で電腦ダイブを行ってもらおう」

「何故八名なのですか？」

「電腦ダイブ用の装置は八つしかない。それに更識妹と布仏、そして棗には各員のオペレーターを。天野にはシステムの復旧という仕事がある」

それを聞いてダイブ組は納得する。

「残った私と山田先生、それと楯無は侵入者の排除だ。天野先生にはここの統括を頼む。まだ一般生徒に被害は出ていない今の内に片をつけるぞ」

「了解！」

こうしてハッキングを仕掛けてきた侵入者を撃退するというミッションが発令され

るのであった。

「マドカがダイブ組なのは万が一にもマドカを糾弾対象にしないためですか？」

「ああ、十中八九今回の襲撃はお前が予想していたあの国だろう。代表候補生であるあいつを国に戻したこのタイミングだ、まず間違いないだろう」

「それじゃあ、約束通り今回は先生にお任せしますよ？でも、復旧がてら防壁や侵入者用のトラップを起動させてしまうくらいのことならやつてもいいですよね？」

「……好きにしろ。但し、やり過ぎるなよ？」

そう言い残し千冬は参式を手に侵入者達の元へと向かう。

「私にいるこの学園で好き勝手できると思うなよ？米国」

学園で敵対してはならないとされる世界最強がブリュンヒルデ打鉄参式打鉄参式の剣と共に今動き出す。

57話 我に断てぬもの無し 兎、トラップで翻弄する

「.....」

今回の襲撃にて名も無き兵達が請け負った任務は「白式及びIS学園に出現した無人ISのコアの奪取」。特に無人ISのコアはとある計画において大きな意味を持つ物らしく、その重要性は隊長に支給されたステルス仕様の能力試験型のファング・クエイクが存在が雄弁に語っている。しかし、名も無き兵達に指示を出した米国は忘れていた。兎の皮を被った災害がその程度で出し抜ける相手では無いことを。そして知らなかった、世界最強ブリュンヒルデの称号を持つ織斑千冬打鉄・参式が守護者の剣を手にしているということ。

「すまないがここから先は関係者以外立ち入り禁止だ。お引き取り願おうか」

その時隊長が見たのは暗闇に佇む藍色のボディに金色の装飾、巨大な刀を装備した鎧武者のような未知のISを纏う千冬だった。

「それでもここを通りたいと言うのなら私が相手になろう。出し惜しみなどするなよ？ 目の前にいるのは元世界最強ブリュンヒルデだ。全身全霊でかかってこい、一兵士」

一方、一夏達電脳タイプ組は雪兔の特製プログラムによってデフォルメされたアニメやゲームの敵キャラクターのように見えるウィルスをＩＳで駆逐していた。

「何か昔の電脳バトル系のゲームを思い出すな、これ」

『確かにこの敵のデザインはあのゲームそっくり』

一夏が昔にプレイしたゲームを思い返していると、オペレートをしていた簪も同じようなことを考えていたらしく、一夏に同意する。

『というか、まんまあのゲームのデータ流用したぞ？今回は一からデザインしてる暇なんてなかったからな』

すると、復旧作業をしている雪兔からそんな言葉が返ってくる。

『ついでにウィルスどもにもあのゲームと同じ攻撃パターンしか出来ないプログラム組んでやったぜ』

「……お前がこの襲撃を予測してこのプログラム組んでたって言われても俺は納得出来る気がするよ」

実際はその通りなのだが、一夏はそれを知らない。

「あー、雪兎が弾のやつを嵌めコンしてたゲームね？ノードメワンターンキルとか平気でやってたわよね、あんた」

『ラビリング（麻痺攻撃）からのプリフォレボムのことか？あれくらい上級者なら対策してくるぞ？まあ、あれやれたの2だけだったけどな』

ちなみにプリフォレボムことプリズムフォレストボムは公式大会使用禁止コンボであり、プリズム（攻撃を周り8マスに拡散する設置物）とフォレストボム（着弾点から8マス拡散する木が生えるボム）のプリズムが消えるまで無限に攻撃が続くという悪夢のコンボである（ボスクラスの敵も大抵瞬殺可）。

「そういや3でカスタムバグで無限キューブと設置物飛ばしでフルボツコしてなかったっけ？」

「ゼリーでエリア削って地雷とかもやってたわね」

『フアラオ毒沼とかもやったよなあ……今度久しぶりやろうかな？』

それらのコンボも全て弾が食らったコンボである。

『鬼だ……あまあまは鬼だよ……』

簪に付き合っつてやっていた本音もそれらのコンボを聞いて戦慄する。

「それよりもウイルスどもを駆逐するぞ。動きがワンパターンならば恐るに足らずだ！」

その後も一夏達は特に問題もなくウイルスを駆逐していった。

その頃、別口で潜入していた名も無き兵達はというと……

「何なんだこの学園は!?!」

突如出現した通路一杯の大きさの鉄球に追われていた。しかもこの鉄球、曲がり角を曲がっても角でバネ仕掛けで弾かれて追い続けてくるのだ。

「こんなトラップがあるなんて聞いてないぞー!」

無理もない。何せこのトラップを仕掛けたのは雪兎なのだ。

「わ、分かれ道だ！二手に分かれるぞ！」

すると、名も無き兵達の前に丁字路が現れたので左右に分かれ鉄球から脱するも、床がパカッと開き名も無き兵達は落ちていく。そう両方共落とし穴が仕掛けられていたのだ。更にその底には強力な粘着力を持つ粘性の液体で満たされており、名も無き兵達はあるさき御用となったのであった。この映像を見た簪は「これ、どこの罫ゲー？」と呟いたんだとか……

そして、千冬と隊長の戦いはやはりと言うのか、終始千冬の優勢であった。

「どうした？その程度か？」

それもそのはず、フアング・クエイクは元より安定稼働を主として開発された機体で攻撃手段は拳とナイフ、それから拡張領域に収用していたアサルトライフルだけに対し、打鉄・参式は可変式の大型実体刀〔参式・斬艦刀〕に高周波刀が二振りとアサルトライフルに炸裂装甲楯、ドリルブースターアームなど多彩である。ライフルは既に両断され、ナイフなど斬艦刀や高周波刀の前では無力でしかなく、拳はドリルブースターアームで左を破壊された。

「これが世界最強……」

最早、満身創痍に近い隊長に千冬は斬艦刀を向ける。

「さて、そろそろ終わりにするか。あちらもあらかた片付いたようだしな」

雪兎のトラップで捕縛されたグループの他にも真耶、楯無によって無力化されたグループもあり、名も無き兵達は千冬と交戦していた隊長以外は全滅していた。仕込んだウイルスも一夏達に消去デリートされている。

「何、殺しはせんさ。だから気にせず眠るといい」

最後に自身が最も得意とした抜刀術でフアング・クエイクのシールドエネルギー及び隊長の意識を削り撃破すると、参式が仮想モニターに新たに発現した単一仕様能力が表される。

「【我に断てぬもの無し】か……暮桜の【零落白夜】といいまたピーキーなものが

出たものだ」

シールドバリアを無効化する【零落白夜】と違い、シールドバリアすら切断すること
で破り、絶対防御を強制的に発動させるといふ【我に断てぬもの無し】。それを見て千冬
は苦笑しつつも隊長を捕縛し皆の待つオペレーションルームへと帰投するのであった。

58話 代表候補生のお仕事 兎、取材を受ける

「雑誌の取材？」

名も無き兵達の襲撃から数日経ったある日、一夏と箒それと雪兎に新聞部の薫子から姉の勤める出版社の雑誌に三人の独占インタビューを掲載したいというのだ。

「でも、この雑誌ってあんまりIS関係無いんじゃない？」

「国家代表や代表候補生ってのはある意味国の顔でもあるからな。アイドルみたいにくういう仕事もあるんだよ」

疑問を抱く一夏と箒に雪兎が説明する。

「ちなみに俺はこの取材受けるぞ」

「えっ!？」

普段ならば「面倒だから」と言つて断りそうな雪兎であるが、今回は乗り気らしい。

「私は見世物は主義にー」

「報酬は豪華一流ホテルのディナー招待券なんだけどなあ」

「受けましょう」

雪兎に続き箒も報酬に釣られて承諾する。

「織斑君はどうする？」

「受けとけ、何事も経験だ」

「雪兎がそう言うんだつたら……」

雪兎にそう言われ一夏も取材を承諾する。

「それじゃあ三人共OKってことでいいわね？」

「あつ、黛先輩。招待券、もう一枚なんとかありません？」

「うん？大丈夫だと思っけど……ああ、デュノアさんね？」

「はい」

シャルロットを誘いたいというのも理由の一つだが、雪兎は一夏と薫子にばれないよう箒にウインクし、箒も雪兎の意図を知る。

(ディナーには一夏と二人で行けと？雪兎、この礼は何れ必ず！)

そう、原作通り二人でディナーに行かせるべく、一夏と箒とは別行動する理由を作るためでもあり、雪兎は幼馴染である箒が一步踏み出せるよう手を打ったのだ。

「じゃあ、三人共、明後日の日曜日にごの住所にお昼の二時までに来てね」

こうして、雪兎達三人は揃って取材を受けることになった。

そして、日曜日。薫子に渡されたメモの住所へと三人は向かっていた。当然のことながら三人共私服である。

「そういえば雪兎はどうしてこの取材を受けたんだ？」

そう言う一夏の私服はグレーのジーンズにシャツと黒のジャケット。

「ああ、ちよつと宣伝しときたいことがあつてな。あの出版社なら丁度いいと思つて」

雪兎は茶色のカーゴパンツに黒いシャツ、そして白い上着姿だ。

「宣伝？また何かやらかす気か？」

そんな雪兎に呆れ気味の箒は黒のミニスカートに白いブラウス。そして秋物の蒲公英色をしたパーカーコートを着ている。

「やらかすとは失礼な！束さんや俺の夢に關してのことだよ」

「姉さんや雪兎の夢？」

「ああ、白騎士事件で色々とおかしなことになってるISの本来の使用用途、宇宙開発。これに関して少し進展があつてな」

「そーいや棗先輩の実家の棗宇宙開発局にちよくちよく出入りしてんだっけ?」

世間一般では既にISⅡ兵器という印象が強いが、一部では雪兎や棗局長のように宇宙開発にも力を入れている人達もいる。

「詳しくは取材の時にな」

その後は一夏が箒の私服を誉めて箒が上機嫌になったりしつつも三人は出版社へと辿り着いた。

「どうも、私は『インフィニット・ストライプス』の編集長をやっている黛渚子よ。今日はよろしく」

「あ、どうも。織斑一夏です」

「篠ノ之箒です」

「天野雪兎です。本日はよろしく願います」

インタビューの後に写真撮影ということで最初にインタビューを受けることに。

「それじゃあ最初の質問ね。織斑君に天野君、女子校に入学した感想は?」

「いきなりそれですか・・・」

「まあ、世間一般から見たら気になりますよねえ」

「そういうことよ。読者アンケートでも一番多かった質問だしね」

「えーと……使えるトイレが少なくて困ります」

「ぷっ！あは、あははは！妹が言つてたこと、本当なのね！異性に興味の無いハーレム・キングつて」

「黛先輩、的射て過ぎだろ……」

「これには渚子や雪兎も思わず吹き出して笑つてしまう。

「いいわねえ。そのキングダム、入国許可証ないの？」

「あなたは弾ですか！」

「あつ、弾つてのは俺と一夏の友人の五反田弾つてやつのことです」

さりげなく一夏の発言にフォローを入れる雪兎。弾は哀れ。

「で、天野君は？」

「そうですね……外から見れば羨ましいかもしれない光景ですが、実際は結構辛いですね。興味本意の視線もあれば明らかに敵視してくる視線とかもあつて居場所がありませんか……今は大分マシにはなりましたがね」

「なるほどなるほど……ところで天野君には彼女がいるつて聞いたんだけど？」

「黛先輩……」

「結構噂になつてゐるわよ？」

聞けばデートの目撃例がいくつかアンケートにあつたらしい。

「まあ、隠すつもりはありませんが……」

「へえ、このことは記事にしても？」

「変に噂になるくらいなら公表した方がいいですね」

「さて、それじゃあ今度は篠ノ之さんと天野君に篠ノ之さんのお姉さんの話を——」

東の話題になると箒はガタツと席を立ち、立ち去ろうとする。しかし……

「ダイナー券あげないわよ？」

その一言で箒は大人しく席に座り直す。

「いい子ね。うふふ、素直な子は大好きよ。——まずは篠ノ之さんから……お姉さんから専用機をもらった感想は？どこかの国家代表候補生になる気はないの？日本は嫌い？」

「紅椿は、感謝しています。……今のところ代表候補生には興味はありません。勧誘は多いですが。日本は、生まれ育った国ですから、嫌いではないですけど」

矢継ぎ早の質問だったが、箒はしっかりと全ての問いに答える。

「次に天野君。篠ノ之博士の弟子ということだけど実際篠ノ之博士ってどんな人？何機かISを設計したって聞いているけど本当？最後に今後の目標とかはある？」

「東さんは興味のあることと無いことへの温度差の激しい人、ですかね？間違いなく天

才ではあるのですが、どこか興味の無いことへの配慮が無いので誤解されやすいと言いますか……。IS設計したのは本当です。自分の使ってる雪華も俺の設計したものを束さんが完成させたものですし、あと何機か学園の生徒にデータ取りを兼ねて使ってもらってます。今後の目標はISの本来の使用用途である宇宙開発への参加ですかね？」

「ということは将来は稟宇宙開発局に？」

「いえ、今はプロジェクト段階なんですけど、いくつかの企業から国際事業としてISを使った宇宙開発事業を立ち上げる計画がありまして、そこに参加しようかと」

「えっ!？」

それを聞き、一夏と箒は二人揃って驚いた顔をする。

「その情報は公開してもいいの？」

「ええ、実は今回取材を受けたのもこのプロジェクトについて公表することが目的です」

そう、雪兎が取材を受けたのはこのプロジェクトのことを一般公開する先触れだったのだ。

「なるほどね。ということは君はプロジェクトからの橋渡し役ってことかしら？」

「ええ、この話はまた後日」

「了解よ」

その後、インタビューを終え、写真撮影では編集部が用意した服に着替えた三人がそれぞれ一人ずつ、二人、三人の集合写真などを撮った。ちなみに写真撮影用の服はそれぞれ持ち帰ってよいとのことだったので三人はもらっていくことに。

「今日はお疲れ様。ディナー券は後日端末に今日の写真と一緒にデータ転送してあげるから帰る前にアドレス教えてね？」

取材を終えた帰り道、三人は五反田食堂に寄って食事をすることに（本当は筈は一夏と二人でレストランに行きたかったのだが、雪兎に予約していないと二時間以上待たされると思い断念した）。

「よっ、弾」

「おつ、一夏に雪兎じゃねえか。後ろの娘は前に誕生会で会ったもう一人幼馴染か？」
店に入ると丁度店の手伝いをしていた弾と遭遇し、席に案内される。

「あんときはちやんと自己紹介出来なかつたな。俺は五反田弾だ」

「篠ノ之箒だ。よろしく」

「おう。それじゃあ注文が決まったら呼んでくれ」

その後、蘭が店に出てきて箒と一悶着あつたりしたが、平和な日曜日であつた。寮へ
帰宅後、五反田食堂に寄つたのを知つたシャルロットが蘭に会いたかつたと拗ねて機嫌
を直すのに雪兎は一苦勞することになつたんだとか。

59話 デイナーデートと亡国の思惑 兎、ディナー
デートする

取材から数日後、届いたディナー招待券の日付は一夏や筈と違った。渚子が氣を利かせてくれたようだ。

「こういうとき同室だと楽だなあ、つて思うよ」

「どうかしたの、雪兎？」

「いや、この前黛先輩の頼みで取材受けに行った報酬でこれ貰つてな」

そう言つて雪兎はシャルロットに端末の画面を見せる。

「こ、これつて、有名なホテルの豪華ディナー招待券じゃないか!? しかもペア券!」

「これ、一緒に行かないか?」

「えっ、いいの!？」

「ああ、というかシャルと一緒にいきたいからわざわざペア券にしてもらったんだが……」

「雪兎……うん、絶対一緒に行く」

少し照れながらそう言う雪兎にシャルロット嬉しそうに頷く。

「あつ、そーいやあそこつてドレスコードあつた気が……」

「だろーうね。今後もそーういう場に出ることもあるだろーうし、今のうちに買つておいた方がいいかも」

という訳で二人は事前にスーツとドレスを買つておくことにした。だが、雪兎には一つ気になる事があつた。

（ダリルとフォルテはまだ戻つてないのか……こりや、マドカが抜けた分の人員補充で亡国あっちに戻つたとみるべきだな）

本来なら京都の亡国機業の拠点襲撃作戦で起こるはずだったダリルいやレイン・ミューゼルの離脱とフォルテ・サファイアの裏切りが早まったのでは？と雪兎は疑っている。

「雪兎、どうかしたの？」

「いや、何でもない」

「ならいいけど……」

（もう原作知識はあてにならないな……となれば好きに動かさせてもらうか）

その後、雪兎とシャルロットは以前お世話になった千春の伝でスーツとドレスを購入し、デイナーに備えるのであつた。

ディナー当日。

「お待ちしておりました。天野様とデユノア様ですな」

二人を出迎えてくれたのは老紳士と言う言葉がピッタリのウェイターで、彼に夜景の一望出来る窓側の席へと案内され、二人は席につく。

「随分といい席を用意してくれたみたいだな」

「うん、そうだね」

「本日は当店のスペシャル・ディナーにようこそお越し下さいました」

二人が席につくとウェイターは綺麗な模範的な礼をし、二人もそれぞれ合わせて礼をする。

「基本的にコースメニューで順番にお料理を出させていただきます。それとお二人は未

成年なのでアルコール類は出せません。前に同じI S学園のお客様に間違ってお酒をお出ししてしまったこともございましたが、今回はそのようなことは無きよう徹底してありますのでご安心を」

「どうやら原作同様に若いウェイターのミスで箸がお酒で酔っ払ってしまったらしい。では、ごゆるりと」

老紳士のウェイターが去った後、コース料理が前菜、スープ、魚料理、肉料理、ソルベ、ロースト系の肉料理、生野菜、デザート、食後のコーヒの順で出てきたが、流石は高級ホテルと言うべきか、料理は二人を満足させてくれた。

「美味しかったね、雪兔」

「ああ、流石は高級ホテル。使ってる素材もだが、料理人のレベルが高いよ」

「ご満足いただけただけで何よりでございます」

二人が料理の感想を言い合っていると、先程の老紳士のウェイターがやってきた。

「天野様、貴方様宛にお電話が」

このような店では基本的に携帯電話などはNGであるため、このようにフロントなどに電話がかかってきてそれを受ける形になることがある。

「俺宛に？」

こんなタイミングで電話してくる人物の心当たりが少ないため疑問に思いながらも

雪兎はフロントで電話に出ると……

『はろはろー。ごめんねー、せっかくの彼女とのディナー中に』

電話の主は東であった。

「……どうかしたんですか、東さん」

『うん、ちよつと悪いんだけど迎えに来てほしいんだよ』

「迎えですか？」

『○○○○つて言うお店わかる？そこでね、ご飯に誘われたから来てみれば亡国機業とかいう連中が私にI S寄越せつて言うんだよ……』

「……何してんですか、貴女は」

そこで雪兎は気付く。これは原作で東が亡国側に回ることになったイベントで、この世界では既に亡国にマドカがおらず、雪兎の警告のお陰でクロエは人質になっておらず、という状況なため東が亡国につく理由がないということに。そして、かといっていくらオーバースペックの東といえど一人で亡国の包囲を抜けるのは面倒ということだ。雪兎に迎えをお願包囲の突破いしてきたということらしい。

「はあー、わかりました。俺が行くまで出来るだけ大人しくしてて下さいね？」

『はーい』

東の返事に若干不安が残りつつも雪兎は電話を切った。

「雪兎、誰からだつたの？」

「東さんだつた。ちよつと迎えに来てくれつてさ（東さんが亡国と接触して包囲されるらしいからちよつと迎えに行つてくる）」

「なら僕もいくよ。一人より二人の方がいいでしょ？」

詳細を小声で伝えるとシャルロットも同行すると言ひ出す。

「ごめんな、せつかくのディナーだつたのに」

「ううん、もう食べ終わつてたからいいよ。ウェイターさん、ご馳走様でした」

「ご馳走様でした。それとあわただしくしてすいません」

「いえ、またのお越しをお待ちしております」

老紳士なウェイターにお礼を告げ雪兎とシャルロットは束から聞いた座標へと向かうのだつた。

その頃、当の束はというと……

「はぐはぐはぐ……」

まだスコールの用意した料理を食べていた。

「束博士、いい加減に私達に協力して下さいませんか？」

「はぐ……何で？ 私はあんたらのことなんてこれっぽっちも知らないのに何で協力しなきゃいけないの？ ねえ？」

「我々はー」

「そういうのは興味無いから。それとお迎え頼んだからそろそろお暇するね」

「オータム！」

束が席を立とうとするとスコールはオータムへと指示を飛ばし束を拘束しようとするが、オータムが飛びかかる前に束はローリングソバットを繰り出しオータムをワインセラーへと蹴り飛ばす。

「おー、みゅーちゃんの真似してみたんだけど結構いいね、この技」

その光景にスコールが呆けていると。

「あのねえ、私つてば天才天才言われちゃうけどねー、それつて思考とか頭脳だけじゃな

いんだよー。肉体も、細胞単位でオーバースペックなんだよー

スコールからしてみればそれは完全な誤算だった。しかし、スコールにはまだ勝算があった。いくら束といえど生身でISの相手は出来まいと、そう思ったその時。

「私が一人だったからってISさえあれば何とかなるとでも思った？ 甘いよ。メープルシロップを煮詰めて砂糖をかけたくらい甘いよ」

「!？」

「私の弟子が何て呼ばれてるかももう忘れたの？」

その一言でスコールは全てを理解する。束の呼んだ迎えが誰であるかということ。

スコール達がいる地下にあるレストランへと続く通路には二人の女性がいた。

「本当に大丈夫なんツスカ？先輩」

「心配性だな、フォルテは」

それはI S学園を抜けたダリル・ケイシーもといレイン・ミューゼルと彼女に誘われ亡国機業に与したフォルテ・サファイアの二人であった。二人は今回の東の勧誘作戦において東の逃亡防止と侵入者の撃退という任務を与えられていた。

「おっと、侵入者だ。フォルテ、準備はいいな？」

「だ、大丈夫ツス」

二人はいつでもI Sを展開出来るよう身構えつつ侵入者に備えるが。

「へえー、やっぱりあんた達はそっちに付いてたんだ？」

現れた侵入者の顔を見て二人は絶句する。

「ゆ、雪兎、あの二人って……」

「そういうことだ。だよな？フォルテ先輩にダリル、いやレイン先輩と言った方がいいか？」

その侵入者とは雪兎とシャルロットの二人だった。

「な、何でてめえがつ!？」

「驚くことか？お前らがうちの師匠に手出したんだろ？」

それを聞きレインとフォルテはすぐさまI Sを展開する。

「ヘル・ハウンドとコールド・ブラッドだったか？それもやっぱり持ち出してたんだな。雪華」

そして雪兔も雪華を、シャルロットはリヴァイヴⅡS展開する。

「悪いがあんたらの相手をしてる程こっちは暇じゃないんでね」

すると、雪兔は雪華に【B：ブレイド】を纏わせ瞬時加速で一気に距離を詰めるとレインのヘル・ハウンドを手にした双刀で斬りつける。

「先輩っ!？」

「余所見してる暇は無いよ、フォルテ先輩ー」

「くっ!」

レインに気を取られたフォルテにはシャルロットがグリフォンで牽制する。

「フォルテ!」

「あんたも余裕そうだな?」

「ぐわっ!」

双刀から刀身と柄の間にリボルバー銃のシリンダーのようなもの付いた大剣【バルムンク】に高速切替した雪兔に斬られレインは通路の壁に叩きつけられる。

「これはオマケだよ」

そこにシャルロットがグリフォンで弾丸の雨をお見舞いする。

「先輩!!」

「やっぱり脆いな、イージス」

フォルテはレインを庇うべく駆けつけようとすがそれを予想していた雪兎はバルムンクを振るいフォルテを反対側の壁に叩きつける。

「これが学園最強コンビだったとか、簪と本音の方がマシなコンビネーションするぞ?」
「それでも一人で圧勝する雪兎がそれ言う?」

狭い通路とタッグマッチでの恐怖からか満足にコンビネーションを発揮できないレインとフォルテに対し、雪兎とシャルロットの連携は完璧で、レインとフォルテを分断しつつお互いをカバーし合っていた。

「な、なん、なんだよ、お前ら、は……」

「通りすがりの天災の弟子だよ。あんたら二人がどこで何してようが俺にはどうでもいいんだが、まだ邪魔するってんだったら俺も加減はしねえぞ?」

束とスコールが対峙していると、唐突に束が呟く。

「そろそろかな？」

すると、レストランの壁を突き破ってレインとフォルテがISを纏ったまま吹き飛ばされてきた。

「レイン!？」

ボロボロになったレインのヘル・ハウンドを見てスコールは血の気が失せていくのがわかった。叔母である自分に対しては生意気な姪であつてもその実力は疑いようのない実力者であるレインがここまで一方的にやられるなどとは思つてもいなかつたスコールは壊れた壁の向こう側からやってきた存在を睨む。

「兎ラビット・デイザスターの皮を被つた災害……」

「久しぶりだな、スコール・ミューゼル」

二人が睨み合っていると束は雪兎へと近付き笑顔を見せる。

「やあやあ。早かつたね、我が弟子よ」

「千冬さんからあつさりISの使用許可も出ましたし、道塞いでたのがその二人だけ

だったんで突破すんの楽でしたよ」

「だよ。あの程度の第3世代機が雪華の相手になる訳ないじゃん」

ヘル・ハウンドとコールド・ブラッドのスペックは既に束も雪兎も把握済みであり、ちよつとばかりの改修程度でこの二人を出し抜こうなど甘いとしか言い様がない。

「じゃあ、帰ろつか。あつ、行き先はIS学園でいいよ。そろそろ私も隠れるの嫌になっちゃったし」

「クロエは?」

「くーちゃんならラボと一緒にIS学園に向かつてるよ」

「逃がすと思ってるのかしら?」

帰る気満々な雪兎と束に対しスコールは逃がしてなるものかと自身のISを展開するが、素早く「J:イエーガー」に切り換えた雪兎がバスターライフル改をスコールの顔に突きつける。

「さて、お前が動くのと俺が引き金を引くのとどっちが速いと思う?」

「くっ……」

少しでも動けば射つと言わんばかりの雪兎にスコールは敗北を認めISを解除する。

「じゃ、そういうことで」

そして束は雪兎に抱えられ、シャルロットが背後を警戒しつつその場を離脱した。

「・・・天野、雪兎!!」

マドカを奪い、自分達亡国機業実働部隊〔モノクローム・アバター〕をここまでこけにしてくれたイレギュラーにスコールはいつもなら抱かない怒りを強く抱くのであった。

60話 プロジェクト・フロンティア 兎、開拓への準備を開始する

IS学園に着くと、そこには既に連絡を受けていた千冬と雪菜、真耶の他に一夏達専用機持ち達とクロエの姿があった。

「天野が突然ISの使用許可を求めてきたと思えば、お前が発端とはな、束」

「めんごめんご。あつ、ちーちゃん。私、しばらくIS学園でお世話になるから」

「「「えっ!?!」」」

これに驚いたのは雪兎とシャルロット、楯無に忍を除く専用機組だった。

「学園長から話は聞いている。随分と長い遠回りだったな」

「世話になるとは一体……」

「あれ? ゆーくんに聞いてない? この度束さんはプロジェクト・フロンティアの開発チーム主任兼代表に任命されたのだよ!」

「プロジェクト」

「フロンティア?」

その言葉に多くが首を傾げるが、一夏と箒はそこで先日インタビューを思い出す。

「それって、もしかして」

「雪兎が先日言っていた宇宙開発事業がどののというやつのことか？」

「そのとーり！」

「その正式名称がプロジェクト・フロンティア。ISを使った宇宙開発事業プロジェクトで。代表は俺と束さんで、参加企業は東宇宙開発局やデユノア社、他数社さ」

その他数社の中に他の作品に登場する企業・研究所名がちらほらあったが、雪兎は別物・似ただけだと思いたい。

「あんた、とうとうデユノア社取り込んだのね・・・」

「言っとくが、俺は強制もお願ひもしてねえぞ」

鈴の発言に雪兎は強く否定する。

「僕は前にIS一本で倒産しかけたから保険のつもりなんだと思うよ」

「リヴァイヴIIは換装用のパッケージだけでそっち方面にも対応できるもんね」

「リヴァイヴIIは元よりそういう設計だからな」

なお、このプロジェクトに参加している国は日本、イギリス、中国、フランス、ドイツ、ロシアと見事に専用機持ちの国である。アメリカが参加してないのは先日のアレのせい。ちなみに参加国には数個ずつ新規に製造されたISコアが贈られている。

「束さんをここで保護するのはプロジェクトの拠点はまだ無いのと警備的な問題な」

「あー、そんな一大プロジェクトだと拠点の設営だけでも問題なものね・・・」

それこそ各国が我こそは！と言い争っているくらいだ。

「ああ、だからこそ各国の代表候補生のいるIS学園が適任ということになってる」

「もしかして私達もそのプロジェクトに？」

「多分な。ここに集められた面子はほぼ関係してくるんじゃないか？ちなみに箒に関しては確定だ」

「な、なんだと!?!」

「いつまでも無所属のままではいられんだろう。丁度良いな」

そう、箒は未だに無所属の専用機持ち。なので手に余り扱いに困った参加各国は姉であり紅椿の製作者である束のいるプロジェクト・フロンティアに箒を丸投げしてきたのだ。

「詳しくは各国の政府から通達があると思う。参加は強制ではないはずだが、俺としては皆と一緒にやりたいと思ってる。本格的に動くのは卒業後だからすぐに決めなくてもいい。じっくり考えてみてくれ」

こうして兎師弟の夢は着実に実現に向けて歩み始める。

プロジェクトの説明を終えた後、雪兎とシャルロットは学園長室にいた。

「そうか、彼女らは……」

「はい、ダリル・ケイシーもといレイン・ミューゼル及びフォルテ・サファイアは亡国機業に与したと思われる」

その場にいるのは雪兎、シャルロット、千冬、楯無の他にIS学園の真の学園長・轡木十蔵だった。

「レイン・ミューゼルに関しては元より亡国の人間の人間のように叔母に当たるスコール・ミューゼルの命でヘル・ハウンド奪取のためのスパイだったと推測します。スコール・ミューゼルに関しては米軍にて十二年前に死亡扱いになっています。おそらく今の彼女は機械移植もしくは機械義肢でしょう」

「それは本当かね？」

「ええ、この前の仕返しで調べておきました」

サラツと前世で知った知識を調べたと行って明かし、その他亡国機業に関して知っていることを報告書として提出する。

「幹部ではあれど彼女らは一部隊に過ぎないか……」

スコールの属するモノクローム・アバターも所詮は一部隊に過ぎず、いざとなれば簡単に切り捨てられると雪兎は考えている。

「それに女性権利主義団体にもパイプがあるようね」

「どうりであの無能集団女性権利主義団体が大きな顔をしてる訳だ」

「これは楯無が更識として調べたものらしい。」

「亡国機業、実に厄介な存在だね……君と君の師はどうするつもりなのかな？」
「邪魔をするなら叩き潰す。それだけです」

十歳の問いに雪兎はそう即答した。

十章 「兎と秋と体育祭」

61話 開幕！IS学園秋の体育祭!! 兎、走る

東がIS学園に来て数日が経った。

とはいえ、たった数日で劇的に何かが変わる訳ではない（東がやろうと思えば数日も劇的に変わるが）。そんな中、秋ということでIS学園でも体育祭が迫っていた。

「という訳で出たい種目に手を挙げて下さい」

1年1組もクラス代表の一夏の仕切りで出場種目について話し合いが行われていた。その種目はスタンダードなものからネタとしか思えないものまで多種多様だ。

「体育祭ねえ……」

割りと美少女率の高いIS学園の体育祭ともなれば世の男達ならば見たがること間違いないの光景なのだろうが、雪兎はそういうのにはあまり興味が無かった。

「雪兎はどの種目に出るの？」

「無難にリレーとかの徒競走もんかね？騎馬戦や障害物競走とか接触事故の無いやつ」

「それ、一夏が出たら絶対やるよね……」

「やるな。あのラツキースケベ系の主人公スキル持つてる一夏なら確実に」

今まで散々ラツキースケベイベントをこなしてきた一夏ならば、と雪兎とシャルロットには妙な勘がそう囁いている。

「そこー!聞こえてるんだが?」

「聞こえるように言ったからな。それに本当に気を付けないと後ろから刺されるぞ?」

その瞬間、箒、セシリア、ラウラ、そして何故か隣のクラスの鈴から一夏に鋭い視線が飛ぶ。

(原作よりはマシなんだがなあ……)

原作ではこの体育祭は文化祭の時と同様の修羅場と化するのだが、それは雪兎がなんとか阻止した模様。代わりに専用機持ちを中途半端に分散させるくらいなら一つのクラスにまとめては?と提案して原作通りに専用機持ちを集結させることになっている。これは体育祭の後に公表される予定だ。ちなみに各種目は……

- ・ 50m走
- ・ クラス対抗リレー
- ・ 軍事障害物競走
- ・ パン食い競走
- ・ 騎馬戦
- ・ スプーン競走

・玉打ち落とし

・二人三脚走

・コスプレリレー

色々ツツコミたいだろうが、コレが伝統なんだとか……それでいいのか、IS学園。

「二人三脚……」

そんな中、シャルロットは二人三脚の文字をじつと見つめていた。

「ん？シャルは二人三脚に出たいのか？」

「えっ!?で、出たいには出たいんだけど……」

どうやら雪兎と一緒に出ている姿を妄想していたようだ。しかし、シャルロットが「一緒に出たい」とは言い出せずにいると……

「出るか？一緒に」

まさかの雪兎の方からお誘いがあった。

「えっ? いいのっ!?!」

「出たいんだろ?ならそのパートナーは俺がやってやるよ(まあ、こういうのって誘うの勇氣要るからな)」

しかも、雪兎はシャルロットの内心を完全に把握していた。なので雪兎から誘ってみ

たら、もうそれは嬉しそうにしている。

「じゃあ、二人三脚の一組目は雪兎とシャルロットな」

この二人は普段からコンビネーションに隙が無いため、クラスメイト一同の賛同もあつてすんなり決定する。箒達も一夏とペアで出ようとすると、一夏はこの競技の時に実況担当ということとで残念ながらそれは叶わなかった。

「よし、それじゃあこの通りにいくから皆しっかり練習してきてくれ!」

「「「おー!」」」

なお、この体育祭は学年別のクラス対抗戦になっており、優勝したクラスにはデザートフリーパスが配られるんだとかでクラスメイト達の気合も十分だ。

「デザートの力つてすげー」

「女の子は恋とデザートのためなら強くなれるんだよ」

「みたいだな」

こうしてI S学園体育祭までの日数は皆各競技の練習に燃えるのであった。

62話　IS学園体育祭開幕！　兎、彼女を応援する

なんやかんやあつて体育祭当日。

「何か賑わつてるなあ……」

「今年は男子が二人もいるんですもの。皆張り切つてるのよ」

雪兎の言葉にいつの間にか隣に来ていた楯無が答える。

「あー、なるほど。そりゃあ張り切りますわな」

雪兎はともかく箒達四人が周りを囲つていて普段は近付けないフリーの一夏に自分をアピールするチャンスと一部の女子がテンションMAXになっているらしい。無論、箒達も同様だ。

「雪兎君の甲斐性ならもう二人くらい余裕でしょ？」

「俺はハーレムとか興味無いんで……つてか、シャルと妹分二人で結構手一杯なんです」

束と一緒にIS学園にやってきたクロエは本来はラウラの姉に相当するのだが、彼女は成長しきる前に失敗作の烙印を捺されて処分されかかっていたためかラウラより肉体的に幼いらしく、マドカ同様に来年度からIS学園に通うことになっている。その

為、今日は二人共束と一緒に応援という形で教員テントの傍で見学している。

「そういえばあの二人仲良いのよね?」

「二人とも同じような出自ですからね」

片や世界最強のクローン。もう一方は遺伝子操作されたデザインベビーであり、真つ当な出自では無い。そして、同じく雪兎を兄と慕っている者同士ということもあつて初対面の時には無言で握手を交わしていた。それからは割りと二人で行動していることが多く、そこに同じく遺伝子操作されたバグウサギことミュウも一緒に行動している。この二人と一匹はその容姿から既に学園では一種のアイドル・マスコット扱いされている。

「いっくん! 箒ちゃん! ゆーくん! 頑張れー!」

「兄さん(兄様)! 頑張れー!」

「きゅっ」

『皆、頑張るの!』

天災、世界最強のクローン、デザインベビー、バグウサギ……そう思うと、この応援席の面子の濃さも中々侮れない。

「頑張つてね、お兄ちゃん」

「楯無さん、次の模擬戦でアドヴァンスド使われたいですか?」

「すいませんでしたっ！」

マドカとクロエの応援を聞き、早速雪兎を茶化す楯無だったが、雪兎の発言を聞き慌てて謝罪する。流石の楯無もタイムマンでアドヴァンスドとの模擬戦は嫌らしい。

「さてと、最初はシャルも出る50m走だったな」

楯無のことは放っておいて雪兎はシャルロットの応援をすべくクラスのテントへと向かっていった。

シャルロットside

「体調は万全！頑張るぞ」

今日の体育祭は普段良いところを見せられてばかりの雪兎に良いところを見せるチャンスということで僕は猛練習をしてきた。

「シャル！頑張れよー」

すると、クラスのテントから雪兎の声援が聞こえる。

「相変わらず愛されてるわね、あんた」

「あはは・・・」

たまたま一緒にレースに出る鈴に茶化されつつもスタート位置に着く。

『On your mark・・・Set. Go!』

ピストルの音と共にスタートを切る。僕は鈴の少し後ろにつき必死に鈴を追うも鈴はトレードマークと言っていいツイントールの髪を地面と平行するように靡かせながら疾走していく。

（このままじゃ追い付けない！）

半分の25mを越え差が開く一方だった。僕はその時、既に「相手は鈴だし・・・二位でもいつか」と諦めかけていた。だが・・・

「シャル！諦めるなっ!!」

その一言。世界で最も僕が信頼する彼の一言で僕の心に火が灯る。

「負けるもんかーっ!!」

「えっ!? 嘘っ!?」

そして、気が付けば僕は鈴より先にゴールテープを切っていた。

「えっ? 僕、勝ったの?」

雪兎の声援を聞いて無我夢中で走っていたからか、僕は鈴を追い抜いていたのに気が付かなかつたみたいだ。

「やるじゃない、シャルロット!」

「ううん、僕一人だったら途中で諦めてたよ」

「愛の力は偉大よねえー」

「も、もうっ! 鈴ったら・・・っ」と

鈴にからかわれて言い返そうとするも、途端に力が抜け倒れそうになるが。

「よっと。大丈夫か? シャル」

それを多分おめでとうと言いに来てくれた雪兎が受け止めてくれた。

「ごめん、ちよっと気が抜けちゃって・・・」

「まったく、まだ一つ目の種目だぞ?」

「はいはい、いちやつくなら自分達のクラスのテントに戻ってからにしましょう」

そんな様子を見て鈴がやれやれといった顔で言う。鈴は冗談のつもりで言ってみたんだけど、雪兎は違った。

「そうだな。そんなじゃあ、頑張ったお嬢様をテントにお連れしますか」

「えっ? えーっ!?!」

雪兎はそう言うのと僕をお姫様抱っこで抱え上げ、テントへと向かって歩き出す。

「ゆ、雪兎! 僕は歩けるからっ!」

「さつきフラついたやつが何を言うか。それに、これはご褒美なんだから大人しく抱っこされてろ」

「うう……」

結局、雪兎はテントに着くまで僕を下ろしてはくれず、僕は自分でも分かるくらい顔を真っ赤にしてテントへと戻ることになった。

s i d e o u t

63話 激闘！玉打ち落とし！ 兎、クールに決める？

シャルロットをテントに運んだ雪兎は自身の出る競技・玉打ち落としに参加すべくフィールドに降り立つ。

「うわあ、私のグループに天野君いるんだ……」

「装備制限してるとはいえ強敵だよおー」

そう、他の参加者が言うようにこの競技では他の参加者が訓練機を使用するため雪兎は「T:トライアル」で出場する決まりとなっていた。

「シャルも頑張ってたし、俺もいっちょ頑張るとしますか」

両手にソードライフルを構え雪兎はやる気満々で競技開始を待つ。

『Go!』

開始直後、中央に設置された射出機から大量の玉が上空へと射ち出され、他の生徒が狙いを付けようと各々の武器を構えるが、狙いを付けようとした的から次々と打ち落とされていく。

「えっ?」

「まだ私射ってないよ!」

「あ、あれ!」

その理由は……他の生徒よりも速く雪兎がノールックでソードライフルを射ち放ち、的を殲滅していたからだだった。

「う、嘘っ!?!ほとんど見ずに全弾命中させてる!?!」

その恐るべき技量に競技中だというのに他の生徒達は動きを止めて見入ってしまった。

「やはり雪兎の射撃技術は恐ろしいな」

だが、以前にセシリアへ向けてノールック投擲や模擬戦でのとある一幕を知る一夏達はそこまで驚いてはいなかった。むしろ「あいつならこれくらいやるだろう」という妙な確信があつたくらいだ。

「私の山嵐もあれで全基落とされたことあつたし……」

「えっ? 簪さんの山嵐全部っ!?!」

「うん、しかも【白雷】装備の時に」

【白雷】とは打鉄式式の砲撃強化パッケージで、追加装甲のミサイル量も増し増しのものだ。それを全基撃墜とか並みの技量ではない。先の模擬戦でのとある一幕とはこれのことである。

『しよ、勝者、1年1組天野雪兎……』

結果を告げる放送担当もそのぶつちぎり過ぎる雪兎の得点に若干引いていた。

「雪兔、やり過ぎ」

「すまん、ちよつと張り切り過ぎた」

クラスのリントに戻ると雪兔はシャルロットに注意されていた。

「もう、そんなに頑張られたら僕が良いところ見せられてないじゃないか！」
「「怒るとこ、そこっ!?!」」

シャルロットや1組クラスメイト達も随分毒されてきた気がする・・・

「あつ、次セツシーとひじりんにかんちゃんグループだ！」

「また特訓メンバー固まってんなあ・・・」

どうやら鈴はこの競技には出ないようだ。

「聖は今回アレできたか」

「シャープガンナーか……しかも最初からアーマードモードかよ」

聖の専用機の射撃戦仕様バイザーボード「シャープガンナー」は四基のビームキャノンと二基のガトリングガン、ミサイルコンテナに有線式ヒートチャクラムなどを装備するもので、それらを武装として身に纏うアーマードモードでは肩にビームキャノン、腕にチャクラム、背面にミサイルコンテナを装備する重装備化する。

「あれ、劣化版「G：ガンナー」だからな……」

「劣化版と言ってもあまり差は無かったな」

「あの重弾幕はないよお……見てて怖かったもん」

以前、3対3の模擬戦で雪兎、シャルロット、聖の三人でトリプルガンナーで開幕ブツパをされた一夏、箒、簪は軽いトラウマになりかけた程だ。その時観戦していた本音は既にトラウマ化しているかもしれない。

「聖さん、本気のようにすわね」

「セシリアこそエンジェル・フェザー装備じゃない」

「私も本気でいく」

「こっちは【白雷】か」

セシリア、聖、簪が闘志を燃やす中、他の生徒は再び恐怖していた。

「これだったらさっきの天野君の方がマシだったよぉー!!」

「私、体育祭が終わったら幼馴染に告白するんだ……」

「そこ！死亡フラグはダメーツ!!」

「つてか、あんた告るような幼馴染いたんかい！」

『Go!』

そこからはビームと弾丸の雨霞が飛び交う正に死地と言える戦場と化した。

「「「いやーっ!!」」」

巻き込まれた生徒達には合掌。特に死亡フラグを建てた彼女は告白が上手くいくこ

とを願う。

「酷い目に遭いましたわ」

「酷いのはお前らだろ」

結果はなんと聖の勝利。聖の弾幕でビットやミサイルが思ったように動かせず聖の大量得点を許す形となったようだ。

「一昔前の弾幕ゲー見てるかと思っただわ」

ちなみにそれ以降のグループではそんな派手な試合にはならなかった。当然である。

『続いての競技はスプーン競走です』

「何だろう、この落差は……」

スプーン競走も特に大きな見せ場は無かった。むしろあつたら驚く。

64話 進め！軍事障害物走 兎、呆れる

『次の競技は軍事障害物走です』

ルールは普通の障害物走に近いこの競技だが、最初と最後に他には無いIS学園が一応は軍事系の学校であることが伺える要素を含んでいる。それは、最初にバラバラに分解されているライフルを組み立て、それを持って三メートルの梯子を登り、五メートルの鉄骨を渡り、ポールを降りた後に匍匐前進で網を潜り抜けてゴールまでライフルを運び、最後に的に当てて初めてゴールというものだ。ちなみに外したらスタート地点まで弾をもらいに行かねばならない。

「この競技はラウラが有利だな」

確かに軍事経験豊富なラウラにこれ以上ない競技だ。他にもスナイパーのセシリアや銃器の扱いに長けたシャルロットもこの競技は得意であろう。そして、原作と違いあの人物も……

『1着、1組・布仏本音』

そう、射撃を苦手としていた本音も雪兎の猛特訓のおかげでその脅威的な整備技術を生かし無事に1着でゴールしたのだ。

「まあ、組み立ての段階であんだけ差つけられればこの結果は順当だろ」

ちなみに一発外して弾を取りに戻って1着だったことを考えれば本音の組み立てが如何に速かったかが分かる。

「雪兎、この競技、目のやり場に困らないか?」

確かに跳んだり揺れたり挟んだり潰れたりと一部の生徒の身体の一部は気にはなるだろう。

「お前さ、恋愛感情には鈍感な癖に思春期真っ只中だな?」

「仕方ないだろ!というかお前はどうかお前はどうなんだよ!」

「シヤル以外眼中に無い」

「・・・そう言い切れるお前は眩しいぜ」

シヤルロット一筋と言いつける雪兎を一夏はある意味尊敬する。

「お前はもうそろそろ周囲から向けられる好意ってやつに真剣に向き合え。じゃないとさつきも言ったが、刺されるぞ?」

「周囲って・・・箒やセシリア、鈴にラウラのことか?」

「お前、やつと自覚したのか」

ワールドページによる彼女らの妄想を垣間見ていないため、もう少し時間がかかるのでは?と思っていた一夏は何とか鈍感から鈍いへと改革されていた。

「誰か一人選ばうが、ハーレム作ろうが、四人以外を選ぼうが、どんな結末を選ぶかはお前次第だ。だが、親友が優柔不断で刺されて死にました、つてなのは勘弁してくれよ？」

「お、おう。ちよつと真剣に考えるわ」

やつと、恋愛のスタート地点に立った一夏に呆れつつも雪兎は障害物走の応援に戻った。その後もラウラを筆頭に代表候補生達が奮闘し、軍事障害物走は1組の圧勝に終わった。

その次に行われたのはクラス対抗リレー。

「任せたぞ、アンカー——！」

「任せろ！」

これは雪兎と一夏が男子の意地を見せ、他のクラスに大差で勝利し、1組に貢献する。

「残るは騎馬戦に二人三脚」

「パン食い競走に……」

「コスプレリレーか」

「あれ、出場者が衣装用意しなきゃいけないんだよね」

衣装に関しては雪兎と簪の助力で揃えることが出来た。それぞれの衣装に関しては二人共妥協せず選定したため自信があるという。

「騎馬戦、頑張ってこいよ」

「俺達は放送のテントにいるから」

午前の部最後は騎馬戦。これには色々配慮があつて男子二人は参加はしない。この手の競技では絶対に面倒な事故(Tolive的な何か)が起きると雪兎の判断で色々企んでいた楯無を止めたのだ。

『続きまして、クラス対抗騎馬戦です』

こうして、女子達の熱い戦いが始まる。

65話 熾烈！女子だけの騎馬戦 兎、実況する

騎馬戦。それは数人の馬役の上に乗った人のハチマキ等を奪い合う競技。ハチマキを奪われても、落馬しても失格となるため、その戦いは熾烈を極める。

「ゆくぞー！」

「出るからには狙うは一位のみ！」

「その通りですわ！」

「僕も頑張るよ！」

1組のプレイヤーは箒、ラウラ、セシリア、シャルロットの四人とその馬役に各三人ずつがついての計十二人のチームだ。

『さあ、始まりまずは騎馬戦です。司会進行は私、放送部の国枝椎名と……』

『実況の織斑一夏です……』

『解説の天野雪兎の三名でお送り致します』

そして、その騎馬戦の実況・解説には雪兎と一夏も参加していた。

『さて、実況と解説のお二人はどこが勝つと思われれますか？』

『俺は同じクラスとして1組に勝って欲しいですね』

椎名の質問に一夏は無難に答える。

『確かに1組は四人とも代表候補生。実力的にも十分ですが、代表候補生以外にも実力者はいますし、2組と4組にも代表候補生はいます。それに、騎馬戦は一人が突出していても勝てる競技ではないので何とも言えませんね』

対して雪兎は解説らしく冷静に戦力分析した結果から発言する。

『なるほど……つまり、どのチームにも勝ち目はあると?』

『そう思います。俺個人としては自分のクラスに頑張つては欲しいですがね』

そんなこんなで騎馬戦が始まる。

「せ・し・り・あ〜!」

「鈴さん!」

まずはセシリアの騎馬と鈴の騎馬がぶつかる。

『おっと、早速1組のオルコットさんと2組の凰さんが激突!』

『これはいつもの組み合わせですね。この二人は何と叫びますか、強敵と書いて友と読む関係ですからね』

『確かにこの二人はいつもこうだよなあ』

激しい取っ組み合いになる二人を見て、雪兎と一夏はいつものことと流す。

『近くでは2組の宮本さんが他の生徒を指揮して凰さんのフォローをしています』

『聖は状況判断能力が高いので指揮官向きですからね。多分、鈴がこうなることを想定して彼女を遊撃に据えたんでしょう』

『なるほど……』

セシリアと鈴は互角であれば、騎馬戦は団体競技。聖は鈴のフォロワーに周りつつセシリアを他の四人から引き離し隔離することで鈴に有利な状況を作り出す。

「流石だな、我が友よ。だが、こちらを忘れてもらっては困る！」

「忘れてないよ、ラウラ。神宮寺さん！」

「イエス、コマンダー！」

その包围を崩そうとラウラの騎馬が聖を狙うが、聖はそれを予想していたのか、箒に似た茶髪のポニーテールの少女・神宮寺晶を投入する。

「むっ、貴様。できるな」

「ドイツの代表候補生にそう言っていただけるとは光栄だな」

『あれは空手部の神宮寺晶さんですね。彼女は一年生ながら期待の新人とのことだ』

『空手部……なるほど。ラウラの対人格闘能力に対して空手で対抗してきたか』

『ラウラとやりあえるって……凄いな、彼女』

聖によってセシリアとラウラを抑えられた1組。しかし、箒とシャルロットは二人ならばそう簡単にはやられないと踏んで残るチームのハチマキを奪いにかかる。

「私達もいく」

一方で簪率いる4組もまとまって他のクラスのハチマキを奪いにかかる。

『4組は多人数で一人ずつ確実にハチマキを奪いにいく作戦の模様』

『四人の騎馬で一人の騎馬を引きずり込んでハチマキを奪う。簪も指揮官の戦い方だな』

『こうやって見ると騎馬戦って言っても戦い方が色々あるんだなあ』

個人の技量で戦う1組。鈴の行動力と聖の指揮で戦う2組。簪を中心に一つの生き物のように動く4組と皆戦い方が違う。

『3組が全滅!ここでリタイアです』

『今のは完全にとぼちりでしたね……』

『セシリアと鈴の巻き添えって……あつ、二人とも落ちた』

その後も3組が聖と簪の策略でセシリアと鈴の争いに巻き込まれて落馬してリタイアしたり、5組が箒とシャルロットに全滅させられたり、6組が簪の戦術で全滅したりし、セシリアと鈴が同時に落馬してドローになったり、簪の指示で神風特攻をかました4組の生徒によって箒とシャルロットがリタイアしたり、そして最後に残ったのは聖と簪の二人の騎馬のみとなっていた。

『の、残ったのは2組と4組!そのそれぞれの指揮をしていた二人だけです!』

『雪兎はこの結果は予測できてたのか？』

『まあな、あの二人はこの手の戦術詳しかったしな』

ちなみに、この騎馬戦の結末は結局は二人がどちらも攻めあぐねて時間切れ。双方のチームのハチマキ獲得数で勝った4組の勝利となった。

66話 ランチタイムとアピール合戦 兎、彼女のお弁当を食べる

午前の部が終わり昼休み。一回はいつものように集まって食事をすることにしたのだが……

(変だ)

(変ね)

(変ですわ)

(変だ)

一夏の様子が少しおかしいことに気付く箒達ラバーズ達。具体的に言うのと、いつもなら箒達が近くにいるても平然としている一夏が雪兎側におり、箒達に近付こうとしないのだ。

(これは……)

(もしかして……)

(私達……)

(避けられてる?)

今までにない事態に箒達は困惑していた。そんな中、雪兎は一人真相を知る身として一夏に呆れていた。

(一夏のやつ、意識し始めた途端にこれかよ)

そう、一夏は箒達を避けているのではなく、むしろ箒達を恋愛対象として意識したが為に距離感が掴めなくなっているのだ。つまり、鈍感の次はヘタレたのだ。

(はあ、これは箒達にもフォロー入れとかないとマズいな)

一方の箒達は何故一夏に避けられているのか考え始め、今まで行ってきた数々の事(主に一夏をボコボコにしたこと)を思い出したのか顔が真っ青になっていた。

「箒、鈴、セシリア、ラウラ。お前らに話がある」

とりあえず箒達の方にフォローを入れるべく、雪兎は箒達を少し離れた場所へと連れ出した。

「雪兎、我々は一夏に避けられているのだろうか?」

連れ出された四人を代表して箒が不安そうに雪兎に訊ねる。

「安心しろ。避けてる訳じゃない」

雪兎がそう断言すると四人はホツと息を吐く。

「まあ、お前らが何を思っただ顔を青くしてたかは知らんが、程々にしとかなないと本当に避けられるぞ?」

(((びくっ!)))

「な、なんのこことかしら・・・」

明らかに目が泳いでいる四人。自覚はあるようだ。特に鈴は冷や汗まで出ている。

「今までは割りと多目に見てきたが、今後はああいう暴力沙汰にI S使うのは止めてもらおうか? 今は学園がフォローしてくれるが、それが癖になって将来あんなことしてもろ。軽くて罰則、最悪は捕まってブタ箱行きだぞ?」

「「うぐっ」」

雪兎の指摘に四人の顔が再び真っ青になる。

「お前らが一夏に恋愛対象として意識されてなかった原因の一つはそれだぞ? 事あるご」

とに武器だの I S でやられてみる？ 恋愛感情なんぞ沸くか！」

「「「「・・・おっしやる通りです」」」」

気付けば四人は正座して雪兎の説教を受けていた。

「「・・・お小言はこの辺にして、一夏に避けられてるように見えるのは何故か？ つて話だったな」

すると、箒達は正座をしたまま聞き入る姿勢を取る。

「それは一夏がお前らを恋愛対象として意識し始めたからだ」

「「「えっ？」」」

それを聞き、四人は思わず我が耳を疑う。あの鈍感を擬人化したような鈍感の化身たる一夏が自分達を意識している？

「いい加減に後ろから刺され・・・いや、I S が殺人の凶器になりそうだったからはっきり言って意識するようにした」

この時、箒達は雪兎を崇めなくなっていた。今、雪兎を神とした宗教を興せと命じられれば実行してしまいそうな程に。それほど一夏の鈍感さは深刻だったのだ。

「俺がでるのはこれくらいだ。あとは真つ当な手段であいつを取り合ってくれ」

一夏 side

顔を青くした箒達は雪兎に連れ出された。原因はわかっている。俺がいきなり箒達を避けるような行動をしたからで、雪兎は箒達のフォローをしてくれているのだろう。思い返せば似たようなことは以前にも何度かあった。つまり、その頃から雪兎には色々世話になっていたのだろう。

「大丈夫？一夏」

「あ、ああ」

そんなことを考えていると残っていたシャルロット達が心配そうにこちらを見ている。

「一夏君、何か悩み事？良ければ相談に乗るよ？」

「ありがとう、聖」

せつかなので相談に乗ってもらうことに。

「悩み事って、やっぱりしののん達のこと？」

のほんさんの言葉に頷き、俺は雪兔に言われたことや自分が思っていたことを話す。

「……確かに毎回あんな仕打ち受けてたら混乱するよね」

「真剣とかI Sとか……そういえば何度か当たったら死んでるようなのもありましたね」

「一夏の話を知くと箒達も半ば自業自得な気がしてきた」

「おりむー、よく生きてるよね」

うん、俺もよく生きてると思う。

「それでも、急にあの態度はどうかと思うよ？」

「ああ、それはわかってるつもりだ」

急に意識したせいとか、俺はいつも通りに箒達と接することが出来ず、結果的に箒達を避けてしまっていた。思い返せば意識する前は一緒に座るなんて目じやないことも平気でやってきた気がするの……

「戻ってきたら、ちゃんと謝るよ」

「謝ったら、謝ったで色々話が拗れそうだけどね」

「じゃあ、どうしろっていうんだよ……」

聖の指摘に頭を抱えていると。

「ふん、いつも通り接してやればいいだけだろう」

そんな俺に遅れて東さん達と一緒にやってきたマドカがそう言った。

「あいつらはお前がいつもと違う態度を取ったから不安になったのだろう。だったらいつも通りに接してやれば安心する」

「めっずらしく。まどつちがいつくんにアドバイスするなんて」

「わ、私はこいつが兄さんをこれ以上煩わせないようにと……」

東さんの言葉にマドカは顔を真っ赤にしてそう反論する。しかし、マドカの言葉は正しいと俺は思った。

「ありがとな、マドカ」

「ふんっ！」

俺がお礼を言うと、マドカは顔を真っ赤にしたままソツポを向いた。

side out

67話 ランチタイムパニック 兎、堪忍袋の緒が切れ

「あつ、戻ってきた」

雪兎達が戻ると遅れて来た東達が既に合流しており、一夏も先程とは違い何とかいつも通り箒達と接しようとしているのがわかる。

「そつちも何とかなつたみたいだな」

「うん、マドカがね……」

「へえ、マドカが……」

シャルロットに自分がいない間のことを聞き、雪兎はマドカも少しづつ一夏に対する態度を軟化させていることを嬉しく思う。そして、雪兎がシャルロット特製の弁当を食べていると……

「私達も一緒にでもいいかしら？」

楯無と虚の二人も雪兎達のところへやってきた。

「構いませんよ」

「それじゃあお邪魔するわね」

すると、楯無は一夏の隣に座る。

「「「えっ?」」」

これには箒達だけでなく雪兎も驚いた。何せ楯無が一夏に惚れるようなイベントは別の危険を回避すべく雪兎自ら潰していたので楯無がこんな行動に出るとは思っていなかったからだ。そして、楯無は更に予想外の行動に出る。

「ちゅっ」

「「「なあつ?!」」」

「い、いきなり何するんですか!楯無さん!」

何と楯無が一夏の頬にキスをしたのだ。この楯無の行動に箒達はいつものように暴力を振るいそうになるも雪兎の言葉を思い出してぐっと堪える。それを見て楯無は意外そうな顔をするもすぐに意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「最近の一夏君頑張ってるし、ちよっといいかなあつて」

おちよくつているように見えて楯無は満更でもない顔でそう言う。どうも一夏の強化特訓が楯無の好感度を上げてしまったようだ。つまり、楯無も一夏争奪戦に加わろうと言うのだ。そして楯無は一夏の腕に胸を押し付けるように抱きつく。

「た、楯無さん!?!」

そんな楯無の行動に慌てる一夏。それを見て我慢の限界に達しそうな箒達。だが、そ

れより先にぶちギレそうな人物がいた。

「……せつかく人が鎮めた騒ぎを掘り返すとか、何考えてるんです？生徒会長殿？」
その人物とは雪兎だった。元々、この体育祭でも色々企てていた楯無だったが、一夏の身を案じて普通の体育祭になるよう人力した雪兎。それに先程説得したばかりの筈達を煽るような楯無の行動。そして何よりこの騒ぎで彼女の弁当を味わう邪魔をされ雪兎の堪忍袋の緒は切れる寸前だったのだ。

((あつ、これはマズイパターンだ))

幾度となく雪兎のお仕置きを受けてきたorr目の当たりにしてきた特訓メンバーはそんな雪兎を見て顔を真っ青にする。

「え、えつと、これは……」

そこでようやくマズさに気付いた楯無が弁解しようとするももう手遅れだった。

「昼休みに何の余興も無いのは寂しいですよね、虚先輩？」

「えつ、あ、はい……」

虚も今の雪兎に逆らわぬ方が良いと察する。

「せつかくですから俺と生徒会長殿で模擬戦でもしましょうか」

即ち、「公開処刑だ」と雪兎は言っているのだ。

「で、でも、そんな簡単にアリーナの使用許可は」

「面白そうだからちーちゃんに聞いたらOKだつて」

楯無の抵抗も束によつて打ち砕かれる。どうも束も箒を煽つたのがお気に召さなかつたようだ。

「さて、許可も出ましたし、行きましようか生徒会長殿」

「い、いや！助けて簪ちゃん!!」

「ごめん、お姉ちゃん」

楯無は最後の手として簪に助けを求めるも雪兎は容赦無く楯無を引き摺りアリーナへと向かつて行つた。

「きゅ」

『たつちゃん、短い付き合ひだったの』

「い、いや、死んでないから！つて、皆も黙祷捧げちゃ駄目だつて！」

こつとして楯無のお仕置きもとい公開処刑が始まるのであつた。

68話 学園最強VS学園最凶 兎、公開処刑開始

楯無が雪兎に連れて行かれてからしばらくすると、校内放送で雪兎と楯無の模擬戦が行われると連絡があり、アリーナに行かなくとも校内ローカルネットや各所のモニターでも観戦出来ることも通知される。これにより楯無は完全に逃げ場を失う。

「覚悟は決まりましたか？生徒会長殿」

「……ええ、もうやってやるわよ！」

逃げ場を失った楯無は半ば自棄になりつつもミステリアス・レイディを展開し雪華を纏った雪兎と対峙する。

「では、こちらも……はい、【CF：コールド・フレイム】」

すると、雪兎は雪華に新たななるパックを展開させる。その姿は【W：ウィザード】のようにローブのような白い装甲を纏い、他にも手足に追加された装甲の縁には透明なパーツが取り付けられており、見るものに神秘的なイメージを与える。楯無は外見から【W：ウィザード】系の発展型のアドヴァンスドシリーズと推測する。そして名前である『冷たき炎』の意味が楯無の予想通りのものであれば、この模擬戦は楯無にとって厳しいものになるのは間違いない。

『それではこれより更識楯無と天野雪兎の模擬戦を始めます……試合開始!』

開幕と同時に仕掛けたのは意外にも楯無の方であった。雪兎に試合のペースを握らせまいと楯無は槍に付いたガトリングガンで牽制しつつ接近を試みるが、雪兎はそれを円形のシールドビットを展開して防ぎつつ接近し両手に背面にマウントしていた半月状の刃を持つショーターという武器を持ち左右から挟み込むように斬りかかる。

「またマニアックな武器を!」

「驚くのはまだ早いぜ!」

このショーターは17世紀頃にエチオピアで使われていた武器で盾を持つている相手を馬上の相手を引き摺り落とすのに有効だったとされる武器だ。まあ、雪兎が使うのが普通のショーターな訳がなく、これにも更なる工夫が施されており、楯無が水のべールで防ごうとすると片方は凍てつき砕かれ、もう片方は熱で蒸発させられる。これに慌てた楯無はすぐさま回避して事なきを得るが、その表情は険しいものに変わる。

「やっぱり!そのパツクの特性は【温度変化】ね!!」

「厳密に言えば【分子活動の活性・停滞化】だけだな」

そう、雪兎が今回使っている【CF:コールド・フレイム】はフォルテが使っていたコールド・ブラッドの【分子活動を停滞化させて氷結させる】の上位互換とも言える能力。分子活動を活性化させて高速振動を起し熱を生み、逆に停滞化させて氷結させる。そ

れが【CF：コールド・フレイム】の能力なのだ。コールド・ブラッドの開発元であるギリシャの技術者連中は泣いていい。

「それ、この子と相性最悪じゃない!？」

「それくらいしなきゃ制裁にならないだろうに」

楯無のミステリアス・レイディは水をナノマシンで変幻自在に操る機体。だが、雪兎の【CF：コールド・フレイム】はその水をナノマシンごと蒸発させたり氷結させることが出来る。楯無の言う通りはつきり言って相性最悪である。

「他にもこんなことも出来るぜ!」

ショーテルをしまい雪兎が次に繰り出したのは左腕に装備されたシールドの先から先端の尖った鞭のようなものを伸ばし楯無に向けて放つ。それは熱されているのか赤くなっており、直に触れたら火傷では済まないのは明白であった。

「ちよつ、それは危ないでしょ!？」

回避はしたものの、もし捕まっていたらを想像し楯無は冷や汗を垂らす。拘束されてじわじわ熱され、万が一にもその間にシールドエネルギーが尽きれば丸焼き確定。えげつなさ過ぎる装備である。

「まだまだ付き合ってもらうぞ、生徒会長殿。こいつは流石にシャル相手でテスト出来なかったからな」

「いーやあー!!」

「何、あれ……」

アリーナで観戦していた一夏達を代表して鈴がそう呟く。

「やっぱゆうくんの作る装備は面白いね！流石は我が弟子！」

一夏達が絶句する一方で束は嬉しそうに雪兎の「CF：コールド・フレイム」を見つめる。

「蒼流旋のアクアナノマシンを許容値以上の高周波で破壊するとか流石は雪兎。あつ、ラストイー・ネイルが凍った」

簪も姉である楯無のミステリアス・レイデイをよく知るが故に雪兎が何をしているのか理解し、その出鱈目さに驚く。

「今度は右手で掴んだビットが弾けた……右腕の籠手は振動制御出来るのか？」
「それって、右腕が電子レンジと高速冷凍庫ってこと？」

それ、どこの輻射○導ですか？と言いたい。出力は抑え目であったが、最大出力でビットではなく本体が捕まれていれば装甲はおろか肉体ごと吹き飛んでいただろう。

「アイツ、ストレス溜まってたんだな……」

最後の一夏の一言を聞き、今後は絶対雪兎を怒らせないようにしようと一同は誓うのであった。

69話 レースにならない?二人三脚 兎、見せつける

「良いデータが取れたぜ」

「ぐすっ……」

あの後も雪兎の蹂躞劇は続き模擬戦が終わった後楯無はガチで泣いていた。尚、生徒会長である楯無に勝利したため雪兎は生徒会長になる権利を得たが、「面倒」の一言でその権利を放棄し楯無が号泣したとかしないとか……

「さてと、戻ってシャルの弁当食わなきや」

『さて、午後の部最初の競技は二人三脚です!』

昼休みが終わって最初の競技は雪兎とシャルロットの出る二人三脚だった。

「な、何だか緊張してきたよ」

「大丈夫だって、俺とシャルが一緒なら負けっこないって」

「う、うん・・・」

((いちゃつくなら他所でやれ!!))

スタート位置で緊張するシャルロットに雪兎が安心するよう声をかける姿はどう見てもいちゃついているようにしか見えぬ他のペアを苛立たせていた。だが、他のペアは気付いてはいなかった。それが雪兎の作戦だということに・・・そして、それはスタート直後に起きた。

『On your mark・・・Set. Go!』

「「うわあ!」」

何と他のペア数組がスタート直後一斉に倒れたのだ。その原因は雪兎とシャルロットのいちゃつきぶりを見せつけられて冷静さを失ったペアが踏み出す足を間違え転倒したのだ。

「1・2、1・2、1・2」

一方で雪兎とシャルロットのペアと雪兎の策略に乗らなかったペアは問題無くスタートするも、やはり普段から阿吽の呼吸を見せる雪兎とシャルロットのペアがトップに躍り出る。

「体格差があるのに何故!?!」

「こっちはそういうのも全部合わせてきてるのに・・・」

そう、本来ならば男の雪兎と女のシャルロットでは体格差があり、いくら息がぴつたりとは言えども互いが上手く合わせられるとは限らない。なのにも関わらず体格差の無いペアを作り多くの練習を重ねてきた他のペアが遅れをとっている現状を彼女達は受け入れることができなかつた。

「ああ、そのことか」

そんな彼女達の疑問を聞き、雪兎はさらりととんでもないことを口にした。

「女子のシャルが男子の俺に合わせられるわけないだろ? だから俺がシャルに合わせるだけだぞ」

「「は?」」

雪兎のその言葉に他のペアだけでなく1年1組と特訓メンバー以外の生徒は揃って啞然とする。つまり雪兎の言葉を分かりやすく言うなら『他のペアが二人三脚で走って

いる中シャルロットは一人で走っているのと変わらない』と言っているのだ。

「ふふ、そろそろ本気出そっか、雪兔」

「ああ！」

「ま、まだ余力があるだ?!」

「あのカップルは化け物か!?!」

その後、スピードを上げた雪兔とシャルロットは歴代の記録を大きく塗り替えて圧勝した。

70話 パン食い競走とコスプレリレー 兎、仮装する

二人三脚を終えて1年1組の学年別得点はトップ。残すパン食い競走とコスプレリレーをそれぞれ三位以内で終えればそのまま入賞は狙えるところにいる。

『続けてはパン食い競走です』

このパン食い競走はラウラが出場している。理由はパン食い競走に使うあんパンを一夏と買いに行ったラウラがこの競技に興味を持ったかららしい。

「む、また会ったな神宮寺」

「ほう、ラウラ殿もこの競技に出てくるとは」

そこでラウラは騎馬戦の時に対峙した神宮寺晶を見つけ声をかけた。

「どうやら同じレースのようだな」

「それでは騎馬戦で着けなかった決着。このレースで着けるとしようか」

「その挑戦、受けてたとう」

この二人、似た者同士のようにですっかり意気投合している。そして、先の騎馬戦でもわかる通りこの神宮寺という少女は一年生の非専用機持ちの中でも近接戦闘に関してトップクラスの実力を持っており、これから多くの人材を必要とするプロジェクト・

フロンティアに欲しい即戦力の逸材だった。実は今回の体育祭は専用機持ちの影に埋もれてしまっている優秀な人材の再発掘も兼ねており、神宮寺以外にも何人か雪兎が目を付けている生徒がいた。

(やっぱり何人か楯無先輩に言つて1組に再編させてもらおうかな?)

クラスの再編はそう何度も行えるものではないので一度しかできない以上、神宮寺らを獲得するチャンスは次の再編くらいだろう。

パン食い競走での勝負はラウラに軍配が上がり、1組は以前トップを独走しつつ最終競技であるコスプレリレーまで辿り着いた。

「ここまで順調だな」

「だが、最終競技の配点が高い。ここで下手な順位となれば逆転も有り得る」

そう、このコスプレリレーではリレーでの順位は勿論、コスプレの完成度にも配点が存在するのだ。

「衣装の完成度に関しては問題無い。そっちに関しては簪のいる4組以外に負けるつもりはない」

「ず、随分と自信があるのだな」

「当たり前だ。何せ俺の自信作だからな」

「雪兎が裁縫まで得意とは思わなかったよ……」

「『えっ!』」

シャルロットの一言でその場にいた一夏、箒を除く1組の皆も驚き視線を雪兎へと向ける。

「色々と言いたいことはあるだろうがそれはリレーが終わってからだ」

そう言うのと雪兎はリレーに出る一夏、箒、セシリア、シャルロット、ラウラに衣装の入った紙袋を手渡す。

「サイズはちゃんと合わせてあるが違和感とかがあれば言ってくれ直ぐに直すから」

紙袋を受け取った面々はそれぞれ仮設の更衣室へと向かい着替え始める。雪兎も自

分の衣装の入った紙袋を手に更衣室へと向かう。数分後、着替えを終えた一夏達が姿を現す。

「本当にサイズびつたりでしたわ」

「でしよ？」

最初に出てきたのはセシリアとシャルロットの二人。そして、その二人の衣装を見れば1組の衣装が何をモチーフにしているかは一目瞭然だった。まずシャルロットの衣装だが、淡い水色の服の上に白いエプロンを纏い、兎の耳のような大きなリボンをした衣装。一方のセシリアは赤と黒のドレスにトランプのマークをちりばめ、頭に金の王冠を乗せている。もうお分かりだろう。1組のコスプレテーマはズバリ『不思議の国のアリス』だ。

「うむ、嫁とセットの役とはアイツも気が利いているな」

「本当によく出来てるよな、この衣装」

「私の衣装は何故こんな・・・」

続いてラウラ、一夏、箒の三人の衣装だが、ラウラは茶色のウサミミに同じ色のスーツ姿の三月兎で、一夏は緑のスーツに帽子を被った帽子屋、箒は紫とピンクの縞模様のネコミミと尻尾付きワンピースに肉球付きの手袋とブーツを着けたチェシャネコだ。

「うむ、見立て通りだな。箒はチェシャネコなのは他に主要なキャラが思い浮かばな

かったからだ」

最後に出てきた雪兎は赤いスーツに白いウサミミ、懐中時計とモノクルを着けた白兎である。

「ふーん、1組はアリスなのね」

そうやって現れたのは金の輪を頭につけ、朱色の棍を持った孫悟空のコスプレをした鈴だ。

「そう言うそつちは西遊記か」

他の面々も三蔵法師一行や道中の妖怪のコスプレをしている。

「聖が三蔵法師で、鈴が悟空・・・うん、イメージピッタリだな」

「雪兎、今の間は何よ!? 私が猿っぽいとでも言いたいわけっ!」

「うん」

「ウキー!!」

いつものように雪兎が鈴をからかい鈴が怒る。それを見ていた面々が「あつ、確かに猿っぽい」と思ってしまったのは無理も無いだろう。

「不思議の国のアリスに西遊記、基本に忠実」

続いて4組の簪達の衣装は魔女と戦う某魔法少女達のコスプレである。ちなみに簪は剣を使う青髪の娘である。

「簪、確かにそのコスは動き易いし、肌の露出も少ないが……」

あの作品は色々な意味で魔法少女達に救いがなさすぎる。喰われたり、魔女になって倒されたり、救えなかったり、マミられたり……

「正直に言えばま○かどほ●らは魔法少女版か究極・悪魔で迷ったけど動き易さ重視で魔法少女にした」

「確かにあの衣装は走るのには向かないだろうけどさ……おつ、そろそろ入場か」

他のクラスは流行りのアイドルグループだったり、着ぐるみだったりで1、2、4組ほど目立つものはなかった。

リレーは第一走者の鈴がドレスで出遅れたセシリアを離し2組がトップでバトンを渡すも、続く第二走のラウラが軍人の意地を見せ抜き返して逆転。三人目は一夏と神宮寺の勝負かと思われたが3組の陸上部の生徒が二人を追い抜きトップになるが、バトン渡しに手間取り第四走者の箒と聖がツートップに。そして第五走者の雪兎で差がつき、雪兎からバトンを受け取ったアンカーのシャルロットがリードを維持したままゴールイン、という結果に終わった。5組?聞いてやるな・・・強いて言うならば着ぐるみはリレーには向いていない、とだけ言っておく。

71話 体育祭の終わりと新たななる火種 兎、備える

リレーで一位になったこともあり、1年の学年優勝は1年1組となった。つまり今までは無人機の襲撃等でお流れとなっていたデザートフリーパスがクラスに配布されるということでもあり、クラスメイトの歓声はそれはもう凄まじいものであった。祝勝会ではそのフリーパスを早速使ってデザートバイキングのような状況になり、後日体重を気にする生徒が多発した（自業自得である。そしてお菓子やデザートは控えめに）。

体育祭から数日後。プロジェクト・フロンティアが正式に発表され、それに伴いプロジェクトに所属する生徒が多くいる1年1組に関係者を集めて一括管理するという名目でクラスの再編が行われ、雪兎を始めとしたプロジェクト所属生徒の他にプロジェクトに推薦された生徒や参加を希望する生徒が1年1組に集った。これにより旧1年1組から三分二（プロジェクト所属者・1組からの参加希望者を含む）、残り三分一が他のクラスからの推薦・希望者が新1年1組となった。新たにクラスに加わった者の中には体育祭でラウラと競い合った神宮寺晶の他にもスペインのエリカ・ピーリ、イタリアのアレシア・ロツタ、スウェーデンのカロリナ・ゼンナーシュタット、といった代表候補生が名を連ねていた。エリカ、アレシア、カロリナの三名はプロジェクト参加に伴い代表候補生から外れる（※1）ことも本人・国が了承しているらしい。おそらく、三国がプロジェクト・フロンティアへ参入するために少しでも束と雪兎の心象を良くしようと非専用機持ちとはいえ虎の子の代表候補生を差し出したと思われる。

※1 プロジェクト所属者はプロジェクト・フロンティアにおける代表と扱われるため。

「3組から来たエリカ・ピーリよ。よろしくお願いするわ」

エリカは元3組の生徒で専用機は持つてはいないもののクラス代表だった生徒で実

力は十分なのだが、国の国家代表が去年代替わりしたばかりなので国家代表よりはプロジェクト・フロンティアの方が活躍の場があると判断して志願したらしい。特技は狙撃と料理。

「元4組のイタリアのアレシア・ロッタです！よろしくね」

アレシアは簪と同じ4組の生徒で明るい印象の娘だ。戦闘スタイルは二本の短剣による近接格闘。二つ上の姉であるカテリナも代表候補生でその筆頭らしく、姉とは違う道に進みたいと志願したんだとか。特技は大食い。そしてイタリアと言えば現在の世界大会優勝者アリーシャ・ジョセスターフのいる国。しかし、そのアリーシャはテンペスタⅡの機動試験で大怪我を負っており、テンペスタⅡも現在は開発が凍結されているため新型開発が遅れているらしく、プロジェクトを通して技術交流を謀るつもりなのだろう。

「元5組、カロリナ・ゼンナーシユタット・・・よろしく」

最後はカロリナ。彼女は5組から来た生徒で先の二人はそれぞれ前衛・後衛型なのに、対しどちらもこなすバランス型。口数が少なく、また表情の変化も少ないので手を動かしたりして感情表現を行う。代表候補生ではあったが雪兔が作るISやパッケージ類に興味があるらしく、整備・開発方面でも色々学べるかもしれないと志願したとのこと。先日の体育祭ではコスプレリレーで着ぐるみを着ていたらしい。特技はプログラミン

グと機体整備。ちなみに鈴やラウラより身長が低いせいで小・中学生と間違われるのが悩み。

この三名も雪兎がチェックしていた生徒で背後関係は楯無率いる更識によつて調べられており、亡国機業等との関わりが無いと確認されている。

「1年の代表候補生が集結か・・・また賑わしくなるな」

「織斑先生、代表候補生〓問題児とか思つてませんか？」

「国家代表も癖の強いやつが多いからな。代表候補生もあまり変わらんだろう」

「やけに実感籠つてますね？」

「実体験だ」

そんなこんなで新たなクラスでの日々が幕を開ける。

クラス再編から数日後、いつもの特訓に晶、エリカ、アレシア、カロリナの四人も参加するようになっていた。この日は四人に専用機が無いため基礎トレーニングと対人組手がメインだ。

「あなた達、毎回こんな訓練をしていたのね……」

「うん、こんなのやってればあの実力も納得だよ」

「同意……でも、あの二人についていけるアキラも十分可笑しい」

今回は四人が初参加ということでも少し軽めとはいえ、ピンピンしているのは雪兎とラウラ、そして晶の三人だけだった。流石は空手部といったところだろうか？

「そうか？今日はまだ軽い方だと聞いたのだが……」

「あ、アキラさんは既にあちら側ということですね……」

「ラウラと対等にやれる時点で察しとくべきだったわ」

そんな晶に戦慄するセシリアと鈴。

「代表候補生でもキツイ特訓についていけるようになった私って……実家でお菓子作ってた頃に比べて遠いところ来ちゃったなあ」

「私も結構体力ついたし」

「本音は前が動かなすぎだっただけ」

遠い目をする聖といつもの調子な本音と響。参加した当初など本音は直ぐにバテていたものだ。

「うむ、これはうかうかしてられないな」

「だな」

逆に気を引き締めている筈と一夏。この二人も初期からのメンバーとあつて雪兎達程ではないが余裕がある。

「すごいや今日は楯無さんいないんだな」

「うん、お姉ちゃんは今会議があるって言ってたけど……」

どうも楯無は学園の上層部の面々との会議らしく、今日は姿を見ていない。

（そろそろ京都の亡国機業の拠点攻略作戦か……例のアレは一応完成してるがもう少し念を入れた方が良さそうだな）

マドカやアラクネを失い、東を味方に出来なかつた亡国機業がどんな行動に出るか、雪兎にも分からない。また、レインとフォルテの二人も原作とは違い既にあちら側にいることを考えれば更なる戦力の増強をしていると考えるもおかしくはなく、雪兎も以前の福音での一件で不覚をとつたことから今まで以上に対策を練っている。

(多分、ここっからが原作との完全な乖離になる。やらずに後悔するくらいならやつて後悔した方がマシだ。だから、もう出し惜しみはしねえ)

新たな戦いを前に雪兎は決意を新たにしたり翌日。楯無より専用機持ち達が召集される。

十一章「兎と京都と亡国機業」

72話 新たなる専用機と闇夜の星座 兎、戦力増強を謀る

楯無の召集で専用機持ちの生徒と何故か一緒に召集された晶達四人が生徒会室に集められた。いきなりの召集に多くの生徒が戸惑う中（特に専用機持ちではない四人）、楯無から更に驚くべき事柄が告げられた。

「今回皆を召集したのは現在 I S 学園とプロジェクト・フロンティアにとつて障害になつているとある国際テロ組織（国際機業）の日本での重要拠点が京都にあることが協力者（マドカ）のお陰でわかつたの」

マドカ自身はその場所を知らないそうなのだが、どうも表向きには亡国機業と癒着していると思われる女性権利主義者の別荘になつていて簡単にはバレない、と以前にスコールが言っていたんだとか。また、先日の地下レストランでの一戦の最中に雪兎がレインとフォルテの I S に仕込んだ発信器の反応も京都にあつたことから亡国機業の拠点が京都にあるのは確定らしい。

「亡国機業は学園祭の時には一夏君にちよつかいをかけて、更に篠ノ之東博士を引き込もうと色々工作していたらしいわ。博士に関しては博士から連絡を受けた雪兎君とシャルロットちゃんが救援に向かつて無事だったのだけど・・・」

ここで楯無が一度言葉を切る。ここから告げることは千冬達教員と特訓メンバー等の一部の人間にしか伝えられていない情報が含まれているからだ。

「・・・二人が救援に向かった際に専用機の修理の為に一時帰国しているはずの我が校の生徒、ダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアが亡国機業に与したことが発覚したわ」

「[[[[[!?!]]]]」

これには晶達四人も信じられないといった顔をする。当然だ。ダリルことレインは学園では兄貴分の姉御として割と慕われていた生徒だったからだ。

「これは後の調査で判明したことだが、ダリル・ケイシーは当初より米国の第3世代機の奪取を謀るために学園に潜り込んでいた亡国のスパイであったらしい。一方でフォルテ・サファイアはダリル・ケイシーに拐かされたと思われる」

楯無の言葉を補足するように千冬がそう告げると、ようやくそれが真実だと理解する。

「そう、あの二人が・・・」

今回召集された生徒の中にはセシリアと同じイギリスの代表候補生で、セシリアに I S の基礎を教えたサラ・ウエルキンの姿もあった。原作ではこの場にはいないはずの彼女が何故ここにいるかと言うと、以前にマドカに関する裏取引で返却されたサイレント・ゼフィルスにブルー・ティアーズ・エンジェルフェザーの強化型ハイパーセンサーの技術を流用したことでサラでもサイレント・ゼフィルスを扱えるようになり、そのテストとして現在は彼女の専用機になっているのだ。

「色々あつて延期になつていた二年生の修学旅行の行き先が京都に決定した。だが、奴等のお膝元にはいはいと生徒達を連れていく訳にはいかん」
「そこで今度は私達から打つて出る、ということになつたの」

「織斑先生」

楯無と千冬がそう説明すると、エリカが手を挙げる。

「ピーリか、どうした？」

「僭越ながら、この件は既に学生の領分ではないのではありませんか？ 国際 I S 委員会に報告した方が……」

「残念ながらそれは出来ん」

「実はさつき言った癒着してる女性権利主義者つてのがどうもその委員会の上層部の人間らしくてね。まず間違いない揉み消されるわ」

「なっ!？」

そう、亡国機業のようなテロリストが何故世界でも有数の警備態勢を持つ日本に軽々しく出入りが出来るのかといえ、その程度の事など容易く揉み消せる人物が背後にいるからに他ならない。

「だが、こちらには奴等が目の敵にしている標的が何人もいる。修学旅行の下見とでも言つて彷徨いていけばあちらから手を出してくるだろうよ」

「つまり俺達は釣り餌つてわけね。三年前の借りも返さなきやな」

「ふっ、私も大人しく食われてやる気は無いがな」

「その意気だ、一夏、マドカ」

元々亡国機業に一度誘拐され今も狙われている一夏に組織を抜けたマドカ、そして今まで散々妨害しまくつてきた雪兎。これを亡国機業が見逃すとは到底思えない。

「他に質問はあるか？」

「はい」

エリカに続いて手を挙げたのはカロリナだった。

「ゼンナーシユタツトか、言つてみる」

「はい。作戦の概要は理解した。でも、私達四人が呼ばれた理由がわからない」

カロリナが言いたいのは自分達四人は何故専用機を持っていないのにこの作戦に組

み込まれたのか？ということだ。専用機と違い学園の訓練機は簡単に外に持ち出せるものではない。ましてや表向きには修学旅行の下見となっているため訓練機など持ち出せる訳が無いのだ。

「そいつに関しては俺から説明するよ」

その疑問に答えたのは雪兎だった。この段階で察しのいい人は気付いていた。この後雪兎が何を言い出すかを。

「元々プロジェクト所属になる生徒にはデユノア社のリヴァイヴⅡをはじめとした量産試作機を専用機として与えてのテストをしてもらうこととなってるんだが、カロリナ達四人の推薦組には雪華のバックを元にした俺が設計した新型のテストパイロットをしてもらう」

「そ、それって……」

「聖や本音の【ウェーブライダー】や【ナインテイル】と同じプロジェクト・フロンティア製のISだな。元々四人を推薦したのはこれが目的だったわけだしな」

雪兎の言うように聖の【ウェーブライダー】や本音の【ナインテイル】はプロジェクト・フロンティア発足に伴いプロジェクト・フロンティア製のISとして登録された。他のフロンティア製扱いされているISは雪兎の【雪華】、一夏の【白式】、箒の【紅椿】、箒の【打鉄・式式】、千冬の【打鉄・参式】、雪菜の【シルフィオーネ】が該当する。

「四機とも既に完成してる。この後渡すから作戦までに扱いを覚えてくれ」

「作戦は二週間後だ。天野、それまでに四人を使えるようにしておけ、アリーナはその間貸し切りにしておく」

「助かります・・・四人共、今日から二週間は他のメンバー総出でしごくから覚悟しておくように」

この時、晶達四人はプロジェクトに志願したことを後悔しそうになるが、その後の特訓でそんなことを考える余裕を失うことになるのであった。

雪兔主導の強化特訓が始まって既に一週間。その日も晶達四人はそれぞれ専用機を纏いアリーナの地面に倒れ伏していた。

「……実力差はタッグトーナメントの時に分かっていたつもりだったが、私達四人がかりでも勝てないとは」

「こちらはまだ慣れていない機体であちらは私達の専用機の設計者。情報的優位もあちらですが、ここまでとは……」

「アドヴァンスド怖いアドヴァンスド怖いアドヴァンスド怖い……」

「広域殲滅型とか、本気過ぎる……」

約一名トラウマになりかけているその惨状を生み出したのはアリーナの上空に佇む一機のＩＳだった。そのＩＳは黒と紫の追加装甲と背面の三対の紫の翼、そしてその周囲に鋭い羽根状のビットを展開しており、腕を組んで四人を見下ろしている。

「休んでないでさっさと上がってこい！来ないならとこちらからいくぞ」

その正体はアドヴァンスドシリーズの「ＬＦ：ルシユフェリオン」と同じダークマテリアルズにカテゴリーされている「ＹＫ：エルシニアクロイツ」を纏った雪華であった。そう、晶達四人を短期間で鍛える為に雪兔が行ったのはアドヴァンスドシリーズを用いて徹底的に強敵との戦い方を身体に覚えさせる、というものだった。

「まるで魔王だな……」

「うん、ゲームとかのラスボスの風格だよな、あれ」

そんな光景を見ていた一夏と簪の眩きに他のメンバーも頷き同意する。元となったキャラも王様と呼ばれていたので違和感はなく、目の前の蹂躞劇もストーリー中盤辺りでラスボスが顔見せで現れて行われる負け戦イベントの如くだ。だが、元ネタの世界ではもつと恐ろしいピンク色の砲撃を放つ白い魔王様がいることを一夏達は知らない。

「なんかキャノンボールの時のこと思い出すわね・・・」

「ええ、アドヴァンスドシリーズによる蹂躞。あのレースと同じ状況ですものね」

「でも、加減はしてるとはいえ使い始めて一週間の専用機であれだけ食らいついてるのは凄い。私達も負けてられない」

あの時は本音も雪兎側だったので2対8だったし、キャノンボールということでもそれなりに本気だった。何れにせよ、アドヴァンスドシリーズとの模擬戦は彼女達の良い経験値になるだろう。

突然だが、ここで晶達四人に与えられた専用機について説明しよう。まず最初に晶の専用機だが名は【白牙】。白虎を模したISで腕にあるナックルガードによる打撃、収納式の高周波爪による斬撃、掌の砲口から放たれる龍咆を参考にした圧縮空気砲、人でいう脛の部分のブレードを用いた蹴り等を主体とする近接格闘型。また、背面に二基の大型可動式スラスタと尻尾型の多層スラスタを持ち、複雑な高速移動を可能にしてい

る。

「いけつ！虎咆穿！」

零距离で放つ圧縮空気砲である「虎咆穿」は戦車くらいであれば軽く吹き飛ばしてその装甲を丸めた紙屑のようにしてしまふ程だ。しかし、捉えたとか思えば既に雪兎は離脱しており、代わりに紫色の光球が晶の前にあつた。

「しまつー」

次の瞬間、その光球が弾け晶は紫の爆発に吞まれてしまふ。

「狙いは良かったんだがなあ……つとー」

「ちつ、外した」

次に雪兎を襲つたのはエリカの狙撃だつた。エリカに与えられた専用機は「G：ガンナー」と「J：イエーガー」の間とも言える射撃型で名は「ガト・グリス^灰」。機動力を損なわない大きさのクローアンカー内蔵シールドと銃身が折り畳み式になってスナイパーライフルとアサルトライフルを切り換えて使用出来るマルチレンジライフルを主に各ハードポイントにスラストター付きミサイルポットや索敵用のレドームを装備している。また、マドカの「フツケバイン」のヴァイス&シュヴァルツを元に作成した短双剣タイプのソードライフルとも言えるガンブレードや超遠距離狙撃用電磁投射式オーバーレンジライフル「アルテミス」等を装備する。

「こちらは狙いが正確過ぎて読み易いな」

エリカの狙撃を難なく回避した雪兎に今度は隙を見て距離を詰めたアレシアが籠手から伸びた双剣で背後から襲いかかるが、それすら読んでいた雪兎は振り向き様に持っていたビームカノン「アロンダイト」でアレシアの横腹を打ち付け弾き飛ばすと追撃に「アロンダイト」の砲撃を放つ。

「げほっ……銃器を鈍器扱いしてぶん回してくるとかありなの!？」

アレシアの専用機「ロツソ・アクイラ」も晶と同じく近接型だが、こちらは剣を用いた斬撃が主で、先程も使った籠手に内蔵されたアームブレードや楯無も使っている蛇腹剣、リヴァイヴⅡにも装備されているソードライフル「グリフォン」の派生系で銃身の下に弧を描くように刃が付けられた双銃剣「アクイラ」、投擲用遠隔操作武器のヒートチャクラム、鋭い刃のような翼状のシールドとスラストターの役割も持つ「カツポット・デイ・アアラ（イタリア語で翼の上着）」など近・中距離系の武装中心。こちらは「J: イエーガー」と「B: ブレイド」のデータを元になっている。

「また『あの砲撃』がくる前に勝負を決めないと……」

カロリナが警戒しているのは先程四人を地に伏さした「YK: エルシニアクロイツ」の最大威力重圧砲撃「ジャガー・ノート」。これは先程の「アロンダイト」を中心に四基のシールドカノンビット「ランスロット」から放たれる重力波砲撃で並みの戦車であれば

一瞬で鉄屑へと変えてしまふ威力があるんだとか。

「いくよ、【リリコンバージュ】」

カロリナの専用機の名は【リリコンバージュ】。リリコンバージュとはスウェーデンの国花であるドイツ鈴蘭のことで、花言葉は純潔、純愛、幸福の訪れを意味し、花と実にはコンバラトキシンという毒を持つ。そんな名を持つこのISの特徴は背面にあるサブアームで大型の複合武装シールド【ストール・ブレード^大・ブレード^小】で、背面では大型スラスタ、シールドとしては表面にバリアフィールドを展開可能で、そのバリアフィールドを利用したバリアフィールドタックルやブレード状にバリアを展開したバリアブレードとしても利用できる。その他の武装としては左腕と一体化している複合武装【グスタフ】を持つ。その構成はシールド、サブマシンガン、レーザーブレード、杭を射出することもできる小型パイルバンカーの四つ。他にもアサルトライフルと槍を組み合わせたショットランスを装備しており遠近のバランスの良い機体。【S：ストライカー】と【F：フォートレス】のデータの流用機。

「バリア展開、コードACCS」

「紫天の力の一端を放て、コキユートス」

バリアを円錐状に展開し突撃を仕掛けるカロリナに雪兎はビットを前面に展開させて淡紫色のブリザードを放ちバリアごと凍らせて押し返す。

「重力波砲といい、その吹雪といい、そのアドヴァンストは無茶苦茶過ぎるわよ！」
「これでも加減してるんだがなあ……ルシフェリオン、バルニフィカスと合体してト
リニティモードになったり、スピリットフレアと合体してヴェスパークモードにな
らんだけまだマシだぞ？」

「ちよつと待つて!?!今サラツととんでもない発言しなかつた!?!」

そんなこんなでその日の模擬戦も四人の大敗に終わり、その後は一夏達も順番にアド
ヴァンストシリーズに挑んだりしながら京都での作戦に備えるのであった。

一方、京都の拠点へと戻っていたスコール達の元にも援軍が到着していた。

「久しぶりね、スコール」

「増援が来るとは聞いていたけど．．．サダル、貴女達とはね」

やって来たのはスコールらモノクローム・アバターとは別の部隊【ソディアック・ノワール闇夜の星座】に所属する者達だった。彼女らのコードネームは黄道十二星座やその星座を構成する星々に由来する。

「にしてもザマアないね、スコール。たかがガキ一人に好き放題にされるなんて」

「アンタレス、貴様!!」

スコールを馬鹿するアンタレスという女にオータムが掴みかかるも、アンタレスはひよいとそれを避ける。

「やだなあ、アタシはホントのこと言っただけじゃない。そういやアンタも一度捕まっただんでしょ?」

今度は自身を小馬鹿にするアンタレスにオータムがぶちギレかけるが。

「やめなさい、オータム」

「アンタレスもその辺にしておきなさい」

それぞれスコールとサダルにより止められる。

「ちっ!」

「はーい」

舌打ちするオータムと全然反省の色が見えないアンタレス。この二人の相性は水と油らしい。

「……それで他には誰が来たのかしら？」

「レグルス獅子とストレア天秤、カスト双子とポルクスの四人ね」

「随分と大盤振る舞いじゃない」

「それだけ件の天野雪兔ラレット・テイザスターと篠ノ之束博士天災の師弟を警戒しているということよ」

「楽しみだなあ、強いんでしょ？彼」

「……戦闘狂めが」

雪兔の話になるとアンタレスは羊馳走を前にした狼のように舌舐めずりをするのだった。

73話 京都と風の戦乙女 兎、二代目と邂逅する

作戦が伝えられて二週間が経ち、雪兎達は新幹線で京都へと向かうことに。途中、ウラが駅の売店でひよこ饅頭に心奪われ駅弁を買いそびれたり、日本の駅弁に海外組が唾然としていたり、いつもの四人が一夏の隣の席をジャンケンで争っていたり、いつものように雪兎とシヤルロットがイチヤイチャしていたり、束が千冬に絡んで拳骨食らったり、と割といつも通りのまま京都に到着した。

「久しぶりの京都だな」

「そういえば雪兎達は来たことあったんだったね」

「小中と修学旅行が京都だったんだ。他所の中学校は東京にも行くんだが」

東京の学校の場合、わざわざ東京に行く必要性がなく再び京都になるパターンが多いんだとか。

「だから鈴は不機嫌なんだ」

今回で三度目な上に来年も京都だと聞いてウンザリしているのだ。セシリアも「京都？ ロンドンより美しい古都は無いですわ！」などと言っていたが、雪兎に「ロンドンが素晴らしいのは分かるが、何を美しいと感じるかは人それぞれ感性の差がある。それに

セシリアにその気は無いんだろうが、俺達からしたら自分の国の古都を馬鹿にされたと捉えてもおかしくないんだぞ？セシリアに分かり易く言うなら「ロンドンなんか大したことない」と言われるようなもんだ。入学当初も似たような問答をしたよな？その辺を考えて発言しろ。そもそも京都が選ばれたのも国外を選ぶとその国を鼻負したように思われかねんからと日本の文化を知ってもらおうという狙いがあつてだな・・・」と雪兎のOHNASHIが始まってしまった。しかも、苦手な正座付きである。少しでも崩そうものなら怒声が飛ぶ中でのお説教は相当堪えたらしい。鈴もそれを見ていたため、文句はあれどそれを口にする愚行はしなかった。

「今日の予定は表向きは全体行動で明日からは数人のグループに分けての班行動か・・・」

全体行動でまずは自分達が京都に来たことをあちらに認知させ、班行動で少人数にして襲撃を誘発する作戦だ。無論、千冬達教師陣が直ぐに駆けつけれるよう待機しているし、この二週間の特訓で力をつけた一夏達があつさりやられもしないだろう。それでも保険は多いに越したことはない。

「一夏、コイツをやる」

雪兎が一夏に渡したのは剣を抱く鳳の意匠が施されたペンダントだった。

「はいはっ」

「御守りみたいなもんだ。一応、肌身離さず持つとけ」

「ふーん……お前がそう言うなら着けとくか」

ペンダントを受け取った一夏は首を傾げつつも素直にそれを身につける。

「そーいや雪兎は班行動は誰と組むつもりなんだ？」

「とりあえずシャルと簪に本音、あとアレシアとカロリナと回る予定だ」

ちなみに一夏は箒、セシリア、鈴、ラウラの四人と一緒にらしい。

「簪と本音はわかるが、アレシアとカロリナも一緒なのか」

「カロリナは本音とも仲いいからな。アレシアはちよつと別件絡みだ」

「別件？」

「楯無さんがもう一人協力者がいるって言ってたろ？そのお迎えでな」

「それがアレシアの知り合いなのか？あれ？アレシアの知り合いだからイタリア人だよな？ってことは……」

珍しく一夏が何かに気付いたようだ。そう、アレシアが同行するのはアレシアが彼女の知り合いだからだ。

「一夏、多分その予想通りの人だ」

千冬がある条件で呼び寄せたその人物。イタリア人で亡国機業を相手にするにあたって呼び寄せたともなれば必然的に候補は絞られる。その人物を迎えに行く役割を

雪兎は命じられていた。千冬曰く「あいつのことだ、放っておくと一人で勝手に始めかねん」とのこと。本当に国家代表や代表候補生にまともな人は少ないらしい。米国のナターシャ？あの人は数少ない例外だろう。ちなみに雪兎自身は自分をまともな人物とは認識しておらず、また束からは自身と同類の人間だと評されている。

視察初日は特に問題もなく終了し、二日目の班行動になると雪兎達は待ち合わせの人物がいるホテルの前にやって来た。

「よく来たネ」

そこで雪兎達を待っていたのはイタリアの国家代表のアリーシャ・ジョセスターフ。世間一般では二代目ブリュンヒルデと呼ばれる人物だった。

「に、二代目ブリュンヒルデ!?!」

「その呼び方は好きじゃないネえ。まだアイツとの決着は着いてないサ」

アリーシャは今も千冬との決着を望んでおり、今回の件は千冬との決着の場と対等に戦える環境を与える。それが彼女が望んだ条件だった。

「久しぶり、アーリィ姉」

「久しぶりサ、シア」

「随分と親しそうだな、アレシア」

「はい！お姉ちゃんと一緒によく遊んでもらったの」

どうもアリーシャとアレシア達は昔からの付き合いがあり、アレシア達にI Sの操縦を教えたのもアリーシャなのだとか。

「どうりで・・・あの近接格闘はアリーシャさん仕込みという訳か」

「キミが天野雪兎ネ。チフユやユキナから話は聞いてるサ」

「俺もその呼び方は好きじゃないんだがね・・・それはそうと今回はよろしくお願いします」

「そういう契約サ。こちらこそよろしくなのサ」

雪兎とアリーシャが握手を交わしたその時、突如雪兎の端末から緊急連絡時の呼び出し音（某潜入ゲートの発見音）が鳴り響く。

『天野、奴らが織斑のところに見れた！』

「ちっ、食い付くの早すぎだろ」

こうして京都での騒乱の幕が開く。

74話 復讐の蜘蛛と狂える獅子 兎、襲撃される

一夏side

視察二日目の朝。別のホテルに宿泊しているという件の協力者を迎えに行った雪兎達や別行動の楯無先輩達と別れた俺達は囷役として箒達と京都を散策することに。

「さてと、そろそろ俺達も行くか」

今回は亡国機業に対する囷役ということもあつて箒達がいつものように言い争つたりすることはなかった。というか前日に雪兎からその辺りを徹底的に言い含められている。仮にもそんなことをすれば後日雪兎のOHNASHIが待っているとかわかってるので箒達も自重している。その代わり、京都でデートするならば定番というコースを教えて貰つており、俺達はそのデートコースを回るようになっていた。まずは皆で人気の老舗和菓子屋で各々好きな和菓子を食べ・・・

「これは旨いな」

「思っていたより上品な甘さなのですわね」

「ティナ達にもお土産で買つていこうかしら？」

「私も隊に買つていこう」

着物の体験を試みたり・・・

「うむ、やはり着物は良いものだ」

「あつ!? 鈴さん! 帯を引つ張らないでくださいまし!」

「良いではないか! 良いではないか!」

「ほう、それが有名な・・・」

「いや、普通に体験してくれ・・・」

そんなこんなを終え、次の場所へと向かっている時だった。

「一夏!」

突然ラウラが俺を突飛ばし、I Sを部分展開させてA I Sを発動させ俺を狙っていたと思われる弾丸を受け止めた。

「狙撃!? 一体何処から!」

俺を囲うように箒達が隊列を組むと犯人はあっさりと姿を現した。

「久しぶりだな、織斑一夏」

「お、お前は、オータム!」

それは以前に学園祭で俺を襲ってきた亡国機業の構成員の一人オータムだった。

「あ、あんた生きてたのね!」

そう、オータムは学園祭の時にシャルロットに惨敗し捕らえられたものの、護送車が

爆破され行方不明になっていたはずなのだ。

「あのくらいでこのオータム様がくたばるかよ！ん？あの糞兎とフランスのガキは一緒にじゃないんだな」

どうも前回字 闘 察の時のことを未だに根に持っているようで、雪兎とシャルロットがいないのを見るとオータムの表情は誰から見ても悪人面な笑みを浮かべている。

「おいおい、私のことを忘れていないか、オータム？」

そこにもう一人、オータムの背後から別の女性が姿を現す。その姿を見て再び俺達は驚愕する。

「あ、貴女は……」

「し、シルヴィア・メルクーリ!？」

「ギリシャの国家代表が何故亡国機業と一緒に!？」

その人物はシルヴィア・メルクーリ。ギリシャの国家代表だった人物で千冬姉や二代目ブリュンヒルデと呼ばれるアリーシャ・ジヨセスターフに並ぶとすら言われた現世界二位の実力者だった。そして……

「そんなの決まっているだろう？織斑一夏、お前の姉織斑千冬と再戦する為さ！そして、亡国機業ソディアック・ワイル【闇夜の星座】のレグルス。今はそう名乗らせてもらっているよ」

彼女こそ雪兎が警戒していた亡国機業から派遣された新たな戦力【闇夜の星座】の一

人、獅子座のレグルスだったのだ。

「世界第二位が亡国機業に加担してるなんて……」

「つう訳で、私らにとつちやお前らは前座なんだよ。だからさっさとくたばりな！」

そう言つてオータムは以前押収したアラクネに酷似したISを展開した。

「そのISは……アラクネ？ いや、細部が異なる」

「コイツの名前はアラクネⅡ『アトラク・ナクア』さ！ 前のアラクネと一緒にだと思つてると痛い目みるぜ！」

「私達も行くこうか、ハオス・リヨダリ『混沌の獅子』」

続けてレグルスも大剣を持つ黒い獅子を模したISを展開する。

「やるしかないか。いくぞ、皆！ こい、白式！」

「ああ！ 紅椿！」

「私達の力を見せる時ですわ！ ブルー・ティアーズ！」

「来なさい、甲龍！」

「ゆくぞ、シユヴァルティア・レーゲン！」

俺達もISを展開し迎撃態勢を取り、戦いの幕が切つて落とされる。

「さあ、愉しいお遊戯を始めようか！」

side out

一夏達がオータムとレグルスの両名と交戦を始めた頃、雪兎達の前にも亡国機業の刺客が立ち塞がっていた。

「へえ、兎さんだけかと思つたらもう一人面白い人がいるじゃんか」

「当たり前？ 私達当たりだった？」

一人は血のような真紅の髪を伸ばし放題にしている軽装の女性。その背後には髪色が白と黒、髪型が左と右のサイドテール以外が瓜二つのゴスロリを着た双子の少女。一見観光客にも見えなくもない三人ではあるが、雪兎とアリーシャは彼女らが敵であることを一目で見抜いた。何故なら、彼女らから漂う血の気配と赤毛の女性の眼が獲物を前

にした獣のソレであつたからだ。

「お前ら、亡国機業か」

「うん、そうだよ。私は亡国機業【闇夜の星座】蠍座のアンタレス。そつちの双子は黒いのがカスト、白いのがポルクスだよ」

雪兎の問いに赤毛の女性・アンタレスはあつさり自分達の正体を明かす。

「カストにポルクス・・・カストールとポルクス、あんたが蠍座ということはそつちは双子座。なるほど闇夜の星座の星座つてのは黄道十二星座か」

「へえ、よくわかつたね」

「こんなもん今時の中学生でも思い至ると思うぜ？んで、その闇夜の星座とやらが俺達に何の用だ？こつちは急いでるんだが」

「とぼけなくてもいいよ？分かつてるんでしょ？私達が来た理由くらい」

そう言うアンタレスは血のように紅い蠍型のISを展開し、双子も白と黒のISを展開する。

「ちつ、狙いは俺達の足止めか」

「覚悟を決めるサ、アレは間違アンタレスいなく戦闘狂サ」

「最悪だな・・・シャル、俺とアリーシャさんでここは抑える。だからシャル達は一夏達の援護に向かつてくれ」

「で、でも……」

「私達三人をたつた二人で？」

「それ、本気？」

雪兎がシャルロット達だけでも一夏達の元へ向かわせようとするが、アンタレスと双子にそんなことをさせるつもりはない。だが、雪兎には勝算があった。

「二人？コッチは四人サ」

すると、いつの間にかやらISを展開していたアリーシャがテンペスタの単一仕様能力を発動させ二人の分身を出現させていた。

「と、いう訳だ。それとアンタレスとかいったな？シャル達を見逃してくれんだったら俺も奥の手使ってやるよ」

雪兎がそう言うのとアンタレスの表情が一変し獰猛な笑みを浮かべる。

「いいよ、君のその提案受けたい」

「雪兎!？」

雪兎の思わぬ提案とそれを即答するアンタレスにシャルロットは不安そうな表情をするが、雪兎は安心させるようにシャルロットの頭を撫でながら微笑む。

「安心しろ、シャル。俺がそう簡単に負けつかよ。すいません、アリーシャさん。アリーシャさんにはそつちの双子をお願いします」

「了解サ」

「シャル、一夏達を頼む」

「・・・帰つたら1日付き合ってもらうからね」

「御安い御用だ。簪達も頼む」

甘い空気になりかけたところで雪兎は他のメンバーにも一夏達のことを託す。

「雪兎、無理はしないでね」

「雪兎さんもアーリイ姉も無茶しないでね」

「かしこまり！」

「うん」

そして、シャルロット達が一夏達の元へと向かうと雪兎はアンタレス達に向き直る。

「待たせたな」

「それじゃあ、始めよつか！」

アンタレスはもう待ちきれないとばかりにチェーンソーのような武器を構え臨戦態勢を取る。

「さあ、見せてよ・・・私とこのブラッディ・スコビーオン血染めの蠍に！」

「見せてやるよ・・・俺の正真正銘の奥の手つてやつをな！」

75話 動き出す姉達と楯の意地 兎、戦闘狂と戯れる

雪兎と一夏達が襲撃を受けている頃、楯無率いるもう一つの班も襲撃を受けていた。その襲撃者は楯無達もよく知る彼女達だった。

「そちらについたとは聞いていたけど、こんなに早く再会出来るとは思わなかったわ。イージスのお二人さん」

「うげっス」

「お前は、サラ・ウエルキン……」

「私もいるわよ」

「生徒会長まで」

そう、亡国機業へと与したイージスの二人だ。

「ところで……お二人だけですか？こちらは会長やサラ先輩含めて一番人数がいるのですけど」

そんな中、聖が一人疑問に思っていたことを口にする。無理も無い。レインとフォルテはたった二人でこの場にいる。対して楯無班は楯無、サラ、忍、聖、晶、エリカの六名。いくらイージスと云えどこの人数差を何とか出来るとは考え難い。

「オメエはあのクソ兎のこの……その疑問は最もだ。だが、それくらいちゃんと準備してんだよ！」

レインは聖を見て雪兎のことを思い出し苦虫を潰したような顔をするも、すぐに余裕の表情を見せ指を鳴らす。すると、物陰からモーター音を鳴らしながら数十機もの全身装甲の人型が姿を現した。

「あれは……EOS?」

「いえ、アレからは人の気配を感じない……無人機よ」

エリカはその人型をEOSかと思ったが、忍がそれを否定する。そもそもEOSはその重量とパワーアシストの脆弱性、エネルギーの問題から装甲は必要最低限しかないと、目の前のモノのような全身装甲は不可能なのだ。

「その通り！こいつらは初代ブリュンヒルデや過去のモンド・グロツソ出場者の戦闘データをインプットしてある【機械戦乙女】マシナリー・ヴァルキュリアさー！」

そこで亡国機業が開発したのがこの【機械戦乙女】。これは以前ラウラのシユヴァルティア・レーゲンに内蔵されていたヴァルキリー・トレース・システムを元に同じく亡国機業が造ったオリジナルの半分以下の性能しかない模倣ISCコアを用いて量産された東や雪兎からすれば出来損ないと言わねばならないのだが、インプットしてあるデータのせいでEOSとは比べ物にならない戦闘力を獲得した兵器なのだ。それでもその性

能はリヴァイヴ一機に対して十機で互角といったところだ。EOSが千機で一機だったのに比べれば十分に使い物になるのだが……それが数十機、飛行能力は無いとはいえ武装はISのものであるため苦戦は必須だ。

「忍と晶ちゃんとエリカちゃんは無人機の迎撃！私とサラであの二人を相手するわ」
楯無が指示を出すとそれぞれISを展開し迎撃態勢を取る。

「丁度いい、学園最強の名。ついでにただかせてもらおうぜ！」

「ふふっ、やれるもんならやってみなさい！」

「こ、こうなったらもう自棄っス！」

「生まれ変わったこの^{サイレント・ゼファイルス}娘の力、見せてあげる」

そして、各班の様子をモニターしていた千冬達はというと……

「シルヴィアの奴もあちらに与していたか」

「どうするの、ちーちゃん？」

「やられっぱなしが性に合わんのはお前がよく知っているだろう？」

「だよねえ。それじゃあ私達も行こつか」

「天野君にお借りしたこの娘リヴァイヴロも使つてあげませんかね」

千冬と東、それと雪菜、更にいつもは止める側の真耶までもが今回はやる気満々である。そんな四人の前に現れたのは……

「申し訳ないけれど、貴女達の相手は私達よ」

スコールに闇夜の星座のサダルにストレアの三人にイージスの二人が連れていた機械乙女達。

「丁度三対三でいいですわね」

「こちらには機械戦乙女もいます。例え相手がブリュンヒルデだろうとそう簡単には——「それはちよつと違うんだなあ、これが」何っ!？」

サダルとストレアが千冬、雪菜、真耶を見てそう言うが、その声を遮り東がにこやかに前に躍り出る。

「その出来損ないには流石の束さんも激おこプンプンって感じだけど……いつこの

東さんが専用機を持つてないだなんて言ったのかな？ かな？」

「[C:]」

東から告げられる言葉にスコール達は自分達がとんでもない勘違いをしていることに気付く。確かに東はISが不要な程にオーバースペックな存在だが、「専用機を持つてない」とは誰も言っていない。むしろ、何故持つていないなどと勘違いしていたのか。「ISの開発者たるこの東さんが専用機を持つてないはずないじゃない。まあ、その初陣が君達程度になるなんて思ってもいなかっただけ、仕方ないか」

そう言う東はとびきりの笑顔をしつつ弟子との合作であるその愛機を展開する。

「それでは本邦初公開！ おいで、東さんの専用機「ワンダーランド」！」

現れたのは東の普段着である。「一人不思議の国のアリス」に合わせたハートの女王やトランプ兵などのアリスの登場人物を彷彿とさせるデザインのアリス「ワンダーランド」。ファンタジーな見た目ではあるが、スコール達の本能は今までの経験から「アレと戦ってはならない」と警鐘を鳴らす。

「私も前回は消化不良とも言えるレベルだったからな……貴様らは楽しませてくれるんだらうな？」

「私もゆーくんに負けてからまだ一度もまともに動かしてなかつたっけ？」

続けて千冬も打鉄・参式を展開。雪菜もシルフィオーネを呼び出す。

「先輩方、私にも残しておいて下さいね？」

真耶もいつになく黒い笑みを浮かべて雪兎の手の加わったりヴアイヴⅡ改を纏う。

「「さあ、覚悟はいいか（かな・かしら・ですか）？亡国機業」」

そこには本当の絶望が存在した。

「シア達は無事だといいいのですが……」

そしてもう一人、戦場と化した京都の地に助つ人が姿を現す。

「待っていて下さい、シア！お姉ちゃんが今助けに行きますから！」

76話 狂える獅子対白き刃 兎、奥の手発動!

オータムと彼女が引き連れてきた機械戦乙女によつて箒達と引き離された一夏は一人でレグルスの相手をするに。だが、レグルスの計算違いは一夏が想定外にレグルスに食い付いてきたことだった。その原因は一夏が雪兎に懇願して受けてきたある特訓にあつた。とある世界では「東方剣術の極み」とすら言われた「八葉一刀流」。雪兎から教わつたこの剣術が思つた以上に一夏に合つていたのか「紅葉切り」の習得以降も雪兎は幾つかの技を一夏に伝授しており、今や「零落白夜」無しでも他のメンバーと渡り合える実力を身に付けていた。また、剣術に至つては既に箒を凌駕する実力になつており、それに焦つた箒までもが雪兎に教えを乞うてきたぐらいだ。

「これも凌ぐか……アイツ千の弟だからと相手に選んでみれば思わぬ掘り出し物に出会つたものだ」

「ぐっ……これが世界二位の実力か」

レグルスがまだ本気ではないのか、それとも雪兎のアドヴァンスドによるシゴキよりマシだったのか、一夏は何とかレグルスと戦っていた。それでも少しでも気を抜けば殺られるという予感が一夏にはあつた。

「それでも、負ける訳にはいかないんだ!!」

だが、一夏は雪片を手にレグルスに挑み続ける。

「その意気やよし!だが、まだまだ私には届かんよ!」

すると、レグルスは手に持つ大剣を縦に二分割し二振りの剣に変形させ今までの剛剣による一撃ではなく双剣による乱舞に切り替わる。しかし、一夏に動揺した様子はなく、瞬時に左腕の雪羅をソードモードにして乱舞を捌く。

「ほう、これも耐えるか」

「その戦い方はアイツとの模擬戦で散々やってきたんだ!」

「こいつは本当に殺すのが惜しいな!」

更にスピードと威力が増し、一夏は再び劣勢に。そして……

ピシッ

一夏だけでなく、白式も徐々にダメージを負って限界に近付いていく。特にレグルスの攻撃を一身に受け続けてきた雪片式型に至っては既に限界間近といったところだ。

(もう少し、もう少しだけ耐えてくれ雪片……)

一方、オータムと対峙する箒達はというと。

「その程度か……はっ、やっぱあのクソ兎と金髪シャルロットのガキ以外は大したことねえな」
「うぐ……」

以前、シャルロットに完封されたことから多くの機械戦乙女の連れて挑んだが、思いの外箒達は機械戦乙女達とオータムを突破出来ずにいたことに拍子抜けといったところだ。

「くっ、このままでは一夏が……」

「でも、こいつらを抜けないっ!」

一夏のピンチを知りつつも駆けつけることが出来ず、苦しい思いをする箒達。

「これが亡国機業の本気……」

「でも、負けられない!」

「これが・・・最凶の世代」

その頃、スコール達の襲撃を受けた千冬達は・・・

「その程度か、亡国機業」

既に機械戦乙女の姿はなく、スコール、サダル、ストレアの三名は満身創痕だった。

「ホント、この程度なんて拍子抜けだよねえ」

ほとんどの機械戦乙女を重力圧で圧壊させた束。

「ゆーくんが言ってた程強くなかったかな？」

圧倒的なスピードと反射反応装甲というチート装備でサダルを翻弄した雪菜。

「この装備のお蔭ですね。天野君にお礼を言わなくてははいけませんね」

雪兎の調整したりヴァイヴⅡ改でかつての異名通りの蹂躞劇でストレアを制した真

耶。

「またつまらんものを斬ってしまったな」

放たれた炎弾等も全て斬艦刀で斬り伏せてしまった千冬。こいつら、チート過ぎる……

「くっ……しかし、もう私達の目的は果たしましたわ」

「何？」

「織斑一夏の抹殺……きつと今頃レグルスが果たしていますわ」

そう、亡国機業の今回の最大の目的は一夏の抹殺。故に最大戦力であったレグルスを一夏の元へと向かわせ、その障害となり得る千冬達の足止めにスクール達自らが出向いたのだ。

「くっ」

「行かせませんよブリュンヒルデ。それに、機械戦乙女ならまだまだいますよ?」

千冬達が一夏の元へと向かおうとするが、再び無数の機械戦乙女とスクール達が立ち塞がる。

「もう一踏ん張りいきますよ、プラテストゥ・リブラ【抗議する天秤】!」

身に纏っていた重装甲と両肩両腕のガトリングシールドをパージし、腰の折り畳まれていたレーザー重斬刀を構えるストレア。

「ひび割れても溢れる水は尽きませんわ。【イニグソオースタアブル・アクエリアス 尽きぬ水瓶】！」

両肩の水瓶を彷彿とさせるビームカノンをチャージして戦闘続行を示すサダル。

「そう、まだ私達は負けていませんわよ？ブリュンヒルデー！」

両腕に炎を纏わせ起き上がるスコール。

「うーん、まだやる気なの？東さんとしては早く箒ちゃんやいつくんのところに行きたいん

だけど……」

「えっ？この反応は!？」

まだまだやる気の亡国機業の三人に対して東がつまらなそうに呟いた時、戦闘と同時に戦場全域をサーチしていた真耶の表情が曇る。

「どうした？真耶」

「織斑君の反応が……ロストしました」

その真耶の一言で千冬達は絶句した。

「ふふ、勝負に負けて試合に勝った……勝ったわよ、ブリュンヒルデー！」

「これはマズイことになったね……」

一夏の反応のロスト、その言葉を聞き勝ち誇るスコール。そして東が珍しく深刻そうな表情で告げる。

「紅椿が暴走した」

少し時間を遡り、シャルロット達を一夏の元へと向かわせる為にアンタレスの足止めをするべく残った雪兎は藍色の装甲を持つ「B：ブレイド」を展開しアンタレスと対峙していた。

「うん？それ、アドヴァンスドとかいうやつじゃないよね？もしかして私のこと嘗めてる？」

「まあ、落ち着けよ。これで終わりだなんて一言も言っただろ？」

そう言っただけで雪兎が取り出したのは一夏に渡したペンダントによく似た白い飛竜を模したペンダント。

「来いよ【白月】」

その一言に反応してペンダントが光を放つと雪兎の背後に白い飛竜のようなメカが姿を現す。

「無人兵器？ いや、違う……それはまさか!？」

無人機であれば亡国機業にも既に機械戦乙女が存在する。しかし、その飛竜からはI S コアの反応が存在した。更に各所に雪華のようなハードポイントを持つことからアンタレスはその正体を察した。

「本邦初公開だ……その眼をかつぽじってよく見とけよ？ 白月、武装合体」

すると、機械の飛竜は甲高い機械音の咆哮をあげ、幾つかのパーツに分離すると雪華へと組み込まれていく。

「無人コア内蔵自律型追加補助外装【白月】、そして、それと合体し二つのコアを連動させるデュアルコアシステム搭載I S 雪華第三形態【雪月華】。これが俺の切り札だ」
ここに二つのコアを持つ理不尽の塊たる最凶のI S が世界に顕現した。

77話 折れた白刃と乱れる椿 兎、もう1つの切り札を切る

「ほらほら！さっきまでの勢いはどうしたっ！」

雪片式型の限界が近付き消極的になった一夏にレグルスは容赦の無い攻勢をかけていく。

「くっ……」

ピシピシッ

とうとう雪片の刀身に罅が入りはじめる。

（こっとなつたら……一か八か！）

「零落白夜、発動！」

もう時間が無いと一夏は零落白夜を発動させ最後の賭けに出る。

「四の型、【紅葉切り】！」

八葉一刀流四の型【紅葉切り】今まで散々練習を重ねてきた一撃を瞬時加速を併用し目視不可能な速度で放つ。だが、只でさえエネルギー消費の激しい零落白夜に瞬時加速の合わせ技となれば疲弊していた一夏と白式では打って一発が限界の諸刃の剣。一夏

にとって全身全霊とも言うべきその一刀であったが、一太刀入れることは出来てもやはりレグルスを破るには至らなかつた。

「……」

「気迫の乗った良い技だ、本当に殺すのが惜しくなってきたな。だが、これも仕事だ……せめて私の放てる最大の一撃で終わらせよう」

自らが持てる最大の一撃を放ち零落白夜を維持できなくなつた一夏に対し、レグルスは敬意を表し双剣を大剣に戻し上段の構えを取る。

「さうばだ、織斑一夏!!」

その一撃は大剣とは思えない速度で放たれ、一夏は直感で雪片式型でその一撃を防ごうとするも限界に達した雪片式型はあっさりと思つ二つに折られ、その先にいた一夏を袈裟斬りにする。

「がはっ……」

「先程の一撃は絶対防御すら捨てた一撃だったか……本当に殺すには惜しい男だったよ」

白式は零落白夜と瞬時加速で絶対防御を満足に発動させられるエネルギーを残していなかつた。即ち一夏はその斬撃を直接受けてしまい傷口から大量の血を吹き出しながら一夏は京都の街へと落下していく。

「一夏っ!?!」

そして、その光景を見てしまった箒はオータムに致命的な隙を晒してしまふ。

「余所見してんじやねえよ!!」

「がっ!?!」

その絶好の隙を突きオータムは両腕から糸状の物体を放ち箒の紅椿を拘束する。

「箒さん!?!」

「箒!」

拘束された箒をセシリアと鈴が助けようとするが、オータムの指示で機械戦乙女達がその前に立ち塞がり邪魔をする。

「乗ってる機体が第4世代機だろうが、乗ってるのが小娘じゃ宝の持ち腐れってやつだな」

そう言つて紅椿に近付いたオータムは何かの装置を取り出し紅椿にそれを装着する。

「だからそれを上手く使えるようにしてやるよ」

「があああああ!!」

装置のスイッチが入ると、装置から電撃が迸り紅椿からISコアが露出する。そう、この装置は剥離剤リムバと呼ばれるISコアをISから強制的に抜き出す装置の改修型。以前の剥離剤はコアを抜き出すだけで一度使えばISに耐性が出来てしまふという欠陥

品だったのだが、この新型剥離剤はコアを抜き出すことが目的ではない。オータムは抜き出した紅椿のコアを奪わず新型剥離剤のもう一つの機能を起動させる。

「その紅椿ってI Sはあの天災の特注品とあつて何重にもプロテクトが掛かつてそう簡単にはウイルスを振じ込めない……だが、露出したコアに直接ウイルスを注入すればどうかねえ？」

この新型剥離剤の真価はI Sコアに直接ウイルスプログラムを撃ち込むというもの。ウイルスを撃ち込まれたコアはその輝きを濁らせ黒く染まっていく。そして、剥離剤の効果が切れコアが紅椿へと戻ると美しかった真紅の装甲が徐々に赤黒く変色していく。

「き、貴様……紅椿に、何を……した？」

「ん？ちよつとしたプレゼントさ」

「プレゼントだと？」

「そうお前らもよく知ってる福音に使われたウイルスを弄つて作った特製のな！」

「「「?」」」

オータムの言葉に箒達の顔が険しいものに変わる。何故なら福音はかつて臨海学校の際に交戦した暴走I Sで、事件後に雪兔に聞いた話によれば「目にしたものを敵と認識させる」という凶悪極まりないウイルスが原因だったと言う。亡国機業はどのような経緯かは不明だが、そのウイルスプログラムを入手していたのだ。そして、今回そ

のウィルスを撃ち込まれたのは現行のISを一蹴する性能を持つ第4世代機である紅椿。はつきり言って嫌な予感しかしない。

「や、やめろ、紅椿……私は、があああああ!!」

完全に装甲が血のような赤黒い色へと変色すると紅椿は箒の意識を奪い、オータムの施した拘束を引きちぎる。

「う、嘘でしょ!」

「二夏は生死不明、紅椿は暴走でこちらの戦力が二つ減り、あちらは変わらず、いや暴走した紅椿も敵に回すとなると状況は絶望的だな……」

亡国側は依然オータムとレグルスに無数の機械戦乙女が健在。紅椿もウィルスプログラムで敵なったことから流石のラウラも今回は弱気になってしまっていた。

「しかし、やるしかありませんわ」

それでもセシリア、鈴、ラウラの眼はまだ戦意を失ってはいなかった。

第三形態となつた雪華【雪月華】その最大の特徴は雪華とは別に【白月】にも別のパツクを装備可能ということだ。つまり、二種のパツクを同時運用可能というキチガイ装備だった。現在雪兔が装備しているのは【B：ブレイド】とアドヴァンスドシリーズの一つで高機動近接戦仕様。パツク【VF：バルニフィカス】の組み合わせの超近接戦仕様である。一方のアンタレスの【血染めの蠍】ブラッディ・スコレピオンも銃と巨大なチェインソーを組み合わせたような武装や背面の蠍の尾を模したサブアームを使う近接戦仕様。その戦いは当然激しい近接戦となつた。

「果てろ、【バルムンク】！」

「やっちやえ、【テストアロツサ】！」

大剣とチェインソーがぶつかり合い火花を散らす。何度目かわからないその激突の後にアンタレスが突然距離を取つた。

「……あらら。君のお友達、死んじやつたみたいだよ？」

それはどうやらレグルスからの通信だったようで、アンタレスは少し残念そうにそう

告げた。おそらく彼女も一夏と直接戦ってみたかったようだ。しかし、雪兎の顔に動揺した様子はなく、むしろ笑いを堪えているようにすら見えた。

「意外だね、もつとこう怒り狂うかと思っただのに……」

「く、ククク……アハハハハハ！」

そのアンタレスの一言で我慢の限界に達したのか雪兎は大声で笑声を上げた。

「ハハハハハ！」

同じ頃、東も雪兎同様に大声で笑声を上げていた。理由はスコールが東が気にしたのが紅椿の暴走だけだったので「心配なのは妹だけなのか？」と訊ねたからだ。

「一夏(いっくん)が死んだ? あんたら(君達)それをちゃんと確かめたのか(かい)?」
その問いに対して雪兎と束は言い方は少し異なるも全く同じ言葉を口にした。そして、兎達は全て戦場と通信を繋げ全てを明かす。

「そもそも、何でこの作戦で一夏の護衛が箒達だけだったと思ってるんだ?」

「そんなの君達がいっくんを狙い易くする為に決まってるじゃないか!」

「そんでもって、そんな狙われる一夏に俺達が何の手も施してない? どんだけおめでたいんだ、お前ら」

「だ、だが、レグルスは確実に致命傷を与えたよ!」

兎達の種明かしにスコールが反論するも、追い討ちをかけるかの如く束がとある真実を口にする。

「あく、君達は知らなかったんだっけ? いっくんの白式に使われてるコアは白騎士に使われていたものなんだよ? つまり……」

「白騎士のナノマシンによる自己治癒能力がある。そいつの効果を増幅する機能を持たせたあるものを一夏には持たせてたのさ」

これが発覚したのは福音事件の時、当然この情報も秘匿レベルの高い情報としてIS学園でも一握りの人間にしか伝えられていないのでスコール達が知らないのも無理は無い。

「だ、だが、お前達の仲間が織斑一夏の反応がロストしたとー！」

これは真耶が口にしたもの。実際に今も一夏と白式の反応はロストしたままだ。

「そんなの君達をぬか喜びさせる為にその機能が起動したら一時的に反応がロストするようにしてたに決まってるじゃない」

つまり、ここまで起きた全ては兎達の手の平の上だった。そう彼らは言っていた。

「な、ならば、もう一度探し出して織斑一夏を殺し直せば！」

「それも対策済みだ。言つたら？自己治癒能力を増幅させる機能を持たせたあるものを持たせた」と

「ま、まさか!？」

雪兎のその一言でそれに気が付いたのは亡国側ではたつた今それを体感していたアンタレスだけだった。

「そのまさかさ！誰が切り札ジョーカーが一枚だけだなんて言つた？」

すると、一夏が落下したと思われる場所から白い光が迸った。

78話 舞い戻る白刃ともう一人の助っ人 兎、チエツクメイトする

再び時間は一夏がレグルスに斬られた直後まで遡る。

一夏 side

雪片が砕け明らかに致命傷の傷を負って落下する中、俺は不思議と不安を抱いていなかった。普通ならこうなったことへの後悔や走馬灯を見るものなのだろうが、俺が思い出したのは今朝の幼馴染雪兎との会話だった。

『一夏、コイツをやる』

雪兎がそう言つて俺に渡したのは剣を抱く鳳の意匠が施されたペンダントだった。

『これは？』

『御守りみたいなもんだ。一応、肌身離さず持つとけ』

『ふーん……お前がそう言うなら着けとくか』

御守りだなんてあいづらしくないことを言いながら渡してきたペンダント。ならばきつと何らかの意味がある物だと思い、俺はそのペンダントを身に付けた。そして、落下しつつある俺の視界にそのペンダントが映る。そこで俺は朧気ながら違和感を抱い

た。

（あれ？ I Sを展開すると身に付けてたものは全て拡張領域に収納されるはずじゃ……）

そう、I Sの展開中にそのペンダントがあるはずがないのだ。それによく見ればペンダントは淡く白い光を発しており、白式もそれに呼応するかのように白い光を纏っていた。

（それにこの感覚……前にも……）

すると、突如俺の視界が切り替わる。そこは以前にも福音との戦闘で意識を失った時に訪れた謎の空間。

「……は……」

『来ましたね、マスター』

そこには以前にも見た白いワンピースの少女と白い装甲を持つ白騎士に酷似したI Sを纏う女性、そして、初見の麦わら帽子を被った少女がいた。

「君達は一体……」

『わかりません？』

そう呟いたのは白いワンピースの少女だ。その少女の言う通り、俺にはなんとなくだ。その少女が誰なのか分かる気がした。

「もしかして……白式、なのか？」

『はい♪』

俺がそう答えると少女・白式は嬉しそうに微笑む。彼女が白式なのだとしたらその隣にいる白いISの女性の正体も雪兎や束さんから聞いた話から想像がつく。

「つてことは貴女は白騎士、なんですね？」

白騎士は静かに頷くことで俺の言葉を肯定する。そうなると疑問なのは初見の麦わら帽子の少女だ。この少女に関しては全く心当たりが無い。しかも少女は「私は？私は？」と期待した眼差しでこちらを見てくるので「知らない」とはとても口に出せない。『……マスター、大丈夫です。この娘はマスターが知らないのを知っていてやってますから』

『ブーブー！ばらしちゃつまらないじゃない、白式お姉ちゃん！』

「確信犯か！」

隣で見ていた白騎士もバイザー越しではあるが呆れているような気がする。それとこの少女はどこか親友に似ている気がした。

（ちよつと待て、今この娘は白式のこと「お姉ちゃん」と呼ばなかったか？）

白式の妹もしくは妹分、そしてこの空間は俺と白式が作り出した空間である以上は彼女もISなのだろう。だが、白式を「お姉ちゃん」と呼ぶのであれば彼女は千冬姉の使っ

ていた【暮桜】ではないだろう。だが、俺は白式以外のISは持っていないはず。では彼女は一体……

『とりあえず初めましてお兄ちゃん♪私の名前は【白鳳】だよ』

「ハク、ホウ？」

『そつ、白い鳳つて書いて白鳳。いい名前でしょ？』

鳳と聞いて俺は胸元にある雪兎から貰った白い鳳のペンダントを取り出す。

「もしかして君は……」

『大当たり♪』

この麦わら帽子の少女の正体は雪兎がくれたペンダント【白鳳】だった。

『私はね、雪兎お兄ちゃんからお兄ちゃんを助ける為に作られたんだよ』

「えっ？」

『正確には私がマイスター雪兎に頼んで作成して貰った強化外装……正式名称は自律型追加補助外装【白鳳】です』

詳しく話を聞くと、俺が雪兎から八葉一刀流を習い始めた頃に白式が雪兎に頼んでいたパワーアップアイテムがどういう訳か白鳳になったんだとか。

『まだ色々と話したいことはありますけど、マスターには今しなければならぬことが』
「そうだった！」

そう、俺はレグルスに斬られて落下中だったはず。

『傷は前回同様私達が治しておきました』

「それは助かる！あつ、でも雪片が……」

しかし、俺の唯一の武装（今は雪羅があるので厳密には違うが）であつた雪片を折られてしまったんだつた。

『それも問題ありません！』

すると、白式が雪片式型とは違う刀を俺に差し出す。

「これは……」

『【煌月白牙】、雪片と違いマスターの為だけに作られた刀です』

「【煌月白牙】……俺の刀」

『折れちゃつた雪片も形は変わっちゃつたけど、ほら！』

白鳳も太刀から脇差まで短くなった新しい雪片を俺に手渡す。

『他にも色々強化されていますが、説明は後程』

「ああ、今度は負けない！」

俺がそう言うと、徐々に視界がぼやけていく。おそらく次に目覚めるのはさつきまでの戦場だろう。ぼやけつつある光景の中、白式達が微笑んでいたような気がしたところで俺の意識は現実へと浮上した。

s i d e o u t

白い光が納まった時、そこには見慣れぬ白いISの姿があった。しかし、そのフォルムは白式に酷似している。いや、その表現は正しくない。そのISは白式が白鳳を取り込み発展強化、つまり三次^{サード・シフト}移行した姿、白式第三形態「白鳳」だった。

「い、ちか?」

「おう。悪い、心配かけたな、鈴」

「一夏さん!ご無事でしたのね」

「セシリアも無事でよかった」

「私は心配などしていなかったぞ、一夏。我が嫁であるお前がそう簡単に死ぬなどとは

思っていないかったからな！」

「ラウラ……その割には目が潤んでるぞ」

鈴、セシリア、ラウラの三人のISは既にボロボロだ。無理も無い。短い時間とはいえ彼女達はたった三人でオータムにレグルス、無数の機械戦乙女、そして暴走した紅椿の相手をしていたので。むしろ誰一人欠けていない方が奇跡と言えよう。

「もう大丈夫だ。後は俺に任せろ」

「三次移行したとはいえ大した自信だな、織斑一夏」

そんな一夏の言動が癪に感じたのかオータムが不機嫌さを隠さず一夏を睨む。

「ふふ、惜しいとは思っていたが、まさかあの状態から復活してくるとはな……ますます気に入ったぞ、織斑一夏！」

レグルスに至っては興奮冷めやらぬと言ったところだろうか？

「……」

(箒、今助けてやるからな)

最後に無言で白式を見つめる紅椿に一夏は覚悟を決める。

「やっちまえ！機械戦乙女どもっ！」

先手はオータムの指示を受けた機械戦乙女達。それぞれ銃口を一夏に向け一斉に銃弾の雨を見舞うも全ての銃弾は白式の背面に装備されたクリアブルーのエナジーウイ

ングに阻まれ無力化される。

「なっ!?!」

「ありがとな、白鳳」

『どういたしまして♪さあ、お返しだよ』

そう白鳳が告げると、エナジーウイングの表面から無数のエネルギー弾が放たれ一瞬にして一夏を射つた機械戦乙女達が全滅する。

「はああ!!」

そこへレグルスが大剣で斬りかかるが、一夏は手にした煌月白牙を振るいそれを弾く。

「いくぞ、白式」

『はい、マスター!!』

そして、今度はお返しとばかりに一夏が煌月白牙を振るう。それをレグルスは大剣で防御しようとするが、それは悪手だった。何故なら一夏の煌月白牙はまるで熱したナイフでバターを切るかの如くその大剣を両断したからだ。

「何っ!?!」

「これで終わりだ!」

そのまま一夏は返す太刀に零落白夜を乗せた斬撃をレグルスに浴びせシールドエネ

ルギーを削り切りレグルスを無力化する。

「レグルス!? くそっ! こうなったら残りの機械戦乙女をー」

「させないよ!」

レグルスの敗北に焦ったオータムが残りの機械戦乙女を出し一夏を攻撃させようとするが、それを阻む者がいた。

「シャルロット!」

そう、雪兎と分かれて救援に駆けつけたシャルロット達だ。

「皆は鈴達を守りながら無人機を! この人は僕が相手をするから」

「シャルロット、気を付けて」

簪達に鈴達の護衛を任せ、シャルロットは一人オータムの前に立ち塞がる。

「お前はあの時の……会いたかったぜ!」

「僕はもう会いたくなかったけどね」

シャルロットとオータムが対峙する一方で簪、本音、アレシア、カロリナの四人は鈴達を守りながら機械戦乙女達を相手にする。いくら劣化IS程度の機械戦乙女といえど数が多く簪達が不利かと思われたその時。

「はあっ!」

数機の機械戦乙女が背後から襲撃を受けた。その襲撃者の正体は意外にもアレシア

のよく知る人物だった。

「えっ？お、お姉ちゃん!？」

「Yes! アイアムアお姉ちゃん!!」

その人物の名はカテリナⅡロツタ。アレシアⅡロツタの姉でIS学園の三年生であるイタリアの代表候補生だった。

「な、何でお姉ちゃんが!?!それにお姉ちゃんそのISはー」

アレシアが驚くのも無理は無い。元々カテリナは代表候補生だがテンペスタⅡの事故のせいで未だに専用機を持ってはいない。故に今回の作戦には参加していないはずだったのだ。それが青いカスタムが施されたリヴァイヴⅡで現れたのだ。その疑問に答えたのは雪兎だった。

『あー、カテリナ先輩にはフランスまでプロジェクト・フロンティアで使う予定のリヴァイヴⅡを受け取りに行つて貰つててな。その帰りにタイミング良かったから援軍として呼んどいたんだ。あと、そのリヴァイヴⅡはその報酬としてカテリナ先輩用にカスタムしたやつな』

つまり、これも雪兎のせい、という訳らしい。

「やっぱ雪兎さんのせいか……」

「そんなことよりも今はこの機械戦乙女とやらを片付けるのが先です」

三年生のカテリナが加わったことで戦力的不利を覆すことができ、徐々に機械戦乙女の数も減り始めた。

「あつちは大丈夫そうだな。となると……」

『残るは彼女紅椿だけです』

そして一夏は暴走する紅椿と対峙する。

「ああ、紅椿は……箒は俺が止めてみせる！」

こうして戦況は最終局面を迎えた。

79話 夕風燈夜とトリニティモード 兎、ダメ押しする

「こっちは終わったサ」

一夏が暴走する紅椿と戦闘開始した頃、双子の相手をしていたアリーシャは既に双子を降していた。

「そうですか。ならこっちもそろそろ終わらせませすわ」

雪兎も一夏の三次移行を確認しシャルロット達が合流したのを知り、本気を出すことにした。

「【B：ブレイド】から【YK：エルシニアクロイツ】にチェンジ。加えて【LF：ルシフェリオン】展開。コード【トリニティ】」

そう雪兎が告げると雪華本体が纏っていたバックが【B：ブレイド】から【YK：エルシニアクロイツ】に変わり、白月の【VF：バルニフィカス】が半分【LF：ルシフェリオン】に換装される。

「アドヴァンスドシリーズが三つ・・・」

白月がアドヴァンスドを纏った時に予感はしていたアドヴァンスドの複数装備。そ

れが予想を上回る三重装備としてアンタレスの前に顕現する。

「まだだ。【極限化】発動」

そこにダメ押ししの【極限化】。白月の翼が紫、水色、紅の三色のエナジーウイングへと変貌し、紅蓮の砲槍・ルシフェリオンドライバーを砲撃モードで展開させた。どう見てもオーバーキルを予感させるこの状況。そう、雪兎は完全にブチギレていたのだ。

「悪くおもうな……怨むならあの^{新型剝離剤}ガラクタを使ったオータム辺りを怨め」

その原因はオータムの使った新型剝離剤。紅椿のコアをウィルスで汚染し暴走させたあの装置だ。そのウィルスは以前に福音を暴走させたあのウィルスをベースに改造されたもの。実は福音はあの事件以降はウィルスを取り除いたにも関わらず再度暴走の危険があるとして凍結封印されている。今回の件で紅椿も同じ処置を望む声が出るかもしれない。そして何より全てのISコアは束が産み出した娘のようなもの。それを汚されたことに弟子たる雪兎が怒らない訳が無い。加えて紅椿は幼馴染たる箒のIS。それが暴走させられ想い人である一夏と戦わされると思うだけで雪兎は怒りを抑えるきれないのだ。

「ひっ!?!」

その漏れ出す濃密な殺気にアンタレスは恐怖する。

「コード【TLB】……集え星光」

その言葉と共に雪兎の目の前に四基のビットが集まり紫のエネルギーを収束し始める。それを見てアンタレスは「あれは食らってはいけない」と察して上空へと逃げ出した。

「光を奪い全てを覆う闇となりて我が敵を討ち滅ぼせ……」

だが、それは雪兎にとって都合がよかった。何故なら……これで街を焼かなくてすむからだ。

「夜明け前が最も暗いと知れ、リミットリリース、フルドライブ……」

収束したエネルギー塊にルシフェリオンドライバーを叩きつけ、その全てをアンタレスに向けて解き放つ。

「トワイライト・ブレイカー!!」

解き放たれたエネルギーはすぐさまアンタレスに迫り根こそぎシールドエネルギーを奪い尽くす。そしてアンタレスは悲鳴をあげる間も無く意識を失った。

シャルロットとオータムは学園祭で一度対峙しており、その時はオータムが第2世代機であるアラクネを使っていたことと、シャルロットのISがリヴアイヴⅡSにパワーアップしていたこともあってシャルロットの圧勝で幕を下ろした。

「前と同じようにいくと思うなよ？」

「悪いけど、今回も僕は不機嫌なんだ……速攻で決める！」

今回の作戦が亡国機業を誘き出すものであったのは千も承知だったが、班行動を始める前に襲撃があり雪兎と京都を回れなかったこと。一夏達の救援の為に雪兎と一緒に戦えなかったことなど不満が溜まっていたところでもい^オッてもいい相手との戦^ム闘である。シャルロットも雪兎の影響か自重という言葉捨て始めており、初っぱなから全開だった。

「来て、【コスモス】！」

そして、「二度あることは三度ある」シャルロットが呼び出した【コスモス】とは白鳳

や白月と同じ自律型追加補助外装。

「……はっ?」

これには流星のオータムも嘩然とする。無理も無い。ここまで亡国機業を翻弄してきた兎印の秘密兵器が三度姿を現したのだ。

「武装合体!」

そうこうしている間にシャルロットはコスモスをリヴァイヴII Sと合体させ新たな力を顕現させる。

「これが僕の切り札、ラファール・リヴァイヴII RC (リインカーネーション) さー!」

リヴァイヴII RCはシャルロット用に開発されたコスモスとリヴァイヴII Sが武装合体したデュアルコア搭載IS。雪兎の雪月華と同じくリヴァイヴIIとコスモスの双方にアドヴァンスドを装備可能。白月との違いはエナジーウイングを持たず、コスモス側にアドヴァンスドを装備出来ない代わりにリヴァイヴIIとコスモスの双方に同じパックを展開する重複武装を可能としている(白月はアドヴァンスドを複数種展開する為に雪華とパックスロットを共有しているため重複武装は出来ない)。

「重複武装【G:ガンナー】!」

栄えある最初の重複武装に選ばれたのは今まで多くのトラウマを製造してきたパック【G:ガンナー】だった。当然、重複武装により火力は通常の二倍……えげつな

い。

「ちよつ!？」

オータムも直ぐにその脅威を理解し慌て出すがもう遅い。

「お釣りは要らないよ、全弾受け取ってね? リミットリリース、全砲門開放!
フルオートンブラスト
全弾一斉発射!!」

容赦無い事にシャルロットは重複武装した「G：ガンナー」の全武装を一斉に発射するとうかつて雪兎がゴーレムIにやったことを上回る攻撃を敢行した。

「やっ、それ死ぬるからー! ISあつてもそれは絶対死ぬるつて!! ぎやあああああ!!」

戦う前までの威勢は何処へやら、オータムはシャルロットの放った砲撃の嵐の中へと消えていった。

「「シャルロットさん、こえく……」」

それを見ていた鈴達は揃って戦慄し、絶対にシャルロットを怒らせないようにしようと誓った。

その上空では一夏の白式と暴走している紅椿がぶつかりあっていた。

「くっ！やっぱり絢爛舞踏は敵に回すと厄介過ぎる！」

一夏の使う白鳳は白月やコスモスのパック換装システムをオミットする代わりに零落白夜や瞬時加速に多くのエネルギーを回せるように特化させた仕様の為、以前まで問題だった「エネルギー不足による短期決戦型」という制限を無くし、零落白夜も「展開装甲によって発動中常時消耗」から「斬撃が触れている時のみ零落白夜を発動する」仕組みへと変化しており、エナジーウイングにより瞬時加速を使わなくても高速機動を可能にした為、かなり戦闘可能時間が延びたのだが、紅椿はエネルギーの無限供給が可能な絢爛舞踏を持つ為に長期戦は一夏の方が不利と言っている。更に暴走の影響か紅椿の展開装甲が全て展開状態になっており、束の最高傑作というだけあってその戦闘力は極めて高い。

『ええ、あの娘には零落白夜でシールドエネルギーを削り切つて無力化という手は通用

しないわ』

「じゃあ、どうすればいい？手はあるんだろ、白式？」

『あるわ。私達の本来の単一仕様能力を使えば』

「本来の単一仕様能力？零落白夜は白式の単一仕様能力じゃないのか？」

零落白夜は白式が一次移行した時に雪片式型に備わっていた単一仕様能力。千冬の暮桜が有していた単一仕様能力と全く同じものということもあって疑問視されることもあったこの能力は白式曰く白式本来の単一仕様能力ではないらしい。

『あれは暮桜から受け継いだ能力で借り物みたいなものよ。だから私達には零落白夜とは別にもう一つ単一仕様能力があるの』

「色々と聞きたい事は増えたが、それは後だ。教えてくれ、白式。俺達の本来の単一仕様能力ってやつを」

『【夕風燈夜】全てのI Sのコアを初期化出来る能力よ』

「うわあ・・・使いどころ次第じゃチートスキルだな、それ」

雪兎達から多くを学んだ一夏はすぐさまその単一仕様能力の凶悪さを察した。I Sコアを初期化出来るということはそのコアが今まで搭乗者と学んできた全てを無に還すということ。下手をすれば戦闘中に突然I Sを一次移行前まで戻すことも可能なのだ。よって、普段は使えないだろうが、福音の時や今回のような事態であればかなり有

用な能力と言える。

「でも紅椿を初期化するってことは今までの箒の頑張りも全部消してしまっただよな？」

『……それでも、このまま暴走させ続けさせたり、凍結処理されるよりはずっとマシだわ』

白式はコアネットワークにより福音が凍結封印され搭乗者だったナターシャと離れにされていることを知っている。だから白式はそんなことになるくらいならばいつそのこと初期化して改めて絆を紡ぎ直せば良いと言っているのだ。

「……わかった。今はとりあえず箒と紅椿を止める為に使うよ、『夕風燈夜』を」

そんな白式の想いを知り一夏も改めて覚悟を決める。その後、紅椿の猛攻を凌ぎながら白式に夕月燈夜の使い方を聞き、一度紅椿から距離を取る。

「行くぞ、次で全てを終わらせる！」

そう告げると一夏は煌月白牙と雪片参型を腰の鞆に戻し、小型化し左腕の籠手になっていた【雪羅式型】をクローモードで展開し、瞬時加速で一気に距離を詰めて紅椿の胸部に淡く光る掌を叩き込む。

「【夕風燈夜】発動!!」

すると、雪羅から白い光が迸り、その光が紅椿を包み込んでいく。

「いつけえええええ!!」

一夏の叫びに呼応するかのように光は拡大していく。そんな最中、一夏は一瞬ではあったが髪を下ろし巫女装束姿の箒によく似た少女の姿を見た。その少女は悲しそうに、だが、嬉しいとも受け取れる笑みを一夏に見せた。

(今のはもしかして、紅椿?)

なんとなくだが一夏はその少女が紅椿だと思った。

『……終わったわ、マスター。すぐに紅椿の展開が解除されると思うから箒を受け止めてあげて』

「ああ、わかった」

光が消えると元の真紅の装甲に戻った紅椿の姿があり、その展開が解け空に放り出された箒を一夏は受け止めた。

「……おかえり、箒」

これと同時にスコールらの亡国機業の構成員は一部を除いて逃走。京都での亡国機業掃討作戦は終了となった。

80話 少年少女の休息 兎、シャルロットに連れ回される

京都における亡国機業の日本拠点を叩く今回の作戦はスコールら数名の幹部は取り逃がしたものの、アンタレス、オータム等の幹部数名を捕らえることに成功。また、亡国機業を支援していたと思われる人物（予想通りIS委員会の重鎮の一人）の逮捕に繋がり大きな成果を挙げたと言える。一方でセシリアのブルー・ティアーズ、鈴の甲龍、ラウラのシユヴァルティア・レーゲンは深刻なダメージを受けており、搭乗者であった三人も全治二週間の怪我を負ってしまった。ウィルスによって暴走させられた紅椿も夕凧燈夜による初期化後は束によって精密検査を受けることに。箒も剥離剤の放った電撃や暴走時の無茶な動きのせいではらくは入院することになっている。その事後処理等でまだ数日は京都を離れないらしい。

「改めて見ると今回の被害は甚大だな・・・」
「でも、雪兎の知る最悪な状況は回避出来たね」

そう、原作ではこの京都での一戦で束とアリーシャが亡国機業側につくのだが、雪兎の事前の行動により回避された。代わりに「闇夜の星座」という未知の敵や機械戦乙女

などが現れ予想以上の被害を被ってしまった。

「ああ．．．でも、もう俺の持つ原作知識も役に立たないだろう。つて言っても元々俺が知ってるのはこの京都の戦いまでなんだがな」

雪兎が前世で読んでいたのは原作十巻まで。それ以降の話を雪兎は知らない。

「でも、これで原作知識とかいう未来予知的な隠し事もなくなったから少しは気が楽になったかな？」

「雪兎．．．．」

「いつになるかはわからないけどあいつらにも話さないとな。まあ、あいつらのことだからあつさり受け入れてくれそうではあるが」

「そうだね。特に一夏とか「それがどうした？」とか言われそうだよな」

確かにと思いつつ雪兎はホテルのベランダから星空を見上げる。

エクスカリバー
（聖 剣か．．．）

十巻の最後にスコールと束が呟いていた事から独自に雪兎が調査したところ、エクスカリバー 聖 剣とは米国と英国が共同開発した対 I S 用攻撃衛星ということになっているとある I S だ。I S であるならばとコアネットワークを経由してハッキングしてみたところ、搭乗者というかコアと一体化している少女の名はエクシア・カリバーンというらしい。

（どう考えても厄介事の種にしか見えないな）

「対I S用というのもそうだが、共同開発といいつつも主導は米国らしく、プロジェクトの障害になりそうな気がしない。東にも訊ねてみたところ同意見らしく。東曰く、「物凄く不愉快なモノ、今すぐにでも壊しに行きたいレベル」とのことなので次は聖剣を巡る争乱になるだろう。本当にこの世界の米国は何を考えているのやら……」

「雪兎、また考え事？」

「ちよつとな」

「もう、僕はまだあの時の事許してないんだからね！」

あの時のこととは 안타レスと対峙した時にシャルロット達を先に行かせたことだ。勝つのは信じていたが、今回は相手が相手だったためシャルロットは心配でならなかったようだ。

「悪い、シャルが足手纏いだなんては思ってたねえけど、他のメンバーだけで行かせるのは不安だったからな。その点シャルなら安心して任せれるしな」

「もう、調子いいんだから……」

そう言つて雪兎はシャルロットの頭を撫でる。撫でられるシャルロットは誤魔化さされているようにむすつとするが撫でられるの自体は嫌じやないのかされるがまだ。

「そうだ！一日付き合ってもらうって約束、明日使つてもいい？」

「いいぜ、つてか俺に拒否権無いだろ、それ？」

「うん♪」

「・・・知ってた」

(よし！雪兔と二人つきりで京都デートだ)

こうしてシャルロットは班行動のリベンジをデートという形で実現することになったのであった。

という訳で翌日、二人は京都の街に繰り出した。亡国機業も街への被害は抑えたかかったようでも襲撃があったのにも関わらず被害は軽微だったことが幸いし、数日経った今で

はすっかかり元の賑わいを取り戻している。

「で、シャルさんや。今日のプランは決まってるのか？」

「二応、行ってみたいところを書き出してはみたんだけど……」

そう言つてシャルが取り出したメモを見ると素人目にも徒歩で回るには時間が明らかに足りない。

「コースはこれで……ここと、ここは時間的に無理があるから除外……シャル、最低限外したくない場所は？」

「ここと、ここと……それとここかな？」

「ならこの二つも除外して……」

とりあえず時間的に回れそうな場所を厳選し、実現可能なプランを作成する二人。そんな二人の前を日本の観光地ならではの交通手段が横切る。

「人力車か……」

「本当に人が曳いてるんだね」

人力車は明治から昭和初期にかけて使われた移動手段で、観光に用いられたのは1970年頃に飛騨高山が最初とされる。後に鎌倉、浅草、京都等の観光地での遊覧等で使われるようになったと言われている。一応は軽車両に該当するため、自転車以外の通行が禁止されている自転車用道路や自転車が走行可能な歩道は通行できないそうだ。

「シャル」

「雪兔」

「乗ってみようか」

せつかくの機会なのと、人力車が観光地での遊覧が目的なので丁度良いということ。二人は人力車を利用することに……しかし、人力車に乗りに行った二人は意外な人物と遭遇することになる。

「ん?」

「あれ?」

最寄りの人力車乗り場に着くと、見慣れた赤いロン毛が二人の目についた。

「ん? おお! 雪兔にシャルロットじゃねえか」

「な、何で弾がここに!？」

（あつ、そういやこの時期は虚さんへのプレゼント資金の為に人力車のバイトしてたっけ……）

その人物とは雪兔と一夏の友人である五反田弾だった。弾が京都にいたことにシャルロットは驚くが、雪兔は原作を思い出し一人納得している。聞けばやはりプレゼント資金を稼ぐために短期バイトで来ていたらしい。更に先日の襲撃事件にも巻き込まれていた。

「いきなりISでドンパチだもんなあ、我ながらよく無事だったぜ」

なんでも機械戦乙女に出くわしたものの、楯無達に助けられたらしい。

「マジか……でも、弾が無事で良かったぜ」

「うん、僕も友達に何もなくて安心したよ」

「安心したところで本題だ。」

「せっかくだし、弾に頼む？」

「そうだな」

「デートかよ……ああ、羨ましいぜ」

「今日一日貸し切りで特別料金で払おう」

「任せろ、親友！」

目の前でイチヤイチャされると憂鬱そうな弾だったが、雪兎の一言で態度が一変し爽やかな笑みを浮かべて人力車の準備を整える。

「雪兎、弾の扱い方を心得てるね……」

「まあな、弾と数馬は一夏の次に付き合いの長い友人だしな」

その後は弾の計らいでデートにオススメのコースを回ってもらうことになり……

「どうかな？この着物、似合ってる？……雪兎？」

「す、すまん、ちよつと見惚れてた」

「も、もう、雪兔ったら．．．」

（この着物、買って帰ろうかな？）

着物の試着を試してみたり．．．

「このお団子、美味しいね」

「シャル、タレが口元についてるぞ」

「えっ？どこどこ？」

「じつとしてろ、拭いてやるから」

「う、うん．．．」

団子屋でお団子を食べたり．．．

「わあ♪綺麗な紅葉．．．」

「弾、写真頼めるか？」

「あいよ．．．はい、チーズ！」

パシヤツ！

「綺麗に撮れてるね．．．でも、何で『はい、チーズ』何だろう？」

「元は cheese って発音した時に笑みを浮かべてるように見えるつてのが日本に伝わって変化したものらしい。元々は撮られる側が cheese と言うんだが、日本語の発音だとチーズでズと尖ってしまうから撮られる側は言わなくなっただとか」

「……相変わらず雑学にも詳しいんだな、雪兎」

紅葉をバックに記念撮影したり……

「これ可愛いね」

「記念に買ってくか？」

「うん！あつ、皆にもお土産買っていこうよ」

「そうだな」

皆へのお土産を買ったりしているうちにあつという間に一日は過ぎていった。

「最後はここだな。この辺りの夜景が一望出来る穴場だ。夜景も綺麗なんだが、夕焼けもこの通りよ」

最後に案内されたのは見晴らしの良い高台。弾曰く地元民が知る穴場なんだとか。

「うわぁ！綺麗な夕陽だね」

「ああ、京都の夜景って聞くと京都タワーを思い浮かべるだろうし、確かに穴場だな……」

そこから一望出来る夕陽に照らされる京都の街はとても綺麗だった。

その後、弾にホテルの近くの乗り場まで送ってもらった二人は弾に礼を言って別れた。

「今日は楽しかったね、雪兔」

「そうだな、改めて弾に感謝しねえとな」

「うん」

大満足でその日を終えた二人だったが、後日この話をして箒達に大層羨ましがられた。

十二章 「兎と異世界とアムドライバー」

81話 夢への一步と御披露目会 兎、師弟で移動拠点を作る

京都での戦いの傷も癒え、日常が戻ってきたと感じる十一月末。その事件は東と雪兎のとあるものの完成に端を発する。

「出来たね、我が弟子よ」

「ええ、これで聖剣も怖くありませんね、師匠」

そのとあるものとは、東が移動ラボとして使用していた【吾が輩は猫である名前はまだない】を原型を留めない改修を行ったものだ。

「陸海空は勿論、宇宙空間だってへっちゃら！」

「収容可能人数、整備・開発設備、その他衣食住も抜かり無し！」

「他にも様々な機能を満載した我らが最高傑作！」

「移動拠点型I・Sその名も【宇宙飛ぶ兎】！！」

このフライング・ラビットは兎師弟がこれまで開発してきた技術の粋をこれでもか！

と盛り込んだプロジェクト・フロンティアの移動拠点にして旗艦とも言えるもの。ちなみにISにしたのは「聖剣とかいう攻撃衛星ISがあるなら宇宙船とかもありじゃね？」と雪兎が言い出したのが発端だ。フライング・ラビットには他の登録したISとリンクさせてそれぞれの単一仕様能力を船に付与出来る機能があり、絢爛舞踏を使える紅椿をリンクさせれば無限に活動可能なのだ。※紅椿は束がバックアップを取っていたのですぐにデータは復元出来、絢爛舞踏も箒がコツを掴んでいた為に再度発現させることに成功している。

「そういえばコイツの御披露目するんでしたよね？」

「うん、スポンサーとかへのアピールも兼ねてるから大々的にやる予定だよ」

そう、このフライング・ラビットの開発には宇宙開発が実際に可能であることを証明する為のアピールとして作られた側面もあり、御披露目会が予定されている。だがこの時、雪兎はおろか束すらも御披露目会後の処女航海であのような事件が発生するとは思ってもいなかった……

それから数日後、フライング・ラビットの御披露目会当日。

「まさかこんなイベントに俺達まで招待されるとはな……」

「しかも後で乗せてくれるってよ」

「何か場違いな気が……」

学園祭に引き続き弾、蘭、数馬の三人は雪兎の友人枠でその御披露目会に招待されていた。弾は虚に会えるかもと期待もしている。

「でも、あんなスゲーの作ってるのがダチってのは誇らしいよな」

「昔から何やかんやと作ってたもんな、アイツ」

「ですね」

そして、御披露目会は大盛況で幕を閉じ、試験的な長距離飛行テストにはいつもの特訓メンバー（雪兎、シャルロット、一夏、箒、セシリア、鈴、ラウラ、聖、本音、晶、エリカ、アレシア、カロリナ、マドカの十四名）に加えて生徒会から楯無と虚、船のオペレーターとしてクロエ、ゲストとして弾達三名、開発者の束、引率として千冬と真耶に

雪菜の三名、それにミュウの総勢二十四名十一匹が乗り込んでいた。

「結構大所帯だな……」

「まあ、何かあつてもこの人数なら一ヶ月は問題無い物質は積んであるがな」

「あれ？でもそんな量積んであるようには……」

「storageの応用で保管してる。だからスペースも取り出すスペースだけで十分なのさ。あと賞味期限とかもきにする必要は無い」

「IS関連も数十機分新造出来る分しまつてあるから問題無いよ」

storage万能過ぎる……

「とりあえず日本をぐるつと一周ー」

そんな最中、事件は起こった。

「束様！進行方向に異常な磁場を確認！」

「これは……磁場だけでなく、重力場まで!?船が吸い寄せられています！」

「振り切れないのか!？」

「ダメです！重力場が強過ぎて振り切れません！」

突如発生した謎の異常な力場にフライング・ラビットが捕らわれ吸い込まれていく。

「くっ……総員、対衝撃用意！」

「「「うわああああ!!」」」

力場の中央は空間が歪み穴のようになっており、抵抗虚しくフライング・ラビットはその中へと呑み込まれていった。

「うう……一体何が起きたっていうんだよ」

酷い揺れが船を襲い、気が付けばフライング・ラビットは何処かへ着陸しているようだ。

「とりあえずは外の様子を確認します」

クロエが外部の様子をモニターに映すと一同は揃って絶句した。そこに映っていたのは見慣れぬ光景、荒野とその先に見える寂れた廃墟と化した街の姿であった。

「……」は一体何処なんだ？」

判ったのは、彼らは何かとんでもない事態に陥ったということだけであった。

82話 ヒーロー達との邂逅 兎、異世界に行く

広域スキャニングの結果、現在地はデータ上には存在しない場所、即ち未知の場所だと知り困惑する一同。そんな中、一人スキャニングデータを睨んでいる人物がいた。雪兎である。

(これは、まさか・・・だとしたら俺達は)

とあるモニターに映された廃墟の映像、そこに映り込んだある存在が雪兎にある仮説を思わせる。

(バグシーン、コイツらが存在するってことはこの世界は・・・)

映り込んでいたのはピンク色の烏賊を彷彿とさせるトパスと呼ばれる機動兵器バグシーン。その存在は雪兎の表情を曇らせる。

「雪兎？」

そんな雪兎の異変に真つ先に気付いたのはやはりシャルロットだった。

「シャル、俺達はどうやらかなり突拍子も無い事態に陥つたらしい」

「それはどういうことだ？」

「織斑先生、これから話すのは普通なら信じられないことです。ですが、話だけでも聞い

て下さい」

そう言うのと、雪兎はクロエに頼んで先程のトパスの映像を拡大表示させる。

「これは……」

「もしかして、バグシーン？つてことは……」

意外にも簪もトパスに見覚えがあったらしく、雪兎の言いたいことを理解したようだ。

「ああ、簪の思った通りだと思う。俺達は今、異世界にいる」

「い、異世界!？」

「あれはトパスというバグシーン。バグシーンとはこの世界で人類を脅かしているときれていた機動兵器の一種だ」

当初、バグシーンは突如現れた侵略者だと思われていた。しかし、バグシーンは紛争に満ちた荒れた世界を一つにまとめる手段として意図的に作り出された偽りの侵略者だった。

「バグシーンは通常兵器ではダメージを与えられず、それに対抗する為に作られたアムテクノロジーと呼ばれる技術で作られたアムドライバーだけがバグシーンと戦うことが出来た」

「なるほど、マッチポンプという訳か」

「そうです。その後、その事を公表し政府と対峙したジャスティ・アーミー（以後JA）と連邦政府、それとアムドライバー本来の在り方『市民を守るヒーロー』としての姿勢を貫こうとしたピュアアムドライバーと呼ばれた第三勢力の戦いになったんだ」

ピュアアムドライバー。この物語の主人公・ジェナスⅡデリラ達の少数勢力。だが、その影響力は計り知れないものであった。

「ここが異世界だと言うのはとりあえず納得したけどさ。何でそんなに詳しいんだ？」
「だってこれ、昔やってたアニメの世界だもん」

「はっ？」

そう、アムドライバーのアニメはISの世界でも放映されていたのだ。そして、ヒーロー大好きな簪がそれを知らない訳がなかった。

「問題はどの時期か、よね」

「おそらくだが、今はそのJAが活動し始めた頃だと思う」

「根拠は？」

「トパスがノーマルタイプかつ他のタイプのバグシーンが見当たらない。廃墟を調べればもう少し詳しい時期が分かると思うんだが……」

という訳で一同はまず廃墟を調べることに……

「壊れかけの端末をレストアしてそこからこの辺りの地形データを回収出来た」

「流石は雪兎、慣れたものだね」

「他にもデータを回収出来たから大体だが時期も特定出来そうだ」

回収したのはニュースなどの報道系のデータだ。それに寄ればつい先日ジェナス達がアムエネルギーの輸送列車を守った事件が起こった。ピユアアムドライバーが登場した第二十話から二十二話の辺りだと判った。しかもこの辺りはジェナス達の次の目的地である『ミュネーゼ・タウン』と今彼らがいる『ナムールリバー』の途中にあるらしい。

「帰投するか・・・ん？」

そこで雪兎が近付いてくる存在に気付く。

「あれはトパスⅡα!？」

それは十九話辺りから登場したバグシーンでαとβの二種同時に運用している。それと遭遇したのだ。

「アレがいるってことは近くにJ Aの連中も……」

見つかる訳にはいかないと廃墟に隠れる雪兎とシャルロット。すると、アムジャケツトを身に纏ったJ Aが姿を現す。

「……例の反応があつたのはこの辺りなんだな?」

「はい、近くにピュアアムドライバーが来ているという情報もあります。何かあるのは間違い無いかと」

どうやらフライング・ラビットが転移した時のエネルギーを感知し調査に来たJ Aが雪兎のレストアした端末から情報を抜き取つたのに気付かれたらしい。

(ちっ、俺としたことがへましたか……)

「どうするの?雪兎」

「とりあえず皆と合流しないと……」

その時、二人の傍にいたJ Aが何かを発見する。

「この端末はレストアされた跡がある!近くにいますはずだ!捜せ!」

見つけたのは先程雪兎がレストアした端末。それを見つけたJ AはトパスⅡ達に指

示を出す。

「見つかるのは時間の問題か……なら一か八かだ！来い、雪華！」

「いくよ、リヴァイヴⅡ！」

逃げ場は無いと察した雪兎とシャルロットはそれぞれISを展開し打って出る事に。

「何っ!？」

「はっ！」

幸いな事にISの装備はバグシーンに通用する様で、「B・ブレイド」を展開した雪兎はバルムンクでトパスⅡαを両断する。

「シャル！ISの武器ならコイツらにも通用するぞ！」

「了解！」

一方のシャルロットは「G・ガンナー」を展開し、一斉掃射でトパスⅡ達を撃ち抜く。

「な、何だその装備は!？」

初めてISを目にし困惑するJA達。

「やられてばかりいるものか！やれ、トパスⅡ！」

だが、すぐに立ち直るとトパスⅡをけしかけてくる。

「くっ、数が多い……」

攻撃は通用するも流石に数が多く劣勢に陥る雪兎とシャルロット。そんな時だった。

「やっちやるぜ！」

「アロンジー！」

「えっ？」

そこに現れたのは青と赤の装甲を持つアムジャケットを着用したアムドライバー。

「まさか……彼らは!？」

「ちっ、ピュアアムドライバーか！」

そう、そこに現れたのはピュアアムドライバー・ジェナスⅡデイラとラグナⅡラウレリアの二名だった。

「どこの誰かは知らないが助太刀させてもらおうぜ！」

「ジェナスⅡデイラ……マジかよ」

「俺様もいるぜ！」

「雪兎、この二人が？」

「ああ、ピュアアムドライバーだ」

ジェナス達と邂逅した雪兎とシャルロットはそのまま彼らと共闘しJAを追い払うことに成功した。

「助かった。しかし、まさかピュアアムドライバーに助けられるとはな」

「へっへ、俺達も有名になったもんだぜ！」

礼を言う雪兎にジェナスは戦闘中気になっても聞けなかったことを訊ねる。

「それはそうと、君らは一体何者なんだ？それにそのアーマーはアムジャケツトとは違うみたいだが……」

「詳しく話すと長くなる。だから俺達のところに来ないか？お仲間も連れて来てもらって構わない。ついでに助けられた礼に飯も出すよ」

「マジで!？」

「うん、雪兎のご飯は美味しいから期待していいよ」

「本当にいいのか？」

「命に比べたら飯の一つや二つ安いもんだ」

その後、一夏達とも合流し、ジェナス達ピユアアムドライブ達を迎え入れた一同はフライング・ラビットへと帰投するのであった。

「やっべー、何この飯!?! 旨すぎるんですけど!」

「本当だ、美味しい……」

まずは腹ごしらえとフライング・ラビットの食堂にて腕を振るうは雪兎と一夏に弾の三名。この三名は男子ながら料理の腕は主婦顔負け。ピュアアムドライバーの面々も彼らの料理には手が止まらないようだ。大絶賛しているのはラグナで、驚いているのはセラメイ。

「それにしてもこの設備といい、ISといい、普通ではないな」

「そうツスよ! さっき見せてもらったISとかいうパワードスーツもそうだったツスけど、このフライング・ラビットって船も僕らからして見ればオーバーテクノロジーの塊ツス!」

フライング・ラビットやISに興味を示したのは協力者のイヴァンⅡニルギースとジェナス達のローディ(アムドライバーのサポート技師のこと)のジョイⅡレオンだ。

「メシだ! メシだ! メシだ!」

「すまん、お前さん達も大変だろうに……」

メシだと繰り返し叫びながら食べているのはタフトゥクレマーで、気を使ってくれているのがダークゥカルホール。

「それにしても随分と男女比が女性寄りなんだな」

「何でも、あのISってパワードスーツは基本的に女性しか使えないそうよ」

「なるほど、だが、雪兎と一夏という少年二人は例外みたいだな」

そう考察するのはシーンゥピアース、専属ジャーナリストのマリーゥファステイアとニツクゥキーオの三名。

「ジェナス、モットタベル」

「い、いや、シャシャは自分のを食べなってる」

そしてジェナスに絡んでいるシャシャ。これが現在のピュアムドライバーのメンバーだ。

「楽しんで貰ってるなら作った甲斐があったな」

「ああ、しかし物語の中心人物達と接触出来たのは幸運だよな」

聞けばジェナス達はナムールリバーを出てからJAと戦いつつもデポトレラー・プロメテウスでミュネーゼ・タウンに向かう途中らしい。

「さてと、腹ごしらえも済んだことだし、今度は俺達の話だな」

食事の後、雪兎はジェナス達に自分達が別の世界からやって来た異邦人であることを

告げ、元の世界に帰れる目処がつくまで同行したいと申し出た。何故同行を申し出たかと言うと、このままでは何れJ Aや連邦政府に見つかり利用される恐れがある。であれば、何者にも縛られないピユアアムドライバーに同行した方が身の安全を確保出来ると考えたからだ。その事も雪兎は隠さずジェナス達に伝える。

「確かに君達の戦力と物資は役に立つ。それに我々に与する理由ももつともだ。私は賛成だ」

最初に言葉を発したのはニルギースだった。彼は彼なりに雪兎達の言葉とメリット・デメリットを精査した上で雪兎の提案に賛成する。

「俺も良いと思うぜ。少なくともアイツらが嘘をついてるようには見えねえ」

ダークも雪兎は信用していいと思ったように賛成のようだ。

「僕も賛成ツス。それに、雪兎とはもう少し色々と話してみたかったんすよ」

「お前の場合、そっちが本命なんじゃね？まあ、俺も旨い飯が食えるなら反対する理由もねえけどよ」

ジョイは技師としての興味から、ラグナは旨い飯を理由に賛成。

「決めるのはジェナスだ。俺はお前の決定に従う」

「私もシーンと同じ。ジェナスに任せる」

今まで彼らを率いてきた信頼からシーンとセラはジェナスに決定を委ねるようだ。

他のメンバーもジェナスに一任するらしい。

「それじゃあ……」

ジェナスはしばらく考えた上で結論を出す。

「よろしく頼む、雪兔」

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ、ジェナス」

こうしてピュアアムドライバーと異世界からやってきたIS学園チームの同盟が結ばれることとなった。

83話 ネオアムジャケットと新たなる力 兎、ジョイとやらかす

プロメテウスを格納したフライング・ラビットで（一応目立たないように陸路で）ミネーゼ・タウンを指すジェナス達ピュアアムドライバーと雪兎達ISチーム。そんな中、雪兎とジョイの二人はあるものを弄っていた。

「ガン||ザルデイの使っていたアムジャケット、ネオアムジャケットか……コイツをジェナス用に？」

「はいッス。戦闘スタイルもジェナスと似てみたいッスから。それにダークさん達が託されたのはジェナスだからって……」

「なるほどな。よし、俺で良ければ手を貸そう。こんな面白そうなもん手を出さずにいられるか」

「雪兎ならそう言ってくれると思ってたッスよ」

「「ふっふっふっふ……」」

この二人、似たもの同士のお互いに出会った瞬間に自分と同類と直感したんだとか……

こうしてガン||ザルデイのネオアムジャケットは雪兎とジョイの手でジェナス用に魔改造されることになった。

その頃、他の面々は……

「へえ、ジェナス達は私達より年下なのね」

「ワアオ、年上だったのかよ!?!」

意外にもジェナス達は十四歳、シーンやジョイは十七歳と若いことに鈴達は驚くが、ラグナもまさか年上とは思っていなかったのか驚いていた。

「セラさんはマドカや私と同年なんだ」

「うん」

「じゃあ、セラって呼んでも？」

「いいよ。私も蘭、マドカって呼んでもいい？」

「ああ、よろしく頼む、セラ」

「よろしくね、セラ」

「同じ年の蘭、マドカ、セラは早速仲良くなったようだ。」

「で、次に向かうミュネーゼ・タウンってJAとかいう連中の拠点なんだろう？ どうやって潜り込むんだ？」

「ニルギースが言うには俺達が陽動を仕掛けて、その間にピースに関しての情報を持つてるっていう作業員と接触するんだとさ」

「一夏の質問にシーンが答える。だが、どうもシーンはダークと同様にニルギースを信用していないらしい。」

「ふーん……ところで、雪兎とジョイは？」

「何かガンザルデイのジャケツトがどうか言つてたな……」

「それ、絶対に改造……ううん、魔改造されてるよ」

「魔改造って……ジョイならやりかねないな」

シャルロットの言葉をジェナスは否定する事が出来なかった。むしろ、絶対にやっていそうな気すらする。

「雪兎もジョイと同類か」

「お互いに別系統の技術を持つてるからな……混ぜつてとんでもない装備になってたりしてな」

「そんなまさか……」

「……」

ダークが冗談混じりに呟いた言葉だが、誰も否定する言葉を告げれない。それだけあの二人はやらかす実績があったのだ。

「敵の本拠地を攻めるんだ。戦力が向上する事に何の問題がある?」

ニルギースはそう言うが、問題はそこではないのだ。だが、ニルギースがそれに気付くのはもう少しだけ後になる。

ミュネーゼ・タウンが目前に迫ってきた頃、雪兎とジョイはジェナス用に魔改造されたネオアムジャケットを完成させてしまっていた。

「ネオアムジャケット、中々の強敵だったが……」
「僕らの敵じゃなかったツスね」

この二人、一体何と戦っていたのだろうか？

「完成したのか？」

丁度そこにジェナスがやってくる。

「ああ、俺の持つ技術とジョイの持つ技術を複合して改修したネオアムジャケット。コイツなら今までのアムドライバーやバグシオンなんぞバイザー無しで蹴散らせるぜ」

「そうツスよ！IS由来の拡張領域にネオアムジャケットのチューブチャーシシステムを組み合わせた現在僕らが作れる最高のアムジャケットツス」

なんとこの二人、ネオアムジャケットをジェナス用にチューンするのに加えてISの

技術を融合させ更なる改修まで施していたのだ。

「ついでにもう一つ一から作れたしな！」

「雪兎が手伝ってくれたおかげで時間に余裕が出来たツスからね！」

更にこの二人は本来ならもう少し先に登場する筈のラグナ用のネオアムジャケットまで完成させていた。

「……やっぱりやらかしてたよ」

心配になって見に来たシャルロットも流石に呆れている。

「おいしい、ニルギースの野郎が呼んでるぜって、なんじやこりや!？」

「ん？新しいお前とジェナスのアムジャケットだが？」

「おいしい、マジでとんでもないことになってんじやんか！」

こうしてネオアムジャケット二つが原作より早く誕生しミュネーゼ・タウン攻略が始まろうとしていた。

「新しいアムジャケットの調子はどうか？ ジェナス、ラグナ」

「ああ、問題無い。今までとは完全に別物みたいだ」

「こつちもノープロブレムだぜ」

新しいアムジャケットのテストも兼ねて先行偵察に出る事になった雪兎、ジェナス、ラグナ、シーンの四人。雪兎はネオアムジャケットの機能確認として同行している。

「この調子なら全員が新型になるのも時間の問題だな・・・」

「っ！全員散開！おいでなすったぞ」

そんな話をしていた時、雪兎達目掛けて突如ビーム砲による襲撃が起きた。

「へえ、今のを回避するなんてやるね。流石はシーン」

「見慣れない奴もいるが他のアムドライバーはジェナスとラグナか」

「その声は!?!」

「ま、まさか!?!」

「ロシエ、KKか……」

襲撃してきた者達の声を聞き、ジェナス達はその正体がかつてシーンとユニット（チーム）を組んでいたロシエットⅡキツスとKKことクツクⅡカーランドである事に気付いた。

「久しぶりだね、シーン」

すると、ロシエット達はヘルメットを外し、その素顔を現す。更に二人と一緒に現れたのはガンⅡザルデイの隠れ家で遭遇したJAのシャドーⅡエーリックだった。

「寝返っていたのか、JAに」

「シーンこそ、ジェナスの子分か？」

「何っ！」

「お前達、俺達を倒すつもりか？」

シーンがそう訊ねると三人はヘルメットを着け襲いかかってくる。

「ふふっ！」

「させるか！」

真つ先に飛び出してきたロシエットをシーンはエッジバイザーをブリガンデイ・モードへと変形させ迎え撃つ。しかし……

「いくよー！」

「ぐああああ!!」

シーンの攻撃をもともしないロシエットはシーンにボディブローを叩き込み崖の壁まで吹き飛ばす。

「シーン!」

「行かせるか!」

吹き飛ばされたシーンに駆け寄ろうとするジェナスだが、そんな事を敵が許す訳がなく、KKは二本のガンサイズを合体させたドレッドアーバレストでジェナスを狙うが……

「そつちこそ、やらせねえよ!」

雪兎が「F：フォートレス」を展開し、大型シールドビット・アイギスでそれを防ぐとお返しにとばかりに大型バズーカ・グランドスラムを放つ。

「ぐっ!」

KKは直撃こそ避けたものの、グランドスラムの放った一二〇mm弾の衝撃で仕切り直しを余儀なくされる。

「ナイス、雪兎! こつちもいくぜ!」

「何っ!?! こいつら俺にダメージを!?!」

ラグナもエーリックに向けてアサルトガンで攻撃を仕掛けダメージを与える。

「大丈夫か！シーン」

「ああ、だが、どういうことだ？まるでパワーが違う」

「そりやそうだろう。アイツらのアムジャケット、ネオアムジャケットだ」

「何だつて!?!」

そう、彼らが纏っているアムジャケットはJAによつて作られたネオアムジャケットだったのだ。

「今までもアイツらとやれんのはジェナスとラグナ、それと俺くらいだろう。いくらシーンが強かろうと装備性能が段違いだ」

「くっ」

「悔しいのはわかるが、ここは俺達に任せろ。いくぜ、ジェナス！ラグナ！」

「ああ！」

「こつちのネオアムジャケットの力、見せてやろうぜ！」

向かってくるロシエツト達に対し雪兎達はそれぞれ新たなる力を解き放つ。

「来い、【NB：ネオブレイド】！」

雪兎が展開したのは【B：ブレイド】をネオアムジャケットの技術を流用して改修した強化モデル。チューブチャージシステムも搭載しており、今までよりも性能が格段と上昇している。

「展開、ヴァリアブルソード！」

ジェナスの展開したヴァリアブルソードは右腕と一体化した小型のシールドと十徳ナイフのようにシールド内部に格納させたブレードを切り替えることでショートソードから大型ソードまで多彩なソードを展開可能な装備。当然チューブチャージシステム対応だ。

「俺様も、ハイコートカノン！」

ラグナのハイコートカノンは特殊コーティングを施された弾丸を撃ち出す中型砲で、元々装備していたアサルトガンとコアガンを組み合わせて使うマルチジョイントガンに接続することで高威力砲や超長距離狙撃にも組み換え可能した装備だ。

「何だ?!」

エーリックにダメージを与えたことからジェナス達もネオアムジャケットを着用しているのは察していたが、新たに彼らが装備したものはロシエツト達からすれば突如何処からともなく出現したもの。雪兎の雪華に至っては装備がガラツと変わっており彼らが困惑したのは無理も無い。だが、それは雪兎達に見せてはいけない隙を生んでしま

う。
「バルムンクⅡ、チューブ接続」

「ヴァリアブルソード、モード・クレイモア！」

「マルチジョイントガン、ブラストモードだぜ！」

「しまっー」

「竜殺しの一撃、受けてみる。ドラグバスター！」

「撃っ!!」

「アロンジー!!」

雪兎とジェナスの地を裂く斬撃とラグナの高威力砲が炸裂し、ロシエツト達は振り返り討ちにされてしまう。

「くっ、くそっ！」

「ちっ、一旦退くぞロシエツト」

「覚えてやがれ！」

ボロボロになったロシエツト達はそのままミネーゼ・タウンへと引き返していく。

「口ほどにも無い奴め・・・だが、これはちよつとマズイことになったな」

「ああ、ロシエツト達にこつちの存在が知られた」

「それにあの様子だと他の連中もネオアムジャケツト持ってそうじゃね？」

「そうだな、俺達も一旦退こう」

ロシエツト達は追い返せたものの多くの問題が露呈し、雪兎達はその対策の為に一度フライング・ラビットへと帰還するのだった。

8 4 話 月夜の攻防と進化する力! 兎、大改修に取り掛かる

「厄介な事になったな……」

雪兎達の報告を受け、ニルギースは作戦の修正を余儀なくされていた。一方、雪兎とジョイはニルギース、シエシエのもの以外の一同のアムジャケットの改修作業を行っていた。

「とりあえず急ぎはシーンのやつだな」

「そうツスね、ロシエツトはシーンをつけ狙ってるみたいツスからね」

手始めに取り掛かったのはシーンのアムジャケット。これからの戦いを考えれば主力級のアムドライバーの戦力アップは急務と言える。

「問題は次の襲撃までに作業が終わるかってとこだな……」

「そうツスよね」

正直な話、JAのネオアムジャケットは想像以上に強力だった。前は雪兎と改修済みのジェナスとラグナがいたが、未改修のアムジャケットではいてもいなくても大差は無いレベルだ。それにアムマテリアルにも限りがある為、改修作業は残っているアム

ジャケット全機同時に行っている。それ故に残ったジェナスとラグナ、雪兎以外のISチームで迎撃を行わねばならない。

「多分、今夜が勝負だ。やるぜ、ジヨイ！」

「合点承知ッス！」

「シシーちゃんが捕まった!?!」

それは情報を漁っていたマリーが見つけたもので、アムドライバーの公認サポーターをしているシシー＝クロフトという少女がミュネーゼ・タウンにて連邦アムドライバー

を応援、JAを批判したとしてJAに捕まったというのだ。

「まず間違いないく巽だろうな」

「貴女もそう思いますか、織斑女史」

「ああ、このような放送を流したということは十中八九我々を誘き出す為だろう。だが、我々が行かなければ……」

「ピュアアムドライバー、それに連邦政府は彼女を見捨てたと報道して非難を集めるでしょうね」

「くそっ!あの野郎どもめ……」

彼女の大方アンであるラグナは悔しそうにディスクを叩く。

「だがどうする?俺達のアムジャケットはジェナスとラグナのものを除いて改修中だ。ISもネオアムジャケットに何処まで通用するかわからん」

「今はまだ様子を見る他無いな。だが、我々が懸念していた事が一つ減ったな」

「なるほど、シシー救出を隠れ蓑に工作員と接触するのか」

「それなら大義名分が立つという訳ね?」

ニルギースの言い分に千冬とマリーが納得していると。

「そんなのは関係無い!」

「シシーちゃんは俺達のサポーターなんだぜ?」

「ああ、シシーが、いや、俺達の力を必要としている人がいるのなら」

「助け出すのがアムドライバーだ（ぜ）！」

ジェナスとラグナはアムドライバーとしての在り方を貫く姿勢を示す。すると、ブリッジのクロエから通信が入る。

『皆様、前方にアムエネルギー反応を検知しました。固有波数から見て前回雪兎兄様達と交戦した三名かと。更にバグシーンと思われる反応も多数有ります』

「早速おいでなすったか！」

「デイラとラウレリアは出られるな？」

「ああ！」

「任せとけて！」

「今回はこちらからもISを出す。だが、決して無理はするな！」

「はいっ！」

こうしてISとアムドライバーの混成部隊がロシエツト達JAを迎え撃つ為に出撃するのであった。

「またその変なパスワードスーツか！」

「まだそんなにいたんだね」

「トパスIIを持って来て正解だったな」

ロシエット達は原作と違いジェナス達がネオアムジャケットを装備している事を知っていた為に連れて来たトパスIIを展開する。

「すまない一夏、お前達の力を貸してくれ！」

「ああ、俺達もここでやられる訳にはいかないんだ。やるぞ、皆！」

「」「おう!!」「」

ロシエット達ネオアムジャケット装備に対するはジェナス、ラグナ、一夏の三人。残りのメンバーはシャルロットの指揮の元でトパスIIの掃討を開始する。

「はっ！」

「くっ！」

ロシエットと対峙するのはジェナス。今回は早々にヴァリアブルソードを使用してロシエットのシザースブレードを押し返す。

「お前なんか！」

ロシエットは何処か焦ったようにグラップルブレードとシザースブレードを合体させナイトメアブレードにするとジェナスに斬りかかる。

「シーンは何処だ!」

「教えるかよ!それにお前の相手はこの俺だ!」

シーンに拘るロシェットは明らかに目の前のジェナスを見ていない。それ故にジェナスに対して有効な攻撃が出来ないでいた。

「バババババーン!」

「くつ、コイツらやはりあの頃とは違う!」

「当たり前だろ!俺達がどれだけ修羅場潜ってきたと思ってるんだ!」

KKもパワーアップしたラグナの攻撃に押され気味だ。

「な、何なんだよコイツらは!?!」

「遅い!」

エーリックも二度目のIS戦で一夏に翻弄されるばかりで手も足も出ない。無論、戦ったのが雪兎や一夏と三次移行済みのISである為それは当然と言える。だが、そんな彼らに援軍が到着する。

「何っ!?!」

突如の狙撃を何とか回避したジェナス達だが、現れたのはセラと同じエアバイザーにジャイロバイザー、そして未知の飛行型バイザーを纏った三人。その三人は一度崖の上に着陸するとそのヘルメットを外す。

「パフ!?!」

「それにジユリ、ジュネまで!?!お前達もジノベゼ側に寝返ったのかよ!?!」

それは以前セラが所属していたパフユニットのパフにジユリ、ジュネの双子だった。言葉を交わそうとするも、パフ達は問答無用とジェナス達に襲いかかる。

「ちよつと! あんた達は仲間だったんじゃないの!?!」

「これは戦争なのよ!」

そんなパフに激昂した鈴が仕掛ける。

「戦争? 知ったことじゃないわ!! 信賴していた相手に裏切られるのがどんな気持ちか! あんた考えたことあるの!?!」

「珍しく同意だ。貴様の事はセラから聞いていたが、そんな女だったとはな。セラが聞いたら悲しむぞ!」

更にマドカもセラと仲良くなったが故にそんなパフが許せないらしい。

「私もお手伝いしますわ!」

「上空はむしろ私達の戦場よ?」

どうやらトパスⅡを片付け終わった女性陣はパフ達の言動に思うところがあるようで全員がパフ、ジユリ、ジュネを包囲する。パフが使う新型バイザー・ストームバイザーといえど、彼女達からすれば未知の能力を持つISに囲まれては流石に不利というも

の。しかし、パフも歴戦のアムドライバーの一人。そう簡単にはいかない。

「貴女達に何が判るっていうの!」

ストームバイザーをブリガンディ・モードに変形させ、機首部分であったキャノンと翼が変形したブーメラン状のブレードを用いて攻撃してくる。

「私達だって!」

「やってみせるんだから!」

それに合わせて双子だからこそそのコンビネーションで攻撃してくるジュリとジュネ。

「なんと厄介な!」

ストームバイザーは勿論、ジュリとジュネが使うエアバイザーやジャイロバイザーもネオアムジャケット対応になっている為か楯無やシャルロットでもパフ達を追い込み切れない。そんな時だった。

「甲龍! 私達の意地、何としてでもアイツらに思い知らせるわよ!」

「私達も負けていられませんわ!」

「我らシュヴァルツェ・ハーゼの誇り! 今こそ示す時!」

そんな三人の気持ちに応えるかのように甲龍、ブルー・ティアーズ、シュヴァルツェア・レーゲンが光り輝く。

「これってまさか!?!」

光が消えると、三機のISはその姿を大きく変貌させていた。まずは甲龍だが、兎印のパッケージを取り込んでおり、左右の小型龍砲【龍玉】が三つから四つに増え、背面には龍の翼を模した大型スラスタを得た。更に二本の大型青龍刀だった双天牙月は刀身が少し細身の刀刃になり鋭さを増していた。

「私に伝えてくれたんだ、甲龍……」

続いてはブルー・ティアーズ。エンジェルフェザーで追加された翼状のビットマウントが大型化し、それに伴いビットも大型化。火力も当然上昇しており、かつてのスターライトmk.Ⅲに匹敵する。また、刃も備えて斬撃も行えるようになった。ランパードランチャーも槍の部分が大型化し、【LA:ライトニング・アサルト】のガングニールと同様に複数砲門を使った拡散攻撃も可能に（偏向射撃も可）。

「私達も二次移行を？」

最後にシユヴァルツエア・レーゲンだが、両肩のシールドブースターキャノンに大型レールガンが融合して大型化。眼帯の部分にスカウターのようなものが追加され、ヴォータン・ルージュ発動時に限るが、ワイヤーブレードの先からAICを展開出来るようになっていた。更にそのワイヤーブレードに高周波振動を加えることで切断能力までも付与している。

「三機同時とは因果なものだな」

三機共に同時期に雪兎から専用パッケージを与えられたISだ。それが同時に移行するというのはラウラの言う通り因果なものだ。

「ジュリ、ジュネ、退くわよ」

この異常事態には流石のパフも危険を感じ、撤退を指示する。ロシエツト達もどきくさ紛れに撤退したらしく、月夜の戦いは引き分けという形で幕を閉じた。

85話 セラの心とパフの真意 兎、妹分に隠し玉を与える

パフユニットの裏切り。これはジェナス達に思った以上の衝撃を与えていた。中でもセラは話し合いにも応じてくれないパフ達の姿を見て部屋に引きこもってしまった程だ。

「セラ……」

そんなセラを心配する蘭。

その夜、セラはエアバイザーを持ち出しミュネーゼ・タウンへと姿を消した。それと同時に蘭とマドカも……

翌日の朝、セラが抜け出した事と同時に蘭とマドカも姿を消している事が発覚。その事で弾が雪兎の胸ぐらを掴んで問い質す。

「はあ!?! 蘭のやつを一人で行かせただと!?!」

「だからマドカに監視を頼んだんだが、まさか一緒に行くとは予想外だった。一応保険は持たせてあるし位置も把握してるんだが・・・マドカのやつ、通信まで切りやがって」

この行動は流石の雪兎も予想外だったらしい。

「マドカちゃんが一緒ならとりあえずは大丈夫か・・・お前もマドカちゃんが心配だよな、すまん」

ついカツとなつてしまったと謝る弾だが、雪兎はあまりマドカの心配はしていなかった。

「大丈夫さ、マドカは単独で基地一つ襲撃して脱出出来るやつだからな」

元亡国の工作員だったマドカ。故の信頼なのだが・・・

「それ、別の意味で大丈夫なのか?」

ジエナス達は別の意味で心配になるのだった。

ミュネーゼ・タウンの近郊にある森にエアバイザーを隠したセラ。そこから単身ミュネーゼ・タウンに向かう。だが、セラは気付いていなかった。その背後に蘭とマドカがいる事に。

「き、気付かれてないよね？マドカ」

「この光学迷彩マントを羽織っているんだ。プロでもなければ気付きはせんさ・・・だが、帰ったら兄さん達からのお説教は覚悟せねばな」

「うっ……」

実はセラが抜け出した夜。それに気付いていたのはジエナスだけではなかった。蘭とマドカもセラを心配していたからこそ気付いたというべきか。そして、気付いてからの行動は迅速だった。アムジャケットの改修作業でヘトヘトな雪兎の目を盗み、蘭の分の光学迷彩マントを持ち出したマドカはフツケバインのステルスモードでこっそりセラの後をつけていたのだ。ちなみに蘭はマドカにお姫様抱っこされていた。

「せっかく敵陣に潜り込んだんだ。手土産は多めに越したことは無いだろう」
「そうだよね、私だった役に立つところ見せるんだから！」

こうして、二人の少女のスニーキングミッションが幕を開けた。

ミュネーゼ・タウンに入ったセラはパフユニットのローディであるジャックに導かれパフ達のところへと案内される。ジャックは警備態勢は万全と言っていたが、兎印の潜入装備とマドカの前には無力であった。素人の蘭が問題無く潜入出来た事からもお察しだろう。

「ここが奴らの本拠地か・・・随分と杜撰な警備だ」

「うん、私もマドカが元工作員だったって改めて実感してるよ」

その後、セラを追ってパフ達の屋敷に辿り着くと、パフとセラの会話を盗み聞く。パフはセラの兄・ジオナサンⅡメイナードとかつて同じユニットであり、セラの事はお見通しだったとの事。そして、キャンプリトルウイング崩壊後、怪我を負ったジュリと共にジノベゼに助けられ彼に与したそうだ。そしてジオナサンとの約束の為にセラを守ろうとしている。

「なるほど、そういう事か・・・」

「セラ、敵ならぬよね？」

「それはないだろう。だが、この後の選択次第ではセラは辛い思いをするかもしれん」

見たところ、セラの中には既に結論は出ているのだろう。それをどうパフに伝えるの

か、それを迷っているようにマドカは思えた。

「さて、ついでにシシー＝クロフトとやらの居場所も探っておくか」

「おー」

少女達のスニーキングミッションは続く。

蘭やマドカが潜入している間にも雪兎達はアムジャケットの改修を終え、ロシエツト達の罠を潜り抜けてランドバイザーを回収していた。

「何だろう、あの咬ませ犬……本気で何がしたいのかわからん」

「咬ませ犬って……最近のアイツを見てると確かにそんな風に見えるかもしれないが」
かつてのユニットの仲間を咬ませ犬と評され複雑なシーン。ランドバイザー回収作戦でもクレイモアがあると知るや否や雪兎は「NW：ネオウィザード」を用いて飛行しながらコンテナに近付き、ビーム攻撃は全て反射した上にそれで足元を崩されたロシエットはクレイモアの真っ只中に落ちて自爆……咬ませ犬と言われても仕方がなかった。

「今一番の問題はあの三人か……」

原作ではパフ達がJAを抜ける一因になるからとセラは放置していた雪兎だが、蘭とマドカまで潜入するとは思ってもしいなかった。

「そういえば保険を持たせたと行っていたが、一体何を持たせたんだ？」

「ん？ああ、こつちに来て自衛手段がいてと思ってISを一機持たせた」

「……」

さらつと告げられた言葉にシーンは改めて雪兎は間違いなくジョイの同類だと思つた。

「地下水路？」

ミュネーゼ・タウンへ侵入する経路を探っていた時、この古代の地下水路のデータがアップされたんだとか。

「罨だろ、絶対……」

「ああ、十中八九キャシーの罨だ」

それでもじっとしているよりはいいとジエナス達は行動することに。

「今回は俺も同行する。妹を迎えに行くのは兄の役目だからな」

「なら俺も連れて行ってくれ！」

そう願ったのは弾だった。やはり蘭の事が心配らしい。

「だが、お前はアムジャケットもISも無いんだろう？」

ただ連れて行くだけなら問題は無いのだが、今回は異だと分かっている為、戦闘は避けられないだろう。そんなところに民間人を連れて行くのはジェナス達としては出来れば避けたい。しかし、蘭を心配する彼の気持ちもわかるせいか頭ごなしに断ることが出来ない。

「なら、装備があればいいんだな？」

「えっ?」

そう言つて雪兎が出してきたのは全身装甲フルスキャンのISやアムジャケツトによく似たメカだった。

「なあ、これってもしかしてEOSか？」

Expected Operation Seeker外骨格攻性機動装略してEOS。前に一夏達も使用したことがある。ワードスーツの一種だ。しかし、EOSは稼働可能時間が短い上にパワーアシストがほぼ機能しない為、全身装甲は出来ないはずである。

「あんな玩具と一緒にすんなよ。コイツは元々向こうで俺が作つてた試作品をジョイと一緒に改修した特別製さ」

大きさ的にはモトバイザーを着けたアムジャケツト程で、聞けばISとの違いは単独飛行出来ない事とシールドエネルギーが無いくらいらしく。その辺の問題はアムテクノロジーの応用で克服したんだとか……本当に何作つてんだ、この二人。

「こいつを貸してやる。使い方は死ぬ気で覚えろ」

「恩に着るぜ、雪兎！」

実はこのパワースーツ「アーマードギア」はネオアムジャケット並みの性能があつたりするのだが……

「突入メンバーは俺、ジェナス、ラグナ、ダーク、タクト、雪兎、弾でいいんだな？」

シーンがそう確認した後、メンバーは水路へと足を踏み入れた。しばらくすると広場のような空間に出る。

「思ったより広い空間だな」

「やな感じだぜ」

その時、シーンが何かに気付いた。

「ちっ」

「ワッツ？」

「きたか」

すると、あちらこちらにある通路からビームが飛んでくる。

「バグツチか？」

「きたな！」

通路から現れたのはずんぐりとした身体を持つトロワトパス。シーン、ダーク、タク

トはそれぞれランドバイザー、ランスバイザー、バーストバイザーをブリガンディモードに変形させ、ジェナスもクロスバイザーを身に纏う。

「なるほど、新型バグか！」

「てえええい！」

いつものようにジェナスがトロワトパスに向かっていくが、トロワトパスは身体中にある棘のようなものをビットのように展開しそこからマルチレンジ攻撃を仕掛けてきた。

「何だ、こいつら!?!」

「かわせー！」

「その必要は無い。【NW：ネオウイザード】展開、いけ！グラスパー！」

しかし、すかさず雪兎がグラスパービットを展開し、誘導兵器無効化フィールドを形成する。

「助かった」

「本当にお前のISは何でもありだな……」

「よく来てくれたね。歓迎するよ」

そこにロシエット達が姿を現す。

「やはりロシエット達か……」

「フフフ・・・」

「またお前らか、ロシエット咬ませ犬」

「か、咬ませ犬だど!?!」

呆れたように呟く雪兎の言葉に激昂するロシエットだが。

「そうやってキャンキャン喚いてるところが犬っぽいつてんだよ!」

そんなロシエットに雪兎はビームハルパーで斬りかかる。

「くっ、相変わらず厄介な・・・」

トロワトパスの最大の特徴であるマルチレンジ攻撃を封じられ焦るロシエット達だが、それは雪兎にとって絶好の隙であった。

「シーン!」

「オツケー!」

グラスパービットのリフレクトモードとランドバイザーの高出力ビームの合わせ技が炸裂し、ロシエット達を無数のビームが四方八方から襲いかかる。

「オールレンジ攻撃ってのはこうやるんだよ」

「うわあ、えげつねえ・・・」

「タクトさん、今のうちに!」

「任せろ!ぶっぱなす!ぶっぱなす!ぶっぱなす!ぶっぱなす!」

その隙にバーストバイザーの大型ミサイルをトロワトパス達にぶちこみ撃破している。

「くっ、だがバーストバイザーのミサイルはそれでおしまいだろ？トロワトパスはまだまだ……」

エーリックが言葉を続けようとした、その時。バーストバイザーのミサイルコネクタに再びミサイルが装填される。実はバーストバイザーにもISの拡張領域の技術を応用し、すぐさまミサイルを再装填出来るように改修していたのだ。

「うそだろ!？」

「バーストバイザーはバーストバイザーだが、そいつはバーストバイザー改なのさー!」
「どつちが悪役かわかんねえな……つと!」

ダークもランスバイザーの槍の先端をドリルに改修したドリルランスバイザーでトロワトパスを次々撃破していく。

「いいねえ、やはりドリルは漢のロマンだ!」

ダークも若干キャラが壊れ始めている気がする。

「こいつら、あの短期間でこれだけの戦力を……」

「俺も忘れちゃ困るぜ!」

「ぐはっ!？」

KKを襲ったのは雪兎とジョイのコラボ装備「アーマードギア」を纏った弾の蹴りだ。

「音声認識にモーションアシストか・・・本当にコイツは思った通りに動くぜ」

「弾、ついでにアレをお見舞いしてやれ！」

「えっ？アレやんの？」

「虚さんにカッコいいとこ見せなくていいのか？」

「やってやんよ！」

(計算通り)

「コード・AGK！」

『承認！』

弾がそのコードを音声認識させると弾のアーマードギアが大きく跳び上がる。

「これを使う時はこう叫ぶのがお約束なんだとよ！究極！ゲシユペンスト・キイイイイ

イック!!」

そう、アーマードギアのモデルとなった機体はゲシユペンスト。それ故に当然ながら

この技も搭載していたのだ。※ちなみに叫ばないと発動しません。

「がはっ！」

その一撃は正に究極！直撃したKKはスーパーボールのように弾かれ水路に倒れ伏す。

「KK!?」

KKがやられたことに動揺するロシエットとエーリック、その隙をジェナス達も見逃さない。

「雪兎達ばつかにやらせてたまるか!はあっ!!」

「これでもくらいやがれ!」

「ぐああああ!!」

クロスバイザーのクローラートンファアとラグナのマルチジョイントガンの一撃がロシエットとエーリックを襲う。

「今のうちに行くぞ!」

「「「おう!」」」

ロシエット達を撃破し、トロワトパスを蹴散らした一同はジョイの見つけたデータを元に地下水路を駆け抜けていった。

86話 妹の決断と姉の選択 兎、お説教再び

雪兎達が水路を進行している頃、パフ達は水路の出口の広場に待機していた。そこでセラは改めてパフの真意を問う。

「パフ」

「何？」

「兄が今生きていたら私達をどう思うだろう？」

「どうって？」

「バグシーンの真実を何か知りたがっていた兄は」

セラの実際の兄・ジョナサンⅡメイナードはバグシーンの真実を求め、バグエリアと呼ばれるバグシーンの拠点と思われる場所に単身で侵入した。

「バグシーンはウイルコットが操っていたものよ」

だが、ジョナサンはおそらくバグシーンが人工的に産み出された存在であると知ったが為に行方不明となり、その後、遺体として発見された。

「そう、それはそうかもしれない。でも……」

「でも、何？」

「私は真実が知りたい」

セラはジェナスと共にファーストアムドライバー・ガンザルデイに会い、そして、バグシーンとアムドライバーの真実を知った。

「真実?・・・セラ、何か知っているの?」

「言えない、でも」

「何?」

「パフは何かを信じてる? 誰かを信じてる?」

「なんですって?」

「少なくとも私は、いえ、私達は誰の命令も聞かず、自分で考え、自分達で判断して行動している」

「これはピュアアムドライバーと呼ばれている全員に言える事だ。」

「何を言い出すの?」

「何故セラがこんな話をするのか、パフには分からなかった。」

「なら、何故ここにきたの?」

「それは・・・」

「私を信じてくれたからじゃないの?」

「パフはずっとそう思っていた。」

「パフ、パフみたいな人がどうして？」

だが、いくら命を救われたからといえどセラはやはりパフがJ Aに身を寄せている事が納得出来なかつた。

「貴女の、大切なジョナサンの妹。だから私にとつても妹と同じ」

「分かつてるよ、パフの気持ちは、でも！」

セラもパフの事は姉のように慕っていた。だからこそパフには戻ってきて欲しかつたのだ。

『パフ！ロシエット達が抜かれたわ！』

その時、通信でキャシーのヒステリックな叫び声が聞こえた。どうやらロシエット達が雪兎達にやられたようだ。

「了解、こちらで対処するわ」

元々、ロシエット達に期待していなかつた。パフはすぐに臨戦態勢を取る。

「どう思っているかしら、兄さんは」

「えっ？」

（でも……でも、私は……）

そこでセラが思い返したのは今までジェナス達と過ごしてきた日々だ。

（私は……）

その時、雪兎達が水路を抜けパフ達の前に姿を現す。パフはすぐさま気持ち切り替えジェナス達に銃口を向ける。

「ジェナ！ラグ！」

「その声はセラ!?!」

「何!?!」

「そういうことだったのね」

そこでパフは侵入者がジェナス達だと知る。そして、パフはジェナス達を射とうとするが、それをセラが阻む。

「射つなら私を先に射って!」

「セラ!?!」

これにはパフも動揺を隠せない。だが、ここで空気を読まない男が一人。

「あく、お取り込み中悪いんだけどさ、射たないんならこつちが射つぜ？パフ∥シャイニン」

いつの間にか「NJ：ネオイエーガー」を纏い、バスターライフル改を改修したネオバスターライフルをパフ達に向けていた。しかもチューブを接続しチャージ済みだ。

「こ、この熱量・・・ストームバイザーの比じゃない!?!」

「俺としてはその銃を下げた方がいいところだが、やるつてんなら容赦しねえぜ?」

「……わかったわ」

少し考えはしたが、パフはストームバイザーのライフルを下げる。

「パフ……」

パフと戦わずに済んだ為、セラは安堵の息を吐くが、雪兎はまだネオバスターライフルを構えたままだ。

「そいつは良かった……そういや、この水路つてもう使われてないんだよな？」

「え、ええ、それがどうかしたの？」

「なら、ぶつ壊しても問題無いよな？」

そう言つて雪兎はネオバスターライフルを水路の出口に向ける。

「待て〜!!」

そこに態勢を立て直したロシエット達が水路を通つて追つてきていた。

「あつ、ロシエット……」

その時、ジェナス達はこの後の展開が読めたのか、ロシエット達に同情した。そして合掌した。

「Fire♪」

雪兎が笑顔で放つたネオバスターライフルは無情にも逃げ場の無い水路にいたロシエット達を襲う。

「「えっ?」」

「お前らもやろうとしてた事だ。俺らの代わりにお前らが食らっとな」

「「ぎゃああああ!!」」

更にネオバスターライフルの威力に水路が持たず崩落、ロシエツト達はそのまま生き埋めにされるのだった。

「ロシエ、今回ばかりは俺もお前の事を咬ませ犬と呼ばれても擁護出来ない……」

「雪兎にかかれば完全に落ち要員だな、アイツら……」

「踏み台か? 踏み台だな! 踏み台乙!」

「ほんと容赦ねえな、アイツ……」

上からシーン、ラグナ、タクト、ダークのコメントである。

「……彼、いつもあんな感じなの?」

「うん」

「敵対すると情け容赦無しにボコボコにされて……何故かギャグになるんだよなあ。この前もクレイモア仕掛けてきたんだが、逆にロシエツトがそこに落とされて自爆してたし」

「「うわぁ……」」

「敵対しなくて正解だったな」

こちらは上からパフ、セラ、ジェナス、ジュリとジュネ、合流したジャックだ。

「あく、あのロシエットってやつ見ててなんか懐かしくなったと思ったら、いつぞやのワルガキそっくりだからか！特に性格が」

※ワルガキ↓三章一話で話題になった『雪兎の顔面にウシガエルをくっつけ、お返しに全裸で縛られ赤ペンキまみれで吊るされた』やつ。これに懲りずに何度か雪兎に突っ掛かったある意味で愚者勇者。

その後、セラの説得で協力してくれる事になったパフ達を交えてシシー救出の為の作

そして、パフの協力でミュネーゼ市街に入りマドカ達と合流するという作戦でいく事になった。

「……何？ シシーに逃げられた!? 何をやっているの!! あく!! ロシエツト達とも連絡は途絶えたままだし! パフ達は裏切るし! どうして私の思い通りにならないのよお!!」

その頃、シシーに逃げられたと知ったキャシーは悔しそうにハンカチを噛みながらシシー搜索の指揮を取るのだった。

87話 潜入、ミュネーゼ・タウン 兎、キャシーをおちよくる

雪兎達が地下水路を通っていた頃、マドカと蘭はシシーの監禁場所を突き止め、伝説の傭兵も愛用していた秘密兵器「ダンボール」で監禁場所であるホテルに潜入していた。「やはり潜入と言ったらダンボールだな」

「何で誰も不審に思わないんだろう……明らかに怪しいのに」
謎のダンボール万能説はこの世界でも有効らしい。

「あの部屋だな……いくぞ、蘭」

「うん」

そこからは光学迷彩マントで姿を隠し通気口から部屋へと侵入。監視カメラにクロ工特製のウィルスで偽の映像を流し、見張りはマドカが手刀、蘭が兎印のスタンガンで気絶させる。

「……えっ?」

シシーには彼らが突然倒れたように見えた為驚くが、肝が据わっているのか逃走経路の確認を始める。そんなシシーにマドカはマントを脱いで声をかける。

「シシー!! クロフトだな? とある人物達の依頼で貴様を救助に来た」

「えっ? 救助?」

「うん、ピユアアムドライバーの人達が貴女が捕まったって聞いてこっちに来てるの」

蘭もマントをとってマドカの説明の補足をする。

「ピユアアムドライバー!?! それって本当!?!」

「ああ、とりあえずここを脱出するぞ。いつまでもここにいては見張りに見つかる」

そこからはマドカにとつては簡単なものだった。予め探しておいた逃走ルートでホテルを抜け出すと(そのついでに兎印の嫌がらせグッズもばらまいて)、シシーの案内で迷路のようなダウンタウンの作業員のところに身を隠した。

一方、シシーの脱走に気付いたキャシーは鬼の形相でシシーを搜索するよう指示を飛ばしていた。

「警備は万全だったはず！どうやって脱走したというの!？」

だが、更なる不幸がキャシーを襲う。それは……

「きや、キャシー様！ホテル内の我々の設備が次々と動作不良を……」

「なんですって!？」

聞けばJAが設置していた通信機材などの電子機器がいきなりダウンしたらしい。

「早く原因を調べなさい!」

そう怒鳴り散らすキャシーを他所にキャシーの使っているモニターが落ち、原因の方がキャシーの前に現れる。

「キャシー様！あそこ!」

「えっ?」

そこにいたのは端末のケーブルをかじるハムスターのような何かだった。

「ね、ネズミイイイイ!!」

「い、いえ、あれはハムスターではないかと……」

「どつちでも大して変わらないじゃない!どちらも同じ齧齒類よ!」

ネズミに何かしらのトラウマでもあるのか取り乱し始めるキャシー。それを見てそいつは目をキラランツと光らせる。

「えっ?ちよつと待ちなさい!まさか、あなた・・・」

そいつが何を考えているのか直感的に察し後退りするキャシーだったが、時既に遅し。そいつはキャシーの胸元へと跳びかかる。

「きゆう・・・」

「きゃ、キャシー様!」

そいつに跳びかかられ気を失うキャシー。その後は何匹ものそいつらによってJAは甚大な被害を被り、その立て直しに時間がかかりシシー達をまんまと逃がしてしまうのだった。

「・・・あの、兄さん」

『マドカ、お説教は帰ってきてもからだ。で、勿論何か成果はあったんだろうな?』

ダウンタウンに逃げ延びたマドカ達はとりあえず雪兎に連絡をする事にしたのだが、やはり雪兎はお冠状態だった。

「は、はい! シシー・クロフトの身柄を確保し、蘭と三人でミュネーゼ市街にて潜伏中です!」

雪兎の声に震えながらもマドカは自身の得た成果を報告する。

「しかも、ニルギースが言っていた協力者はどうやら彼女の様です」

『『『な、何だつてええええええ!?!』』』

これは蘭が聞き出した事なのだが、シシーはニルギースが探していた工作員だったらしく、これを聞きあちらは驚愕していた。

『どのみちシシーは救出する必要があつたつて訳か・・・まあいい、身柄を確保しているんだつたら話は早い。こつちから迎えを出すからそのまま待機してろ』

「はい」

『今回の活躍に免じてお説教は一時間で勘弁してやる』

通信を切ると、マドカは目に見えて落ち込んでいた。

「ごめんね、マドカ。私が巻き込んだから……」

「いや、決めたのは私だ。それにこうしてシシーも救出出来たんだ……一時間くらい我慢する」

「私も一緒に怒られるから」

「蘭……」

あの冷酷無比だったマドカが変わったものだ。そして、その原因とも言える蘭が今回もシシーの運命を変える。

「ところでシシー」

「何?」

「多分、この後街を脱出する事になるけど、やり残した事とか無い?しばらく帰って来れないと思うから」

「だよね……あつ、施設の人達にお別れを言っておきたいかな?」

「施設?」

「うん、孤児の子達の面倒をみてくれる施設があつてね。日頃お世話になってたか

ら・・・それと、そこにピースと一緒に預かった物があるの」

そう、本来なら一度ミュネーゼ・タウンを出てからシシーの我が儘で戻ってくる一因となつた出来事なのだが、蘭が脱出前にそれを上手く潰してしまつたのだ・・・本当にこの世界の蘭はフラグクラッシャーの才能があるのかもしれない。

「今日はもう遅い。兄さん達と合流してからにしよう。一応、今のうちに連絡はしておく」

シシーから聞いた事をメールで雪兔に報せると三人は一時の休息を取るのであった。

翌日の朝。未だに混乱が続くキャシー達を他所に雪兔達はミュネーゼ市街へと潜入

していた。検問は余裕で通過している。

「潜入成功だな・・・本当にJ A仕事してないな」

「これを見破れっていう方が無茶だと思うよ、僕は」

雪兎達が潜入に用いたのはクレープの移動販売車と束がハッキングして偽造した通行許可証。そして、ウィッグと網膜認証付きカラコン装備というやたら手の込んだ偽装を施したものだ。ちなみに潜入メンバーは雪兎、シャルロット、弾、ラグナ、セラ、シーンの六名。全員変装済みだ。

「声帯まで変えられるなんて・・・本当に前と束博士は凄いな」

声は喉の辺りに目立たない特殊なシールを貼ることで声を変化させれる某怪盗が愛用してそうな一品を再現したものだ。

「とりあえず、マドカとの合流ポイントに向かう。その後、シシーの言う預かり物とやらを回収してからジェナス達の陽動の隙を突いて脱出する」

「でも、その預かり物はどうやって持ち帰るの？」

「こつちには storage って便利アイテムがあるんでな。こいつの拡張領域にならバイザーくらいなら十は余裕で持ち出せるぜ？」

「本当に住む世界が違いと常識も通じないのね」

「あはは・・・雪兎と束さんはこつちでも非常識の部類だよ」

セラの疑問は雪兔の非常識アイテムで解決。世界を越えても兎師弟の非常識っぷりは健在のようだ。

「さて、そろそろ合流ポイントだ」

合流ポイントに着くとそこにはマドカ、蘭、シシーの三人が待っていた。

「君がシシーか？」

「は、はい」

「話はマドカから聞いている。その施設に案内してくれるか？」

「うん！」

シシーの案内でやってきたのは市街から少し離れた丘にある児童保護施設。そこに住まう子供達や管理人の女性・ベティはシシーがJAに捕らえられたと聞いて心配していたそうだ。

「兄ちゃんのクレープうまつ！」

「こんなの初めて食べる」

そんな子供達に雪兔はクレープを振る舞っていた。道中でも、偽装工作を兼ねて市街の市民に売ったり、JAに陣中見舞いとして振る舞っていたが、何れも大盛況だった。おかげで疑われる事なく潜入出来たのだから食の力は侮れない。

「クレープって甘いだけだと思ってた……」

「^{この}世界には惣菜クレープは広まってないみたいだね」

シシーも惣菜クレープ（クレープ・サレとも言い、日本人に一般的なクレープはクレープ・シユクレと言う）という存在に驚いている。

「日本人の食への探究心は本当に尊敬するよ……」

元々クレープはフランス北西部ブルターニュが発祥で、元になったとはそば粉で作られた薄いパンケーキ（ガレット）である。現在のような生クリームや果物を巻くクレープは1977年に原宿で誕生したものでフランス発祥ではないらしい。世界各国の料理を日本風に魔改造^{アレンジ}するのはもはや日本のお家芸と言ってもいいだろう。あんかけスパや肉じゃがなどがいい例だ。

「それでね、ベティさん……」

その後、シシーはベティにしばらくミュネーゼを離れなければならない事を告げ、施設の地下倉庫に隠してあった二つのコンテナを雪兎達に預ける。

「こいつはバイザーじゃねえか！しかもおニユウの……」

「ピースを私に預けた人がJAには渡せないって言ってたんだ」

「なるほどな……とりあえずこいつはstorageに入れておくか」

そう言ううと雪兎はそのバイザーをコンテナごとstorageに格納する。

「何度見てもその電子変換だっけか？その技術には驚かされるぜ」

「だろうな。でも、こいつを応用すればそのうちにアムジャケットもISみたいに装置無しで装着出来るようになるかもな」

「ん？それくらいならすぐに出来るぞ？」

「……………」

さらつとそう告げる雪兎にラグナとシーンの二人は揃って絶句する。

「アムジャケットのIS化か…………意外に面白いかもしれんな」

「ほんと、こいつが敵じゃなくてよかったぜ」

「ああ、本当に味方でよかった……………」

雪兎はこの世界でも兎の皮を被った災害の二つ名通り敵に災いを、味方に恵みをもたらしていた。

「本当にあっさり脱出出来ちゃった……」

施設の皆と別れた後、雪兎達は行きと同様に帰りもクレープを売りながら何事も無かったかのようにミュネーゼを脱出していた。むしろ最後の検問所では惣菜クレープを振る舞って感謝されたくらいだ。キャシーがその事を知ったら激オコ案件だ。

「こういうのは焦って早く脱出しようとするからバレるのさ。逆にこれくらい堂々としてりゃ怪しまれないのさ」

「はは、こりゃ一本取られたな」

雪兎の言い分にシーンはなるほどと納得する。

「それに、ちよつと置き土産も置いてきたしな」

「今度は何やらかした？」

「なに、アイツらの拠点にハムスター型の破壊工作ロボ撒いてきただけさ」

そう、キャシー達を混乱の渦に叩き込んだあのハムスターらしきものは雪兎特製の破壊工作ロボだったのだ。しかも、このロボは捕まるか機能停止するとシユールストレミング並みの悪臭を放つ液体をばら撒いて自爆するという厄介極まりない機能を持つ嫌がらせにはもってこいのものだ。

「シユールストレミングって、えげつないにも程があるだろ!」

阿鼻叫喚としているキャシー達の姿がラグナ達には容易に想像出来た。

「ほんと、雪兎は相変わらずだな……」

「あはははは……」

そんなこんなでシシー救出作戦は呆気なく終了した。

その頃、ロシエツト達は……

「ところで、俺達はいつになったらここから出られるんだ?」

「さあ?」

「覚えてやがれええええええ!!」

未だに雪兎に崩落させられた地下水路に閉じ込められていた。

88話 復活のDと新バイザー 兎、色々と企む

無事にシシーを救出し、ピースを手にした雪兎達。しかし、ピースはガン||ザルデイの持つ半分と残りの半分のはずが、協力者が何を危惧したのかその半分以上を更に三等分して分散させたらしい。そして、次のピースはムーロンという場所にあるらしく、そこに行く為に一度ナムールリバーのキュプロクスを回収する事になったのだが……

「ナムールリバーが落ちたか」

そう、ナムールリバーはつい先日JAの手に落ちたのだ。そのせいでナムールリバーに隠したキュプロクスの回収が困難になってしまったのだ。

「フライング・ラビットがあるからどうしても必要って訳じゃないが、やっぱり勿体ないな」

「そうだな、数人で取りにいつてこの大容量 storage で回収するか」

「何でもありだな、お前達は……」

という訳で、道案内のセラに加えて雪兎、シャルロット、簪、聖でキュプロクスの回収に向かうことになった。この編成の理由は上空から一気に移動する為で、機動力重視の装備を持つ者が選ばれた。雪兎とシャルロットは高機動パック〔NJ:ネオイエー

「ガー」、簪は高機動パッケージ【暴風】、聖は高機動バイザーボード【ソニックレイダー】、セラはエアバイザーにパフが残っていたストームバイザーもある。だが、ここでもう二人この作戦に参加したいという者が現れた。

「俺も一緒に連れて行ってくれないか？」

「すまない、私も同行させてくれ」

それはシーンとニルギースだった。

「また珍しいコンビだな？ ついてくるのは構わないが、装備がなあ……」

ストームバイザーを貸し出せばシーンかニルギースのどちらかは大丈夫なのだが、こういう時ジャイロバイザーが無いのが悔やまれる。理由はそれぞれ、シーンは興味から、ニルギースは協力者への連絡とのこと。

「ん？ そういや実験的に作ってたアレがあったな」

そう言って雪兎が自身の *storage* から量子変換して呼び出したのはモトバイザーとストームバイザーを足して二で割ったようなデザインの灰色のバイザーだった。

「こいつは？」

「ある実験で作ってたバイザーでジェットバイザー【ペガサス】だ。まだ未完成ではあるが、ちゃんとブリガンデイモードにもなれるぞ」

「ペガサス……天馬か、それにこの機構は……中々に面白い発想をする」

ニルギースも兄がアムテクノロジの技師あり、その研究データを使って自身のアムジャケツトやバグシオンを作らせていたからか雪兎が未完成だと言った機構が何であるか気付いたらしい。

「ならこいつはあんたに預けるよ、ニルギース」

「承知した」

その結果シオンがストームバイザーを借りる事になり、他にも念のため改修したエツジバイザーとランドバイザーを storage に格納して一同はキユプロクスのあるナムールリバーの外れを目指す。

「うむ、これはいいな」

ナムールリバー周辺の上空にてジェットバイザーを乗り回すニルギースはその乗り心地に感心していた。

「モトバイザーと同じバイクみたいなバイザーだな」

「発想的にはエアバイクが元だからな」

しかも、このジェットバイザーは搭乗者のアムジャケットのカラーに合わせてカラーリングが変化するというオマケ機能やチューブチャージシステム対応だったりと地味に高性能なバイザーだった。

「ニルギースのはまだネオアムジャケットじゃないからチューブチャージシステムは使えないが、それでもストームバイザー並みの性能は保証するぜ」

「またとんでもないものを作ったな……」

「そろそろナムール周辺か」

既にナムールリバー周辺はJ A達が警戒網を敷いているも、雪兎達は高度をとって移動しているため楽々通過し、キュプロクスのある滝までやってきた。

「こいつがキュプロクスか……」

キュプロクスをstorageに格納し、ニルギースは地下組織に連絡を取り、手配していた補給物資を受け取っていた。これもstorageがあつた為、多めに手配出

来ていた。

「これで補給物資は大丈夫だな」

「じゃあ、早いとこフライング・ラビットに戻るか」

警戒網を抜け、陽動の為に別行動しているフライング・ラビットに合流しようとは合流ポイントへ移動を開始する。警戒網を越えてからはエネルギーの節約の為に雪兔が作成した小型のホバートレーラーで移動していた。その途中、大きめの川を通りかかった時だった。

「この反応は……アムエネルギー、JAか？」

追ってきたのは黒いJA製のトパスを引き連れた黄色の装甲を持つアムドライバーだった。

「見つけたぞ、裏切り者にシーンIIピアース、それと未知の技術を使う小僧共か」

「お前は!？」

「デイグラーズか!」

その正体はかつてニルギース達と共にジェナス達を苦しめたアムドライバー・ガンダリッドIIデイグラーズだった。

「死んだはずじゃ」

「ああいう奴に限って中々死なないんだよなあ」

「雪兎、エッジバイザーを!」

「ストーム、エッジ、ジェットバイザーセット」

逃げ切るのは困難と判断しシーン達はそれぞれバイザーをトレーラーから出撃させ、シャルロット達もISを展開する。

「いけっ!」

対するデイグラーズもトパスを迎撃に向かわせ、自身も肩のハンマーギアとアームのエクステンションクロー、ハンマーシャフトを組み合わせてギガンデスハンマーにする

とシーン達を迎え討つ。

「まずは裏切り者からだ！」

「ジェットバイザー、お前の力を見せてみる！」

パワーアップしたデイグラーズに対してニルギースは原作では一度も行わなかったバイザーのブリガンデイモードを使用するという行動でギガンデスハンマーの一撃を凌いでみせた。

「ぬう！旧型のアムジャケットで俺のネオアムジャケットの攻撃を凌いだだと!？」

デイグラーズが驚くのも無理は無い。本来ならば通常のアムジャケット装備ではいくら強力なバイザーを装備してもネオアムジャケットとは勝負にならない性能差が存在する。かつてシーンもエッジバイザーを装備していながらネオアムジャケットの口シエツトに圧倒されている。しかし、ニルギースはいくら通常のアムジャケットより強力なアムジャケットといえど出力的にはネオアムジャケットに大きく劣るはずなので、ニルギースはチューブを繋いでいるギガンデスハンマーを受け止めている。実はジェットバイザーにはISのパワーアシストシステムを組み込んでおり、ネオアムジャケットに負けないパワーを発揮出来るのだ。

「驚くのはまだ早いで、デイグラーズ」

「・・・何、だと?」

そう、通常のアムジャケットでこの出力なのだ。つまり……

「こうしたらどうなるのかくらいお前でも判るだろう？ デイグラーズ」

例えば『他からチューブチャージしてもらえれば』どうなるのか？ それは簡単な事だった。

「シーン＝ピアース!?! いつの間に!?!」

いつの間にかニルギースの背後にいたシーンがジェットパイザーのチューブ接続部に自分のネオアムジャケットのチューブを接続していたのだ。

「はあああああつ!!」

「ぐああああ!?!」

そのパワーは容易くデイグラーズを弾き飛ばしトパス達のと真ん中まで飛ばされてしまう。

「今だー!」

そこへシャルロット、簪、聖の三名（重複装備G、「白雷」、シャープガンナー装備）による集中攻撃を受け、トパスは全滅、デイグラーズもネオアムジャケットをポロポロにされながら何処その悪役三人組のように夕暮れ空の星にされる。

「くっ、覚えていろお〜!」

「残念、無念、また来週〜……やなかんじ〜、ネオケケツ」

「なんでそのセリフ知ってんだよ……ってか混ざってるし」
やられ際のネオケケの台詞につつまずにはいられない雪鬼なのであった。

89話 頑固親父とニルギースの過去 兎、ガン＝ザルディに会う

デイグラーズを退け、何とかフライング・ラビットに合流した雪兎達。ナムールリバー周辺で補給物資は受け取ったが、ムーロンに向かう前にもう一度街に寄っておこうということのでフライング・ラビットを別の場所に待機させ、買い出し班が中型のトラックで食糧等を買に行く事になった。そして、肝心なフライング・ラビットの待機場所を探している時に雪兎は辺りの地形を見てある事に気付いた。

(あれ?この辺りって29話のワット＝ジョバンニがいる町の辺じゃ・・・)

ワット＝ジョバンニ。道具を大事にしないシティのアムドライバーを嫌い、娘と共に人気の少ない町に工場を構える頑固親父のだが、その腕前は第一級戦略兵器技術者という資格を持つ超一流と言つていい技術者だ。原作ではダークとタクトの二人が彼に気に入られてモノクルバイザーを譲渡されるのだが・・・

「なあ、この町はどうだ?」

「うむ、JAの侵攻で人気の無くなった町か・・・確かに隠れるのには打つてつけどな」
隠し場所も見つかり、買い出し班の一夏、箒、鈴、セシリア、ラウラ、ラグナ、シシー

と分かれた雪兎達は早速その町に向かう事に。だが、そんな中、浮かない顔をしている人物がいた。

「どうしたんだ、ニルギース」

「……少し、気になる事があつてな」

（そういや、ガン||ザルデイに疑問を持ち始めたのつてこの頃か。となると、そろそろ……）

そう、ニルギースはピースが三つに分けられていた事などガン||ザルデイが伏せていた情報からガン||ザルデイの目的を疑問視し始めていた。

「すまないが私達もしばらく別行動をさせてもらう」

「えっ？ 一体何処へ？」

「ガン||ザルデイのところだ」

故にニルギースはガン||ザルデイの真意を確かめるべく彼に会いに行く事にしたのだ。

「ジエナス、お前も来るか？」

「えっ？」

「ジエナス、カオニカイテアル」

シャシャの言う通りジエナスの顔は「俺も行きたい！」と書いてあると思えるくらい

分かり易かった。

「あと、雪兎。お前にも来てもらいたい」

「俺も?」

「ああ。少し気掛かりな事があつてな。付いて来てもらえると助かる」

「どうやら先日的一件で雪兎はニルギースの信用を得たようだ。それにガン=ザルディに対して第三者からの意見も欲しいのだろう。」

「……そうだな。俺も一度会つておきたいとは思つてたから同行させてもらおうよ」

「一技師としてワット=ジヨバンニに会えないのは少し残念ではあつたが、敵対する前のガン=ザルディと接触出来る貴重な機会を逃すまいと、雪兎はニルギースの要請を承諾するのだった。」

「雪兎、気を付けてね」

「ああ、ちよつとラスボスの面を拝んでくるわ」

ガンⅡザルデイとは後にゼアムの利用法でジェナス達は対立することになり、アムドライバーという物語のラスボスポジションとなる存在だ。それを雪兎や簪から聞かされたシャルロットは「自分も付いて行く」と言ったのだが、もう一つこの後に起こる出来事への備えとしてシャルロットには残つてほしいと雪兎は言う。その出来事とは先日仲間になったシシーがロシエットの凶弾に倒れるというもの。また、死を免れたエリックが物語の修正力で原作と同じくセラに殺される可能性もある。それらを回避するにはシャルロット達の力が必要になると雪兎は踏んでいた。

「マドカ達もセラとシシーを頼む」

「任せてくれ、兄さん」

（何処の誰が俺達をこの世界に招いたかは知らないが、俺が関わる以上、ジェナス達は誰一人欠けさせねえ）

そんな事を考えつつも雪兎はニルギース、シャシャ、ジェナスと共にガンⅡザルデイが潜伏している街へと向かった。

「うーん！」

フライイング・ラビットが目的の町に到着すると、これまで異世界転移した原因と帰る方法を探るべく食事時以外研究室に引きこもっていた束が珍しく研究室から出てきた。

「束か、何か判ったのか？」

「あつ、ちーちゃん。うん、やっぱり原因はあの重力場で間違いないよ。というか、重力場はどちらかと言うと副産物って言った方が正しいね」

「どういふことだ？」

「あの重力場の中心部の空間が歪んでてね。その歪みつてのがどうも世界の境界線に

穴を開けちゃってたんだ。それで、その歪みに世界の修正力が働いて直そうとして出来たのがあの重力場だったのさ！私達はその直そうとする修正力に巻き込まれたつてことだね」

「巻き込まれた、か……しかし、あれは明らかに我々を吸い寄せていたように思えたが」

（それに關してはおおよそ見当がついてるんだけどねえ、ゆーくんも多分気付いてるよね？）

その時束が思い浮かべたのは興味深く理解のある弟子の存在だ。

「あつ、元の世界に帰る方法だけど、もう一度あの重力場みたいな歪みに飛び込めば私達が本来いるはずの世界に帰してくれるはずだよ」

「それも修正力とやらの力か……しかし、その歪みとやらはそんな簡単に発生するものなのか？」

「それに関しては心配要らないと思うよ？ゼアムとか言ったっけ？その膨大なエネルギーと束さんにかかれれば歪みの一つや二つ簡単に作れるよ」

「つまりはこのまま彼らに協力し続ける事が帰還への最善策という訳か」

さらりととんでもないことを呟く束に呆れつつも色々とかささないよう見張ろうと決意する千冬だったが……

「嬢ちゃんは話が判るじゃねえか！」

「ワットさんこそ、この束さんについてこれる人が我が弟子以外にいないとは思わなかったよ」

何故か意気投合してしまった束とワットを止めるのは千冬をもつても困難な事であった。

「まさかあのバカと会話が成立する人間がいるとはな・・・」

「お姉さんも苦労してんな」

苦労する友人と親を持つ者同士として千冬はワットの娘のビスに同情されるのだった。

「ここにザルデイさんが……」

ニルギースに連れられて雪兎達がやってきたのはとある港町。その一角にあるホテルが待ち合わせの場所らしく、そのホテルのフロントでガン||ザルデイを待つ事に。しかし、一時間程待ったがガン||ザルデイは一向に姿を見せない。すると、ニルギースの持つ端末が鳴る。

『私だ』

「ガン||ザルデイー!」

連絡してきたのは待ち人であるガン||ザルデイだった。

『待ち合わせの場所には着いたようだ。では、次は町外れの工場跡に向かってくれ』

それだけ言うとガン||ザルデイは通信を切ってしまった。

「随分と疑り深いみたいだな、ガン||ザルデイは」

「ガン||ザルデイ、オビエテル」

「怯える、か……評議会やJAを警戒するのは判るが、俺達すら完全には信用してないって感じだな」

「……」

雪兎がそう呟くとニルギースは無言でホテルを出ていく。

「ニルギース？」

そんなニルギースにジェナスはいつもとは違った印象を持った。

ニルギースの運転でガン||ザルディの指定した工場跡に向かう雪兎達。そんな中、ニルギースはガン||ザルディへの不信と自身の過去を口にした。イヴァン||ニルギースの兄・カペリ||ニルギースは当時は知らされていなかったがアムテクノロジーの研究者で、ガン||ザルディはその同僚だった。兄の紹介でガン||ザルディと出会ったイヴァンは研究で留守にしがちなカペリに代わって自分の世話をしてくれるガン||ザルディをもう一人の兄のように慕っていた。その後、バグシーンが現れカペリは家に帰ってこなくなつた。ガン||ザルディが言うには研究が忙しいのだと。それからしばらくしてガ

ンⅡザルデイがアムドライバーとして表舞台に登場する。そこでイヴァンはカペリ達の研究がアムテクノロジーに関するものであったと知つたらしい。当然アムドライバーに憧れを抱くイヴァンだったがその一年後、カペリが突然家に帰つてきたところで全ては一変する。当時の政府はアムテクノロジーの独占を考えカペリ達研究者を次々と消しており、カペリもその命を狙われ逃げてきたのだと言う。しかし、すぐに追手が家の外に現れてカペリを射殺。カペリから研究データと逃げ延びた研究者について記されたデータチップを託されたイヴァンは何とか逃げ延び、その前にガンⅡザルデイが姿を現した。ガンⅡザルデイも真実を知る者として命を狙われる立場にあり、姿を隠さねばならないと告げ、一緒に連れて行って欲しいと頼むイヴァンに「アムドライバーは道化だ」と言い、「ここを頼れ」と何処かの連絡先の書かれたメモを渡して去つていったのだ。

「・・・その後、逃げ延びた研究者達に独自に研究を続けさせジノベゼに接触。そこからはジェナスの知る通りだ」

連邦評議会議長・ウィルコットの失脚を狙うジノベゼはイヴァンのもたらした「アムドライバーとバグシンの戦いはウィルコットの自作自演」という情報を得てJAを組織。しかし、イヴァン達の「アムドライバーが道化であるという真実を公表する」という目的とジノベゼのやり方は食い違い始め、ジノベゼに裏切られたイヴァンはジェナス

達に導かれるようにガン＝ザルディと再会し、ゼアムの事を知った。

「何故ゼアムのピースが三つある事を黙っていたのか？ピースを揃えゼアムが完成した時、ガン＝ザルディはどうやって争いを止めるつもりなのか？ガン＝ザルディもアムテクノロジーを利用しようとしている一人ではないのか？そんな気がしてならないのだ」

「ニルギース……」

「いいのか？そんな話をジエナスはともかく俺にまで聞かせて？」

「ああ、お前達二人には聞いておいて欲しかった」

そうこうしている間に工場跡に到着する。

「お待ちしておりました」

「オリヴィエさん！」

そこで待つていたのはガン＝ザルディのローディを務めていたデューク＝オリヴィエだった。

「お久しぶりですなあ。そして、そちらの方はお初にお目にかかりますな。私はデューク＝オリヴィエと申します」

「天野雪兎です」

そのオリヴィエの運転で四人はガン＝ザルディの待つ空港にあるジエット機の前へと案内された。

「私に話とは何かね？」

そして、ジェット機の中からガン||ザルデイが姿を現した。

90話 真実の行方と恋の行方 兎、ガン=ザルディと話す

ガン=ザルディ。ファーストアムドライバーと呼ばれ、数多くのバグシーンを葬ってきた伝説のアムドライバー。そして、アムドライバーとバグシーンの真実を知る男。

「おや？ 見慣れない顔がいるようだが？」

ニルギースやジェナスを見回し、雪兎の姿を見つけるとガン=ザルディはニルギースに訊ねる。

「雪兎、我々の協力者だ」

「なるほど、彼が例の未知のパワードスーツを使う者達か」

「随分と通る耳をお持ちで」

「そうでなければ今の今まで生き長らえていないさ」

雪兎の言葉にそう皮肉で返すとガン=ザルディはニルギースへと向き直る。

「それで、聞きたいこととは何だね？」

「もういい！ 何故ピースが三つある事を黙っていたのか？ 完成させたゼアムをどう使うつもりなのか？ 聞くつもりだったが一」

「そんじゃあ、俺に質問させてくれ」

ニルギースが会話を断とうとしたその時、雪兔がニルギースの言葉を遮る。

「雪兔？」

「何かね？」

そんな雪兔に興味を持ったのかガン||ザルデイは質問を許した。

「ガン||ザルデイ、あんたにとってアムドライバーとは何だ？」

所変わって買い出しに出た一夏達はというと・・・

「えーっと、ここで買う物はと・・・」

「一夏、これはいくつ買うんだったか？」

「箒、それは五つだ」

ラグナ・シシーの二人とは別々に買い物をしていた。シシーにお熱なラグナに一夏達のが気を利かせたのだ。分担は食品の目利きが出来る一夏がいる一夏達が食品関係、その他の雑貨系をラグナ達にという感じだ。なお、セシリアは一夏の監視下の元カート荷物番だ。これまでのあれこれでこと料理については食べられるレベルにはなったものの、一夏達の信頼は勝ち得ていないのだ。

「セシリア、今回は予算が決まってるから余計な物は一切買わないからな？」

「わ、わかっていますわ、一夏さん。私だってそれくらいは弁えていますわ！」

「信じてあげたいけど、あんたは実績がね・・・一夏、これでよかった？」

「流石だな、鈴。うん、これなら満足いく料理が出来そうだ」

失った信頼は簡単には取り戻せない。セシリアはこの時程その言葉の意味を実感した事がなかった。そして改めてもつとちゃんとした料理を作れるようになろうと涙ながら決意するのだった。

「ところでラウレリア達は上手くいっているのだろうか？」

「大丈夫なんじゃないかな？シシーもラグナの事は気になってるみたいだったし」

ラグナはその性格とは裏腹にシシーに対しては真剣に想っているようで、シシー加入

後は何かと彼女を気にかけていたりしており、そんなラグナにシシーも惹かれていたような感じを一夏達は感じ取っていた。

「割と似た者同士って感じもするし、あの二人が仲良くしてるのを見ても嫌な感じはないからな……」

「確かに……あの二人はそんな感じがするな」

「聖に聞いた話ではあの二人は両思いだそうだ」

「そうなのか？」

「ああ、だが……」

その後、シシーがどうなったのかはラウラの表情を見れば想像は容易だろう。

「なるほど、雪兎があのだ二人を気にかけてくれと言っていたのはそういう事か」

「それにしても何でそれを聖が知ってたわけ？」

「うむ、どうもウエーブライダーのバイザーボードはジェナス達の使っているバイザーがモデルなんだとか。それでその扱いを学ぶ教材としてDVDを貸してもらったらしい」

まさかアムドライバーの世界に跳ばされるとは雪兎も思っていなかっただろう。しかし、この情報は非常に有益だ。

「ってことは、雪兎がニルギース達と行く前に大急ぎで完成させてたアレって……」

「おそらくはその展開を打破する為の何かだろう」

「確かにアイツがそんなシナリオ通りの展開なんて認める訳無いわよね……」

「絶対にそんな展開ぶち壊しますわね、雪兔さんなら」

「姉さんと一緒に亡国機業もあれだけ手玉に取っていたアイツならやりかねん……というか、今までもそういう事をやっていたと聞かされても私はもう驚かんぞ」

「箒がさりげに核心をついていたが他の面々も「雪兔なら……」と思っている。案外雪兎が真実を打ち明ける日も早く訪れるかもしれない。

一方、別行動をしていたラグナとシシーは買い物を終えた後、シシーの夢が学校の先

生だったことを打ち明けられたり、子供達に混ざってサッカーをしたり、二人でボートに乗ったり、公園のブランコに乗ってラグナがシシーと同じ夢を見たいと語ったり、と、いい雰囲気だったが、そこに突然ジョイからの通信が入る。

「はあ？合流ポイントの変更？」

『はいッス。どこから嗅ぎ付けたのか町にディグラーズが攻めてきて応戦。その場はダークさん達や千冬さん達が何とかしてくれたんスけど、潜伏先を変えなきゃいけないって……』

聞けば例によって雪兎と離れ離れになってしまった事でストレスの溜まっていたシャルロットとたまには運動しなくてはと出撃した千冬が獅子奮迅の活躍だったらしい。

『今度はロシエツト達が大量のバグツチを連れて追ってきてて』

「わかった。一夏達と合流してすぐに戻る！」

楽しい一時は終わり、新たな戦いの幕が上がる。

「私にとってアムドライバーとは何か？か……私にとってアムドライバーとは【道化】だよ」

雪兎の問いにガン＝ザルディは少し間を空けてそう答えた。

「【道化】か……なるほど、バグシーンとの茶番にウイルコットとジノベゼの対立。確かに市民と共に踊らされ続けていたアムドライバーを皮肉った表現をするならその言葉が適切だな」

ガン＝ザルディの言葉に納得する雪兎だったが、「だが」と言葉を続ける。

「俺がこいつらを見てきて思ったのは【希望】だ。確かにバグシーンとアムドライバーはウイルコットの操り人形だった。だけど、最初にあんたの活躍を目にした人々がアムドライバーの活躍に【希望】を持ったのは嘘偽りの無い事実だろ？それと同じように俺はジェナス達ならこの終わりの見えない戦いに決着をつけてくれる。俺はそんな人々の【希望】を見た」

「雪兎……」

「俺達が使うI Sも元々は見果てぬ宇宙を夢見て作られた【希望】だ。あんたやカペリつて人も人同士の争いの無い世界っていう【希望】をアムドライバーに託してたんじやなかったのか？」

「……」

雪兎の思いがけない言葉にガンⅡザルデイは口を閉ざす。

「雪兎が私の言いたかった事をほとんど言ってくれた。だからこれだけ言っておく……ゼアムの使い道は私と彼らで決める」

「……ゼアムのピースの半分は私が持っていることを忘れない事だ。それと雪兎といったかな？君と話せて良かった」

「そりゃあ光栄だな」

「ジェナス君も使命を忘れないでくれたまえ」

そう告げるとガンⅡザルデイは小型のプライベートジェットで飛び立っていった。

「よかったのか？あんなこと言って」

「構わんさ、帰るべき場所を失っただけだ」

「そんなこと無いさ。俺達はもう仲間なんだから」

「アムドライバー、アムドライバーヲホロボスノトナカマ。オカシイ」

かつては敵対していたジェナスとニルギース。それを疑問に思いながらも嬉しそう

にするシャシャ。

「行く場所がなけりや全部終わってから俺達の世界に来るか？ちよつと人手がいる事してるもんでな、イヴァンなら歓迎するぜ」

「イヴァン？どうしていきなり名前呼びに？」

突然イヴァンの呼び方を改めた雪兎にジェナスが訊ねると。

「仲間なのにいつまでもフアミリーネーム呼びつてもおかしいだろ？」

と、割と真面目な答えが返ってきた。

「なるほどな……では行く当てがなくなったら頼らせてもらおうとしよう」

「それじゃあ、お喋りはこの辺で終わりにするとしようか……JAの連中が近付いてきてる」

「ちっ！全員車に乗れ！」

イヴァンの指示で車に乗り込むジェナスとシャシャ。しかし、雪兎は乗ろうとしない。

「雪兎は乗らないのか!？」

「一人くらい迎撃に出る必要あるだろう？今満足な装備が使えるのは俺一人。なら俺が担当するのも当然だろ？」

そう言つて雪兎は雪華を展開する。

「すまない、頼む」

「任せろ」

「いたぞー！」

丁度その時、JAのアムドライバー達か雪兎達の元へと殺到してきた。

「さてと、ド派手なカーチェイスといこうか！」

91話 凶弾の行方と目覚めた獣 兎、逃走中

J Aとのカーチェイスは町中ということもあつて銃器は使わず車体を使った体当たりが主になったが、そこに雪兎が雪華で割り込んだためにJ Aの乗る車が一方的にダメージを追っていた。しかし、町を出るとJ Aは増援を呼び寄せたため、雪兎とイヴァンは目眩ましをしている間にジェナスとシャシャを車から下ろし囿になることに。ジェナス達には光学迷彩マントを装備させたので無事に逃げおおせただろう。

「熱烈な歓迎だな、イヴァン」

「そうだな。しかし、良かったのか？」

「何がだ？」

「わざわざこちらに残らずジェナス達と先に戻っても良かったのだぞ？」

「どうやらイヴァンは囿に雪兎を付き合わせた事を悔いているようだ。」

「それに、お前に何かあつたらデユノアに何と言われるか……」

「……埋め合わせはするさ」

雪兎もそこまでは考えていなかったようだ。二人がこんな会話をする余裕があるのは雪兎が使っている装備が【NF：ネオフォートレス】と【NW：ネオウイザード】で

あるからだ。バグシーンはグラスパーで無力化。JAの攻撃は【NF：ネオフオートレス】の装甲の前には無力。というか、雪兎が反撃すれば一瞬で片付きそうなのだがジェナス達を逃がす囷の為に反撃していないだけだ。

「で？どうするよ、イヴァン」

「できればもう少し引寄せておきたいものだが・・・せめて、私にもアムジャケットがあれば」

「・・・アムジャケットがあればいいんだな？」

そう言うのと、雪兎は竜が剣を抱える意匠のペンダントを取り出す。

「それは？」

「こんなこともあるうかと、ってやつだ。ISの技術を流用して作ったイヴァン用のネオアムジャケットとき。この前、シーンとラグナが話してたのを参考に作ってみた瞬間装着仕様」

「・・・お前というやつはこちらの想像を容易く凌駕するな」

「非常識とはよく言われる。使い方は判るな？」

「ああ」

「そんじゃあ」

「派手にいくとしようか」

車を乗り捨てネオアムジャケットを纏ったイヴァンと【NB：ネオブレイド】＋【NJ：ネオイェーガー】に装甲切換した雪兎の反撃が始まる。この時出動したJAの面々は後にこう語る……

「あれは人ではない……災害か何かだ」

一方、襲撃を受けていたフライング・ラビットはロシエツト達が無断で持ち出した旧型を含めた大量のバグシートの軍勢に追われていた。

「敵も必死だな」

「どうやらダイグラーズの復帰と度重なる失態で彼らも追い込まれているようだ。

「いくら数を揃えてもこっちは対物量装備があるもんね！」

「リーダー機は任せなさい」

エリカがリーダー機を超遠距離狙撃用電磁投射式オーバーレンジライフル【アルテミス】で狙撃し、聖がガトリングガンを乱射して動きの鈍ったバグシーンを蜂の巣に変えていく。

「もう少しで一夏君達が合流するそうよ」

「合流する前に片付けてしまっても構わんだろう?」

一夏達から通信を受けた楯無がそう言うのと、撃ち漏らしたバグシーンを蹴散らしながら晶が「やってしまっても構わんのだろう?」と獰猛な笑みを浮かべる。

「晶、それフラグだから……」

簪がそう呟くと今度は地下水路で遭遇したトパスⅢがフライング・ラビットの進路上に出現する。

「げっ!?!」

慌てて晶が迎撃に行こうとするが、その前にトパスⅢが光の雨に貫かれて撃破されていく。

「頭上がお留守でしてよ?」

「セシリア!」

トパスⅢを撃破したのは進化したブルー・ティアーズ・ガブリエルのビットのレー

ザーだった。

「一夏さん達もすぐにいらっしやいますわ」

セシリアの言う通りフライング・ラビットの進路上に隠れていたバグシーンを撃破しながら一夏達が合流する。

「皆、無事か？」

「ああ、こつちは何とかってとこだが、シーン達があの囃ませ犬野郎達とやってる」

「そうか・・・あつちは彼らに任せてこつちは船の防衛に専念しよう」

「俺らも一度船に戻ってー」

ISがあつた一夏達と違い、アムジヤケットの無かつたラグナが運転する車がフライング・ラビットへと戻ろうとハッチに入ろうとしたその時、倒したと思っていたトパスの一体が再起動し勢いよく開いたハッチ目掛けて飛び出した。

「ラグナ！ シシー！」

皆がそのトパスを迎撃しようとするが、思った以上の速度でハッチに迫るトパスに反応が遅れてしまう。ラグナも咄嗟にシシーを庇うように抱き寄せるが・・・その瞬間ハッチの中から何かが飛び出す。

「・・・あれ？」

ガシツという音がしてラグナが音のする方を向くと、二人に迫っていたトパスはグ

レーの巨大な狼のようなロボットに啞えられ動きを止めていた。

「ワッツ!? な、何なんだコイツ……」

その狼型のロボットは啞えたトパスを噛み砕き放り捨てるとラグナを見下ろす。すると、ロボットから聞き覚えのある声が聞こえた。

『このメッセージを聞いてるってことはガルムは無事に起動したということだな』

「この声は雪兎? ってことはコイツは雪兎が作ってた……」

『コイツはビーストバイザーっていう新しいカテゴリーのバイザーでチェイスバイザー・モデル「ガルム」という。ラグナ、お前専用調整したバイザーだ』

「俺、専用……」

二人を助けた狼型のロボットは雪兎が開発していた新型バイザーだった。

『ビーストバイザーはビークルモードとブリガンディモードの他に自律行動が可能なビーストモードに変形できる。このガルムはお前に合わせてバイク形態に変形できる。詳しい説明はお前のアマジャケットに転送しておいたから確認しといてくれ』

メッセージが終わるとガルムはラグナとシシーを守るように周囲を警戒し始める。

「ラグナ、無事で良かった……」

「ああ、雪兎とコイツのおかげさ」

ラグナがガルムに触れるとガルムのグレーの装甲が黒く染まりクリアグレーの部分

がラグナのアムジャケットと同じクリアレッドへと変わる。

「あんにやろう、憎い演出しやがって」

「フェイズソフト装甲・・・流石は雪兎、分かってる」

その演出に苦笑するラグナ、そして簪は雪兎が何をモデルにしているか察してうんうんと頷く。

「シシーちゃん。俺、行ってくるわ」

「ラグナ！」

ラグナがアムジャケットを身に付けてそう言うのとシシーがラグナを呼び止める。

「シシーちゃん？」

「あ、あのね・・・ラグナが戻ってきたら伝えたいことがあるの！だから絶対に帰ってきてね！」

「オーライだぜ、シシーちゃん！絶対に無事に帰ってくるから待っていてくれよ！」

シシーの言葉に笑顔でそう答えるラグナ。その後、ガラムをバイク形態に変形させ乗り込みラグナは出撃する。

「いくぜ、相棒！アロンジー!!」

92話 ロシエツトの逆襲 兎、出番無し!?

「シイイイイイン!!」

「ロシエエエエエエ!!」

フライング・ラビットから少し離れた場所でシーンとロシエツトはそれぞれ手にした大剣「ヴァリアブルアームズ」とナイトメアブレードをぶつけ合う。

ヴァリアブルアームズはシーン用に雪兔が改修したネオアムジャケットの武装でカテリナのリヴァイヴⅡCの可変合体武装ヴァリアブル・リッパーをアムドライバー仕様にしたもので、装甲パーツと合わせて双銃剣、大剣、双刃剣、弓に可変合体する。また、チューブを接続すれば剣からビームを放つことも可能だ（原作でもダークのネオアムジャケットのナツクルからは拳状のエネルギーを飛ばしてた）。つまり、「オーカリバー!!」が出来るのだ（ここ重要!）。

「くっ!」

打ち負けたのはロシエツトだった。装備性能の差もあるが、かつてのチームメイトであったロシエツト達と戦う覚悟を決めたシーンと、大した覚悟も無くシーンを追い落とすことを考えてキャシーの甘言に乗ってJAについたロシエツトでは心技体全てにお

いてシーンの方が勝っていた。

「ロシエー!」

「おっと、お前さん達の相手は俺達だけぜ?」

「はははっ! やっちまうか? やっちまうぜ! やっちまおうぜ!」

「くそっ!」

「シーンの邪魔はさせない!」

残るK・K・やエーリック、バグシーン達はダーク達に抑えられており、シーンとロシエットの二騎討ちの邪魔をする者はいない。

「こうなったらアレを使う! こい!」 「バンダースナッチ!」

劣勢に陥ったロシエットは多脚型の昆虫を模したバグシーンとバイザーを組み合わせた新兵器バグブレイム「バンダースナッチ」を呼び寄せ背面に接続する。このバンダースナッチは脚部がガンスタスター「ドラグヴァンデイル」という兵装になっており、推進装置として以外にもビーム兵器としても使うことが出来る。これにより複雑な変則機動と多彩な攻撃を仕掛けることが可能なのだが、雪兎からすれば京都でオータムの使っていたアラクネⅡ「アトラク・ナクア」の劣化版程度の認識だ。

「これが僕の奥の手だ、シーン!」

「バグシーン型のバイザーか……」

自律行動も可能な事から使い方次第では確かに脅威になりそうなバイザーではあるが、シーンは雪兎達の使う白月や白鳳、コスモスを知っているせいか大した脅威には見えなかった。白月達はISコアに内蔵された高度なAIがある事もあってそれ単体でも桁外れの性能を有している。それに比べたらバンダースナッチなど赤子も同然なのだから仕方あるまい。

「そつちもバイザーを着けなくていいのかい？シーン」

「必要無いな。ヴァリアブルアームズで十分だ」

「舐めやがって!! いけっ、ドラグヴァンデイル!!」

そんなシーンの言葉に激昂したロシエツトはドラグヴァンデイルを一斉に展開しシーンへとビームの雨を放つ。

「はっ! その程度、あの弾幕に比べたらどうということは無いら!」

しかし、シーンはヴァリアブルアームズを双刃剣に組み替え、それを高速回転させることで対ビームコーティングされた刃でビームを弾いていく。また、シーンも移動の合間に雪兎達と模擬戦を行い、あの弾幕の洗礼を受けていたらしく、この程度の弾幕では動じない。

「くそっ! くそっ! くそおおおおっ!!」

ダメージを与えられないことに苛立ちエネルギー残量を考えずドラグヴァンデイル

を乱射し続けたことでロシエットのアムジャケットのエネルギー残量はあつという間に尽きてしまう。その隙をシーンは見逃さず、ヴァリアブルアームズを弓に組み替え背面のチューブを接続しチャージを開始する。

「……穿て、ライトニングバースト!!」

そして緑の雷光は矢となってロシエットへと迫る。

「ひ、ひい!!」

咄嗟にバンダースナッチを分離させ、それを楯にすることで直撃を避けたが、大破したバンダースナッチの爆風で大きく吹き飛ばされてしまう。

「ロシエット!?!」

「くっ、くっは退くしかない! エーリック、ロシエを」

自分達の不利を察したK・Kは即座に撤退を宣言し、エーリックと共に気を失ったロシエットを連れ撤退していった。ただ、残った大量のバグシーンを置き土産として残していったことと、フライング・ラビットから遠く離れる訳にはいかなかったため、シーン達もロシエットを追う事は出来なかった。

「逃がしたか……」

残ったバグシオンはラグナの合流やジェナス達の帰還により殲滅する事は出来たものの、結局はロシエツト達を取り逃がしてしまったのは大きかった。それとは別に彼らには心配な事があった。

「それに雪兎とニルギースもまだ戻ってない」

そう、雪兎とイヴァンの事だ。

「あの二人の事だから大丈夫だとは思うが……」

「何、あいつらの事だ。そのうちひよっこり帰ってくるさ」

彼ら（主に雪兎）をよく知る面々はそこまで心配してはいないようだったが……むしろ、また何かやらかしてないか？という方が心配だった。

「雪兎のバカ……（絶対に帰ってきたら心配させた分の色々してもらうんだから）」
それでも心配になるシャルロットは密かにそんなことを考えるのであった。

一方、その雪兎はというと……
「なあ、イヴァン……俺と、人の形をした災害と呼ばれた俺と取引してみないか？」
この世界を変える取引をイヴァンに持ちかけていた。

93話 雪兔の取引と二つ目のピース 兔、取引をする

「なあ、イヴァン．．．俺と、人の形をした災害と呼ばれた俺と取引してみないか？」
追っ手のJAを蹴散らした後、ジェナス達とは別ルートで皆との合流しようとして大きく迂回するルートを使っていた。その途中、雪兔はイヴァンにある取引を持ちかけた。

「取引だと？」

「そつ、何かザルデイともゼアムを巡って揉めそうな感じだし、ウイルコット派とジノベゼ派が本格的にドンパチやり出すのも時間の問題だろ？」

「ああ、組織が手に入れた情報でも双方が戦力を集結させつつあると聞いている」

「人間同士の争いを止める為に作られたアムテクノロジーがその人間同士の争いに使われる．．．皮肉過ぎるだろ？」

アムテクノロジーは人間同士の争いを止めようと人類共通の敵・バグシーンを人工的に作り出し、アムドライバーというヒーローを使って人類の結束を強めようとして作り出されたものだ。だが、アムテクノロジーを独占しようとした一部の者達によってその在り方は歪められた。これはISにも同じ事が言える。当初、宇宙開発用に束がISを発表した際には多くの人々が夢物語だと相手されなかった。だが、白騎士事件で兵器と

しての有用性を見せれば人々は掌を返して束へとすり寄っていき、ISが女性にしか使えないと判ると今度は女性というだけで男性を見下す女性権利主義者が台頭するようになった。

「ザルデイがゼアムをどう使うつもりなのかは知らないが、争いを鎮静化出来るは一時的なものに過ぎない、と俺は考えている」

そしてイヴァンは雪兎のよく知る幼馴染の少女・箒と境遇が重なる点がある。まずは両者ともその技術の産みの親が兄・姉であること。イヴァンはその技術を独占しようとする者達に兄を殺され、箒は重要人物保護プログラムによって家族や一夏と離れ離れにされ、それぞれ理由は違えど各地を転々とせざるえなかった。また、イヴァンは復讐の為に、箒は姉が開発者であったことと自身にIS適正があったことからその技術とは切っても切れない関係が存在した。そして、イヴァンは兄のような存在であったガン||ザルデイによってゼアムの存在を知り、箒は一夏と共に在りたいと願い、それぞれその技術を求めた。そんなこともあってか雪兎にはイヴァンの事が他人事には思えなかったのだ。

「だからこの争いを止める鍵はゼアムじゃないと?」

「ああ、そして武力以外の断罪の場を求めるのであれば俺がその場を設けてやる」

そこまで言うとう雪兎は不敵な笑みを浮かべこう続ける。

「元の世界で【ラビット・ディザスター兎の皮を被った災害】と呼ばれたこの俺がな」

「なるほど、悪魔との契約という訳か。ならばその対価だが……私の今後の人生でどうだ？あの話、乗ろうじゃないか」

悪魔との契約と言いながらもイヴァンも同じような笑みを浮かべながら、その対価として雪兎がガン||ザルデイと話し終えた際に言った「行く場所がなけりや全部終わってから俺達の世界に来るか？」という提案に乗ると言い出した。

「……くくくつ、くははは、はははははは！」

これには流石の雪兎も笑いを堪えきれなかった。

「くくつ、お前さ……対価に自分の人生差し出すとか正気か？」

「私一人の人生を対価に世界を変革出来るならば安いものだろう？」

「違いねえな！いいぜ、その対価で取引成立だ！」

この契約によりこの世界の結末は原作とは大きく変化する事になる。

「雪兎、心配したんだからね！」

その後、フライング・ラビットに合流した雪兎達を待っていたのは涙目のシャルロットだった。雪兎がそう簡単にはやられないのはシャルロットも勿論知ってはいるが、心配しなかったかといえればNOであり、色々あつて若干雪兎に依存気味なシャルロットからしたら雪兎達と別れていたこの数日間には耐え難いものだったようだ。

「す、すまん……連中、数だけが多いから見つからないよう移動すのに手間取つてな」

「今日一日絶対に離れないから！」

「えっ?」

そう宣言したシャルロットは早速「離すもんか!」と言わんばかりに雪兎の右腕にしがみつく。

「あのく、シャルロットさん?これじゃ俺、何も出来ないんですけど……」

「……離さないって言った」

「飯も食えないんだが・・・」

「僕が食べさせてあげる」

「風呂とかは・・・」

「・・・僕は雪兔なら」

「・・・」

「・・・いや？」

「・・・もう勝手にしてくれ」

その日は結局寝るまでシャルロットは雪兔を離さなかった。

翌日、ムーロンへ向けて出発した一行にウィルコット派のNo. 2の元アムドライバーの議員ランディ・シムカが通信を入れてきた。

『やあ、ジェナス君。ミュネーゼではご活躍だったね』

ミュネーゼでのシシー救出の報はシムカの元にも届いているようだ。

『ナムールリバーを失ったのは大きかったが、アムドラサポーターであるシシー君の救出は大きな成果だ』

シシーはその容姿からアイドル的な人気もある為、影響力も大きいのだろう。そんな彼女がJAの手から救い出されたのはシムカとしても喜ばしい事のようにだ。

「それで、そんな劳いの言葉が本題ではないのでしょうか？」

『おお！そうだった。ジェナス君、君達のところにアムドライバーとは異なるパワー・スーツを使う一団がいるそうだね？』

ジェナスの言葉に大袈裟に頷くとシムカは雪兔達IS勢の事を話題に挙げた。

『彼らの責任者と話がしたいのだが』

どうやらシムカはジェナス達ピュアアムドライバーだけでなくIS勢をも自分達連邦評議会に引き込もうと考えているらしい。

「少し待って下さい」

そう言ってジェナスがモニターから席を外すと、雪兔達に相談する。

「シムカはああ言ってるが……」
「そういう事なら私が出よう」

そう言つて千冬が交渉の席につく。雪兎達は生徒で、教師陣の中で最も権限があるのは千冬だ。だから千冬が交渉の席につくのも納得である。

「待たせたな。私が彼らの代表の織斑千冬だ」

その後、千冬とシムカの交渉が始まるもシムカはISをアムドライバーに代わる戦力としてしか見ておらず、それに対し生徒を保護する立場であり、IS学園の教師としてISを兵器転用させる訳にはいかないとシムカの言葉に首を縦に振らない。これにシムカは激怒し雪兎や東に聞かせてはいけない言葉を発してしまう。

『ええい！こちらが高待遇で迎えてやると言うのに！黙って頷いていれば兵器開発部門に率いれてやったものを!!』

(ぴくっ)

『それにジェナス達への支援も打ち切つてもいいのだぞ!!』

そのシムカの言葉に「ブチッ！」と何かが切れる音がし、皆が振り返るとそこには目元に影を落としてつつも不気味な笑みを浮かべる兎達がいた。

「ねえ、ゆうくん。私の聞き間違いかな？あのミジンコ、私のISを兵器って言わなかったかな？かな？」

「聞き間違いないですよ。俺もすっかり聞きましたから……それにあのミドコンドリア、俺達が従わないならジエナス達の支援打ち切るとか脅してきましたよ?」

この時、一夏達は勿論ジエナス達も「シムカ、終わったな……」と心を一つにしていた。

「そっか、聞き間違いないのか……ゆーくん、やつちやおうか?」

「ええ、師匠。やつちまいましたよ」

そう言うと二人は目にも止まらぬ速さで投影式のコンソールを操作し始める。そんな二人を見てダークがジエナスや千冬の代わりにシムカへ返答する。

「シムカ、悪いが今後は俺達は俺達で勝手にやらせてもらおうぞ」

『何だ?!』

「あと、覚悟しておいた方がいい。あんたは怒らせちゃならない奴らを怒らせちゃったみたいだ」

『ど、どういうことだ?!』

『し、シムカ様!!』

丁度その時、シムカの側近達が慌てた表情でシムカの元を訪れる。

『ええい!何事だ!?!』

『ね、ネットにこんな情報が……』

それはシムカが今まで行ってきた数々の失態や不正等の情報がネットに拡散されているという報告だった。勿論、兎共の仕業である。

「どうやら議員殿はお忙しいようだ。では、我々はこの辺で」

『お、おい！ま、待てー』

シムカの返事も聞かず千冬は通信を切ってしまう。

「すまない、うちの馬鹿共がやらかしたようだ」

「いや、いつまでもシムカのヒモ付きつて訳にはいかなかったからな丁度良いだろう」

「そうだぜ！あのシムカの野郎の慌てた顔、最高にスカツとしたぜ！」

千冬が兎共に代わり謝罪するも、ダークとラグナはむしろ清々したと笑みを浮かべる。

「補給の心配ならば心配いらん」

「ザルデイに会いに行つた帰りにイヴァンのとこの組織から少し多めに物質を貰つたし、途中にあつたJAの拠点から根刮ぎ物資を拝借してきたから半年は補給要らんだらう」

「「「「」」」」

そして、サラツととんでもない事を告げる雪兎とイヴァン。帰りが遅いと思えばこの二人、そんな事をやらかしていた。

「……お前達というやつは」

それを聞き、千冬は頭が痛くなった。

「……ほいっと！これであの塵は社会的に抹殺完了だね」

「俺はてつきり暗殺でもするんじゃないかと思っただが……」

「ん？あんなやつ、殺す価値も無いよ」

「そうそう。それに殺すなんて短絡的な手段は使わないさ……むしろ、死んだ方がマシと思える目に遇わせてくれる」

どうやらシムカは皆が思った以上に兎達を怒らせたらしい。

「シャルロット、もしかしたら一歩間違えばデュノア社もあなくなっていたのではないか

？」

「……うん、僕もそう思う」

数日後、ランディ・シムカが汚職等の罪で逮捕されたとのニュースが流れた。尚、J Aがこんな格好のスキヤンダルを静観していたのはしなかつたのではなく出来なかつたのである。何故なら、兎達に「余計な事したらお前らもああなるからな？」と脅されたからだつた。

「この兎共、凶悪過ぎんだろ……」

この一件で一同は改めて兎を敵に回すとどうなるのかを思い知るのであつた。「工員から連絡があつた。二つ目のピースの在処はダラートという町らしい」そんな中、イヴァンの元に工員から次なるピースの情報もたらされた。

94話 護るべきものと機械仕掛けの獣達 兎、大盤振る舞いする

連邦評議会と決別した為、直接ムーロンへは向かえず、もう一つの目的地であるダラートもJAの支配地域であったため、一行はムーロンに程近いケーナに降り立つ事に。

「雪兎、何故このケーナを選んだ？」

「このケーナはムーロン包囲網の一角だ。ゼアムのピースを得る為には今ムーロンに落ちてもらっちゃ困るからな」

「ゼアムはこの戦いを終わらせる鍵ではない、そう言いつつもお前がゼアムのピースを集めるのは何故だ？」

「ピース一つだけでもゼアムの存在を知らせる事になる。そうなればゼアムを巡って新たな争いが起こる。それだけは避けなければならぬ」

「つまりお前はゼアムを揃え、その存在を闇に葬ろうというのか？」

「力とは救いでもあり、滅びでもある・・・ゼアムなんて過ぎた力はこの世界には必要無い」

ゼアムを不要と断ずる雪兎。その言葉を聞き、イヴァンは雪兎の考えを理解する。

「だから間違つてもゼアムをアムジャケットに転用なんかするなよ、ジョイ」

「うっ、確かにゼアムの力をそんな形で示したらゼアムの存在をばらす事になるツスも
んね……」

そして原作でガン||ザルデイがジェナス達を敵視するようになった要因・ゼアムジャ
ケットを作成しないようジョイに言い含める雪兎。ジョイもその危険性を理解してそ
の開発を取り止める事を約束する。

「今回の目的はケーナに向かつてるJAの連中を蹴散らして包囲網の完成を遅らせる事
と、こここの空港をムーロンとダラートへ向かう為の一時的な拠点にする事だ」

「なるほど、ここなら双方にアプローチするには絶好の場所だ」

「でも、俺達だけでここを護りきれれるのか?」

「それは俺に考えがある」

そう言つて雪兎はジェナス達と同じ数のコンテナを示す。

「これは?」

「俺や東さん、それにジョイやカロリナ達の手伝いで完成させた新しい力さ」

「これつてまさか俺たちのガラムと同じ……」

「その通り、全員分のビーストバイザーさ」

そのコンテナに納められていたのはそれぞれ用に調整されたビーストバイザーだった。

「俺達のビーストバイザー……」

ジェナスにはワイバーン型のドラグバイザー「ドラグーン」、セラにはイーグル型のウイングバイザー「ストームウイング」、シーンにはライオン型のストライクバイザー「シーザー」、ダークにはカジキ型のスピアバイザー「スピアヘッド」、タフトにはバイソンのプラストバイザー「プラストホーン」、イヴァンにはペガサス型のジェットバイザー「ペルセウス」、シャシャにはエイ型のフライトバイザー「エアフライアー」が与えられた。

「それぞれが使った装備をベースに俺が改造したバイザーだ。全員のアムジャケットもISと同じ瞬間装着機能も付加してある」

「お、大盤振る舞いだな」

「少数勢力の俺達には力が必要だからな（他にも保険は掛けてあるんだがな）」

その後、空港にいたトトとナナという兄妹の案内で街を訪れるが、市民達は街を守ってはくれなかったアムドライバーを信用してはおらず、ジェナス達ピュアアムドライバーも受け入れてはくれなかった。

「だろいな・・・一度失った信用は容易くは取り戻せない」

「でも、彼らを放つてはおけない！」

「だったらやる事は一つだな」

「私達が口だけじゃないって示す」

「そういうこつた。全ては行動で示せばいい」

市民の信用が無くともジェナス達は護ると決めた。それは他でもない「誰かを護る為にアムドライバーになった」と普段から口にするジェナス達らしい言葉だった。

「今のうちにピーストバイザーの特性を理解しとけよ。今までのバイザーとは一癖も二癖も違うからな」

このピーストバイザーがこの後のケーナ防衛戦でとんでもない事態を引き起こすのだが、流石の雪兎にも予想出来なかった。

95話 ケーナ防衛戦、獣の蹂躪 兎師弟、反省する

原作よりもケーナに早く着いた影響か、JAと思われる反応はまだケーナには来ていない。そこで、雪兎は街を破壊されたり、原作で敵の指揮官がとった街の市民を人質にするという手段を封じるべく街の外で迎え撃つ事を提案した。これは市民に配慮したいジエナス達にとってもありがたい申し出だった。そして、街外れの街道に防衛線を張ることに。

ジエナス side

雪兎の提案で街の外れに防衛線を張った翌日。JAは思いの外ゆつくりと近付いてきた。雪兎の話では「ケーナの市民が避難したふりをして潜伏しているのを知らずに大した抵抗も無いと相手の指揮官が油断しているのではないか？」との事だがそんな間抜けな指揮官がいるのだろうか？

『ジエナ、そろそろ敵さんが作戦予定ポイントに到着するッス』

そんな事を考えているとジョイから通信が入った。

「わかった」

『では、オペレーターは私が』

すると雪兎達の仲間の一人・クロエⅡクロニクルの声と共にフライング・ラビットのハッチを開きカタパルトが展開する。

『ハッチオープン。カタパルトセット……』

そして、雪兎が開発した俺の新たなバイザー「ドラグリーン」がカタパルトにセットされる。

「いくぜ、相棒！」

そう言ってドラグリーンに飛び乗りアムジャケットを展開する。

『ジエナスⅡデイラ、ドラグバイザー「ドラグリーン」セットアップ。進路クリア……』

どうぞ』

「やっちやるぜ！」

プロメテウスのカタパルトとは違う電磁加速カタパルトによって射出されるドラグーンから振り落とされ無いよう踏ん張る。雪兎達と行動するようになってから何度も経験してはいるが、少しでも気を抜くとバイザーから吹き飛ばされそうになる。それに耐えて空へと飛び出すと視界の端にJ Aと思われる一団の姿が映る。

『ジェナス、まずは作戦通りに一夏と先行して退去勧告だ』

『何でだ？奇襲を仕掛けちまえばいいじゃんよ？』

「勧告する事でこちらからは仕掛けていないというアピールをして、あちらから仕掛けてきたっていう正当防衛に仕立て上げる・・・そうだろ？雪兎」

作戦会議の時にも疑問に思っていたことをラグが問うと、いつの間にかドラグーンに並んだ一夏が答えてくれた。

『よく判ったな、一夏。その通りだ。俺達はおくまでケーナの防衛の為に攻撃するのであってJ Aを攻撃したくてした訳じゃない・・・こういう記録を作っておけば後々便利なのだ』

『交渉とかの時にそういう記録を持ち出してこちらに優位な状況を作る・・・だね？』

何か黒い会話が聞こえた気がする。

「……とりあえず訳は判った。でも、どんな理由退去させるんだ？」

『それこそ簡単だ。そもそも今のJ Aに正統な都市の支配権なんてない。ジノベゼは自分達こそ正義だと言うが、ウィルコット議長がそれを認めるか決定的な証拠でも無い限り全く正統性の無い一種のクーデターだ。やり方も武力と脅迫による制圧だしな。そこを突く。それに俺達には正統な依頼人様がいるからな』

そう、実はトトとナナの兄妹がなけなしのお小遣いを持って俺達にケーナを守つてくれとお願ひしてきたのだ。しかし、雪兎はそのお金は受け取らず無料で引き受けると言ひ出した。後で訊いたら「そういう美談は信用の回復にはうつつけだからな」等と言つていたが……

『相手が仕掛けてくれば相手は武力に訴えてきたという何よりの証拠となり、退去させれば今後とも正統な理由無しにケーナを容易く攻めれなくなるという訳だな？』

『E x a c t l y』

本当に雪兎を敵に回さなくて良かった。二手三手先を見据えた悪辣な手口を聞いてそう思ったのは俺だけではないはずだ。

『まあ、この進軍速度とかからその部隊の指揮官が優秀とはとても思えない。まず武力行使に出ると見て間違い無いだろう』

雪兎曰く「他の包囲網は出来てるのにここだけ進行が遅れてる」との事。こういうポ

イントを残しておくで包囲網を崩されるので普通はやらないそうだ。

一夏と共にJAの前に立ち塞がると俺達は退去勧告を行った。すると、敵の指揮官が現れたのだが、それは意外な人物だった。

「あつ、アレンだ」

それはかつて俺達が所属していたキャンプ・リトルウイングの司令官だったアレン。正直なところ、所属していたアムドライバーからのアレンの評価は底辺もいところである典型的な小物だ。

「お、お前はジェナスⅡデリラ!？」

明らかに俺を見て動揺しているアレン。確かにコイツなら雪兎の言っていた通りに

なりそうだ。

「大人しく退去すればこちらからは何もしない」

「な、何故お前達にそんな事を言われねばならない！」

「俺達は街の住人から街を守ってくれてくれって依頼されてるんだ。ムーロンにいるウィルコット陣営とドンパチやろうっていうお前達を通せるかっての」

一夏にそう言い返されしばらく「ぐぬぬ・・・」と唸っていたアレンだったが、突然何かに気付いたかのように笑みを浮かべる。

「敵はたった二人で武器も持っていないじゃないか！総員、奴らを蹴散らせ！」

なるほど、俺達がたった二人で丸腰に見えたから強気になったのか・・・

「やれ！」

アレンの指示に従いJAがこちらを攻撃してくる。

「これで正当防衛成立だな」

「本当に恐ろしいくらい予想通りだな」

対して俺達も直ぐに武装を展開しつつも攻撃を回避する。

「なっ!?!さつきまで確かに丸腰だったはず!?!」

俺達が武装を展開した事でアレンが慌て出すがもう遅い。俺達を囲むように展開していたトパスを俺はヴァリアブルソードで、煌月白牙と雪片参型の二刀流で斬り裂く。

「もう終わりか？なら、今度はこちらからいくぞ」

一夏はそう言うのと一気にJAの懐へと飛び込んでいき彼らの武器だけを斬り破壊していく。

「は、速い!？」

「これくらいで速いなんて言ったら千冬姉やアイツ雪兎の動きなんて見えやしないぞ？」

一夏の方は大丈夫そうだな。

「俺達も負けてられないぜ、ドラグーン！」

ドラグーンをブリガンディモードに変形させて身に纏うと両翼にマウントされた大型ソードを両手に持ち、エッジバイザーを身に纏ったシーンのようにバグシーンを両断していく。

「こちらだつて!」

武器を破壊されたJAがバンダースナッチを纏いドラグヴァンディルを放とうとするも、背面に装備してある有線式のテイルブレードを使ってバレルを斬り裂き無力化する。

「えっ?」

「邪魔だ」

あつという間にバンダースナッチまでもが無力化された事に呆けるJAを大型ソ-

ドの腹で払い退け次の相手へと向かう。

「な、何なんだこいつらはっ!？」

「ば、化け物だ!」

「ひ、ひいいいい!!」

混乱に陥るJA達。だが、そこに追撃を仕掛けるように他の皆も駆けつける。

「随分とお楽しみじゃないか、ジエナ。俺も混ぜてくれよつとー!」

挨拶代わりに手にした二振りの大型ブレードでバンダースナッチを両断するシーン。

「し、シーン!! ピアース! いつの間にか!？」

「俺だけじゃないぜ!」

すると、あちらこちらから戦闘音が響き始める。

「ドリルがあ、ズドーン!」

「制圧、制圧、面制圧う〜!」

ダークさんはドリルランスバイザーをベースにしたスピアヘッドのドリルでバグシーンを次々とスクラップに変えていき、タフトさんはブラストホーンに搭載された無数の砲身から砲撃とバーストバイザー改から引き継いだミサイルをぶっぱなしている。

「やるぜ、セラ」

「ラグこそ外さないですよ?」

ラグはガラムの背にマウントされていたビームキャノン・イフリートを、セラはストームウイングの機首をシールドとバスターライフルに分離させて遠距離から攻撃している。

「せいー！」

「ニルギース、チョウシイイ」

「そう言うシャシャこそ調子が良いのではないか？」

ニルギースはビーストモードのペルセウスに乗りガンランスとジャケットのブレードの変則二刀流で暴れ回り、シャシャはエアロフライヤーのウィップサーベルをウィップモードで振るっている。

「fire!!」

シーンも二刀流で近場のバグシーンを片付けるとシーザーの装備をエツジからランドに切り換えて砲撃していた。シーンには雪兎やシャルロットのように装甲切換の適性があったらしく、シーザーにはエツジバイザーやランドバイザーから継承した装備の他にも高機動用のインパルスや防御型のプロテクション等があるらしい。

「く、くそう！こうなったらさつき奪った新型バイザーで！」

すると、JAはどこかからか強奪してきたと思われる新型バイザーを2機持ち出してくるが……

「せいっ」

「おっ！弾、グツシヨブ」

カタパルトから射出される前にアーマードギアで出撃した弾に蹴り飛ばされ再び2機共一緒に強奪されていたプロメテウスごと奪い返した（厳密には俺達のではないが）。

「た、退却だ！」

その後も多少の抵抗はあったが、敵わぬと判るとアレン率いるJAは退却していった。

「一昨日来やがれってんだ」

「それにしてもアレンもJ Aに寝返っていたとはな」

「キャシーと立場逆転してこき使われてんじゃないか？」

「かもな」

そんな事を話しながら奪い返したプロメテウスを持って帰ると何故かひきつった顔した雪兎が俺達を待っていた。

side out

「何だ、これ・・・」

ジェナス達の戦う様子をモニタリングしていた雪兎は思わずそう呟いた。そう思っ

ていたのは雪兎だけでなく、共にビーストバイザーを作り上げ不具合が無いか一緒にモニタリングしていた東、カオリナ、ジョイのメカニック勢。

「ゆーくん、あれって紅椿と同じ無段階移行組み込んでたよね？」

「ええ、いきなりは扱い切れないだろうと思ってリミッターとして」

「……全員、少なくとも2段階までは難なく使ってる……ジエナスは全解放モードだけで」

「皆、人間辞めだしたツス」

そう、ビーストバイザーにはリミッターとして紅椿と同じ無段階移行を組み込んでいた。仕組みとしてはアムジャケットの方にアムドライバーの能力を測る機能を追加しておいてそれと連動してビーストバイザーのロックが解除されるようにしていた。だが、ピュアアムドライバーの面々は初っぱなから何段階かりミッターが外れており、ジエナスにいたってはリミッターが機能していなかった。

「アイツ、もう俺らと同類^{人外}認定でよくね？」

一基だけとはいえ誘導兵器であるテイルブレードを難なく使いこなし死角の敵を攻撃し、三次元機動で一夏と一緒に暴れ回るジエナスは雪兎達から人外認定されていた。

「お前達、問題はそこじゃないだろう？」

そんなメカニック勢に呆れる人がいた。千冬である。

「いくら人的被害は無いとはいえ、これはやり過ぎだ」

言われて雪兎達が戦場となった場所に目を向けると、全員が色々ぶつばなしたせいで地形が原形を留めていなかった。

「……」

これには流石の束も黙る。

「後で整地だけはしますか」

この後、やらかした面々も含めて全員で後始末をするのであった。また、回収した新型バイザー（ネオボードバイザー）はビーストには及ばない性能だったためメカニック勢の玩具として弄り回されることになった。原作最強バイザー、哀れである。

96話 パフ再び、ダラート潜入作戦 兎、交渉する

ケーナの防衛に成功し、住民から信頼を勝ち取った一同は今使われていない空港を拠点として借り受けることに。ただ、今後も包囲網の為にケーナが狙われる可能性があるため、防衛にも戦力を割く必要があった。

「……となると、ムーロンに向かう部隊、ダラートに潜入する部隊、防衛班の部隊の3つに分かれる必要があるか」

幸いにも移動手段にはフライング・ラビットの他にプロメテウスが2機に兎謹製のトレーラーもあるので困りはしないが、防衛班はローテーション等の事を考えて多めに配分する必要がある。

「ムーロンやダラートでも目立つのは避けたいが敵と鉢合わせる事も考慮しなくてはな」

「そうだな……1:1:3くらいの配分が無難か」

雪兎達は戦力として数えられるのは18人程（弾達民間人3名と非戦闘員の虚とクロエの2名、基本的に戦闘に興味の無い束を除いて）、ジェナス達を8人の計26人。それを小隊数で割ると1小隊当たり5〜6人となる。しかし、それでは少々人数に不安があ

る。すると、弾と蘭、更に数馬の3人が「手伝わせてほしい」と願い出てきた。

「弾、状況が状況だったからお前には何度か戦わせてしまったが、お前らは一応民間人なんだぞ?」

「今更水臭い事言うなよ、雪兎」

「そうだそうだ、ダチが命張ってくれてんのに何もさせてもらえないってのは辛いんだぞ」

「わ、私だって皆さんの役に立ちたいんです!」

「・・・はあく、わかつたわかつた。ここで断つても前の蘭みたいに勝手されるよりは参加させて監視させといた方が安心だしな」

「うぐつ」

雪兎がやれやれといった顔でそう言うと、蘭が苦い顔をする。

「数馬には仕方ないからアーマードギアの2号機を貸してやる。弾はまあいいとして、数馬と蘭は戦闘なんてした事ないだろうから防衛班な」

「俺はいいのか?」

「前回あれだけ暴れておいて今更何を言うか。援護つったのに敵陣の真っ只中のプロメテウスに突撃かますとか・・・結果だけならフラインプレーだがな」

「うぐつ」

兄妹揃ってやらかしている事を指摘される五反田兄妹。

「あとは・・・ジョイ、ジャックさんと連絡出来るか？」

「ジャックさんツスカ？ああ！なるほど、その手があったツス！」

雪兎が何をしようとしているのか察したジョイは直ぐにジャックへと連絡を取る。

「となれば編成はこんな感じかな・・・」

そんなこんなで雪兎が決めた編成は・・・

ムーロン組

イヴァン、シャシャ、楯無、マドカ、ラウラ、カロリナ、弾、虚

ダラート組

雪兎、シャルロット、シーン、セラ、ミュウ

防衛班

その他（18人）

「ダラート組、少なくない？」

ムーロン組は潜入工作に長けたメンバーを中心に編成し、サポートとして虚を加えている分少し多いが、ダラート組は雪兎とシャルロット、そしてミュウも連れているとはいえ少人数だ。ちなみに今回シャルロットが一緒なのはシャルロットが「雪兎と一緒の編成以外やだ！」と珍しく我が儘を言ったのが原因だ。まあ、このところ別行動が多

かったので今回こそは一緒にいいという可愛らしい我が儘なので皆了承している。

「そいつに関してはこちらと考えがあつてな」

「雪兎！ジャックさんからOK出たッス」

「なるほど、そういうことか」

イヴァンも雪兎の考えを察し、この編成になった理由を理解する。

「そんじゃあ、ミッションスタートといきますか」

そして、残るピースを回収する作戦が始まった。

雪兎のトレーラーでダラートを目指すダラート組。少人数とはいえ雪兎にシャル

ロット、そしてシーンのエースクラスが3人いるのでそう簡単にはやられはしない編成だ。それにこの後合流するパフ達を含めれば十二分の戦力だ。それに、雪兎にはパフ達に協力を要請する為に用意した切り札もある。

「妹を溺愛してる姉つてのは妹と同じものを欲しがるものだ」

「あゝ、それでコレを用意したんだね？」

「オマケにアレまで用意して・・・用意周到だな」

「で、溺愛つて・・・」

「きゅ」

『絶対喜ぶと思うの』

兎（ミュウ）にすら断言されるパフのシスコンっぷり（正確には妹ではなく妹分だが）。今回、ミュウはセラに抱っこされている。猫派のセラもミュウはお気に召したようだ。

「そろそろジャックさんが指定したポイントなんだが・・・」

「おーい！こつちだ」

すると、JA仕様のプロメテウス（エンブレムは塗り潰してある）とジャックの姿が見えてきた。パフ達も一緒だ。

「ミュネーゼ以来だな、雪兎」

「ええ、またよろしくお願いします、ジャックさん」

「ジャックで構わないさ」

実はジャックとも同じメカニックマンとして交友を深めており、そのノリは年の離れた兄弟のような感じだ。

「で、今回は何やら厄介事があって協力してほしいとジョイから聞いてるが？」

「それについては中で・・・盗み聞きされると不味い情報なんで」

「判った」

という訳でプロメテウスの中で詳しい話をする事に。

「ゼアム・・・そんなものが」

原作ではイヴァンに止められて依頼する際にはパフ達に明かせなかったゼアムの情報を雪兎はイヴァンの許可を取ってパフ達に話した。原作ではそれが原因でパフから信用してもらえなかったからだ。

「俺達の目的はそのゼアムの抹消……過剰な争いの火種に成りかねない力は必要無い。これが俺達のゼアムを求める理由だ」

「確かにそんな力があると知られば今以上に戦火が拡がりかねないね」

やはりパフは聡明で雪兎の話からゼアムの危険性に気付いていた。

「そのデータの一部分が入ったディスクがダラートにあるらしくてな。その回収に協力してほしい……無論、報酬は用意した」

「報酬？」

依頼である以上報酬は当たり前なのだが、この依頼に見合う報酬とは何か？

「ここでは出せないから格納庫に行こうぜ」

格納庫に移動すると、雪兎は storage からその報酬を取り出した。

「ハ、これは？」

「ほう、新型のバイザーか……ジョイのヤツが言ってたピーストバイザーってやつか？」

「ああ、こっちの黒いのがウイングバイザー「ストームウイング」、そっちのオスプレ

イ……プロペラが2基あるヘリ型がフロートバイザー「ワイズ」だ。これがカタログスペックだ」

「なるほど……コイツは面白いのを作ったな！」

「ちなみに、ストームウイングはセラのと色違いの御揃いさ」

(ぴくつ)

御揃いと聞いてパフが僅かに反応したのを一同は見逃さなかった。

「コイツらを報酬として前渡しする。それでどうだ？」

「……私達が持ち逃げするとは思わないの？ 自慢じゃないけど、私達は二度も味方を裏切ったんだよ？」

そうパフが問うが、雪兎はそれを鼻で笑いこう断言する。

「いいや、あんたは裏切らないさ。大切な妹分をもうあんたは裏切れない」

「……貴方とは話が合いそうね、天野雪兎君」

「同感だ、パフIIシャイニン」

何故か固い握手を交わす雪兎とパフ。実の妹のように接する妹分がいる同士共感する部分があつたらしい。

「雪兎……」

「パフ……」

それを見て一同の空気が緩む。

「この依頼、受けさせてもらうわ。いいわね？皆」

「こんな前報酬を貰ったんじや受けざる得ないな」

「私達も賛成」

こうしてパフユニットの協力を得た雪兔達。原作より万全な態勢でダラートでのピース回収に挑む・・・ダラートに配属されているJAの安否は如何に。

97話 ダラート潜入作戦その2 兎、女同士の戦いに
戦慄する

雪兎達がパフと合流し、ダラートへ向かおうとしていた丁度その頃。ダラートにあるJ Aの前線基地に輸送機の一つがやってきた。

「出迎え」苦勞」

その輸送機から現れたのは全員女性だった。彼女達は隊長であるガモⅡフレアが率いるJ Aの中でも女性のみで編成された部隊なのだ。原作ではクプテイでジェナス達と邂逅するはずの彼女達が何故このダラートにいるのかと言えば前回のケーナ防衛戦の影響だ。どうやらJ Aの上層部はアレンではケーナを攻略出来ないと判断し、増援としてガモ隊を派遣したのだ。

「あんな狐に任せず、最初からガモ隊長にお任せしてれば良かったものを！」

ケーナでの一件を聞き、ガモ隊の副官・ミルンⅡハツキネンがそんな事を言っているが、誰だろうとあの結果は変わらなかつたと思う。まあ、すぐにその事を彼女達は知る事になるのだが……

雪兎がダラートの潜入に使ったのはミュネーゼでも使ったクレープ屋のワゴン車（屋号はラビット・プレート）。しかもミュネーゼでの評判も伝わっていたせいか（何故かバレてない）あっさり街に入ることができた。

「前にも思ったのだけれど、何でバレないのかしら？」

「パフ、気にしたら負けだと思おう」

今回も全員変装しているのも簡単にはバレないだろうが、JAに顔を知られているパフ達には裏方に徹してもらっている。すると、行列を割ってJAの制服を着たガモ隊の面々が雪兎達のクレープ屋にやってきた。

「ふくん、クレープの屋台ねえ」

「お客さん、割り込みは感心しないね」

「貴様！ 私達はJAだぞ！」

そんなガモ隊に雪兎はそう注意をするが、すぐにミルンが脅しかける。

「JAだろうが、連邦評議会だろうが客は客だ。ルールを守れんやつに売るものは何一つない……ほれ、注文のストロベリーだ」

しかし、相手は雪兎だ。そんなもの通用するはずもなく睨み返しミルンを退け、元々並んでいた少女にクレープを手渡す。

「我々に楯突いてただで済むとー」

「うるさい。こちとらちゃんと言った許可を貰って商売してんだ。これ以上邪魔すんだつたらお前らの上司に突き出すぞ？ それと、俺の持つてる仕入れのネットワークに「正義を名乗るJA様が市民の営業妨害をしてくる」って情報ばら蒔いてもいいんだが？」

営業許可証（正規の手順で発行されたもの）を掲げ、逆に脅し返す雪兎。ちなみに行列の中には非番のJAの隊員も何名かおり、ガモ隊に向ける視線は冷たい。「お前らのせいで俺達までクレープ食えなくなるだろうが！」そんな視線だ。やはり食い物の怨みは恐ろしい。

「く、くっ……」

「やめなさいミルン。騒がせて悪かったわね、店主」

「いや、判ってさえくれれば俺も何も言わんよ」

その後、最後尾に並んだガモ隊の面々が雪兎のクレープに驚愕し「いつまでダラートにいるんですか!？」と態度が180度変わったり、ガモがミュウを模して作った特別なクレープ「ウサギスペシャル」を注文して「こ、こんな可愛いものを食べると?・・・あつ、溶けちゃう!？」とか百面相し始めたり、クレープ以外の鉄板系メニューもバカ売れしたりしていた。

「ふっ、チョロいもんだな」

その日の売上はとても移動車販売とは思えない金額であった。その売上の1/4がガモ隊から得たものだ。やはり女性は甘いものに弱い。

「原材料費から考えればボツタクリだな」

「店を出すならこんなもんだろ？」

「間の加工の手間賃全部すつ飛ばしてやるだろうが！」

そう、雪兎の持つ機器のおかげで原材料さえあればすぐに調理前の状態に出来る。そのため非常識な程に安価で作れる。それを相場の価格で売ればポロ儲けもいいところである。しかも、材料は storage に保管しているので大量所持かつ鮮度を保つていられるので材料費もまとめ買いで通常よりかなり安価に抑えている。storage は本当にチートツールだ。

「やっぱり定番のファンタジー系転生物でよくある物流チートは現代でもチートだな」

「自重しない天才ってのは本当に天災だね……」

シーン達アムドライバー勢は改めて兎の非常識さを知る。

「まあまあ、ピースは手に入ったんだから」

シャルロットの言う通り雪兎がガモ隊の注意を惹き付けている間に工作員からピースのディスクを受け取っている。あとは怪しまれないように数日滞在してから撤収するだけだ。

「これで何事も無ければいいのだけど……」

「パフ、それフラグだから」

ダラート滞在中は何事も無かったのだが、セラの言う通りパフの発言はフラグだった。ワゴン車からトレーラーに乗り換えて移動していると連邦アムドライバーとガモ隊の戦闘に鉢合わせてしまったのだ。

「……はあ、見捨てるのも後味悪いし、助けておくか」

迂回するのも面倒という事で雪兎達はガモ隊を蹴散らして強行突破することに。

「来たわね！ピュアアムドライバーに裏切り者のパフ！シャイニン！」

雪兎達が出撃すると、白ベースに淡いピンク色とピンク色のカラーリングのアムジャ

ケットを身に纏ったガモが立ち塞がる。しかし、所詮は強化タイプのアムジャケットであるため雪兎達の敵ではないのだが……

「大人しく捕まるといふなら女性性は私の部隊に入れてやつてもいい。そこの男共もどうしても言うなら考えてやつてもいいぞ」

ガモはいきなり上から目線でそう言ってくる。実はこのガモ隊、JAの中でもISの世界にいるような女性権利主義者の集まりなのだ。

「断——「お断りだよ」——シャルロットさん？」

そして、雪兎が「断る」と言い切る前にシャルロットがぶちギレた。

「君達何様のつもりなのかな？それにそのアムジャケットの色……いい歳したオバサンが恥ずかしくないの？」

更に雪兎達が思っても口にはしなかった事を平然と指摘する。

（（シャルロットさん!）（））

最近、シャルロットは雪兎に関する事に対する沸点が低い。

「お、オバサン!？」

「そうでしょ？そんなドキツイ格好して……鏡見たことある？」

ブラックシャルロットさんの攻勢は止まらない。

「え、えーい！やつておしまい！」

口ではシャルロットに勝てないと悟ったガモは部隊に攻撃命令を下すもシャルロットは余裕の表情だ。

「雪兎、コイツら僕がやるけどいいよね？」

「・・・やれやれ、そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫、特訓の成果をここで見せて上げるよ・・・来て！〔L A：ライトニング・アサルト〕！」

シャルロットが呼び出したのは以前は持て余すと言っていたアドヴァンスト〔L A：ライトニング・アサルト〕。あれから雪兎に並び立とうと特訓を重ねシャルロットはついにアドヴァンストすらものにしていたのだ。そのカラーリング（黒・金）からも完全にブラックシャルロットさん降臨である。

「さて、覚悟はいいかな？オバサン達・・・答えは聞かないけどね！」

そこからの一戦は完全にシャルロット一人による蹂躞劇だった・・・

98話 3つ目のピースと覚醒の淑女 兎、義妹に非自重武装を預ける

マドカ side e

兄さん達とは別にピースを持つ工員と接触するべくムーロンに向かっている私達。メンバーは私、更識楯無、布仏虚、ラウラーボーデヴィツヒ、カロリナゼンナーシュタット、イヴァンニルギース、シャシャ、そして蘭の兄・五反田弾の8名。他のメンバーはともかく五反田弾の参加は意外だった。いくら兄さんの決めた編成と言えど潜入任務に素人である彼をメンバーに加えたのは疑問だ。前回のミネーゼでの一件は蘭の護衛を兼ねての同行だったので仕方なかったが、今回は計画的なものである以上万全の態勢で挑むべきだ。

「この編成に疑問があるみたいね、マドカちゃん」

そんな私の心を読んだかのように更識楯無が声をかけてきた。

「お兄さんが信用出来ない?」

「そうではない。あの妙に用意周到な兄さんが何の考えも無しにこの編成を組んだとは思わないが……」

「あく、彼つて時々……ううん、ほとんど何考えてるかわからないものね」

その言葉に頷く。今回の任務に際し兄さんは私と更識楯無、そして五反田弾に新たな装備を持たせていた。その中でも私に託された開発コード「BBC」はスペックデータを確認して思わず絶句してしまった。アレは対人で使つていい代物ではない。兄さん曰く「俺と束さんのやつの劣化版」とのことだが、オリジナル完全版はどんなキチガイ武装だとツツコミたい。

「私も専用パッケージこんなものなんて貰ったから万が一なんて事は無いとは思うけどね」

更識楯無には兄さんが考案した専用パッケージ「ミストラル」が与えられている。ミストラルとはフランスの地方風に由来する名で、この名を持つこのパッケージはアクア・クリスタルを介したナノマシンによる水操作を主とするミステリアス・レイディの機能拡張パッケージだ。元々このISはアクア・クリスタルクリア・パツジョンで清き熱情やミストルティンの槍等の水の状態変化を操っていた。対してこのミストラルはそのアクア・クリスタルの強化版とも言えるアクア・スフィアを搭載しており、通常の水だけでなく軽水や重水(※1) 中性子を減衰させる作用のある水。人体には約30%程で害を成し、重水中では魚は生存できず植物は発芽しない。一般的な水にも極僅かに含まれているが、まずその程度では害にはならない)すら生み出し支配下における。他にも霧ミストを用いてビームを霧散させたり、空間中の水分子を操り敵の動きを阻害させる事すら可能だという(※

2 これは原作におけるミステリアス・レイディの単一仕様能力【沈む床】セックヴァベックに該当する能力なのだが、雪兎は原作知識がこれが登場する前の巻で途切れている為これの存在を知らない）。

「二人共、そろそろムーロン近郊だ」

そうこうしている間に私達の乗るプロメテウスがムーロン近郊に到着した。ここからはプロメテウスを storage しまい本格的な潜入工作に入る。まずチームを更に変装し街中に潜入するチームと作業員と接触するチームの二手に分かれる。街中に潜入するチームには市民達から連邦評議会の動きをそれとなく探らせる。これは兄さん曰く「シムカが捕まった事で議長の行動がどう変化しているのかを探る」とのこと。原作とやらではシムカ派がウイルコット議長を傀儡にしていた為、派閥のトップであるシムカのいなくなつた影響を知る必要があるらしい。こちらのチームには更識楯無、ラウラ、ボーデヴィツヒ、カロリナ、ゼンナー、シユタツト、五反田弾、布仏虚が回される。潜入方法はもはやお馴染みの屋台だ。確かにこの方法ならば五反田弾が編成に加わつていても不思議じゃない。そして、残る私、イヴァン、ニルギース、シャシャが作業員と接触するチームだ。

「それではそちらの指揮は任せるぞ、更識楯無」

「ええ、更識の名は伊達じゃないとこ教えて上げるわ」

こうして私達の潜入任務は始まった。

side out

楯無 side

久しぶりの裏方仕事とあって若干張り切り過ぎた感があった。しかし……

「ほんとにこの世界の情報管理は雑よね……」

いくら雪兎君から借りた兎印のハッキングツールを使ったとはいえ私達の求めている情報がものの数十分で手に入るとは思わなかった。

「それに彼の予想通りというか何というか……」

そして、得た情報は「旧シムカ派が引き続きウイルコット議長を傀儡とし、JAに対する反抗作戦を計画中」というものだった。

「仕方あるまい。今ウイルコット議長を自由にすれば市民達の安全の為にとジノベゼとやらの言い分を認め戦争を終結させようとするだろう。そうすれば旧シムカ派の議員達がどうなるかなど火を見るより明らかだろうに」

「そうだなあ．．．でも、雪兎のやつが言うにはジノベゼってやつは例え戦争に勝利したとしても今みたいな武力行使を止めねえんדר？」

弾君の言う通りジャン・ピエール・ジノベゼという男は武力行使を止めないだろう。簪ちゃん曰く「原作でもあの人はそういう人だった」との事。どうやら何でも自分の思い通りにならないと気が済まない小者らしい。

「だから」雪兎君はあの【計画】を．．．」

虚の言う雪兎君の【計画】とは今後起こるであろう連邦評議会とJAの全面衝突に介入し双方を制圧。そして、ウイルコット議長とジノベゼ氏を公の場で法的に裁く。これにより戦乱が終わりゼアムは不要になるのでガンザルディを説得し（訊かないなら無理で）廃棄させるといふもの。雪兎君曰く「ウイルコット議長にはバグシーン・アムドライバー計画の罪、ジノベゼにはJAのやらかした諸々の罪があるからな。そもそもJAに各都市を武力制圧していい権限なんざ無いからな。市民からしちゃバグシーンもJAも大差ねえし」との事。またジノベゼ氏としてはウイルコット議長を追い落としたととしても、今後反抗勢力が生まれないようにJAの力を見せつける為にも武力行使は

続くと私は見ている。なのでウィルコット議長が未だに傀儡となっっているのはある意味でこちらにとつては都合なのだ。

「さてと、あつちのチームも戻ってきたみたいだし撤収するとしますか」

「お、お前らはピュアアムドライバーとその一味！」

あちらも無事にピースを確保出来たようなので合流しムーロンからケーナへと帰還している最中、運悪く包囲網を完成させようとケーナに向かっていたJAの部隊と遭遇してしまった。しかも、雪兎君からは「咬ませ犬」と扱き下ろされているロシエツトⅡキツスの率いる部隊だった。

「また貴様らか・・・懲りない連中だ」

「だ、黙れ！こうなったらお前達を捕らえて人質にしてやる！」

「マドカちゃんの挑発に簡単に激昂し、どう見ても小者としか言えない発言をする口シエツト。だから咬ませ犬なんて呼ばれるんじゃないかしら？」

「丁度良い。新装備の評価試験をさせてもらうとしよう」

あとマドカちゃん、貴女も随分とお兄さん色に染まつてきてない？

side out

その後、ロシエツト達は楯無の沈む床で身動きを封じたところを他のメンバーに意識狩り取られ、バグシーンだけを残して全員拘束。拘束した後に全員叩き起こし、残ったバグシーンをマドカの「BBC」・・・ブラックホール・バスターキャノンで一掃するのを見せて戦意喪失させ、武装解除した後にプロメテウスの一室に缶詰にした。

何？戦闘がダイジェスト過ぎないか？だと？それぐらい呆気なかったのさ・・・

99話 開戦！アムドライバーVSジヤステイスアー ミー！ 兎、喧嘩両成敗する

『ぶく、クスクス。ねえ、どんな気持ち？どんな気持ち？』

『うがああああ!!絶対に殺してやる!!』

『お、落ちて着けロシエット!』

無事にピースを集め終えた雪兎達。近く連邦アムドライバーとJAの全面衝突が起ころという中、雪兎達はというと・・・決戦の準備の合間に捕虜にしたロシエット・K・K。エーリックの三人をVR空間で弄っていた。

「やはりライオン大迷宮をベースにしたのは正解だったな」

「・・・そりやああの魔王様がぶちギレるダンジョンよ？あの咬ませ犬の煽り耐性で耐えられるわけじゃない」

尚、このVR空間は・・・

- ・ダンジョンをクリアしないと出られない。
- ・ダンジョンで死んだらスタート地点に戻される（冒頭の煽り付き）。
- ・所々で煽られる（某駄女神 voice等）。

・ エネミーが超COOLなヒトデっぼいアレ等。

・ トラップが半分ギャグ系、もう半分ガチ系。

・ 装備はお情けで各ネオアムジャケツト。

e t c . . .

「お前が関わると本当にギャグにしかならないな．．．」

「一夏、原作の最後に比べたらまだまし」

「だよね、特にエーリック。彼、途中で死ぬキャラだし」

「ひじりん、それを言ったらおしまいだよ」

「あつ、またエーリックがトラップで死んだ」

「エーリックが死んだ、この人でなし!．．．で、いいんだっけ?」

「アレシアもノリノリ」

「いくらリアルでは死なないとはいえこれは．．．」

「一夏達もこんな事が言える時点でだいぶ雪兎に毒されてきたと言える。」

※以下はロシエット達の様子の子のダイジェストです。

『エーリック！上だ！』

『う、うわああああ!!!』

『エーリック!!』

上から飛び掛かってきた生物に喰われるエーリック。

『よし、これで完成だ!』

パカッ

『えっ?』

『地面がな〜い!!』

扉を開ける為にパズルを解いたら（不正解）床が開いて真つ逆さま。

『よし！こつちだ!』

『本当に大丈夫なのか、ロシエット』

『ロシエット！K・K・レールが切れてー』

『『『うわああああ!!』』』』

トロッコで道を間違えて溶岩に落下。

『二人共!こつちだ!』

『ふうく、助かったぜ』

『・・・二人共、ここ、スタート地点じゃ?』

『ねえ、どんな気持ち
N D K?』

『『『うっぜえええええ!!』』』』

モンスター部屋から隣の部屋に逃げ込んだらスタート地点(煽り付き)。

『ここ、今度こそ!』

『バツカもくん!』

『うぎや!』

『『ロシエツト!』』』

再びパズルを解いたら(不正解)タライ(超合金)落下。

『ふうく、やつと一息つけるぜ』

デデン!

『一発ギャグを言う。つまらなかつたらお仕置き』

『え、ええつと・・・猫が寝込んだ!』

『・・・ポチツとな』

バシユン!

『ぐふっ!?!』

『『ロシエツト!?!』』

椅子があつたので座つたら無茶振りされ、お仕置きとして椅子ロケットで天井に衝突
(切りもみ回転とBGM付き)。

『・・・ぶっ』

『K. K.、アウト』

『がふっ』

『『K. K.、く!!』』

笑つてはいけない部屋で笑つてしまい、巨大な丸太で横殴りにされる。

『もう嫌だ〜!お兄ちゃ〜ん!!』

パカッ

『うわあああああああ・・・』

『『エーリック!?!』』

何度もスタート地点に戻され嫌になり走り出したら落とし穴。

「……くくっ……もう、限界……何、こいつら、俺を笑い殺す気?」

三人をモニターしていた雪兎は面白いくらいにトラップに引つ掛かる彼らを見て大笑していた。

「確かにここまでお約束なの見てると狙ってんじゃねえ?としか思えないぜ」

「ロシエ……K.K……」

「いくら敵対していたとはいえ、これは流石に同情するよ」

「二つだけ確かなのはコイツと敵対しなくてよかったってことだな」

ロシエット達がVR空間から帰還したのはその三日後のことだった。その頃には三人共すつかり精神的に疲弊しており、ロシエットなんかは「兎怖い兎怖い兎怖い……」と何やらトラウマを植え付けられていた。

そうこうしている間にJ Aは包囲網こそ未完成ではあったがムーロンに向けて進攻を開始。その情報を得た連邦評議会も多くのアマドライバーをムーロンに集結させ迎撃態勢を整えた。

「……どつちも随分と戦力を集めたもんだな」

ムーロンベース近郊で睨み合っている双方を見て雪兎は呆れたように呟く。

「この戦いがこの戦乱の終わりを左右するものだ」と双方理解しているのだろう」

その呟きにイヴァンも少し緊張したようにそう答える。

「まあ、俺達にとつてもこの状況は都合が良いんだがな」

「アレを使うのか？」

「使うさ。誰も殺さずにこれだけの数を制圧する事にかけてはアレは最適な装備だからな」

そう、雪兎は今回の決戦に向けてある装備を準備していた。カテゴリー・ダークマテリアルズの最後にして最凶のアドヴァンスド……アンブレイカブル・ダーク砕けえぬ闇を模したアドヴァンスドを。

とあるJAの技官side

ムーロンに程近い荒野にて連邦アムドライバーとJAの全面衝突が始まろうとしていたその時、ソレは上空より姿を現した。

「何だ、アレは……」

ソレは我々JAや連邦アムドライバーが身に纏っているアムジャケットに似て非なるパワードスーツで、背面に備えた大きな掌にも見える翼から淡い赤色の粒子を放ち浮遊していた。

『双方、直ちに武器を納めろ』

そして、ソレはオープンチャンネルで双方にそう要求してきた。しかし、その要求はJA側の無言の砲撃により拒絶の意志を示された。

「やったか？」

だが、その言葉がフラグだったのか無情にも煙が晴れた先には無傷で佇むソレがいた。

『……それがお前達の回答か？』

その砲撃は機動力を犠牲に限界まで出力を追い求めた母艦の主砲である高出力収束砲。例えネオアムジャケットであろうとも直撃すれば只では済まない威力のそれをソレはまるで蚊にでも刺された程度と言うかのように平然としている。

「に、二射目、てえーっ!!」

それをまぐれか一度限りのものだと思った司令官が二射目を指示し放たれるが、ソレは背面の片翼を間に割り込ませ赤色の粒子でバリアを展開し二射目をも防ぎ切った。これには我々JAはおろか、おそらく連邦アムドライバー達も唾然としたことだろう。この段階で実力のある者達はソレが自分達とは全く別次元の域にいる存在だと察したに違いない。だが、司令官は愚かにも三度目の砲撃を敢行し二射と同じように防がれてしまう。それでも司令官は諦めず四度目の砲撃を行おうとチャージを開始するが……

『仏の顔も三度までと言う。それにいい加減に目障りだ』

ソレも効かぬとはいえ鬱陶しく感じたようで片手を母艦に向けバリアにも使われた赤色の粒子をリング状に展開する。すると、母艦の主砲が突然爆発し主砲の内部から粒子と同じ赤色の結晶体が食い破るように生え主砲を破壊した。正直に言つて何が起きたのか自分にも理解が及ばない。何なんだアレは!?

『再度言おう。双方、直ちに武器納めろ……聞かぬと言うならばこちらでも武力行使を辞さない』

そう言つてソレは我々JAと連邦アムドライバー達の間にある戦場の中央部に降り立つ。そこで真つ先に動いたのはJAに所属する戦闘狂・デイグラーズと連邦アムドライバーのジン・クロスの二人だった。

『また貴様かつ!丁度良い、以前の借りを今ここで返してくれる!!』

『悪いがこちらにも面子つてもんがあるんでねっ!』

本来は敵同士の子二人が意図せずとはいえ同時にソレに仕掛けるも、ソレは翼を巨大な手のように操りデイグラーズのハンマーとジン・クロスのブレードを受け止めた。

『血の気の多い奴らだな、お前らは……面倒だ、少し大人しくしてろ』

武装解除勧告の時とは違い乱雑な言葉遣い(おそらくこちらが素なのだろう)でソレは両手に先程と同じ粒子のリングを発生させ二人を弾き飛ばすと、二人の手足を何処か

らともなく発生させた結晶体を使つて拘束する。

『う、動けねえ……』

『それにアムジャケットのエネルギーが急速に失われていくだど!』

注意して見れば結晶体が輝きを増すのに比例してディグラーズとジンⅡクロスのアムジャケットのアムエネルギーの輝きが失われていく。まさかあの結晶体、いやあの赤色の粒子は!?

『もういいだろう……蒐集開始』

再び上空に浮かび上がったソレが手を上翳すと我々のアムジャケットやバグシーン達からも結晶体が現れアムエネルギーを奪つていく。その奪つたエネルギーを更に結晶体を介してソレに集積されていく。そう、あの結晶体、あの赤色の粒子はおそらくナノマシンか何かで作られた「エネルギー蒐集兵器」だ。多分だがあのパワードスーツは恐ろしくエネルギー消費の激しいものなのだろう。だが、このナノマシン型のエネルギー蒐集兵器を用いる事で敵からエネルギーを奪いつつ無力化し、奪つたエネルギーで戦闘可能時間を延長する。そういうコンセプトなのだろう。それに加えてあの防御性能だ。あれはきつと「対軍戦闘用兵器」に該当するもの。これを開発した技術者に私は嫉妬した。私もJA側でネオアムジャケットの開発に携わつてきたからこそ判る。アレを開発した技術者は間違いなく天才だ。だが、ソレはまだ私を驚かせるようだ。

『ユニゾンモード・デュアル【LF：ルシフェリオン】展開』

ソレは新たに赤紫の装甲を纏い、槍のような武器を手にする。そして、その槍の先端に赤色の粒子を収束させていく。

『天より来るは明星の光、その光を業火に、全て焼き払う焰と変われ!』

ソレは我々に見せつけるかのように槍の先端を離れたところに見える山に向け、戦場からかき集めた膨大なエネルギーを解き放つ。

『滅焰の明星!!』

轟音と共に放たれたその砲撃は遠く離れた山に着弾するや否や山頂から中腹までを消滅させた。もし、アレが我々に対して放たれていたら・・・そう考えただけでゾツとする。そう思ったのは私だけではなかったようで、司令官を含めた多くの者達が顔を蒼白くしている。

『これが最終通告だ。双方、直ちに武器を納めろ』

その最終通告から程なくして我々JAと連邦アムドライバー達は武器を納めた。ムーロンにおける我々JAと連邦アムドライバーの戦いは後に「人の姿をした兎という破壊神」と呼ばれた彼の介入により僅か30分程で幕を閉じたのであった。

side out

100話 断罪と究極の力 兎、論破する

制圧後雪兎が各陣営に要求したのはそれぞれのトップであるウイルコット議長とジノベゼを集める事だった。ウイルコット議長は直ぐにその要求を呑んだが、ジノベゼはそれを拒否した。しかし、雪兎はキャシーにロシエツト達を捕らえている事を通達し、ミネーゼでのあれこれを使ってジノベゼを連れて来いと脅迫。意外にもネズミが苦手なシーンが震え上がる脅しに屈したキャシーに連れられジノベゼも最終的にはムーロンにやってきた。

「君があのパワードスーツ、ISと言ったかな？アレの操縦者なんだね？」

話し合いの会場に選ばれたのは連邦のムーロンベースの会議室の一室。「連邦の本拠地に入るなど！」とジノベゼがごねたが、雪兎が「護衛はお好きなように・・・まあ、誰が来ようが、連邦が仕掛けてこようが、まだ争うつもりなら叩きのめすだけだな？」と宣言した事で黙った。

「ええ、ウイルコット議長。まずはあのような手段で強引にこのような場を設けた事をお詫び申し上げます」

「いや、君は誰一人傷付けようとせず双方を無力化した。それにあのような状況だ。ただ話し

合い等と言っても双方受け入れなかっただろう」

雪兎の謝罪にウイルコット議長はそう告げる。ジノベゼもあの場でああしなげれば話し合いの席には着かなかったことに關しては同意のようだ。

「……そんな事をしてまで我々をこの場に集めた理由は何だ？もし下らない内容であればただでは済まさんぞ！」

「そう慌てないでいただきたい。それにお二人に話があるのは俺ではなく彼です」

ジノベゼを宥め雪兎はその人物を会議室に招き入れる。

「……」

「お、お前は!？」

その人物の登場にウイルコット議長は言葉を失い、ジノベゼは狼狽する。

「イヴァンⅡニルギース。アムテクノロジーの研究者だったカペリⅡニルギースの弟と言えはお分かりいただけますかな？」

会議室に招き入れられたのはイヴァンだった。雪兎の紹介にウイルコット議長は納得した顔を、ジノベゼは顔を青くしている。

「ウイルコット議長、お初にお目にかかる。そして、久しぶりだな、ジャンⅡピエールⅡジノベゼ」

「カペリ君の弟か。生きてるのは知ってはいたが……そうか、ピュアアムドライバー

や彼らと共にいたのか」

「兄を……存知で？」

「勿論だとも……私の至らなき故に失った命だ」

意外な事にウイルコット議長はイヴァンの兄・カペリを知っていた。その命がアムテクノロジを独占しようとしていた連邦評議会の一部の議員のせいで失われた事も。しかし、ここで空気を読まない男が一人。

「聞いたか！ ついにウイルコット議長が非を認めたぞ！ やはり私は正しー」

「少し黙つてろ、三流悪党」

ジノベゼの空気を読めない勝利宣言をドスの効いた声で遮る雪兎。

「さ、三流悪党だ?!」

「そうだが……ジャステイス・アーミーだから知らんが、やってるのは自分達に従わない連中を武力で無理矢理支配してるだけだろうに。従わないなら排除するとかどんな恐怖政治だよ？ そもそもお前らに各都市を武力制圧していい権限なんぞどこにも無いぞ？ その点、市民の顔色を伺つて都市や市民に危害を加えなかったランディーシムカの方が何倍もマシだわ」

「な、なあ……」

ISを兵器扱いしようとした為やむを得ず社会的に排除する形となったシムカだが、

雪兎は「市民に手出ししていない」という点でジノベゼよりマシと認めていた。

「議会があんのは市民の為だろうに……ジノベゼ、確かにウイルコット議長には非がある。だがな、あんたはやり方を間違えた。イヴァンの言う通りにアムドライバーの真実を証拠付きで開示する事だけしていればあんたは議長にも成れただろう。武力に頼るべきじゃなかった」

「わ、私は……私は間違つてなど……」

「もし、先の大戦であんた達が勝つていたとしても恐怖政治なんかしてりやあ何れJAに反発する組織が誕生するか、あんたのやり方についていけない連中にクーデター起こされて殺されるかだと思うがな？」

そう言つて雪兎はジノベゼに同行していたキャシーを見る。キャシーも雪兎が何を言いたいのか理解し顔を青くする。

「特にその女狐とか……実際に連邦からJAに鞍替えしてるんだ。また状況が悪くなれば寝返るぞ、その女」

原作を知るからこそ雪兎がしてきた指摘は正しく、その場にいた誰もがそれを否定出来なかった。そんな中、最初に口を開いたのはイヴァンだった。

「……まったく、結局私の言いたかった事は全て言われてしまったな？」

「すまん、あのド三流があんまりにも状況理解してねえもんで、つい……」

「いや、私が言うよりも説得力があつただろう。ジノベゼを見てみる。燃え尽きてしまつている」

「あつ……」

半端に頭が回る分雪兎の言っている事が現実起こりうると判つてしまつたジノベゼはイヴァンの言う通り二次元であれば真つ白になつていと思われ程に燃え尽きてしまつていた。

「……それで、君達の要望は私達に罪を認め、政治という舞台を降りろという事かな？」

「ええ、それが今回の件での一番穏便な解決策かと……勿論、今後も色々荒れる事でしょうが、このまま争い続けるよりは良いかと」

「それは私もかしら？」

「当然だ。言つておくが、俺はジノベゼ以上にお前が信用ならん」

ウイルコツト議長はいち早く雪兎達の狙いに気付き、キャシーもある程度は予想していた事を雪兎に確認する。

「初対面だというのに嫌われたものね」

「あんたの評判はジェナスやシーン達から聞かされてるからな」

その言葉に「そう……」と納得したキャシーはふと思ひ出したかのように雪兎に

訊ねる。

「そういえばロシエツト達は無事なのかしら？」

「一応な。帰りにでも引き取っていつてくれ」

「あら？何も要求しないの？」

「したらあんたはアイツらを見捨てるだろ？」

「・・・降参だわ。貴方には情報戦や交渉でも勝ち目は無さそうね」

「これで長かった戦いも終わる」

「これで全てが解決したと雪兎以外の全員が思ったその時。

『否、まだ終わりではない』

招かれざる者が姿を会議室の外、地上数十メートルの空中に現す。

「やっぱりこのタイミングで仕掛けてくるか・・・ガンザルデイ」

それはおそらく原作通りに彼の持つハーフゼアムで作られたゼアムジャケットを纏ったガンザルデイだった。

『残りのピースを渡してもらおうか？』

「断る。見ての通りこの戦いは既に終結した。もうゼアムは必要無い」

『いや、必要だ。二度とこのような争いが起きないよう管理する神となる力が！』

雪兎とガンザルデイのやりとりにゼアムの事を知らぬ議長らは首を傾げる。だが、

ジノベゼですらガンⅡザルデイが狂気に駆られているのは理解出来た。人間が神に至ろう等狂気以外の何物でも無い。

「新世界の神にでもなるってか？名前を書いたら殺せるノートでも手に入れてから出直していい」

『新世界の神か・・・惹かれるフレーズではあるが、そのノートを手にしたところで何か失敗するイメージしか浮かばんな』

「実際失敗してるからな、そいつ。要するに止めとけって話だ」

『そんな言葉で今更私が止まるとでも？』

そう言いながらガンⅡザルデイはその手にアムエネルギーを収束させ始める。

「思ってたえよ！来い！雪華っ!!」

そして本当の最後の戦いの幕が開く。

101話 究極の神VS創生の破壊神! 兎、神に挑む

!?

咄嗟に雪華を纏った雪兎は「CF:コールドフレイム」と「NW:ネオウイザード」を展開し、グラスパーの防御フィールドを使いガンザルディの放ったエネルギー砲を弾く。そうしたの背後のイヴァンやウイルコット議長らを守る為だ。

「ちつ、議長達もいるってのにお構い無しかよ」

『神の統治する世界には不要だ』

「いかれてやがる」

このままではせつかく彼らを生かした意味が無いと、雪兎は「NW:ネオウイザード」から「NJ:ネオイエーガー」に装甲切換えし、拡張領域からゼアムのデータをまとめたメモリを取り出す。

「ゼアムのデータはここだ。欲しければついてこい!」

『いいだろう』

そう言つてムーロンベースを飛び出し上空へ向かうと、ガンザルディもそれを追つていく。そして、十分にムーロンベースから距離を取ると両者はそれぞれの武器を手

激突する。

「ガン||ザルデイ！何故そこまで神になることに固執する！」

『人間が愚かだからだ！例え今平和を取り戻したとしてもまた何れ人間は争いを繰り返す！それが判らぬか！』

「それはあんたのやり方だつて同じだろう!!ゼアムに不老不死になる力なんて無い！だつたらあんたが死ねば残されたゼアムを廻つて再び争いが生まれる！」

『その程度の事で再び争うのであれば人間など滅んでも仕方あるまい』

絶え間無く激しい空中戦を繰り広げる二人。それはアムドライバー達はおろかIS学園の面々でも簡単には介入する事が出来ないレベルの攻防だつた。

「ふざけるなっ！」

両手のショーテルに熱と冷気を纏わせ斬りかかる雪兎をガン||ザルデイは両手をブレードに変化させて受け止めるが、雪兎はすぐさまガン||ザルデイの腹部に蹴りを入れ吹き飛ばす。

「人間はっ！」

それを雪兎は追い抜き蹴り上げ。

「お前の！玩具じゃねえ!!」

再び追い抜き両手を合わせて上から下に叩き込み、落下するガン||ザルデイに容赦無

くネオバスターライフルを放つ。しかし、すぐに落下点からガン||ザルデイが飛び出し
上空の雪兎と激突する。

「判ってはいたが・・・化け物だな、ゼアムジャケットつてのは」

『化け物では無い。神の力だ』

「あのガン||ザルデイと互角だなんて・・・」

その戦いを観ていたジェナス達はそれ以上の言葉を口に出来なかった。

「でも、雪兎がああの装備で押し切れないなんて・・・」

「雪兎・・・え？」

その時、心配そうに雪兎を見上げるシャルロットとガン||ザルデイの目が合った。

『ほお……』

何度目かもう判らない激突の後にガン||ザルデイがふと下を見詰めた。雪兎を相手にそのような隙を見せるのは致命的な行動ではあったが、その見詰める先に居たのは……”シャルロット”だった。

「まさか!?!」

雪兎が気付いた時には既にガン||ザルデイは行動を起こしていた。転移と変わらぬスピードでシャルロット達の前へと現れ迷わずシャルロットの首を掴む。

「うぐっ……」

「シャルツ!!」

『止まらたまえ』

雪兎も慌てて駆けつけたが、ガン∥ザルデイはシャルロットを盾に雪兎を制止する。

『彼女は君にとつて大切な存在のようだね?』

「シャルを離せ」

『ならば取引といこうか。君の持つゼアムのピースを渡したまえ。そうすれば彼女を解放しよう』

そして、ガン∥ザルデイは雪兎にシャルロットと引き換えにゼアムのピースを渡せと要求する。

「人質なんて卑怯だぞ!ガン∥ザルデイ!!」

これにはガン∥ザルデイに憧れていたジェナスも激昂する。だが、シャルロットを人質にされているためジェナス達も何も出来ない。

『何とでも言いたまえ、ジェナス君。私はもう決めたのだ。私は何があつてもゼアムを完成させ、神に成るのだと!』

「だ……め、ゆき……と……渡しちゃ、だめ」

「わかった。その代わり、シャルに傷一つつけてみる……その時は俺は自分を律する

自信はねえぞ?」

シャルロットはガンⅡザルデイにメモリを渡しては駄目だと言うが、雪兎はゼアムのメモリをガンⅡザルデイに放った。

『確かに……では、彼女を解放しよう』

メモリを受け取ったガンⅡザルデイはシャルロットを掴んでいた手を離しシャルロットを解放する。

「げほっ、げほっ……」

「シャル! 無事か!？」

「う、うん……僕は大丈夫、でも……」

とうとうガンⅡザルデイの手にゼアムのピースが揃ってしまった。

『ふ、ふはははは!! ピースは全て揃った! これで私は神に成れる!』

解放されたシャルロットを抱き止める雪兎。そんな彼らを嘲笑うかのようにガンⅡザルデイは再び上空へと昇り、ゼアムジャケットのヘルメットのインカムの部分に備えていたスロットにメモリを差し込みゼアムのデータを吸い出す。すると、手足は鋭くなり、背中から翼のようなものが生え、両肩にバグシンの目のようなパーツが現れ、ガンⅡザルデイのゼアムジャケットは禍々しい姿へと変貌していく。

「あれがゼアムの、神の力なのか……」

「まるで悪魔じゃねえか」

そして、フルゼアムジャケットとなったそれを纏ったガンザルディは早速その力の一端であるエネルギードレインを発動し、周辺のアムエネルギーを吸収し始める。それによってムーロンベースを警備していた連邦アムドライバーやJAのアムジャケットだけでなくムーロンベース等のアムエネルギーを利用していた施設全てがアムエネルギーを失い沈黙していく。

「お、おい。皆どうしちゃったんだ!?!」

そう、ゼアムが神の力と呼ばれるのは今やこのアムエネルギーに依存した世界の全エネルギーを掌握出来るこの能力によるところが大きい。しかし、アムエネルギーを利用していないISを使う雪兎達とジェナス達ピュアアムドライバーの面々には何の効果も無かった。

「何で俺達だけ……」

『それはオイラ達がジェナス達のネオアムジャケットに仕込んでおいたエネルギーコンバーターのおかげツス!』

「マジか!?!でも何でそんなもん搭載してたんだ?」

『ゼアムのピースを解析してた時に雪兎がこの事に気付いて万が一に備えて、つて仕込んでたんすよ』

「こんな事もあるのかと、つてやつだ。メカニックならば誰もが一度はやつてみたいシチュエーションだな」

雪兎はドヤ顔でそう言う。

「つまり、雪兎達はゼアムが悪用される事を想定していたと?」

「当たり前だろ? ピースがもし敵に奪われていたら、それこそ前にイヴァンが言つてたガン||ザルデイがアムテクノロジーを、ゼアムを悪用する可能性も想定していた」

つまり、雪兎は最初からガン||ザルデイを信用していなかったのだ。

『おかしい……全世界のアムエネルギーを吸収したはずなのに、吸収したエネルギー量が少な過ぎる』

更に、全世界のアムエネルギーを集約出来るはずのフルゼアムジャケットのエネルギードレインだが、実際に吸収出来たエネルギー量の少なさにガン||ザルデイが疑念を抱く。

「馬鹿か?俺が知り得た事に関して対策の一つや二つ立てて無いとでも?」

その疑念に雪兎はイタズラが成功した子供のような笑みを浮かべる。

『き、貴様つ!何をした!?!』

「なに、簡単な事さ……このムーロンベース一帯にアムエネルギーを遮断するフィールド発生装置を設置した。ゼアムとて使うエネルギーはアムエネルギーだからな」

ピースを集め終えた後、ロシエツト達を弄るのと並行して雪兎達は手分けしてその装置を設置して回っていたのだ。

「そうか!だからフィールド内にしかゼアムの影響がでなかったのか!」

「E x a c t l y」

『おのれ……だが!それで勝ったつもりか!』

「そういうあんたこそ、この人数を何とか出来るか?」

雪兎達IS学園の面々とジエナス達ピュアアムドライバーの総勢29名がいる状況。人数こそ有利ではあるがガン||ザルデイの言うように勝ったつもりになるのは少し早い。

「それに……ここまでやっというてフルゼアムに対抗出来る力を俺が用意していないとでも?」

『何?』

「見せてやるよ……これが俺の最新の切り札だ!」

雪兎は「CF:コールドフレーム」だけでなく「NJ:ネオイェーガー」まで一度解除し、新たな力を解き放つ。

「来い!」【EXCEED:No.06・GENESSIC!!】

起源や発端等の意味を持つ英語のGENESSISの形容詞の変型とも言われるGE

NESSIC。その名を冠した勇者王にして破壊神とも呼ばれるロボットを模した雪兔が東の協力を得て作成したアドヴァンスドを超えるEXCEED^極という力^{バック}。

『させぬ！』

それに本能的な恐怖を覚えたガン||ザルデイは腕をキャノンに変えて極太のビームを放ちまともに消し去ろうとしたが・・・

『Protection』

その電子音と共に既にGENESSICの展開を終えた雪兔に左手一つで張られた障壁に遮られた。そして姿を現したのは黒き装甲と金の装飾、所々に翡翠のエネルギーマテリアルを付けた破壊と創造の力たる【EXCEED^エ・N^ク・O^シ・D^ド・N^ド・O^ド・06・GENESSIC^ジ】となった雪華を纏う雪兔。

「変身や合体シーンでの攻撃とは無粋な・・・こっちは待つてやったつてのに」

『む、無傷だと!?!』

「これはお返しだ」

驚くガン||ザルデイを余所に雪兔は右手を貫手の形にし、それをドリルのように高速回転させながら腕を大きく振りかぶりガン||ザルデイへと撃ち放つ。

「貫けっ!!」

凄まじい回転とエネルギーを纏ったその攻撃はフルゼアムジャケットの左肩を貫く

が、フルゼアムに変貌した際に拡張されたパーツの部分だったために中の肉体が傷を負う事はなかった。だが、これにより左肩のエネルギードレインを司るパーツは破壊されてしまう。

『くっ、この程度っ?!』

「こいつはさつきシヤルを人質に取った分だ」

しかし、雪兎のターンはまだ終わってはいなかった。気付けばガン||ザルデイの目の前に射出したはずの右手を再び高速回転させ振りかぶり、今度は貫手ではなく拳を顔面に叩き込む。その拳は高速回転だけでなく、全身の力を余さず伝える何処ぞの霸王様の拳の異色のコラボレーションとなっており、その相乗効果で生まれた一撃はガン||ザルデイを音速の壁を突き抜ける勢いで吹き飛ばし、先日雪兎が滅焰ルシフェリエリオン・イレイザーの明星で山頂から中腹まで消し飛ばした山の隣の山の丁度中腹に激突し山全体と比較して1/3程の巨大なクレーターを作り上げた。

「・・・何、あれ?」

これにはジエナス達は驚愕していた。

『か、神が・・・神の力を得たはずの、私が・・・負けるはずが・・・』

「覚えておけ、最後に勝利するのは・・・勇氣ある者だああああ!!」

フルゼアムを得て神に至る力を得たと思っていたガン||ザルデイもその圧倒的な力

に声が震えていた。それでもシャルロット大切な人に手を出された雪兎がこの程度でガンⅡザルデイを許すはずもなく、トドメに拡張領域から巨大なプラスチックライバーのようなパーツを右腕に装着し、ガンⅡザルデイが埋まっている山のクレーターが反対側に貫通するような一撃を放ちフルゼアムジャケットを完全破壊した。

「……雪兎、シャルロットに手出されてブチギレてるよな？」

「そうだな、人質に取ったのがシャルロットでなければもう少しマシな決着だったろうに……」

「シャルロットさん、愛されてますわね」

「はう……」

「何処の勇者王よ、あいつ……」

「最後の台詞はあの名シーンの再現……流星は雪兎」

「かんちゃん、あのシリーズも好きだったもんね」

「元の世界に帰れたら本国に忠告しておくべきだな……アレと敵対すれば国が焦土となりかねん」

「うん、あんなのと敵対しようと思つたら衛星兵器クラスがいるよね」

「体育祭の時にアレがなくてよかつた……」

「お嬢様……」

「あ、あれはまさか霸王流!？」

「アキラ、貴女って本当に格闘技になると博識よね」

「でも、霸王流って魔法少女ものアニメに出るやつじゃなかったっけ？」

「あれは魔砲少女・・・それにしてもやはり師匠達は凄い」

一方でIS学園の面々は雪兎と束がやらかす事に慣れてしまったのかこの調子である。

「束、あれ、生きているのか？」

「生きてるんじゃないかな? ゆーくん、一応手加減してたみたいだし」

「あれで手加減なんですね・・・」

「だってアレ、衛星・小惑星級のデブリ破碎が本来の使用用途だもん」

「あく、「S:ストライカー」の発展仕様なんだ、アレ」

その後、救助されたガンザルディはゼアムの防護フィールドのおかげで命にこそ別状はなかったものの、その心はバキバキに碎かれミキサーにかけられたレベルで燃え尽きた症候群と化していたらしい。

102話 See You Again 兎、元の世界に帰る

ガン||ザルデイとの戦いから十数日が過ぎた。

そのガン||ザルデイは【EXCED: No. 06・GENESSIC】にゼアムと心プライトを木つ端微塵にされほぼ廃人となつてしまい、海の見える崖にある家に引きこもり静かに絵を描く(ジエナス達が訪ねてくるまでの)生活を送っている。余程シヨックだったようだ。

ウイルコット議長やジノベゼも政界を脱し、議長は原作では少し前に亡くなつてしまふはずが雪兎達の介入により生存していた娘と田舎に移り住み、ジノベゼもJAを解散して元々多くの支援者がいた地元の地方へと隠居したらしい。そして、その解散させたJAだが、デイグラーズを筆頭に解散を良しとしない多くの残党勢力が集まり【Deracine Army】と名乗り各地で暴れているらしく、アマドライバーの任務は対バグシーンからDAの鎮圧へと変わっている。アマドライバー達の戦いはまだまだ続くようだ。勿論、ピユアアマドライバーの面々も今までの活躍を買われ、連邦アマドライバーとは別に独立遊撃部隊として今後も戦っていくとのこと。

さて、何故こんな近況報告のような事をしてるかと言うと、漸く雪兎達が元の世界に帰る事になったからだ。実を言えばムーロンベースでの一件の前に帰る方法自体は確立していたのだが、雪兎が先日のガンザルデイとの戦いで使った「EXCEED:No.06・GENESSIC」の全力稼働の負荷で数日まともに動けなかったのだ。このEXCEEDシリーズは未完成で、そのアドヴァンスドをも超える規格外つぷりは搭乗者とISに掛かる負荷やじやじや馬さも規格外らしく、雪兎をしても全力稼働は負荷無く扱うのが困難という代物だったのだ。決着が着いた直後に雪兎が気を失い、束がその事をカミングアウトした事でそれが発覚し、目覚めた雪兎はシャルロットに泣かれ珍しく狼狽していた。

雪兎や束達が見つけた元の世界に帰る方法だが、その鍵はGENESSICに搭載されたある武装であった。それはフルゼアムジャケットを木っ端微塵にした「マルチボルトドライバー」という先端のボルトを変える事で様々な用途に使用出来る物で、そのボルトの中に元ネタである勇者王の設定にも存在した空間歪曲ボルトを再現した「ディメンションドライバー」があり、その力で強引に空間の歪みを発生させ、世界の復元力を辿り元の世界へと移動する方法だ。

※尚、元ネタには次元を移動するゲートを開くツールも存在するが、残念ながらそれはまだ再現出来ていない。

「随分と世話になったな」

「それはこつちの台詞だ、雪兔。雪兔には本当に色々と助けてもらったからな」

雪兔達が帰ると聞き、ジェナス達ピュアアムドライバーの面々もわざわざ見送りに集まってくれた。

「でも、ビーストバイザー、本当に貰っていいのか？」

「気にするな。元々そつちの資材で作ったやつだし、持って帰っても使い道無いからな。それにデータは十分取れたから作ろうと思えばあつちでも作れるし」

「それもそうか……なら、ありがたく使わせてもらおうよ」

「そうしてやってくれ」

ビーストバイザーを残していくのは先程話題に出た残党勢力であるDAとの戦いに備えてである。DAには原作でも最後の登場話ではピュアアムドライバー全員を相手に無双したデイグラーズがいるため、ビーストバイザーを使えるのはジェナス達にとつてもありがたい事だった。

「色々と驚かされてばかりだったが、達者でな」

「元気でな！」

「お二人もお元気で」

歴戦のアムドライバーで別れも多く経験してきたダークとタフトはそうさっぱりと。

「ロシエ達やキャシーの事では迷惑を掛けたな」

「気にすんなって……それより、セラとは上手くやれよ?」

「なっ!?!」

「どうしたの? シーン」

「な、何でもない!?!」

シーンは最近仲の良いセラとの仲をからかい。

「向こうに行っても元気だね?」

「セラこそ」

「また何れ会おう」

「うん、絶対に」

「あく! セラだけ狡い!」

「私達もだよ!」

そのセラやジュリジュネの三人は蘭やマドカと再会を約束し。

「ラグナ、シシーを大切にな?」

「そういう一夏はさつさと答えだせよ?」

「うっ、痛いところを……」

「まあ、一夏に関しては今更だがな」

「うんうん」

「酷っ!？」

ラグナは一夏や弾達とそんな会話をし。

「本当に最後まで賑やかな人達ね」

「でも、しんみり別れるよりはいいでしょ？」

「そうね」

パフは楯無とそんな一同を見て微笑み。

「ジョイ、ジャックさん、良い勉強になった」

「それはお互い様ツス」

「だな。それにしても束の嬢ちゃんに雪兔のやつはこつちが一を知って十を知る間に百も千も知識を吸収していくから何度か危うく置いてかれそうになったぜ」

「そうツスよ。特にあのEXCEEDってやつはオイラ達だけじゃ再現出来そうに無いツス」

「それについていけるジョイやジャックさんが異常。あと、アレは再現出来たら人間辞めてる」

ジョイやジャックといったメカニックは一緒に作業したカロリナと語り合い。

「貴方達の事は忘れ無いわ」

「ああ、私達もだ」

「また一緒に飲みましょうね」

マリーは旅の中で飲み仲間となった千冬や麻耶とまた飲もうと誓い。

「ニルギース、ゲンキデ」

「ああ、シャシャもジェナス達を頼む」

「ウイ」

イヴァンは残るシャシャにジェナス達を託し。

『皆様、準備が整いました』

別れの時がやってきた。

「そんじゃ、いくぜー！ディメンションドライバー、フルドライバー」

雪兎は再び「EXCEED: No. 06・GENESSIC」を纏い、フライング・ラビットの上に立ちディメンションドライバーを起動し、真上の何も無いはずの空間にその先端を射し込む。

『空間歪曲率規定値を突破。開きます！』

すると、こちらへ跳ばされる前に遭遇したものは違い安定した？空間の歪みが発生する。

「またな！アムドライバー！」

「また会おうぜ！ I S 学園の皆！」

その言葉を最後に歪みはフライング・ラビットを呑み込み消滅した。

「いっちまつたな……」

「ああ……でも、またいつか会えるさ」

「そうね。彼なら『一度行つた世界への移動くらい楽勝』とか言つてあつさり来ちやいそうね」

「雪兎の場合、あり得そうで困る」

「違いねえ」

「でも、その前に俺達の世界を平和にしなきゃな！」

「ウイ。コンドハミンナデカンコウリヨコウ！」

「いいツスね！」

「そうね、そんな再会がいいわね」

そんな光景を夢見てアムドライバー達はこれからも戦い続ける。

「……通常空間に戻りました。座標データも正常、私達が跳ばされた場所と誤差の範囲です！」

「時間は……跳ばされた一時間くらい後だな」

「「やった!!」」

何とか元の世界へと戻る事の出来た一同はクロエや雪兎の観測データを聞き歓喜する。

「随分と長い一時間だったな」

「まあ、完全に記録外の出来事ロスト・メモリーって感じですかね」

「確かに誰に言っても信用してもらえなさそうですね……」

そう皆がしみじみと思っていると、雪兎が一人険しい顔をしていた。

「雪兎?もしかしてやっぱり負荷が?」

「いや、そつちは短時間だったから少し疲れた程度だよ……問題は二次移行した鈴達の専用機をどうやって説明したもんかと」

「「「あっ」」」

そう、こちらでは一時間しか経っていない間に鈴、セシリア、ラウラの三人の専用機は二次移行してしまっていたのだ。

「ど、どうしよう……」

「こ、これは本国にどう説明したら……」

「何を悩む必要がある？ 二次移行自体は喜ばしい事ではないか」

「その過程が説明出来ないって言ってるの！」

元の世界に戻ってもまだまだ問題は山積みのようにだ。

「ふふ、相変わらず愉快なのだ、お前達は」

「そうは言うが、今日からお前もその愉快的仲間達の一員だぞ？」

「そうだったな。よろしく頼む」

「そんじゃあ……welcome to the worldイヴァン、歓迎するぜ」

幕間《EXTRA》

EXTRA—01 天災と兎の出会い

これは異世界から戻った直後ぐらいのお話。

「ん？俺と束さんの出会った時の話？」

「うん、前にEOSの訓練してた時に言ってたよね？」

「その話を詳しく」

メタな話をすれば56話で雪兎はそんな事を口にしており、その話を聞いて是非とも話を聞きたいというカロリナと気になってはいたが中々聞けずにいたシャルロットの二人が雪兎に訊ねる。

「そこまで面白い話って訳でも無いんだがなあ……仕方ない話してやるよ」
「そう言いつつも雪兎は当時の事を語り出した。」

それは雪兎が小学1年生の頃まで遡る。雪兎が一夏や箒と知り合つたのは入学式の日だ（ISの世界だと知つたのはその少し前）。当時から雪兎はメカオタクとして様々な物を作っていたのだが、その極めつけと言つていいのが後に弾が使う事になるアーマードギアのプロトタイプである作業補助外骨格だ。

「今日は良いシリンドラーが見つかったな」

その日、雪兎はいつものようにスクラップ置き場から大小様々なまだ使えそうな部品を自作の搬送台車で持ち出し、ホクホク顔で家の裏にあるガレージを改造した自分の工房へと戻ってきた。だが、工房の主たる雪兎以外には姉である雪菜でも、少し前に工房を見せた一夏や箒でもない見知らぬ（正確には雪兎は知っているがこちらは知らない）人影があつた。その姿は獣耳付の赤い頭巾を被り、淡い紫色の肩掛けという一人赤ずきんという格好の少女・当時中学生の篠ノ之束の後ろ姿だつた。

「……何でさ？」

それを見て雪兎は思わず某赤い弓兵の若かりし頃の彼と同じツツコミをしていた。

そのツツコミを聞き、束が振り返りジト目で雪兎を睨みながら近付いてきた。

「……これ、作ったのお前？」

そう束が言い指差したのは雪兎が組み上げていた作業補助外骨格だ。どうやら束はどうやって知ったかは不明だが、雪兎がそれを作っている事を知り興味を抱いたらしく、確かめに来たようだ。

「うん、それは僕のだけど……」

「何でこの子のこの機構は○○式なの？」

「△△式だと細かい動作は出来るけど、こいつにはそんな細かい動作必要無いから」

「ふくん、ならこれは？」

その後も束の質問は続き、束の表情も険しいものからにこやかなものへと変化していった。

「フムフム……成る程ね。流石は我が友・ユツキーの弟だよ！」

「ユツキー？もしかして雪菜姉さんの事？」

「Yes！今年たまたまクラスが同じになったんだけど、ユツキーは平々凡々の凡人共と違って私の夢に賛同してくれた同志だからね」

「（あく、そーいや春に新しい友達出来たとか言ってたっけ……名前くらい確認してくんだった）」

それがまさかの篠ノ之束と思ってもいなかった雪兎はこの場にいない姉にちゃんと確認しておけばよかったと後悔する。

「夢ですか？」

一応は原作を読んで知ってはいるが、その事を怪しまれないよう雪兎は上機嫌の束に訊ねる。

「うん！それはね……この天才たる束さんの理解も及ばない星の海・宇宙に行く事なんだよ！」

そのキラツキラと目を輝かせて話す束を見て雪兎は面白そうだな、と思った。原作では多くの事に阻まれ宇宙に行く為に開発したISを兵器扱いされてテロリストのようになってしまった束が障害を乗り越え宇宙へと旅立つ事になったらどうなっていたのか。見てみたくなかったのだ。

「うん？どしたの、ゆうくん？」

「ゆうくん？」

「うん、雪兎だからゆうくん。それで、どしたの？ものすつごく楽しそうな顔してるけど？」

「えっ？僕、そんな顔してます？」

「うん、新しい玩具貰った子供みたいな顔してるよ」

「どうやら思っていた事が顔に出てしまったようだ。」

「東さんも同じ顔してますよ?」

「それは東も同じだった。」

「ねえ、ゆうくん」

「何でしょう、東さん?」

「君、私の弟子にならないかい?」

「えっ!?!」

「どうやら東は自身の夢に好意的で、人並み以上の機械知識を持つ雪兎を気に入ったらしい。」

「だって、ゆうくんを凡人共の中に置いておくの勿体ないじゃん!だから、この天才たる東さんが色々教えてあげようと言うのだよ!」

「マジで!?!」

「雪兎が驚くのも無理はない。何せこのI.Sの世界で最高峰とも言われる天才から直接教えを受けるチャンスが降って湧いてきたのだ。」

「ぜ、是非御願います! 師匠!!」

「師匠……うん、何か良い響きだね!これからよろしくね、ゆうくん」

「こうして兎師弟は誕生した。そして、東に付いて篠ノ之神社を訪れた際に千冬や道場

の師範だった篠ノ之柳韻りゅういんに目を付けられ一夏や箒達と道場に通う事にもなり、準束級の天災が誕生したのだ。

「と、まあこんな感じかな？」

そこまで話し終えると、用意していた珈琲を飲み一服する雪兔。

「その結果が今雪兔って事なんだ……」

「だな。まさか俺自身がIS動かしてこの学園に入るとは思ってもみなかったがな」

本当にそれだけは雪兔の想定外の出来事だった。しかし、束は雪兔の設計した雪華を専用機として用意していたりと前もって知っていたようではあるが……

「まあ、そのおかげでシャルと出会えたんだから文句はねえけどな」

「ゆ、雪兔!？」

「……()馳走さまです」

そんな雪兎の言葉に顔を真っ赤にするシャルロットとやれやれと言わんばかりのカロリナ。そんな甘い空気を変えるべく、カロリナはずっと気になっていた事を雪兎に訊ねる。

「師匠は白騎士の搭乗者については知ってるの?」

「知らないな。白騎士に関して俺もノータッチだったからな」

流石に弟子と言えど白騎士の正体に関しては束も雪兎には教えてくれなかつたらしい。まあ、雪兎も雪兎なり白騎士の正体については察しているが、本人が隠しているようなので口にはしない。

「それに当時はISの基礎理論を覚えるので精一杯だったし」

「いや、普通は小1でISの基礎理論覚えるっただけで異常だから」

それを言えば中2でISを作り上げた束はもつと異常なのだが……

「ちなみに姉さんが俺をゆーくんと呼ぶのも束さんがそう呼んでるのを知ってからな」

どうも束と雪葉は互いに波長の合う友人だったらしく、この世界の束が原作よりまともなのは彼女の功績と言っても良い。

「ところで師匠、当時に作ってたものってまだ残ってる?」

「あるぞ?というかstorageにあるけど……」

「見たい！」

「わかつたわかつた、ここじゃ出せないから格納庫辺りにいくか」

「うん！」

「シャルはどうする？」

「それじゃあ僕も一緒に行こうかな？」

その後、雪兎達が格納庫で昔作った発明品を広げていると途中一夏達も加わり、各発明品にまつわる思い出話で大いに盛り上がったのであった。

十三章 兎と聖夜と聖剣と

103話 冬休みとシャルロットの誘い 兎、彼女の故郷へと誘われる

それはクリスマスが20日後に迫った12月4日の事だった。その日、シャルロットは少し緊張した面持ちで雪兎にある話をする事に。

「ねえ、雪兎」

「うん？何だ、シャル」

「僕ね、冬休みに一度フランスに帰ろうと思うんだ」

その話とはシャルロットの帰省に関するものだった。

「そーいや夏休みに言ってたな、母親のお墓参りに行くって話だろ？一緒に行くって約束してたやつ」(※26話参照)

「お、覚えててくれたんだ」

「当たり前だろ？シャルとの約束だからな」

「雪兎……」

その約束を覚えていてくれた事にシャルロットは嬉しさを隠せない。

「その約束もあるが、デュノア社も色々落ち着いたらしいし、一度直に会いたってシャルの親父さんにも誘われててな」

「そうなんだ……」

しかし、その後雪兎が口にした言葉で一気にテンションが下がる。やはりシャルロットと父親であるアルベールの溝は深いようだ。

「デュノア社には俺だけで行ってもいいが」

「ううん、僕も行くよ」

「そうか……（まあ、あっちも落ち着いたし、今なら本当の事話してくれるだろう）」

実は雪兎は以前シャルロットの為にデュノア社を調べた時にとある事を知り、シャルロットの父・アルベールにそこまで敵意を持たなくなっていたのだ。その事については先の誘いの連絡の際に本人にも確認しており事実だと判明している。

「大丈夫だシャル、俺が一緒だ」

「うん……って、ゆ、雪兎!？」

雪兎がそういうもシャルロットは不安そうだったので、雪兎はシャルロットを軽く抱き寄せた。

「大丈夫だって、俺の事が信じられないか？」

「……雪兎はいつも僕が無茶しないでって言ってるのに無茶するくせに?」

「ぐつ、痛いところを……」

少し調子が戻ってきたのか、シャルロットの毒舌が雪兎に突き刺さる。そんな苦い表情をする雪兎を見てシャルロットはくすりと笑う。

「でも雪兎の事は信じてる……僕が言っても聞かないくせに自分から言い出した事はちゃんと守ってくれるからね。あの時を除いて」

「シャル、まだ福音の時の事根に持つてる?」

「当たり前だよ……あの時、僕がどれだけ心配した事か」

「うっ……」

雪兎にとつてもあの福音と一対一で対峙した撤退戦は色々トラウマらしい。アドヴァンスド等、その後雪兎が自重しなくなつたのもこの事が少なからず影響していると言つてもいい。

「今度あんな無茶したら簡単には許してあげないからね?」

「お、おう」

早くもシャルロットの尻に敷かれつつある雪兎。それから楽しげに冬休みの予定を立てる二人はまだその冬休みにあんな事件が起こると思つてもいなかったのであった。

「ところ変わって衛星軌道上。そこにただの人工衛星とは思えない人工衛星が存在した。」

「これが聖剣か……」

そこには亡国機業・モノクローム・アバターのレイン、フォルテ、そして京都で雪兎達と交戦した闇夜の星座の一人・魚座こと楊小雨の姿があった。

「既に牡羊座が掌握しては……合図があったら中に入ってこの聖剣を完全掌握するよ」

「本当に上手くいくのかねえ」

今回も協力する事になった二部隊だが、レインはどうにも闇夜の星座のメンバーを信用出来ずにいた。確かに実力は元国家代表や代表候補生レベルの者が多く所属している闇夜の星座だが、そのメンバーの秘匿の為と言って今まで大した成果を挙げていない

のだ。それ故にレインは叔母であるスコール以上に闇夜の星座を信用していないのだ。

「私はあの戦闘アンタレスやレグルス狂共とは違う」

このピスケス小と言う女は亡国機業では珍しい嫌女性権利主義者である。何でも彼女の父は政治家で、女性権利主義という偏った思考の危険性を公の場で訴えたが為に女性権利主義者達に冤罪で投獄され、母もその陰湿な嫌がらせで自殺した。当時代表候補生だった彼女も女性権利主義に染まった他の代表候補生から嫌がらせを受けていたらしい。その為、彼女は女性権利主義やその温床となったISを産み出した篠ノ之束を憎んでおり、束にISを産み出した事を後悔させんとISを兵器転用する亡国機業に与したのだ。なので、基本的に彼女は他の亡国機業のメンバーとも仲がよろしくない。例外は同じような境遇のアリエスだけだ。

『ピスケス、終わった』

そのアリエスからクラッキングが済んだと通信が入り、聖剣のハッチが開く。

「よし、突入するぞ、小娘共」

「命令すんなよな、おばさん」

IS故に生体コアとなっている少女以外に無人の人工衛星などすぐに掌握出来る突入した三人だったが、その後すぐに通信が途絶えてしまう。慌てたアリエスが通信を復旧しようとするも、通信の代わりに聞こえたのは少女の歌声……その歌は原作と

は少し違い『清しこの夜』だったと言う。

104話 旅は道連れ、欧州旅行？ 兎、欧州に立つ

多国籍の生徒通うIS学園は冬休みが長い。多国籍であれば年末年始に帰国しなければならぬ生徒や国で仕事のある代表候補生の生徒などに配慮しなければならぬからだ。まあ、その分祝日等の休日が増えるので日程的な問題は無いらしい。期末試験で一夏が雪兎に泣きつくなどのトラブルはあったものの、学園長に代わり楯無の挨拶で冬休みに突入したIS学園。そして、雪兎とシャルロットは二人でフランスに向かうとしたのだが……

「イギリスは初めてだな」

「そうですね？では私自らご案内して差し上げますわ」

「我がドイツには第二回モンド・グロッソの時に一度訪れているのだったな？」

「ああ、でも、ほとんど見て回れなかったから楽しみだぜ」

「そうか、ならば楽しみにしているがいい」

「抜け駆けとはいい度胸だな？」

「私達も一緒に行くわよ！」

どこで知ったのか、フランスに行くという二人に便乗し一夏をイギリス・ドイツに誘

うセシリアとラウラ。その抜け駆けをよしとしない筈と鈴。

「ごめんなさいね、私達まで……」

「あつ、お二人の邪魔はしませんから」

「……ごめん、師匠」

「私まで申し訳ない」

セシリアやラウラと同じくヨーロッパ組で一緒になったエリカ、アレシア、カロリナの三人とアレシアの姉・カテリナ。

「どうせなら皆で一緒に行きましょう」

「たっちゃん……」

「お嬢様……」

「お姉ちゃん……ごめん、雪兎」

「ひじりんは実家行かなくてよかったの？」

「うん、なんか両親二人ヨーロッパの菓子職人の催しに行ってるらしくて」

「ついでに会えるといいな、宮本」

何故かついてくる事になった楯無、忍、虚、簪、本音、聖、晶の七人。

「虚さんも一緒か……」

「良かったね、お兄……誘ってくれてありがとう、マドカ」

「気にするな」

「本当にすまん、雪兎」

マドカの誘いで参加した弾、蘭、数馬の三人。

「人数いるし、フライング・ラビットで行こう、そうしよう！」

「雪兎兄様の為ならば私も」

「こいつの事は心配するな、雪菜と共に目を光らせておく」

「ゆーくと海外旅行なんて久しぶりだなあ〜」

「……すまん、こいつも見張っておく」

「相変わらずですね、先輩達は……」

大人数になったのでフライング・ラビットを持ち出す束とクロエ、その見張りに千冬と雪菜、あと真耶。勿論、ミュウやイヴアンもいる。

「何でこうなった……」

「結局、いつものメンバーだね……」

シャルロットの言う通りいつものメンバー+ α が揃い踏みである。

「雪兎と二人きりもいいけど、皆と一緒になのも楽しいよ」

「賑やかだもんな、こいつら」

予定では雪兎とシャルロットがフランスに行っている間にエリカ達他のヨーロッパ

組は母国へ戻り、残りのメンバーはドイツへ。数日後、再び全員集まってイギリスに向かいクリスマスに行われるセリアのバースデーパーティーに参加する事になっている。

「首相からは雪兎にも会いたがっていたが今回は仕方ない」

「ドイツの首相にはまた何れ挨拶に伺うと言っておいてくれ」

「承知した」

ということでは皆とは分かれフランスのシャルル・ド・ゴール国際空港にやって来た雪兎とシャルロット。今回は事件が起きた訳でもないので事前に空港にも連絡を入れ自家用機扱いでフライング・ラビットを着陸させている。まあ、フライング・ラビットで

の登場という事や今や「兎ラビット・デイザスターの皮を被った災害」の二つ名で知られ、リヴァイヴIIでデュノア社を返り咲かせた雪兎の突然の来仏に空港は大混乱となり、デュノア社からの迎えがなければ今もまだ空港から出られなかった事であろう。

「助かりました。まさかあんな事になるとは……」

「ほっほっほ、雪兎殿はある意味我が国の英雄のようなものですからな。お嬢様も今ではジャンヌダルクの再来とも言われておりますよ」

「じ、爺やったらー！」

デュノア社が迎えに寄越したのはデュノア家の執事である初老の男性・ジエイムズで、前からシャルロットの事を気に掛けてくれた一人らしい。彼から見ても雪兎はシャルロットを預けるに足る男と判断されたらしく、雪兎にも友好的であった。

「それでか……にしても、ジャンヌダルクとはねえ。それは火炙りの刑にされねえようにしっかりと守らないとな」

「ええ、よろしくお願い致します。もし、そのような事になればこの爺や、ジルドレエになるのも辞さない所存でございます」

「本気さは伝わったから、ジルドレエはやめて！」

ジャンヌダルクはフランスにとつては聖女であり魔女だった存在だ。その悲劇的な最後を遂げた彼女だが、昨今も多くの創作物で人気キャラになったりしており、日本で

も多くの人が知っている存在だ。そんな彼女に例えられシャルロットは顔を真っ赤にしている。

「ん？」

そんな話で盛り上がっていた時、雪兎は貼り出されているとあるポスターを見つけた。

「コメント姉妹来仏記念ライブ？」

それは最近人気のカナダの双子のアイドル・オニールⅡ コメントとファニールⅡ コメントの来仏記念ライブのポスターだった。

「へえ、あいつら今ヨーロッパツアー中なのか」

「雪兎、コメント姉妹を知ってるの？」

「ああ、昔、姉さんのレースの付き添いでカナダに行った時に色々あつてな」

「ふん……」

それを聞いて少し不機嫌になるシャルロット。

「おい、また疑ってんのか!? あいつら十二だぞ!? 妹分だつての!」

流石にシャルロットにロリコンと思われるのはごめんだと雪兎は必死に弁解する。雪兎は割りと面倒見が良いので男女問わず結構年下から好かれており、実は中学時代も数回後輩に告げられている。だが、当時は色恋沙汰に興味が無かった雪兎は全て断ってお

り、それを知る中学時代の同級生達は雪兎がシャルロットと付き合い始めたのを弾達を
通して知り驚愕したんだとか。

「仲がよろしいようで」

そんな雪兎とシャルロットを見てジェイムズは嬉しそうにそう呟いた。

もう少しでデュノア社に着くというところで信号に捕まり停車していると、何やら人
だかりが出来ているのが見えた。しかもそのほとんどが女性で黄色い声を上げている。

「今度は何だ？」

気になって窓を開けてみると・・・

「ロラン様〜！」

どうやらこの女性達はロランと呼ばれる人物の追っかけらしい。

「落ち着きたまえ、私の百合の蕾達」

そう言つて女性達の中から現れたのは凛々しい男装の麗人といった姿の女性だった。そして、ロランは雪兎達に気が付くと女性達を引き連れ雪兎達に近付いてきた。なのでジェイムズは一度車を路肩に寄せて停める。

「こんなところで【兎の皮を被つた災害】もといフランスの救世主とジャンヌダルクの再来とお会い出来るとはね。おっと名乗るのが遅れたね、私はロランツイーネ||ロランデイファイルネイ。気軽にロランとでも呼んでくれたまえ」

「なるほどね、こつちのことは知ってるようだが一応自己紹介しておく。天野雪兎だ、俺も雪兎で構わないよ・・・オランダの代表候補生さん」

「えっ?」

「ははっ、やはり知っていたか!」

「名前だけはな」

そう、ロランは演劇で男役を演じる役者でありながらオランダの代表候補生だったのだ。

「まあ、役者としての方が有名だからね。以後お見知りおきを、マドマアゼル」

「シヤルに色目使うなよ? お前の恋人たちの噂も知ってるからな?」

「おっと、これは失礼。綺麗なお嬢さんは口説かずにはいられなくてね」

実はロランは同性愛者としても有名で各地に恋人がおり、その総数は90を超えるという。

「俺のシャルに手出すなら相応の覚悟をしておけよ？」

「ふふつ、高い障害の方が燃えるというものだが、流石に君は高過ぎる壁だね」

流石のロランも雪兎相手では分が悪いと判断したようで、あっさりとシャルロットを口説くのを止める。

「さて、そろそろ公演の時間だね。時間を取らせてすまなかった……また逢おう！」
そう言うところランは雪兎とシャルロットに白い花を一輪ずつ投げ渡し、恋人たちを引き連れ去っていった。

「【ネリネ】の花とはまた用意周到なこつて」

「ネリネ？この花がどうかしたの？」

「ああ、そいつの花言葉は三つくらいあるんだが……今回の意味は多分【また会う日を楽しみに】だろうな、キザなやつめ」

ちなみに他の花言葉は忍耐・箱入り娘である。

「キザなやつて……雪兎も十分キザだと思うよ？まあ、あんな風に言ってくれて僕は嬉しかったけど」

「ははは……何か勢いで出た」

照れてお互いに赤くなる二人をジエイムズは微笑ましく見守っており、それに気付いた二人が更に顔を真っ赤するのであった。

105話 父と娘の再会 兎、歓迎される

シャルロット side

「戻ってきたんだ・・・」

僕は今フランスのデュノア社の前にいる。本当はお母さんのお墓参りだけするつもりだったのだけど、雪兎がデュノア社に、父に呼ばれていると知って僕もついてくる事にしたんだ。

「大丈夫か？シャル」

「う、うん、大丈夫」

どうやら顔色が悪くなっていたようで、それを見た雪兎が心配してくれたけど、これは僕が乗り越えなきゃいけない事だからと慌てて元気を装おう。

「気持ちわかるが無理はすんなよ？」

それでも雪兎にはお見通しだったようで、心配しつつも僕の気持ちを尊重してくれた。

「来たか」

そんな僕達を出迎えてくれたのは家の定僕アルバートル・デュノアの父だった。

「よく来てくれた、天野雪兎君。それとシャルロット」

だが、その父は僕が今まで見た事の無い穏やかな顔をしていた。

「お招きいただきありがとうございます、アルベール社長。その表情からして片付いたみたいですね？」

「ああ、つい先日にな。君の協力もあつての事だ、感謝する」

「それは何より」

雪兎は父がそんな顔をしている理由を知っているどころか関わっていたようで、そこにこやかに父と話している。その事を咎めるように雪兎を見るが、雪兎と父は苦笑するだけだ。

「シャルロット、彼を責めないでやってくれ。シャルロットに黙っているよう頼んだのは私だ」

「理由は後でちゃんと説明するから」

二人がそう言うので仕方なく引き下がると僕達は父に連れられ社長室まで行く事に。途中、すれ違った社員の人は雪兎を見ると皆頭を下げていた。おそらくリヴァイヴⅡの件だろうなと思ひ、僕は少し嬉しくなった。

「ハイ」だ」

父の案内で社長室に入ると、そこにはあの人・父の正妻であるロゼンダーデユノア夫

人の姿があり、僕は思わず固まってしまう。それを見てロゼンダ夫人は何故か悲しそうな顔をしていた。

「お初にお目にかかります。アルベールの妻のロゼンダです」

「こちらこそ、お初にお目にかかります。天野雪兎です」

そんな僕と違い雪兎はロゼンダ夫人と挨拶を交わし、父に薦められるがまま社員室のソファアに腰掛けた。

「シャルロットもそこに座りなさい」

「は、はい」

僕も父に言われるがまま雪兎の隣に腰掛ける。

「まずは雪兎君、よくフランスに、デュノア社に来てくれた」

「いえ、俺も何れこちらに伺うつもりでしたので」

「それとシャルロットの件では迷惑を掛けた」

父はそう言うのと雪兎に頭を下げた。すると、雪兎は少し慌てたように頭を下げ返した。

「それは俺の台詞ですよ。まさかシャル、シャルロットの転入にあんな裏があるとは俺も思っていないでししたし」

「娘の呼び方ならいつも通りで構わんよ。それと、例の件だが君の口から説明してやつ

てほしい……私が言っても説得力は無いだろうからね」

「では、失礼して」

「ど、どういふこと?」

二人の話についていけず、僕がそう訊ねると、雪兎がその理由を説明してくれた。

「シャル、実はな……シャルがIS学園に転入させられたのはシャルを守る為だったんだ」

「えっ!？」

その時の僕は多分、「信じられない!」という顔をしていたのだろう。でも、雪兎がそんな嘘を言うとは思えず動揺していた。

「まあ、信じられないのも無理は無いか……」

「そのように振る舞っていたのだ無理も無い」

しかし、その反応は雪兎も父も予想していたようだ。

「シャルが社長の愛人・妾の娘だったってのはシャルの方がよくわかってるよな?」

「う、うん……」

「そこでちよつと考えて欲しい……ロゼンダ夫人には少し申し訳ない言い方になるが、愛人だったシャルの母親との間にシャルが生まれたのに対してロゼンダ夫人との間に子供がいないのは何故か?」

「えっ?」

それは考えてもいなかった。確かに愛人だった僕のお母さんとの間に僕が生まれているのに、正妻であるロゼンダ夫人との間に子供がいけないのは不自然だ。その疑問の答えはロゼンダ夫人自身が答えてくれた。

「ロゼンダ夫人」

「ええ、私はね……不妊症なの」

不妊症……これは正確には病気ではなく症候群に該当し、一般的には「妊娠を望み、一年以上性生活を行っていないにも関わらず妊娠しない」場合、不妊症と判断される。この原因は人によって様々であり、明確な治療法が存在する訳ではない。

「そのせいで彼女は子供を作れなかった。シャルロットに辛く当たってしまったのはそのせいでもあったんだ」

父のその言葉を聞き、僕は以前に「この泥棒猫っ!」と強く当たられた事を思い出した。

「ごめんなさいね……本当はあんな事言うつもりじゃなかったのに」

多分、さつき僕がロゼンダ夫人を見て固まってしまったのを見て彼女もそれを思い出してしまったのだろうと察した。でも、これが僕をIS学園に送り込んだのどう関係してくるのだろうか?

「この話がどうして関係するのかって顔をしてるな？ 実はシャルが引き取られてすぐの頃にデュノア社の派閥はおおよそ二つに分かれてたんだ。一つはシャルを後継者にしようとしてた一派。そして、もう一つがシャルが妾の娘って事で後継者と認めず排除しようとしていた一派だ」

「ーっ!?!」

そこまで聞いて僕にも事の全貌が理解出来た。僕はその一派に暗殺されそうになつており、そんな僕を自分達だけでは守れないと思つた父が無理矢理理由をつけてＩＳ学園に送り込んだのだろう。つまり、一夏や雪兔のデータ取りと言うのは僕をＩＳ学園に行かせる為の方便だったのだ。

「その顔は理解したっばいな？」

「うん……」

「良かった、シャル。お前は父親にちゃんと愛されてたんだよ」

「う、うん……」

その雪兔の一言で僕の中にあつた何かが崩れたような気がした。

「雪兔、ちよつと、胸借りてもいい？」

「ちよつとと言わずいくらでも」

そこで我慢の限界がきて僕は雪兔の胸で声を上げて泣いてしまった。社長室は防諜

の為に防音仕様だったのが幸いしてそれを聞いていたのは胸を貸してくれた雪兎と父にロゼンダ夫人、それから同席していた爺やだけだった。その後泣き止んだ時に父達からとても暖かい視線を向けられて僕は恥ずかしくなって今までにないくらい顔を真っ赤にしてしまったらしい（雪兎談）。

s i d e o u t

106話 お墓参りとフランス観光 兎、双子と再会する

アルベールが真実を語り、親子仲が多少改善されたデュノア家。その後、デュノア夫妻に誘われ雪兎達は高級フランス料理店で食事をし、元々シャルロットの母親とは親友だったというロゼンダの頼みでシャルロットはデュノア邸で一泊。雪兎は家族の時間を邪魔してはいけなと一人ホテルに泊まった（料金はアルベールが持つと言い、高級ホテルのスイートルームに一泊した）。

「こんなホテル一人でなんて泊まった事ないってのに……」

高級ホテルなんて前にシャルロットと食事をしに行った以来で、いつもなら姉である雪菜が一緒だった事もあり色々と落ち着かなくなった雪兎は一人ホテルをさまよっていた。

「シャルはちゃんと話せてればいいんだが……」

そんな事を考えていると。

「あれ？もしかして、雪兎お兄ちゃん!?」

「えっ？あつ、本当だ!」

雪兎の前方から見覚えのあるオレンジと水色の髪をそれぞれ左右別々のサイドテールでまとめた双子の少女が近付いてきた。

「ファニールとオニールか、久しぶりだな……お前達もこのホテルに泊まつてたのか」「うん！」

「明後日のライブの為にね」

「ところで雪兎お兄ちゃんは何でフランスに？」

「ちよつとデュノア社に野暮用でな。数日したら今度はクラスメイトの誕生会に出る為にイギリスまで行く事になってる」

雪兎がフランスに数日滞在すると聞き、オニールは嬉しさを全面に出して、ファニールはほんの少しだけ嬉しそうに微笑む。

「じゃあ！明後日、私達のライブ来てくれる？」

「ちよつとオニール、雪兎だって都合があるでしょ？」

「そうだな、連れが一人いるからそっちの予定も訊かないと……つてか、明後日なのに席用意出来るのか？」

「まあ、関係者席ならまだ空きがあったはずよ。雪兎有名人だし、私達の招待客つて事にすれば大丈夫だと思うわ」

今や雪兎の名前は束に次ぐレベルなのでゲストとして招くのは問題無いとの事。

「ちよつと連れに確認取るわ．．．あつ、シャル？今ちよつといいか？実は．．．」
「ファニールとオニールが大丈夫だと言うので、雪兎は電話でシャルロットに確認を取ると、シャルロットも行つてみたいと言う。」

「．．．判つた。それなら二人に頼んでおくよ。うん．．．また、明日」

そして通話を終えると、コメント姉妹は興味津々といった表情で雪兎を見上げる。

「今ので、もしかして例の彼女さん？」

「確か、フランスの元代表候補生だっけ？」

雪兎とシャルロットの関係は既に記事にもなっており、一般人も知るものとなっている（58話参照）。そのため、コメント姉妹もそれを知っていたようだ。

「流星は芸能人、詳しいな」

「えっへん！」

「オニールは雪兎の関連記事は全部チェックしてるものね？」

「ファ、ファニール!？」

「ははは、相変わらずだな、お前達は」

「うう．．．それはともかく！雪兎お兄ちゃんと彼女さんの分の席はとっておくから！」
「ぜ、絶対に観に来なさいよ！」

もう少し話をしていたかったが、マネージャーから呼ばれたとの事でコメント姉妹は

部屋へと戻っていった。

「あいつらの歌を生で聞くのは数年振りか……楽しみだな」

その後、雪兎も明日はシャルロットの生家と母親のお墓参りがある為、部屋に戻って休む事にした。

翌日、何やらご機嫌なシャルロットとホテルの前で合流した雪兎は再びジェイムズが運転する車でシャルロットの生家にやってきた。生家はシャルロットがデュノア邸に移り住んだ後もアルベールの手によってシャルロットの母親のお墓共々管理されていたらしい。

「へえ、いいところだな」

「はは、何にも無い田舎だよ？」

「俺は街生まれ街育ちだから逆にこういうところは憧れるけどな……IS学園卒業したら移り住んでもいいくらいだよ」

「町から離れてるから色々不便だよ？つて言つても雪兔だし、不便だったら自分でなんとかしちゃうか」

「だろうな」

シャルロットとその母親の思い出の詰まった生家を見て回った後は、その母親のお墓でシャルロットが近況報告をしたり、雪兔が挨拶とシャルロットと付き合っている事を報告してシャルロットが真っ赤になったり、父・アルベールと仲直りした事を報告したりしていた。

「……また来るね、お母さん」

「もういいのか？」

「うん、久しぶりに一杯話したから」

「そうか」

その後、雪兔達は雪兔が泊まったホテルへと戻った。

そして、コメット姉妹のライブ当日。

「す、すごい人だね」

「まあ、あの二人は今売り出し中のアイドルだからな。俺も生で聞くのは久しぶりだから少し楽しみなんだ」

ライブの行われる会場は既に入り口が大混雑しており、関係者席は入り口が別らしく、雪兎達も関係者席でなければ並ぶだけで疲れ果ててしまいそうな程だ。

「あつ、雪兎お兄ちゃん」

「来たわね」

関係者入り口に行くと、そこにはコメット姉妹が待っていた。

「お前らリハとかはいいのか？」

「うん！今日は私もフェアニールも絶好調だもん！」

「それに私達が案内しないと席わからないでしょ？」

「まあ、お前らが大丈夫ってんならいいが」

「それよりも！そっちのお姉さんが雪兎お兄ちゃんの彼女さん？」

「あつ、うん。僕はシャルロットⅡデュノア。シャルロットって呼んで」

「あつ、どうも・・・姉のファニールⅡコメットです」

「妹のオニールⅡコメットだよ、シャルロットお姉ちゃん」

お互いに名前は知っていたが、一応自己紹介をする。オニールの方は早速シャルロットをお姉ちゃん呼びしている。

「お、お姉ちゃん!？」

「だって、雪兎お兄ちゃんの彼女さんでしょ？だからお姉ちゃん!」

「はあ、オニールったら・・・ごめんなさいね、シャルロットさん」

「ううん、僕は構わないよ」

「やった!」

「そーいや、マドカにもシャル姉さんって呼ばれてたな」

「マドカ？雪兎、また妹分増えたの？」

「ちよつと訳有りのやつをウチで引き取ってな。義理の妹みたいなもんだ」

「うう〜！雪兎お兄ちゃんの義妹なんてズルい！羨ましい!」

そんな話をしながら雪兎達はコメント姉妹の案内で関係者席の中でも特等席に当たる席へと案内された。

「いいのか？こんな良い席」

「いいのいいの！」

「むしろ雪兎が来るって言ったたらこの席用意されたのよ」

という訳で雪兎達はその特等席でライブを聞く事になった。ライブ自体は特に問題もなかったが、ライブの途中で二人が二人で一つのIS「グローバル・メテオダウン」に搭乗したのを見て雪兎が「二人で一つってどこの半熟探偵と相棒だよ・・・それに歌で動くって熱〇バサ〇じゃあるまいし」とか呟いていたが、他は特に問題はなく無事にライブは終了した。

「二人共お疲れ様。まさかライブでISに乗るとは俺も予想してなかったわ」

「えへへ、驚いたでしょ？」

「ああ、調べてみたらカナダの代表候補生になってたなんてな。お前達ってIS適性Cじゃなかったか？」

「それは個人で計測した場合よ」

「なるほど、双子だから二人揃ってはじめて真価を發揮するって事か」

「うん！ファニールと一緒にならIS適性Aなんだよ！」

「不思議な事もあるんだね．．．それに歌で動くISなんて初めて見たよ」

「兵器としてではなく、こんな使い方なら俺も東さんも文句は言わないさ．．．それにしても双子・線対称・赤と青・ドッキング．．．でも、単独だと適性Cじゃ．．．いや、アレを応用すれば．．．」

「また始まった．．．」

ライブを見てまた何やら思い付いた雪兔に苦笑する三人。そんな和やかな空気を次の瞬間、突如轟音と地響きが雪兔達を襲う。

「え、えっ!?何っ!?!」

「ここではないが近い」

四人がライブ会場を出て震源地と思われる場所に向かうと会場に程近い自然を色濃く残していた公園のだ真ん中に直径1kmぐらいの大穴が穿たれていた。幸い当時公園には誰もいなかったらしく死者は出ていないとのこと。だが、その一部始終を見ていたと思われる男性が酷く狼狽しながら叫んでいた「空から光の柱が降ってきた!」と。

「光の柱?もしかしてそれは．．．エフスカリバー聖劍」

IS学園から約9,980km離れた異郷の地にて聖劍を巡る新たな争乱の幕が今開かれる。

107話 聖剣の脅威と亡国の影 兎、疑う

聖剣のものと思われる攻撃はフランスに限ったものではなく、その被害は欧州各国にも及んでいた。雪兎達はすぐに他の面々と連絡を取り、一度フライング・ラビットで全員を集めるとイギリスにあるセシリアの屋敷で情報交換を行う事になったのだが……

「で、雪兎さん。そちらの方々は？」

「すまん、こいつら三人ともついてくるって聞かなくて……というか、そつちも一人増えてね？」

「ちよつと色々あつてね」

そう、そこには雪兎と共に一緒にいたコメット姉妹や現場で偶然居合わせたロランがおり、一夏達の方にも赤いロングヘアに四角いフレームの眼鏡をかけた目付きの鋭い少女が一緒だったのだ。

「まあいい、さつきから箒にアプローチをかけてる馬鹿がオランダの代表候補生・ロラン ツイーネーローランディフィルネイ。そんでこつちの双子がカナダの代表候補生のコメット姉妹だ。オレンジの方が姉のファニール。水色の方が妹のオニールで、双子は俺の知り合い」

どうもロランは箒に一目惚れしたようでしつこくアプローチしているが、箒を一夏が庇いそんな一夏に箒がときめいている。それを面白くないと鈴とラウラがロランを焚き付ける。雪兎と話しているセシリアと楯無も話はしつとも視線は時折そちらに向けられていた。

「あつ、フアーちゃんとオニちゃんだ！」

「雪菜お姉ちゃん！」

「久しぶり」

雪兎が紹介を終えると元々知り合いの雪菜がコメント姉妹を抱きしめ再会を喜ぶ。

「彼女はベルベットⅡヘル。歳は雪兎君達の一つ上でギリシャの代表候補生よ」

「ギリシャ？」

一方楯無からベルベットの紹介を聞いて雪兎の表情が強ばる。無理も無い、ギリシャと言えばIS学園を裏切ったフォルテⅡサファイアと京都で交戦した闇夜の星座のレグルスことシルヴィアⅡメルクーリの母国。それ故に雪兎のギリシャへの心象は米国に次ぐレベルで悪いのだ。

「私の目的は祖国を裏切ったあの二人を倒す事。祖国も私も貴方と敵対する気は無いわ」

「なるほどね……祖国を貶めた奴とかつての親友をこの手で、つてとどこか？」

「!?」

ベルベットが驚いたのは自分とフォルテがかつて代表候補生の座を争うライバルであり、親友だった事を初対面の雪兎に看破されたからだ。

「驚くこともないだろう？年の近い後任の代表候補生ともなりや面識ぐらいあったのはすぐに判る。それにそのフォルテ＝サファイアへの敵愾心はかつての友情の裏返し」

「流石ね」

「まあ、あんたがこの作戦に加わる理由は理解したが、今回の最優先事項は聖剣だ。私情で俺達の邪魔はしないでくれ」

「私はフォルテを討てればそれでいいわ」

「そう言つてベルベットは下がっていった。」

「（こいつは少し監視しといた方がいいな・・・）」

そんなベルベットを見て、雪兎は敵対こそしないだろうが、ベルベットの危うさに気付き何かしらの問題の火種になりそうだと感じた。

その後、聖剣攻略の為に各I.Sのメンテを行う事になったのだが、その前に雪兎は会っておかなければならない人物がいた。その人物はチエルシー＝ブランケット。セシリアの家に仕えるメイドにしてセシリアの姉のような存在だ。何故彼女と会わねばならないのかというと、それは彼女が聖剣に深く関係しているからだ。

「すまんな、セシリア」

「構いませんわ。それに私にも関係のあるお話なのでしょう?」

ちなみに二人が話している場所は屋敷の執務室。かつてセシリアの母親が使い、今は家を継いだセシリアが使う部屋だ。無論、防音も完璧である。

「ああ、多分だが、セシリアの御両親とも関係のある話だ……だろ? チエルシーさん」
「流石ですわ、雪兎様。もうそこまでお調べになっていらつしやるとは」

丁度そこにお茶の準備を終えたチエルシーが部屋に入ってきた。

「さて、まだるっこしい事は抜きにしてストレートに訊くぞ? 聖剣の操者……いや、生体コアになってるエクシア＝カリバーンってのはあんたの妹だろ?」

「!?」

その言葉にセシリアは耳を疑った。何故なら今までチエルシーに妹がいたなんて話は長い付き合いになるセシリアにしても初耳だった。

「その通りでございます」

そして、チエルシーもそれを肯定した。

「これは俺が独自のルートで調べた情報なんだが、エクシアは重い心臓の病を患っていたらしい」

しかもそれは当時の医療では治すのが困難な病で、それを知ったセシリアの両親はあるルートで入手したISコアをエクシアに埋め込み生体融合させエクシアを延命した。更に聖剣は元々来るべき時の為にセシリアの剣として作られた物で、聖剣の開發において主導権を握りたかった米国はそれを良しとせず、策略で列車事故に見せかけてセシリアの両親を殺害した。なお、エクシアの戸籍は生体コアにされた段階で抹消されているらしい。そう雪兎は語る。

「そ、そんな……お母様やお父様が?」

「はい、私も雪兎様程ではありませんが個人的に調べてはいました。雪兎様のおっしゃる通りかと」

「更に問題なのはコアの出所だ」

「と、言いますと?」

「亡国機業……どうもそのコアはあいつらから提供されたものらしい」

つまり、今回の一件には亡国機業が関与している可能性があるのだ。セシリアからすれば両親が亡国機業と関係があつた事の方がシヨックだろう。

「安心しろつて言い方はおかしいかもしれないが、セシリアの両親が^{亡国機業}あいつらに関与したのはその一件だけだ」

「私もそのように聞いております」

むしろ本格的に関与する前に暗殺されたと言つた方が正しいかもしれない。

「セシリアには悪いが、俺は聖剣を破壊するつもりだ。あれはまだこの世界には早すぎる兵器だ」

「ちよつと待つて下さい! 聖剣は構いませんが、チエルシーの妹は!」

「救うさ。暴走は一夏の夕風燈夜でなんとかなる。エクシアも俺と束さんでなんとかしよう」

それを聞きセシリアとチエルシーは安堵する。

「この事は作戦にも関わる事だから後で他の連中にも話すが、構わないな?」

それに対しセシリアとチエルシーは頷いた。すると、雪兎は席を立ち扉へと近付く。

「俺の話は以上だ……まあ、他の連中に話す必要は無さそうだけど、な」

「わ、わわっ!?!」

扉を開くと盗み聞きしていたのか、一夏達が雪崩れ込んでくる。

「つたく、盗み聞きとは感心しないな?」

「い、一夏さん!?!それに皆さんも!?!」

「え、え〜つと・・・」

「どつから聞いてた?つてか、チエルシーさん、あんた知ってたろ?」

「はてさて、何の事でしょうか?」

「まあいい、聞いてたんなら話は早い。俺達は何をすればいいかは判ったな?」

「妨害してくるだろう亡国機業を掻い潜って聖劍に突入」

「エクシアって娘を一夏が助けて脱出」

「それから聖劍を破壊、だね?」

「だが、資料で見た聖劍は巨大だ。そう簡単に破壊出来るのか?」

「問題無い。手は用意してある・・・聖劍には聖劍を、な」

ラウラの問いに自信有り気にそう答える雪兎。そして、表情を一変させ一夏達に問う。

「それよりもお前らメンテは済んだんだろ?後でちゃんとチエックするし、それで半端な状態だったならどうなるか、わかってんだろ?」

「「「・・・」」」

その雪兎の言葉に一夏達は雪兎から目を逸らす。どうやらこちらが気になってメンテの途中に抜け出してきたようだ。

「さっさとやってこいっ!!」

「「「イ、イエツサー!!」」」

雪兎の一喝で一夏達は慌てて執務室を飛び出していった。

「まったく、あいつらは・・・」

「ふふ、お嬢様は良き御友人に恵まれましたわね」

「ええ、本当に」

そんな様子を見てセシリアとチエルシーの主従コンビは笑みを浮かべるのであった。

108話 激突する宇宙 兎、宇宙へ

国際IS委員会の承認を経て正式に対聖剣作戦「オペレーション・ソードブレイカー」が発令された。この作戦は大きく分けて三つの部隊に分かれて行動する事になる。まずは聖剣に突入する突入班、二つ目が妨害してくるであろう亡国機業から突入班を護衛する迎撃班だ。最後にフライング・ラビットは司令部として機能させ雪菜のシルフィオーネとリンクさせ聖剣からの攻撃をブロックする役目があり、こちらにも防衛戦力を残す必要があった。

「突入班は部隊長に私、織斑千冬。メンバーは織斑、篠ノ之、宮本、神宮寺、それとマドカとブランケットの七名だ」

「続けて迎撃班は部隊長は俺こと天野雪兎。メンバーは鈴、セシリア、シャル、簪、エリカ、アレシア、カロリナ、ベルベットさん、コメント姉妹、ロランの十二名だ」

「最後に防衛班は部隊は私、更識楯無よ。メンバーは山田先生、忍ちゃん、ラウラちゃん、本音ちゃん、カテリナ先輩、ニルギースさん、それとラウラちゃんが助っ人で呼んでくれた黒兎隊の皆よ」

束、雪菜、クロエの他弾達非戦闘員はフライング・ラビットで待機だ。

「聖劍が次をいつ射つかわからない以上、早期に動く必要がある」
「作戦開始は明朝04:00だ。それまで身体をやすめておけ」

一方、ピスケスやレイン達との連絡が途絶え、更に聖劍の暴走というトラブルに見舞われた亡国機業。先の京都での一件でまたしても捕らわれたオータム、雪兎やアリーシャに敗れたアンタレスや双^{カストとホルクス}子を失いモノクローム・アバター、闇夜^{ゾディアック・ノワール}の星座の双方は甚大な被害を被っていた。更には支援者だったIS委員会の者や多くの機械戦乙女をも失った。聖劍奪取は捕らわれたオータム達の解放や制空権の確保という目的だったのだが、それも失敗……この度重なる失態で彼女達の組織内での評価は暴落してい

た。それ故に彼女達は酷く焦っていた。

「アリエス、まだピスケスと通信は回復しないの？」

「駄目……完全に聖剣の内部に取り込まれてる」

「となれば我々で救出する他ないか」

スコールの問いにアリエスが答え、星座のリーダーであり、本来十二宮に含まれない星座である蛇使い座レレピオスがそう呟く。

「レピオス、どうやらIS学園のやつらも動くようだよ？」

「ほう、アンタレスやレグルスを退けた子らか」

「まさかこんなに早く再戦の機会に恵まれるとはね」

レピオスの呟きに射手座タリアスがIS学園の動きを伝え、再び巡ってきた再戦に沸き立つレグルス。

「今度はお子様達に負けないで下さいね？レグルス」

「慢心するな、蟹座カルキ。子供と言えどやつらは戦士。侮れば痛い目を見るぞ？」

「牡牛座の言う通りよ。決して侮っていい連中ではないわ」

お子様
「夏にやられたレグルスを見下すカルキとそれを窘めるプレアデスとサダル。」

「……」

「山羊座はどう思うの？」

「……私は一兵士。レピオスに従う」

最後のメンバーであり、双子を除き最年少のアルマはストレアの問いにレピオスに従うだけだと答えた。

「こちらは全員異存は無いようだ。スコール、君はどうする?」

「行くわ。どうせ姪とフォルテを回収する必要があるもの」

オータムとレイン、フォルテがいない今、残るモノクローム・アバターの最後の一人であるスコールも出撃を決める。

「それに今回は彼女……福音もいるものね」
ナターシャ

そして、スコールが見つめる先には凍結されたはずの福音を手にしたナターシャIIとファイルスの姿もあった。

「聖剣を破壊させぬ為にはいえ、大統領彼も酷な事をする」

「……」

何故ナターシャがここにいるかと言うと、国際IS委員会の聖剣破壊作戦を良く思わない米国が利害の一致から亡国機業に手を貸すべく、凍結された福音ナターシャIIの操者を凍結された福音を盗み出したという名目で亡国機業に協力させたのだ。ナターシャも当初は反発したものの、家族を人質にされてしまい命令に背く事が出来なかったのだ。

「期待しているよ、君と福音の働きには」

こうして、かつて雪兎達を苦しめた銀の福音までもが再び雪兎達の前に立ち塞がろうとしていた。

翌日、「オペレーション・ソードブレイカー」が始動し、雪兎達は単機で大気圏を突破可能なフライング・ラビットで宇宙へと上がった。そして、視界に聖剣を捉えると突入班と迎撃班が出撃する。

「これが、宇宙……」

「二夏、感動するのは後だ。あつちもお出でなすった」

PICのおかげで宇宙空間でも問題無く行動出来たが、予想通り亡国機業と思われる集団が現れる。

「(原作にいない機体が何機もいやがる……例の星座の連中か)……ん?この反応はっ!？」

「ちよつと待ちなさいよ!あれつてまさか!？」

しかし、その内の一機に雪兎達は見覚えがあつた。それは……

「……銀の、福音?」

そう、かつて臨海学校の際に交戦したあの銀の福音シルバリオ・ゴスベルだつたのだ。

『データ照合。間違いなくあれは銀の福音です。米国に問い合わせたところ、凍結されていた銀の福音をその操者・ナターシャⅡファイルスが盗み出したとの事』

「ナターシャさんが?嘘だろ……」

クロエの通信を聞き、前にナターシャと話した事のある一夏は信じられない、といった表情をする。

(あれは確か原作でマドカが盗もうとしてナターシャⅡファイルスとイーリスⅡコーディングに阻まれたはず!それが何故ナターシャⅡファイルスが盗み出してるんだ!?!まさかとは思うが米国のやつ、聖剣を破壊させない為にナターシャと福音を?わざわざIS学園に仕掛けてくるような連中だ。十分に可能性はある)

原作とは大きく異なるこの事態に困惑するものの、すぐにその背景に気が付く雪兎。

「一夏!気にするなどは言わんが落ち着け!」

「雪兎!?でもっ!」

「多分だが、訳有りだ。それも含めて俺が何とかする。だからお前はお前が成すべき事を! エクシアを救い出す事を考える!」

「・・・わかった。頼むぞ、雪兎」

一夏は少し戸惑いを見せたものの、雪兎の一喝で冷静さを取り戻すと、他の突入班と共に聖剣へ向かう。

「させない!」

「それはこっちの台詞だよ!」

それを人馬型のIS〔ケイローン〕を操るタリアスが右腕と一体化した弓型のビーム砲〔アルバレスト〕で一夏達を狙うもそれを予期していたシャルがそれをシールドで阻み、その間に雪兎達が一夏達と亡国機業の間に立ち塞がる。

「悪いが、ここから先は通行止めだ」

「ここをただで通れるとは思わないでね」

「やはり立ち塞がるか! 兎の皮を被った災害!^{ラビット・ディザスター}」

「さっきのは射手座か、他にも牡羊、牡牛、蟹、獅子、乙女、天秤、山羊、水瓶かな? それにあんたのそれ、蛇使いか?」

闇夜の星座のISはそのモチーフが黄道十二宮と同じく黄道に存在する蛇使い座が

モデルにされており、どこかしらにそれぞれの星座に由来する装備を持つのが特徴だ。それ故に一度見たことのある獅子、乙女、水瓶の特徴から他の星座にも当たりをつけていた。

「魚座に相当するのがいないところを見ると既に聖剣あつちの中つてどこか」

「イージスの二人もそつちにいるのかな？」

「多分な」

イージス、その片割れであるフォルテがいないと知り、ベルベットが少し揺れるものの、まだこの場にもう一人の裏切り者であるレグルスシルヴィアがいた為、ベルベットはこの場に留まった。

「代表候補生の小娘ばかりで私達が止められるか！」

「ただの小娘達だと侮つてると痛い目見るぞ？それに……この俺もいるんだからな」

そう言つて雪兎は「VF：バルニフィカス」と「YK：エルシニアクロイツ」を展開し、戦斧のような武器「バルニフィカス・スラッシャー」を手する。

「さあ、お前達の罪を数えろ」

109話 駆ける蒼き閃光 兎、ぶちころがす

「とは言ったものの、流石に人数が拮抗しては辛い・・・少し間引くか」

雪兎はそう告げるや否や目にも止まらぬ速さでたかが学生だと慢心していたカルキのIS【セイバークャンサー「断ち切る巨蟹」】の前に姿を現しスラッシャーを一閃、その両腕とサブアーム大剣を砕くとそのままカルキの腹部を蹴りプレアデスへとぶつける。

「がはっ」

「だから侮るなといったのだ、カルキ！」

「プレアデス！」

「なっ!？」

「おせえ！雷刃封殺爆滅剣！」

ラッシャー・タウルス

プレアデスは自身のIS【ラッシャー・タウルス「猛進する金牛」】で蹴り飛ばされたカルキを受け止めるが、同時展開していた【YK：エルシニアクロイツ】のビット・ランスロットから蒼い稲妻が剣のように放たれ、カルキとプレアデスのISに突き刺さった。

「爆発」

そして雪兎がそう言うのと稲妻の剣が爆発し、二人のISのシールドエネルギーを削り

切る。仕組みとしては突き刺さった稲妻の剣がシールドエネルギーを漏電させ、それを爆破のエネルギーにするとはいえげつないものだ。

「まずは二人」

「カルキ！プレアデス！」

「あの二人が瞬殺だど!?!」

全くもって何もする間も無く国家代表クラスの使い手が二人も無力化された事に亡国機業の面々は動揺するが、すぐにそれを成した雪兎を警戒する……しかし、それは雪兎の狙い通りだった。

「きゃあああああ!?!」

直後、アルマが突然悲鳴を挙げ意識を失う。

「い、一体何が!?!」

「あれだ!?!」

またしても混乱する亡国機業の面々。だが、レピオスがアルマの背後にいた小さい何かに気付いた。それは雪兎の【VF：バルニフィカス】を小型化し三頭身くらいの人形サイズの蒼い髪をツインテールにしたチビッコだった。

「な、何、あれ?」

「僕の名前はレヴィー!」

「じゃ、喋った!？」

「あれはこのバルニフィカス用のサポートツールでチヴィットシリーズ1号「レヴィ・ザ・スラツシャー」だ。見ての通り小さいがバルニフィカスと大体同じ事が出来る。自律型のビットロボってどこかな？」

「どうやらアルマはこのレヴィに背後から襲われたようだ。」

「……1号って事は他にもいるの?」

「ルシュフェリオンにはシュテル、エルシニアクロイツにはダイアーチエ、スピリットフレアにはユリーってのを製作中だ」

「ちなみにこのチヴィットシリーズ、IS非展開時にも出せるらしい。」

「ほらほら、ぼさつとしてると」

「僕達にぶちころがされるよ?」

雪兎とレヴィに陣形を掻き乱され、カルキ、プレアデス、アルマに続きアリエスもやられ大混乱となる亡国機業の面々。人数も減った事でIS学園と代表候補生達は二人一組でそこを強襲。普段から特訓メンバー同士で連携訓練をしていた為かロラン、コメット姉妹、ベルベットとも上手く連携し二対一もしくは三対一に持ち込んでいる。

「こいつら……代表候補生の小娘ばかりじゃなかったのか!」

「悪いけど、あんた達の相手なんて雪兎との特訓に比べればマシなのよ!」

「我が祖国のものに手を出した罪、償っていただきますわ！」

鈴・セシリアコンビVSタリアス

「今こそあの特訓とあの世界を培った力を見せる時ですわ！」

「ファニール、私達も頑張ろ？」

「ええ、オニール」

「いきますわよ、双子さん！」

「はいー！」

「この娘たち、京都の時より強くなってる!？」

エリカ・コメット姉妹トリオVSサダル

「久しいな、ベルベット」

「シルヴィアIIメルクーリ、いえレグルス！貴女は私が倒す！」

「私が援護するからベルベットさんは思いつきりやって」

「・・・わかったわ」

カロリナ・ベルベットコンビVSレグルス

「私も本気、見せちゃうわよ」

「では、私は騎士として君をサポートさせて貰うよ」

「あら、それは貴女の恋人達に嫉妬されそうね？」

「私の恋人達はそこまで矮小ではないさ」

「くっ、この二人、隙があるようでお互いに隙を潰してる」

アレシア・ロランコンビVSストレア

「さて、残るはその三人か・・・」

「たった二人で私達三人の相手とは・・・舐められたものね」

「ご主人と僕に速攻で四人やられたくせによくそんな台詞言えるよねえ」

「レ、レヴィ!?!」

「落ち着けシャル。スコールのゴルデン・ドーンと福音のデータは既に持つてるし、あのレピオスとかいうやつラビット・ディザスターの性能も大体予想がついた。負ける要素は無い」

「言ってくれるね、兎の皮を被った災害。だが、私の「ハイドラ」の毒は凶悪だよ?」

「このゴルデン・ドーンにもパッケージを追加しているわ。今までのようにはいかないわ!」

雪兎の発言にレピオスとスコールが反論するも、雪兎は呆れたような表情でスコールを見る。

「はあ・・・宇宙空間で炎が使える訳ねえのに炎特化ISなんか使うとか馬鹿なの? パッケージと言っても宇宙空間用の武装追加しただけで本来の機能十全に使えないだろ? そんなISにされたISコアが可哀想だわ」

「あ、そうだね．．．．．なんだろう、僕も負ける要素が無い気がしてきた」

言いたい放題である。でも、雪兎の言う事も間違つてはいない。本来宇宙空間メインのＩＳに宇宙空間で十全に機能を発揮出来ないゴールデン・ドーンは雪兎からしてみれば欠陥機もいところであつた。そして、ゴールデン・ドーンに追加したパッケージも雪兎の指摘通り宇宙空間で炎熱機能を使う為の応急処置に過ぎない。また、レピオスのハイドラも背面から伸びる大蛇を模した二本の攻撃用サブアームと蛇使い座の元となつたアスクレピオスからメデューサ関連の毒ウイリスを利用した剥離剤のような武装がある。と雪兎は推測しており、その程度の対策をしていない訳が無い。更に福音とはある意味一番戦闘経験がある雪兎が対策済みの為、正直なところ雪兎が本気を出せば一人でも三人を完封する自信もある。だが、その本気をここで出すのは少し不都合があつた為、今回はシャルロットの手を借りる他にレヴィイを使用する事にしたのだ。

「シャル、つて事でこいつら例のコンビネーションパターンの実験台にするわ」

「うん、早く片付けて皆の援護に行こつか」

「さて、覚悟しとけよ？．．．．．亡霊が暴れ回るからな」

そう告げると、雪兎とシャルロットはそれぞれパックを換装しスコール達へと突撃した。

110話 突入!聖劍(エクスカリバー)! 兎、シャルと暴れる

「でけえ……これが聖劍」

雪兎達が亡国機業を足止めしている間に聖劍へと辿り着いた一夏達。その圧倒的な大きさに一夏はそう声を洩らす。

「メンテナンス用のハッチは全てロックされているようだ……時間が無い。どのみち最後には跡形も無く破壊するんだ。扉の一枚や二枚壊しても問題あるまい」

ハッチが全てロックされていると知るや否や千冬はハッチの一つを斬艦刀で斬り捨て強引に侵入口を作ってしまった。

「ち、力技で……」

「流石は織斑先生。迷いが一切無かった」

「晶、そこは感心するところじゃない」

「グズグズするな、置いていくぞ?」

あまりにも脳筋な突入方法に突入班の面々が唾然となるが、千冬の一言で我に返り、千冬に続いて聖劍内部へと突入した。

「これが、聖剣の中……」

聖剣の内部は意外にも広く、ISが数機並んで移動出来るくらいの広さがあった。これは物資の搬入やメンテナンスの関係でそれなりに広く作られていたのだろう。

「各員油断するなよ、ここは既に敵地だ。案内は任せるぞ、ブランケット」

「かしこまりました。皆様、こちらです」

今回、チエルシーの参戦の為に雪兎から貸し出されたISの名は「蒼の従者」サージェント・ブルーこれは雪兎が昔設計したISで、刀身を相手に突き刺した後切り離し爆破させる「ブラストサーベル」と左腕に付けられたボウガン「ビームボウガン」二基の球状ビット「ガードスフィア」を装備するISだ。

「……でも、何か不気味だね」

「どうした？ 聖」

「うん、何かここまですんなり来てるから何かあるんじゃないか、って」

その聖の予感は的中する。順調に進んでいた一夏達の前に京都で亡国機業が使っていた機械戦乙女によく似た無人兵器が現れ行く手を遮る。

「こいつらはあの時の！」

「流石は聖。言ってる傍からだな」

「嬉しくなああああない!!」

「総員、迎撃しろ!」

聖の絶叫が響く中、一夏達は無人兵器の迎撃行動を取る。

その頃、雪兎達は……

「やっぱりそのISって宙間戦闘考慮してねえよなあ……」

「宇宙って燃焼三要素の酸素供給体無いもんね」

「熱伝導兵器も宇宙空間に熱が逃げちゃうからエネルギー効率悪いしね」

「とうるか、さっきの熱線も一発限りっぽいし……オバサン、馬鹿なの?」

「オ、オバサン!?!」

「いや、間違ってるないだろ？随分と身体弄ってるみたいだけど、加齢臭とオバサン臭さは消せなかったんじゃないかね？」

「い、言わせておけば!!」

「お、落ち着けスコール!」

雪兎、シャルロット、レヴィの二人と一体で盛大にスコールをデイスっていた。

「怒った？つてことは自覚あるんだね」

「レ、レヴィ、言っちゃ駄目だよ……多分、気にしてるんだよ」

「うぐっ……」

シャルロットの気遣いは逆にスコールにクリティカルだったようで、宇宙空間だといふのにスコールは器用にorzで項垂れてしまう。

「……あの子達、えげつないわね」

これには脅されて従っているナターシャも同情を禁じ得ない。宇宙空間用に装備したパッケージも雪兎達が指摘したように強力な熱線と熱伝導兵器を追加したもののだが宇宙空間での燃費は悪く、普通の相手ならスコールの技量で何とか出来るものの相手はISには一家言ある兎達である。そこに女性にはデリケートな年齢の事を突かれたスコールが心折られても無理は無い。

「レヴィ、スコールの方は任せていいか？」

「オツケー!…この僕に任せて!」

レヴィはそう言うのと何処から取り出したのか(おそらく拡張領域)雪兎の開発した対IS用拘束ワイヤーでスコールをゴールデン・ドーンごとミノムシのように拘束してしまおう。

「これで一人片付いたな」

「お前は鬼かつ!?!」

この対IS用拘束ワイヤーは雪兎達のISの中でもパワー自慢の鈴の煌龍すら抜出すのに手こずる逸品で、ISごと拘束された事で抜け出すにはISを解除する他無く、仮にその方法で抜け出せたとしても宇宙空間でそんな事をすればいくら身体のひとつを機械に変えたスコールと言えど助かる見込みは無い。つまり、先程まで雪兎達におちよくられて攻撃を連発していた現在のゴールデン・ドーンはスコールの生命維持装置ぐらいの価値しかないのだ。

「ん?…通信か」

そんな時、雪兎に通信が入った。

『雪兎兄様、工作員のカレンからナターシャ||ファイリスの家族を保護したと連絡がありました』

「だだよ」

「!?」

以前に I S 学園に潜入し、失敗した事で米国の捨て駒にされた特殊部隊【名も無き兵たち】という者達を覚えているだろうか？ 実はあの事件後に雪兎は千冬と共に彼らを掌握して【影狼隊】という名の部隊として米国に潜入させていたのだ。今回はナターシャが脅かされていると踏んで雪兎が影狼隊にナターシャの家族を保護させていたのだ。ちなみに、彼らには彼らが与えられていたファング・クエイクを魔改造した I S や兎謹製の装備を与えており、並みの部隊では手が出せない屈強な部隊と化している。

「これであんたがそいつらに、そして国に従う理由は無くなったと思うんだが？」
「……本当に君は規格外だね」

家族の無事を知り、フルフェイス越しでも涙しているのが判る。

「という訳で、完全に形勢逆転したんだが……まだやる？」

「ふざけるなっ！ 私は例え一人になっても戦う！ それが負け戦だろうともっ！」

あつという間に一人になってしまったレピオスだが、それでも一部隊の長としての矜持かその目に諦めの色は見られない。

「仕方ない……やるぞ、シャル」

「うん！」

「先に仕掛ける。タイミングは任せる」

「OK!」

すると、雪兎は「NS:ネオストライカー」とネオガンナーに換装し先行しつつアサルトライフルで牽制、シャルロットもライトニング・アサルトとネオイェーガーに換装しレピオスの上に回り、アサルトライフルがヒットしガード状態のハイドラにガングニールのEモードで砲撃の雨を浴びせながら背後に回る。

「くっ、挟まれたか」

前方からは大型の杭打ち機バイルバンカー・星屑スターダスト・プレイカー砕きを起動し突撃してくる雪兎。背後からはランスモードのガングニールで突っ込んでくるシャルロット。一度ガードに回ってしまったがために回避は困難と判断したレピオスはサブアームを犠牲にしてそれを受け切るつもりだったが、兎達がそれを許すはずもなく、突如お互いの位置を入れ替えガードの薄いポイントに雪兎が杭を撃ち込む。

「があ!」

「吹っ飛べ!」

そのまま撃鉄を打ち鳴らし薬莢を炸裂させ重量級であるハイドラを難なく吹き飛ばす。

「これもあげるね」

吹き飛ばされたハイドラに並走しつつ、Bモードで弾丸を叩き込みつつ、シャルロットがハイドラの前方に回り込み再びEモードでハイドラを雪兔の方へと撃ち返す。

「そら、もう一発っ！」

「ごはっ」

「もう一回っ！」

「ちよっ、まっ!？」

それを雪兔もシャルロットへとバンカーで返し、シャルロットもEモードで撃ち返す。

「今度はこいつで！」

ネオストライカーをネオブレイドに切り換えてバルムンクで打ち返す。

「なら僕はこれ！」

シャルロットはネオイエーガーからネオフォートレスに切り換えグランドスラムの砲撃を連射して弾き返し。

「大出血サービスだ！全弾持つてけ！」

ネオガンナーの全弾発射を浴びせる。

「雪兔！」

「おう！」

最後に「C・カスタム」の一角獣ユニコーン・クレストの紋章を突き刺し動きを止めたハイドラにルシュフェリオンに換装した雪兎がドライバーを突き刺しチャージを始め。

「これで止めだ!」

「いつけえええええ!!」

シャルロットがバンカーを放った直後にドライバーから収束砲が放たれる。明らかにオーバーキルの攻撃を受け、ハイドラはボロボロ、レピオスも白眼を剥いて気絶してしまっていた。

「これが僕達の」

「切り札だ、つてとこだな」
ジョーカー

決め台詞とハイタツチを交わす雪兎とシャルロットだが、それを見ていたレヴィとナターシャはそのコンビ榊ネーション劇に身を震わせていた。

「うん、ご主人達は怒らせないようにしよう」

「あれ、マニユアル操作よね? あんなの絶対プログラムパターンじゃ制御出来ないわよ……」

一歩間違えばフレンドリーファイアになりかねない、お互いを信頼するが故の連携攻撃にナターシャは戦慄する。

「あれ? そういえばオバサンが静かだけど……」

「気絶してるわね．．．まあ、あんなのさせられたらそうなるわよね」
そして、スコールも次は我が身と感じ取ったのか気を失っていた。

111話 聖剣VS聖剣 兎、ぶった斬る

雪兎達がレピオスを下した頃、残りのメンバーもそれぞれ特訓の成果が出ているのか善戦している。

「はあっ!」

「くっ!」

タリアスと戦う鈴とセシリアは龍咆等の特殊武装の半数が宇宙空間では使えない為、鈴が前衛を務め、セシリアが射撃で鈴をフォローする。

「これが本当に代表候補生の実力か!」

「あら? 情報が古くてよ」

「今の私達はプロジェクト・フロンティアの所属よ。それに、私達もそこそこ修羅場を抜けてきたんだから!」

以前の鈴達であつたならばおそらくタリアスには敵わなかつたであろう。しかし、異世界での戦闘経験や二次移行を経た鈴達にとつてタリアスは敵たりえなかつた。

「ついでだからあんたには私のとつておきを見せたげる!」
「四聖龍!!」

鈴がそう叫ぶと、鈴の周囲に四色の龍が顕現する。それぞれが炎、氷、風、雷の属性

を持ち、それを宇宙空間であろうと行使可能という煌龍に発現した単一仕様能力こそが【四聖龍】なのだ。

「いつさええええ!!」

鈴の号令で四龍はタリアスに襲いかかり、正確に武装だけを破壊していく。

「止めはあんたに譲ったげるわ、セシリア」

「ありがとうございますわ、鈴さん。では、踊り狂いなさい……私とこのブルー・ティーズ・ガブリエルの奏でる葬送曲レクイエムで！」

すると、今度はセシリアのブルー・ティーズ・ガブリエルから放たれたビットがタリアスを取り囲む。

「こ、今度は一体……」

「六芒ヘキサクロス・レイ閃光陣！」

そして、ビットから無数のBTレーザーが放たれタリアスを襲う。しかもこのレーザーは全て追尾してくるので回避は出来ず、タリアスは徐々にビットの囲いからなる六芒星の中央に追い詰められる。

「これで終わりですわ……カーテンコール！」

止めにランパードランチャーから極太のBTレーザーが放たれタリアスを貫く。

「安心を……非殺傷設定ですのぞ」

白目を剥くタリアスにセシリアはまるで演奏を終えたバイオリニストのような例をしながらそう呟いた。

「当たらないっ!」

サダルの操る【尽

イニグソオースターブル・アクエリアス

き

ぬ

水

瓶

】は両肩に装備した大型のビームカノンを主とする

第2世代IS。それ故に近接戦には向いていない。それでも水瓶のような堅さで高い防御力を持つが……

「おらおら」

「こつちだよ」

スピードは一般的なISより遅く、コメット姉妹のグローバル・メテオダウンに翻弄され。

「こちらもお忘れなく」

その隙をエリカが突いていく。

「このままでは……」

焦ったサダルは逆転を狙いビームカノンをチャージし始めるが、それはエリカの狙い通りだった。

「雪兎さんに教わったやり方ですが……これ、結構有用なのよねっ!」

何とエリカはチャージ中のビームカノンの砲口を狙い射ちビームカノンを破壊したのだ。

「しまっ!?!」

「追撃、いくわよ!」

「うん!」

片方のビームカノンを破壊されバランスを崩したサダルをコメット姉妹がサウンドビットとハンドガンで追撃。そこで更なる隙を晒してしまったサダルにエリカの放った射撃がヒットしていきサダルのISは戦闘不能にされてしまった。

「投降して下さるかしら?」

「……好きになさい」

「はっ!」

「そんな攻撃、当たりはしないよ」

「……油断大敵」

「くっ、他の者達よりはマシとはいえ、これはキツいな……」

レグルスと交戦するベルベットとカロリナのペアは相手が元世界第二位とあつて苦戦していた。レグルスも勝ち切れないこの状況に苦い表情をしている。

「ベルベットさん、提案がある」

「……何?」

最初こそカロリナのことを少し煩わしく感じていたベルベットだが、何度かフオーロされてきた事から提案を聞く程度には信用するようになっていた。

「私が何とかして隙を作るから、ベルベットさんは撃てる最大の一撃をお願い」

「……いいでしょう」

ベルベットが頷くとカロリナはストール・ブレードを背面に回しショットランスを構えてレグルスへと突撃する。

「ふっ、何か相談していたようだからと警戒してみたが、大した事は」

「さっきも言ったけど……油断大敵」

レグルスが手に持つ大剣でカロリナを迎え討とうするが、カロリナはレグルスと接触する直前にストール・ブレードを前面に移動させバリアフィールドを展開させ、勢いが乗り切る前の大剣を受け止めた。

「何っ!？」

「大剣みたいな重量系武装は勢いが乗り切る前が一番隙になる」

そこにショットランスでバリアフィールドの内から弾丸を連射してレグルスを怯ませる。

「うぐっ」

「食らいなさい、これが今の私の全力よ！」

カロリナがレグルスから離れたところでベルベットはレグルスに接近し左右の腕から0距離でヘルアンドヘブンの分子制御能力を発動。右で分子の動きを止め、左で活性化させる事で装甲に温度差と分子の高周波振動によるダメージを浴びせ防御性能を下げ、そこにハンドマシンガン、多連装ミサイル、グレネード、止めに大型ミサイルを叩き込みレグルスを吹き飛ばす。

「・・・師匠のコールドフレイムに似てるとは思ったけど・・・そのISS、興味深い」
何とかレグルスを下したベルベットとカロリナだったが、カロリナはベルベットのISS「ヘルアンドヘブン」に興味津々のようだ。

「今度、分かーメンテさせて」

「今、分解と言いかけなかった？」

カロリナも雪兎の影響を受け（おそらく最も影響を受けている）メカオタクになりつつあった。そんなカロリナに呆れつつも、ベルベットの表情は少しだけ晴れやかなものになっていた事にはまだ気付く者はいなかった。

「はっ！」

「ふっ！」

「くっ」

アレシアとロランのコンビは元々コンビネーションの得意なアレシアと女性の動きを見てに合わせる事を得意とするロランというペアであった為、初めて組むとは思えないコンビネーションでストレアを追い込んでいた。ストレアのIS【抗議する天秤】ブラテストウ・リブラは各所に追加装甲を纏い、状況に応じてその装甲をパージする事で戦い方を変えたり、パージした装甲を敵にぶつけてダメージを追わせる、装甲をパージしてダメージを軽減する等といった戦術を得意するISなのだが、今は既にアレシアとロランにその追加装甲を剥がされチクチクと攻撃され続けていた。

「はらはらはらー」

「まだ弾数は残っているのでお返ししよう」

アレシアは刃の接触部のみを加熱し相手を溶断する蛇腹剣【ヒートウィップ】とヒー

トチャクラムで滅多斬り、ロランは自身のISから伸びるコードをストレアがパージした装甲に突き刺しハッキングし、その装甲につけられたガトリングガンを使って牽制しつつ、自前のレーザーライフルでストレアを狙い射つ。ちなみに、追加装甲もロランがコードを突き刺しハッキングして強制的にパージさせたのだ。地味にやり方がえげつない。

「私達にはもう後が無いのだ！」

それでもストレアは諦めず、レーザー重斬刀でヒートウィップやヒートチャクラムを弾き、ロランの射撃を回避する。

「知らないわよ、そんなの」

「それに君達をしている事には華正義が無い」

ストレアの攻撃はロランがコードを刺した装甲を盾にする事で防がれ、レーザー重斬刀もアレシアのアームブレードでバラバラにされる。

「なっ!?!」

「ごめんね、この娘の爪アームブレードは高周波ブレードなの」

「そして、ファイナルだ」

止めにロランがサーベルで残りのシールドエネルギーを削りストレアも行動不能になつてしまう。

「すいません、レピオス……」

それと同時にストレアも意識を失った。

「うーん、アレシア A・P・バーフェクト Vね」

「君、イタリア人だろ……」

他の面子に比べて完勝に近い勝利だったが、何とも締まらない幕引きだった。

一方、突入班は何とか無人兵器を無力化してエクシアがいる中枢・制御室に辿り着いた。

「ここにエクシアが……」

「チエルシーさん……」

幼い頃に生き別れとなってしまう姉妹の再会。だが、それは感動的なものではな

く、世界の命運を賭けた場であった。

「はっ!」

制御室への厚く堅い扉も参式を得た千冬の前では紙切れ同然に斬り裂かれ、突入班が中に入り見たものは繋がれたコードが触手のように身体に巻き付き制御室と一体化している少女・エクシアの姿だった。

「一夏」

「ああ、やるぞ、白式!・白凰!」

『はい!』

『ガッテン!』

そんなエクシアに一夏は近付くと早速夕風燈夜を発動させようとするが……

「一夏っ!」

それを阻むように制御室に広がるコードが一夏を襲う。

「うおっ!」

『聖剣が彼女を奪われまいと抵抗しているようです!』

「くそ!どうしたら……」

エクシアから引き離されてしまった一夏が歯噛む。

「シャープガンナー!」

「一夏様！」

だが、そんな状況を打開せんと一夏に迫るコードを聖とチエルシー射ち落としていく。

「聖、チエルシーさん……」

「世話の焼ける男だ」

「突破口は私達に任せろ」

「一夏はエクシアを！」

続いてエクシアへの道を阻むコードをマドカ、晶、箒の三人が破壊し突破口を開く。

「いけ！一夏！」

そして、千冬が直近で一夏を守りながら進み……

「今度こそ！」

「『いっけええええ!!』』

一夏達の手がエクシアに届き、白い光と共にエクシアにまとわりつくコードを吹き飛ばす。

「……これで任務完了、だな」

光が薄れると一夏の手の中にエクシアが抱かれていた。

「よくやった。後は脱出するー」

誰もがそう安心したその時、聖剣内部にアラートが鳴り響く。

「い、一体何が!？」

『織斑先生!緊急事態です!』

「何があつた、真耶!」

『今まで沈黙していた聖剣が突如チャージを再開しました!目標は……バッキンガム宮殿です!』

「な、何だと!？」

「ちつ、絶対に何かあるとは思ってたが、こんな仕掛けしてやがるとは!」

おそらく敵対している勢力に内部に侵入されコアを失った際に発動する仕掛けなのだろうと雪兎は考えつつ、雪兎は一人聖剣とバッキンガム宮殿の射線上へと移動してい

た。

「織斑先生、聖剣の砲撃は俺が何とかします。そのついでに聖剣を破壊しますので早く脱出を」

『やれるのか？』

「知ってるでしょう？俺は出来ない事は言いませんよ」

『……デュノアを泣かせるような真似はするなよ？』

「……なるべく」

それに関しては雪兎は断言出来なかった。

『雪兎……』

そこにシャルロットが通信を入れてきた。

「心配するな、シャル。死にはしないだろうから……怪我ぐらいはするかもだが、そんなときは看病頼む」

『……絶対だからね？』

「ああ」

そう約束して雪兎は通信を切り、聖剣を見据える。

「つうわけだ……俺の今後の為にも消えてくれ」

そして、雪兎は聖剣対策として用意していた切り札ジョーカーを切る。

「いい、【EXCEED:No.01・Excalibur】」

現れたのは銀と青の騎士を彷彿とさせる装甲に黄金の剣。そう、この装備はとあるゲームに登場する騎士王アーサーⅡペンドラゴンを模したバックであった。

「さあ、どっちの聖剣が勝るか・・・比べようじゃねえか!!」

そう言つて雪兎が両手でエクスカリバーを構えるとその刀身が変形し、溢れんばかりの黄金の光を放つ。

「いくぞー! 【約束されし勝利の剣】アアアアア!!」

その光の奔流は同時に放たれた聖剣の砲撃と衝突し拮抗し始める。

「まだだー! リミットオーバー!!」

すると、雪兎は出力制限を解除し、雪華の全エネルギーをエクスカリバーへと注ぐ。

「ぶち抜けえええええ!!」

エクシアとISCコアを失いエネルギーの不足していた聖剣にそれを抑える力はなく、雪兎の放った光に吞まれ聖剣は光の粒子となつて消滅した。

「なんつっうデタラメな出力だよ、アレ・・・」

「今回、雪兎がシャルロットの手を借りてたのって、この出力確保する為だったんじゃない・・・」

「でなければあいつ一人で亡国の連中は狩られていただろうな」

「でも、アレって前にガン||ザルデイの時に使ってたやつと同じEXCEEDだよな？」

「今頃、全身筋肉痛になってたりして・・・」

『・・・その通りだよ・・・助けて、動けん』

「もう、今いくから待ってて、雪兎」

こうして後に聖剣事変と呼ばれる戦いは幕を閉じた。

『みくつけたっ!』

そんな雪兎達から少し離れた場所。ISとは似つかない血のように赤い装甲と全身に張り巡らされた管のようなもの、コブラの意匠が施されたパワードスーツらしきものを見に纏った何者かが嬉しそうにそう呟いていた。

112話 後片付けと新たな仲間 兎、暗躍する

聖剣事変が終わって数日後。ちよつと後始末の話をしよう。

「わ、私は悪くない！私は悪くないんだ〜！」

雪兎によってナターシャを脅していた事が明るみに出てISが登場して以降強行な政策が目立っていたアメリカ大統領がその地位を剥奪された。代わりに新たに大統領になったのはその反対派閥のリーダー。彼はナターシャに非礼を詫び、険悪になつていたIS学園とも和解に成功し世論を味方につけた。

「という訳で私もIS学園で教師をする事になったわ」

そして、そのナターシャは福音と共にIS学園に教師として赴任する事になった。新大統領曰く「友好の証」なんだとか・・・

「本当にありがとうございます」

「ありがとうございます！」

救出されたエクシアもエクシアⅡカリバーンではなくエクシアⅡブランケットとしてセシリアに仕える事になったのだが、埋め込まれたISコアは完全に彼女と一体化してしまっているらしく、そのコアの保護の為に雪兎が新たにエクシアに専用機を作成す

る事になった。クロエという生体融合型ISの見本がある為、そこまで苦勞はしないとの事。だが専用機の訓練の為にエクシアは来年度にマドカ達と一緒に学園へ入学が決まってしまった。エクシア本人は嬉しそうなので問題無いとは思うが……

「私もIS学園に編入する事にしたよ」

更に、箒に一目惚れしたロランがIS学園に編入してきた。これには箒が渋い顔をしていたが……箒、頑張れ。今回の件で雪兎達との繋がりを欲したオランダ政府の意向もあるとは思われるが、ロラン本人も乗り気なので問題無いだろう。

「それにしてもまさか全員捕らえられるとはな」

雪兎達が拘束したスコール達の他にも聖剣内部で捕らわれていたピスケス、レイン、フォルテの三人もあっさり捕まり、表立って動いていたモノクローム・アバターと闇夜の星座のメンバーは全て捕らえられた事になる。まだ彼女達の上位者達がいると考えられ油断は出来ないが、亡国に關しては一区切りついたと言える。ちなみに彼女達が使っていたISは全てプロジェクト・フロンティアに回収され再利用される事が決定している。

「全く、大事な話があるって聞いてたけど……そんな事とはね」

「……俺にとつてはすっげー一大事だったんだが」

「いえ、驚いてはいますよ？でも……」

「雪兔だったらあり得るって感じで、なあ？」

「「うんうん」」

「マジかよ……」

「あつ、雪兔が凹んだ」

雪兔は聖剣に関する事が一通り片付いてからプロジェクト・フロンティアに関わる一同に自身が転生者である事を明かしたのだが、雪兔が今までやらかしてきた事がやらかしてきた事だけに随分とあつさり受け入れられてしまった。その為、罪悪感とか色々なものを抱えてきた雪兔はがっくりと項垂れてしまう。

「……俺、一応皆が傷付かないように気にしながらとはいえ色々暗躍してたの気にしてたんだぞ？なのにそんなにあつさり受け入れられたら俺の頑張りは何だったんだよ……」

「ヤバい、雪兔が滅茶苦茶凹んでる……」

「彼からしたら本当に一大事だったものね」

「拒絶される事すら想定していたのだろうが……」

「皆あつさり許しちゃったものね」

「だけど雪兔が色々な物を思い付く要因の一つは判ったね」

「それを実際に作っちゃえる時点で普通じゃないけれどね」

「つまり、師匠の頭の中にはまだまだ色々な異世界の知識が詰まっていると！」

「むしろ喜んじやってる娘もいるわね……」

「もう、『雪兎だから』で済んじやうわね」

「『うんうん』」

「てめえら……全員アリーナに出ろや！新しいアドヴァンスドシリーズの実験台にしてやる!!」

「『ちよっ?!』」

その後、一同は雪兎の新型アドヴァンスドのテストでボコボコにされはしたが、彼らの結末はより強いものになった。

「お前は知っていたのか？束」

「うん、それでも私は狡いとは思わないよ？だって、ゆうくんはそれをちゃんと活かせるように努力したんだし」

「なるほどな」

「それに、私達の弟（分）なのは変わらないでしょ？」

「それもそうだな」

「えーつと、ということは天野君って精神的には私達より年上？」

「……」

「今まで通りでいいのではないかな？ ヤツは結局はヤツでしかないだからな」

「イーくんは良いこと言うね」

「い、イーくん？」

「イヴァンだからイーくん」

「・・・出来ればやめてほしいのだが」

「「え〜！」」

「雪菜、お前もか」

教師達大人勢も結局は「雪兎は雪兎」と考える事にしたらしい。

「良かったね、雪兎」

「はあ、ずっと悩んでたのが馬鹿らしくなるよ、まったく」

そう告げる雪兎の顔は言葉とは裏腹に嬉しそうな笑みだったと後にシャルロットは語る。

十四章 兎と龍とシャルロット

1 1 3 話 交わる世界 兎、龍と遭遇する

聖剣事変と呼ばれた事件が終息し、雪兎が転生者とカミングアウトしてから更に数日が経った。あれからセシリアの誕生会に出席した後、雪兎達は日本に戻り残りの冬休みを満喫していた。そんなある日の事……

「さてと、これで全部か……ん？」

買い出しに出ていた雪兎がIS学園と外を繋ぐモノレールを降りたところで何者かの視線を感じる。雪兎はゆつくりと人気の無い場所に移動し、視線の主が歩いてきているのを確認すると視線の主に訊ねる。

「……何者だ？」

『ほう、こちらの視線に気付いていたか』

その声はボイスチェンジャーで加工されたような声で、その声の主の姿もISとは似つかない血のように赤い装甲に全身に張り巡らされた管のようなもの、コブラの意匠が施された宇宙飛行士の服に似たワードスーツらしきものを身に着けており、素顔はわからない。

「あんなねばついた視線を向けられれば嫌でも気付くさ……で？あんたは何者だ？」

『そう慌てなさんな、イレギュラー。ブラッドスターク、そう名乗ってる』

「ブラッドスタークねえ……そのブラッドスタークさんとやらが何の用だ？」

『だから慌てなさんなって』

ブラッドスタークを名乗る人物はおどけた様子でそう言うが、雪兎としてはI S学園の敷地内にあつさり侵入したブラッドスタークを警戒していた。

『I S学園の校舎に行ってみな……面白いものが見られるよ』

「面白いもの、だと？」

『伝える事は伝えたし、退散させてもらうよ……チャオ！』

「お、おい!? 待て！」

言いたい事だけ言って去っていくスタークを追う雪兎だったが、スタークはその手に持つ黒い銃のようなものから黒い煙を放つとその姿を眩ませてしまう。

「ブラッドスターク、何者なんだ？ あいつは……」

スタークを見失った雪兎はスタークの言っていた事が気になり校門の方へと歩いていく。すると、龍の描かれたスカジャンにジーンズという格好の見覚えの無い男がいた。

「何だアイツ？見覚えがねえし、あんな格好で寒くねえのか？もしかやスタークの言っていた面白いものってアイツの事か？」

「……の性格上、遅れる事はねエと思うんだけどな……何でだ？つーか寒いなオイ……」

雪兎が近付いてみると、その男は若干雪兎より背が高く、髪の毛をエビフライのように編み込んでいる。寒いのは今気が付いたようだ。

「おい、お前ここで何してんだよ？」

「あ？ンだよ？」

後ろからその男の肩に手を置き振り返らせると一昔前の不良を彷彿とさせる口調でそう聞き返してきた。

「デメーこそ誰だ。IS学園の制服着やがって」

「いやお前が誰だよ。この季節に半袖Tシャツに前が全開のスカジヤンとか、ヤベー奴じゃねえか」

振り返らせて判った事だが、この男、スカジヤンの下は半袖のTシャツだった。

「は？今6月だろ」

「何言ってるんだ？今は1月だぞ？」

「は？」

どうも話が食い違う。そう思った雪兎は彼から事情を聞く為に彼を連れていく事にした。

「……とりあえず、来てもらうぞ。どうやってこのIS学園に入ったか知りたいしな」
「どうやってって……オイ！離せ！」

男は抵抗するが、どうも疲弊しているようで雪兎にあっさり拘束され連れて行かれる。

「クツソ……何でこうなるんだよーッ！」

(こいつ、さつき俺がIS学園の制服な事に反応してたな？それに6月……まさかな)
これが雪兎と……謎の男こと万城龍我のファーストコンタクトであった。

114話 雪兔VS龍我!? 兔、龍と喧嘩する

「イテテツ！いい加減放しやがれ!!」

「出来る訳ねえだろうが・・・お前にも事情あるっぽいけど、今のお前は不審者以外の何者でもねえんだぞ？」

「誰が不審者だ！俺には万城龍我って名前があんだよっ!!」

雪兔が校門で拘束した自称「万城龍我」と名乗る謎の男。その力は雪兔が思ったよりも強く、雪兔は相手が力を込めにくい方法で龍我を拘束しつつ学園内にある生徒指導室にて事情を聞こうと思っていた。

「そういうお前は何者なんだよ!」

「俺か？俺は天野雪兔・・・天の野原に雪の兔と書く」

「なるほどなるほど・・・じゃなくてっ！お前が何でこの学園にいるんだよ!?! って言うてんだよ!」

「そんなもん俺がここの生徒だからに決まってるだろうに・・・」

「はあ!?俺はお前なんて知らねえぞ!」

(こいつ、馬鹿っぽいけど嘘はついてないっぽいな)

龍我があれこれ騒いでいるが、対する雪兎は冷静に龍我から得た情報を整理しつつ先程考えついた仮説が正しいのではないかと考えていた。すると……

「雪兎、遅かったね？何かあったの？」

そこにシャルロットが雪兎の帰りが遅いからと心配してやってきた。

「シャル……ん？」

その時何故か雪兎と龍我の言葉が被った。

「な、何でお前がシャルを知ってんだよ!?しかもシャル呼ばわりしやがって!」

「いや、それはこっちの台詞なんだが……」

「雪兎、その人は？」

「エッ?お、俺だよ!龍我!万城龍我!」

「シャル、知り合いか？」

「う、ううん、知らないよ」

雪兎は答えが判っていないながらシャルロットに問うが、シャルロットは知らないと首を横に振る。これに龍我は酷くショックを受けた表情を見せるが、すぐに雪兎に食ってかかった。

「オイ!てめえ!シャルに何しやがった!!」

だが、龍我は雪兎がシャルロットに何かしたのでは?と思っただけらしく雪兎の拘束を無

理矢理引き離すと雪兎の胸ぐらを掴んだ。

「俺がシャルに何かするだど?見損なうなっ!何となくお前の事情は把握したが、とりあえずお前の頭を一度冷やす必要が有りそうだ」

「やるってんのか!やってやるよ!」

すると龍我は雪兎から手を放しファイティングポーズをとる。

「そう焦るな。お前もここの生徒だったって言うんだろ?なら持つてんだろ?専用機を」

そう言うのと雪兎は何処かに連絡をしながら龍我とシャルロットを連れてアリーナへとやってきた。

「とりあえず俺とシャルロットで模擬戦をやるってことで申請を出した。ここなら思う存分やれるだろう」

そう、雪兎が連絡していたのは学園で、このアリーナの使用許可を取る為だった。

「俺が勝つたら金輪際シャルに近付くなっ!」

「それじゃあ、俺が勝つたらお前の専用機を調べさせる。あと俺の話を聞け」

「いいぜ!だが、俺は負けねえ!」

「いくぞ、雪華!」

「こつちもいくぜ、ドラゴン!」

『ギャーオツ!』

「はっ?」

雪兔が専用機・雪華を展開すると龍我はスカジャンのポケットから小さなドラゴンのようなものを取り出し、その背中に蒼いボトルのようなものを嵌め込んだ。

『ウェイクアップ!』

「えっ!」

更に龍我はハンドルのついた機械を取り出すと腰に装着する。

「おい、ちよつと待て!?!それってまさか!!」

それを見て雪兔はソレが何であるか気付いた。

『クローズ・ドラゴン! Are You Ready?』

「変身!!」

龍我がそう叫ぶとベルトから伸びたチューブが前後で左右半分ずつのアーマーを形成し、それが龍我を挟み込むように合体した。その後、アーマーを纏った龍我の後ろから翼龍のようなアーマーが追加される。

『ウェイクアップバーニング! ゲットクローズ・ドラゴン! イエーイ!』

「……仮面、ライダー、だと!?!」

そう、龍我が変身したのは仮面ライダーと呼ばれる雪兔の前世で流行っていた特撮

ヒーロー。

「クローズ、仮面ライダークローズだ！覚えとけ！」

更にベルトから剣を抜き取り龍我は雪兔に斬りかかってきた。

「やっぱり仮面ライダーかよ!?というかISじゃねえのかよ!」

龍我が振るう剣・ビートクローザーをソードライフルで受け止める雪兔。

「ちっ、流石は仮面ライダー・・・パワーが桁違いだ」

このまま斬り合うのが不利だと察した雪兔は龍我から一度距離を取ると雪華のパックをトライアルからネオガンナーに切り換える。

「はっ!?そんなの有りかよ!」

今度は龍我が驚く番だった。それもそのはず、龍我の知るISは武器を切り換える事はあっても雪兔の雪華のように装甲等のパーツまで丸ごと切り換えてしまうようなISは存在しなかったのだ。

「こんなもん高速切替の応用だ。それにやっちゃ駄目だなんてルールも無いからな!」

そして、雪兔はお返しとばかりに両腕の計四門のガトリングガンをぶっ放ち龍我を攻撃する。

「ちよっ!?あ、あ、あ、危ねえだろ!」

「これも持つてけ!」

更に追撃として全身に備えたミサイルを龍我目掛けて放つ。

「ぎゃあああ〜っ!？」

ミサイルとガトリングの雨霰に翻弄される龍我を余所に雪兎は再びパックを切り換えネオイエーガーのネオバスターライフルで龍我を狙う。

「fire」

「うわああああ!？」

今まで受けた事の無い攻撃に龍我は手も足も出ないようだ。

「そ、空から射ってくるなんて卑怯だぞー！」

「そんなもん飛べないお前が悪い」

抗議する龍我に雪兎は問答無用とネオバスターライフルを連射する。

「……」

その光景に唯一の観客であるシャルロットは少し呆れながらも雪兎に提案する。

「雪兎、ちゃんと戦ってあげたら？じやないと龍我は納得しないんじゃないかな？」

「……分かったよ」

シャルロットにそう言われては雪兎も聞かざるえず、ネオブレイドに切り換えて地上に降りた。

「サンキュー、シャル！」

自分を気遣うシャルロットの言葉に気分を良くした龍我がシャルロットに手を振るのだが……

「余所見してんじやねえよ!」

そんな隙を雪兎が見逃す訳もなく、バルムンクで龍我をぶん殴りアリーナの壁へと叩きつける。

「があ……」

「安心しろ、峰打ちだ」

「……いつてえじやねえか!」

「ほう、あれをモロに食らって起き上がるか……ライダーシステムの強度が高いのか、それとも万城龍我の耐久値が高いのか……」

「てめえこそ余裕ぶっこいてんじやねえ!!」

雪兎がまだ起き上がる龍我に感心していると、龍我は手に持ったビートクローザーを雪兎に投げつける。

「甘い。というか、これはそうやって使うもんじやねえだろ……」

しかし、雪兎にそんな不意打ち紛いの手が通用するはずもなく、ビートクローザーは受け止められてしまう。

「もうちよつと道具は大事にだな……」

「隙有り!!」

『レディー・ゴーツ!ドラゴニック!フィニッシュ!』

だが、龍我の目的はビートクローザーを囿にし、雪兔の視線を逸らす事であった。雪兔がビートクローザーに気を取られている隙にベルトのハンドルを回し必殺技を発動させた龍我が蒼い龍のオーラ纏った拳を放つも雪兔はそれが判っていたかのようにネオフォートレスに切り換え、大型シールドビット・アイギスでそれを受け止めた。その一撃はアイギスの装甲を大きく凹ませる事は出来たが、雪兔に届かせる事はおろかアイギスを破壊する事すら叶わなかった。

「30点、そんな攻撃が俺に通用すると思うな」

「畜生!なら!」

すると、今度は雪兔に止められたビートクローザーを拾い柄の下にあるレバーを引くのだが……

『ヒツパレー!ヒツパ r 「バキッ」』

「えっ?」

何と龍我が勢い良く引き過ぎたのか、そのレバーが折れてしまったのだ。

「何だか知らないがそれはもう使えないみたいだな……だからと言って容赦する気はないが」

「嘩然とする龍我に雪兎はいつの間にか切り換えたネオストライカーの大型シールドを振りかぶる。

「もっかい壁とお友達になってこい！」

勢い良く叩きつけられたそれを龍我はビートクローザーでガードするも、続けて放たれたシールド内蔵バンカーによってビートクローザーの刀身は真つ二つに折られ龍我自身も再び壁に叩きつけられ変身が解除されてしまう。

「勝負あつたな」

変身が解け、アリーナの地面に倒れる龍我に雪兎がISを近付くと、龍我はまだ意識があつたのかフラフラと起き上がる。

「頭は冷えたか？」

「うるせエ、てめえにシヤルは渡すかよ」

龍我はまだやる気のようにだ。

「おい、やめろ！お前の身体はもうボロボロなんだぞ！」

「知るか！だりああああ!!」

龍我を止めようとする雪兎の顔面に龍我の渾身の一撃が炸裂し雪兎を2メートル程吹っ飛ばすと、龍我はそのまま崩れ落ちるように気を失った。

「……つたく、今の俺じゃなかつたら本気でヤバかつたぞ」

吹っ飛ばされた雪兎は勢いを殺す為にあえて後ろに跳んでいたようで、すぐに文句を言いながら起き上がった。

「雪兎！大丈夫!?!」

「ああ、何とかな……。それにしても、コイツは本当に一体何者なんだ?」

仮面ライダーに変身する事といい、先程の一撃といい、万城龍我の謎は深まるばかりであった。

115話 ライダーシステムと万城龍我の謎 兎、解析する

気を失った龍我を医務室に運び、雪兎は龍我の持っていたベルト・ビルドドライバーとフルボトル、そして折ってしまったビートクローザーを回収する。ベルトに填まっていたクローズドラゴンも大人しく雪兎についてきている事からこのクローズドラゴンがそこそこ賢いと雪兎は理解した。

「シャル、悪いんだがアイツ^{龍我}の事見張っておいてくれないか？」

「うん、それはいいんだけど……龍我つて一体何者なの？僕の事も知ってるみたいだったけど」

「多分だが、アイツは平行世界から来たんだと思う」

「平行世界？異世界とは違うの？」

「ああ、アイツの言動から推察するにアイツの世界もベースはISの世界なんだろう。違いがあるとすれば俺の代わりにアイツがいて、仮面ライダーが実在するってところだな」

「仮面ライダー……試合中にも言ってたけど仮面ライダーって何なの？」

「仮面ライダーってのは俺の前にいた世界で流行ってた特撮ヒーローでな、こういうベルトとアイテムを組み合わせて変身するんだ」

そう言つて雪兎はビルドドライバーとフルボトルを取り出す。

「アイツが変身したところを見るにベルト、ドライバーのこの穴にボトルをセットする事でそれに対応したハーフボディを精製させるタイプのライダーだな」

「でも、龍我はそのドラゴンにボトルを差してたよ?」

「それは多分このドラゴンのボトルのエネルギーが凄まじいんだろ・・・それをあのドラゴンで二倍に薄めて左右のハーフボディにする事で制御してるとどこか?」

一度戦っただけだというのに雪兎はビルドドライバーの概要をある程度理解したようだ。

「おそらくドラゴンを介さずに二本のボトル使うとバックファイアが酷いんだろう」

「そんな小さなボトルにそんな力が・・・」

「話を戻すと、アイツはその仮面ライダーであり、二人目のIS操者として学園に通つてたんだろう。それが何らかの理由でこの世界に跳ばされてきた」

「ふーん」

「そこでだ、どうも向こうのシャルと関係があつたっぽく、シャルの話なら聞いてくれそうだから龍我に色々説明してやってほしい。勿論、シャル一人だとアイツが何するかわ

「からんからレヴィもつける」

「ん？呼んだ？ご主人」

「ああ、ちよつとシャルの護衛を頼む。あと、龍我つてやつにこれ渡しといてくれ」

「そう言うのと、雪兎はレヴィにドラゴンフルボトルを渡す。」

「いいの？」

「そいつのデータはさつきあらかた取ったからな。俺は織斑先生にアイツの事話してコイツの解析をする。ライダーシステムだからよつぽど大丈夫だとは思うが念の為にな」

「……雪兎、解析したいだけじゃないの？」

「……それもある」

「生のライダーシステム等、そうそうお目にかかる機会が無いので一技術者としては解析したくて堪らないのだ。」

「それに……コイツも直してやんなきゃな」

「そう言つて雪兎は折つてしまったビートクローザーを掲げる。」

「改造は程々にね？」

「……わかった」

「よし、行こつか、レヴィ」

「うん」

雪兎に釘を刺したシャルは龍我の元へと向かい、雪兎は千冬に事情を説明すべく職員室へと向かった。

「なるほど、大体の事情は理解した」

あれから千冬に事情を説明しに行ったのだが、雪兎という前例がいたおかげか千冬はすんなり雪兎の説明を理解した。

「あと、お前が出会ったというブラッドスタークとかいうやつもその万城とやらと同じ世界の住人だと?」

「ええ、チラッとでしたが、アイツの持ってた銃にこれと似たボトルが刺さってたのを見ましたので」

「だろぅな……で?お前は どうするつもりだ?」

「と、言いますと?」

「万城の事だ。どうせお前の事だ、面倒を見るつもりなのだろうか?」

「……ええ、おそらくですが、万城の世界にいた怪人がこの世界にも現れる可能性があります
ありますので」

これはかつて雪兎が見たライダー作品にあつた展開で、ライダーがいない世界にライダーが現れると、その敵もしくは新たなライダーがその世界にも生まれるというものだ。

「デュノアを説明役にしたのはその為か……」

「多分、アイツがこの世界で心を許してるのはシャルでしょうから」

「まあいい、面倒を見るのであれば責任はお前が取れ、いいな?」

「了解しました」

千冬からはとりあえず龍我をIS学園預りにするよう呼び掛けてもらい、雪兎は一度自室へと戻るのであった。

「なるほど、そういう事か……」

ビルドドライバーを解析するうちに雪兎は先程シャルロットに語った推測が正しかった事と、ハザードレベル、ネビュラガスの性質等の情報を得た。

「確かライダーの力は敵の持つ力の応用だってどつかの敵が言ってたな……」

それは仮面ライダーウィザードの最終回である特別編にて敵のアマダムが言っていた「ライダーは悪の存在があるからこそそこから生まれる事ができた」と言う言葉だ。

「それはいいとして……問題はこっちな」

それは龍我が持っていたUSBメモリに記録されていたデータだ。

「これ、スタークの野郎だろ？クローズの強化アイテムとか何考えてやがんだアイツ……」

龍我が脳筋だと半ば確信している雪兎はそのデータを作ったのが龍我で無いと気付いており、あの意味深発言をしていたスタークの仕業だと見抜いていた。

「だが、渡す相手を間違えたな、スターク……俺がそのままきっちり同じもん作るな

なんてつまらん真似する訳ねえだろうに」

それをスタークからの挑戦状と受け取った雪兎はその強化アイテムのデータの改造を始める。

「ぜってえ一泡吹かせてやる・・・」

自分を利用しようとしたスタークに雪兎は犬歯を剥き出しの笑みを見せ必ず驚愕させる事を誓う。

「第二の天災と呼ばれた俺の力、見せてやんよ！」

116話 龍我の平行世界での日常 兔、龍に何かを作る

「はあ!?!お前と同室!?!」

「こつちだつてしたかないがお前を学園で預かる条件がそれなの!」

ドライバーの解析を終えた雪兔が医務室に赴くと、既に事情の説明を終えたようで、龍我とレヴィがじやれていた。そこに雪兔が龍我が学園に滞在する条件を説明しているところだ。

「何で雪兔なの?」

「こいつは男だし、何かやらかした時に取り押さえられるの俺くらいだし、連れて来たのも俺、な?俺以外に適任いねえだろ?」

「「確かに」」

シャルロットと龍我はわかるが何故かレヴィまで頷いている。

「あと、ほれ、これは返しとく」

そう言つて雪兔はビルドドライバーとロックフルポトル、そしてクローズドラゴンを龍我に返却する。

「アーツ!? 忘れてた!」

「ドライバーとドラゴンも結構ダメージあったから直しといたぞ。つてか、定期的にメンテナンスしとけよ。自分の相棒だろうが」

「ウグググッ」

雪兎の言葉に正論故に言い返せない龍我。

「あと、あの折っちまった剣・ビートクローザーだったか? あれも修理してつからもう少し待て」

「直せるのか!」

「俺を誰だと思つてやがる。天災・篠ノ之束が一番弟子、あんま好きな呼び名じゃねえがラビット・ディザスター
兎の皮を被つた災害なんて呼ばれてる」

「龍我が戦つた雪兎のIS・雪華も雪兎が設計したんだよ!」

「マジでか!?! ……つっても、どのくらいスゲエんだ?」

「僕を作つたのもご主人なんだぞ」

「エツ!?! お前、人間じゃねえの!?!」

「レヴィはロボットだ……で、話は戻すが、ついでに強度とか上げておいてやる。そのまま修理してもまたぶつ壊しそうだから、お前」

この時、龍我は篠ノ之束という名前に聞き覚えがあつたのだが、シャルロットの言葉

が衝撃的だったらしくそんな事は頭から抜けていた。

「お前を元の世界に返す方法も一応心当たりがある。準備出来るまでこっちでゆつくりしてけ」

「オ、オウ……すまねえがしばらく世話になる」

「それじゃあ改めて自己紹介だ。天野雪兎、こっちでの二人目の男性 I S 操者で I S 技師だ」

「万城龍我、仮面ライダークロウズをやってる」

多少すれ違いはあったが、無事に二人は和解し雪兎は龍我が元の世界に帰る手伝いをする事となった。

翌朝、雪兎はいつもの朝練ついでに皆に龍我を紹介する。

「へえ、平行世界から来たのか……」

「あちらにも私達がいるのか」

「しかも、6月というと……あの頃ですわね」

「まあ、悪い奴には見えないわね」

「うむ、身体つきを見るにそれなりに鍛えているようだな」

「りゅーが、お菓子食べる？」

「雪兎に聞いたけど、仮面ライダーって本当!？」

とりあえずは一夏、箒、セシリア、鈴、本音、簪の龍我がよく知るメンバー。

「万城君ですか……よろしくお願ひします」

「簪ちゃん、落ち着いて」

「格闘技を嗜むと聞いた。一度手合わせを願ひたいものだ」

「アキラは相変わらずね……」

「アキラだしね」

「……ライダーシステム。後で師匠にデータ見せてもらおう」

「新しい仲間と聞いたが、女子では無いのか……」

「むむ、ポニーテールは慣れない」

「きゅ」

『でも似合ってるの』

続いて龍我が知らない聖、楯無、晶、エリカ、アレシア、カロリナ、ロラン、ちよつと正体がバレると面倒なので髪型をポニーテールにしたマドカ、そして兎のミュウだ。

「ウ、兎!?!」

「きゅ」

『よろしくなの、リユーガ』

「こ、これはご丁寧にども．．．って、兎?!?!」

流石の龍我もミュウには度肝を抜かれたようで、開いた口が塞がらないようだ。

「そいつはミュウっていつてな。ちよつと変わった兎なんだ」

「イヤイヤ!?!普通、兎がプラカードで挨拶しねえだろ!?!」

「龍我、現実は小説より奇なり、だ」

色々あったが、やはりミュウに全部持っていかれたようだが、このおかげで龍我の妙な緊張は解けたようだ。

「ついでだし、こいつらも紹介しとくか．．．」

そう言うと、雪兎はレヴィと似たような三体を呼び出す。

「お呼びでしょうか、マスター」

「やっとならぬの順番か」

「よ、よろしくお願ひします！」

「順にシユテル、デイアーチエ、ユーリだ。それぞれルシユフェリオン、エルシニアクロイツ、スピリットフレアの能力が使える」

「シユテル達完成したんだ」

「あつ！シユテルン！王様！ユーリ！」

「元より開発しているのを知っていたシャルと、元ネタの関係でその存在を知っていたレヴィが三体に近付く。」

「レヴィ、ようやく会えましたね」

「これからは私の左腕として力を振るうがいい！」

「よろしくです、レヴィ」

「きやつきやつと戯れる四体に皆の表情がほっこりしたものになる。」

「アレ、本当にロボットなのか？」

「ああ、俺の自信作だ」

「龍我は未だにレヴィ達がロボットだとは信じれないらしい。」

「ね、ねえ、あの娘達、今夜だけお持ち帰りしちやダメ？」

「本人達がいいって言えば構わんぞ、アレシア」

可愛いものの好きのアレシアはマテリアルズ（雪兔命名）にすっかり心を奪われたらしく、目が凄いい事になっていった。その後すぐにマテリアルズに突撃したアレシアだったが、目がアレだったせいでユーリに泣かれてしまい、お持ち帰りどころではなくなってしまう。

「ね、ねえ、龍我」

そして、もう一人、我慢が出来なくなっている娘がいた。

「変身するところ、見せてもらってもいい!？」

特撮ヒーロー大好きな簪である。

「オ、オウ、いいぜ」

一応、雪兔に目配せして許可を取ってから龍我は簪の頼みを聞き入れた。

（ワクワク）

「やっぱ、世界は違っても簪は簪だな……」

「あつちでもこのパターンあつたのか」

その後、龍我の変身シーンを動画に収め、あちらこちらから写真を撮りまくられた龍我はすっかり疲弊してしまう。

「戦って無いのにこんなに疲れた変身は久しぶりだぜ……」

「恐るべし、特撮オタク……」

色々あったものの、無事に龍我は皆に受け入れられたようである。

その夜。ピツピツと投影式キーボードを叩く雪兎を龍我は筋トレをしながら眺めていた。

「雪兎、こんな時間に何やってんだ？」

「ん？これか？こいつはお前用のISだ」

「へっ？」

「お前、クローズには変身出来ても専用機ねえんだろ？」

「ああ、俺にはコイツがあるからな」

そうやって龍我はビルドドライバーを取り出す。

「だが、クローズが使えないって状況もこの先あるだろ。そんな時にお前が使えるＩＳがあつた方が便利だろ？」

「言われてみればそうだな」

医務室での一件の後、雪兎は龍我がいた世界での日時を確認しており、それがあの銀の福音との戦闘がある臨海学校の前と知り、急遽龍私の専用機を設計し始めたのだ。

「勿論、クローズに変身してる時もお前をサポート出来るようにしてある」

「自分のＩＳ設計したとは言つてたが、そんな事まで出来るのかよ!?」

「俺にかかれば簡単な事だ・・・で、何かつけて欲しい機能とかあるか？」

「あんましごちゃごちゃしてるのは合わねえから拳一つで戦えるやつがいいな」

「あく、なるほどな。確かにそんな複雑な機構積んでもお前じゃ扱い切れんか」

「お前、今俺を馬鹿にしたろ!？」

「少なくとも俺よりは馬鹿だろ？」

そんな話をしながら雪兎は龍私の専用機を形にしていくな。

「名前を付けるとしたら、そうだな・・・【蒼龍】ってとこかな？」

117話 異邦からの襲撃者 兎、龍とは別行動

「しまった。龍我の生活必需品がねえぞ」

「あー、確かにそうだな」

龍我が滞在し始めた翌日、雪兎はそんな当たり前な事に気付く。

「お前が今着てた寝巻きも今着てるジャージも俺のヤツだしな。サイズ合っていないし。てかどこから出したんだよ」

「お前の鞆の中に決まってるんだろ」

「・・・もういい」

雪兎はため息をつくくと、端末を弄って誰かに連絡を始める。まずは特訓メンバーのグループチャットで今日暇な人を探し、そのメンバーに龍我の生活必需品の買い出しの付き添いを頼む。

「・・・頼むぞ」

雪兎はそう言つて通話を終わると、端末をポケットにしまう。

「龍我。晶と聖が朝練をしていたらしいから、その2人と一緒に買い物行ってこい。金は貸してやるよ」

「あ？ 面白い物？ それと金はあるから大丈夫だ」

「生活必需品だよ。昨日は歯ブラシは旅館でよくあるアレを貸したし、タオルも俺のものを使ったけど……いつまでもそうする訳にはいかねえからな。それと、お前の世界の金は使えねえよ。紙幣ナンバー知らないのか？」

「しへいなんぼー？」

紙幣にはそれぞれシリアルナンバーが振られており、一つとして同じナンバーのものは存在しない。もし、龍我が持ち込んだ紙幣と同じナンバーのものが揃いでもしたら偽札だのと面倒な騒ぎになるのが目に見えている。

「……コレを持っていけ」

そこで雪兎は無言で自分の財布から万札を何枚か取り出し、手短にあつた封筒にそれを入れると龍我に渡す。

「だから、金は持つてるって！」

「使えないって言うてるだろ！」

雪兎は封筒を龍我に押し付ける。

龍我も途中で折れてそれを渋々受け取るとジャージを脱ぎ捨て、Tシャツを着てスカジャンを羽織り、ポケットに封筒をねじ込む。

Tシャツもジーンズは前日に雪兎が洗濯に回していたので清潔だ。しかし……

「・・・寒くないのか？」

「寒いけど、そんな言う程でもねエな」

「そうか。もう少し季節感のある服を買ってこいよ」

「おーおー。で、どこに行けばいいんだ？」

雪兎の言葉に龍我が適当に返事すると、雪兎は適当に返した事を気付き深いため息をつく。

「はあ・・・まあいい。晶と聖はシャワーを浴びて着替えたら校門に行くらしいから、お前もシャワー浴びて行け」

「シャワー浴びる必要ねエだろ」

「お前なあ・・・デリカシーが無いにも程があるぞ。晶も聖も女の子だぞ？筋トレして汗臭いお前がそのまま行ったらどうなる？」

「分かった！分かったよ！」

龍我はそう叫びながら雪兎が投げ渡してくるタオルを受け取ってシャワールームに入る。

（これは、龍我にちゃんと教育しとく必要がありそうだ・・・）

そんな龍我に雪兎は頭が痛くなっていた。

聖side

その日、私は晶に誘われた朝練を終え、雪兔さんに頼まれて晶と一緒に例の方城龍我君の買い物に付き合う事になった。何でも生活必需品や服が足りないとの事。そう言えばTシャツにスカジャンでしたね、彼……

「よう、待たせたな」

「えっ!?!」

そんな事を考えていると突如背後から私達の肩に手を置かれ、ビクツとしながらも振り返るとそこに万城君かいた。

「あー、万城君だっけ」

「おう。お前は……宮本聖で合ってるな？」

「そうだよ。一度自己紹介したけど、もう1回するね。宮本聖です。それでこっちは……」

「神宮寺晶だ。よろしく頼むぞ、万城龍我」

「ああ。今日は悪いな。俺の買物なんかにつき合わせちまう事になってよ」

改めて自己紹介すると彼は頭をポリポリかきながらそう言う。

「いや、全然大丈夫だよ。万城君」

「うむ、そうだな。その代わりと言ってはなんだが、今度手合わせをしてくれないか？ 仮面ライダーの素の実力を知りたいし……格闘技を嗜んでいるのだろうか？」

「もう、晶ったら……」

晶の瞳の奥が、ざらりと光った気がした。どうも晶は実力が近い人がいると戦闘力y……もとい好戦的になら傾向がある。

「いいぜ……つつても、俺が格闘技をやったかは覚えがねエんだけだな」

「覚えが……」

「ないだど？」

「ああ。俺、記憶喪失でさ。4月よりも前の記憶がさっぱりねーんだよ」

「え……それって、大丈夫なの？」

私が心配そうな声色でそう聞く。晶も何も言わないながらも、難しそうな顔をしている。

「あー、大丈夫だ。そんな深刻そうな顔すんなって。どうせ俺の過去なんざ、大した事ねーよ。忘れた物を気にしても、仕方ないしな。それより早く買い物行こうぜ！」

何となく重苦しくなった空気を払拭するために万城君は駅の方に親指を向ける。

「そうだな。万城の言う通りだ。早く行くぞ、聖」

「え、いいの!? 記憶喪失だよ!？」

「本人が気にしてないのだから、いいんだろう。万城も、何かあれば私たちに遠慮なく聞いてくれ」

「おう、ありがとよ」

「うーん……. . . ならいいかな。それじゃあ万城君は、ついてきてくれる?」

私も仕方なく納得し、駅に向かって歩き出した。

私達が向かった場所は、いつも私達がいくレゾナンス。すると、万城君の様子が少しおかしい事に気付く。

「ボケつとして、どうしたのだ？」

「いや、こつちのココは無事なんだなって……」

「まるで万城君の所のシヨツピングモールが、破壊されたみたいな言い方だね」

「おう。破壊した」

「いやどうやったたら破壊できるの……」

私はそう軽くとんでもない事を口にする万城君に呆れている。その視線が耐えられなかったのか、万城君はそうなった経緯を話してくれた。

「俺の世界に『ローグ』っていう敵がいてな。そいつをブツ殺すために、このシヨツピングモールの天井ごと爆発させた」

「やる事が馬鹿のそれだな……」

「誰が馬鹿だ！」

「なんか、この話で1日を使っちゃいそうだね。早く買い物に行こっか」

話が長くなりそうだったので、私はその話を遮り先導してショッピングモールに入っ
て行く。

「えーつと、万城君はどんな服がいい？」

「そうだな。万城はどんな服がいいのだ？」

「シー・・・雪兔が、『季節感のある服を買ってこいよ』って言ってたな」

「それは、万城が半袖Tシャツにスカジャンの格好だからではないのか？」

「うん。そう思う」

「そもそも、季節感のある服って何だよ？」

その万城君の言葉に私達二人は同時にため息をついた。

「・・・なんか、万城君の事が分かってきたよ」

「奇遇だな、聖。私もだ」

「よく分かんねエけど、馬鹿にされてる？」

「・・・とりあえず行こっか」

「そうだな」

私達そう納得すると、近くの店に入って行く。

「お、おい！待てよ！」

店内に入ると私達は早速万城君に似合いそうな服を探し始める。

「うくん、万城君は素材は良いから色々似合うと思うんだよなあ」

以前、ラウラの私服をシャルロットさんと探しに行った事を思い出しながらとりあえず万城君に似合いそうな服を片っ端から手に取っていく。そして、両手が一杯になったところで私達を探しているとおぼしき万城君に声をかける。

「ねえ、万城君」

だが、万城君は私を持つ服の山を見てかつてのラウラのように逃げようとする。

「逃げないで」

だけど逃がしはしない。私は万城君の前に回り込むとニツコリと笑う。

「万城君、案外格好いいから似合うと思うよ？」

私がそういうと、万城君はガツクリと項垂れつつもしばらく私の着せ替え人形と化した。

「つつかれた……」

あの後着せ替え人形にさせられた万城君は、ぐったりしながら買った服の入った紙袋を手に下げている。

「あれ？晶、どこ行ったんだらう……」

気が付けば晶の姿が無い。

「万城君、晶見てな……って万城君までいなくなつた!？」

慌ててキョロキョロと周りを見回すと、女物の服屋のショーウィンドウの前で話している二人を見つけた。多分、晶がまた可愛い服見てて万城君が何か言ったのだろう。晶も可愛いんだからもつとオシヤレすればいいのに……

「あ、晶に万城君……ここにいたんだ」

小走りで近付くと既に話は終わったようで、万城君は手に持っていたペットボトルの麦茶を飲み干し、近くのゴミ箱に投げ入れる。空のペットボトルは綺麗な放物線を描きゴミ箱にスッポリと入る。

「ナイツシユ！」

それを見てガッツポーズをする万城君を見て、私は子供っぽいなあと思った。

あれからお昼をファミレスで食べ、私達はまた服屋の近くに戻って来た。

「次は生活必需品だな」

「タオルは買ったし、あとは・・・歯ブラシとかだね」

「パンツもな」

「えっ……とそれは万城君にやつてもらわないとね……」
「そ、そうだな」

万城君は何気なく言っているが、それは男性に女性もの下着エリアに行けと言つて
るのと同じだと思ふのは私だけだろうか？あつちのシャルロットさん、苦勞してるんだ
ろうなあ……

「では、私が齒ブラシなどを見に行こう。聖は万城について行つてくれ」

「うん。分かつたよ。いこ、万城君」

「おう。頼むぜ」

とりあえず売り場の近くきた。

「うーん、さつきも言つたけど、流石に下着は万城君にやつてもらわないとね……」

「おう。とりあえずパンツを買つてきたらいいよな？」

万城君はタツタと店の奥へと向かい、必要な分の下着を買い終えるとすぐに戻つてく
る。

「買った？」

「おう。バッチリだぜ」

「そう。なら……」

その時だった。

きやあああああああああああああああ!!!

「!!!」

どこからか女性の悲鳴が聞こえてきた。

「宮本!」

「うん!」

万城君はそう言うのとポケットからベルトを取り出し、腰に当てながら走り出す。

悲鳴のしたショッピングモールの1階に来ると、そこでは見たことも無い黄色の蠍のような怪物が暴れていた。

「チツ……何でここに怪物がいやがる!」

『ギャーオ!』

「いくぞ、ドラゴン!」

万城君はフルボトルをクローズドラゴンの背中に挿入する。

『ウエイクアツプ!』

そしてそれを、ベルトに装着する。

『クローズ・ドラゴン!』

「宮本、離れてろ!」

私が離れると万城君はベルトのハンドルを回し、その前後に半分ずつの蒼いアーマー

を生成する。

『Are You Ready?』

「変身ツ!!」

『ウエイクアツパーニング!ゲットクローズ・ドラゴン!イエーイ!』

万城君の掛け声に合わせて前後のアーマーが万城君に装着され、前に見せてもらった仮面ライダークローズに変身する。

「ツしゃあ!ここからは俺の喧嘩だ!」

「いいえ、万城君。私達の喧嘩です!」

万城君は一人で戦うつもりだったみたいだけど、私もそう言って自身の専用機【ウエーブライダー】を展開する。本当ならISの無断使用になるが緊急事態だ。

「私もだ!」

そう思ったのは私だけではなく晶も同じようで、晶も専用機【白牙】を纏って私達の傍に降り立つ。

「しゃ、お前ら、行くぞ!」

万城君はそう言うと、怪物に突撃する。

「オラア!」

そして助走の勢いそのままにドロップキックを食らわせ怪物を転がす。

「援護は任せたよ！」

「分かったよ！」

「任せろ！」

私はバイザーボード「ソードダンサー」を展開し、晶は徒手空拳の構えを取る。万城君のドロップキックを受けた怪物は特にダメージなどなかったかのように起き上がるが、万城君は何故か逆にテンションが上がっているのが仮面越しにも判る。

「いいじゃねエか。燃えるなア!!!」

万城君そう言いながら再び突撃すると、拳を突き出す。だが、その拳は避けられ逆にカウンターの一撃を顔にもらってしまう。

「痛ってエな！」

しかし、万城君も只でやられる気は無いらしく、その腕を掴むと逃げられないようにした上で無防備な脇腹に蹴りを入れるのだが……

「痛つでエエエ!?!」

どうも無防備とは言えど硬かったようで蹴った脚に逆にダメージが入り、足を抑えてうずくまっていた。

「だ、大丈夫？」

「当ツたり前エだ！」

万城君はすぐに起き上がるとベルトに手をかざし何かを取り出そうとするも……
「しまった、壊れてたんだつた……」

どうやらそれは壊れていて今は使えない事を思い出したようだ。その隙を逃さない
とばかりに怪物が万城君に突進してくるが

「マズツ!？」

「そうはさせないよ!」

私はすかさずソードダンサーに乗って怪物の横からタツクルして吹き飛ばす。

「助かった」

「万城君、戦闘中に余所事は駄目だよ」

「はあつ!」

怪物が吹き飛ばされた先では晶が怪物を殴り飛ばしている。時折、掌底を放ち掌から
衝撃砲も食らわせている。それでも怪物には大したダメージを与えられていないみたい
で、怪物は立ち上がるかと唸り声をあげた。

「硬いな……」

「そうだな。でもな……」

晶がポロツと漏らした一言に答えながら、万城君は怪物に近づく。

そして怪物のパンチをダックアンダーで潜り抜け、背後からフルネルソンで締め上げ

る。

「その自慢の角のついた頭は耐えきれるかよッ!!」

そしてそのまま腰を逸らし、投げっぱなしのドラゴンスープレックスを決める。

怪物の首が変な方向に曲がり、目に見えて動きが鈍くなった。

「ドラゴンスープレックス! 生では初めて見た!」

晶が興奮しているが、万城君は容赦無く投げ飛ばした怪物に素早く近づき、立ち上がる前にその顔をサッカーボールキックで蹴り飛ばす。

「やれ! お前ら!」

「うん!」

「分かった!」

万城君の合図で再びソードダンサーで怪物をまた吹き飛ばし、その先で待機していた晶が脚についたブレードで連続で斬りつける。

「よし、いけるぞ!」

万城君がそう言った瞬間だった。

バァン!

「!!!」

シヨッピングモール内の電灯が全て消え、真っ暗になる。窓にはシャッターが下りて

いるので、外の光も入って来ない。

「万城君、大丈夫？」

「すまん、何も見えねえ……」

ISを纏っている私達はハイパーセンサーで見えているけど、仮面越しとはいえ全て肉眼で見えている万城君には何も見えていないようだ。

「危ない！万城君！」

そんな晶の声が聞こえた瞬間、万城君のお腹に蠍の尻尾が刺さり、そして液体のようなものが注入されズボツと抜ける。

「があああ……」

毒を打ち込まれたらしく、万城君は立っていられないのか膝をついてしまう。

「万城君！」

「だ、大丈夫だコノヤロー……」

万城君はフラフラと立ち上がり、なんとか拳を構えるが万城君にもう長時間戦える力は残っていない。その間も私と晶が攻撃を加えるも怪物の装甲は硬く、レゾナンスの中とあつて私達が今使える攻撃方法ではトドメを刺すのは無理だろう。でも、万城君にならそれが出来る。そんな確信が私にはあつた。

「晶、私が合図したらあいつを万城君の前に飛ばせる？」

でも逃げようとするが、

「宮本！神宮寺！頼む！」

「了解!!!」

私が三度ソードダンサーのタックルを食らわせ、それを晶が万城君へと蹴り返す。

「うおッ!!こつち来んなー！」

万城君は当たるギリギリの所で蹴り飛ばし、激突を回避する。そしてベルトの腰についている白いのボトルを開け怪物に向けると怪物は光の粒となってボトルに吸収されていった。すると、シヨツピングモール内の電灯が復活した。

「漫画みたいなタイミングだな……」

万城君は変身を解除し、地面にへたり込む。顔色は青く苦しそうだ。

「万城、大丈夫か？」

「だ……大丈夫だ。毒を盛られたただだから……」

「それ、絶対大丈夫じゃないよね!?!」

万城君の言葉に私達慌てふためくが、万城君は途切れそうな意識をなんとか保ちながら指示を出す。

「ベルトの……ドラゴンを……外してくれ……」

「こ、これか？」

『ギャーオー!』

晶が万城君の指示通りにするとクローズドラゴンが万城君の腹に牙をたて、身体の中から毒を吸って吐き出す。

「わあ、このドラゴン、解毒も出来るんだ……」

解毒は出来たものの、奪われた体力までは回復出来なかったようので万城君は少しフラつきながらも立ち上がる。

「何でこの世界に怪物がいやがるんだよ……」

「万城、一度IS学園に戻ろう。必要な物も粗方買ったしな」

万城君によればあれはスマッシュという万城君の世界にいた怪物らしい。何故、そのスマッシュがこちらの世界にいたのだろうか？それが気になりはしたが、万城君の治療の方が先だ。私達は万城君を連れ学園へと戻った。

side out

「……なるほど、そういうことかよ」

スマッシュの毒を受け龍我が医務室に搬送されたと聞き、医務室に駆け付けた雪兎はその際に龍我のとある秘密を知る。そして、それまでに得た情報からスタークの正体とその目的についてある推測が浮かんだ。

「ハザードレベル4.8……あいつに聞いた話じゃこつちに来る前は4.7だったと言っていた。ならばスタークがこの世界にあいつを送り込んだ理由は本人の言う通り龍我の成長で間違いない……」

ハザードレベルはネビュラガスを調べる過程で測定する方法を雪兎は見つけていた。何故スタークは敵対する龍我にそんな事をするのか……雪兎も最初は疑問に思っていたが、その目的を知れば納得である。

「……【クローズナックル】、完成を急いだ方がよさそうだな」

雪兎の視線の先にはケーブルに繋がれた灰色のナックルガードのようなものがあった。

118話 交差する拳とクローズナツコオ! 兎、龍に
新・装・備を与える

いきなりだが、龍我達がレゾナンスに出掛けた頃まで遡る。龍我が出掛けた後、雪兎は雪兎で開発の息抜きに前にマドカと入った喫茶店にやってきていた。

「うん、こここのコーヒーはやはりいいな」

普段ならシャルロットも誘うところではあるが、今日は珍しく午前中は都合が合わないとの事で雪兎は一人・・・いや、一人と一体でここを訪れていた。

「流星はマスターの行きつけの店です。この紅茶も素晴らしい」

「それは良かったな、シユテル」

雪兎と同行していたのはシユテル。アドヴァンスドのルシユフェリオンのベースとなったシユテルIIデストラクターを模して作られたチヴィットで、マテリアルズの中でも普段は大人しい部類だ（戦闘となると熱くなるが）。

「龍我が来てから色々あり過ぎたな・・・」

龍我に聞いた話では、スタークの目的は龍我の成長らしく、その舞台としてこの世界が選ばれたとのこと。

（何故この世界を？それにスタークは俺の事をイレギュラーと呼んだ・・・スタークは一夏以外の男性操者がイレギュラーと知ってる？って事は俺や他の平行世界いると思われる一夏以外の男性操者について知っていた？だが、そんな事を調べられる人なんて限られてるはず・・・）

そこで何か引つ掛かりを覚える雪兎。

「何だ？あれ？」

「鳥？！それにしてもデカイような・・・」

だが、そんな事を考える雪兎の耳にそんな話声が聞こえる。

「ん？」

それを聞き、雪兎もその客の視線の先を目で追うと、そこには電信柱の先に立つ鳥のような外観をした怪物がいた。

「シユテル」

「心得ました」

シユテルは雪兎にそう返事をする姿を消した。すると、鳥の怪物は電信柱の上から喫茶店目がかけて両腕代わりの翼を振るい黒い羽状のダガーボムを放つ。それは扉に当たり店を爆破したかに思えたが・・・

「マスターの行きつけの店を攻撃するとは愚かな」

その爆破は全て店に当たる前にルシユフェリオンを展開したシユテルの障壁に阻まれていた。

「シユテル、どうせろくな理性も無い怪物にそんな事を言っても無駄だろ?」

雪兎もすぐに外に出てきたようで、すぐに雪華を展開する。

「こいつが龍我の言ってたスマッシュってやつか……だが、俺と出会った不幸を呪え」
 そう言うとう雪兎は近接戦闘を意識した新型アドヴァンスド「SG:ソウルゲイン」を纏う。

「せっかくだ……スマッシュとやらのデータ、収集させてもらおうぞ!」

その一言の間に雪兎はクローズスマッシュとの距離を一気に詰め、両手に集めた気のよ
 うなエネルギーをクローズスマッシュの腹部に叩き込む。

「虎の咬みつきだ!」

集めた気が腹部で炸裂し、クローズスマッシュは上空へと打ち上げられる。

「これも持つていけ!【玄武剛弾】!」

続けて雪兎は右腕の腕輪のようなパーツを高速回転させ右腕に空気を渦を作ると、それをクローズスマッシュに向かって腕ごと飛ばし更にクローズスマッシュを高く打ち上げた。クローズスマッシュもやられるだけでなく、再び翼を振るいダガーボムを放つとも、雪兎は両手から拡散型の気弾を放ち全て撃ち落としてしまう。

「もうそれ以上の芸は無いようだな．．．ならば終いだ。【コード・麒麟】」

雪兎がそう告げると装甲に付いている緑の宝玉が赤に染まる。そして、拡散型の気弾【青龍燐】を放ちクロウスマツシユの動きを止め突撃、拳や膝等の連携を撃ち込み再度クロウスマツシユを打ち上げると、雪兎は肘の突起をブレードのように変形させクロウスマツシユへと迫る。

「でいいいやっ!!」

伸ばした肘の突起でアッパースイングに斬られ、クロウスマツシユはそのまま地面に叩きつけられた。

「さて、倒した事だし、成分をいただいて帰るか」

いつの間にか複製していたエンペイボトルを使い、雪兎はクロウスマツシユの成分を抜き取る。すると、パン、パン、パンと手を鳴らす音がした。

『いや、お見事お見事！やはり普通のスマツシユ程度じゃ相手にもならないか』
音のする方を見ればブラッドスタークの姿があつた。

「やっぱりお前作業か、スターク」

『悪いね、今お前さんを自由にしとくと都合が悪いんでね』

「何だと？まさか龍我か!?!」

『大、正、解!』

そこで雪兎はスタークの狙いが雪兎と龍我の分断であると気付く。

『ああ、安心しな。こっちの目的は万城龍我の成長だ。殺しはしない』

「それは龍我に聞いた。だが、何故このような回りくどい真似を！」

『いや、あいつの成長が思ったより早くつてねえ。向こうじゃハザードレベルの上昇効率が悪いのさ』

そうおどけて話すスターク。

『おっと、そうこうしてる間に向こうも終わったみたいだ』

「逃がすか！」

『こっちもまだまだやる事があるんでねえ……チャオ！』

そう言つてスタークは黒い銃・トランスチームガンで黒い煙を放ち前と同じように黒い煙に吞まれるように姿を消した。

「ちっ！また逃がしたか」

「半径数キロに渡つてサーチしましたが、既に反応ありません」

「そうか……ん？通信？」

その時、雪兎の元に龍我がスマッシュとの戦いで毒を受けたと聖から通信があつた。

「凄い回復力ね……」

連絡を受けた雪兎はすぐさまI S学園まで戻ったが、毒はクローズドラゴンによって取り除かれた後らしく、怪我ももうほとんど塞がっていた。一緒にいた聖と晶は心配そうな様子で龍我の事を見ており、保健医の先生もその回復力に感心していた。しかし、雪兎は先程見た龍我のカルテからその異常性を知り険しい表情をしている。

「おい雪兎、何難しそうな顔してんだよ」

「ん？ああ、悪いな……」

そのカルテの内容は雪兎、保健医の先生、千冬、楯無の四名だけにしか明かされていない。それ故に雪兎は龍我の問いに曖昧な返事を返す。

「……龍我。お前、いつもそんなに傷の回復が早いのか？」

「あ? まあそうだな・・・今回は少し遅いくらいだな」

逆に雪兎がそう問えば、龍我はなんてこと無いとばかりそう答える。

「そうか・・・分かった」

「何なんだよ。気になるな」

「龍我に説明して理解出来るとは思わないからな。それに・・・いや、何でもない」

理解出来るとは思わないのも事実だが、それ以上にその内容は普通では無い為、雪兎は顔を背けそれ以上を口にしなかつた。龍我は納得がいかないのか今にも雪兎を問い詰めようとするが、そのタイミングで医務室にシャルロットが入って来た。

「万城君、大丈夫?」

「ああ、シャルロットか。大丈夫だぜ」

「毒を盛られたって聞いたけど・・・」

「大丈夫、大丈夫だから」

龍我はシャルロットを落ち着かせると、雪兎との話に戻ろうとする。

「・・・あれ? 何を話してたっけ?」

「プロテインについてだろ」

「そうそう、プロテインはやっぱバニラ味・・・って、んな訳ねエだろ!」

龍我がそうツッコむも、雪兎は無視してスタスタと医務室から出ていく。

「あの回復力……ハザードレベルってのはそういう意味かよ」

自室に戻る途中、雪兎はそう呟く。雪兎が手にするカルテにはこう書かれていた「万城龍我は通常の間人とは異なる遺伝子を持つ存在である」と……

「ハザードレベル……特殊な遺伝子……そうかよ、そういう事かよ！」

そこで雪兎はスタークの最終的な目的に気付いた。

「気付いたところで俺に出来るのはアレくらいか……」

だが、雪兎が出来る事にも限界はある。

「コイツがどれだけアイツの手助けになるかはわからないが、やれる事はやっておくか」

それから少し経ち、医務室に残っていたシャルロットから武道場に来てほしいと連絡を受けて駆けつけると、そこでは龍我と晶が対峙していた。

「オイオイ、どういう状況だ」

「それが雪兎、かくかくしかじかで……」

雪兎が訊ねると、慌てた様子のシャルロットが雪兎に状況説明をする。

「大体分かった」

「どっかで聞いた事あるぞ、それ」

どこかの世界の破壊者が言っただような台詞を吐く雪兎に、龍我は軽くツツコミを入れる。発端は龍我が自分がスマツシユをこの世界に連れて来てしまったと抱え込み、それを晶が気に食わないと突っかかったらしい。

「まあいいんじゃないか？ 晶もそんな簡単にやられる程弱くないと思うし…….
か、晶の方が強いかもしれないしな。龍我の怪我を悪化させなければ何でもいいだろ」
「まあ雪兎がいいならいいけど…….」

雪兎がそう言うのとシャルロットが渋々引き下がる。その間に龍我は肘につけたサポーターをつけ直し、晶を真っ直ぐに見据える。

「ルールは？」

「戦闘不能、もしくはギブアップでいいだろう。急所攻撃はナシだ」

「分かった。雪兎、開始の合図」

「了解。それじゃあ、どっちも準備はいいな?」

「私はいいぞ」

「俺もだ」

「それじゃあ・・・ファイツ!」

雪兎が掲げた手を下ろすと同時に、晶が突っ込んでいく。最初は様子を見るかと思っていた龍我は虚をつかれその拳をモロに肩口に喰らう。

「チツ・・・」

「逃がすか!」

龍我は一旦引こうとするも、シャツを掴まれて下がれない。そのままもう一発逆の肩に喰らい、ダメージを受ける。

「どうした、そんなものか?」

「シな訳ねーだろ」

肩をクルクル回し、全然平気アピールをする龍我に晶はニヤリと笑ってみせた。

「面白い・・・」

「晶、もう戦いたいだけだよね・・・」

遠くで見えていた聖が、そうポツリと漏らす。おそらく、晶以外の全員が同じ事を思っただろう。

「はあっ!」

右脚での鋭いハイキック。しかし、今度はさつきと違って不意打ちではないので龍我は冷静に回避する。

「はあっ!だあっ!どりやあ!」

左ミドルキック、その回転を活かして右の後ろ回し蹴り、そして左ローキック。龍我はそれらを全て紙一重で回避し、一步引く。

「……何故攻撃をしてこない?私が女だからか?」

そんな龍我に晶が不機嫌そうにそう言う。

「まさかな。お前が女であろうと、やる時はやるぜ。俺は」

「なら……何故やらないのだ?」

「さアな。自分で考えたらどうだ?」

龍我はそう言いながら、ニヤツと笑う。

「へえ、アイツ、挑発とかちやんと考えた行動も出来るんだな」

「えっ?どういう事ですか?」

「アイツが攻撃してなかったのは全部この状況に持ち込む為の布石ってことさ……ほ

れ」

雪兎がそう言うのと、晶が突き出して腕をとり、飛びつきながら腕ひしぎ十字固めに移行する龍我。

「うぐっ!?!」

苦しそうな声を出す晶。

「ギブアップするか?」

「する訳ない……ぐああ!?!」

ギブアップする気がなさそうなので龍我は更に強く締め上げる。

「くうっ……ハッ!」

「なっ!?!」

龍我は仰向けにして関節をキメていたが、晶が後転してスルリと抜け出す。そしてそれに動揺した龍我の脚をとると、そのまま四の字固めをかけた。

「ぐうううううッ!?!」

「ギブか?」

「するか!」

今回は龍我が力ずくで抜け出し、距離を取る。

「痛ッてエな……」

「そりやあな」

「まさか、挑発してくるとはな．．．まんまと乗ってしまった」

「あ、バレた？」

晶は熱くなり易く、挑発は確かに有効。だが反面頭が冷えるのも早いし、頭の回転も悪くはない。

「そんじゃあ．．．本気でいかせてもらおうぜ」

「そうだ。それでこそ、私の望む闘いだ」

そこからは双方激しい攻防を繰り広げたが、勝利したのは龍我だった。決め技はドラゴンスクリュー、またの名を飛龍竜巻投げだ。相手の片足を両腕で取り、足首を脇腹に押し付けるようにクラッチ。その体勢から自ら素早く内側にきりもみ状態で倒れこむことで、相手を回転力で投げ飛ばす技。一見すると単純な崩し技だが、足首を固定し捻ることでヒールホールドを極めるプロセスを含んでおり、無理に堪えれば膝関節を負傷する可能性がある。また、適切に受身を取らなければ頭部や腰などを強打する技。藤波辰爾が考案し、武藤敬司が必殺技へと昇華させたとされる。と、かなり危険な技だ。というか、この技を知っていた晶でなければ大変な事になっていただろう。

「ハア．．．疲ッかれた．．．」

気の抜けた龍我はその場に尻餅をつく、右膝を立ててそこにもたれかかる。

「晶！大丈夫？」

「ああ、ありがとう、聖。……万城」

聖が氷の入った氷嚢を持って、パタパタ走っている。晶はそれを受け取ると、痛めた膝に当てながら龍我に話しかける。

「何だよ？」

「これで分かったか？」

「あ？あ……」

龍我は忘れていたようだが、この模擬戦は晶が『根性を叩き直してやる』と言い出して始まった。

「責任を感じるのも分かるが、万城が好んで来たわけではないのだろうか？なら、責任を感じる前に全部自分で背負おうとするのではなくて、私達を頼つたらどうだ。男の万城と いい試合が出来るくらいに、私達は強いものだからな。いざとなれば、雪兎だっている」

「あ……アホくさ」

「なっ!?!」

そんな晶の話聞き、龍我の言った一言に晶がショックを受け、膝に当てていた氷嚢を手からポロリと落ちていく。

「俺が成長しないからアホくさいって言ったんだよ。向こうでも同じ事を言われたなっ

て」

「……ふっ、そうか。なら龍我は馬鹿だな」

「誰が馬鹿だ! ……っ、龍我?」

「もうわざわざ苗字で呼ぶ必要もあるまい。なら、龍我でいいだろう。私も晶でいい」

「そうか。なら……晶。悪かったな」

「分かればいい」

どうもこの流れは夕方の川原での殴り合いを終え分かった不良にしか見えない。

「……つと。もういいか?」

そこへ話が一段落したと判断した雪兎がやってくる。

「何だよ」

「いや、聖から聞いたけど、龍我お前レゾナンスでの戦いの時、ビートクローザーがなく

て苦労したらしいな?」

「ああ。誰かさんが盛大にぶっ壊してくれたおかげでな」

「お前のメンテ不足もあるだろ」

龍我が雪兎をジト目で見ると、雪兎は更に強いジト目で龍我を睨む。整備不良を人の

せいにはされたく無いらしい。

「……ま、壊した俺にも責任がないわけじゃない。だから、龍我にピッタリの装備を

作ってきた」

「え!?マジで!」

「お前、本当に単純だな……」

雪兎の肩を揺さぶり興奮する龍我に、雪兎がため息をつく。

「スグに出す。えーつと……」

雪兎は Storage を操作し、蒼いナツクルガードを取り出す。

「ホラ、コレだ」

「これは?」

「それはな……」

雪兎はそう言うと、一瞬タメを作る。

「[クローズ・ナツクル]だ。とあるデータを参考に作らせてもらった」

「クローズ・ナツクル……いいじゃねエか!」

龍我はクローズ・ナツクルを手にとると早速手にはめている。そのフィット感に龍我はナツクルを着けてシャドウを始めた。

「そーいや、ビートクローザーは?」

「アレは酷い壊れ方だし、お前がメンテナンスしないせいでボロボロだから、もう少し俺が預かる。それよりビルドドライバ―貸せ。そしたらナツクルのデータをインスト―

ルしてやるよ」

「びるどどらいばー? いんすどろーる?」

ビートクローザー同様ビルドドライバーに連動させようとドライバーを要求するが、龍我はベルトがビルドドライバーというのを知らなかったようだ。

「OK。とりあえずベルト貸せ」

『悲しいものを見る目』をする雪兎に龍我はスカジャンのポケットからベルトを取り出す。

「……つてか、ビルドドライバーつて名前だったんだな」

「まあな。解析している時に、ついでに色々調べたからな」

雪兎はそう言いながら端末を操作し、投影式キーボードを出すと、クローズ・ナツクルをビルドドライバーにコードで繋ぎ、カタカタとキーボードを叩き始める。

「なあ雪兎、そのナツクルは何か特性あんのかよ?」

「特性という特性はない……があえて言うならば、挿入したボトルの力を120%引き出す事くらいだな」

「ほうほう……」

「お前が使う武器だ。あんま特性つけても扱えないだろ」

「……あれ? 俺、馬鹿にされてる?」

「馬鹿にされてるな」^よ

聖と晶の声が重なる。龍我は馬鹿されたと知るや否や雪兎に掴みかかろうとするも、背後から2人に羽交い締め^よにされる。

「……よし、終わったぞ」

雪兎はキーボードを仕舞うと、ナツクルとビルドドライバーを繋いでいるコードを外し、龍我に渡す。そこで、雪兎は前々から疑問だった事を訊ねる。

「お前今、フルボトル2本しか無いんだろ？もつとフルボトルを沢山作る気はないのか？」

「あー……」

しかし、龍我の顔が険しくなるのを見て雪兎は大体の事情を察した。

「作る気は……ねエな」

「そうか。龍我にも事情があるんだろうから詳しくは聞かないが……なら、まだフルボトルになっていないヤツを貰ってもいいか？持つてるんだろう？」

「ああ、持つてるぜ」

そう言うと龍我はショッピングモールでスコープオンスマッシュを倒した時に回収したフルボトルをスカジャンのポケットから取り出し、雪兎に投げ渡す。

「コレコレ。貰っていいんだな？」

「いいぜ。俺が持つてても、使わねーしな」

「サンキュー。これを解析したら、また色んな幅が……」

そう言つて雪兎は笑みを浮かべて出て行つた。

「ああなつた雪兎は……」

「もう駄目みたいだな」

シャルロットと聖、それと晶が苦笑いをしている。こうなつた雪兎は基本的に止まらないのをよく知つてるからだ。ちなみに、龍我が元々持つていたカメレオンスマッシュのボトルや雪兎が撃退したクロウスマッシュのボトルも雪兎が持つているのを龍我達は気付いていなかった。

1119話 ランチボックスパニックと復讐の毒蜘蛛 兎、龍を連れ出す

「それでは、えつと．．．万城君、この数式を解いてください！」

休みが明けた最初の平日。一応IS学園の生徒扱いになっている龍我は特別に雪兎と同じ1組で授業を受けている。こちらにいる間に龍我の脳筋が悪化しないようにという雪兎の計らいではあるが、特訓メンバーはいいとしてもクラス再編で龍我の知る面子が減っているせいか龍我の居心地は悪そうだ。

「万城君？聞いてますか？」

「ああ、悪イ悪イ。えーつと．．．？」

何か考え事をしていたのかポケットとしていた龍我に真耶が目の前で手を振り、それに気付いた龍我が黒板の方を見る。しかし、龍我にはそこに書かれた文字を理解する事は出来なかった。

「．．．それって、火星の言葉？」

「？日本語ですよ？」

「あ、じゃあ分かんねエわ」

「ええ．．．一学期の内容ですよ．．．?」

「分かんものは分かん。しゃーねーだろ」

休み明けとあつて一学期の復習程度の内容だったが、龍我はシャープペンシルをくるくると回しながらそう答える。質問し易いようにと一番前に座っていた龍我に雪兎達は呆れを含んだ視線を向けていた。

「これは．．．酷いな．．．」

「龍我．．．ここまで馬鹿だとは思わなかったぞ」

「龍我つて馬鹿なんだな」

右から雪兎、箒、一夏。その視線に堪えかねて龍我が左を向くと．．．

「アンタ、バカなのね」

「可哀想なお猿さん．．．」

「馬鹿だな」

今度は鈴とセシリアとラウラの視線が．．．

「ば、万城君。ファイトだよ!」

「りゅーがは、おばかさんなんだね」

「脳筋ライダー．．．悪くない．．．」

「万城君．．．」

「龍我……お前という奴は……」

そして後ろのシャルロット、本音、簪、聖、晶。その他クラスメイト達もそんな愛すべき馬鹿に苦笑している。

「えつと、万城君。大丈夫ですよ！まだ始まったばかりです！」

そう麻耶は笑みを浮かべてフォローするが、その笑みが引き攣っている。

キーンコーンカーンコーン

「それでは、午前中の授業は終わります。午後はISの操作なので、皆さん遅れないようにしてくださいよ？」

チャイムが鳴り、真耶はそれだけ言い残すと教室から出ていく。

「俺、やる事あるから今日は一人で食うわ」

すると、雪兎は鞆からタブレットを取り出し、机の上に投影式キーボードを出して作業を始める。こうなると雪兎は並みの事では動かない。

「それじゃあ僕は、一夏達と食べるね。いい？みんな」

「賛成。龍我也食いに行こうぜ」

「おう。そーするか」

龍我は一夏達と一緒に食べるらしい。※龍我の弁当は雪兎製です。するといつものメンバーも手に弁当の入った袋を持って集まってきた。

「みんな弁当か。それじゃあ、屋上行くか」

「そうね。あたしはそれに賛成だわ」

「私もですわ」

「だが……」

「私、今日は腕によりをかけて作りましたわ」

そのセシリアの一言で龍我の表情が凍りつく。

「へえ、そりゃあ楽しみなな」

一方、雪兎のおかげでセシリアの料理がか・な・り改善されている事を知る一夏や他のメンバーは特に変化は無い。

「龍我さん？大丈夫ですか？」

「?!?!」

?!?! そんな龍我を心配してセシリアがその顔を覗き込むと、龍我は慌てて後退る。

「く、来るな！メシマズ！」

「なっ?!め、メシマズ!?!どーゆー意味ですかの!?!」

「俺は死にたくないんだ！」

「落ち着け！龍我！」

一字一句同じセリフで、ラウラと晶が龍我を取り押さえるが龍我は火事場の馬鹿力で

その拘束を解き、逃げ出そうとする。

「待つて、万城君。落ち着いて」

「そうだ。落ち着け」

だが、教室のドアに聖とシャルロットが立ち塞がり、逃げ道が塞がれる。

「龍我の言いたい事は何となく分かる。向こうの世界で、何かトラウマがあるんだろ？」

そんな龍我の狼狽ぶりを感じ取った雪兎は画面から目を離さないままそう言う。

「ビーフストロガノフを作るのにケチャップとコチュジャンとチヨコレートと生クリームを入れるんだぞ……」

どうやら龍我の世界のセシリアはやはりメシテロ（飯の不味さがテロ級）のようだ。

「私、そんな事はしませんわ！」

「……いやしてただろ（でしよ）（よね）！……」

セシリア以外全員のツツコミが重なる。全く同じでは無いが、同レベルの事はやってる。しかも雪兎がどれだけメシマズなのかと興味本位で口にし、気絶するレベルの
だ。

「やっぱしてたんじゃねエか！嫌だ！俺は絶対に食べないぞ！」

皆のツツコミを聞き龍我は聖とシャルロットの間をすり抜けると、教室から抜け出した。

だが、そこで終わりはしなかった……。

「という訳で、協力していただけませんか？」

その翌朝、雪兎はセシリアに呼び出され『龍我にセシリアの料理を認めさせよう大作戦』という頭の悪そうな作戦に協力する羽目になっていた。

「いや、もうセシリアは普通に料理出来るだろ？」

「それでは龍我さんをギャフンと言わせれないではありませんか！」

「帰っていい？」

「お願いですから！雪兎さんだけが頼りなんです！」

「いや、こういう時こそ一夏に頼めよ……」

二人の共同作業かつ、料理の腕も磨けるといふ一石二鳥の機会を棒に振つてまでセシリアは龍我にギャフンと言わせたいらしい。

「時間もそんなに無いし、サンドイッチでいいか？多分、龍我一番納得しそうなのはコレだろう」

おそらくセシリアの殺人サンドを食していると踏んだ雪兎はそのイメージを覆すべく、今回サンドイッチを提案した。

「サンドイッチですか？」

「教えるからには絶対に龍我に美味しいと言わせてやんよ……さあ、料理を始めようか？」

そこから雪兎の知る絶品サンドイッチの作り方講座が始まり、セシリアのサンドイッチは雪兎も認める絶品サンドへと変貌を遂げた。

「ゆ、雪兎さん！」

「セシリア、サンドイッチに関しては何も俺が教える事は何も無い。自信を持って」

「はいっ！」

たかがサンドイッチで何故この二人はこんなに盛り上がっているのだろうか？

「龍我さん！食べていただきますわよー！」

その日の昼休み、セシリアが龍我の机に大きめのバスケットをドン！と置きながらそう言い放つ。今回も龍我は椅子を蹴飛ばして逃げ出そうとするが、雪兎と一夏に両腕を羽交い締めになされ、晶が龍我の肩を押し込んで無理矢理椅子に座らせる。

「お、お前ら・・・オンドウルルラギッタンデイスカー!？」

「うーん、このままだとセシリアが可哀想だしな・・・」

「そうだな。一夏の言う通りだ」

「あと、俺の沽券に関わるからな」

そう三人が告げると、龍我の表情は絶望に染まっていく。龍我がゲートなら容易くフアントムが生まれているだろう。

「まあまあ龍我、食べちゃいなさいよ！」

「そうだ。食わず嫌いは駄目だぞ」

「そうですね。まあ一口どうぞ」

セシリアがバスケットを開ける。何故かその瞬間、龍我が何かを幻視しているように見えた。

「ほら、普通だろう？」

「そうだね。ラウラの言う通り、普通のサンドイッチだね」

バスケットの中にはサンドイッチが雪兔が伝授した絶品サンドが詰まっている。しかし、龍我はセシリアの料理が見た目だけはまともなのを知っているせいか、まだ手を出すのを躊躇する。

「さあどうぞ。あーん」

セシリアはサンドイッチをひとつ手に取ると、龍我に差し出す。龍我は皆に助けを求めめるかのように周りをぐるりと見るが、全員がニコニコと笑っているだけだ。そして、とうとう観念したのか龍我はそのサンドイッチを口にしてみた。

「ぱくっ……あれ？美味しい？」

ちなみに龍我が食べたのはカツサンドだ。

「ほらみなさい！」

「コレ、ホントにセシリアが作ったのか!？」

「真正正銘、セシリアだ。まあ俺も少し手を貸したがな」

そう言つて雪兎もサンドイッチを一つ取り、齧る。それに釣られて一夏達もバスケットの中からサンドイッチを取っていく。

「ち、ちよつと待てよ！俺にも食わせろ！」

龍我也慌ててバスケットに手を伸ばし、サンドイッチを手取る。あつという間にサンドイッチはなくなり、空のバスケットだけが残る。

「悪かったな、メシマズなんて言つて」

「いいですわ。私も、昔は下手くそでしたから……」

本当に変わるものである。しかし、セシリアはそこまで言うのと、手のひらをポン！と叩く。

「そうだ！私、デザートも作ってきたんですわ！」

そう言いセシリアは小さめのタッパーを出してくる。その中には杏仁豆腐のようなものが入っていた。

「ん？それって……」

その時、雪兔は何故か悪寒のようなものを感じた。「アレは食べてはいけない！」というかつてセシリアの料理から発せられたあの悪寒だ。

「さあ龍我さん、どうぞぞ！」

「おう。いただきまーす」

しかし、龍我はサンドイッチで安心してしまっていた為、それに気付く事なく、それを口にした。

「ゴハアツ!？」

そして、吐血した。

「あーあ。だから言おうと思ったのに……」

一時は成功に見えた『龍我にセシリアの料理を認めさせよう大作戦』は結局失敗に終わったのであった。

『確かここだったな……』

その頃、スタークはとある場所を訪れていた。

『特別独房No. は……ビンゴ!』

特別独房。それは雪兎達に敗れ囚われの身となった亡国機業の面々が捕らえられている独房だ。そのうちの一つにスタークは近寄ると扉の鍵をトランスチームガンで破壊し、中へと入っていく。

『よっ、亡国機業のオータムさん』

「……てめえ、何者だ?」

中には鎖に繋がれ瘦せこけたオータムの姿があった。

『ブラッドスターク、そう名乗ってる。まあ、そんな事はどうでもいい』

スタークはそう言うとその仮面の上からでも分かるように声を弾ませてオータムにこう訊ねた。

『お前さん……復讐させてやるって言ったらどうする?』

120話 毒蛇の策略と憤怒の鮫 兎、龍と共闘する

「なア雪兎。俺、本当に帰れるのかな？」

授業の無い日曜日。ベッドで寝転んでいた龍我はぼんやりと天井を見上げながらその口にする。無理も無い、この世界に来て早くも1週間。スタークによる襲撃も特になく、授業を受ける毎日が続いている。本当に帰れるのか？不安に思うのは普通な事だ。

「何とかしてやるよ」

そんな龍我に雪兎は手に入れたデータ等から龍我の世界の座標を割りだそうとしていたが、あまり上手くはいっていない。

「まア雪兎がそう言うなら大丈夫か・・・？」

「それより龍我、お前テストは大丈夫なのかよ？そっちにもテストくらいあるだろ？」

「あー・・・ま、補習受ければいらしいし、深く考えなくて平気だろ」

「いや、それじゃあ駄目だろ・・・」

「平気だって。俺、一回目のテストの点数全部足しても100点いかなかったしな」

「・・・8教科合わせてか!？」

雪兎のキーボードを叩く手が止まり、ワントン置いてディスプレイから顔を上げ

る。

「おう」

「お前、どんだけ馬鹿なんだよ……」

「そーゆーお前は何点なんだよ！」

「満点だ」

「嘘だろ」

「本当だ」

雪兎はそう言うのと机の引き出しを漁り、中からテストを取り出す。ちなみに全教科満点である。

「ほら」

「凄エ……100点って、本当に出るんだな……」

「逆に0点を見てみたいよ」

「うっせエ」

そう言うのと龍我は話題を変えるためにテレビの電源をつける。

「そーいや、俺の部屋テレビないんだよな」

「そうなのか？なら、龍我はどうやって自己分析してるんだ？タブレットか何かを持ってる訳でもないんだろ？」

「セシリアの部屋のテレビ使うな」

「シャルロットじゃあないのか？」

「セシリアの部屋に行けば、上手い茶と菓子が出るからな」

「最低だな……」

そんなやり取りをしながら、テレビのチャンネルを次々に変えていく。日曜日の朝という事もあってか、やはり子供に向けた番組が多い。

「お、これIS学園の近くじゃないか？」

すると、丁度IS学園の近くの大きな公園が映った。生放送のようで女子アナが色々喋っている。

「可愛いな、この女子アナ。胸が大きい」

「龍我、シャルロットに怒られるぞ……」

龍我が女子アナに鼻の下を伸ばしていたので雪兎が後ろから頭をハリセンではたく。しばらく見ていると、龍我がテレビに映る空に小さな黒い影を発見する。その影はどんどん大きくなっていく。

「……おい、コレ怪物じゃねーか？」

「そんな事あるわけ……本当だ。しかもかなりの数が……!?!」

公園は突如現れた怪物によりパニックに陥り、テレビ画面にはノイズが走る。

「雪兎！」

「分かってる！」

雪兎はポケットから携帯を取り出し、素早く連絡を入れる。二人が寮を飛び出すと、

一夏達も続々と集まってきた。

「本当はISを勝手に使うのは駄目だが……今はそんな事を言ってる場合じゃないしな！」

（まあ、連絡はしておいたし、緊急事態だ）

念の為、千冬に連絡をした雪兎はそう言うのとISを展開する。それに続いて一夏達もISを展開し、飛び立つ。

「……っておい！俺を置いてくな！」

「悪い！忘れてた！」

「クツソ〜！来い！ドラゴン！」

『ギャーオ！』

途中、変身し走って追いかけてきた龍我を拾い現場へと向かった。

現場に到着すると、既にそこは戦場と化していた。

「ちっ、お前ら、こいつを持ってけ」

そう言ううと雪兎は複製しておいたエンプティボトルを一夏達に渡す。

「これは？」

「あのスマッシュとかいう怪物は一定ダメージを与えてそのエンプティボトルを向けるとその成分を回収して人間に戻せる」

「龍我が持っていたボトルだな」

「いつの間に量産したんだよ……」

「それより手分けしてスマッシュを何とかするぞ」

手分けしてスマッシュを撃退せんと雪兎達が動こうとしたその時、雪兎達を青いヒレのようなものが襲う。

「全員、乱数回避！」

何とか全員回避し、放たれた方を向くとそこには鮫のようなスマツシユがいた。

『ちっ、外したか……』

だが、そのスマツシユは他のスマツシユと違い言葉を発した。しかも、雪兎達がよく知る声で。

「お前……オータムか!？」

『ヒヤツヒヤツヒヤツ! 久しぶりだな、クソガキドモ!』

そう、それは捕まっているはずのオータムだった。

「何でお前が……それに、何故お前だけ意識が」

『そんな事どうでもいいだろオ? なんだってお前らは死ぬんだからなっ! 今! ここでエ!!』

そうやってシャークスマツシユとなったオータムは真っ先にシャルロットを狙い襲い掛かる。

「くっ、何、このパワー……」

『ヒヤツヒヤツヒヤツ、あのコブラ野郎には感謝しねエとな!』

「またスタークの仕業かよ!」

「シャル!」

『おっと、そうはいかないな』

雪兎はオータムをシャルロットから引き離そうとするが、それを阻むように雪兎が狙撃される。

「くっ！」

「お前はスターク！」

狙撃手の正体はやはりというかスタークだった。

『何やら楽しそうじゃないか、混ぜてくれよ』

スタークはそう軽口を言いながらスマツシユを引き連れ近付いてきた。

「数が多いな……」

しかも、シャルロットはオータムと彼女が支配下においているスマツシユによって皆から引き離されてしまった。

「龍我、シャルを頼む」

「雪兎？」

スターク
「こいつは俺が足止めしておく」

「だが……」

「心配するな、俺は簡単には死なんよ」

「わかった」

「ああ、それと」

雪兎は一度言葉を区切ると不敵な笑みを浮かべてこう言った。
「足止めするのはいいが、倒してしまっても構わんのだろうか？」

龍我には一夏、鈴、聖、晶、セシリアが同行し、避難誘導には簪、本音、エリカ、アレシア、カロリナが向かい、雪兎の援護には箒、ラウラ、マドカそしてマテリアルズが残った。

「ディアーチェ！箒達の管制指揮は任せる」

「ちい、この中でその手に長けた者は我だけか、仕方あるまい……皆の者！我が指示を出す。有りがたく思え！」

雪兎はディアーチェ達に箒達のサポートを任せると漆黒の剣士のようなアドヴァン

スト「ヴァイサーガ」を展開しスタークと対峙する。

「今度は逃がさねえぞ、スターク」

「それじゃあ、お手並み拝見といきますか、イレギュラー!」

両者はお互いに一気に距離を詰めると雪兎は手に持つ大剣「五大剣」を、スタークはスチームブレイドで切り結ぶ。

『また新しい装備か・・・そんなにホイホイと装備を変えるISは見た事が無いな』

「珍しいか? そうだろうなスターク、いや・・・あちら側の篠ノ之束」

『ほう』

雪兎のその言葉にスタークは少しだけ驚いたようだ。

『何故そう思った?』

「俺はこっち側の束さんの弟子でね、あの人が作った設計図の癖と龍我の持ってたUSBメモリのデータが一致してね」

『ありやりや・・・束さんとした事がそんな凡ミスするとはね』

自身を束と認めたスタークは雪兎のよく知る束の声と口調に戻し、雪兎を見据えた。

『本当にお前は面白いよ、イレギュラー・・・名前、何だっけ?』

「天野雪兎・・・好きに呼べ」

『それじゃあ、ゆーくんぞ』

「うわあ、あえてそのセレクトかよ……本当に世界は違えど束さんだわ」

どの世界の束であろうと興味を持たれるのは雪兔の宿命らしい。

『その娘の事とか色々聞いてみたくはあるけど、今は敵同士だから』

『スチイイムブレイク、コツブラ!』

そう言い、スタークの束……面倒なので束スタークと呼称、がトランスチームガ
ンから紫の光弾を放つが、雪兔は五大剣でそれを切り払う。

『やるねえ、ならこれは?』

『エレキスチーム!』

今度はスチームブレイドのバルブを回し、刀身に電撃を纏わせ斬りかかると、雪兔は
左手で背面のマントを掴んでそれを盾にしガードしてみせる。

『それもただの布じゃなくて特殊合金繊維だね? さっきの大剣も実体剣じゃなくてエネ
ルギーを物質化した剣みたいだし』

「ちっ、本当に束さんはやり難い」

流星は天災とあって、雪兔のヴァイサーガの装備を一目で見抜かれるせい次第に雪
兔が押され始めていた。

『ほらほら、まだまだいくよ!』

『ライフルモード』

「地斬疾空刀」

スチームブレイドとトランススチームガンを合体させライフルモードにした東スタークが射ち、雪兎は衝撃波を飛ばす斬撃でそれを相殺する。

「今度はこっちからだ！烈火刃！」

お返しに雪兎はクナイを数本取り出し東スタークに投擲する。

『そんなの当たらないってって、うわあ!?!』

そのクナイを分離させたスチームブレイドで切り払うと、切り払った瞬間にクナイが爆破し東スタークは少し仰け反る。

『爆薬仕込みのクナイだったか、失敗失敗』

「まだ終わりじゃないぞ？水流爪牙！」

烈火刃が生んだ爆煙に紛れて接近した雪兎は両手に鉤爪を展開し、その乱舞を叩き込むが。

『アイススチーム』

東スタークも氷の蒸気を纏った刃でそれを捌く。

(やっぱり見切られてやがる！)

判っていたとはいえ、やはり東のスペックは異常だ。そこにトランススチームシステムを纏ったともなればIS相手だろうとそう簡単には負けはすまい。

（この分だと風刃閃や光刃閃も通じるかどうか・・・）

『ねえねえ』

今の雪兎の実力では東スタークに勝つのにこのヴァイサーガでは不利と察した雪兎がパツクを切り換えようとした時、突然、東スタークが話し掛けてきた。

『どうして本気を出さないの？』

「本気？」

『そうそう！あの聖 エクスカリバー 剣だっけ？あれを吹っ飛ばしちゃったアレ！』

おそらくEXCEEDの事を言っているのだろう。東スタークは雪兎にそれを使う事を要求した。

「・・・あんた、あの戦いを見てたのか？」

『そうだよ、アレを見たから私はこの世界を万城龍我の成長の舞台に選んだんだから！』

それを聞いて雪兎は齒噛みする・・・今回の件は自分にも発端の原因があったと知り。

『早く早く・・・それとも、理由が必要かい？』

「理由、だど？」

その時、雪兎の脳裏に最悪の可能性が浮かんだ。

『うん、あのシャルロットはデュノアだっけ？あの娘を殺そうか！あっちでは万城龍我と付き合ってるみたいだし、万城龍我のハザードレベルも上げられて一石二鳥かな？』

「……れ」

『うん？』

「……黙れと言ったんだ」

東スタークは知らない。シャルロットを害するという発言が雪兔の最大の地雷ワードであるという事を。

「そんなに見たきや見せてやるよ……」**EXCEED・No. 2 RAISING**「セツトアップ」

そして、EXCEEDシリーズでもキワモノと称されるトンデモパックが降臨する。

「……少し、頭冷やそうか？」

1 2 1 話 雪兎、怒りのEXCEED（白い魔王） 兎、龍の援護をする

「・・・少し、頭冷やそうか？」

白をベースとし、所々に青のハードパーツを装備したとある世界で『管理局の白い魔王』や『ACE OF ACE』などの呼び名を持つ魔導師を模したEXCEEDであるそれを纏い、雪兎がそう言うのと、周辺の気温が三度程下がったような気がした。

『え、え、や、やだなあ、冗談だよ、冗談！』

束スタークは本能的に不味いと察して雪兎を宥めようとするが、それは逆効果だった。

「・・・アクセルシューター・ジエノサイドシフト」

すると、雪兎の周囲に無数のピンク色の光弾が出現する。

「いけ」

そして、雪兎の号令と共に一齐に束スタークへと向かっていく。

『ちよつ!?!ちよつとちよつと!?!これは洒落にならないって!?!』

何とか回避し続けている束スタークだが、仮面の下は既に涙目だ。しかし、光弾は遠

隔操作による誘導弾である為、打ち消さないと永遠と追ってくる。そのため東スタークは必死にスチームブレイドやトランスチームガンでそれらを打ち落としていく。

『ぜえ、ぜえ……やつと抜けー』

「デイバイン、バスターツ！」

それをやつとの事で弾幕を切り抜けたと思つたら今度は直射砲で吹っ飛ばされる東スターク。だが、まだ雪兎の攻撃は終わらない。カシユン、カシユンと音がして先程直射砲を発射したビーム砲からストライクカノン薬莖が排出され、エネルギーがチャージされる。

『えっ？まさか、連射可能？』

「正解だ。景品はこいつだ、2連打！」

デイバインバスターの連射を食らいピンボールのように吹っ飛ばす東スターク。カトリッジが切ればマガジンを交換して容赦無く射ち続ける雪兎。そして、東スタークは気付けば公園の近くの海に叩き落とされる。

『ぶはっ！何なんだよあのIS！こんなの東さん聞いてないっ！』

「敵にそう簡単に明かす馬鹿がいるかよ……さて、この辺ならいいか」

雪兎は周囲に被害が出ないと確認すると東スタークの四肢を光のリングバインドで拘束する。

『えっ？このっ！えいっ！取れないっ！』

「コードSLB起動」

すると、ストライクカノンが変形し、霧散したエネルギーを収束し始める。

『……そ、それ、ISが使つていい火力じゃないよね!』

「何を言ってるんだ？まだこれからだぞ？」

『えっ?!』

「サテライトシステム起動」

雪兎がそう言うのと、とある目的の為に雪兎とこの世界の束が作成した人工衛星【月の兎】^{ムーンラビット}からマイクロロウエーブ送信により雪華に更なるエネルギーが供給される。その際、背面のウイングが変形し、四枚のリフレクターとなつてエネルギーを増幅する。ちなみにその余剰エネルギーは機体外に放出され収束砲にチャージされるといふ地味に無駄の少ない仕組みをしている。

「こいつはちよつとばかり火力が高過ぎてまだ試し射ちしてねえんだわ……本当にいいタイミングだったぜ」

『それ死んじゃう?!そんなの食らつたらいくら細胞単位でオーバースペックな束さんでも死んじゃうから!』

「安心しろ、非殺傷設定だ」^{御都合主義}

『それでも安心出来る要素が0なんだけどおとおお!!』

物凄く激しくもがく束スタークだが、バインドによる拘束は外れない。そうこうして

いる間にストライクカノンの前には雪華の全長の二倍以上のピンク色のエネルギーが渦巻いている。

「いくぞ、これが俺の全力全開[※]！スターライトオオオ、ブレイカアアアアアアアア!!」
『いいいいいいやあああああああああ!!?』

その瞬間、IS学園付近の海にて凄まじいピンク色の光が轟音と共に弾けた。

「ご主人、派手にやってるなあ・・・」

その頃、レヴィ達マテリアルズはディアーチェの指揮の元、スマツシユの撃退をして
いた。

「さてと、そろそろ僕も遊んでないで本気出さないとご主人や王様に怒られちゃうな」

そう言うと、レヴィは自分に合わせて小型化されたバルニフィカススラツシャーを大剣に変形させる。

「という訳でまとめてぶった斬るけどいいよね？答えは聞いてない！」

何処ぞの紫のやんちゃ坊主のような事を言いながらレヴィはスラツシャーを振るいスマツシユを一掃する。

「うん、僕ってやれば出来る子だもんね」

「さて、マスターの方も終わったようですので、私も終わらせるといたしましょう」

シユテルもレヴィと同じく雪兎が束スタークを倒したと確信し、目の前の数体のスマツシユを見る。

「心火を燃やして参ります．．．デイザスター、ヒート！」

こちらも小型化したルシユフェリオンドライバーでスマツシユを黒焦げに変えていく。

「やはりこの程度では物足りませんね．．．おや、王からですか．．．わかりました。すぐに向かいます」

元になったキャラの影響か、若干戦闘狂な節があるシユテルはデイアーチエの指示で別のメンバーの援護へと向かった。

「まったく、この程度の相手ならば我らが出るまでもなかったのではないか？」

「デイ、デイアーチエ」

「わかっておるわ、ユーリ。ふん！」

「ディアアーチェとユーリのコンビもディアアーチェが重力操作でスマツシユを拘束、それをユーリが攻撃して着実にスマツシユを減らしている。

「こつちも終わりましたよ、ディアアーチェ」

「よくやった、ユーリ。他の者共も片付けたようだな」

「次に行きましょう、ディアアーチェ！」

「そうだな、レヴィとシユテルも終わらせたようだ。合流するぞ」

その後、合流したマテリアルズはそのまま箒達とも合流し、シャルロットを追っていった龍我達の方へと向かった。

一方、スマツシユとなったオータムと戦っていた龍我はボロボロだった。理性も無く

ただ暴れ回るスマッシュでも十分に厄介なのにオータムは自分の意識を保っており、かつオータムは雪兎達にこそ連敗しているが、並みの代表候補生などでは相手にもならない実力を持つているのだ、いくらクロースの力を持つている龍我とて苦戦するのは当然だった。

「ま、まだだ……」

『雑魚のくせにしつけエなア』

その持ち前の頑丈さのおかげで致命傷こそは避けているが、正直なところいつ変身が解けてもおかしくはない。それでも龍我は諦めてはいなかった。

『まだこっちはメインが残ってるんだ……前座はさつきとくたばれたのー!』

そう苛立つオータムがトドメとばかりに腕の鰭を巨大なブレードに変え、龍我に振るおうとしたその時、龍我とオータムの間の一振りの剣が飛来し地面に突き刺さる。

「これは、ビートクローザー?」

それは折れてしまい雪兎に修理を頼んでいたビートクローザーだった。

『ちっ! 誰だ!』

「ちよいと邪魔するぜ」

そこに現れたのはパックをトライアルに切り換えた雪兎だ。

「雪兎……」

「わりいな、少してこずった」

「スタークの野郎は？」

「倒すには倒したんだが、逃げられた・・・まあ、色々お土産は残していつてくれたがな」

そう、あのスターライトブレイカーで東スタークを倒す事は出来たのだが、東スタークは雪兎がEXCEEDの反動で動けないうちにすたこらさっさと逃げ出したのだ。その際、東スタークも余裕がなかったのか色々な物を落としていったのでそれをマテリアルズに回収させ、慣れてきて多少動けるようになった雪兎は苦戦しているであろう龍我の元へと駆けつけたのだ。

「って訳だ」

『ちっ、あのコブラ野郎も使えねえな』

「他のメンバーもシャル達と合流してる頃だろう。ってことでオータムはお前に任せるわ」

『は？』

しかし、雪兎のその言葉で龍我とオータムが声を揃えて驚いた。

『お前、この状況がわかってんのか？』

「そのサメ野郎に同意するのは癪だけどよ、お前、本気で言ってるのか？」

「大真面目だとも……ってか、RAISINGの反動で今の俺はまともに戦えねえかな」

よく見れば雪兎の動きはどこかぎこちない。よくビートクローザーをあのタイミングで投げられたものだ。

「それに、もうお前の勝ち筋は見えてるんだ……決め台詞風に言うなら、勝利の法則は決まった、って感じかな？」

「何だよそれ」

龍我は呆れつつも雪兎の言葉を聞いてビートクローザーを杖代わりに立ち上がる。

「まずはそいつビートクローザーのもう一つの機能の説明かね……それ、鏢のところにボトル差す穴あるだろ？」

「あつ、本当だ」

どうやら龍我は雪兎に言われるまでそれに気付いていなかったようだ。

「試しにロックボトル差して下のレバー引いてみ」

「こうか？『スペシャルチューン！』うおっ!?何か鳴った!？」

「あとは最大三回までレバー引けて、引く回数で効果変わるんだが」

『私がいるつてのに何暢気にくっちゃべってやがるっ!!』

「とりあえず今回は二回引いてトリガー押せ」

「おう」

『ヒツパレー、ヒツパレー』

『くたばれエ！』

『ミリオンスラッシュ！』

するとビートクローザーから金色の鎖が放たれオータムを拘束した。

「おー！」

「次は三回引いてみ」

「おう！」

『ヒツパレー、ヒツパレー、ヒツパレー』

「うりゃ！」

『メガスラッシュ!!』

今度は金色の光弾が飛び出しオータムを吹っ飛ばした。

「多分、差すボトルで効果が違うんだと思う。ロックフルボトルだから鎖ってとこなかね？」

『くっ……よくもやってくれたなア!!』

まだ鎖が残っているのにも関わらず起き上がり吼えるオータム。しかし、雪兎と龍我の頭にもう負けるイメージは無かった。

「そ・し・て！俺の新・発・明！〔属性エレメンタルボトル〕！」

そう言つて雪兎が取り出したのは赤い炎のマークが付いたフルボトルだった。

「何じゃそれ？普通のフルボトルと違うのか？つてか、どうやって浄化したんだよ……」
「こいつは厳密に言うとな浄化されたボトルじゃないんだわ。こいつは少量のネビュラガスと属性力を強引に複合させて、これまた無理矢理ボトルに詰めた結果出来たボトルだな。無理矢理詰めたもんだから一度使うとエンパイボトルに戻っちゃうんだわ。だから基本的に使い捨てだと思つてくれ」

「お前、本当にとんでもない事を平然とやるよな……」

雪兎から属性ボトル「ブレイズボトル」を受け取りながら龍我は改めて雪兎の非常識さを痛感する。

「ついでだからナツクルも試しとけ。そのブレイズボトル差してみ」

「こうか？」

『ボトルバーン！』

「うおっ!?!」

ビルドドライバーからナツクルを呼び出しブレイズボトルをナツクルにセットすると迫力のあるボイスがした。例えるならとある英雄殺しの男ボイスだ。

「その状態でナツクルの正面のボタンを長押し」

「ふむふむ」

言われるがまま龍我は右手に持ったナツクルの正面を左手で押さえボタンを長押しする。ボタンを押すと、激しいチャージ音が鳴り響き、ナツクルは蒼炎を纏う。

「あとはボタン放して叩き込め」

「おおっ！ビートクローザーより分かり易いな！」

そう言うのと、龍我はボタンを放しナツクルをオータムに向けて叩き込む。

「食らいやがれっ！」

『ドラゴニック、フィニッシュッ!!ブウラアアア!!』

『ぐああああ!!』

そして、ナツクルに纏われていた蒼炎がドラゴンのように変化しオータムを貫き、オータムを数十メートル吹き飛ばし意識も飛ばしてしまう。

「す、すげエ……」

そのあまりの威力に龍我は暫し放心してしまう。だが、セットしたブレイズボトルは中身を使い果たしたのかエンプティボトルに変わってしまった。

「属性ボトルの方はもう少し改良が必要か……龍我、そのエンプティボトルでオータムのスマッシュ成分抜いとけ」

「おっと！忘れるところだった」

ナツクルから抜いたボトルに成分を回収すると、囚人服姿のオータムが残った。

「さてと……終わつたみたいだな」

「ああ、助かったぜ、雪兎」

龍我が変身を解き、雪兎に礼を言うと、雪兎も雪華の展開を解除するが……

「そい、つは……よか……つた」

「雪兎？」

「悪い……限界みたい、なんで、あとは……任せた」

それまで気合いで意識を保っていた雪兎も意識を失い、龍我がそれを慌てて支える。

「お、おい!? あとは任せたって……どうすりゃいいんだよ」

突然の事に戸惑う龍我。

「とりあえずシャルロット達と合流するか……まっ、たまにならこういうのもいいか」

その後、雪兎を背負い龍我はシャルロット達と合流する為に歩き出すのであった。

1 2 2 話 送別会と龍我の帰還 兎、龍との別れと再会の誓い

「デジャヴユだけど、本当に凄い回復力ね。これだけの大怪我を負ってなお雪兎君を負って I S 学園まで歩いて帰って来て、更に傷が塞がり始めてるなんて……医者 of 存在意義が無くなるわ」

医療室の先生が X 線の写真を見てため息をつく。あの後シャルロット達と合流した龍我は雪兎を背負って I S 学園まで歩いて帰って来ていた。そこで皆も手当てを受けていたのだが、龍我の回復力はやはり異常だった。

「で？俺の怪我はどーなんだよ」

「大きいものだけ挙げるなら、右肩と左肘の脱臼と、右膝の打撲よ。擦り傷とかをカウントしてたらキリがないわ」

「ふーん。で、雪兎は？」

「雪兎君はタダの疲労よ。少し寝れば治るわ」

「そうか。なら良かったぜ」

雪兎は現在、シャルロットの膝の上で寝ている。そして、龍我はそれを羨ましそうに

見ていた。

「龍我、お前怪我は大丈夫なのかよ？」

「お？全然平気だぜ」

「ならいいけどな……」

そう言いながら龍我が左腕をグルグル回すと、一夏は呆れてものも言えない。

「つーか、お前らの方こそ怪物を倒したのかよ。スゲーな」

「シャルロットが、新しい装備を解禁したんだ」

そこで龍我は気になっていた事を訊ねると昴がシャルロットの方を親指で指し示しながらそう言う。するとシャルロットは少し照れたように笑ってみせた。

「へー。分かん」

「う……ん……？」

「あ、雪兔。目が覚めた？」

そんな話していると、雪兔が目を覚ました。

「ここは……医療室か」

「そうだよ。雪兔、EXCEEDを使ったでしょ？」

目を覚まして早々、雪兔はシャルロットに問い詰められる。

「まあな。あの野郎に腹が立ったからな」

「どうして腹を立てたの？」

「あの野郎、シャルロットを殺すとか言いやがったからな。本気で頭にきたぜ」

「雪兎……」

「だーっ！イチャイチャすんなテメーら！」

そんな雪兎の答えにシャルロットが顔を赤く染めて照れると、龍我が見てられないとばかりに吼えた。

「シャルロット！その顔でイチャつかれると、なんか複雑なんだよ！」

「あ、ご、ごめんね……」

そこで、もし別の世界の雪兎が別の女の子とイチャイチャしていたらと龍我の立場になって想像したシャルロットが涙目になる。

「しょーかく、サイテーだぞー！」

すると、そこにレヴィがやってきた。

「えーつと、テメー誰だっけ？」

「忘れたのか!? 酷いぞじゅんよー！」

仲がいいのか悪いのか、レヴィと龍我は毎度こんな感じだ。

「レヴィ、回収は終わったのか？」

「終わったぞ、ご主人！」

レヴィはビツ！と敬礼をすると、雪兎に雪兎から預かっていた storage を渡す。それを受け取った雪兎はレヴィ達に回収させていた東スタークの忘れ物をチェックする。

「どうやら、かなり焦ってたみたいだな．．．ん？これは、フルボトル？」

その出現させた物の中から銀色のフルボトルを手に取ると、雪兎はその場で解析を始める。それはとある装置で生成した特殊なガスを納めたボトルだった。

「これか、龍我が言っていたスタークが使った世界を渡るガスつてのは」

それに付与された座標データもあり、これで龍我を元の世界に返す算段が整った。

「龍我、これで元の世界に．．．って、寝てんのかよ」

「まあまあ、倒れた雪兎を背負ってきてくれたのは龍我なんだから．．．」

「そうか、それは仕方ないな．．．」

そう言つて眠る龍我を見ると、

「なあ、雪兎」

「ん？」

「龍我はもう元の世界に帰るんだよな？」

「ああ、こいつの事だ。帰れると知ればすぐにでも帰るつて言うぞ」

「なら、龍我の送別会をやらないか？」

「面白そうだな。のった」

こうして、急遽、龍我の送別会の準備をする事になった。

その後、雪兎と一夏で簡単に準備出来る料理を多めに用意し、空き教室を借りて送別会の準備を終えると、医務室で眠る龍我をレヴィに起こしに行かせた。しばらくするとドアの前が騒がしくなる。

「さー！ 入れりゅーが！」

「やつと龍我って呼んだか。んじゃ、入りますかね・・・」

ドアを開けた龍我はテーブルに並ぶ料理を見てポカーンとしている。

「龍我、いつまで寝てたんだ？まだ成長期なのか？」

「晶もそう言わず。万城君、座って座って！」

そんな龍我に晶がそう言い、聖が龍我を席に案内する。送別会をやると言ったら案の定いつものメンバーが揃ったのだ。他にも龍我的送別会に参加したいというクラスメイト達もいたが、そんな人数の料理は用意出来なかつたので別れの言葉を書いた色紙だけの参加となつてしまったが。

「それじゃあ龍我也来たことだし、送迎会始めるか」

バタバタとしていた一夏や箒が椅子に座ると、雪兔がコップを持って立ち上がる。

「いや、何？コレ？」

「レヴィから聞いてないのか？」

「全く」

「レヴィ……」

龍我が未だに困惑している様子を見て、雪兔が龍我に訊ねるが、レヴィは送別会の事を伝えた忘れたようだ。雪兔がレヴィを睨むと、レヴィは居心地悪そうに目を逸らし鳴りもしない口笛を吹く。

「はあ……まあ簡単に言えば、龍我が帰れるんだよ。元の世界にな」

仕方がないので雪兔が理由を説明する。

「マジでか!？」

それを聞いて龍我が椅子を蹴飛ばしながら立ち上がった。

「おう。スタークが落としていった物の中に、お前の世界の座標が入ったフルボトルがあったんだよ。デイケイドみたいな銀色の煙と一緒にな……って、お前にデイケイドって言っても分からんか」

「デイケイドなら知ってるぜ？ 門矢士の野郎だろ？ 会った事もあるぜ？」
「嘘だろ!!」

どうやら龍我はデイケイドこと門矢士と面識があるらしい。

「嘘じゃねーよ。いちいち鬱陶しいヤローだったぜ」

「やっぱりか？」

「やっぱりって……お前こそ、何で知ってんだよう？」

「お前に説明しても分からんと思うぞ？」

「じゃあいいわ」

ややこしい話になるとわかると龍我は椅子を直し座り直す。

「……で、何の話だっけ？」

「だから、お前が帰れるって話だよ。お前が持ってきたUSBメモリに色々なデータが入ってたから、それを活用して俺が次元転移装置を作ったんだよ」

さらっと雪兎がまたしても問題発言をする。

「意味分からんぞ。俺、ゆーえすびーめもりなんて持つてきてねーし」

「あー、そう言えばお前には説明してなかったな。お前のポケットにいつの間にか仕込まれてたみたいで、お前が俺に負けて気を失った時に俺が拾ったんだよ」

「それで？」

「察しの悪い奴だな．．．だから、お前が帰るために必要な座標成分の入ったフルボルトをゲットしたから、お前は帰れるの。理解したか？」

「．．．．おう！」

雪兎が出来るだけ噛み砕いて説明するが、龍我は少し間を置いて返事をする。絶対に判ってない。

「あ、理解出来てねえな、こりゃ」

「いいんだよ！それより早く食おうぜ！」

「それもそうだな。それじゃあ、龍我の送迎会を始めるぞ。龍我、何かあるか？」

「このヒレカツ美味そうだな！」

「そうじゃなくてだな．．．」

龍我にスピーチなんて振ったのが間違いだつたと雪兎は思い、送別会の開始の音頭を取る。

「もういい。いただきます！」

「「いただきまーす」」

雪兎の音頭が終わると、全員が食べ始める。

「あつ、待てよ！俺も食う！」

ワンテンポ遅れで龍我も箸を手に取ると、目の前に置かれたヒレカツを頬張った。

「そうだ龍我。お前の専用機が完成したぞ？」

「あ？」

食べ始めて30分が経った所で、シャルロットと食べていた雪兎が突如そう言った。

「えっ、雪兔いつの間になつてたの？」

「そりゃあ部屋でだが……そう言えば、最近は龍我と同じ部屋だったな。完成したのを知らなくて当たり前か」

「むう、僕の知らない所で色々して……」

「悪いな。今度何かで埋め合わせするから」

「ならいいけど」

「だ・か・ら！ イチャイチャイチャイチャすんなッ!!」

龍我に嫉妬するシャルロットを宥める雪兔を見て、ピンク色の空気を感じ取った龍我が再び吼える。

「ちよつと待つてろ。今出してやるからな」

そんな龍我にやれやれと雪兔は首を振り、storageから龍我の専用機【蒼龍】を呼び出す。

「雪兔はまた作つたのか……」

「今回もどうせ自重してないのでしょ？」

「ホント規格外よね……」

「……つと、コレだな。その名も【蒼龍】だ！」

空き教室に、蒼いISが現れる。そのISは肩のパーツが大きく、胸にドラゴンの頭

部、背面には龍の翼を模したウイングと折り畳まれた尻尾のようなパーツのあるISSだった。

「雪兎、今回はどんなコンセプトで作ったの？」

「今回は使うのが龍我だからな。バカでも使える簡単設計だ」

「・・・ひよつとして、馬鹿にしてるのか？」

「ひよつとしなくてもな」

「・・・アレ？馬鹿にされてるのか？されてないのか？」

「考えるのを辞めろ。それじゃあ、フィッティングをするぞ」

それからフィッティングやフォーマツト作業を行い、蒼龍は正式に龍我の物になった。

「・・・ふう。完成だ。コアは新規の束さんから貰ってぶちこんでおいた」

「雪兎、新規のコアって・・・」

「龍我の世界が混乱するって？知らんなそんな事だ。無人機のコアとかあるし、テキトーに誤魔化しとけ」

元々はコアだけ向こうで用意してもらおうつもりだったが、色々と面倒になったので雪兎は新規で用意したコアをそのままセットしている。

「よく分かんねエけど、俺にも専用機が出来たんだな！」

「良かったね」

初期設定を終えた雪兎は蒼龍を龍我用に用意していた storage にしまい、龍我にとある事を確認する。

「そうだ龍我。お前、向こうでは何月の何日だったんだ？」

「何でだよ」

「来た日に帰りたいだろ？話に聞く所じゃ、シャルロットとのデートの予定だったんだろ？」

「おお、来た日に帰れるのか・・・」

それは龍我が転移した日付だった。

「・・・6月の28日だな」

「OK。6月28日・・・何時だ？」

「朝の8時半くらいだな」

「午前8時半と・・・入力完了だ。一応まだ居る事は出来るが？どうする？」

「今すぐ帰るに決まってるんだろ！」

「そう言うと思ったよ・・・装置はここでは展開出来ないから外に移動するぞ・・・残った料理はタッパーに入れて持って帰っていいから」

「おつ、サンキュー」

すぐに帰ると言う割には料理に未練タラタラな龍我に雪兎がそう言つてタツパーを出すと、龍我は遠慮無く気に入った料理をタツパーに詰め始めた。これも後で storage にしまった。

「(´▽`)ならいいかな?」

外へ出ると、雪兎は再び自分の storage を操作し始めた。

「よし、出すぞ」

そう言つて雪兔が出したのは巨大な金属の輪つかだった。

「こいつが次元転移装置・クロスゲートだ」

「でつか・・・」

「だから言つたろ？教室じゃ展開出来ないって」

そして、雪兔はまた storage を操作してクロスゲートを起動させる。

「これで龍我のいた世界と繋がったはずだ。一応、俺も確認の為に歩いて行くからな」

「・・・ホントに帰れるのか？」

「お前、俺を疑つてるのか？」

「いやそうじゃねエけどよ・・・」

「まあ、ちゃんとお前の世界と繋がったか確認する為に俺がついて行くんだ。龍我一人送つて別の世界でした、は洒落にならんからな」

アフターサービスも仕事のうちだと、雪兔は龍我と共にゲートの前に並ぶ。

「じゃあな、お前ら」

「じゃあな。また会えたら会おうな！」

一夏達に別れを告げた龍我と共に雪兔はゲートをくぐり抜けるが・・・

「やっぱ僕も行く」

「こら、レヴィ！」

レヴィが雪兎達の後を追ってゲートに飛び込んだ。

「……レヴィ、何か弁明はあるか？」

ゲートをくぐり終えた雪兎達は無事？に世界を移動した。しかし、雪兎は勝手についてきてしまったレヴィにお怒りの様子。

「……ありません」

「何とか無事に転移出来たが、場所が少しズレたみたいだな」

雪兎が言うにはレヴィが飛び込んだ影響で龍我のいた世界ではあるが、転移座標が微妙にズレて跳ばされてしまったらしい。

「……は、あんときの雑木林じゃねエか……」

しかし、龍我にはこの場所は見覚えがあるらしく、龍我の世界で間違いないらしい。

「よし、時間も8時半だ！」

「……まあ、いいか。龍我、これを持ってけ」

すると、雪兎は龍我用に作った storage を龍我に投げ渡した。

「これは？」

「storage って言って IS の拡張領域を応用した道具で……お前に分かり易く言うなら某青狸の四次元バックだ」

「あー、何かこつちのラウラがそんなアニメ見てたっけ？ちよつと待て？四次元バックって、まさか!？」

「蒼龍とかもそれに入れてある。ビルドドライバーとかもそれに入れてれば嵩張らないし、入れとけば簡易的にはあるがメンテもしてくれる優れものさ……俺はもっぱらエコバックとして使ってるがな」

一応、この storage はビルドドライバーなどのメンテ用に用意していたもので、デザインは裏にクローズのマークが付いた蒼いタブレット型だ。

「ほれ、行くんだろ？」

「ああ……って、ついてくる気かよ!？」

「一応、保護者にちゃんと送り届けないとな」

「シャルは俺の保護者か!」

その後、レヴィも転移してきたせいかな帰るのに使うエネルギーが微妙に足りず、暇だった雪兎は龍我を学園まで送る事にした。ちなみに雪兎は制服だと色々面倒だからとTシャツにダメージジーンズ、上にジャケットを羽織っている。

「あつ!龍我!?!」

校門までいくと龍我を見つけたシャルロットがこちらに駆け寄ってきた。

「おう、待たせたな、シャル」

「待たせたな、つて、丸一日何処へ行つてたのさ!」

「えっ?」

何事もなかったかのように告げる龍我にシャルロットはお怒りの様子だ。どうやら座標だけでなく日付が一日ズレたらしい。

「あちやく、そうきたか」

「おい、雪兎!どうなつてんだよ!?!」

「レヴィだ・・・あいつが飛び込んできたせいで位置座標だけじゃなく時間もズレたっほい」

「マジかよ・・・」

そうこうしているうちに龍我を探していたらしいこちら側の一夏達まで騒ぎを聞き

つけ集まつてきた。

「よかった、無事だったんだな、龍我……」

「心配かけさせるんじゃないわよ！」

「私達がどれだけ心配したと思ってる！」

「この際、首輪を着けておいたらどうだ？」

「それは名案ですわね」

「龍我、首輪意外と似合うかも」

（そりゃあ、二人しかいない男性操者いなくなりや騒ぎにもなるわな……）

そんな一夏達とのやり取りを見て雪兎はそんな事を考えていた。

「ところで龍我、彼は？」

一通り龍我への罵倒が済むと、皆の注目は雪兎へと移る。それは当然だろう。雪兎も

龍我を不審者扱いしていたのでこれは当然の反応だ。

「ん？俺はただの通りすがりの天災だが？」

「いや、通りすがりって……」

雪兎の返しに一夏達がズッコケるが、雪兎はそんなのお構い無しに自分の役目は終わったとばかりに背を向ける。

「さてと、保護者への引き渡しも済んだし帰るか」

そこで龍我へ別れの言葉を告げていなかった事を思い出し、雪兎は龍我に向かってこう告げた。

「またな、龍我……もしもまた道が交わる事があればまた会おう」

「ああ、色々と世話になった」

龍我と別れ、再び雑木林に戻った雪兎はクロスゲートを起動させて自分の世界へと帰還する。

「あつ、雪兎！大丈夫だった？」

「一応な……こいつのせいで少し場所と時間はズレたがな」

レヴィを猫のように掴みながら雪兎は要調整だ、と言ってクロスゲートをしまう。

「また会えるかな？」

「さあな？こればつかしは俺には何とも言えないが……会えないと思うよりは、また会えるって思ってた方が再会出来る気はするな」

「そうだね」

「中々に刺激的な出来事だったなあ」

部屋に戻った雪兎は龍我との日々を振り返りながらそんな事を思っていた。ちなみにシャルロットは雪兎が龍我の面倒を見る間移っていた仮の部屋から荷物を移す準備をしている。

「そっぴやこのメモリ差しっぱなしだったか」

すると、雪兎は東スタークのものと思われるUSBメモリが部屋の端末に差しっぱな

しになっていた事に気付いた。

「何かまだ他にも色々データ詰まってるなあ……ん
？」

そこで、雪兎はあるデータに目をつけた。

「HAZARD TRIGGER？」

十五章 兎と学年末トーナメント

123話 織斑計画と月の落とし子 兎、拾い物をする

龍我という平行世界の住人との遭遇から数日が経ち、雪兎達は平穩を取り戻していた。そんなある日、雪兎達は東に呼び出されていた。

「よくぞ集まってくれた、我が精銳達よ！」

「ネタに走るなら帰りますよ、東さん」

「待つて待つて！最近出番無かったからちよつとふざけただけだから！」

回れ右をする雪兎の腰にしがみつき呼び止める束。

「で、俺だけじゃなくて一夏達まで集めた理由は何ですか？」

「うん、実はちよつと違法な研究してる施設を見つけてね。そこへのカチコミに協力してほしいんだよ。あつ、勿論、ちーちゃんから許可はもらってるよ」

詳しく話を聞けば、どうもその研究施設は国家では手が出せないものらしく、だからといって放置すれば今後の計画の支障になるという事で雪兎達にお鉢が回ってきたとの事。

「それで、その施設ってのは何処にあるんです？」

「それはね……ドイツだよ」

そんなこんなでドイツまでフライング・ラビットでやってきた雪兎達。

「よく許可降りたよな……」

「まあ、それだけこの研究施設の研究がヤバいって事なんだろう」

雪兎と束が同時に投入されるといふ段階でヤバい研究なのは確かだ。

「それと、ラウラのレーゲンにVTSを入れたのもこの連中らしい」

「そうか、あの時の借りも直接返せるのだな」

「ほどほどにな」

だが、この時はまだ雪兎も知りはしなかった。何故、束が雪兎達を使ってまでこの研

究施設を襲撃したのかを．．．それが一夏やラウラ、そしてマドカとも深い関係にある事を。

研究施設の制圧自体は簡単なものだった。まあ、代表候補生クラスが21人も投入され、束に引率としてナターシヤまでおり、クロエに電子戦まで仕掛けられたのだ。違法研究施設とはいえこのメンバーには戦力不足過ぎた。

「呆気なかったな」

「雪兎、スピリットフレアとユーリで問答無用にエネルギー吸い尽くしといてそれは．．．」

「だ、駄目でした？」

「ううん、ユーリは悪くないよ。おかげであっさり制圧出来たし。ありがと」

「は、はい」

研究施設には亡国機業が関わっていたのか、各国から盗難されたISや機械戦乙女等もいたのだが、ある地点ではディアーチエにより重力操作で封殺。またある地点では一夏の白式が夕風燈夜でISコアを片っ端から初期化して無力化。そして、雪兎達は雪兎とユーリの二人で機体のエネルギーをエネルギードレインで吸い尽くすという戦闘にすらならない始末である。

「さてと、東さんが問題視する違法研究とやらを確認させてもらいますか」

そう、意気揚々と研究施設に入っていく雪兎だったが、研究施設を進むうちにその研究が何であったのかを知り、その表情は憤怒に染まっていた。

「ふざけんなっ!!こいつら、人を何だと思ってる!!」

そう、その研究とは人体実験。人工的に調整された人間が調整用のカプセルで薬品漬けにされていたのだ。その研究の目的は人工的にISの男性操者を産み出す事。そんな悪魔の研究だった。

「科学は……技術は……こんなものを産み出す為にあるんじゃないっ!!」

「雪兎……」

「しかも、この子達は……」

「どうやら雪兎達が襲撃してきたのを知った研究員が逃げるのに邪魔だと彼らの生命維持装置を切ったようで、そのほとんどが死んでいた。」

「マスター！このカプセルの子はまだ息が！」

「何!？」

その時、シユテルがまだ息をしている少年を発見し、雪兎に報告する。

「シユテル！カプセルを破壊しろ」

「御意！」

雪兎の命令でシユテルはその少年のカプセルを破壊し、中の少年を救助する。

「げほっ……」

その少年を雪兎は storage からバスタオルを取り出し包み込む。

「ユーリ！フライング・ラビットに連絡！」

「はい！」

雪兎はユーリに連絡の指示を出しながら少年に生命維持装置を装着し、安堵の息を漏らす。

「よかった……生きててくれた」

そんな雪兎を少年は虚ろな瞳で見ていた。

「お前は絶対に俺が助ける」

そして、雪兎がそう告げると目を閉じ、そのまま眠り始めた。

「眠っただけか……」

「良かったね、雪兎。助けられる人がいて」

「ああ、だが、この研究をしていた奴らは一体……」

その後、少年を一度フライング・ラビットまで運び、雪兎達は再び研究施設を調べ始めた。研究員達は既にラウラがドイツ政府に頼んで黒兎隊を手配しておいてくれた為、彼女らが捕らえてくれたそうだ。

「それにしても何でこんな研究を……」

雪兎は不思議に思っていた。何故こんな研究がされていたのか？その答えは研究施設のメインサーバに保管されていたとあるファイルにあった。

「……織斑計画、だと」

それは雪兎にとって衝撃的なものだった。その狼狽っぷりは先程とは比べものにならないものだ。

「……なんだよ、これ……究極の人類を創造する？織斑計画試作体1000番つてこれ……」

「ゆ、雪兎……これって」

「そうかよ……そういう事かよ……やっと全部繋がった」

そのデータを全て閲覧し終えた雪兎は前世から疑問だった事の全てを知った。

「そりゃあ、こんな研究するよな？過去に成功例が存在するんだからなっ！」

織斑計画のファイルにはこうあった。「究極の人類としては既に篠ノ之束という成功例が存在した為、計画は凍結。成功例試作体1000番と特例1番の扱いは……」と、その試作体1000番とは千冬の事で、彼女が写る写真に彼女に抱えられてもう一人赤子・特例1番が写っていた。その特例1番こそ雪兎達がよく知る人物・織斑一夏だったのだ。そして、ラウラはこの織斑計画の一部を利用して作られた事も判った。

「束さん、何でこれを見せた？」

「ゆーくんは知っておくべきだと思ってね」

雪兎が振り返るといつもと同じ笑みを浮かべた束がいた。

「今はもう私もこの事は気にしてないよ。でも、これが世間に知られれば色々と厄介な事になると思ってゆーくんに見せたのさ」

「……束さん、これ、全力で叩き潰すけど構わないよな？」

「いいよ。これ以上ちーちゃんやいっくん、それとマドつちみたいなのが生まれないようにして」

束の頼みを聞いた雪兎はその研究施設の設備を使い織斑計画のデータを全世界から抹消する。

「あと、この施設は【NEO】で消します」

「あれ、完成したんだ……四番目のEXCEED」

「ええ、試運転には丁度良い」

その後、その研究施設は雪兎の手で完全消滅した。巨大なクレーターだけを残して……

「……雪兎、その話、本当なのか？」

「ああ、東さんや千冬さんにも確認を取った」

I S 学園に戻ってから雪兎はいつものメンバーを召集した。それは一夏の真実を伝える為だ。

「そんな、一夏が……」

「それであの施設をあんなにしたのね」

その話を聞いて一夏達は一夏の出自に驚く者と雪兎が研究施設を過剰なまでの力で消し飛ばした理由に納得する者に分かれた。

「でも、一夏君は一夏君だよ」

そんな重い空気を変えたのは意外にも聖だった。

「聖……」

「だって、生まれはどうあれ私達は仲間じゃない！」

聖にとって出自なんてものは関係無いのだ。何故ならば既にラウラという出自が普通で無い親友がいたからだ。

「よく言った聖！流石は私の親友だな」

「そうだったな、生まれはどうあれ一夏は一夏だ」

聖からラウラ、箒がその真実を受け入れると次第に皆もいつもの表情に戻っていく。
「皆……」

「こいつらがそんな程度でお前から離れる訳無いだろ？無論、俺もだがな……つてか、俺みたいなやつを受け入れた連中だぞ？」

「雪兎……」

この出来事によりメンバーの絆はまた一層深まっていった。

「良かったね、ちーちゃん」

「まったく、余計な真似を・・・」

「あつ、ちーちゃんが照れてる」

「ほんとだ」

「東、雪菜・・・お前達、最近太ったのではないか？良かったら運動に付き合え」

「ち、ちーちゃん!？」

「いいよ、そろそろ東さんとしてはちーちゃんとも決着つけておきたかったし」

「東ちゃんまで!？」

「よし、いこっか、ゆっきー
雪菜」

その裏でこんな事があったとかなかったとか。

124話 学年末恒例！学年別トーナメント！！ 兎、は りきる

「学年末学年別トーナメント？」

例の研究施設での一件を終えた雪兎達を待っていたのは学年末の総決算とも言える学年別トーナメント。今回はタググではなく個人戦であり、一年生は専用機持ちとその他でトーナメントを分けて行うらしい。

「今回は完全に個人戦なのか」

どうやら今まで個人戦のトーナメントの機会が無かった事から専用機持ちのトーナメントが急遽企画されたらしい。上手くいけば恒例行事するつもりらしい。

「リヴァイヴⅡとこいつのいい宣伝になりそうだな」

「まさか、新しい量産機を作ってるなんてね」

「ほんと、いつの間にそんな物を・・・」

実は雪兎はリヴァイヴⅡだけでなく、IS学園産というべき量産型ISを開発していた。その名も【鋼】^{ハガネ}。打鉄シリーズや雪華のデータを流用して開発されたISで、当然、装甲切換を組み込んでいる。打鉄の素直な操作性と装甲切換による多様性の融合でり

ヴァイヴⅡに劣らぬISとなっている。その性能はテストに協力してくれた更識の人間にも好評で、バリエーション機で作られた「黒鉄」クロガネが既に何機か配備させている程だ。IS学園にも「白銀」シロガネというバリエーション機が教員用に作られている。学園内のリヴァイヴと打鉄も随時リヴァイヴⅡと鋼にアップグレードされて、専用機を持たない一般生徒はこの二機に加え後二種類他の企業で開発された新型量産機の中から選んで使う事になっている。雪兎曰く、他の企業の新型にも雪兎が関与しているらしく、性能は高いとのこと。

「他にもいくつか余所と共同開発してるのもあるが?」

「雪兎、あんた最近ますます自重しなくなってきたわね」

「新しい機体を開発するのが俺の趣味みたいなもんだからな」

「IS開発してる企業が聞いたら血涙流すわよ?」

「……」

「シャルロット、その沈黙は何?もしかして既にやらかしたの!」

そんな風に騒いでいると、

「静かにしろ」

ホームルームが始まったのか千冬が前に立っていた。

「もう知っているようだが、近々、学年末トーナメントが開催される事になった。専用機

持ち以外の生徒は期日までに使用機体の申請を出しておくように」

千冬はそこで話を一度切ると、雪兎達専用機持ちを見渡す。

「今年の専用機持ちは特別多い……その過半数はそのIS馬鹿^{雪兎}の仕業だがな」

「IS馬鹿とは俺にとつては褒め言葉です！」

「威張つて言うな、馬鹿者」

雪兎の脳天に久しぶりに千冬の出席簿アタックが炸裂する。

「痛い……」

「今のは雪兎が悪いと思うよ」

「その馬鹿はさておき、午後から体育館で専用機持ちのトーナメントの抽選会がある。

IS馬鹿以外は遅れず来るように」

「あれ？俺は？」

「人数の関係でお前はシード確定だ。一回戦でお前と当たる等、相手からしたら悪夢だろうに」

「「うんうん」」

千冬の言葉に専用機持ち全員が頷く。

「ひ、酷い……」

しかし、その後に千冬はとんでもない事を告げた。

「その代わり、今回はアドヴァンスドまでは解禁してやる」

「な、何ですと!?!」

そう、前回はタッグが相手だったから解禁されたアドヴァンスドが個人戦でも解禁されたのだ。

「尚、あまりにも成績が悪かった者は春休みは無いと思え。私が直々に鍛え直してやる」

「「「えっ?!」」」

それはある意味死刑通告に等しいものだった。

「天野、お前はこいつらの成長を確認する意味でも全力でやれ、いいな?」

「いいんですか? 俺としてはまだデータ取りたいアドヴァンスドがあつたので丁度いいんですが」

「構わん。あれだけの修羅場をくぐり抜けておいて手も足も出んようなら鍛え直す必要がある」

「わかりました。つてことで、悪く思うなよ?」

「「「不幸だ・・・」」」

「私の真似しないで!」

多くの専用機持ちが雪兎のアドヴァンスド投入に絶望する中、静かに闘志を燃やす者もいた。

(限りなく本気に近い雪兎と戦える機会……これを逃す気はねえな)

一人は一夏。ずっと雪兎を親友兼ライバルと思ってきた一夏にとつて、このトーナメントは降つて沸いたチャンスだ。そして、もう一人は……

(僕だつて雪兎と肩を並べて戦えるつて証明するんだ!)

シャルロットだった。シャルロットもずっと雪兎の隣で戦う事を目標にしてきた。少しずつだが、アドヴァンスドも扱えるようになってきたシャルロットにとつてもこのトーナメントは是が非でも勝ち残る必要がある。

(へえ、あの二人……これは色々面白くなりそうだ)

そんな二人の闘志を感じ取り、雪兎も不敵な笑みを浮かべる。そして、トーナメントの組み合わせはこうなつた。

一回戦

雪兎ー一回戦シード ①

第一試合 シャルロットVSラウラ ②

第二試合 ロランツィーネVS聖 ③

第三試合 本音VS晶 ④

第四試合 鈴音VSエリカ ⑤

第五試合 箒VSカオリナ ⑥

第六試合 セシリアVSアレシア ⑦

第七試合 簪VS一夏 ⑧

二回戦

第一試合 ①VS② A

第二試合 ③VS④ B

第三試合 ⑤VS⑥ C

第四試合 ⑦VS⑧ D

準決勝

第一試合 AVSB

第二試合 CVSD

そして決勝という流れだ。

※トーナメント表が上手く作れなかったので文字表記です。

「最初はシャルロットか」

「負けないよ、ラウラ」

「私の相手は聖か」

「うわあ、ロランさんだ」

「負けないわよ、エリカ」

「鈴さんこそ、お覚悟を」

「私はカロリナか」

「紅椿、強敵……」

「アレシアさんですか、良き試合にしましょう」

「ええ、よろしくね、セシリア」

「一夏が相手……」

「悪いが、今回は負けられねえぞ、簪」

皆、気合い十分といった感じだ。

「試合は一週間後、新たに建造された特殊アリーナで行う。それぞれ、ちゃんと準備しておけ」

125話 金と黒、譲れない想い 兎、解説する

そして、トーナメント当日。

「何、あれ……」

一同は新設された特殊アリーナを見て言葉を失っていた。

「はっはっはっ！これぞ大天才・東さんの叡智を結集し、ゆうくんの手伝わせて完成した

現実拡張

ARRバトルフィールドが展開可能なスペシャルアリーナさー！」

「ARRとはいえ、投影されたものは全部実体があるのと変わらないよう調整してあるから限りなく実戦に近い訓練が可能だ」

東と雪兎は自信満々に特殊アリーナの説明をする。

「これがトーナメントの舞台だよ」

『始まりました、専用機持ちの学年末スペシャルトーナメント！実況は私、黛薫子と』
『一回戦はシードで暇な解説の天野雪兔でお送りします』

アリーナの観客席には既に全校生徒や教員、各企業や各国の重鎮も集まっており、このトーナメントの注目っぷりが判る。

『それでは一回戦第一試合のカードを紹介しましょう！青コーナー、シャルロットⅡデュノア！専用機はラファール・リヴアイヴⅡRRC！』

薫子の紹介で、まずはシャルロットがリヴアイヴⅡRRCで登場する。

『続きまして赤コーナー、ラウラーボードヴィツヒ！専用機はシュヴァルツエア・レーゲン・インレ！』

続けてラウラーもインレを展開して登場する

「ラウラー、悪いけど、僕は最初から本気でいくよ！」

すると、シャルロットはいきなりアンジュルグとネオイエーガーに換装する。

「それは……あの時のアドヴァンスドか」

「そうだよ」

「ならば私も本気でいこう」

そう言うのと、ラウラも大型化したシールドブラスターキャノンに搭載されたヒートブレードを交差して構える。

『バトルフィールドは……市街地か』

ARプログラムが作動し、バトルフィールドが生成される。それは本物と見間違えうべルの再現度で生成された市街地だ。

『それでは第一試合、試合開始！』

「市街地か……だが、このビッグウイグには関係は無い！」

試合開始直後、ラウラはインレに搭載された超大型ビームキャノン〔ビッグウイグ〕を展開し、建物ごとシャルロットがいた地点目掛けて砲撃を開始する。

『いきなりビッグウイグかよ……』

『解説の雪兎君、あれは？』

『超大型ビームキャノン〔ビッグウイグ〕と言って、インレに搭載された最大級の砲撃装備です。火力はネオバスターライフルの数倍を誇り、通常のアーリーナのシールドなら一発で貫通するヤバイやつですね。あつ、このアーリーナのシールドなら最大出力でも耐えられますからご安心を』

『……本当にヤバいわね、それ』

そんなヤバいものをラウラはただ撃つのではなく撃ちながら旋回し、風ぎ払うように市街地を破壊していく。

『市街地の意味ねえ……ラウラのやつ、遮蔽物全部風ぎ払う気だな』

ラウラのインレはその装備の関係でかなり大型で、市街地のようなフィールドではその真価を発揮し辛い。そこでARなのをいいことにまずは障害物の除去から手をつけたのだ。ついでにシャルロットにダメージを与えられれば儲けものくらいの感覚だろう。

「さあ、出てこい、シャルロット！」

「じゃあ、遠慮なく！」

それに対しシャルロットはまだ残っているビルや破壊された瓦礫の影から一斉に姿を現す。

『シャルロットちゃんが分身した!?!』

『アンジュルグの「ミラージュ」ですね。多分、最初の砲撃に合わせて使ったな』

『ミラージュ? つてことは……』

『簡単に言うとう質量を持った残像ですかね? それを操作出来る機能です。レーダーにも全部本物と同じ反応がしますから見分けるのは至難の技ですよ』

「面倒な機能を！」

「「「いくよ、ラウラー!」」」

ラウラはヒートブレードとワイヤーブレードで迎撃するが、ミラージュを幾つか潰しはしたが、何度かミラージュソードの斬撃を食らってしまう。

「くつ、残像の方にも攻撃判定があるとは」

「「「攻撃可能な残像、それがミラージュなのさ!」」」

『え、えええええ!? な、何で残像が攻撃出来るの!?!』

『ミラージュはアンジュルグのウイングに搭載された特殊な粒子を利用して作られていて、その粒子はミラージュソードと同じもの。つまり、残像に触れる事自体がダメージになるんです』

『・・・アドヴァンスドって、本当に常識外れね』

『まあ、インレも十分常識外れなんですがね』

『えっ?』

雪兎のその言葉を証明するようにラウラはインレの機能を解き放つ。

「ゆけ、キハール!」

ラウラの命令で背面に装着されていた六つの黒い円盤のようなものがインレから分離し、変形して小型のロボットへと姿を変えた。

『えっ?』

『二次移行した時に俺のデータベースからデータ引っこ抜いていったみたいで、レヴィとかのプロトタイプビットロボット生成してんですわ』

その姿はまるで黒い兎のようで、ラウラを象徴するような装備だ。そのキハール達がシャルロットのミラーージュを次々と撃ち落としていく。

『しかも、あれは有線制御だからワイザードのジャックとかジャマーが効かないんですよね』

『あれだけ大型なものにはそれ相応の機能があつたんですね……』

しかし、ミラーージュを全て撃破したのにも関わらずシャルロットの姿は無い。

「シャルロットはどこに……上か！」

慌ててラウラが頭上を見上げると、再度ミラーージュを展開し、全員でイリユージュオンアローを構えるシャルロットの姿があつた。

「イリユージュオンレイン！」

「うぐっ」

実体エネルギー矢の雨が降り注ぎ、インレのシールドエネルギーを削っていく。キハール達のエネルギーシールドとシールドブラスターキャノンでガードはしているが、着弾と同時に爆発するイリユージュオンアローが相手ではあまり意味がなかった。

「まだいくよ！コード・ファントムフェニックス！」

それでもシャルロットは決して攻めを緩めることはなく、身動きがとれないラウラに必殺の幻影の不死鳥を放つ。

「キャストオフ！」

だが、ラウラはシールドブースターキャノンの外装と追加装甲をパージし、それを囲にしてファントムフェニックスを逃れる。そう、インレが大型なのは本機に多くの追加装甲を纏っているからであり、それらは全てパージ可能なのだ。

「やつぱりラウラは一筋縄ではないかないね」

「それはこちらの台詞だ。こうも早くモード・ハイゼンスレイを晒すことになろうとはな」

シュヴァルツエア・レーゲン・インレには追加装甲装備形態のモード・インレと軽装の高機動形態のモード・ハイゼンスレイの二形態が存在し、必要に応じて切り換えが可能なのだ。

『もう、何でも有りね……』

『まさか趣味でデータベースに記録しといたウインドウオートの詳細持ってくとは思わなかったわ』

ちなみに、鈴の煌龍やセシリアのガブリエルも雪兎のデータベースから自機にあったデータを引っこ抜いており、とんでもないパワーアップを遂げている。

「でも、勝つのは僕だよ！」

そう言うと、シャルロットはアンジュルグから切り換え初公開となるアドヴァンスドを展開する。

「【CC：クロスキャリバー】！」

それは両腕に腕と一体化したビームキャノンとブレードの複合武装でアドヴァンスド名と同じ名の「クロスキャリバー」を装備し、背面のサブアーム四本にも同様のものを持つ遠近両用の超攻撃型アドヴァンスドだ。その代わり、防衛・運動性はかなり低く、他のパックでそれを補う事を前提とした極端なパックでもある。

『また何か極端そうな装備を……』

『シャルのやつ、ガチで勝ちにいく気だな』

シャルロットはネオイエーガーとの併用で使っており、機動力を強化している。

「受けて立つ！」

クロスキャリバーをブレードモードで使うシャルロットにラウラも両腕のヒートブレードで迎え撃つ。シャルロットの六刀流を両腕だけで捌くラウラ。だが、途中でシャルロットの動きが止まってしまう。そう、ラウラのISに元から備え付けられている第三世代兵器AICだ。

「この存在を忘れてもらっては困るな」

「ふっ」

しかし、シャルロットはそんなラウラに対して雪兎のような不敵な笑みを浮かべる。

「何がおかしい?」

「ラウラこそ忘れてない? 僕のISがリヴァイヴII RCがどんなISか」

そこでラウラは気付いた。シャルロットの、リヴァイヴII "S" 背面に【コスモス】の姿が無い事に。

「しまった!?!」

「もう遅いよ!」

その瞬間、ラウラの頭上からコスモスがネオイエーガーのネオバスターライフルを発射し、ラウラをアリーナの床に叩き付けた。

『あーっと! シャルロットちゃん、いつの間にやら背面のコスモスを分離してラウラちゃんの頭上を取っていた!』

『接近戦になった直後だな。その後は気付かれないようにサブアームも使って畳み掛けてラウラから離れないようにして機動力の不利をカバーしてやがった』

「くっ、忘れていた・・・コスモスは分離して単独行動が可能だったな」

「気付かれないようにするのは大変だったよ」

「イエーガーを選んだのも私に機動力を印象付けさせて至近距離での斬り合いに持ち込

むための布石か……一本取られたな」

『試合終了！激戦を制したのはシャルロット！デュノア！二回戦進出です！』

最初の試合を制したのはアドヴァンスドを上手く使い、コスモスという隠し玉を用いたシャルロットだった。

「次は負けんぞ」

「ううん、次も勝つよ」

そう言つてシャルロットは実況席の雪兔の方を見る。

「だって、僕は雪兔の隣に立つんだから」

それはシャルロットの雪兔への宣戦布告であつた。

1 2 6 話 女貴公子VS天空の支配者 兎、女の底力を知る

『いや、第一試合から白熱した試合でしたね』

『正直、俺もうかうかしてられませんね』

第一試合が終わり、雪兎と薫子が試合を振り返りそうコメントするうちに、第二試合の準備が整ったようだ。

『さてさて準備が出来たようなので次の試合です。第二試合はこの二人!』

『青コーナー、転入生かつ、白百合の貴公子・・・ロランツイーネ・ローランディフィルネイことロラン』

専用機、オーランディ・ブルームを纏い演劇の主役のように登場する。

「ふっ」

『赤コーナー、親友の仇を取れるのか!?宮本聖』

一方、聖もウエーブ・ライダーを纏い入場する。

「が、頑張ります」

聖が今回初期装備としてセレクトしたバイザーボードは新型のクルセイドディフェ

ンダー。防御に秀でた性能のバイザーだ。

『さてと、今回のバトルフィールドは……こちら!』

ARプログラムが起動し、バトルフィールドが生成される。そのフィールドは何と海上だった。

『あー、これは臨海学校の時の海だな』

『これって海の中も再現されてるの?』

『されてますよ。その調整には結構てこずりましたが、自信作です』

「海上かあ……私はあの時は専用機持つてなかったから関わってないんだよね」

「むむ……臨海学校なんてステキイベントを逃していたとは、不覚」

「いや、ロランはいなかったでしょ」

海と聞いて箒の水着イベントを逃した、と本気で悔しがるロランに聖はいつも通りツツコミを入れる。

『それでは、第二試合、試合開始!』

そうこうしているうちに試合が始まる。

「ならば!このトーナメントで優勝して箒に惚れ直して貰わねば!」

控え室で箒が「誰が惚れ直すか!というか惚れない!」と叫んでいたとかいないとか……

「気合い十分なところ悪いけど、まずは一撃もらうね？」

「えっ？」

そんな邪な事を考えていたせいか、ロランは聖のバイザーボードの突撃という先制攻撃をモロに食らい吹っ飛ばされる。

『先手を取ったのは聖ちゃん！あのボードタックルは痛そう』

『クルセイドは硬いからな・・・』

防御型というだけあってクルセイドは重くて堅い。そんなのが高速で突っ込んできたら普通は痛いでは済まない。

「くっ、油断した」

「油断はいけないよ？雪兎君とかそういうの本当に容赦しないから、こんな風に、ねっ！」

体勢を立て直したロランに海中からクルセイドをアーマードモードにした聖が今度は右腕の大きな楯をアツパースイングで叩き込む。

『上手いな・・・今のはボードタックル時の波を使って姿を隠し、アーマードに変形させて海中から奇襲か』

『あの娘、タッグトーナメントから本当に化けたわね』

しかし、ロランもそのままでは終わらない。打ち上げられた空中ですぐにリカバリー

すると同時に狙撃用ライフル【スピーシー・プランター】を展開して聖へと反撃する。だが、聖もそれくらいは読んでいたのか楯の表面に防御フィールドを展開してそれを防ぐ。

「くつ、これも防ぐか」

「プランターは被弾後の内部炸裂が危険だからね」

スピーシー・プランターは弾丸が被弾後に花咲くように炸裂するのが特徴で、貫通はしなくても、被弾して弾丸が装甲に貼り付くと危険なのだ。聖はそれを警戒して防御フィールドを展開したのだ。

『これはロラン様も相手が悪いか!?!』

『いや・・・ロランはそこまで甘くはねえぞ』

『それはどういう事で?』

別にロランはスピーシー・プランターを当てる事が重要だったのではなかった。ロランの真の目的は聖の足を止める事。

「これは、ヴァイン・アームズ!?!」

動きを止めた聖をオーランディ・ブルームに搭載された触手状兵器【ヴァイン・アームズ】が襲い、クルセイドの装甲に巻き付く。

「しまった!?!」

「その楯は厄介そうだからね、いただくよ?」

すると、クルセイドは聖から強制パージされ、ロランがボードモードにして乗り移る。聖はすぐに次のバイザーボードとしてソードダイバーを展開して飛び乗る。

「本当にロランのそれは私のウエーブ・ライダーと相性悪いよ……」

ヴァイン・アームズはただの触手ではない。何とこの触手、接触した相手を浸食・融和して意のままに操る事が出来るのだ。

『何と! ロラン様は聖ちゃんをクルセイドを奪ってしまいました!』

『あれ、本当に質の悪い装備だよな……』

『雪兎君、君のスピリットフレアも人の事言えないんじゃない?』

『フレアはエネルギーだけだ。ロランみたいに人の物まで拝借しない』

どつちもどつちだと思う。

「クルセイドが盗られたのは痛いなあ」

クルセイドは防御に優れたバイザーだ。それ故に他のバイザーも奪われないようにシャープガンナーで遠距離攻撃を仕掛けてもクルセイドで防がれ、策もなくソードダイバーで突っ込めばソードダイバーまで奪われかねない。

「これはミスったなあ……」

「ふふ、私だけ雪兎の手が加わったISではないのですね。その分相手の分析には力を入

れていたのさ」

「みたいだね……これはもう少し取っておきたかったんだけどなあ」

「ん？」

そう言うとき聖は再びバイザーを換装した。だが、それはシャープガンナーでもソニックレイダーでもソードダイバーでもなかった。

「いこつか、『ソードダンサー』」

それはなんとアムドライバーの世界で回収していたネオボードバイザー「ソードダンサー」に酷似したバイザーボードだった。それもそのはず、このソードダンサーはネオボードバイザー「ソードダンサー」をウエーブ・ライダー用に改修したもので、ウエーブ・ライダーもそれに合わせてチューブチャージシステムを搭載機にバージョンアップされていたのだ。

『せっかく貰ってきたんだから使わない手は無い、と改造してみました』

犯人は当然雪兎である。

「あつ、最初に言っておくね……これ、アムエネルギー使うからロランのオーランディ・ブルームじゃ使えないから」

「それはいくらなんでも卑怯じゃないかい!？」

「先にクルセイド奪っておいて卑怯も何もないよ?」

「というか、そんなの食らったらクルセイドもただでは済まないだろう!」

ロランはクルセイドを楯に聖を思いと止めようとしますが、聖は目の笑っていない笑みを浮かべてソードダンサーにチューブを繋ぎチャージを開始する。

「クルセイドは壊れても雪兎君に直してもらえば済むし」

「わ、わかった!クルセイドは返すから!」

「そう言いロランは慌ててクルセイドを投げ出すが・・・」

「うん、これで全力でいけるね」

聖、手加減する気0である。その間にもチャージは進み、ウェーブ・ライダーに合わせ、ライムグリーンに輝くソードダンサーの刃がロランを襲う。

「ジェット、スラッシュャー!」

大剣に装備されたブースターで一気に加速した聖はその勢いを利用してロランを海面に叩き付ける。

「まだ負ける訳にはいかない!フラワーレイ!」

それでもロランはまだ諦めない。横の非固定浮遊部位のフラワーレイを起動して反撃を試みるが、その片方をソードダンサーの大剣が貫く。なんと、聖は大剣を投擲したのだ。

「やっとなら捕まえた」

そして、大剣にはチューブが繋げられたままだ。

「ま、まさか!？」

(ニヤリ)

聖は笑みを浮かべたまま大剣に繋がったチューブを掴む。

「ふんっ!」

チューブを掴んだ聖はそれを振り回しながら回転してロランを海面と上空に上下させる。

『な、なんつう使い方をして……』

これには雪兎の顔もひきつる。

「は、離せ!」

「えっ? いいの? ……はい」

バチンツと大剣からチューブを取り外し、遠心力の加わったロランは再び海面に強く叩き付けられ巨大な水柱を上げる。

『あく、ロラン様のオーランディ・ブルームのシールドエネルギーが尽きたわね』

『勝者、宮本聖!』

「よし! ラウラ、私勝ったよ」

この時、多くの一般生徒達は思った「やっぱりこいつも兎一味だ」と……

127話 目覚める九尾と吼える白虎 兎、爆笑する

『さあ、どんどんいきましよう！第三試合はこのカード！』

『青コーナー、見た目通りのネタIS！布仏本音』

『いくよ、ナイちゃん』

ナインテイルを纏った本音が尻尾をフリフリしながらアリーナに入場……相変わらずユルい。

『赤コーナー、白虎は九尾を破れるか！神宮寺晶』

『むう、やり辛いな……』

相手がほとんど武装を持たないナインテイルとあつて、晶はどこかやり難いようだ。

『それでは今回のバトルフィールドは……これだ！』

ARプログラムが今回選んだフィールドは……柱のように天に向かって伸びる岩山が乱立し、下は標高が高い設定なのか雲海が広がっている。

『まるでアニメとかの仙人の修行場みたいなフィールドだな』

『両者のISも九尾と白虎だし、ちようにどいいんじやない？』

『あまあま、本当にすごいのが作ったねえ』

「本音、悪いがこちらは本気でいくぞ?」

「ジンジンもやる気だねえ、でも、私とナイちゃんだつて簡単にはやられないよ」

いつになく真面目な表情をする本音に晶も本音を本気で戦うべき相手と認める。

『それでは、一回戦第三試合、試合開始!』

最初に動いたのはやはり晶だった。近接格闘戦に特化した白牙は短距離であればイエーガーに匹敵する機動力を發揮出来る。その機動力で一気に距離を詰めて一撃を叩き込むつもりだった晶だが、放たれた拳はふんわりと受け流される。

「何っ?!」

「言つたよ? 私とナイちゃんは簡単にはやられないよつて」

何と、本音はナインテイルの尻尾で晶の拳を逸らし受け流したのだ。しかも、その際に白牙のシールドエネルギーを少しではあるが奪っている。

「これぞあまあまに教えてもらったナイちゃんの特性を活かした戦術、名付けて!【奪気の型】!」

この奪気の型、晶の白牙のような近接格闘型には恐ろしく刺さる。一種のカウンター技のため逆に遠距離型には一切通用しない。

「それは完全に私へのメタではないか!?!」

『文句はトーナメントの抽選に言え、俺だつてこんな刺さるとは思わなんだわ!』

ナインテイルはそもそも戦闘メインのISではない。しかし、戦場に出る事も考慮して防衛性能は兎印のISの中でも上位に位置し、それを活かした奪気の型はハマると厄介極まりないのだ。まあ、攻略法が無い訳でも無いのだが。

「くっ、与えるダメージと奪われるエネルギーの割が合わん」

「はっはっは、思い知ったかあ」

『本音のやつ、調子に乗ってやがるな……』

そして、晶はどうとう奪気の型の攻略法に気付いた。

「虎咆哮！」

直接触れなければいいという単純な攻略法に。

「ぎゃふん」

『お馬鹿……』

そこからは一方的に晶が攻め続けた。一度体勢を崩されれば普通に追撃出来てしまうのも奪気の型の欠点だった。

『先程までとは違い晶ちゃん、一方的に攻め続けます！』

『これは決まったか？』

会場の皆が雪兎と同じ事を考えたその時、ナインテイルが突如輝き始めた。

『はっ？ちよつと待て!?!このタイミングで二次移行だ?!?』

そう、それは二次移行の光だった。ナインテイルはこの土壇場で二次移行という事をやらかしたのだ。展開的には物凄く美味しい展開だ。

『これは面白い展開になってまいりました！』

光が治まり、姿を現したナインテイルは本音のトレードマークとも言えるだぼ袖に羽衣を身に付けていた。

『ん？これ、本当に二次移行したのか？』

雪兎はあまり姿を変えていない事に違和感を感じるが、その正体が掴めない。

「ふっふっふ、あまあま、これを見てもそんな事が言えるのかな？」

そう思わせ振りに本音はある装備を展開した。二次移行前は背面の九尾に拡張領域を食い潰されていたナインテイルが、だ。

『ちよっ?! ナインテイル! お前もか?!』

本音を取り出したのは二段重ねのアイスに三枚の帯状の鞭が生えた何か。一見、ただのネタ装備にしか見えないそれは雪兎が愛読していたとある漫画に登場するアイテムで、雪兎はそこで違和感の正体に気付いた。そう、ナインテイルも二次移行時に雪兎のデータベースに無断アクセスしてデータを引っこ抜いていたのだ。

『雪兎君? 何でそんなに驚いてるの?』

『よりもよってそのスーパードアール持ってくとか何考えてやがる!』

その一見ネタアイテムにしか見えないそれはIS用にダウングレートしているとは
いえとんでもない装備だった。

「いくよ【雷公鞭】！」

それは宝貝パオベイという仙人が使う特殊なアイテムの中でも使い手を選ぶ、スーパー宝貝と
呼ばれる物で、更にそのスーパー宝貝の中でもトップの攻撃力を誇るチート宝貝
【雷公鞭らいこうべん】だった。手加減して放つても中国を雷で覆ったとすら言われるレベル。何で
そんなデータがあるのかって？雪兎の趣味だ。IS用にダウングレートしたそれでも
バトルフィールド全域を覆うには十分な威力を持っていた。

「ぐっ！」

その威力はかすただけでも白牙のシールドエネルギーを大幅に削った程だ。直撃
していればその瞬間に終わっていただろう。しかし、そんなものを攻撃装備をろくに
扱っていなかった本音がいきなり扱い切れるかと言われると、それは否だ。

「あばばばばば!」

制御出来なかった雷撃がナインテイルに当たり、そのまま残り少なかったシールドエ
ネルギーを0にする。

『……えっつと』

『本音の自爆だな。勝者、神宮寺晶』

1 2 8 話 鈴の本気とエリカの意地 兎、笑い疲れてお休み

『え、雪兎君は笑い疲れて倒れてしまったので今回はマドカちゃんに解説をお願いしました』

『どうも』

『それじゃあ次の試合にいきましょうか！第四試合はこのカード！』

『え、つと、兄さんの台本には……あ、青コーナー、セカンドなんて返上だ！凰鈴音！』

「雪兎、余計な事を……」

雪兎が自作したと思われる台本にこめかみに青筋を浮かべつつ、まずは鈴がフィールドへ。

『赤コーナー、セシリアより料理も狙撃も上手い！エリカ！ピーリ！』

「セシリアさん……すみません」

謝りはするが、否定しないところからもエリカの腕前が判る。実際、セシリアは実弾の反動が苦手で、エリカはどっちも得意だ。

「ガト・グリスは狙撃メインの射撃型だったわね。言っとくけど、私はセシリアをよく相手にしてたから簡単に当たるとは思わないですよ?」

「私の射撃をセシリアさんと一緒だと思つてますと、痛い目を見ますわよ?」

『何故だろう・・・二人の背後に猫が見える』

『あゝ、二人ともタイプは違うけど、猫っぽいものね』

『縄張り争い?』

『マドカちゃん、結構ストレートに言うわね』

マドカも雪兔に保護されて自身の存在価値を見出だしてからは外観年齢相応の少女っぽいところも出てき始めたのか、結構ストレートに言う事も多い。ミュウや蘭の影響だろうか?」

『さてさて、今回のフィールドは・・・ぶっ』

ARプログラムが今回選んだフィールドは・・・巨大な家具の置かれ、まるで自分達が小さくなったように感じるステージだった。

『兄さん手製の資料によると、自身が玩具になったように感じるステージだそうです』

『雪兎君、なんて今回の試合にベストマッチなステージを・・・』

狙っていたのではないだろうが、えらくピンポイントなステージセレクトだ。

『と、とにかく、それでは一回戦第四試合、試合開始!』

「このステージ、やり難いわね……」

どうやらISも玩具扱いになるのか、障害物になりそうな家具や他の玩具は攻撃しても破壊する事は出来ず、崩したり動かす程度しか出来ない設定のようだ。つまり、ラウラがやったような障害物の除去は出来ないステージらしい。そして、障害物が多いとなれば……

「エリカが有利なステージね」

エリカのカト・グリスはこういう障害物が多いステージからの不意打ちを得意とするISで、各部に装着しているミサイルポッド等を取り外して設置し攪乱したり、レーダーを阻害するチャフスモークを撒いたり、トラップを設置したりと嫌がらせに關しては流石は兎製なISだ。そんなカト・グリスに破壊不能な障害物があるステージなど、水を得た魚のようなものだ。

「ちっ、もう準備完了ってわけ!」

すると、ステージの所々からチャフスモークが撒かれ、あちらこちらからミサイルが鈴目掛けて発射される。チャフスモークの影響を受けるのは鈴だけでエリカのカト・グリスは高性能レーダーを装備しているため鈴の姿は丸見えなのだろう。

「でも、この煌龍を嘗めるな!」

鈴はそう言うのと、龍咆を自分の真下に向かって放ちチャフスモークを吹き飛ばす。だ

が、その為に足を止めてしまったのは不味かった。

「がつ!?この弾丸はアルテミス!」

「私とて皆さんの一員。このガト・グリスを任された以上はこのくらいこなしてみせますわ」

その後もエリカは障害物を巧みに利用し、鈴に位置を把握させぬようにステージを動か回りながらチクチクと鈴のシールドエネルギーを削っていく。

『あれは鈴もやり難くかろう』

『ある意味今回のステージはガト・グリスの為にあるステージよね』

『煌龍も強力なISだが、相手を捉えられねば無力だからな』

そんな中、チクチクと攻め立てられ続けたせいかとうとう鈴がキレた。

「あくもう!まだるっこしい!視えないなら手当たり次第攻撃するまでよ!四聖龍っ!」

四聖龍を呼び出した鈴はステージ全域への攻撃を指示。自身も拡散放射龍咆で辺りを攻撃し始めた。そう、鈴はまさかのローラー作戦を執行したのだ。

「オラオラオラオラ!」

いくら障害物が破壊出来ないとはいえ、この飽和攻撃には流石のエリカも驚き動きを止めてしまう。それを発見した四聖龍がガト・グリスに襲い掛かる。

「そんなゴリ押しとかありなお!？」

『ルール上の不備は無い。有効だ』

エリカの悲痛な叫びはマドカの一言でバツサリ。それからはまるでネズミを追う猫のように鈴がエリカを攻め立てていく。

『あれは煌龍のパワーがあつて成立する戦術だ。他の皆さんは決して真似はしないように』

『マドカちゃん、意外と律儀ね』

「トドメの覇龍咆哮オ！」

そうこうしている間に鈴の覇龍咆哮が炸裂し、エリカのシールドエネルギーが底をついた。

『そこまで！勝者、風鈴音！』

「おっしやー!!」

『力こそ正義！な試合だったわね』

『ん？どうした、ミュウ・・・雌猫にしては上出来だ、だつて？』

「覚えとけよ！バグ兎イ!!」

129話 兔妹VS小兔、武士道とビツクリ箱 兔、解説を譲る

『え、雪兔君は何やら二回戦の準備との事で、解説は引き続きマドカちゃんにお願いする事になりました』

『兄さんの代役のマドカだ。引き続きよろしく頼む』

『今回はちよつと意外な組み合わせ。青コーナー、元祖天災の妹！篠ノ之箒！』

『うん、もう慣れたな、その呼ばれ方』

もう呼ばれ方の訂正を止めた箒は紅椿で入場。明らかに疲れている感が出ている。

『続いて赤コーナー、三人目の天災候補！カロリナⅡゼンナーシュタット！』

『頑張ります』

こちらはむしろそう呼ばれた事を誇っているようにも見える。そんなカロリナはリコンバージユで入場。

『そう言えばカロリナと一対一というのは初めてだな』

『師匠の師匠の妹が相手・・・でも、負けない』

『・・・何だろう、雪兔を相手にしているようなこの感覚は』

アムドライバーの世界にて既に変態的メカニックの片鱗を見せつつあるカロリナに、
箒は雪兎が重なって見えた。

『さてさて、今回のバトルフィールドは……これだ!』

『ポチツとな』

毎度の如くARプログラムがバトルフィールドを生成するのだが、今回は一風変わったステージだった。

『おっと、これは谷かな?』

『兄さんの資料によれば、グランドキャニオンを模したキャニオンステージとの事。このステージにはちよつとしたギミックがあるそうだ』

『ふーん、それは試合が始まってからのお楽しみで……それでは一回戦第五試合、試合開始!』

「はあ!」

試合開始直後、瞬時加速並みの速度で一気に距離を詰めた箒が雨月・空裂で斬りかかるが、カロリナはそれは読んでいたとばかりに背面のブライト・ストールと左腕のグスタフのシールドで両方を受け止める。

「くっ、やはり堅いな、そのISは」

「箒こそ……流石は紅椿の加速力。流石は師匠と大師匠」

カロリナもリリコンバージュでなければ間に合わなかったと自覚しており、改めてそのリリコンバージュを開発した雪兎と、紅椿を開発した束を称賛する。だが、カロリナも受けるだけでは無い。

「バリアバースト」

カロリナはバリアフィールドを形成すると同時にバリアを弾けさせ紅椿を弾き飛ばす。

『今のは?!』

『リリコンバージュのバリアバーストだ。近接戦闘で密着してきた相手をバリアを一瞬だけ広範囲拡げさせて弾き飛ばす技。格闘ゲームなどで使われるバリアバーストまんなまな技だ』

『仕切り直しとかには便利な技ね』

『リリコンバージュは防御を主において開発されたＩＳで、シールドやバリアを利用した攻撃も行える攻勢防御型とでもいうタイプだ。防御性能だけなら兄さんの開発したＩＳでもトップクラスの堅さを持っている。あれの攻略は中々面倒だな』

『……ほんとに雪兎君の作るＩＳって既存の概念を覆すＩＳばっかかね』

実況と解説がそんな話をしている間も筈は遠近問わず攻めるものの、リリコンバージュの防御を破れずにいた。

「堅い……ここまで攻めきれないとは」

「箒こそ、その剣術は流石」

一方のカロリナは右手のショットランスやグスタフ等も使いしつかり箒に食らいついてくる。近接で攻められそうになればバリアバーストやブライト・ストールのブースターで緊急離脱をしたり、逆に遠距離で攻めようとすればバリアを展開したままのブーストタックル等、多彩な攻撃で箒を翻弄してくる。そんな時、突然バトルフィールドに警告音が鳴り響く。

「何だ!？」

「……箒、あれ」

一度戦闘を中断した二人が見たものは崩れて塞がっていく谷だった。

『始まったようだな。このキャニオンステージは時間が経つと崖が崩れていくギミックが仕掛けられている』

『ちなみに、崩落に巻き込まれたら?』

『即失格だそうだ。よくスクロールアクションゲームにある迫ってくる壁や崩落しているステージを意識したらしい』

「……崩落から逃げつつ戦闘をするって事?」

「そうらしいな」

「迫り来る崩落から逃げながら箒とカロリナはお互いを見て一度距離を取って仕切り直す。」

『相手を攻撃して崩落に巻き込むもよし、二人で逃げ切つてから仕切り直すもよし、だそうだ』

だが、二人の答えは最初から決まっていたようで、崩落から逃げながら互いへの攻撃を再開する。

『あつ、一応アリーナ内部を一周する感じで崩れるんだ』

『ああ、崩れた場所は後でちゃんと再構成されるらしい』

そこからはキャノンボールファストさながらのレースバトルが展開された。時には相手の進路上の崖を崩して妨害したり、または直接相手を崩落している方へ弾き飛ばそうとしたり、白熱した試合が繰り広げられている。

「穿千！」

「バンカー！」

「これはどうだ！」

「シールドアクセラレーター！」

箒は絢爛舞踏がある為出し惜しみなく、カロリナは防御と回避を上手く使い分ける。

『意外に接戦！これは熱い試合になってきました！』

『普通ならば紅椿が絢爛舞踏を持つせいでリリコンバージュは不利だが、このステージならば崩落に巻き込まれた段階で失格。十二分に勝ち目はある』

そんな中、箒の瞳が一瞬だけ真紅に染まったのに気付いたの者は誰もいなかった。

「私は勝つ！」

「私だって負けない！」

「はああああ!!」

何度目かも分からない激突の末にとうとうリリコンバージュのエネルギーが尽きた。

『試合終了！勝者、篠ノ之箒！』

その白熱した試合に観客席の生徒達の歓声がフィールドを包む。

「……負けた」

「良い試合だった、カロリナ。また手合わせしたいものだ」

「……次は私が勝つ」

箒が再戦を願うと、カロリナは悔しそうにそう告げる。そんなカロリナに箒は少しだけ驚いた。

「どうかした？」

「意外と負けず嫌いなのだな、カロリナは」

「向上心を失った技術者はただの生産者」

「なるほど．．．．確かにカロリナは雪兔の弟子だな」

カロリナの言葉を聞き、箒は微笑みながら彼女が本当に雪兔の弟子なのだと再認識する。

「次の相手は鈴か．．．．」

そして、箒も負けられない次の対戦相手を思い浮かべた。

その頃、雪兔は．．．．

「全く、今日はお呼びでないお客様が大勢だな」

アリーナの外．．．．いや、正確にはIS学園近海で雪華を纏い、学園に迫る所属不明のISやEOSを見下ろしていた。

「さてさて、準備運動くらいにはなつてくれよう？」
そう言うと、雪兎は不敵な笑みを浮かべてその軍勢へと突撃した。

130話 蒼穹の支配者と紅き荒鷲 兔、準備運動開始

『一回戦も残すところあと二試合！』

『今回のカードはこちら』

『一回戦第六試合！青コーナー、英国貴族の誇りをここに！セシリアオールコット！』

その紹介と共に優雅に現れたのはブルー・ティアーズ・ガブリエルを纏うセシリア。その姿はガブリエルの名に恥じぬ蒼き天使。

「まだ、まともな紹介で良かったですわ」

今までと違い変な紹介で無い事に安堵するセシリア。

『赤コーナー、イタリアの紅き荒鷲！アレシアロッター！』

セシリアと違い、雄々しく飛び登場するアレシアの姿は確かに荒鷲だ。

「この子の名前もロツソ・アクイラだし、間違つてはいないわね」

アレシアも、専用機の和名呼びなのでそこまで拒否感は無さそうだ。

『さあ、この二人が対戦するステージは……これだ！』

『ポチツとな』

ARプログラムが二人の対戦の舞台に選んだステージは……少し緑色の入った空

に大小様々な島々が浮かぶ幻想的な浮島ステージだった。空賊や武器に変身する女の子が出てきそうな気がする。

『これはまたファンタジーなステージが……』

『何でも兄さんが好きだった漫画の世界観を投影したステージなんだとか』

『よくよく思えば今までのステージも雪兎君が手掛けているのよね？』

『システムのな方面は束さんが、ステージ設定は兄さんがやっていたそうです』

そんなステージではあるが、空戦をメインとするこの二人にはピッタリなステージである。

『このステージでしたらお互いに持ち味が活かれますわね』

『確かに』

『それでは一回戦第六試合、試合開始！』

試合開始と共にセシリア、アレシアの双方は槍と剣を構え一気に距離を詰める。すれ違い様に互いに一撃を受けたが、アレシアはセシリアの行動に驚きはしたが、すぐにその場を離れた。何故ならセシリアがいつの間にか展開していたビットがアレシアを狙っていたからだ。

『突撃しながらビットを展開するとか随分と器用な事を』

『私だって昔のままではありませんわ』

入学当初はビットを飛ばしている間はビットの制御に集中せざる得ず、本体が無防備になってしまいがちという欠点を抱えていたセシリアだが、この一年で雪兎の改修によるハイパーセンサーの強化という補助がありながらもビットの制御と他の行動を同時にこなす並列思考^{マルチタスク}を習得したセシリアは本当に厄介な射撃手へと変貌した。

「あくもう！本当にやり難いんだから！」

ビットとライフルからの同時攻撃を紙一重で回避しつつ、アレシアは蛇腹剣「ヒートウィップ」を自在に振るいビットを牽制する。

「それは私への称賛と受け取らせていただきますわ」

だが、セシリアのビットは止まらない。むしろ逆にビットはビームの刃を展開してヒートウィップに向かってきたのだ。

「げっ」

ビットにヒートウィップの軌道を逆に制限され出来た安全圏から残りのビットが狙い射つてくる。しかも、その射撃は偏向射撃。これにはアレシアも堪らずその場を離脱する。

『うわあ……偏向射撃については聞いてたけど、セシリアちゃんのガブリエルだっけ？あれ、えげつないわね』

『まだあんなものではない。あのISの本気は』

『えっ? そうなの?』

『私も以前似たようなISを使った経験があるから言わせてもらおうが、今のセシリアはオルコットは蒼穹の支配者という名が相応しいだろう』

すると、セシリアはランパードランチャーの穂先を開きボウガンのような形に変形させる。その穂先の内側にはライトニングアサルトのガングニール同様無数の砲口が存在した。

『えっ? まさか……』

『そのまさかだ』

「スプレッドイレイザー、いきますわよ!」

ビットを含む全砲門から放たれたビームが四方八方からアレシアのアクイラを追う。そう、今のセシリアは動きを止めればこの拡散ビームの全てを偏向射撃で操る事が出来るのだ。

「こんなのカロリナのりりくらしいの防御性能無いと凌げないってえ〜!」

そんな泣き言を言うアレシアだが、今のところはそのビームを回避し続けている。それが可能な時点でアレシアも立派に兎一味の仲間と言える。

「流石はアレシアさんですわ。でも、これで終わらせませすわ……私とこのブルー・ティーズ・ガブリエルの葬送曲^{レクイエム}で!」

セシリアはそんなアレシアに追い討ちとしてビームブレードを展開したビットを偏向射撃の合間を縫うように飛ばす。

「ちよっ!!?それは流石に無理だって!!? アレシア・スーパーピンチ A・S・P! A・S・P!! きやああああ!!?」

『……まるで鳥籠バドケージね』

『勝者、セシリア||オルコット』

「優雅に華麗に大胆に、ですわ」

成長したセシリアは思った以上にとんでもなかった。

その頃、雪兎は自分の担当区画に侵入した所属不明機の軍勢をほとんど行動不能にしておしまっていた。無人機だったEOS等は原型を留めていないレベルで斬り刻まれス

クラップと化している始末だ。

「なんだ、準備運動にもなりやしねえな」

そう言つて雪兎は手に持つウイザードのハルパーでもバルニフィカスのスラツシヤードでもない禍々しいデザインの鎌を肩にのせ、所属不明機達を見下ろす。

「ば、化け物め……」

「その化け物の根城に手出したんだ……当然覚悟は出来てんだろうな？」

いつになく冷たい表情を見せる雪兎に所属不明機の搭乗者達は冷や汗が止まらない。

「さてと、次は簪と一夏の試合だし、さつきと片付けるか」

すると、雪兎の左腕にオレンジ色の光のパーツが出現し、砲身を生成する。

「お前達のＩＳコア、いただくぞ」

「「「うわあああああ!!」」」

そして、その砲身から放たれた光が所属不明機を貫き、外傷を与える事なくそのコアを奪い雪兎の手へと回収されていく。

「ひく、ふく、みく、よ、つと大量大量」

「あ、悪魔だ……」

その雪兎を見てEOSを纏っていた一人がそう呟くと、雪兎はチツチツチツと指を振り訂正する。

「悪魔じゃねえ、こいつは……憑^{アバター}神だ」

131話 ヒーローの条件 兎、観戦する

その日、IS学園を襲撃したのは亡国機業の部隊の一つ・シャドウズと呼ばれる者達で、モノクロームアバターやゾディアックノワールのように秀でた者はいないが、数が多い部隊だ。各国に潜入している工作人員の過半数がこのシャドウズのメンバーなのだ。そのシャドウズに今回下された命令は「トーナメントでアリーナに人手が集中している隙にIS学園に忍び込み様々なデータを盗み出す事」。だが、それも兎達には筒抜けで、当日はあえて警備を少し手薄にしてシャドウズを学園に誘い込んだのだ。なお、アリーナは完全防音の為、シャドウズの事を知るのはい部の者だけだ。

「この程度の戦力で私を抜こうとは笑わせる」
「こんなものですか」

雪兎はユーリをお供に東を担当していたが、他の区域を担当していたのは北が千冬と真耶の教師コンビ。

「ふん！口ほどにも無い」

「やっぱ僕達は強い！」

「ほとんどを王とレヴィに狩られてしまいましたね」

西にはユーリを除くマテリアルズ。

「うーん！久しぶりに思いつきり動いたなあ」

『全く、弟が弟なら姉も姉だな』

南には雪菜と正体を隠す為にボイスチェンジャーを使ったイヴァン、とそれぞれ雪兎と変わらぬ状況を作り出している。ちなみに一番数が少なかったのは東らしい。

「天野、後始末は教員がやっておく。お前はそろそろアリーナに戻っておけ」

一回戦の終わりの近付いてきたので、雪兎は一度アリーナに戻らせ、代わりに引き続きユーリ残りが、そしてもう一人アリーシャが東の担当に付くことになっている。

「それじゃあ、アリーシャさん、後は任せます。ユーリも頼む」

「よろしくね、ユーリ」

「はい！」

雪兎がアリーナに戻ると、丁度一回戦最終試合が始まるところだった。

『一回戦最終試合のカードはこちら！青コーナー、私は守られる側じゃない！守る側だ！更識簪！』

簪は今回、剣山を装備していた。白雷も暴風も今の白式には効果は薄いと判断したのだから。

「私だってヒーローになってみせる！」

『赤コーナー、友と戦う為には負けられない！織斑一夏！』

対する一夏は入学当初の頃と比べ雰囲気が変わりつつあった。もう、零落白夜に頼りきりだった頃の一夏はいない。

「悪いが簡単には負けられないぜ、簪。俺は勝ち抜いてあいつとどこまでやれるのか試したい。だから……最初から全力だ！」

エナジーウイングを全開に開き、煌月白牙と雪片参型を構える一夏。

「それは私も同じ……あの日、私達を助けてくれた彼に、私もここまで出来るように

なったって証明する！」

一方の簪も、全身の追加総合からブレードを展開し、ミサイルもすぐに発射出来る体勢を取る。

「だったらなおのこと恥ずかしい試合は出来ねえな」

「うん、私も一夏に全力で挑む」

『今回のステージは……これだ！』

『ポチツとな』

今回ARプログラムが生成したステージは二人もよく知るステージだった。そこは前に雪兎達が迷い込み、己の正義の為に戦っていた友と出会った場所……そう、ジェナス達アムドライバー達と出会ったあの廃墟だった。

『ほう、懐かしいステージが出たな』

『そうなの？』

『ああ、ある意味この二人にはうってつけのステージだ』

『マドカの言う通りだな』

『うん、彼らはヒーローだった』

『強い信念を持ってた』

ジェナス達アムドライバーは二人にとっても大きな影響を受けた者達だった。

『それでは一回戦最終試合、試合開始!』

「GET RIDE!」

そして、二人は示し合わせたかのようにジェナスのいつも言葉を真似て激突した。

「はっ!」

「ていつ!」

すれ違い様に放たれた一夏の斬撃は式式の肩に装着されたシザーズユニットの右側によつて阻まれ、逆に左肩のシザーズユニットによる攻撃はエナジーウイングによつて防がれる。

「山嵐!」

「させるか!白凰!」

『任された!』

簪が距離を取つて山嵐を放てば、一夏は白凰のエナジーウイングによる拡散弾でそれを迎撃する。だが、簪が放つたミサイルはスモーク弾で、視界を奪われた一夏に簪が砲撃槍に改修された夢現・夢幻で斬り掛かるが、一夏もそれを読んでいたのか雪羅式型のシールドでそれを防御した。

『ここですモーク!』

『エナジーウイングでの迎撃を予想してあえて中身を替えていたのか』

「まだ！春雷！」

それは簪も予想済だったようで、瞬時に0距離で春雷を叩き込み一夏を吹っ飛ばした。

『おっと、一夏君が吹っ飛ばされたが・・・簪ちゃんのシールドも削れてる!?!』
「くっ、でも、ちゃんとお返しはしたぜ？」

咄嗟にエナジーウイングでガードしたものの、完全には防げなかったようで、一夏のシールドエネルギーが削られていた。しかし、一夏もただやられてはいなかった。射たれた直後に雪羅を砲撃モードにして荷電粒子砲を食らわせていたのだ。

「あいつらはんと強くなったなあ．．．．」

アリーナの観客席の入り口付近から一夏と簪の試合を眺めつつ、雪兎はそう呟く。少し上から目線なのは今まで指導側だったのでしようがないとはいえ、雪兎から見ても一夏達は最初に比べて一回りも二回りも強くなっている。おそらく、シャルロットだけではなく、一夏達でもオータムを完封出来る実力があると雪兎はみている。

「これならもう俺が保護者面する必要ももう無いな」

そう、今まで雪兎は一夏達を何処か守らねばならない対象としてみていた節があった。雪兎が何かと一人でやってしまうのはそういうところの原因があったのだ。だが、先のシャルロットからの宣戦布告や一夏や簪の言葉を聞いて雪兎は彼らが自分のいるステージまで上がってこようとしているのを感じたのだ。もう転生者だという秘密もこれから起こる事へのアドバ^原ンテ^作ージ^識も無い今、雪兎はようやく天野雪兎という一人人として一夏達に向き合えると思っている。

「だから、勝ち上がってこい．．．．一夏」

そして、一夏が雪兎との戦いを渴望しているように、雪兎も一夏との戦いを心待ちに

していた。

「やるな、簪」

「一夏こそ」

その後も全力でのぶつかり合いを繰り返し、一夏と簪のISは双方共にもうボロボロだった。しかし、二人の闘志は尽きるどころか未だに燃えている。それはお互いのIS

も同じだった。白式と打鉄式式は共に倉持技研で開発され中途半端になっていたのを兎師弟が完成させたという経緯を持つ姉妹機のような関係にある。そのせいか、白式と式式は張り合う事がある。今回もお互いの主の為に普段以上の力を発揮している。

「白式や白凰もやる気だな」

「式式も同じ」

そこからは刀と刃のぶつかり合いが続く。

『激しい近接戦！あれ？打鉄式式って高機動砲戦型だったわよね？あれ？砲戦型？』

『考えるな、感じろ』

だが、徐々に簪が押され始めてきた。原因は白式が白凰とのデュアルコアである故の機体出力の違いだ。それに式式は機動力を主とした砲撃型として調整をしたISである為、近接戦をメインとする白式にはどうしてもパワーは劣るのだ。

「でも、もう私は諦めない！」

簪の脳裏を過るのはいつも見ているヒーロー達の勇姿。彼らは途中で挫折する事はあるけど誰一人として諦めはしなかった。ならば、そのヒーローを志す簪も諦める訳にはいかない。

「お願い！打鉄式式！」

そんな簪に伝えようと式式は限界まで出力を上げるも・・・

「エナジーウイング、出力最大！」

一夏もエナジーウイングの出力を上げ、簪を強引に推しきる。

「くっ！」

「今だ！蒼焰の太刀！」

そして、簪の夢幻を跳ね上げ、零落白夜を纏わせた煌月白牙を一閃し、シールドエネルギーを削り切った。

『試合終了！勝者、織斑一夏！』

「……負けちゃった」

ARプログラムが解除され、普通のアリーナに戻ったその地面にゆっくり着地しながら簪は悔しそうに涙を流す。

「簪……」

一夏はそんな簪に近付くとISを解除し、手を差し伸べる。

「いい試合だったぜ、簪」

「一夏……」

簪には一夏はやはりヒーローに見える。どんな時でも絶対に諦めない簪が理想とするヒーローに。

「簪の分も、絶対に勝ってみせるから」

最初は式式の事で一夏を逆恨みしていた簪だが、雪兎が式式を完成させてくれ、一夏が逆恨みの件を打ち明けてもすぐに謝罪をしてくれた為、原作のような拗れた出会いではなかった。そのおかげか、簪は素直に一夏への憧れを抱くようになっていた。まあ、簪達が既に壮絶な争奪戦を繰り広げていた為、そこに加わる勇気は持てなかったが、異性としてではなく目的としての憧れは今も続いている。

「うん、絶対だよ?」

「おう!」

そう言って二人は互いの拳を静かにぶつけ合う。その姿はアニメのヒーローのようで簪は自然と笑みを浮かべていた。

132話 恋人対決！雪兔VSシャルロット！ 兔、解 説される

『一回戦の全試合が終了しました』

『二回戦は明日からだ、明日の試合の対戦表だ』

二回戦

第一試合 天野雪兔VSシャルロットIIデユノア

第二試合 宮本聖VS神宮寺晶

第三試合 風鈴音VS篠ノ之箒

第四試合 セシリアIIオルコットVS織斑一夏

『第一試合から激戦の予感ね』

『あの二人の全力か・・・いかん、背筋が』

一回戦が終了した段階でその日の日程も終わり、それぞれ傷付いた専用機は一度メンテナンスの為に学園が預かる事に。メンテナンスの担当は束なので翌日には元通りになっている事だろう。

「明日、だね」

共に寮へと帰る雪兎とシャルロット。そんな中、シャルロットは明日の試合の事を口にする。

「手を抜いたら僕、雪兎の事嫌いになるから」

「そんな事しなくても手は抜かねえよ……そもそも今のシャル相手に手抜くとか無理だ」

「そ、そっか」

「彼女だろうが、相手なら俺は容赦はしねえ……ついてこれるか?」

「絶対に食らいつくよ」

雪兎がシャルロットの意思を確認すると、シャルロットは改めて雪兎に宣言する。必ずそこに辿り着くと。

「楽しみにしてるぜ、シャル」

そして、翌日。

『本日もお集まりいただきありがとうございます！実は本日も黛薫子がお送りします。そして、今回の解説者は……』

『はろはろく、天才の束さんだよ』

実際は昨日と同じく薫子が担当する事になったが、解説席にはこのような場をあまり好まないはずの束の姿があった。

『束博士、本日はどうしても話しておきたい事があるとおっしゃってましたが……』

『それは第一試合の途中に話すよ』

『それでは早速二回戦第一試合を始めます。青コーナー、優勝候補筆頭！誰が呼んだかラビット、ディザスター、雪兎の皮を被った災害！天野、雪兎！』

薫子のコールで登場したのは最初からアドヴァンスドのワールド・フレイムを纏った雪兎。その姿に雪兎の本気具合が伝わる。

「やっと俺の試合だぜ……ってか、昨日の準備運動無駄になったな」

他の試合が思いの外白熱した為、日程がズレたらしい。

『赤コーナー、兎あるとこ彼女在り!学園公認カップルの片割れ!シャルロットIIデュノア!』

対するシャルロットも最初からライトニング・アサルトで登場。だが、若干顔が赤い。明らかに薫子の紹介のせいだ。

「が、学園公認って……いつの間に」

これに関しては付き合い出した当初からだ。そして、文化祭やキャノンボールで全国レベルで知れ渡ったらしい。

『さあ、この二人のバトルフィールドは……これだ!ポチつとな』

今日もARプログラムがバトルフィールドをランダムで決定する。そのバトルフィールドは……

『な、なんじゃこりや!?!』

それはステージ一面に巨大な水晶がいくつも生えた幻想的なステージだった。

『水晶ステージだね。あ、この水晶は光学兵器を乱反射させる性質があるから上手く活用してね』

つまり、下手に光学兵器を使うと、自分もダメージを負うリスクがあるステージらしい。セシリア辺りが一番困るステージだろう。

「水晶は破壊出来るからそれで反射パターンを変える事も出来るステージだったな……自分で作っておいてなんだが面倒なステージに当たったもんだ」

「でも、雪兎は光学兵器メインのバックそんなに使わないよね？」

「光学兵器っていうとこのビームガンにこいつとイエーガーのバスターライフル、ガンナーのビームガトリングにフォートレスのハルバートカノン、それからそのライトニング・アサルトのガンングニールくらいか？ そういや」

「クロスキャリバーにもあるね」

ルシユフェリオンは熱エネルギーだし、アンジュルグのイリユージョンアローは物質化しているので反射しないそうさ。

『それでは二回戦第一試合、試合開始！』

試合開始直後、雪兎とシャルロットはいきなり装甲切換を使い、それぞれ白月とコスモスにバックを展開。雪兎はネオウイザード、シャルロットはネオガンナーだ。

「いくよ、雪兎！フルブラスト！」

シャルロットはいきなり全武装を起動させビームと実弾、ミサイルを乱れ射つ。

『ええ〜!?説明聞いてましたよね!?確認してましたよね!?』

『にやははは！流石はゆうくんが見初めた娘だねえ〜』

水晶の説明をしたばかりだというのに行われたシャルロットの行動に薫子は驚愕、一

方の束はその真意を知ってか笑っている。ステージは実弾とミサイルで碎かれ飛び散った水晶にビームが反射し、その閃光と硝煙で何も視えなくなってしまう。しかし、閃光と硝煙が晴れ現れたのは自身を氷の球体で覆いガラスパーでビームを凌ぎ切った雪兎と、全弾発射後にパックをネオフォートレスの重複展開に切り換え防ぎ切ったシャルロットの姿だった。

「初っぱなから飛ばすなあ、シャル」

「これくらいしないと雪兎の意表は突けないからね」

『あれで無傷とか・・・もう、このカップル何でも有りね』

その二人に戦慄する薫子。会場にいる観客達も同じ気持ちだろう。一夏達からしてみれば「やっぱりな」と呆れるだけだが。

「だったらこっちはこれでいくか」

すると、雪兎はステージの上へ移動し、コールド・フレイルムからルシユフェリオンに切り換え、熱エネルギーの誘導弾・パイロシューターを無数に展開する。

「パイロシューター・ジェノサイドシフト」

『出た、殺意高いやつ』

『相手彼女ですよね!?!』

「fire」

その瞬間、絨毯爆撃も比にならない飽和攻撃がシャルロットを襲う。しかも、パイロシューターが一つ放たれる毎にすぐ新しい弾が展開する為、ほぼ隙の無い爆撃が可能だが、雪兎がこれで終わる訳が無い。

「デイザスタアアアア、ヒイイイトツ!!」

そこにドライバーで極太のデイザスターヒートをぶつばなす。手加減はするな、とは言われたがやり過ぎな気がする。

『アリーナが普段のより頑丈だからってやり過ぎだろー!』

※普通のアリーナだったら観客席のシールドぶつ壊れて吹き飛んでます。

『でも、試合は終わってないよ?』

『えっ? あつ、本当だ』

いくらシャルロットとはいえあれでは無事では済まないと思われるが、試合終了のコールが鳴らないのでシャルロットは無事らしい。しかし、下にはシャルロットの姿は視えず、地面があまりの高温で結晶化しているのが見えるだけだ。

『シャルロットちゃんはどこに?』

雪兎は何かに気付いたらしく、咄嗟にドライバーを盾にして上から奇襲してきたシャルロットの攻撃を防いだ。

「惜しい! いけると思ってたんだけどなあ」

「そういう事か・・・まさか、バルニフィカスそれまでものにしてたとはな」

「レヴィに特訓付き合ってもらったんだ」

てつきり下にいるものだと思われたシャルロットは何とバルニフィカスを纏いいつの間やら雪兎の上に移動していた。どうやらバルニフィカスのスピードである弾幕を掻い潜り、いつの間にか上に移動していたらしい。

「レヴィのやつ、いつの間に・・・」

「雪兎がああ龍我って男子と一緒にだった時だよ」

「シャル、地味に根に持ってたのな、それ・・・」

そんな会話をしつつもスラツシャーとドライバーをぶつけ合う。

『まさか!シャルロットちゃん、あの鬼のような弾幕を回避していたあ!』

『バルニフィカスは瞬間速度ならアドヴァンスド最速だからね、ネオイエーガーも併用してるみたいだし、アレくらいは当然かな』

「当たったら一発で終わったかもしれないってのによくやる」

「レヴィ曰く、当たらなければどうってことない、だよ」

「だったらこいつはどうだ?」【SK:ストームカイザー】

超高速で動き回るシャルロットに対し、雪兎も隠し玉であった新型アドヴァンスド・ストームカイザーで対抗する。

「そ、そのアドヴァンスドは……聖のウエーブ・ライダーの」

「ああ、それにあつアドライダーの世界ちの蓄積データもな！」

ストームカイザーは聖のウエーブ・ライダーのバイザーボードと同じくボードと簡易アーマーで構成されたアドヴァンスドで、ベースになつてゐるのはジェナスが最初に使つたバイザーのボードバイザー「ワイバーン」だ。そして、当然ボードモードとブリガンデイモードに切り換えが可能だ。性能はスピード重視でライトニング・アサルトと被るが、ライトニングは射撃、ストームカイザーは近接寄りに調整されている。またネオシリーズからチューブチャージシステムを採用している。また、ボードモードでは他のアドヴァンスドとの複数装備でも負担が少なくなるようになってゐる。

「くつ、本当に雪兎は敵に回すと厄介だね」

「それは褒め言葉として受け取つておくさ」

そんな激しい空中戦を見て、観客の一人が「チートだ」と呟いた。

『ん？今、聞き捨てならない言葉を耳にしたね？ゆーくんがチート？』

それを束は聞き逃しはしなかつた。

『これは私が話したかつた事とも関係あるし、ここで話しちゃおつか』

そして、威圧感のある笑みを浮かべながら束は話し始めた。

『ゆーくんは確かに私の弟子だし、ちーちゃんの教えも受けてるから強いよ？でもね、決

してチートなんて呼ばれる存在じゃないよ』

その束の言葉に観客達は疑問を抱く。無理も無い。雪兎は普段から色々な事をやっております、その存在が皆からすればチートみたいなものだったからだ。

『チートってのはね、大した苦勞もせず力を得た奴らの事だよ。ゆうくんはね、元々頭こそ良かったけど、強くなると全くなかったんだから』

そう、雪兎は束の言う通り篠ノ之神社にある道場に通うまではただの前世持ちというだけでしかなかった。

『白鳥って知ってる?あれ、優雅に泳いでるように見えて水面下では必死にばた足してるんだよ?』

『つまり、雪兎君はあの力を人知れない努力で得たど?』

『そうだよ。ゆうくんの元々の才能はあの鋭い観察眼とそれに対する対応を瞬時に導く判断力、それとそれを上手く活用する高速切替だけ。後は全部ゆうくんが自分で文字通り血反吐を吐いてまで習得したものだよ』

『な、なるほど……』

『あと、ゆうくんは確かに強いけど、それは一流として……同じ分野では東さんやちーちゃんみたいな超一流には絶対届かない。あつ、剣術だけは別だよ?ちーちゃんが直々に仕込んだんだから』

『超一流には届かない?』

『そつ、人間には許容量つてのがある。東さんやちーちゃんみたいな例外を除けば人間の許容量なんてたかが知れてる。ゆーくんはね、その限界ギリギリのところにいるのさ』

東が雪兔を評価するのは前世知識からくる発想力もだが、この限界ギリギリまで自身を磨き続けた事だった。自分には届かないけれども決して諦めななかつたその点において東は雪兔を他の凡人とは違う括りにカテゴリーしている。

『そして、超一流と同じ分野で届かないとしたらどうすればいいと思う?』

『それは別の分野で勝るしか・・・あつ!?雪兔が相手のメタを張るのは!』

『おつ、凡人にしては察がいいね。その通り。ゆーくんは超一流に勝つ為の手段として相手の弱い部分で勝つ。そのために剣術以外の他の戦い方も多く習得したんだよ』

超一流になれないなら、その超一流が一流以下の分野で勝てばいい。雪兔の基本戦術はここから生まれたのだ。

『まだわかつてない凡人どもにとく・く・ベ・つに分かりやすく説明するよ?とりあえず苺に例えようか、東さんは天然物の生でも美味しい苺、ちーちゃんは遺伝子組み換えとかで出来た東さんと同じくらい美味しい苺。そして、ゆーくんはね・・・生では勝てないから色々調味料とか使ってジャムにしてやつと東さん達の足元くらいの苺つてこ

と』

その例えで多くの観客はようやく納得した。雪兎も好き好んでメタ戦法を使っているのではなく、超一流と呼ばれる者達に並ぶべくそれを使っていたのだと。

『あと、本当のチート・・・よく二次小説とかである神様転生ってやつ。神様に力貰って俺TUEEEしてるアレ。アレをさっきの例えに当てはめるなら苺の味比べしてるとここに最高級ステーク持つてくる感じ。判る?完全に別物なの。貰い物の力でそんなのしてて恥ずかしく無いのかな?あのカスどもは』

全てを自分の手で得てきた束からすれば特典持ち転生者は非常に不愉快な連中らしい。

『さてと、長々と話してる間にゆうくん達は決着がつきそうだね』

その頃、雪兎とシャルロットの戦いは機動力戦からパックを目まぐるしく換える読み合いに変わっていた。

「イリユージョンアロー！」

「風刃閃！」

シャルロットがアンジュルグで矢を放てば、雪兎はヴァイサーガの風刃閃でそれを切り払いつつカウンター。

「まだだよ！」

それを読んでいたネオフォートレスのアイギスを身代わりにし、クロスキャリバーの砲戦モードで砲撃。

「甘っ！」

それすら読んでいた雪兎はネオウイザードのグラスパーでそれを反射し、ソウルゲインに切り換えて瞬時に距離を詰める。

「触れれば切り裂く！」

放つのは肘のブレードを伸ばし切り裂く技・舞朱雀。

「くっ！」

そのブレードにクロスキャリバーのサブアームと腕の武器を切られ、シャルロットはすぐにバルニフィカスに切り換え距離を取るも玄武剛弾でフォートレスのパーツを砕かれてしまう。

「やっぱり雪兎は強いや」

「これだけ善戦しといてよく言うよ・・・本当に強くなったな、シャル」

雪兎と違いまだ使えるアドヴァンスドに限りがあるとはいえ、ここまで善戦された事に雪兎は笑みを浮かべる。

「だから、こいつを使うよ・・・来い、俺はここにいるー」

そして、雪兎はそんなシャルロットに敬意を評しとあるアドヴァンスドを展開する。

「A t S : 憑神^{アバター} t y p e スケイス」

それこそ、シャドウズの一部隊を壊滅に追いやったあの禍々しい大鎌を持つアドヴァンスドだった。

「ア、バター?」

「呆けてる暇はねえぞ?」

そのアドヴァンスドに驚くシャルロットだったが、背後から聞こえた雪兎の声に慌ててスラッシュャーで防御するも、あっさりと雪兎の大鎌に吹き飛ばされる。

「っ、強い・・・」

「スピードはバルニフィカスに劣るが攻撃力はこっちの方が上だから、なっ！」

距離を置くと左手から球状の雷撃弾を放ち、距離を詰めれば大鎌による攻撃。しかも、慣れないバルニフィカスで戦うシャルロットに雪兔はスケイスを完全に操り追従してくる。

『シャルロットちゃん、いくつかのバックを破壊され一気に不利な状況に！』

「まだ、まだ僕は負けてない！」

それでもシャルロットは諦めずスラツシャーで反撃するが、雪兔はスラツシャーよりも巨大な大鎌を難なく操りそれを受け流す。

「悪いが今回は俺が勝つ」

必死に食らいつくシャルロットを雪兔どんどん追い詰めていき、とうとうスラツシャーも耐えきれず砕け、大鎌の一撃がシャルロットのシールドエネルギーを削り切った。

『し、試合終了〜！勝者、天野雪兔！激闘を制したのはやはりこの男だった！』

ダメージレベルが大きかったのか、試合が終わるとリヴァイヴⅡは解除され、シャルロットは空中に放り出されるが、雪兔がちゃんとキャッチする。お姫様抱っこで。

「よつと」

「あ、ありがと、雪兔……」

最初はお姫様抱っこに顔を赤くするシャルロットだったが、次第に試合に負けた悔しさが滲み出してくる。

「負けちゃったね・・・」

「そんな顔するなよ、シャル」

「でも・・・」

「シャルは十分強かったさ・・・俺が安心して背中を任せられるくらいには」

「雪兎・・・」

聞きたかった言葉を雪兎に言われ、シャルロットの目に涙が滲む。

「でも、もっと強くなれ、シャル・・・何時か俺を倒せるほどに、な」

「うん!」

シャルロットは雪兎に更なる成長を約束し、二人はピットへと戻っていった。お姫様抱っここのまんまで。そのせいでしばらくの間はシャルロットがそれをネタに弄られる事になるのであった。

133話 晶VS聖、流星煌めく 兎、彼女と観戦する

『え、篠ノ之束博士は都合により退席され、新たな解説者としてこの方においていただきました』

『事務員のイヴァンニルギースだ・・・何故私が』

束の後釜として解説席に着いたのはイヴァンだった。

『いや、イヴァンさん、生徒から人気ですし』

『ここはISの操縦者を育成する学園だろうに・・・』

そんな呆れた声を出すイヴァンだが、千冬の罵倒すらご褒美にするような生徒がいるこの学園の生徒にイヴァンのようなイケメンの罵倒もご褒美にしかない。

「イヴァン、苦勞してんな」

「うん、僕も転入してきた時は本当にビックリしたからイヴァンさんの気持ち判るなあ」
観客席に戻ってきた雪兎とシャルロットはイヴァンの苦勞を何となく理解し、やれやれという顔をしていた。

『では、二回戦第二試合を始めます。青コーナー、今回もその手に勝利を掴めるか？神宮寺晶！』

「相手は聖だ……。本音のような消化不良な試合にはならんだろう」

やはり本音の自爆は晶としては不満だったようだ。

『赤コーナー、一回戦の勢いに乗り二回戦も制するのか？宮本聖！』

「晶かぁ……。あの万城君とやりあえる近接戦闘能力は危険だよねぇ」

何かと龍我と接する機会が多かった聖はそんな龍我と生身で互角だった晶を警戒する。

『そして、今回のバトルフィールドは……。これだ！ポチつとな』

いつものようにARプログラムがバトルフィールドを生成する。生成されたのはマングローブの水没林ステージだった。

「私、水のステージに縁あるのかな？」

前のステージが海上ステージだった聖がそんな事を考える一方、晶は苦い顔をしていた。

「何故かは知らないが嫌な予感がする」

そう、何故かこのステージを見た時、晶の第六感とも言うべき何かが警鐘を鳴らしていたのだ。まるで先の本音戦のような何かが起きるような予感が……

『それでは二回戦第二試合、試合開始！』

試合が始まると、両者は迷路のようになっていいるマングローブの水没林に入っている。水没林を無視して空中戦という選択肢もあったが、それは二人とも選ばなかったようだ。

『それにしてもこのARシステム、何ステージあるんでしょうか？』

『聞いた話では136通りあると聞いたな。ありとあらゆる状況を想定し、おまけでネタステージも作つたと言っていた』

『恐るべし、兎師弟……』

すると、水没林から戦闘音が響く。どうやら晶と聖が遭遇し激突したようだ。

「やはりそれできたか！」

「だって、晶に近付かれるの嫌だし」

聖が今回セレクトしたバイザーはシャープガンナー。近接戦闘メインの晶を近付けさせないためのセレクトだ。それをいきなりアーマードモードにしてぶっぱなしているのを見て観客席の生徒の一部が苦い顔をしている。それも無理は無い。何故なら彼女達は体育祭での弾幕を間近で見っていたのだ。そこにセシリアのビットと簪の山嵐……トラウマになっていても不思議は無い。

『出ました！トラウマ量産弾幕！』

『あれにはジェナス達も引いていたな……』

あちらでの事を思い出し遠い顔をするイヴァン。酷い時はそこに簪やタフトも加わり、イヴァンすら敵に同情した程だ。

「くっ」

「ほらほら！逃げてばっかじゃ勝てないよ！」

晶はマングローブの林に隠れながら機を窺うも、聖は両手のヒートチャクラムで次々と林を伐採してはミサイルで爆撃してくる。

『マングローブを伐採とはな』

『ARだから出来る事ですね』

マングローブはエビの養殖場のためや家畜の飼料として伐採され減少が問題視される植物で、海の水質浄化や津波被害の軽減等の事からも再生に力を入れている。そのため現実でそんな事をすれば問題になりかねないのだ。

「だが、広くなれば!」

周りのマングローブが伐採された事で十分に広さを確保出来た事を確認し、晶は瞬時に加速でチャクラムを回避しつつ聖に接敵し、

「虎咆穿!」

右手の掌から圧縮空気砲を放ち、まずは両腕のガトリングガンを破壊する。

「しまっ!?!」

「まだだ!」

更に追撃として足のブレードや両手のクローを展開しての連続攻撃をお見舞いする。だが、聖も一方的にやられるばかりではない。

「パージバースト!」

装備の過半数を失ったシャープガンナーを勢いよくパージして晶を怯ませ、その隙に聖は新たに呼び出したバイザーに飛び乗りその場を離脱する。

「ふう、間一髪だよ……ん?」

晶から逃げ切り一息ついていた聖だったが、一瞬だけウエーブライダーが光ったかと

思うと形状が変わっていた。そう、ここにきてウエーブライダーもニンテイルと同じく土壇場で二次移行したのだ。これで晶達新規組を除く二次移行していないISはそもそも二次移行を想定していない紅椿と打鉄式式だけになった。

『あーつと！ここで聖ちゃんのウエーブライダーまで二次移行してしまった！』

『……二次移行とはこんなにポンポンとするものなのか？』

『しませんって！兎印のISがおかしいんです！』

元々世界でも十機程しか存在しなかった二次移行機だが、雪兔の雪華を筆頭に白式、リヴァイヴII、甲龍、ブルー・テイアーズ、シユヴァルツエア・レーゲン、ニンテイル、そしてウエーブライダーと今年だけで八機ものISが二次移行をするという異常事態が発生している。その全ISが何らかの形で雪兔の手が加わったISである。

「やっぱり二次移行か！」

試合前から何となくこうなるのを予感していた晶は「どうして私の試合ばかり！」と絶叫しているが、観客席でも一人絶叫している人がいた……雪兔だ。

「毎回毎回モニター用の回線使って人のデータベースからデータ引っこ抜いてんじやねえええええ!!」

そう、今回もウエーブライダーの二次移行に雪兔のデータベースのデータが利用されたのだ。今回使われたデータはマドカのフツケバインにも使われたヒュツケバイン系

のデータとアムドライバーのデータの二つ。二次移行後のウエーブライダーは本体は背面に小型のアクティブブラスターが追加され、全身に小型のスラスタターが付いた程度なのだが、新たに生成されたバイザーが今までとは大きく違ったのだ。

「これって、シーンのエッジバイザーに似てる」

そう、今まではボード型で上に乗るだけだったバイザーボード。今回の新バイザーボードは乗り込めるのだ。しかも、そのバイザーボードは先程晶に破壊されたシャープガンナーの後継機と思われ、エッジバイザーを代表する双剣デュランダルの部分がバスターソードを縦に割ってそこに砲身を挟んだかのようなエッジブラスターになり、他にも左右にダブルガトリングガンやミサイルコンテナ等の火器を詰め込んだもう戦車のようなバイザーだった。

『もう、何でもありね、兎印のISSは……』

『あれはもうISSと言っているのだろうか？』

もうISSというよりビークルである。だが、驚くのはまだ早かった。

「うわぁ……流石の私もこれはドン引きですよ」

『え、せっかくマスターの為に選んだのに……』

「……」

『マスター？』

「えっと、もしかして、ウエイブライダー？」

『うん！ やつとお話できたね、マスター』

「雪兎君や一夏から話には聞いてたけど、まさか私もISと話せるようになるなんて……」

何と聖は雪兎や一夏ですら三次移行後からしか出来なかったISコアの人格との自由な意識疎通まで出来るようになっていた。

「まあ、細かい事は試合が終わってから雪兎君に相談しよう」

『マイスターと？』

「そつ、だから早く試合終わらせよっか、ライダー」

『合点承知！』

その後の試合はアーマードモードになった新バイザー「ブラストガンナー」でマンガローブの水没林ごと爆撃し、晶が水没林を脱する前に晶のシールドエネルギーを削り切り勝利した。

『……勝者、宮本聖……この娘、やっぱり怖い』

『あの火力、流星は二次移行機だな』

ブラストガンナーの火力はシャープガンナーを大きく上回るもので、観客達は新たなトラウマ製造マシンの誕生に戦慄する事となった。

134話 真の幼馴染決定戦!?! 箒対鈴！ 兎、見守る

『さて、第三試合も興味深い組み合わせになりました！青コーナー、中国からやって来た男子コンビのセカンド幼馴染！・凰鈴音！』

コールと共に入場する鈴の表情はいつにも増して真剣だ。無理も無い。何せ相手は……

『赤コーナー、ぼつと出には負けられない！ファースト幼馴染！篠ノ之箒！』

対する箒もこの対決が決まった時から、いや、初めて会った時からいつか決着をと思っていた相手。お互いに今までも何度か特訓等で相手をする事はあったが、一対一の真剣勝負というのは意外にも無かった（雪兎が騒ぎを防ぐ為にそうならないよう誘導していたのもあるが）。

「……………」

そのせい、二人とも入場してから一言も発していない。

『え〜つと……滅茶苦茶空気重いですが』

『先程の君のアナウンス通り二人とも負けられない試合とあって気が張っているのだから』

『こ、今回のバトルフィールドは……これだ!』

イヴァンの指摘が辛かったのか、それともこの重い空気を何とかしたかったのか、薫子はARプログラムを起動させる。今回生成されたステージは風が吹く山々に囲まれた高原だった。

『今回は割りと普通なステージですね?』

『……ARプログラムも空気を読んだのだろうか』

相変わらず鈴と箒は無言を貫いているが、確かに重い空気はなくなっている。

『それでは二回戦第三試合、試合開始!』

試合が開始すると、二人はお互いに両手に剣を握り真つ向から激突する。力では鈴の煌龍の方が上だが、箒はその力押ししの剣術を舞のような受け流しで捌き、一瞬の隙を見ては雨月の突きを放つが、鈴も咄嗟に圧縮した空気の壁〔嵐壁〕を発動し突きを逸らす。そして、その嵐壁を破裂させ広がる風圧を利用して多少のダメージは気にせず鈴は一度箒から距離を取ると左右計八門の龍咆から圧縮空気弾を乱れ射つ。だが、箒も慌てず空裂を数回振るい直撃コースの空気弾だけを相殺する。

『何、これ……』

『予定調和の演舞のような動きだな。お互いにこれくらい出来て当然と思っているのだろっ』

『えっ？何その高度な読み合い……』

「準備運動は終わったか？鈴」

「ええ、ここからが本番よ！」

そこでようやく言葉を交わしたかと思えば、今の攻防はただの準備運動だと口にする両者。

「いくわよ、炎龍！氷龍！」

その声と共に鈴は両手の双刀に炎と氷の龍を纏わせ箒に斬り掛かる。

「ならば！」

対する箒は雨月と空裂、更に足の展開装甲から光刃を出し変則的の四刀流で応戦し、超高熱と超低温の連撃をまともには受けず、双龍が纏われていない腕や煌龍本体を狙う箒だが、鈴もそれを知ってわざと双刀を間に挟むように立ち回り直撃を避ける。

「くっ」

「この炎龍と氷龍を警戒するのは判るけど、そんな消極的な攻めじゃこの煌龍は破れないわよ！」

そう言うのと、鈴は双刀の柄同士を繋げ双刃剣にし、それをバトンのようにクルクルと回転させる。すると、それに合わせて剣が纏っていた炎と氷の龍がその外側を回り始め熱気と冷気が渦巻き出す。

「食らいなさい!」【双龍乱波】!」

「うわああああ!」

熱気と冷気が高速で渦巻く事で生まれた乱気流の竜巻を発生させる鈴の大技に箒は避ける事は叶わず、そのまま山の一つに叩き付けられる。

『鈴音ちゃんの大技が炸裂!』

『私はもう天候操作が出来ると聞いても驚かん』

※別の平行世界には疑似的にはあるが、天候操作出来る I S が存在する模様。

「……くつ、やはりパワーは煌龍の方が上か」

ここで言うパワーとはただの腕力等の力ではなく、瞬間的に発揮出来る最大出力の事だ。紅椿は絢爛舞踏のおかげで長期戦には強い I S ではあるが、白式や煌龍のように一撃で勝負を決してしまうような I S とは相性が悪い。それに、シールドエネルギーは回復しても箒本人の疲労等は回復しないという欠点もある。

(やはり私がまだ紅椿を使いこなせていないという事か……)

紅椿は無段階移行という一種のリミッターのようなもので能力を制限しており、箒の能力が一定を超えるとその制限が解かれ様々な装備や機能が使えるようになる I S。絢爛舞踏という単一仕様能力こそ得たものの、箒の紅椿の解放率は未だに40%程で、紅椿が真価を発揮しているとは言い難い状態だ。

（私がまだ未熟なのは認める……だが！この試合は！鈴にだけは負ける訳にはいかんのだ！）

よろめきながらも雨月を杖に立ち上がる箒の眼がカロリナ戦の時のように真紅に染まると、紅椿から新たな装備が解放される。

「これは……【刃衣】？」

背面のユニットをビットとして浮遊状態にし、背面から鋭い刃のようなパーツで構成された羽衣のようなアーマーを纏った形態に変形した紅椿に困惑する箒。雨月と空裂もこの形態では使えないようだ。

「ええい！こうなったら、穿千！」

使えない双刀の代わりに両腕の穿千を展開しようとすると、左腕だけに普段より大型穿千が展開された。

「へえ、この煌龍と撃ち合おうっての？いいわ！乗ったげる！」

それを見た鈴は八基の龍咆を前面に揃え連動させ、肉眼でも見えるくらいに空気を圧縮し空間を歪ませる。

「大型化したということは威力も上がっているはず……」

箒もそれに対抗して実態化エネルギーの弦を引くと、紅椿のシールドエネルギーが物凄い勢いで減っていく。

「何だこの大食らいは!? 絢爛舞踏!」

慌てて絢爛舞踏を発動するが、シールドエネルギーは少しずつしか回復せず、そのほとんどを大型化した穿千に持っていかれる。そして、そのエネルギーと比例するように穿千の光の矢は槍と見間違う大きさになる。

「これで! 決めたげる! 覇龍咆哮!!」

「千矢を超える一矢となれ! 穿千・極!」

両者フルチャージで放ったその一撃は双方共に凄まじい威力を誇っていたが、その勝敗はその性質の差で決まった。

「嘘っ!?!」

勝ったのは穿千・極だった。覇龍咆哮も確かに強力ではあるが、要は圧縮した空気を方向性を持たせて解放する技。対して穿千・極は一点にエネルギーを集中させた高密度エネルギーであり、その一撃は覇龍咆哮を貫通して霧散させ、その射線上にいた煌龍に命中する。溜め込んだエネルギーを開放し煌龍の残っていたシールドエネルギーを全て奪い去った。

『し、試合終了! 勝者、篠ノ之箒!』

「……負けた?」

試合終了のブザーと共に箒の勝利が告げられ、まだ信じられない鈴は受けたダメージ

よりもその事実には唾然としていた。

「鈴……」

「な、何て顔してんのよ！あんたが勝ったんでしようが！」

そこに箒が近付いてくるが、鈴は顔を背けてそう告げる。

「……私に勝ったんだから、簡単に負けるんじゃないわよ？」

「ああ、約束する」

箒にそう言うのと鈴はピットに戻り煌龍を解除するとそのまま廊下に出てその場に座り込み涙を流す。

（負けちゃった……全力で挑んだのに、負けちゃったよ）

勝ちたかった。だが、それよりも負けたくなかった。同じ幼馴染として、一夏を慕う同士として、鈴は箒にだけは負けたくなかった。それが悔しくて、鈴は一人泣いていた。だが……

「鈴、大丈夫か？」

「一夏……」

丁度そこへ次の試合の為にピットへ向かっていた一夏が通りかかった。鈴としては今は会いたくないけど会いたかった人。それが目の前にいる。気付けば鈴は一夏に抱きついていて。体格差の関係で一夏の胸の中にすっぽり収まってしまふ鈴だが、今はそ

れが都合が良かった。

「鈴……」

「ごめん……ちよつとだけ、こうさせて」

いつも強気な鈴の弱々しいその言葉に一夏は黙って鈴を抱き締めてその胸を貸す。

「ああ、今だけは俺は何も聞かないし、聞こえないから」

「う、うわあああああん!!」

一夏のその言葉で鈴の我慢は限界を迎え、恥も何もかも忘れて鈴は泣いた。おそろしく、鈴がこれほどまでに泣いたのはIS学園に来て初めてだろう。一夏は鈴が泣き止むまでそつと鈴を抱き締め続けた。

(私は、何をしているのだろうか．．．)

鈴の様子が気になり反対側のピットから駆けつけた筈が見たのは一夏に抱き締められながら泣く鈴の姿だった。それを見た筈は二人に気付かれないうように慌ててその場を離れたが、その胸は今まで感じた事が無い程に締めつけられる感じがした。

そして、観客席では．．．

「雪兎．．．さっきのあれって」

「筈の眼、赤くなっていた．．．あれは一体」

他の観客は箒の大逆転劇に気を取られて気付いてはいなかったが、雪兎とシャルロットはモニター越しではあったが確かに見ていた……箒の瞳が真紅に染まっていたのを。

135話 蒼と白の再戦！ 兎、調べる

『さて、二回戦も最終試合となりました！この試合の組み合わせも私は大変興味深いです。まずは青コーナー、かつてのリベンジなるか!?セシリアⅡオルコット!』

まず入場したのはセシリア。その表情はいつになく真剣だ。

『対する赤コーナー、今回も勝利することが出来るのか!?織斑一夏!』

蒼き天使と白き騎士がアリーナで向き合う。

「この組み合わせ、懐かしいな」

「ええ、クラス代表決定戦を思い出しますわ」

あの時は雪兎の入れ知恵で何とかセシリアに勝利した一夏。しかし、今回はセシリアもかつてとは比べものにならない成長を遂げており、一筋縄ではいかない事が一夏にも理解出来ていた。

「でも今回ばかりは誰が相手でも譲れねえ」

「一夏さん……」

そう、一夏にはどうしても超えなければならぬ壁雪兎がある。先ばかり見て今の相手セシリアを見れないような状態にはなっていないが、一夏は既に先を見据えている。

「であるならば、まずは私を超えてみせなさい！」

『今回のバトルフィールドは……これだ！』

ARプログラムが生成したフィールドは火山地帯。

『今回は火山ステージですね』

『酷環境下でのテスト用のフィールドだそうだ』

「エレガントとは言い難いステージですが、全力で行かせていただきます！」

「ああ、俺も全力で行くぜ！セシリア！」

『それでは二回戦最終試合、試合開始！』

「お行きなさい！ブルー・ティアーズ！」

開始早々セシリアはビットを展開し、ランパードランチャーと合わせて波状攻撃を仕掛ける。

「そうくると思ってたぜ！」

一夏もそれを予想しエナジーウイングで防御しながら雪羅式型を砲撃形態にし、新しく追加された攻撃パターン・拡散砲でビットを迎撃しようとするが、ビットは三基ずつ集まって防御フィールドを生成、本体の方はシールドブースターが展開し拡散砲を防いでいた。

「効きませんわー！」

「なら、これはどうだ！」

防がれはしたが、一夏の本当の目的はセシリアとビットの動きを止める事。動きを止めたセシリアに煌月白牙を突き構えて持ちエナジーウイングを使った変則機動で突撃する。しかし、セシリアはそれをシールドブースターを一犠牲にすることでその場を逃れ再び一夏との距離を取る。

「シールドブースターを身代わりにするなんて、思い切った事を」

「このくらいでその刀の直撃を避けられるのでしたら安いものですわ」

何の躊躇いなくシールドブースターを身代わりにしたセシリアに一夏は内心舌打ちと称賛の言葉を溢す。以前の、一夏達と出会う前のセシリアならそんな無様を晒すくらいなら素直に負けていただろう。だが、異世界とはいえ実際の戦場を生き抜いたセシリアにそのような小さなプライド等残ってはおらず、先程は「超えてみせろ」と口にしたにも関わらず負ける気等微塵も考えてはいない。そんなセシリアに一夏は思わず笑みを浮かべてしまう。

「……俺はどうやらとんだ果報者らしい」

「今更気付きまして？」

「ああ、姉ライバルに親友に、そして仲間達に……俺は本当に恵まれてる」

そして、一夏は一度煌月白牙を鞘に納め、抜刀の構えを取る。

「八葉一刀流、初伝。織斑一夏……推して参る!」

「さあ、踊りなさいませ……私とガブリエルの天の旋律で!」

目まぐるしく位置を変え、刀と槍がぶつかり、羽とレーザーが交差する。その戦いはまるで白と蒼の天使の舞のようだった。

『め、目が追いつかない激しい攻防!』

『また腕を上げたな、二人とも』

そんな中、セシリアは一度ビットを自分の側に呼び戻すとランパードランチャーを変形させ一斉掃射する。

「いきますわ! レイストーム!」

「くっ、白凰!」

一夏は咄嗟にエナジーウイングで防御するが、光の奔流は次々と一夏を襲い、最後に放たれたミサイルビットで一夏は爆炎に包まれた。

『おっと! ここでセシリアちゃんの容赦無い攻撃が命中! これは流石に決まったか!』

『いや、まだだ』

爆炎が晴れ、一夏が居たはずの場所を見れば、残っていたのは分離した白凰のみ。そこに白式と一夏の姿が無い。

「身代わり!? 一夏さんは何処へ?」

「俺はここだ」

すると、セシリアの背後から一夏の声が聞こえ、セシリアの背に煌月白牙が突き付けられる。

「やられましたわ……白凰を囷にして背後に回っていたんですわね？」

「ああ、白凰にもコアがあるから反応は誤魔化せる。それにあれだけの爆炎で目をそちらに向けさせて、エナジーウイングでセンサーをジャミングする事で背後を取ったの
「さ」

「……私の負けですわね。本当に雪兎さんと戦い方が似てきましたわ」

「あははは、それは褒め言葉として受け取っておくよ」

『試合終了！勝者、織斑一夏！』

最後は一夏の咄嗟の判断が勝敗を決した。

一方、雪兎とシャルロットは東の元を訪れていた。理由は勿論箒のあの紅く染まった眼の事だ。

「東さん、箒のアレは一体……」

「ゆーくんも気付いたんだ、アレに」

「俺も? つて事は……」

「やはりそういう事が、東」

「織斑先生!」

そこに千冬も姿を現した。

「篠ノ之のアレはやはりあの時のアレか」

「さっすがはちーちゃん、お見通しなんだね」

「織斑先生もアレが何か知ってるんですか?」

「……暮桜、あのISの凍結と何か関係があるんですね?」

東同様、千冬も何か知っているのと知り、千冬に訊ねるシャルロットに対し、雪兎もそれに気付く。

「その通りだ。おそらく篠ノ之の専用機、紅椿は」

「そうだよ。ちーちゃんが暮桜で戦った暴走したIS【赤月】をベースにして開発したI Sだよ」

1 3 6 話 波乱の準決勝！ 兎、秘密を知る

「赤月？」

「そう、この束さんが白騎士の次に開発した箒ちゃんの専用機だよ」

白騎士事件後、束はずっとISコアの作成をしており肝心のISは作っていないかった。そして、467個目のコアを作成後、束は行方を眩ませ、束の二機目のIS・赤月が開発された。

「これはさつきもチラツと言ったけど、箒ちゃん専用についたISだね。でも、いざ箒ちゃんに乗ってもらったら予想以上に箒ちゃんとコアの相性が良くてね」

「……暴走したと？」

「そうだ。そしてそれを知った私は篠ノ之を止めるべく暮桜を無断で持ち出した」

「そのせいで暮桜は凍結。赤月も一度封印して、箒ちゃんの記憶も箒ちゃん自身の願いで書き換えておいたんだけどね」

「その後、その赤月を紅椿という枷を着けて再び箒につて訳か……なるほどな、道理で紅椿のプロテクトが嚴重な訳だ」

つまり無段階移行システムは赤月を箒に馴染ませる為に設けられた補助輪のような

もの。だが、それではあの箒の紅い瞳の説明にはなっていない。

「多分、原因は京都でのアレだね」

「!? I S コアへの直接ハッキング!」

そう、その原因は京都での剥離剤を使ったハッキング。それにより赤月のロックが緩んだのではないかと東は言う。

「あの後、ロックは掛け直したんだけど、どうも箒ちゃんの方にバックドアを仕掛けてたみたいで」

「それで発見が遅れたのか」

こればかりは東にも予測出来なかったことらしく。本当ならトーナメントを中止して調べておきたかったが、そうなった場合、一夏との試合を心待ちにしていた箒のストレスから赤月がバックドア経由で何を仕出かすか判らなかつたのでトーナメント後に調査をする事と、万が一暴走した場合は雪兎や千冬が拘束し再度夕風燈夜の使用が決定された。

『え、ここで準決勝の前に解説者の増員として新たに初代ブリュンヒルデにして我が校の教員・織斑千冬先生におこしいただきました。織斑先生、お願いします』

『よろしく頼む』

このサプライズに観客席から黄色歓声が上がる。いつもの事だ。

『まずは青コーナー、優勝候補筆頭! その戦いはまさに変幻自在! 相手に合わせて装備を変え圧倒する奇才、天野雪兎!』

『引き出しの多いアイツ雪兎の事だ。また何か新しい手を繰り出してくるだろう』

雪兎のやり口を熟知している千冬からすれば雪兎がここで何かしらの手札を切ってくると思っっているようだ。

『対する赤コーナー、まるで波に乗ったような快進撃を続けるダークホース! 宮本聖!』
『宮本か、宮本は他の連中に隠れがちだが優秀な生徒だ。それに宮本の専用機は天野並

みに手が読めん厄介さがある。それをどう活かすかが勝敗の決め手になるだろう』
『なるほど。今回のバトルフィールドは・・・これだ！ポチツとな』

今回、ARプログラムが生成したステージは氷の海で構成された氷河ステージ。そう、また海関係ステージだった。

「あつ、また海ステージだ」

「三連続海関係ステージって、どんな運だよ・・・」

『モチーフがサーファーなウェーブライダーがいるせいかな、聖ちゃんの出る試合は海ばかりですね』

『これもISの特殊環境テスト用のステージか・・・』

先程の火山と対になっている氷河ステージ。他にもこのような過酷環境ステージはいくつかあるんだとか。

「このステージならアレが使えるそうだな」

そう呟くと、雪兎はあるアドヴァンスドに換装する。それは白と赤のカラーリングに紫のクリアパーツを持つ重装備型のアドヴァンスド。

「【A:A:アメイジングアルケミスト】二次移行したその実力、見せてもらおうか！」
「うわあ、またやばそうなのが・・・なら、こつちもブラストガンナーで」

雪兎の新アドヴァンスド・アメイジングアルケミストに対し、聖もブラストガンナー

を展開する。

『それでは準決勝第一試合、試合開始!』

「さあ、祭りを始めようか!」

先手は雪兎。挨拶代わりに全身に備えたミサイルを一斉発射する。

「げ、迎撃するよ!ライダー!」

そう言つてミサイルを聖も全身の銃器で迎撃するが、雪兎が放つたミサイルは普通のミサイルだけでなく、黒褐色のクリスタルのようなものが混ざつており、それが聖の周りに散布される。

「ジャミング用のチャフじゃない?じゃあ、これは……」

『これは……マスター!逃げて!』

ウエーブライダーが聖に警告するも既に遅く、雪兎は聖に向けて今度はビーム兵器を展開し一斉総射する。だが、それは聖を正確に狙つてはならず、散布されたクリスタルの範囲を狙つた攻撃だった。

「どこを狙つてえっ?」

しかし、その理由は直ぐに判つた。なんと、雪兎の放つたビームはクリスタルに命中するとそれを乱反射し聖に襲いかかる。

「これつてシャルロットさんとの試合の時?!」

「大・正・解！」

クリスタルの正体は光学兵器を反射する特殊鉱石で作られた物で、先程の攻撃はそのクリスタルを利用した攻撃なのだ。

「これで、光と闇の舞さ。ほれ、次いくぞ！」

すると、今度は別の装備を展開し追撃する雪兎。

「この、弾幕、性能！ガンナーの強化タイプ！」

「ガンナーだけじゃねえよ！」

雪兎の言葉に合わせて背面の四つのユニットが分離する。

「ビット!?まさかウイザードも!？」

「またまた正解！」

そう、アメイジングアルケミストはガンナーとウイザードの特性を併せ持つアドヴァンスドなのだ。ビットはガトリングタイプとビームキャノンタイプがあり、本体と連携して聖を攻撃する。

『う、うわあゝ……またえげつないのが出てきましたね』

『あれだけの装備の同時制御となるとやはり動きは鈍くなるが……あの弾幕がある以上関係あるまい』

『そうだな。一見隙に見える距離もビットで完全にカバーしている。まあ、あれだけで

はなさそうではあるがな』

聖も今はなんとかプラスチックガンナーで相殺しているが、雪兎はまだ余裕があるように見える。一方、バトルフィールドの氷河は雪兎の放つ攻撃で粉々になっていく。

「そろそろ終わりにするか」

そして、雪兎は勝負を決めるべくアメイジングアルケミストの全武装を展開する。実弾兵器にビーム兵器、全身の装甲に内蔵されたミサイルにバーストバイザーが装備していた大型ミサイルまで多種多様の武装が現れる。

「死ぬなよ? アメイジングフルプラスチック全武装一斉掃射!!」

「ちよっ!!」

ガンナーの一斉掃射が鉄の豪雨だとするなら、このアメイジングアルケミストの全武装一斉掃射は大嵐。聖は逃げる事も迎撃する事も叶わず、その嵐に吞まれてしまう。その後も一方的に雪兎が放つミサイルの爆音や銃撃音が響き聖の姿も爆炎で見る事が出来ない。だが、聖のシールドエネルギーが尽きた事はアリーナのモニターで確認出来た。

『・・・何、あれ?』

『相手に何もさせぬ圧倒的な火力・・・雪兎のやつ、あのアドヴァンスドを纏ってから一步も動いてないとはな』

『高機動型で一気に近付けばチャンスはあっただろうな。あれはデユノアが使ったクロスキヤリバー以上に機動力を殺している』

『ほ、本当にえげつないアドヴァンスドですね、あれ……それはともかく！試合終了オ！勝者、天野雪兎！』

薫子の試合終了コールと共に爆炎が晴れると、目を回した聖が海に漂っている。観客席もあまりの光景にしーんと静まりかえっている。

「きゅ……」

「少し、やり過ぎたか？」

こうして、雪兎はあまりにもあっさりと決勝への切符を手にするのだった。

137話 大暴走!赤月現る! 兎、見守る

『え、続きまして準決勝第二試合を行います』

第一試合の雪兎の蹂躞劇の衝撃から観客席が落ち着いたのを見計らい薫子が第二試合の選手紹介を始める。

『青コーナー、前の試合では逆転劇を見せてくれた武士道ガール!篠ノ之箒!』

『……紅椿は数少ない第4世代機だ。その能力は未知数。油断は禁物だな』

『前回の刃衣だったか?あれと通常形態の使い分けが今後の課題だろう』

その箒は少し緊張した表情でアリーナに現れる。箒は元々専用機持ちではなかった。だが、一夏と共に在りたいが為にそれまで嫌悪していた姉・東に専用機・紅椿を求め、その初陣である福音戦では一夏や雪兎に多大な迷惑をかけた。更に京都では油断からオータムに剥離剤改で暴走させられ再び一夏に救われた。そんな自分が一夏の隣に立つ為に挑んだこのトーナメントだったが、前の試合の後の一夏と鈴の姿を見て酷く胸が締めつけられる感覚を覚えた。それが醜い嫉妬だと箒も気付いており、そのせいで心が曇っているのを箒は自覚していた。

(……こんな私に一夏と並ぶ資格があるのか?)

そんな迷いを抱える筈だが、試合は待つてはくれない。

『赤コーナー、この試合を制しライバルの元へ辿り着けるのか!? 織斑一夏!』

『ISを知り、初めて触れたのが一年前とは思えない成長だな』

『まだまだあいつはひよつこだ』

やはり千冬は一夏には厳しい。

「ははは・・・やっぱ、千ふ、織斑先生は厳しいぜ」

そんな千冬のコメントに苦笑しながら入場する一夏だが、内心では先程雪兎から聞かされた言葉が頭を離れなかった。

『一夏、もしかすると次の試合で箒が……いや、紅椿が暴走する可能性がある』
『えっ?』

『前に京都で暴走した際に東さんが掛けてたりミッターの一つがぶっ壊れちゃったらしい』

『でも!あれは俺が夕風燈夜で!』

『……紅椿の、ISの方はそれで何とかなった』

『なら何で……まさか!』

『ああ、問題は箒の方なんだよ』

その後、一夏も紅椿の真実を聞かされた。まさか自分の知らないところでそんな事が起きていたとは知らず、一夏はショックを受けたが、箒の成長次第では何れは赤月もちゃんとコントロール出来るとも聞かされ、トーナメント中に暴走しなければ今後はそのコントロールの為の訓練に移行するとも雪兎は言っていた。つまり、問題なのはこの試合が最も暴走する可能性が高いという事だ。

(箒……)

『今回バトルフィールドは……これだ!』

二人が思い悩む中、ARプログラムによってバトルフィールドが生成される。生成されたのは無数の桜に囲まれた幻想的なフィールドだった。

『……これはまた絵になるフィールドが』

『白式と紅椿で桜というわけか』

『……このランダム設定、本当にランダムなんだろうな?』

こうもピッタリなフィールドが選ばれたことに千冬はが疑いの目を向けるが、間違いなくランダムである。

『そ、それはさておき、準決勝第二試合、試合開始!』

千冬の視線にビビりながらも試合開始を告げる。

「………箒、いくぞー!」

「はー!」夏ー!」

まだ吹っ切れてはいないが、一夏は試合に集中する事にし、煌月白牙と雪片参型を手にする。それに対し箒も雨月と空裂を手にした。

「はあ!」

「ふん!」

白と紅の刃がぶつかり合う度にその衝撃で桜の花が舞い散る。が、箒の方が若干押さ
れ気味であった。

「くっ………(一夏はまた腕を上げたというのか)」

そう!これは雪兎との特訓で一夏が剣の実力を取り戻し、技を学んだ事で腕を磨き、
白式の強化で更なる力を得たからだ。対して箒はまだ紅椿の能力を十全に使えている
かと言えば実はまだ五割も満足に使えておらず、紅椿に振り回されているのが現状だ。

(それに比べ私は………これではもう一夏にとやかく言う資格は無いな)

入学当時に剣道を離れていたと聞き憤慨した箒だったが、その実力は既に越えられた
と思ってもいいだろう。それが箒には嬉しくもあり、悔しくもあった。

(力が欲しい………一夏と共に戦う力が、一夏と並ぶ力が!)

その時、箒の内から何か、錆び付いた鎖が砕けたような音と共に再び箒の瞳が真紅に輝き力が溢れ出す。

「はあー！」

「くっ、箒の力が……」

突然箒の力が増した事に困惑する一夏。力だけではない。その技のキレやスピードも格段に上がっている。

「そうだ！この力があれば私は！」

『マスター！箒さんの瞳が』

「紅い瞳……これが雪兔が言っていた」

「一夏あ！今のお前の相手は私だ！私だけを見る!!」

だが、次第に力に飲まれ始めた箒は一夏が自分以外の誰かを思い浮かべる事すら許さない苛烈さを見せる。

「やめろ箒！その力は！」

「五月蠅い！うるさい！ウルサイ！」

それでも一夏の防御を破れない事に苛立ち、更なる力を欲する。

「もつとだ！もつと力をよこせ！紅椿！いや……【赤月】！」

そして、箒にその名を口にした。雪兔達が最も警戒していたその名を。すると、紅椿

を覆っていた装甲がパージされ、紅椿とは似て非なるIS【赤月】が姿を現す。

「あれが……赤月」

真紅の装甲であった紅椿とはまた色合いの違う深紅の装甲を持つ赤月。

「これが私の力だ!」

「箒!」

『ちっ、完全に飲まれやがったか……あの馬鹿が』

「雪兎!」

その時、一夏に雪兎から通信が入る。

『予定通り俺や織斑先生達で突入して赤月を止める。その後、一夏は夕凧燈夜でー』

「その事なんだが……俺一人でやらせてくれ」

雪兎は赤月が暴走した際の作戦を改めて伝えるが、一夏はそれを一人でやりたいと言
い出した。

『一夏、お前は状況が判ってるのか?』

「判ってる!でも、これは俺がやらなきゃダメなんだ!」

『……はあ、お前は一度言い出したら聞かねえからな。無理だと判断したら勝手に介
入する、いいな?』

「ああ!」

おそらく言つても無駄だと雪兎は判断し、本当に危なくなつたら問答無用で介入すると告げた。

『邪魔されなくなかつたらさつきとあの馬鹿を叩き起こしてこい』

「おうー！」

迷いの晴れた一夏は赤月とも対等に渡り合うも、赤月には絢爛舞踏がある。更に時間を掛ければ雪兎達が介入してきてしまう。

「何か、何か手は……」

『マスター、彼女を正気に戻せばいいのですね？』

「手があるのか？白式」

『ええ、赤月とコアネットワークを繋いでまとめて精神世界アンダーワールドに取り込めば』

「アンダーワールド？」

『以前にマスターがラウラさんや私達が話したあの場所です』

白式が言うには、至近距離に接近できればその精神世界に箒と赤月を連れ込む事が出来るのだと言う。

「それを使えば箒を助けられるんだな？」

『はい……しかし、精神世界で私達が敗ればマスターが無防備になるか、最悪マス

ターも……』

「箒と同じ状態になる、か」

『はい』

そんな一か八かの手ではあるが、一夏は笑みを浮かべてこう答えた。

「やってやるさ。一か八かなんて今更だぜ、白式」

今までも雪兎のお膳立てはあったとはいえ、何度もそんな状況をくぐり抜けてきた一夏にとつて、そんな事に今更であった。

「それに、俺が失敗しても雪兎や千冬姉達がいるんだ。なら、俺は何も怖れず前だけ見ていられる」

『はあ……マスター達の気持ちがよくわかりますね』

『白式お姉ちゃん、今更だよ』

「頼む二人とも、俺に力を貸してくれ」

『当たり前だよ、私達はお兄ちゃんマスターのISなんだから』

『行きましょう、マスター』

そこからはエナジーウィングで高速移動を繰り返し、隙を探し回避を続ける。

「避けてばかりかつ！一夏あー！」

そんな一夏に暴走し、気持ちが高まっている箒は次第に攻撃が単調かつ大振りになって

いく。

『マスター!』

「ああ!今だ!」

そして出来た一瞬の隙を突き、光を纏わせた左腕を箒に突き出した。

「いけええええ!!」

その瞬間、一夏と箒を白い光が包み込んだ。

気付けば一夏はバトルフィールドと同じ桜の舞う場所にいた。違いがあるとすればそれはここが夜のように暗い事だ。

「ここが……」

『赤月とリンクした精神世界です、マスター』

「なら、ここに箒が……」

『はい』

『こつちだよ、お兄ちゃん!』

白凰に導かれた先にいたのは今より少し幼い箒だった。その箒は自分の殻に閉じ籠るように踞っていた。

「箒……」

一夏が声をかけるも箒には反応が無い。

『マスター、おそらく赤月に関する記憶を取り戻して、その罪悪感から閉じ籠ってしまったのでは?』

「箒、いつもの強気な箒はどこにいつちまったんだよ?」

「……」

一夏が再び呼び掛けると、無言ながら箒に少しだけ反応があった。

「赤月の話は雪兎から聞いた。でも、だからってずっとこのままでいるつもりかよ!」

「……お前に、何が分かる」

やっと一夏の言葉に返事を返した箒だが、その声いつもの覇気は無い。

「私は思い出したんだ……紅椿の時が、あの時、お前に庇われた時よりも前に……私は、とんでもない失態を犯していたんだ」

箒が言っているのはおそらく赤月が暴走し、千冬がそれを止めた一件の事を言っているのだろう。

「私には、私にはやはりISに乗る資格などなかったのだ！あの時も！福音の時も！そして、今回も！私がISに乗ったばかりに起こった事だ！」

「箒……」

そんな箒の慟哭に一夏も言葉が続かない。

「軽蔑したろう？これが私だ……都合の悪い事は忘れてのうのと生きていた私にISを扱う資格、ましてやお前という資格など……」

「そんな事はない！」

だが、続く箒の言葉に一夏はすぐさま言い返す。

「誰かと一緒にいたいのに資格なんているか！そもそも箒は俺の幼馴染だろうが！」
「幼馴染なら鈴もいるであろう！私がいなくなったところで誰もー」

そう箒が言いかけたところで一夏は箒の頬を叩いた。

「えっ？」

「誰も悲しまないとか言うつもりか!?そんな訳ねえだろうが!!」

「……いち、か?」

叩かれるとは思っていなかった箒が唾然としつつ一夏を見上げると、一夏は酷く悲しそうな顔をしていた。

「だったら何で俺はここにいない!?いなくなっても構わないようなやつのために命を張る訳ねえだろうが!この大馬鹿野郎!!」

「だが、私は……」

「間違つたってんなら謝ればいい!償えばいい!だから、そんな寂しい事言うなよ、箒」
「私、は……また、やり直して、いいのか?」

「ああ!」

「お前の、そばに、いて、いいのか?」

「ああ!だから帰ってこい!箒!」

一夏が伸ばした手を箒が恐る恐る握ると、暗かった空間に陽の光が射し込み、箒の姿も幼い姿から元の箒へと戻っている。

『やれやれ、手の掛かる主な事だ』

すると、そこに巫女装束姿の箒によく似た少女が現れる。

「君はあの時の!」

「お前は……紅椿、いや、赤月なのか?」

『そうだ。私は赤月であり紅椿でもある』

それは赤月及び紅椿のコアの管理人格であった。

『織斑一夏、主が世話になつたな』

『箒の姿でそう呼ばれると違和感が凄いな』

『では私も一夏と呼ばせてもらおう。一夏、改めて礼を言う』

「礼なんていいよ。俺はこの馬鹿な幼馴染を叩き起こしにきただけなんだから」

「ば、馬鹿とはなんだ！馬鹿とは！」

「やつといつもの箒に戻つたな？」

「はっ!？」

『……夫婦漫才は帰つてやつてくれ』

そんなやり取りをしていると、一夏と箒の姿が薄れ始める。

「これは」

「もう帰れつてことかな？」

『そういう事だ……一夏、主を頼む』

「ああ、任された」

一夏の返事を聞き、赤月は笑みを浮かべたところで一夏と箒の意識が現実へと浮上した。

精神世界にいたのは現実ではほんの一瞬だったらしく、現実では丁度二人を包んでいた光が消えたところであった。

「戻って、きたみたいだな」

「・・・すまない、一夏。また迷惑をかけた」

赤月も再び紅椿の姿に戻っており、暴走は止まったようだ。

「気にすんなよ、幼馴染だろ?」

「・・・そこは、もう少し踏み込んだ関係でも」

「何か言ったか?」

「何でも無い！」

鈍感な治つたものの、鈍感主人公に有りがちな難聴は治っていないようだ。

「それよりも試合はどうするか……」

「それに関しては私の棄権でいいだろう。ここで仕切り直しをするのはちよつとな」
「いいのか？」

「ああ、その代わり……次の試合、勝てよ」

「ああ！」

結局、試合は箒の途中棄権で一夏の勝ちとなった。また、箒の暴走は感情が昂り過ぎたせいという事にされ、箒は念のために精密検査を受けることになり試合後に束らに連

れて行かれた。

「全く一夏のやつめヒヤヒヤさせやがって……でも、箒も紅椿と対話して制御出来るようになったか」

暴走していたとはいえ赤月の猛攻を耐えていた一夏と紅椿を制御出来るようになった二人の試合を見て雪兎はぶつくさ言いつつも二人の成長を喜んでいた。

「これは明日の決勝も期待出来そうだな」

思った以上の一夏の成長に雪兎は笑みを浮かべて明日の決勝戦を心待ちにするのだった。

138話 決勝戦！雪兔VS一夏！ 兔、ちよつぴり本 気出す

箒の暴走は特に大きな被害もなかった為、少しのお説教と反省文で済んだ。そして、アリーナのメンテナンスの為に決勝戦は翌日になった。

「明日か……」

準決勝のあったその夜、一夏は一人屋上で空を見上げていた。

「一夏、ここにいたか」

そこにラウラがやってくる。

「ラウラか、どうしたんだ？」

「明日は雪兔との決勝戦だろう？その前に一つ指南をしてやろうと思ってるな」

そう言うラウラはいつもの早朝訓練のようにゴムのナイフを構える。

「なるほどな、それじゃあ胸を借りさせてもらおうよ」

「む、胸だと!?!」

「ん？何か変な事言ったか？」

「い、いや、すまん、私が過剰反応しただけだ」

言葉の意味は知っていても、意中の相手から言われると変に反応してしまうラウラ。だが、流石は軍人と言うだけあって動き始めればそんな素振りは見せない。

「くっ」

「大分反応が良くなってきたではないか？」

「ああ、ラウラや晶、それに雪兎とも散々やったから、なっ！」

ラウラの攻撃を受け流しながら一夏も手にしたゴムナイフでラウラに反撃する。朝の訓練を開始した頃の一夏は反撃はおろか防御すら満足に出来ていなかったのを考えれば、今の一夏は随分と成長したと言える。しかし、まだラウラの方が上手なようで、その反撃の繰り出した腕を掴まれて逆に投げ飛ばされてしまう。

「まだまだだな」

「いつてえ・・・やっぱラウラには敵わないな」

「当たり前だ。始めて間もないお前にそう簡単に敗れるようであれば私の立つ瀬がなからう」

「それもそっか」

その後、ラウラは「負けるなよ」とだけ言い去っていった。

「さてと・・・汗かいたし、部屋でシャワーでも浴びるか」

ラウラとの組手でかいた汗を流そうと一夏が部屋に戻ろうとすると、部屋の前に鈴がいるのを見つけた。

「鈴?こんなところで何してんだ?」

「わ、わわあ!?!な、何だ、一夏か・・・もう!いきなり後ろから声かけないでよ!」

「いや、そんな事言われてもなあ」

「それはそうと、こんな時間にどこ行ってたのよ?それに何か汗臭いし」

「ちよつと屋上にな、そしたらラウラが来て少し組手してたんだ」

「くつ、先を越されてたか!」

ラスボス^雪前の決戦前夜の語りという絶好のシチュエーションで遅れを取ったことに

歯噛みする鈴だったが、気を取り直して一夏と部屋に入る。

「で、鈴はどうしたんだよ?」

「私は……これよ」

一夏がそう問いかけると、鈴は自分のstorageを操作して机の上に小ぶりの井を出した。

「……井?」

「そつ、夜食にと思つて。運動してきたなら丁度良かったわ」

そう言つて鈴が井の蓋を取ると中身は卵とじカツ丼だった。

「カツ丼か」

「ちよつとした願掛けよ、あいつが相手なんだし少しでも勝てるようになって」

「ありがとな、鈴」

「どういたしまして」

カツ丼の匂いを嗅いでいたら小腹が空いてきた一夏が井に手を伸ばそうとするが、鈴はその丼を一度storageにしまつてしまう。

「その前に!シャワー浴びてきなさいよ。いつまで汗だくでいるつもり?……私は別に構わないけど」

「おっと!そうだったな」

最後の部分は小声で聞き取り難く、一夏には聞こえなかったようだ。

「storageに入れとけば冷めないし、早く行ってきなさいよ」

「おう」

そう言うで一夏は着替えを持ってシャワールームへと入っていった。だが、鈴は自分のやらかした事に気付き赤面していた。

（一夏のstorageにしまわせれば良かったのに何で自分のstorageにし
まっちゃったのよ、私！）

そう、鈴は自分のstorageにカツ丼をしまってしまったため部屋を出られなくなっていたのだ。

（い、一夏のシャワーシーン・・・ゴクリッ）

そして、シャワーの音と一夏の鼻歌が聞こえ、その想像をしてしまう鈴。

（はっ！私は何を想像してんのよ！）

恥ずかしい想像をしてしまった鈴は恥ずかしさのあまりに壁に頭を打ち付け「心頭滅却！心頭滅却！」と呟き出す。

「ふー、スッキリした・・・って、何やってんだ、鈴？」

「あ、あははは・・・何でもない、何でもないわ！」

「変なやつだな」

そんなやりとりをしていると、コンコンコンと部屋の扉をノックする。ちゃんと4回ノックしている事から国際マナーはしっかりした人物のようだ。

「い、一夏さん、いらつしやいますか?」

それはセシリアだった。

「ちっ」

舌打ちをしつつも冷静さを取り戻した鈴。

「一夏!これ置いておくね!井はまた今度でいいから!」

鈴はそう言って井を置いて部屋を飛び出していった。

「り、鈴さん!」

「今度はセシリアか」

飛び出していった鈴に驚くセシリアだったが、すぐにシャワー上がりの一夏に視線を奪われる。

「い、一夏さん、シャワーを浴びてらしたのですか?」

「ああ、ラウラとちよつと組手をしててな、その後に鈴が来たからちよつとシャワー浴びせてもらったんだが」

「そ、そうでしたか」

鈴と何かあったのでは?と疑っていたセシリアだが、裏表の少ない一夏が嘘をつくど

は思えずそれが本当だと誤解を解いた。

「皆、明日の決勝戦に向けて気を使ってくれてな」

鈴が置いていった丼を示して一夏は苦笑する。

「夜食ですか？」

「ああ、日本の験担ぎさ」

「では、私のはその後で」

「・・・セシリアも、食べ物なのか？」

改善されたとはいえ、不安が無いとは言えないのがセシリアの料理なのだ。一夏に悪気は無い。

「だ、大丈夫ですわ！ちゃんとディアーチェさんに見てもらいましたから！」

「ディアーチェに？それなら安心だな」

実はディアーチェも料理が得意で、一度一夏達にも振る舞ってくれたのだが、かなりの腕前だった。そのディアーチェのお墨付きなら大丈夫だろうと、一夏はホッと息を吐く。

「それで、セシリアは何を？」

「紅茶とクッキーですわ」

「それは楽しみだ」

その後、一夏は鈴のカツ丼を食した後、セシリアから紅茶とクッキーを振る舞われた。カツ丼も紅茶とクッキーもとても美味しく、お礼を言おうとセシリアも顔を真っ赤にして帰っていった。

セシリアが部屋を出てしばらくすると、コンコンコンと再び扉をノックする音がした。

「はい」

「・・・遅くにすまない」

一夏が扉を開くと、そこには箒の姿があった。

「箒? どうしたんだ、こんな時間に」

「あ、明日は雪兎との決勝戦だろう？だから私も何か力になれる事は無いかと……」
「なんだ、箒もか」

「私”も”？ということは……」

「ラウラは決勝前最後の組手、鈴はカツ丼、セシリアは落ち着く紅茶とクッキーを作ってくれてな」

「くっ、出遅れたか……」

「箒？」

「な、何でもない！それより部屋に入れてもらっても？」

「ああ」

部屋に入ると、箒は少し緊張した面持ちで話し始める。

「私も色々と考えたのだがな、結局は大したもののは浮かばなかった。そこで紅椿と相談したのだが……」

「そっか、箒も紅椿と話せるようになったんだっただな」

今までは雪兎の雪華と一夏の白式に白凰に聖のウェーブライダーぐらいしか話すことの出来るI Sはいなかったのだが、今日の一件で箒も紅椿と対話が可能性になったのだ。

「紅椿は……を貸してやれ、と」

「えっ?」

紅椿が箒に提案した内容は一夏も驚く内容だった。

『さあ!今日は長らく続いたこのトーナメントの決戦戦!実況は本日も私、黛薫子がお送りします!』

翌日、決勝戦の客席は生徒や試合を見にやってきた各国の重鎮やらで今日も満員状態。それも無理は無い。何故なら決勝戦のカードは両者共に未だに数少ない男性操者なのだ。また、お互いに前代未聞の三次移行IS同士でもあり、そして、その操者自身も織斑千冬の弟であり最初の男性操者の一夏に、篠ノ之束の弟子にして【ラベヒットデイザスター兎の皮を被った災害】の二つ名で知られる雪兎の二人。これは正に全世界の注目を集

める一戦と言えた。

『解説は昨日に引き続き織斑千冬先生とイヴァンⅡニルギースさんをお願いします』

『よろしく頼む』

『引き受けた』

『それでは選手に入場していただきましょう！まずは青コーナー！今まで圧倒的な力を見せつけ勝ち上がってきた天災！何でこんなに強いのか!?天野雪兔!』

紹介と共に入場した雪兔が今回最初に使用するパツクはヴァイサーガ。どうやら一夏に合わせて斬撃戦で戦うようだ。

『この天災に挑むは赤コーナー！まるで今までの試合はこの決勝戦の為の砥石!その研ぎ澄まされた刃は届くのか!?織斑一夏!』

対する一夏は既に煌月白牙と雪片参型を手に臨戦態勢で入場する。

「やつとだな、一夏」

「ああ、やつとだ……やつとお前と戦えるぜ、雪兔」

雪兔は勝ち上がってきた一夏を、一夏はその場に君臨する雪兔を、互いに待ち望んだ一戦。そこにいつものフザケ合っている二人の姿は欠片も感じられない。

『今回は決勝戦という事で普段通りのこのアリーナが舞台!つまり!小細工抜きの真剣勝負です!』

今までは様々なフィールドで戦ってきたが、決勝戦とあってノーマルのアリーナが舞台に選ばれた。だが、この二人にはそんな事は大きな問題では無い。

『それではっ! 真正正銘のラストバトル! 決勝戦! ファイツ!!』

「はああああ!!」

カーン! というゴングと共に最初に仕掛けたのは一夏。両手の双刃で連撃を放つが、雪兔はそれを回避しつつ、回避出来ない攻撃は五大剣の抜刀で捌いていく。

「そんなものか! 一夏!」

「まだまだあ!」

その目にも止まらぬ斬撃の応酬は音を置き去りにして加速していき、客席には音がズレて聞こえ始める。

『の、のっけから凄まじい剣撃の応酬! もう私には二人の手元が見えません!』

『ふっ、やっと昔の教えが身に付いたか』

『だが、雪兔あの連撃を剣一つで捌くとはな』

すると、一夏のスピードが更に上がり、雪兔も抜刀ではなく抜いたままの状態で迎撃しだし、マントまで防御に使い始める。

「うおおおおお!!」

「まだ上がるか! ならば!」

雪兎はマントをドリルのように変形させ、一夏を弾き飛ばすとバルニフィカスとネオイエーガーを展開し、武器をスラッシュヤーに持ち替える。そして、今度は雪兎の方から仕掛けた。

「今度はここちからいくぞ！一夏あー！」

そのスピードは手元はおろか雪兎自身が捉え切れないスピードで一撃離脱の斬撃を繰り返し、一夏を防戦一方に追い込んでいく。

「それがここまで勝ち上がってきたお前の力か!?まだ足りない！」

「くっ！」

「お前に足りないものは、それは情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！そしてえ何よりもおとおお速さが足りない!!」

防戦一方になる一夏に雪兎は某速さを愛する文化的兄貴のセリフを引用し挑発する。

『よ、よく嘯まないであの長セリフ言えますね、彼……』

実は雪兎はこのセリフを昔からいつか言おうと猛特訓していたとは誰も思うまい。

「白式！」

その挑発に一夏も防御を捨ててスピードを上げ、二人の戦いは高速戦闘へと移行する。

「やれば出来るじゃないか！」

「はああああ!!」

最早客席を取り残した白と水色の軌跡しか見えぬ高速戦闘。一夏のシールドエネルギーの減りが目立つが、雪兎も決して無傷とは言えず、徐々にシールドエネルギー残量を減らしていた。

「雪兎オオオオオ!!」

「一夏アアアアア!!」

そして、両者のトップスピードの一撃がぶつかり合い甲高い激突音がアリーナに響いた。

「くっ!」

「ちっ!」

その衝突はほぼ直角だったようで、お互いに弾き飛ばされてしまう。

「やるじゃねえか、一夏。この俺の最速のバックの組み合わせにここまで食らい付いてくるなんてな」

「ぜえ、ぜえ、知ってはいたが、ここまで速いとは、思わなかったよ」

「だが、まだ全速力じゃねえだろ?お互いに」

「ああ!その通りだ!」

一夏がそう言うと、一夏の姿がブレて消え、雪兎は咄嗟に背後にスラッシュャーを回す。

すると、刃がぶつかり合う音が響く。

「つたく、危ねえな……」

「くそ！せつかく上手く出来たのに！」

『あぁつと!?!今のは!?!今のは対戦相手の雪兎選手特有のムーブだ!?!この土壇場で、一夏選手が旋破りという新たな引き出しを開けてきた!?!』

そう、一夏の動きは雪兎がダリル・フォルテペアとの試合で見せた瞬時加速の連続使用による移動法。今まで何度も練習を繰り返し磨き続けながらも雪兎にその完成を一度も見せていなかった一夏の奥の手だったその技は雪兎の直感によつて防がれてしまった。

「もうものにしてやがったのか、それ」

「ものにするのに苦労したけど、なあ！」

だが、一夏の奥の手はそれだけではなかった。何と、一夏は左手で持った雪片参型を雪兎に投擲したのだ。

「ちよつ!?!お前それってあの万城龍我の脳筋のー」

まさか一夏が特別な思い入れを持つ雪片を投擲するとは思ってもいなかった雪兎が初めて隙を見せ、一夏はその一瞬の隙を逃さず雪羅式型をクロームモードにし再び瞬時加速で一気に距離を詰めると雪兎のスラッシャーの柄を握り潰し破壊する。

「なっ!?!」

これには流石の雪兎も驚愕するが、それが致命的な隙となってしまう。

「はあああああ!!」

スラツシャーが破壊され体勢を崩した雪兎に一夏は上段の構えから零落白夜を発動させた煌月白牙を一気に振り下ろし、雪兎は大きく吹き飛ばされアリーナの地面に激突、シールドエネルギーも一気に削り取られてしまった。

「はあ、はあ、はあ……やったのか?」

その光景にアリーナ中の全ての者が言葉を失った。無理も無いだろう。今まで圧倒的に優位を崩さなかった雪兎がここまで追い詰められる姿など誰にも想像出来なかったのだから……

139話 決着！決勝戦 兎、新たな札を切る

誰もが目を疑っていた。それもそのはず、今まで雪兎がこのようにやられる姿を見た者はいない。それ故に、この一夏の奮闘は誰も予想だにしていなかった。

「はあ、はあ、はあ……やったのか？」

しかし、勝利を告げるブザーは鳴っていない。つまり……

「……全く、一杯食わされたわ。おかげでこいつを使う事になるとはな」
砂埃の中から声が響き、それは姿を現す。

「A t M・憑神 t y p e メイガス」、こいつの特殊能力【増殖】が無かったらやばかったわ」

そのアドヴァンスドは腕や脚に葉のようなフィンが付いた黄色と黄緑の発光装甲を
持ったどこか植物を彷彿とさせる変わった姿をしていた。

「増殖？」

「ああ、こいつはエネルギーを増殖させる事に特化したアドヴァンスドでな」
「それって箒の絢爛舞踏!?!」

「いや、流石にあれ程無茶苦茶じゃねえよ、その証拠に全快してないだろ？」

確かに雪兎のシールドエネルギー残量はイエローゾーンのままで。

「つまり劣化版の絢爛舞踏ってどこだ……でも、その分応用は効くぜ?」

雪兎はお喋りはここまですらと両手を一夏に向け、その掌からエネルギー弾を放つ。

「これくらい!」

弾速がそこまで速くないと一夏がそれを回避するが、雪兎はそれを見てニヤリとほくそ笑む。

『!?マスタァ!』

すると、回避したはずのエネルギー弾は一夏の傍を漂いいつも急速にエネルギーを増大させていく。

「はい、ボン」

「うわあああああ!」

そして膨れ上がったエネルギー弾は爆弾のように爆発し一夏を吹き飛ばす。

『な、何が起きたのでしょうか!』

『おそらくあのエネルギー弾のエネルギーを「増殖」で増大化させて爆破したのだろう』
『エネルギーであれば見境無しか、また厄介なもの』

そうこうしている間に雪兎は自身の周りに無数のエネルギー弾を機雷のように滞空させ、一夏が近寄れない結界を形成する。

「対一夏用戦術その1、光爆陣、つてな」

高速移動からの近接戦闘を主とする一夏には厄介な戦術だ。しかも、所々に抜け道のようなものはあるが、雪兎がそれを知らぬとは思えない。つまりは何らかの罫である可能性が濃厚なのだ。

「ははっ、ガチで俺対策じゃん、これ」

この上無いピンチのはずなのに、一夏は笑みを浮かべていた。だが、それも無理は無い。何故なら、雪兎が対策をしてくるといふ事は、一夏はちゃんと雪兎が対策すべき対象と認識されているという事。つまり雪兎に認められている証拠なのだ。

「いいぜー！こんなの突破してやるよー！」

「そう来ると思ってたぜー！一夏ー！」

そう言つてあえて罫と思われる道を突き進む一夏。そんな一夏に雪兎も専用武器である銃剣を手にし狙撃するが、一夏はそれも回避し雪兎へと迫る。

「まだだー！」

その狙撃の雨を最初は雪羅のシールドで防いでいた一夏だが、シールドエネルギー残量が少なくなってきたため、直撃コースのものだけを切り払い強行突破を始めた。煌月白牙だけでは切り払えないと判断するや否や一夏は左手にとある武器を呼び出した。

「箒、使わせてもらおうぞー！来いー！」空裂「ー！」

そう、それは箒の紅椿の刀の一振り空裂。あの決勝戦の前夜に紅椿が箒に提案したのは一夏に空裂を貸す事だったのだ。

「空裂だ?!」

これには流石の雪兎も驚愕した。今まで散々他の武器を使う事を拒んでいた白式が他のI Sの武器を使っているのもそうだが、その武器が空裂だった事にも雪兎は驚かされていたのだ。

「お前のそんな顔が見られたなら苦労して白式を説得した甲斐があつたな!」

一夏は空裂を器用に使い、雪兎の設置した機雷を破壊しながら徐々に距離を詰めてくる。そして……

「雪兎!これが俺がこの一年で培ってきた全てだ!」

一夏は瞬時加速と零落白夜を発動し、ついに雪兎を捉えるが「残念、それは残像だ」

一夏が切り裂いたのは雪兎の姿に似せた機雷の集まりだった。一方、本体の方は先程とは別のアドヴァンスドを追加装備して少し離れた場所にいた。

「えっ?」

「AtI:憑神typeイニス」……一夏、俺にこれだけの手をトーナメントで使わせたのはお前だけだ、誇っていいぜ」

イニスとは幻覚を操るアドヴァンスドで、機雷のエネルギーを増殖で増大化し幻影を被せて自身に偽装、自身は不可視化して隠れていたのだ。

「悪いな、空裂は流石に予想外だったが、お前がそこまで辿り着くのは計算の内さ」

「畜生、まだ届かねえのかよ」

「そんな簡単に追い付かれてたまるかよ……でも、この試合は中々に楽しめたぜ、一夏」

雪兎がそう言い終わると、一夏が斬った機雷が爆破し一夏のシールドエネルギーを削り切り試合終了のブザーが鳴った。

『決着うく!!激闘を制したのはやはりこの男!天野雪兎だああああ!!』

シールドエネルギーを失いボロボロの一夏の白式を雪兎の雪華が支えながらゆっくりアリーナの中央へと降り立つ。

「届いたと思ったんだがなあ」

「憑神シリーズ2つも使わせといて贅沢な奴め」

「とうか、その憑神シリーズってどんだけあるんだよ」

「ん?あと5つはあるぞ」

「まだそんなにあんのかよ!?!」

「一夏あゝ」

そんな雪兎の言葉にげんなりしているといつもメンバーが二人に駆け寄ってくる。

「ごめんな、箒。空裂まで借りたのに勝てなかったよ」

「いや、お前は頑張った!他の誰も認めてくれなくても私が認める!」

「そうよ。あの雪兎ハツキヤラにあれだけやったんだから十分な成果よ」

「そうですわ!あの戦いを見て一夏さんを馬鹿にする方なんていませんわ!」

「確かに敗けはしたが、恥ずべき戦いでは無い。胸を張れ」

箒、鈴、セシリア、ラウラの四人がそれぞれ一夏に称賛の言葉を贈る。

「雪兎、結構手こずったみたいだね?」

「ああ、あの短い時間で俺の予想以上に成長してやがったわ。おかげで隠し札二枚も晒す羽目になったぜ」

「その割には随分嬉しそうだけど?」

「そうか?」

「そうだよ」

一方で雪兎もシャルロットと共に一夏の成長を喜んでいた。そこに楯無もいつものように「お疲れ様」と書かれた扇子を片手にやってきた。

「二人共、良い試合だったわ」

「ありがとうございます!」

楯無も二人の試合に称賛の声を贈ると、一夏はISを解除し楯無に頭を下げた。

「お勤めご苦労様、会長」

雪兔もISを解除し、裏方に回っていた楯無を労う。初日以降は雪兔が試合に出る回数が増える事から警備は楯無達更識が主導で行われていたのだ。まあ、初日に散々やっておいたので二日目以降は特に大きなトラブルは無かったようだが。

「一夏君、よく頑張ったわね。お姉さんは嬉しいわ」

しかし、ストレスは溜まっていたようで、楯無はその鬱憤を晴らすかの如く一夏を抱き締める……一夏の頭を自身の胸に押し付けるように。

「た、たた楯無さん!?!」

これに一夏は戸惑い、箒達は殺気立つものの一夏がいるのとまだ観客がいる事から流石に手出しは出来ない。楯無もそれがわかっていてやっていっているのだろう。やはりこの女は侮れない。だが、放つてはおけないので雪兔が一夏を楯無から引き離す。

「ぶはっ!」

「全く、わざわざこいつらに見せつけるようにやらんでくれ……火消しが面倒だ」

「ごめんなさい」

「やりたきや二人きりの時にしろ」

「あら?やるな、とは言わないのね?」

「[[「うんうん」]]」

楯無の言葉に箒達は言つてやれ!と言わんばかりに頷くが……

「純粹にこいつを好いての行動なら何も言わねえよ。一夏が誰と付き合おうが俺には関係無いからな」

四人の期待とは裏腹に雪兎は楯無が一夏にアプローチするのは構わないと告げる。

「お、お前は誰の味方なのだ!」

「そうよ!この泥棒猫の肩持つ気!」

「知らん。一夏争奪戦は俺の管轄外だ」

幼馴染二人の言葉をばつさり切り捨てる雪兎。そんないつもの光景に皆は誰となく笑い出す。

「さて、馬鹿騒ぎはこのくらいにしてそろそろ行くぞ……あちらで我らが担任がお待ちだようだ」

雪兎がそう言つて指差す方を見れば表彰式の準備を終えた千冬らが彼らを待つていた。それを見て皆は慌てて千冬の元へと駆け出す。そんな中、シャルロットが雪兎に訊ねる。

「雪兎、楽しかった?」

「ああ、とつてもな」

十六章 兎と春休み

140話 春休みと新たな仲間 兎、名付ける

少々トラブルはあったものの、無事にトーナメントを終え春休みに入った雪兎達。I S学園では長期休暇は主に母国へ成果を報告に帰る生徒に配慮して長めの休暇が設けられている。

「ふう」

そんな中、雪兎は一般の部のトーナメントで得た量産機のデータをまとめたり、とある合同プロジェクトで開発され、試作したはいいが乗れる者がおらず、結局はプロジェクト・フロンティアに押し付けられたとある試作機の改良をしたりしていた。

「雪兎、そろそろ一度休憩したら？」

「ああ、丁度一区切りしたところだしな」

そんな雪兎にシャルロットは紅茶を差し入れ休憩を促し、雪兎の見ていた画面を覗き込む。

「それが例のじゃじゃ馬？」

「欧州イグニッションプランとプロジェクト・フロンティアの共同開発した新型【黒雷】。

加速性能がちよつとぶつ壊れてて並みのパイロットじゃGに耐えきれずに意識が飛ぶんだとよ」

そこに映っていたのはイグニッションプランとプロジェクト・フロンティアが持てる技術を注ぎ込んで開発した次世代機【黒雷】。このIS、そのじゃじゃ馬っぷりからテストパイロットの半分以上を病院送りにしたというところでもISなのだ。

「ISにはパイロット保護機能あるのにな？」

「それ以上のGが掛かるらしい。調べてみりゃトップスピードはライトニング・アサルトやバルニフィカスに劣るが、トップスピードに至るまでの時間はその半分以下。ほぼ一瞬でトップスピードまでいっちゃまうから掛かるGがとんでもない事になってる」

「なるほど……確かにその加速じゃパイロット保護機能もまともに機能しないね」「よっぽどの耐G適性なきや使いこなせんさ、こいつは」

「なら加速性能に制限を掛けてみたら？」

「そしたら今度はまとも動かねえときた」

「うわあ、なんて極端な……というか、どうやって減速するの、それ」

「A I C」

「えっ？」

「自身に一瞬だけA I Cかけて無理矢理停める」

「……馬鹿なの？それ思い付いた人」

「今回ばかりはシャルに同意するよ」

最終的に他の技術者達もお手上げ状態になり、雪兔に預けられたのだが、雪兔を持ってしてもその改良はあまり進んでいないという規格外のISだった。

「多少は加速Gを軽減は出来たが、正直俺でも意識飛ぶかもしれん」

「それ、人間が乗れるの？」

「……人間辞めねえと乗れないかもな」

「というか、よくこんなIS作ったよね」

「……まあ、原因は俺が提供したデータのせいなんだがな」

おそらく、某一角獣シリーズと某玉璽のデータが使われたのだろう。その目の付け所に関しては是非とも直接話してみたいと雪兔は考えていた。

「あとはこの前のトーナメントで使われた量産機の稼働データ？」

次にシャルロットが見つけたのは量産機の稼働データだ。PF産の鋼、フランスのリヴァイヴII、イギリスのブルー・アクシス、ドイツのハイゼの4種だが、既に配備済みのリヴァイヴIIや打鉄と操作性の変わらない鋼と違い、ブルー・アクシスとハイゼの2種は今回のトーナメントが初の表舞台という事もあって選んだ生徒は少なく稼働データも少ないようだ。

「来年度からは中国の新型量産機やアメリカの量産機も加わるらしいから一般生徒にも戦術バリエーションが増えてくるだろうな」

「専用機持ちだからって気が抜けなくなってくるね」

今までは打鉄とリヴァイヴの二択だったのに比べると、来年度から入学してくる生徒はかなり恵まれた環境で学べるだろう。そんな事を話していると、雪兎の端末に通信が入る。

「……はい……えっ? 本当ですか!？」

「雪兎?」

雪兎の驚きようにシャルロットが首を傾げると、雪兎は通信を終え、その理由を説明する。

「前に研究所で助けた子いたろ? あの子が目を覚ましたらしい」

「えっ!?ほんとに!」

「今から面会してこようと思うんだが、シャルはどうする?」

「一緒に行く!」

二人が支度をして保護した少年がいる病院へと向かうと千冬、東、雪菜の三人が病室の前にいた。

「来たか」

「織斑先生達も彼の様子を？」

「ああ、少し気になる事があつてな」

「気になる事？」

「それはこの東さんが説明しよう」

それに質問答えたのは東だった。

「彼は色々と特殊だからね、自我や知識の有無の確認、洗脳や暗示等が掛かっていないかとかの確認だよ。結果は自我はあるし知識も会話出来る程度にはあるし、洗脳や暗

示、危険思想とかもなさそうだね。というか、あの子は色んな意味でかなり真っ白だよ！」

あの研究所がどういう施設だったかを考えればこれらの調査はされても仕方あるまい。

「でも、問題が一個だけ」

「問題？」

「……あの子、IS適性あるみたい」

「……えっ？」

「皮肉だよねえ、私に嗅ぎ付けられて放棄した実験体の一人がその成功例だったなんて」

そう、保護された少年は奇しくもあの研究所で行われていた「人為的に男性のIS適性を産み出す」という研究の成功例だったのだ。

「……おいおい、とんでもない爆弾じゃねえか」

「ああ、だから今後は病院から学園に移す事になる」

「あの子の保護と教育の為ですか？」

「その通りだよ、シャルちゃん」

三人目の男性操者を保護するというのと、ほぼ真っ白な彼をマドカのように裏組織に

利用されないようにする必要がある。千冬達はその移送計画を話していたらしい。

「あのく、誰かいらしたのですか？」

すると、病室から雪兎達の話し声を聞いた少年と思われる声が出た。

「ああ、お前の会いたがっていたやつが来た」

とりあえず詳しい話は帰ってからという事となり、雪兎とシャルロットも少年と対面する事に。二人が病室へと入ると、薄紫色の髪をした見た目より少し幼い印象を受ける

少年がベッドから身体を起こしていた。

「あつー！」

その少年は雪兎を見た途端、嬉しそうな笑みを浮かべる。どうやら助け出された時の事を覚えていたらしい。

「その様子を見るに俺の事を覚えていてくれたみたいだな」

「は、はい」

それでもまだ話す事には慣れていない様子だ。

「無理はしなくていい。まだ目が覚めたばかりで本調子じゃないだろうしな」

「うん、ゆっくりとでいいよ・・・ええつと」

そこでシャルロットは少年の名前を知らない事に気付いた。

「あつ、すみません、僕には名前と呼べるものが無いので君でもお前でもお好きに呼んで下さい」

そして、少年は何という事もなく、当たり前のようにそう告げる。

「なるほど、〃真つ白〃 ってのはこういう事か」

確かに受け答えは出来る知識はあるのだろう。だが、自分の名前が無い事を嘆く様子が無い。きつと「そういうものだ」と思っているからなのだろう。

「名前が無いのは不自由だろう・・・よし、なら俺が付けてやる」

「えっ?」

雪兎の突然の言葉に少年は驚く。

「い、いいですよ!そんなの!助けてもらっただけでも感謝しきれないのに、いてっ
「黙つとけ……そんなでもって人の好意は黙つて受け取れ、」紫音^{しおん}」

慌てる少年をデコピンで黙らせ、雪兎は彼に「紫音」という名を贈る。

「し、おん?」

「ああ、その髪の色から連想しただけの安直な名前だけど、無いよりはマシだろ?」

「しおん……しおん、僕の名前……」

少年、いや紫音はその名前を噛み締めるように何度も口にする。

「良かったね、雪兎。気に入ってくれたみたいで」

「ならあだ名はしーくんだね!」

すると、そこに束が乱入してくる。それにつられ千冬と雪菜も病室へと入って来た。

「名前を決める手間が省けたな」

「しおんってどんな字を書くの?」

「紫の音って書いて紫音」

「音?何で音?」

「……いつを助け出した時にさ、心臓の鼓動を感じたんだ。それがやたら印象に残っ

てたと言いますか、何と言いますか」

雪菜に訊ねられ、少し恥ずかしそうにそう答える雪兎。

「心臓の鼓動、生きている」音を感じたから「音」って事？」

「文句あんのか？」

「いいや、良いんじゃないか？本人も気に入っているようだしな」

普段から色々々と心労を味わわされてきた仕返しなのか、千冬もニヤニヤとしている。

「よし！紫音君、いや！しいくんはウチで預かる！そもそもゆるくんが拾ってきた子なんだからウチで面倒見るのは当然だよね！」

「おいこら馬鹿姉！犬猫みたいに簡単に決めんな！」

「だってまーちゃん（マドカ的事）だってゆるくんが拾ってきたんじゃない！」

「拾った言うな！確かに引き取るの決めたのは俺だけど、あれはマドカが決めた事であって」

「ならしいくんがウチが良いって言えばいいんだね？しいくん、しいくん、ウチの子になる気はあるかい？」

「えっ？あ、あの、どうしたらそんな話に？」

雪菜に訊ねられ、ようやく正気に戻った紫音が再び困惑する。

「その馬鹿雪菜がお前の名を決めたのは天野なんだからウチで引き取ると言い出してな」

「そういう事。で、どうかな？」

「えっと……」

そう訊かれ、紫音は一度雪兎を見てから再び雪菜の方を見て告げる。

「……よろしくお願ひします」

「やった〜!! いたっ!?!」

「はいはい病室で騒ぐな、馬鹿姉」

喜びを露にするいい大人雪菜に紫音の時と違い容赦の無いデコピンを食らわせ黙らせる雪兎。

「……迷惑でした？」

そんな雪兎に紫音が恐る恐るそう訊ねる。

「ちげえよ、あの馬鹿姉が勝手に話を進めるから怒っただけだ……お前がそれでいいなら好きにしろ」

「はい!」

「あく、あと、家族になるんだ。今後は敬語とか要らん気遣いは不要だからな？」

「じゃあ、雪兎兄と呼んでも？」

「……既に好きに呼んでる義妹もいるから好きに呼べ」

「うん! 雪兎兄」

こうして、雪兎に新たな家族が増えた。

「問題はマドカにどう説明すつかなあ」

「それなら問題ナツシング！」

「弟が出来たと聞いて！」

丁度そこにマドカがやってくる。どうやら雪菜がメールで連絡していたらしい……

この到着の速さから最初から雪菜は紫音を家族にするのを狙っていたようだ。

「マドカも随分ウチに染まってきたな……どうしてこうなるのやら」

「そういう割りには楽しそうだよ？雪兎」

「シャルも随分と馴染んできたようで何よりだよ」

こうして、紫音は天野家の一員となり、話し合いの結果、春休みに基礎教育をした後にマドカと共に新一年生としてIS学園に入る事が決まるのであった。

141話 マテリアルズ、パワーアップ？ 兔、準備する

紫音が学園に保護されてから数日が経ったある日、雪兔はフライング・ラビットの開発室にてとあるものを開発していた。

「ご主人ご主人、まだ出来ないの？」

「落ち着いて下さいレヴィ、そんなに急かしては余計に時間が掛かります」

「シユテル、お前も楽しみにしておるのか……」

「そういうデИАーチエだってさつきからそわそわしていますよ？」

「ユーリ!？」

「気が散るから完成するまでどっか行つてろよ、お前ら……」

今回雪兔が作っているのはマテリアルズに関するもので、それをマテリアルズは楽しみにしており、さつきから雪兔の傍をうろちよろしていたのだ。

「でもでも！僕達も楽しみにしてるんだもん！」

「だからって、人の周りであろちよろすんな！」

そんな雪兔達の前には4つのカプセルがあり、その中にはそれぞれマテリアルズを人間サイズにした身体が入っている。そう、雪兔が今作っているのはマテリアルズ用の

ニューボデイなのだ。何故こんなものを作っているのかと言うと、紫音の入学に際し、そのボディーガードとしてマテリアルズも同じように入學させてしまおうと考えたのだ。なお、このニューボデイ、人間に限りなく近く作られており、ちゃんと成長もするし、鍛えればそれも反映されるようになっていいる。

「これで皆様ともっと対等な勝負が……」

「シユテル、ほどほどにしておけよ？」

「ダイアーチエ、完成したらまたお料理しましょうね？」

「ふん、ユーリの頼みとあらば仕方あるまい……塵芥共にも特別にまた振る舞ってやるか」

「……よし、これで完成だ！」

そうこうしてる間に雪兎は最終調整を終え、ニューボデイが完成する。

「「「おー……」」」

「よし、新しい身体に移すから準備しろ、って早いな」

雪兎がそう言うのとマテリアルズはすぐにカプセルの前の装置へと移動する。

「そんじゃ、始めるぞ？」

雪兎が装置のスイッチを入れるとマテリアルズはそれぞれのニューボデイに取り込まれていき、それぞれのカプセルの中で目を覚ます。だが、レヴィはカプセル内の培養

液を飲んでしまい、カプセル内でもがき始める。

「レヴィ……」

そんなレヴィに呆れつつ、雪兎はカプセル内の培養液を抜く。

「ゲホゲホッ」

「何やってんだか……着替えはそつちに用意してあるからシャワールームで着替えて
い」

カプセルの中ではISスーツ姿だったマテリアルズ。そのままでうろちよろされては敵わないと、雪兎はシャワールームに用意した服に着替えてくるよう指示する。

「うくん」

しかし、レヴィはその場で何やら首を傾げている。

「どうかしたのか？レヴィ」

「うんとね、服ってご主人が用意したんだよね？」

「……ああ」

「なら下着もー」

「それはシャルに頼んだわ!!男が女物の下着買いに行くとか変態か俺は!!」

「わあ〜!ご主人が怒った〜」

レヴィの言葉につい怒鳴る雪兎。そんな雪兎からレヴィは慌てて逃げようとする

が……

「ふべえ!？」

突如バランスを崩してレヴィがビターン!という音と共に転倒する。

「馬鹿者、慣れない身体でいきなり走るからだ」

「うう、痛かった」

「大丈夫ですか？レヴィ」

「うん、何とか」

てとてとと近付いてきたユーリの手を借りて起き上がるレヴィ。

「マスター、後日アリーナの使用許可申請をお願いします」

「後日？てつきり俺は今日いきなりやるとか言い出すと思ってたが」

「レヴィを見て考えを改めてました。まずはこの身体に慣れるところから始めます」

「ちよっ!？それどういう意味！シユテルン!」

「そのまんまの意味だろう」

「そのまんまだな」

「……そのまんまですね」

「王様にユーリまで!」

その後、着替えを終えたマテリアルズを一夏達に御披露目したり、ディアーチエが

ニューボデイのお祝いに料理をしたり、レヴィが食べ過ぎて倒れたり、シュテルが倒れたレヴィを部屋に連れ帰ったり、アレシアがまたしてもユーリをお持ち帰りしようとして泣かれたり、と毎度の如く騒がしく時間は過ぎていった。

翌日、雪兎は各種点検を行っていた。雪華は勿論、その他に作った発明品の数々の点検となればそこそこ時間が掛かるので、何組かに分けて月に一度点検をしているのだ。

「これはこれでよし、と。次は・・・こいつか」

その日点検していた物の中には前に一度使った異世界転移装置・クロスゲートも含まれていた。

「こいつは誤作動なんかしたらマズイし、ちゃんとメンテしとくか」

そのメンテは約一時間程で終わり、最後に座標を指定せずに起動させ、ちゃんと起動するかどうか確認することに。

「起動つと……ん？」

すると、座標データを入力するコンソールのモニターに見知らぬ座標が表示される。

「こんな座標入力したか？でも、あの馬鹿龍我の世界の座標に近いな」

表示された座標データの軸のいくつかが以前遭遇した万城龍我の世界と同じ値だった。つまり、この座標の世界は彼の世界と比較的近い平行世界なのだろう。また、雪兔のいる世界と龍我の世界とも一致する軸もある。

「ふむ……これはI S系にライダーもしくは龍我関係がクロスした世界という事か？」
異世界の座標には様々な軸が存在し、雪兔はその軸を以下のように定義している。

① ベースとなる世界

これは地球か全くの異世界か等を示す軸。

② その世界の方向性

剣と魔法のファンタジーかロボや戦隊等の科学技術系等の方向性を示す軸。

③ クロスオーバー等の追加要素の有無

これはAの世界にBの世界の要素が含まれている割合やクロスした世界数を示す軸。

④ 乖離率

ベースとなった世界との歴史等の乖離の度合いを示す軸。

e t c . :

今回はこの①②の数値が極めて龍我の世界に近い事が判明したのだ。

「何か罨つぽくはあるが、調べてみる価値は有りそうだな・・・丁度テストしたかった
装備もあるし」

そう言つて雪兎は作業台の上に置かれた少しゴテツとした黒い銃のようなものを手に取る。他にも紅いメリケンサックに似たものや蒼いパスケース、黒と金の装飾がされた指輪に4つのスイツチが取り付けられた白い装置等がある。

「誰だか知らんが、その招待、受けてやろうじゃねえか」

142話 戦闘中の説得は割りと同じない 兎、勘違いされる

クロスゲートに表示された謎の座標データ。その調査の為、雪兎は一度その世界に行ってみる事にしたのだが……

「何で僕は一緒に行っちゃダメなのさ!」

「だから言ったろ? 向こうはおそらくここ^{IS}と限りになく似た世界で、もしシャルが向こうのシャルと接触したらややこしい事になるんだよ」

「むう〜」

珍しく雪兎とシャルロットが言い争いをしていた。原因は座標データの世界がISをベースにした異世界だという事で、雪兎がシャルロットの同行を認めなかったのだ。「その分、今回の一件が片付いたらデートでもなんでもしてやるから」

「絶対だからね!」

また、雪兎一人では何かやらかしかねないと、サポート要員としてマテリアルズからシユテルも同行する事になった。

「シユテル、雪兎をよろしくね」

「わかりました、シャルロット」

ちなみに二人とも今回は私服である。これは下手にIS学園の制服で行って要らぬ誤解を発生させない為だったのだが……

「そんじゃ、行ってくるわ」

「いつてまいます」

そう言つて二人はゲートをくぐり座標データの世界へと旅立った。

「ここが問題の世界か」

以前の龍我の件からIS学園から離れた場所に雪兔達。一見普通の世界に見えるの

だが……

「ん？あれは」

回りを見渡していると、シユテルは学園方面からやってくる人影を発見する。だが、それは人ではなく白い装甲と鋭い嘴、他にも身体のあちこちに針のような鋭い刃を生やした異形の姿だった。

「あれは、もしかや……」

その異形の者にシユテルは前に遭遇した怪物・スマツシユを思い出す。すると、そのスマツシユはシユテルに向けて嘴から針を射出出す。

「早速コレを試す機会に恵まれましたか」

シユテルは紅のナツクルを右手に、素早くベルトのようなものを腰に巻き、掌にナツクルを当てる。

『Ready?』

「炎装」

そして、ナツクルをベルトへと填める。

『First On』

電子音に合わせ熱風が吹き、シユテルの姿が私服から紅の鎧へと変換される。シユテルを狙った針も熱風にはじかれてしまい、それを見ていたスマツシユは困惑する。

「レプリカライダー・エグザ、炎と燃えて参ります！」

その隙に一気にスマツシユの懐に潜り込んだシユテルは腹部に容赦の無いボディ―ブローを叩き込み、よろめいたスマツシユの顔面をナツクルを装備し直した右の拳で撃ち抜く。

「?!?!」

その流れるような連続攻撃にスマツシユは対応出来ず、切りもみ回転をしながら10M程吹っ飛んでいった。そして、そのスマツシユはそのまま動かなくなつた。

「おー、結構飛んだなあ……どうだ、エグザは？」

その様子を静観していた雪兎はシユテルにレプリカライダーシステムtypeエグザの使い心地を訊ねる。

「問題ありません、マスター。ただ、少々相手が物足りなかつたです」

「だよなあ……瞬殺だったし」

レプリカライダーシステムとは？雪兎が龍我のクロースから得たデータを元に開発した特殊。ワードスーツシステムで、シユテルが使つたエグザはイクサをベースにアレンジを加えたものだ。見た目はシユテルに合わせてヘルメットパーツを廃し、シユテルのバリアジャケットにイクサのアーマーを装着したような姿だ。色もシユテルカラーに変更されている。

「何でスマッシュユがこんなところにいたかは兎も角、成分は戴いておくか」

そう言つて雪兎は前に作つた残りのエンブレイボトルをスマッシュユに向け成分を回収する。回収を終えるとスマッシュユは以前とは違い変身者を残さずそのまま消滅してしまう。

「消えた？つて事は普通のスマッシュユじゃねえな」

普通であればスマッシュユに変異した者が残るはずだ。それはハザードレベルでも変わらない（戻つてから消滅する）。だから何も残らないのは普通ではない。そこから雪兎はスマッシュユについて考察するのだが……

「ドオラアアアアア!!」

そこへ突如金色のパワードスーツを纏つた何者かが雪兎に殴り掛かつてきた。

「させません!」

しかし、それはシユテルが間に入りナツクルを装備した一撃で相殺される。

「ちっ、防がれたか」

「おいおい、いきなり何すんだよ」

「は？お前があのだスマッシュユを使って葛城さんのパラレルボトル奪わたんだろうが

!」

「パラレルボトルだと!」

噛み合わない会話の中、雪兎は謎のパワードスーツの男が言った「パラレルボトル」に反応する。実は雪兎、東スタークからパラレルボトルを奪ったまま持っているのだ。尚、その名前も龍我が持っていたメモリにデータがあったので知っている。

「ちよつと待て！話をだな！」

「パラレルボトルを返しやがれ!!」

「マスター、ここは私が」

若干興奮しているのか話を聞かず向かってくる男にシユテルは迎撃態勢に入る。

「「カシラア〜!!」」

更にそこへ赤青黄のカラーリングをした三体のスマツシユが現れる。

(こいつら、オータムの時と同じ意識を保ったスマツシユか?)

厄介な増援に雪兎も黒い銃のようなものを取り出し警戒する。

「シユテル、俺はあつちの三体をやる。そつちは任せていいか？」

「ええ、先程の不完全燃焼な相手よりも楽しめそうです」

「あんましやり過ぎんなよ？後で色々聞かなきゃならねえからな」

「はい」

そう小声で話し、シユテルは金色の男へと向かう。

「よし、俺達もカシラの加勢にー」

そして、雪兎は金色の男へ加勢しようとした三色スマッシュの足元に銃を連射し牽制する。

「おっと、俺を忘れてもらっちゃ困るぜ？三色トリオ」

「誰が三色トリオだ！」

「そーだそーだ！僕達には三羽鳥ってちゃんとした通り名があるんだ！」

雪兎の三色トリオ呼びが気に食わなかったのか、三色トリオ改め三羽鳥が反論する。

「三羽鳥？どう見ても鳥はいねえし、鳥は黄色いお前だけじゃねえか」

「「うぐつ」」

「その造形からして・・・赤いのは城キャッスル、青いのはクワガタス タツ グ、黄色いのは梟オウルだな？鳥要

素0だな」

「「ぐはっ」」

今までまともに突っ込まれた事が無かったのか、三羽鳥達はまるで射ち抜かれたように胸を押さえてよろめいた。

（うん、何かすげー芸人臭いな、こいつら・・・）

その様子を見て雪兎は彼らが悪人では無いと察する。だが、先程三羽鳥にカシラと呼ばれた金色の男が止まらない以上、戦闘は避けられそうに無い。

「仕方ない。コイツの実戦テストがてら相手にしてやるよ、三羽鳥」

そう言うと雪兎は手に持つ銃〔クロストリガー〕の横に付いているボタンを押し、銃を上に向ける。

『Operation Start』

「装着」

トリガーを引くと、雪兎の頭上と足元にリングが出現、それぞれ腰の所まで上下するとそのままベルトのように雪兎に装着され、雪兎を黒いパワードスーツが覆う。

「へ、変身した!？」

「レプリカライダertypeクロス。クロスとても呼んでくれ」

「あ、あんたもカシラと同じ仮面ライダーなのか!？」

「仮面ライダー?なるほど、アイツがこの世界のライダーか」

「仮面ライダーグリス!俺達のサイコオクにカツコイイカシラだ!」

金色の男はグリスと言うらしい。三羽鳥、そんなにあっさり情報バラしているのか?

「まあいい、こつちも始めるとするか!」

手始めに雪兎は三羽鳥に向けてクロストリガーを連射。対して三羽鳥はすぐさま散開しそれを回避するが、唯一空へ飛んだオウルを見て雪兎は少し厚めのカードキーのようなものをベルトのスロットに射し込む。

『Anchor Arm Activate』

すると、左腕に三本爪のアンカークロウが展開する。

「そらよー！」

「えっ……うわあ!!」

射出されたアンカーは見事にオウルの脚を掴む。

「黄羽!?!」

「なるおー！」

黄羽ごとオウルが捕まった事に驚くキャツスル。一方のスタッグはオウルを解放しようとして雪兎に迫るが。

「頭上注意だぜ?」

「何?」

「青ちゃん!そこどいてえええええ!!」

雪兎はアンカーのワイヤーを巻き上げながらオウルを頭上からスタッグに叩きつける。

「がはっ!」

「この野郎!」

「よっ」

その間に雪兎に接近していたキャツスルが手に持つ盾でシールドバッシュを放つが、

雪兎は更にワイヤーを巻き上げて自身をオウル側に引き寄せてそれを回避する。

「お次はこれだ」

『Spiral Arm Activate』

その後、すぐさま新たなカードキーに差し換え、今度は右腕にドリルの付いたアームに換装しキャツスルの右側の盾を貫く。

「なっ!?!」

「ん? 結構硬いな、抜けないわ」

だが、その硬さにドリルが抜けなくなってしまう。

「今だ! 青羽! 黄羽!」

「おうよ!」

「任せて!」

その隙に起き上がったスタッグとオウルが動けない雪兎に襲い掛かるが……

「なんちゃって」

「うおっ!?!」

雪兎はカードキーを抜きSpiral Armを解除、そこで体勢を崩したキャツスルの後ろに回り込み、スタッグとオウルの攻撃への盾にする。

「ぐわああああ!!」

「赤羽!？」

「ご、ごめん!赤ちゃん!」

「……うん、やっぱ使えるな。浅倉式ガードベント」

「てめえ!!」

『Launcher Arm Activate』

「冷静さ欠いたら隙だらけだぜ?」

「があっ!？」

盾にしたキャツスルを投げ捨てる雪兎に激昂したスタッグが両手のブレードで切り掛かるが、今度は左腕にランチャーを展開し、スタッグの腹部にロケット弾を撃ち込み吹っ飛ばす。

「青ちゃん!？」

『RollerLeg Activate』

「動揺すんのはいいが、敵から目離すなよっと!」

「ぎゃふん!？」

あつという間にスタッグも蹴散らされ動揺するオウル。だが次はローラーブレードのようなパーツを装備し後ろに回り込んだ雪兎が容赦無くオウルの後頭部を掴んで地面に叩きつける。

「これでおしまいか？」

「まだだ！」

やれやれといったポーズをとる雪兎にやられたフリをしていたキャツスルが頭を上げてビームを発射するも、雪兎はあつさり回避し、素早くキャツスルとの距離を詰めるとドライブシユートの要領でキャツスルを蹴り、スタツグとオウルの傍へ飛ばした。

「ぐぐ……つええ」

「俺らが三人係りでも無傷かよ……」

「何、あの化け物……」

「うーん、連携は悪く無いんだが、手数やテンポがいまいちかな？あと、味方がやられた時に動揺し過ぎ」

全く手も足も出なかった三羽鳥が悔しげに雪兎を見ると、雪兎は今の戦闘を振り返り三羽鳥をそう評した。しかも、割りと言い返せない評価に三羽鳥もぐうの音も出ない。

「ほら、まだまだやれんだろ？」

そんな三羽鳥に雪兎は手をクイクイとさせて挑発する。

「あんにやろうー！」

「そこまでだ！」

「おっと！」

だがその時、上空から雪兎目掛けて無数の弾丸が降り注ぎ、三羽鳥と雪兎の間にオレ
ンジとガンメタカラーのパワードスーツが降り立つ。

「今度は何だ？」

「僕は仮面ライダービルド。『創る』、『形成する』って意味のビルドだ」

それは仮面ライダービルド。この世界に存在するもう一人の仮面ライダーだった。

「以後、お見知り置きを……正体^{アンノウン}不明くん」

143話 天災（デイザスター）VS天才（ジーニアス） 兎、天才とバトる

仮面ライダービルドを名乗る新しい仮面ライダーの出現に雪兎は警戒を強くする。

「君の相手は僕だ。これ以上、一海くん達の学校で暴れられても困るからね。それに……パラレルボトルを何故狙ったのかも知りたいし」

（パラレルボトルを狙った？それにあのドライバーはビルドドライバーだよな？）

ビルドの言葉に雪兎はいくつかの疑念を抱く。

「マスター！」

「大丈夫だ。俺が相手をする」

シュテルが加勢しようとするが、雪兎はそれを止め、見覚えのあるベルト・ビルドドライバーについて訊ねる。

「そのドライバー、ビルドドライバーだろ？」

「難波の人間である君が、わざわざ確認するかい？」

「どうやら難波とかいう連中の組織の一員と勘違いされているようだ。それでもビルドドライバーである事を遠回しにだが肯定してくれる辺り人が良いのだろう。」

「さて、行かせてもらおうよ！」

「良いぜ。来い！」

『Gatling Arm Activate』

やる気満々のビルドに対し、雪兎もカードキー型のツール・ガジェットキーをスロットに差し左腕にガトリングガンを展開する。

「ツ!!」

ビルドも手に持つガトリングガンで応戦しお互いの弾を相殺し合う。

「くっ、埒が明かない！コレで！」

『ゴリラ！ダイヤモンド！ベストマツチ！』

「ベスト……マツチ!?そんなのがあったのか（というか、あれが本来のビルドドライバーの使い方という訳か）」

2本差しのドライバーにボトルの組み合わせ、そして、数ある組み合わせの中に存在するベストマツチ。雪兎の頭の中でピースが揃い、その脅威度を上方修正する。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『輝きのデストロイヤー！ゴリラモンド！イエー！』

ゴリラモンドというフォームに変化したビルドは見た目通り動きが鈍いのか、攻撃を

仕掛けてくる気配が無い。

「パワータイプなのに攻撃してこない……確かめる価値はあるな。フッ！」

何かを狙っているのは判ったが、その手が読めない為、雪兎は危険も承知でガトリングガンは放つ。

「狙い……通り！」

ビルドが弾丸に手を掲げると、弾丸は当たる前に全てダイヤモンドへと変化する。

「カウンター狙いか！」

「ご明察！」

すると、ビルドはゴリラの右腕でダイヤモンドを砕き、拡散弾のように雪兎に放った。(ダイヤモンドによる防御性能と、それを攻撃に転用出来るだけのパワーのゴリラの組み合わせてか)

これだけでゴリラモンドの性能をおおよそ把握した雪兎は別種のガジェットキーをスロットに装填し装備を換装する。

「回避は難しいか……なら！」

『Shell Bullitt Activate』

右腕がオレンジのガンドレットとなり、右肩には3枚の特徴的な羽を持つシエルブリットを展開、そしてすぐさま1つ目の羽を分解しエネルギーに変換する。

「特攻上等！ 衝撃の、ファーストブリットオオオオオ!!」

そのエネルギーはガンドレット内で荒れ狂い排気口から一気に噴き出す。その勢いを使い雪兎はダイヤモンドの猛攻に自分から突っ込んで行く。

「くっ、特攻ってやはりそう言う事か！」

『Ready, Go!』

それを見たビルドは慌ててドライバーのレバーを回す。それに合わせ雪兎は2つ目の羽を分解し、独楽のように回転を加えた2撃目を放つ。

「当たれ！ 撃滅の、セカンドブリットオオオオオオオ!!」

『ボルテックフィニッシュ！ イエーイ！』

「喰らうかアアアア!!」

お互いの必殺の拳がぶつかり合い、凄まじい衝撃と共に両者は弾き飛ばされる。だが、すぐに二人共起き上がる。

「セカンドが防がれたか……」

「思った以上に強い……. . . だけど！」

（ちっ、今のでシエルブリットがイカレちまったか……. . . ってか、どんな威力してやがんだあの腕！）

すると、ビルドはまたしてもボトルを差し換える。

「今度は何が来るんだ？」

「見てからの、お楽しみさ！」

『ローズ！ヘリコプター！ベストマッチ！』

ビルドがレバーを回すと、ドライバーからガラス管がランナーのように伸びてハーフボデイを形成する。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『情熱の扇風機！ローズコプター！イエーイー！』

それは赤い薔薇とヘリコプターの組み合わせだった。

「どんだけ飛ぶ形態が好きなんだよ！」

「適材適所と呼んでくれ！ハッ！」

そう言うビルドは背中のプロペラを回転させ、浮遊による飛行を行う。そのまま雪兎の上を取ったビルドは右手から黒い茨を出して攻撃を行う。

「クツ、装備を変える隙を与えないつもりか！」

「これ以上厄介なものを使われると嫌だからね！」

茨による連撃に防戦となる雪兎。だが、雪兎も負けじとクロストリガーを取り出し茨を弾く。

「なっ!？」

「今だ!」

『Missile Arm Activate』

その隙について雪兎は左腕にミサイルアームを展開。すぐさま射程距離から離脱を図るビルドだが、その前にミサイルが放たれて命中してしまう。

「うわああああああ!!」

空中から落下し、地面に墮ちるビルド。

「空飛ぶんだから対策されるのは当然だろ?」

「だからって、ここで負ける訳にはいかないんだ!」

『Ready, Go!』

だが、ビルドはすぐに起き上がると再びレバーを回す。そしてバラの茨をブレードに巻き付けて再び空を飛んで突進を仕掛ける。

「予想通りの攻撃だつての!」

雪兎は突進を避けると、お返しに再びミサイルを放つ。ミサイルを避けようとするが、追尾式のミサイルだったが故に回避出来ず命中してしまう。

「グアアツ!!」

ミサイルに迎撃されるビルドだったが、それでもビルドは諦めず背面のブレードを掴

むと雪兔に向かって振り下ろす。

「取り外し、可能オオオオオオオ!!」

「そんなのアリかよ!?!グアツ!」

見事ブレードは雪兔に命中し、大きく仰け反らされてしまう。

「まさか、プロペラが武器だったとはな……」

「ビルドを、舐めないで欲しいね……」

（ほんと、厄介だな……。だが、引き出しの多さに反してパワーはクローズやグリスには劣る。となれば、まだ厄介な手札を持つてる可能性が高い）

どちらかと言えば優勢なのは雪兔の方ではあるものの、雪兔は冷静にビルドを分析していた。

「逆転の法則は……決まった!」

『キリン!扇風機!ベストマッチ!』

ビルドがそう告げて取り出したのはキリンと扇風機のボトル。

『Are you ready?』

「ビルドアツプ……!」

『嵐を呼ぶ巨塔!キリンサイクロン!』

それは右腕と一体化した槍のようなキリンの首と左腕に大型のファンを持つフォー

ムだった。

「また空でも飛ぶのか？」

「さあね・・・見れば分かるさ」

様子見でミサイルを放てばビルドは左手のファンをミサイルに向け、ファンを高速回転させてミサイルを吹き飛ばした。

「嘘だろ、なんつー風力なんだ!？」

思わぬ方法でミサイルを返された雪兎だったが、避ける事を予測していたビルドはファンを雪兎に向ける。

「グウツ、この風力は・・・まずい！」

「風だけがキリンサイクロンと思わない方がいいよ！」

そしてビルドはキリンの首のようなアームを構えると、首を伸ばして雪兎を攻撃する。

「結局叩かれるのかよ！」

「呑気な事言ってる暇は無いと思たまえ！」

風圧で思うように近付けない雪兎を一方的に攻撃するビルド。雪兎にこの状況を脱する手は無くはないが、それは相手も承知の上であろう。そして、明らかにそれを誘うべく、ビルドはまたレバーを回す。

「クツ、やるしかないか……!」

『Spiral Arm Activate』

罠と判つていても左腕にドリルを装備した。そうする他にこの状況を打開する手が今の雪兎には無かったのだ。なのでせめても引き分けに持ち込もうと雪兎はスパイラルアームのスロットにスパイラルのガジェットキーを差し込む。

『Spiral Arm Full Drive』

『Ready, Go! ボルテックフイニッシュ! イエーイ!』

すると、ドリルとブースターが巨大化し、突風を切り裂いてビルドへと突き進む。ビルドもそれと同時にキリンアームを突き出しドリルとキリンの槍が衝突する。

「ぐわあっ!」

「グッ!」

互いに攻撃を相殺した両者は吹っ飛ばされてしまうが、雪兎は何とか空中で体勢を立て直した。

「やはり、使うしかないか……!」

それを見たビルドは赤いアイテムを取り出した。

「やめろ、葛城さん!」

「構わない! ……ここでコイツらを、倒すんだ!」

それを見てグリスが焦ったように叫ぶが、気持ちには雪兎も同じだった。何故なら雪兎もビルドが取り出したアイテムに見覚えがあったからだ。

「ハザード、トリガー……!?!まづい、止める!」

「敵の制止を、聞くと思ふかい!」

『ハザードオン!』

雪兎やグリスの静止を無視しビルドはハザードトリガーの蓋を開けてボタンを押す。ドライバーにセットしているボトルを引き抜くと、トリガーをドライバーにセットして2本のボトルを装填する。

『ウルフ!スマホ!スーパ!ベストマッチ!ドンテンカン!ドンテンカン!ドンテンカン!ドンテンカン!』

ビルドはレバーを掴むと、回しだした。

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!Are you ready?』

そして、ビルドは覚悟決めて告げる。

「……ビルドアップ!」

展開された金属のプレートがビルドを挟み込むと、その姿を変える。そこから現れたのは目の部分以外が漆黒に塗り潰されたスマホウルフ・ハザードフォームである。

『アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！ヤベー！』

「トリガーはヤバいつての！」

『RollerLeg Activate』

そう言いながら雪兎はローラーレッグに換装する。

「時間が無い……短期決戦で行かせてもらおう！」

「それはこつちも同じだ！」

雪兎は全速力で後退しながらクロストリガーで射つてもアプリのアイコンのようなものでブロックされ、ほとんどダメージは無い。

「やっぱりハザードはレベルが違うな……なら！」

『ShieldArm Activate』

ならばとローラーレッグからシールドへ換装し、勢いよく迫ってくるビルドを迎え撃つ。

「これでも食らつてろ！」

放つたのはシールドバッシュ。しかし、ビルドは遅いとも言わんばかりシールドをガッチリと掴む。

「だよなあ……！」

「ハッ！」

「グフツッ！」

シールドを掴んだビルドはそのまま雪兎を殴り飛ばす。だが、これは雪兎にとつては想定通りの結果だ。その勢いを使いビルドから距離を取るのが目的だったのだ。

「コレで、どうだ！」

着地と同時に牽制目的でシールドをブーメランの要領で投げるが、ビルドはそれをあつさり掴み、投げ捨てる。

「これで武器はない。今なら畳み掛け……ツツ!？」

ビルドが攻撃をする為に迫ろうとした瞬間、雪兎が恐れていた事態が起こってしまった。

「まずい、暴走か！」

ハザードトリガーはビルドを大幅に強化するアイテムではあるが、致命的な欠陥を抱えているのだ。それこそが暴走だ。ハザードトリガーは使用者の脳を大きく刺激し、最悪の場合自我を失い見るもの全てを破壊する狂戦士と化すリスクがあるのだ。

「葛城さん!!」

グリスがビルドの変身者の名を呼ぶも、ビルドはガツクリと動きを止めて項垂れる。

「これはちよつとどころじゃなく不味いな……」

ゆつくり顔を上げるビルド。だが、そこにさつきまでの知性は感じられない。

『MAXハザードオン』

そして、災厄の軛は解き放たれる。

144話 ハザードを止めろ 兎、賭けに出る

『オーバーフロー！……ヤベー！』

明らかに不吉な音声と共に漆黒のモヤを纏うビルドが雪兎に迫る。そのスピードも先程とは段違いに速い。

「ちっー！」

シールドを失いガンドレットだけになったシールドアームでそのモヤを纏ったパンチを受けるも、パワーも上がっているようで雪兎はあっさりりと吹き飛ばされる。また、パンチを受けた部分のガンドレットはまるで装甲を溶かされたように拳型の跡が残っている。

「マジで洒落になってねえぞ、これ」

ガジェットキーを抜き、使い物にならなくなったガンドレットを消すが、ハザードと化したビルドは止まらない。

「オオリアアアアア!!」

そこにシユテルとの戦闘で疲弊していたはずのグリスが乱入した。しかも、グリスが仕掛けたのはビルドの方。つまり、ハザードトリガーによる暴走を止めようとしている

のだろう。だが、割り込んだ事で今度は 그리스がビルドの標的になってしまふ。

「 그리스!?! 」

「勘違いするなよ！俺は葛城さんを止める為に割って入っただけだからな！」

どう聞いてもツンデレな発言をしながら 그리스はビルドに向かって左腕のバンカー・ツインブレイカーを振るう。しかし、それでもハザードフォームとなったビルドには通じない。自身へのダメージも気にせず 그리스の顔面を殴り飛ばす。

「がっ！」

그리스の装甲は同じネビュラガスを利用してゐるからかハザードに耐性が僅かばかりあるようで装甲は溶けてはいなかった。だが、ビルドはすぐに 그리스へと追撃に移ろうとしていた。

「させません！」

そこにシュテルがパイロシューターを放ち妨害する。

「シュテル！そのモヤを纏った攻撃には当たるな！溶かされるぞ！」

「なるほど……では前衛はお任せします」

妨害された事で今度はシュテルにターゲットが移るが、それを雪兎が再び攻撃する事でビルドのヘイトを自分に向けタゲを取る。そして、起き上がった 그리스や三羽鳥に向かつて叫ぶ。

「呆けてねえでお前らも手伝え！」

「えっ？」

「何で難波の手先の言う事をー」

「だ・か・ら！俺はそんな連中知らねえつての！どいつもこいつも人の話聞きやしねえ」
改めて雪兎がそう言うのと、グリスと三羽鳥は暫しポカーンとしていたが、慌てて円陣を組む。

「な、なあ・・・これって、もしかして・・・やっちゃった？」

「あ、あいつの言葉を信じるなら、ですが」

「それよりも今は葛城さんを正気に戻す方が先決だな」

「さっさとしろ！取り返しのつかない状態になっても知らんぞ！」

「おい！それはどういう事だ！」

悠長に話し合いをしているグリス達に雪兎がそう告げると、そこにグリスが食いついた。

「説明してやるから俺と代われ、三羽鳥！但し、接近戦はするなよ」

「お、おう！」

「わかった！」

そう言つて三羽鳥と交代した雪兎はグリスへと説明を開始する。

「まず、あのハザードトリガーつてのは時間経過と共に一時的にはあるがハザードレベルを徐々に引き上げていく特性がある」

「ハザードレベルを？」

「ああ、そもでもってハザードレベルの数値は高くなればなる程に力を増すが、当然デメリットも存在する」

「デメリットだと？」

「まずはレベル1. 0以下、スマッシュ化したら例え成分を抜いたとしても消滅する。レベル1. 1以上2. 0未満、スマッシュ化する。このレベルなら成分を抜きや助かる。レベル2. 0以上、スマッシュ化せず人間の姿保てる。ライダー予備軍だな。レベル3. 0、ビルドドライバー使用可。それで少し飛ばしてレベル6. 0、人間の限界。これを超えたら人間辞めてる。レベル7. 0、普通に変身出来る許容値。そして、これ以上は人体の方が持たん。下手をすれば変身しただけで消滅しかねない」

「でも！それなら葛城さんはまだ5. 0にもなつてないし大丈夫なはずじゃ」

「但し、例外もある」

「えっ？」

「ハザードトリガー等の外的要因で急激にハザードレベルを上昇させた場合、上昇値にもよるが、肉体がハザードレベルに耐えられず消滅しかねない。こいつに搭載したハ

ザードレベルスカウターによるとビルドの現在のハザードレベルは5・4、上昇値は1・1つてどこか。ハザードトリガーによる一時的な上昇とはいえかなり上昇してる。上昇値が2・0を超えたら危険域だと思え」

これは雪兎との戦闘での上昇値も込みの数値だ。だが、このまま上昇し続ければ危険な事には変わり無い。

「な、なら早く止めないとー！」

「ちよっ!?!」

それを聞いて焦ったグリスがビルドへと突撃するが、ハザードレベルの上昇したビルドにはグリスの攻撃は通用せず、再び弾き飛ばされてしまう。

「アホか！今のお前のハザードレベルじゃ5・0超えたビルドに通用する訳ねえだろー！」

「だったらどうしろってんだよー！」

雪兎とグリスがそんな言い争いをしていると、ビルドは弾き飛ばされたグリスが落とした2本のボトルを手に取る。

「あっ！」

「やばっ！」

『フェニックス！ロボット！スーパーベストマッチ！ドンテンカン！ドンテンカン！ド

ンテンカン！ドntenカン！』

そして、ビルドはウルフトスマホから拾ったフェニックスとロボットにボトルを変更する。

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！Are you ready?』

そのまま無言でレバーを回し、ボディを生成するプレートを出現させ換装。

『アンコントロールスウィッチ！ブラックハザード！ヤベーイ！』

フェニックスロボハザードへと変貌する。

「また新しいベストマッチかよ」

「気を付けろ！フェニックスは炎を操り、ロボットはパワーと防御に優れてる！」

「うわあ・・・一対多にはベストマッチなフォームじゃねえか」

すると、ビルドは黒いモヤの混じった炎弾を放ってくる。

「これで遠距離も安心出来なくなった訳だ」

炎弾以外にも火炎放射を使い、近付けば重い打撃を放てる厄介なフォームになったビルドに雪兎達は攻める事が出来ない。

『MAXハザードオン』

だというのにビルドはダメ押しとばかりにハザードトリガーのスイッチを押しレ

バーを回す。

『オーバーフロー！．．．ヤベーイ！』

「ハザードレベル5・9、本気で余裕ねえぞ、これ」

上昇値が1・6を超え危険域に近付いてくる中、雪兎は覚悟を決める。

「グリス！一瞬でいい、隙を作れ！」

「何か手があんのか!？」

「一か八かだがな」

『BlendTonfa Activate』

そう言い、雪兎は可変式のブレード内蔵トンファーを装備する。

「行くぞ！お前らあ！」

「「おう！」」

雪兎の言葉を信じる事にしたグリスが三羽鳥と共にビルドへと仕掛ける。まずはオウルが両手の球体「フォレストシーカー」を飛ばして攪乱、そこにスタッグが双剣「ラプチャーシザーズ」で切りかかる。そこでよろけたビルドがすぐに右腕をスタッグに向けて火炎放射を放とうとするが、シユテルのパイロシューターに妨害され、キャツスルの無事な左の盾「グランドランパード」のシールドバツシユで弾き飛ばされる。

「うおらああああ!!」

そこにグリスのツインブレイカーが炸裂しビルドは大きくよろける。

「今だ!」

「……少し我慢しろよ!」

『BlendTonfa FullDrive』

グリスの合図に合わせ、雪兎はブレードトンファアのスロットにガジェットキーを差し込む。さらにクロストリガーを左手に構えて跳躍。上からエネルギー弾を乱れ射ち、防御態勢になったビルドの懐に潜り込みラッシュを放つ。

「おらおらおらおらっ!!」

拳打、膝打ち、踵落とし等を含めたラッシュを浴びせ、ビルドを浮かせると回し蹴りで大きく弾き飛ばす。

「コード麒麟!」

そして、ブレードトンファアのブレードを展開。

「でいいいやっ!!」

一気にビルドへと近付きアッパースイングの一撃を叩き込む。その一撃がクリーンヒットしたビルドは地面に倒れ伏すと変身が解けた。

「……やった、のか?」

「生体反応を確認。気を失っただけのようです」

倒れたビルド・葛城に近付きシユテルが脈を確認するが、ただ気を失っただけのようだ。

「変身解除ギリギリのダメージを狙ったが、上手くいったか」

葛城の無事を確認し、グリス達へ敵意が無い事を示すべく雪兎も変身を解除する。それを見たグリス達も雪兎に敵意が無いと判りそれぞれ変身を解除する。

「さてと、その兄さんも休ませんといかんし、お互いに情報交換もしたいんでどこか落ち着ける場所まで案内してもらえないか？」

145話 巡り会う者達 兎、奇妙な縁を感じる

「うん、わかっただけはいたが……やっぱりIS学園か」

グリスに案内されて雪兎達がやってきたのはこの世界のIS学園だった。三羽鳥は葛城を医務室に連れて行ったらしく、雪兎とシュテルはグリスが事情を説明してくれたおかげでトラブルなく（ある意味トラブルは既に済んだとも言える）学園へと入る事が出来た。その後、雪兎達は一先ず会議室へと通され、この世界の織斑千冬と山田真耶、そしてグリスこと猿渡一海に事情を説明する事になった。

「……なるほどな。それで調査に来てみれば、いきなりスマッシュに遭遇し、猿渡に絡まれ一悶着あったと？」

「そうなりますね」

尚、一海は話も聞かずに攻撃を仕掛けた件で出席簿アタックの餌食になって頭を押さえながら雪兎と千冬の話聞いていた。

「それにしても別の世界とはいえ、あの馬鹿東の弟子とはな」

「俺自身もちよっと色々やり過ぎて兎ラビット・デイズスターの皮を被った災害なんて呼ばれてますけどね」

「や、やり過ぎたとは？」

「……キャノンボールファストで専用機持ちを過半数撃墜しました……一人で真耶の質問に雪兎がそう答えると、千冬は額を押さえながら「確かにアイツの弟子だな」と納得し、真耶はその非常識さに固まる。

「キャノンボールファスト?」

そんな中、一海だけはキャノンボールファストを知らないのか首を傾げる。

「ISを使った妨害有りのレース競技の事だ。IS学園じゃ9月にそういう催しがあるんだよ」

「へえ……って事はお前はこつちより先の時間から来てるのか?」

「こつちは3月だったからな」

「へえ、龍我のやつ時はそんなに離れてなかったが、平行世界毎に差でもあんののか?」

「シユテルからチラツと聞いてはいたが……アイツこつちにも来てやがったのか」

聞けば雪兎達と出会った後の、具体的には福音戦後辺りの龍我がこの世界を訪れたらしい。おそらくまた東スタークに連れて来られたのだろう。そして、雪兎の話が受け入れられたのも龍我という前例があったからのようだ。

「なるほどなるほど、実に興味深い」

「か、葛城さん!」

すると、医務室に運ばれたはずの葛城がいつの間にかそこにいた。

「い、いつからそこに!？」

「龍我の話を始めた辺りからいたぞ?」

一海や真耶は驚くが、雪兎、シユテル、千冬は気付いていたようだ。

「さて……先程はすまなかつたね、アンノウン君」

「雪兎、天野雪兎だ。天の野原の雪の兎と書く」

「シユテルⅡスタークスと申します。シユテルとお呼び下さい」

「僕はてえん才物理学者の葛城巧だ。葛の城に巧いと書く」

誤解も解けたようで、葛城が伸ばした手を雪兎は握り握手する。

「改めて言うよ、先程はすまなかつた。あと、暴走を止めてくれてありがとう」

「事情はさつき大体聞きました。状況が状況なのでこちらも勘違いされても仕方ないで

すよ」

葛城が合流したのは丁度雪兎が三羽鳥と戦っていた時、あれだけ見れば十分に敵対されても無理は無い。

「つまりは猿渡の勘違いが原因という訳か」

「うぐっ」

それも大元を正せば話を聞かずに仕掛けた一海が悪い。

「ところで君達が使っていたツールは自作なのかい？」

「ええ、以前に龍我のビルドドライバーを解析した時のデータを使って作った物ですよ」

「良ければデータを取らせて欲しいのだけでも」

「何ならデータお渡ししましょうか？」

「いいのかい!？」
一方、雪兎と葛城は共通の趣味？からか初対面の時の事が嘘のように意気投合している。

「そういえばシュテルが使ってた変なボトルは何だ？スプレッドとか言ったか」

「ライダーシステムの話のついでとばかりに一海がシュテルが使った謎のボトルについて訊ねる。

「ん？ああ、^{エレメント}属性元素ボトルの事か」

「エレメント？」

「ボトル？」

「ああ、こつちの世界じゃボトルの浄化する仕組みが判らなくてな、だったらとエンブレッドに少量のネビュラガスと属性エネルギーを無理矢理詰め込んで作ったボトルだ。まあ、無理矢理詰め込んだせいで一回使うとエンブレッドに戻っちゃうんだがな」

そうやって雪兎は以前にも使ったブレイズの他にスプレッド、ストーム、ボルテック

のボトルを机に並べた。

「お、おー!!ベストマッチやハードスマツシユのボトルとは違うフルボトルだって!まさかそんな物が作れるなんて!盲点だった!」

これには葛城も大興奮だ。

「元々はクローズナツクル用に作ったもんなんだけど、結局は未完成のままだな」

「クローズナツクルの?という事は……」

「クローズナツクルも俺の作品だが」

「な、何だって!?!」

「その証拠に……ほれ」

続いて雪兎が storage から取り出したのは試作品のナツクル mark II。まだ塗装されていないのかガンメタカラーの無骨な印象を受ける。

「属性元素ボトルの試験運用の為に作ってたやつだ。まあ、シユテルのエグザとかにはもう実戦レベルで使えるシステムがあるから不要になっちゃった代物だけだな」

すると、葛城が雪兎の手をガシツと握る。

「雪兎君、後で僕の研究室に来ないかい?」

「是非!俺も葛城さん、いや、巧さんの作品と研究には興味がある」

「おほんっ」

「その話は後にしてもらえませんか？」

すつかり仲良くなった二人に千冬が咳払いし、シュテルが話を戻す。それは難波重工の目的だ。

「難波重工がパラレルボトルを奪ったのと天野がこの世界に来たのは偶然では無いだろう」

「でしようね。大方、龍我の世界のスタークが情報をリークして難波会長が興味を持った、というところでしょう」

「難波重工ねえ・・・聞いてる限りだとろくな企業ではなさそうだな」

おそらく雪兎のクロスゲートが受信した座標データは難波重工の発したものと見て間違いないという見解となり、パラレルボトルを取り戻すまではクロスゲートも安易にしようしない方がいいという結論に至った。

「ボトルの奪還には俺も協力しよう。俺の専用機はちよつと使うのは自重するが、クロスや他の装備で十分カバー出来るだろう」

「マスターがそうおっしゃるなら私も微力ながらお手伝いさせていただきます」

その為、雪兎達もパラレルボトル奪還に協力する事になった。

「そーいや気になってたんだが、なんでシュテルは雪兎をマスターって呼ぶんだ？」

そこで一海がシュテルが雪兎をマスター呼びする理由を訊ねた。

「それはシユテルが人じゃなくて俺が作った超高性能アンドロイド？ いや、今は人造人間か？」

「えっ？」

「アンド、ロイド？」

「人造人間!？」

「はい。とは言いますが、限りなく人と同じ事が可能なアンドロイドと思って下さい」

「正確に言うと、元々はミニサイズのロボットだったのを、骨格とかを金属フレームで強化した強化人間ボディに意識を移したものでとも言えいいのか？」

サラリととんでもない事を告げる雪兎。

「ラビット・デイザスター兎の皮を被った災害・・・

なるほど、そう呼ばれるだけはあるという事か」

「あわ、あわわわわ!？」

「山田先生！落ち着いて！」

「・・・やはりアイツ東の弟子か」

そんなこんなあつて雪兎はしばらくの間、葛城の元で世話なる事になった。

146話 兔式異世界交流と新・発・明 兔、交流する

「つてな訳で、自分こつちの世界でいる事になった天野雪兔だ。雪兔つて呼んでやってくれ。で、こつちはシユテル」

「いや、何でお前が……いや、そう呼んでもらうけどよ」
「よろしくお願いします」

話し合いの後、一海の案内で食堂を訪れた雪兔達。そこでこの世界の一夏達と遭遇し、一海が雪兔とシユテルを紹介する。この世界の一夏達は龍我の1件もあつてか、平行世界からの客人というのに慣れてるようだ。

「平行世界つて事は、雪兔くんは僕達の事を知っているの？」

「あ、あー……おう、そうだな」

「今の間はなんだよ」

「気にすんな。少し戸惑つただけだ」

この世界のシャルロットの間に雪兔は気まずそうにそう答える。同じ顔をした別人というのは理解しているが、複雑なものは複雑なのだ。すると、早速この世界のセシリアが気になっているだろう事を訊ねる。

「む、向こうの世界の私達は何方かとお付き合いをしているのでしょっかッ!」

「あー、そうだな。一部の奴以外はアイツにゾツコンだな。多少改善されているとは言え、鈍感だけど」

セシリアの質問に雪兎がそう答えると、この世界でも一夏にゾツコンと思われる数人が残念そうに肩を落としている。

「向こうの皆の恋愛事情を聞いても、別に得する事ないだろ?」

「!!!」

一夏の鈍感発言にシャルロット以外が反応して反論する。この光景に雪兎は少し呆れていた。

「頑張つて治してみる」

「おう、頑張れよ……」

この世界でも一夏はやはり一夏らしい。

「カシラは向こうの世界にもいるのか?」

「カシラ……ああ、一海は会つてはいないな。もしかしたら何処かにいるかもしれない」

意外な人物からの意外な質問に雪兎は少し驚きながらも正直に返答すると、ラウラもしょんぼりとする。なので今度は雪兎が皆に質問する。

「ラウラと一海ってどんな関係なんだ？」

「どうと言われてもな・・・憧れの対象？」

「ただ単に懐いてるだけじゃないの？」

（なるほど、こつちでいう聖のポジションに一海がいるわけな）

その質問には箒と鈴が曖昧に答えた。その答えで雪兎も大体の事情を察した。そんな時、雪兎は見慣れぬ少女の姿を見つける。

「そう言えば、一海。コイツは？」

それは青羽の後ろにまるで雛のように引つ付く少女だった。

「コイツか？コイツは小羽。色々あって俺達が面倒見ることになったんだよ」

初対面である雪兎にも小羽が警戒しているのが判った。

「初めまして、天野雪兎って言うんだ」

なので、雪兎は小羽に視線を合わせるようにしながら近づいて挨拶をする。すると、

小羽の視線から警戒が解かれ、雪兎に興味を持ち始める。

「ユキトは、カシラや青羽の友達？」

「友達つつても、今日が初対面だけだな」

「ユキトは敵じゃない？」

「おう、お前に酷いことはしない」

ここまででの会話で雪兎は小羽に何らかの虐待のような事情があった事を察し、内心怒りを抑えた。小羽も今の会話で雪兎が自分を傷付ける人間では無いと理解し、青羽の前に立って手を差し出した。

「よろしく、ユキト」

「おう、よろしく」

小さな手を握手する。青羽はそれを嬉しそうに見ていた。

「初めまして、小羽。私はシユテルと申します」

「……シユテルは、ユキトの友達？」

シユテルも小羽の元へ行くと、挨拶をする。小羽はすぐに雪兎との関係を聞いてきた。

「はい。マスターは私達のマスターです」

「……マスター？」

小羽はシユテルのマスター呼びのせいかな、誰の事が理解出来ないようだ。

「俺の事さ。三羽ガラスや小羽が一海の事をカシラって呼ぶみたいなもんさ」

雪兎が小羽にそう教えると、小羽はすぐに理解したのか、コクコクと頷く。

「よろしく、シユテル」

「ええ、こちらこそ」

警戒を完全に解いた小羽はシユテルと握手をする。

「雪兎くん！」

そこへ部屋の片付けに行っていた葛城がやって来た。

「巧さん」

「待たせてしまったね。部屋の片付けをしていたんだ。さて、早速僕の研究室へ行こう！」

「どうやら、葛城も早く雪兎と色々と技術的な話をしたいらしい。そこで雪兎はある事を思い付き、一海に声をかける。

「あ、そうだ。一海、お前も一緒に来てくれないか？」

「え？どうしてだよ」

「ストツパーが欲しくてな」

「？」

疑問符を頭上に浮かべる一海が雪兎のその言葉の意味を理解するのはもう少し後の事になる。

葛城の研究室へと向かう途中、雪兎達はこの世界の楯無と仲良く談笑する女子生徒とすれ違う。

「彼女は？」

「ん？楯無さんはそっちにもいるんだろ？」

「いや、もう一人の方。知らない顔だったから少し気になっただけだ」

雪兎がそう言うと、突然一海の様子が変わる。

「お前、みーたんを知らないのか!？」

「み、みーたん？」

「今話題のネットアイドルみーたんを知らないとはっ！」

「いや俺、この世界の住人じゃないし」

「シヤラップ！」

そこからは一海がみーたんについて熱く語り出すが、当のみーたんこと石動美空は若干引き気味だ。一方、雪兎はそんな一海に違和感を覚えた。

(何だ?この違和感は?)

「聞いているのか?雪兔」

「す、すまん、少し考え事を」

「あ!!?」

「ほらほら、そのくらいにしとかなないと雪兔君達が引いてるわよ?」

そこで助け船を出してくれたのは楯無だった。

「そもそも異世界の雪兔君達に美空の事言ってもしょうがないでしょ?」

「うっ、言われてみれば・・・」

「ごめんなさいね。彼、美空の事になると少しおかしくなるから」

「これが俗に言うドルヲタというやつですか」

シユテルのその言葉で雪兔は違和感の正体に気付いた。

(あつ、一海の反応がまんま典型的なドルヲタなんだ)

そう、一海の謎のみーたん推しはまるでこうあるべきだと言わんばかりのドルヲタっぷりだったのだ。そしてもう一つ雪兔には気になった事があった。

「一海、お前つてもしかして会長の事ー」

「さ、さあ!早く研究室へ行こうぜ!」

楯無の静止を素直に受け入れた一海の様子から色々察した雪兔がそれを口にしよう

とすると、一海は慌てて雪兎の背を押し研究室へと向かおうとする。

(これ、当たり前っばいな)

その様子から考えが正しいのが証明され、雪兎はからかうネタが出来たとほくそ笑む。そうとは知らず、一海は雪兎を連れて研究室へと急ぐのだった。

「……が僕の研究室さ！」

学園内にある葛城の研究室へと案内された雪兎達。そして、雪兎は早速研究室の物に興味津々のようだ。

「巧さん巧さん！これは？」

「良いところに目を着けたね、それは僕が開発した……」

あつという間に雪兎と葛城はシユテルと一海を置き去りに趣味の話に没頭メカと研究している。

「……この様子だとしばらくは帰ってきませんね」

「だな」

葛城の発明品の後は雪兎の今まで蓄積していた開発データを閲覧し、葛城が狂喜乱舞している。

「あつ、そうそう一海君、グリスコートを出してくれないか？」

すると、意外にも早く葛城が復帰し、一海に専用機グリスコートを出すように指示する。

「えっ？あ、はい」

「うん、そこにメンテナンスモードで展開してくれたまえ」

葛城の指示に従い一海がIS用の作業台にグリスコートを展開する。

「これがグリスコート、確か巧さんが開発した2.5世代機だったか？」

「その通り！当時は難波重工で作成したから予算の関係でそれが限界だったのさ」

「ふむふむ……この構造は……なるほどなるほど」

雪兎は早速メンテナンスモードのグリスコートにアクセスし、色々調べ始めた。そして、とんでもない事を告げる。

「巧さん、これグリスコート弄っていい？」

「ちよっ!? 『弄つていい?』 っってお前—」

「いいよ」

「葛城さん!?!」

「では、早速!」

そう言うのと、雪兎の背中から複数のサブアームが展開する。

「つて、ええええええ!?!」

いきなり現れたサブアームに驚く一海だが、雪兎はそれを無視してグリスコートのデータをEVOLsystemへと送り、いくつかの改造プランを投影モニターに表示させる。

「うーん、そのプランは難しいかな?」

「あつ、やっぱりそう思います?」

「まず一海君に合っていない事と、そもそもコンセプトが……」

「なるほど、ならこっちのプランは?」

「ほうほう、そう来るか。なら……」

葛城と話しながらも既に決定している部分はサブアームで作業を進める雪兎。これには一海も啞然となる。

「うーん、でもこのプランのこれも捨てがたい」

「でも、それをするなら大掛かりな改修が必要だよ？」

「……もう、いつその事腕も全部取っ替えてしまおうか？」

「ちよつと待てや、こらあ！」

半分くらいバラされ、何やらとんでもない改造がされそうになったところで一海が正気に戻り雪兔を止めようとするが、作業に夢中な雪兔に逆にサブアームで拘束されてしまう。

「……雪兔君、それはちよつと」

「……巧さんがそう言うなら」

そこで葛城は一海の意見を尊重し、雪兔を止める。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ」

そこで拘束されていた一海も解放される。その手にはいつの間にかスクラツシユドライバーとロボットゼリーが握られており、その必死さが伺える。

「すみません、マスターは重度のメカヲタクでして……弄りがいのある物を前にするとあなつてしまうんです」

「……ストツパーって、そういう意味だったのかよ」

そこからは一海自身の意見も取り入れつつグリスコートを改修していった。

「ところで雪兔君、そのサブアームユニットも自作したのかい？」

「ええ、マルチツールユニット【魔ルチアームズ】と言いました」

「おい、今、『魔ルチ』とか言わなかったか？」

「おそらく、魔改造マルチを略したのでは？」

「魔改造……間違いないな」

「……それ、僕にも作ってくれない？」

「葛城さん!？」

こうして一海はしきりに雪兎と葛城にツツコミ続ける羽目になり、夕食の為に研究室を出る頃にはすっかり憔悴しており、一夏達がギョツとする事になるのであった。

147話 フルフルとピキピキ 兎、遭遇する

???
side

その日、通路を歩いていた俺は興味深い話を聞いた。

「例の男がこちらに来たようだ」

「それでは例の計画を？」

「その為の鍵は既に我々の手にある」

声が見る方を見ると、少しだけ開いた扉から内海とクロムの姿が見えた。内海の手には先日ブロス隊が奪取した。パラレルボトルなるボトルが握られている。

「天野雪兎でしたか？それほどもでの人物なのですか？彼は」

「何でもあちら側のスタークが手痛いしっぺ返しを受けたそうだ」

「ああ、あのスタークにですか・・・なるほど、それは確かに優秀な人物のようですね」

天野雪兎・・・その名前には少しだけ聞き覚えがあった。何でも平行世界においてラベット^{ラベット}デイザスター^{デイザスター}「兎の皮を被った天災」なる2つ名を持つ技術者にして男性IS操者で、その世界の篠ノ之束の弟子らしい。難波^老会長^若はどうやら彼の持つ技術を欲しているようだ。

「別の世界と言えどスタークに痛手を負わせた人物か・・・」

二人の話を聞くに、一筋縄ではいかない人物のようだが……俺はそこである事を
思い付いた。

「これは利用出来るかもしれないな」

俺の想像通りの人物ならば味方に出来るかもしれない。そう思った俺は早速彼と接
触すべく行動を起こす事にした。

s i d e o u t

「あー、楽しかった！」

グリスコートの改修の後、一段落着いた一海はフラフラと足取りがたどたどしい状態で帰っていった。

雪兎と葛城はコーヒーを、シユテルはココアを飲んで休憩している。

「久しぶりに弄りがいのある機体と出会えました。ありがとうございます」

「いやいや！僕もとても面白くて参考になるものを見せてもらつた！一海くん、ISを使う時だけ1度以外白星あげれなかつたからねえ」

雪兎が頭を下げると、手を振りながら笑顔で感謝し返す。すると、葛城は立ち上がつて自身の机へと歩く。

「……ねえ、雪兎くん」

「はい、どうかしましたか？」

葛城は机に置いてあるハザードトリガーを持つと、雪兎の方を向いて問いかけた。

「どうして、ISを創ろうって思つたんだい？」

「どうして、ですか……」

葛城の言葉に雪兎は葛城の雰囲気が少し変わったのを感じ取る。

「この先、誰かが君の事を裏切るかもしれない。君の開発したISを、利用する奴が現れるかもしれない。それでも、ISを創ろうと思えるその『理由』が知りたいんだ」

ダイナマイトが掘削用から兵器としての爆弾に、宇宙への足掛かりとなるロケットが

敵陣を攻撃するミサイルに、多くの技術の発展や発明の裏にはそのような平和的理由で生まれた技術の「悪用」がある。葛城はライダーシステムを平和を得るための兵器として開発した。しかし、彼のかつての雇い主たる難波はその研究を単なる兵器としてしか価値を見出ださなかったのだろう。だからこそ、葛城は知りたいのだ。自分と同じ技術者である雪兎がどうしてISの開発に携わっているのか、どのような思いでそれを行っているのかを……しかし、雪兎の答えは意外なものだった。

「理由、ですか……俺にとってISの開発は趣味みたいなものですからね……そこまで深く考えた事無いですね」

「しゅ、趣味、かい?」

何処ぞの生まれ変わってもメカヲタクを貫いた騎士団長と同じく、雪兎はそれを「趣味」だと告げる。

「そりゃあ、初めのうちはそんな事も考えましたけど……そんな下らない理由で後で後悔したくないんで」

「後悔したくない?」

雪兎は転生者としてたまたま人生をやり直す機会を得た。だからこそ雪兎は今世は躊躇わないと決めた。

「やらずに後悔するより、やって後悔した方がよっぽどいいじゃないですか。……そ

れに、見てみたいんです」

「?何をだい?」

雪兎が天井を——その先を見る。葛城も雪兎同様天井を見るが、まだ理解出来ずにいた。

「俺の師匠……篠ノ之東が目指した場所、宇宙に行ってみたいんです。まあ、その邪魔をするってんなら全力で排除しますが」

それを聞いた葛城はハツと理解する。ISの本来のあり方、それを雪兎は成し遂げようとしているのだと……。最後の物言いは少し物騒ではあるが。

「ふ、フフフ、ハハハハ!!」

「え、なんでそこで笑うんですか!?!」

「ハハハツ、フフフフ……。いや、すまない!君のISに対しての思いがあまりにも素晴らしすぎて……。適わない訳だよ」

雪兎の答えに葛城は思わず笑ってしまう。それは葛城が忘れかけていた様々な思いを思い出す切っ掛けになった。

「でも、思い出せたような気がする。大切な事を……。ありがとう、雪兎くん!また一つ成長出来た!」

「……。お力になれて良かったです」

何か憑き物から解き放たれたような感覚を感じる葛城。葛城はその手にあるハザー・ドトリガーを見た。

「僕も、目指してみるよ。たった一つの思いや夢に……たった一つ……たった一つ……」

「ピコーン！とアニメのエフェクトが出そうな顔で何か思い付いた葛城は慌ててホワイトボードに駆け寄る。

「巧さん？どうしたんです？」

「そうか、そうだったんだ！何で僕は今まで見落としていたんだ！」

ホワイトボードにスラスラと数式を書き殴る葛城。その数式を見た雪兎はそれが何なのかを直ぐに理解した。

「巧さん、コレって龍我の……」

「ああ、クローズドラゴンの出力の出し方を数式にした物だ。ドラゴンフルボトルは他のボトルよりも強力が故に適正のある人間でない限り扱えなかった」

クローズドラゴンはドラゴンフルボトルの制御不能な程の力を二分割し、それを2本分の出力として扱う事で制御可能にする装置だ。つまり……

「クローズはあまりに強い力を分散させる事でスペックをそのままに変身者に悪影響を与えないようにしていたんだ」

「そうか！ハザードフォームは2本のボトルを使つて変身する。ハザードトリガーが2つの成分の出力を無理矢理同時に上げるから暴走するのか」

「ああ、だから使う成分を1つに限定させる事で、ハザードトリガーのコントロールをすればー」

「1つの成分をハザードトリガーが増長させ、成分を2つ分にできるから、暴走を防げる」

「その通り！最ツ高だ！」

クローズドラゴンと同じ方法で暴走を抑制しよう。そういう事だ。

「それに、これならオーバーフロー状態で運用が可能だ」

「作れそうですか？」

「勿論！僕は、天才物理学者だからね！」

数式を1度消した葛城は新たに数式を書き始める。葛城の目はとても輝かしいものになっていた。

「そう言えば巧さん、一海の・・・グリスの強化はしなくて良いんですか？」

葛城はハザードトリガーを安定して使える装置の開発に忙しくなるだろうと考え、その間にやれそうな事を思い付き、葛城に話してみる。すると、葛城はさつきまでの明るい表情を曇らせる。

「一海くんは……そのままが良い方が気がするんだ」

「……アイツが抱えてる歪みが理由ですか？」

雪兎が一海に感じていた違和感を口にする。葛城はコクリと頷く。

「一海くんは、見る人の『何か』を見ているような気がする。危ない、いや、異常な何かを……」

「成程……俺より長くアイツを見てきた貴方がそう言うなら無理にとはいいませんよ。また何かあつたら言つて下さい」

「ああ、ありがとう。話を聞いてくれて」

「科学者同士、助け合いですよ」

雪兎は葛城の研究室から出ると、端末に表示した 그리스 に酷似したライダーとある試作型のボトルのデータを見つめる。

「一応は用意してみたが、コイツの出番は当面無さそうだな」

それはグリスのデータとビルドドライバーのデータ、そして属性元素ボトルのデータを EVOLsystem で掛け合わせた際に提示された新たな 그리스だ。

「巧さんはああ言つてたが、保険くらい用意してもバチは当たらないよな？」

そう言いながら雪兎は嚴重なロックを施した上でそのデータを 그리스 コートの改造の片手間に八割程まで完成させたナックルに組み込んだ。

翌日、雪兎は外出許可を貰い、1人街へと出ていた。グリスコートは外出許可を貰い、1人街へと出ていた。グリスコート・ヴォルフのテストはシユテルに任せてきた・・・雪兎の雪華では過剰性能でテストにならず、双方がちよつとやり過ぎればこの世界のアリーナでは吹っ飛ぶ可能性も否定出来ない。そして、雪兎がわざわざ外出した理由とは・・・

「まさか、あの店があるとはなあ」

それは雪兎の世界にもあつたとある喫茶店（44話や118話に出てきた喫茶店）を訪れる為だ。「平行世界なんだし、同じ店くらいあるだろ？」と思うかもしれないが、こ

の喫茶店に關しては別だ。その店は色々特殊なのだ。

「とりあえず、行つてみるか」

そう言つて雪兔が店内に入ると、

「いらつしやいませ、お一人様ですか？」

雪兔の世界と同様にオレンジ色の髪をしたアルバイトの少女が出迎える。

「ああ」

「では、ご案内しますね」

そう言つて雪兔が案内されたのは、あちらでは半ば雪兔の指定席となつてゐる席だつた。

「それではごゆっくりどうぞ」

雪兔がその席に着き、注文を終えると、周りの席を確認してみる。どの客も雪兔がよく知る常連客ばかり。雪兔の疑念は確信へと変わる。

「やっぱりか……」

すると、顔馴染みの青髪のウエイターが声を掛けてきた。

「よお、兄ちゃん。今日は一人かい？」

「ああ、今日はちよつとな」

ウエイターの反応からやはりこの店が雪兔のよく知る店であると判る。

「ふーん……まあ、ごゆっくりな」

そう言つてウエイターの男は仕事に戻つていった。

(この店が本物つて事は……あそこにいる常連達も本物つて事だよな?)

「○郎、もう一品注文しても?」

「したらせ○バーの晩御飯のおかず抜きな?」

何やら晩御飯のおかずがどうので揉めてる金髪アホ毛付きとブラウニー。

「良いお店でしょう?」

「いや、何であのナマモノが店員してんのよ!」

「あつ、青いら○サーさんもいますよ!大人の私」

三姉妹に見える三人の聖女。

「見つけましたよ、兄さん」

「げっ、秋○!」

義妹に引き摺られて店を出ていく眼鏡ボーイ。

他にもコーヒーのカッコイイ飲み方を試行錯誤する男や、ふくよか・白衣・アラフィフの黒幕トリオ、次のライブの打ち合わせをする暴君と竜嬢、ネタの打ち合わせをしている幸の薄そうな女芸人トリオまでいる。

「……俺はいつから型○時空に迷い込んだんだ?」

そんな事を考えている間に雪兔の注文したコーヒを猫っぼい何かが運んできた。

「お待ちどう様、ご注文のモーニングセットです」

「お、おう」

雪兔もそこそこここには通っているが、やはりこの猫っぼい何かは見慣れる事はない。すると、猫っぼい何かは雪兔の顔を見て周りをキョロキョロし出す。

「シユテルなら今日はいないぞ」

「そ、そうですかい……あのお嬢さんにはあつしらが逆らえない何かがありました……」
「そういうや、この前公園で読書したら猫まみれになってたな」

この猫っぼい何かも、シユテルが放つ謎の猫吸引物質には逆らえないらしく、前に連れてきた時は猫っぼい何か達が揃って使い物にならなくなった程だ。

「今日のシフトにはバブルスとティステイニーもいるから大変な事になるところでしたぜ」

「シユテルはお前らの事気に入ってたし、またそのうちに連れてくるか」
「せ、殺生な!!」

そんな事を話していると、新しい客が来店してきたようで、丁度暇だった猫っぼい何かが対応したのだが……

「いらっしやいませ、お一人様ですか？」

「!? あ、ああ」

どうやら常連では無い客のようで、グレーのスーツに黒のコート姿の彼は猫っぽい何かに酷く驚いている。

「空いてる席は……では、こちらへどうぞ」

常連客では無い彼に常連客混雑とした場所の席の近くへ案内するのは酷だと思った猫っぽい何かは

雪兎のすぐ後ろの席へと彼を案内した。

「ご注文はお決まりで?」

「で、ではコーヒーを頼む」

「かしこまりました」

猫っぽい何か注文を聞き終え去っていくと、彼は安堵の息を吐く。

「……まあ、初見じゃアイツらはインパクト強過ぎるわな」

そんな彼に雪兎は声を掛けた。

「!? あ、ああ……」

一方で、彼は声を掛けられるとは思っていなかったようで、声に少し動揺が見える。

「そんな固くなんなよ……元々俺に用があったんじゃないのか?」

「なっ!?」

「どうやったかは知らんが、姿は見えなかったのに気配は駄々漏れだったぞ?」

雪兎は彼が学園の外に出てからずっと尾行していた事に気付いており、気付いてはいしたが敵意はなさそうなので見逃していたのだ。

「まあ、背を向けたまま話すのも面倒だ。こっちの席にこいよ……少なくともこの店の中でなら聞かれる事はないぜ？」

「……わかった」

こんな回りくどい接触をしてきた事から何らかの事情持ちだと判断した雪兎はマドカの時と同様にジャミングフィールドを展開して話を聞いてみる事にした。が、丁度そこへ猫っぼい何か¹が彼の注文したコーヒーを持ってきた。

「お待たせいたしました。お二人ともお知り合いですか？」

「まあ、朝からの長い付き合いつてやつだ」

「?」²と³りあえずご注文のコーヒーになります」

猫っぼい何かの問いかけに某メダルクラッシュャーのような言い回しで返す雪兎。

「で、俺に何の用かな? 氷室幻徳君?」

「!? 何故それを……」

あつさり⁴と正体を見破られた幻徳は先程よりも動揺した素振りを見せる。そんな幻徳に雪兎は理由を説明する。

「理由は3つ……1つ、俺の事を知っているのはIS学園か難波重工関係者に限られ

ているから」

これは雪兎が異世界人であるという事から。

「2つ、学園のデータベースでお前さんの顔を見たから」

これは 그리스 コートのデータを解析していた際に偶然見つけた臨海学校での幻徳が写った写真から気になって調べたものだ。その際、この世界のシャルロットと良い雰囲気だったのには少し思う所が無い訳では無いが……

「3つ、俺の勘と推測から」

その他諸々のデータや考察の末に雪兎は何となくではあるが、幻徳が自分に接触してきた理由についてもある程度は察していた。

「……流石は天災だな」

「俺への接触理由はここに仕込まれた異物の処理と難波由来じゃない力……つてところか」

そう言つて雪兎は自身の胸部を示す。

「一を知りて十、いや百を知る……なるほど、あの老害が欲するわけだ」

あつさり目的を看破された幻徳も改めて雪兎の規格外つぷりを理解する。そして、「やはりこの男ならば」と自身の口から目的を伝える。

「その通りだ……俺に仕込まれたこの装置を無力化するものと、俺にISを1つ用意

して欲しい」

「それは構わんが、対価は？」

「……これどうだ？」

幻徳が取り出したのは記憶媒体。それに保存されているのは……

「隙を見て盗み出した難波の研究成果と研究施設に関するデータだ」

「いいだろう。引き渡しの時に交換といこうか」

「どのくらいで用意できる？」

「IS自体は丁度良いのがあるから、そいつの調整とジャミング装置の取り付けで……

2日後だな」

「わかった」

「引き渡し場所はここがいいだろう……ここなら下手にちよつかい出されても客に撃

退されるだけだし」

「彼らは只者ではないとは思っていたが、それほどなのか？」

「……下手すれば都市1つぶつ飛ばせる」

「……尾行には十分注意しよう」

雪兎の顔が真顔だったので幻徳はそれを冗談とは思わなかった……いや、幻徳自身も感じ取っていたのだろう、こここの常連客達の異常さを。

「さてと、そろそろ帰るか・・・お前さんの専用機の調整もしないといけないしな」
「そうか」

「あつ、あと早めに抜け出してやれよ？」

「？」

「待たせてるんだろ？シャルロット彼女」

「ここ数日ではあるが、この世界のシャルロットは時々遠い目をしている事があるのを雪兎は知っている。その理由も・・・」

「・・・善処しよう」

雪兎の言葉にそう答え、二人は会計を済ませて店を出る。

「きゃああああ!!」

すると、突然女性の悲鳴がした。

「あれは・・・」

「ちっ、スマツシユか」

声が見る方を見ると、そこには分厚い装甲を持つストロングスマツシユが暴れていた。
「さて、どうしたもんかねえ」

「待て」

「そう言いつつもクロストリガーを取り出した雪鬼だったが、幻徳がそれを制する。

「どういうつもりだ？」

「……例のジャミング、まだ続けられるか？」

その事について咎めると、幻徳は意外な事を聞いてきた。

「ああ、まだしばらくはもつが……って、まさか!？」

「そういう訳だ」

幻徳が取り出したのはスクラツシユドライバーと紫色の特殊な形状をしたボトルだった。

『アンジャー！クロコダイルツ！』

そのボトルのキャップを正面に向け、腰に装着したスクラツシユドライバーにセツト。

「見ている……これが俺の今の力だ。変身」

そして、スクラツシユドライバーのレンチを下げてビーカー型とファクトリーを生成。そこに紫色のボトル成分が満ち、左右から鰐の顎のような物が現れビーカーを咬み砕く。

『割れる！食われる！砕け散る！クロコダイルインローグウ！オオラア！』

ビーカーが完全に砕け散ると、中から紫色のライダーが姿を現し、女性の悲鳴のよう

なサウンドが響く。

「やっぱりお前も仮面ライダーなのか」

「ローグ……仮面ライダーローグだ」

ローグの姿を見つけたストロングスマッシュはローグを脅威と認識したのか真つ直ぐローグへ向かって走り出し、自慢の拳を振るう。しかし、ローグは微動だにしない。

「効かんな」

そして、お返しにとローグが拳を叩き込むとストロングスマッシュはあっさり吹き飛ばされていく。

「ほう、その装甲は……なるほどな」

一方で出番のなくなった雪兎はローグの装甲を見てその防御力の秘密に気付いた。

「面白い事考えるやつがいたもんだ……それに、これならあのISを任せても良さそうだな」

雪兎が先程言っていたISとは、とある理由から黒雷と同様に一般人にはとても扱える代物では無いISなのだ。だが、ローグの戦いっぷりを見て雪兎は幻徳ならばそれを扱えると確信する。

「これは思ったよりいいデータが取れそうだ」

その後もローグは終止ストロングスマッシュを圧倒し、あっさり行動不能にしてし

まった。

「うっは、これは 그리스 やビルドじや苦戦しそうだな」

そんな事を考えながらさりげなくストロングスマッシュの成分を回収していると、騒ぎを聞き付けた一海やシユテル達がやって来た。

「雪兎!?!お前こんな所にいたのかって、そいつは……!?!」

そこでローグの存在に気付いた一海が警戒しスクラツシユドライバーとロボットゼリーを取り出すが、ローグは興味が無いと言わんばかりに一海らに背を向ける。

「ま、待てー!」

それでも一海はローグを追おうとするも、ローグは紫色の銃を取り出し銃口から煙を放ち姿を眩ませた。

「マスター、彼は?」

逃げられた事に悔しそうな顔をする一海を余所にシユテルは雪兎にローグについて訊ねる。

「ああ、ちよつとそこで知り合つてな」

「お怪我は?」

「問題無い……少なくともあいつは俺の敵では無いみたいだ」

「なるほど……そういう事ですか」

雪兎の表情から大体の事を察したシユテルはやれやれと首を振る。

「ちよつとした興味本位で来てみたが……この世界は俺を随分と楽しませてくれるみたいだ」

一海達には気付かれ無いように片手で顔を隠しつつ、雪兎は楽しそうな笑みを浮かべた。

148話 誓いと決意 兎、ホクホクする

仮面ライダーローグこと氷室幻徳との接触から2日が経ち、雪兎は再びあの喫茶店を訪れていた。店内には既に幻徳の姿があり、雪兎もその席に着く。

「よお、幻ちゃん。待たせたな」

「げ、幻ちゃん？」

妙にフレンドリーな雪兎に少し困惑しつつも、幻徳は雪兎に訊ねる。

「それはともかく、例専用機の物は？」

「そう急かしなさんなって・・・ほら」

そう言つて雪兎が取り出したのは、紫のカード型ローグカラー端末。

「こいつに収納してある。学園に残つたデータである程度はフィッシングとかの調

整は済ませてあるから直ぐにでも使えるだろうよ」

「それは助かる」

紫の storage を受け取ると、代わりに幻徳は先日提示していた記憶端末を雪兎に渡す。

「データを確かめても？」

「構わん」

端末からデータを呼び出してサラツと確認した雪兎はそれが本物である事を確かめると端末を懐にしまった。

「確かに、これで取引成立だな」

「ああ」

「なら少しだけその専用機の説明をしておこうか」

そう言つて雪兎は幻徳にだけ見えるように空間投影ディスプレイを展開する。

「全身装甲・・・フルスキンというやつか」

「ああ、コンセプトは『重装甲による敵陣の強行突破と突破し切れなくとも1対多数で戦い抜ける戦闘力』だ。装甲は表面に対光学兵器コーティングを施し、耐物理攻撃の為に複層構造になつてる」

そのISは重厚な全身装甲に肩のシールドブラスター、背面に大型のスラスターを二基装備している。

「肩と背面のユニットにはそれぞれサブアームが内蔵しており、最大6本腕になる。武器もそれぞれ6本分ある」

「なるほど・・・このメインアームのやけにナツクルガードは？」

「そいつはインパクトナツクルと言つて、殴つた際に内蔵した弾薬を炸裂させて追加ダメージ

メージを発生させるものだ」

「ほう……うん？このメイスは？」

「バイトメイスの事か？こいつはこーやって相手を挟んで締め付けたら、内部に仕込んだ歯^{バイト}をチェンソーみたいに高速で動かして切断したり継続ダメージを与える装備だ。勿論、メイスとしても使える」

「面白い」

バイトメイスの元ネタは勿論あの鉄血のオルフェンズに登場したあの鬼畜武器レンチメイスである。

「このIS、名は？」

「決めてない。というか、試作した段階で普通の人間じゃ扱えない事が判ってな……直ぐにお蔵入りしたもんだから名前決めてないんだ。好きに名付けてやってくれ」

「そうか……」

そう言われ、少し考えた末に幻徳が付けた名は……

「【バルドローグ】そう呼ばせて貰おう」

こうして、幻徳は兎印の否常識IS【バルドローグ】を手にするのだった。

その後、学園に戻った雪兎は葛城に幻徳から入手したデータをコピーして提供し、食堂にてシユテルの事を待っていると、たまたまこの世界の楯無と遭遇した。

「あら？雪兎君じゃない」

「ども」

「ごめんなさいね、色々巻き込んだんじやつて」

「いえ、俺もトラブルには慣れてますから」

この時、雪兎はとある事を思いつく。

(そういや向こうの楯無さん用に作ってたアレがあつたな)

自身の世界にて一夏らが大幅にパワーアップをってしまった影響で実力差が埋まりつつある楯無用に雪兎はとあるものを開発していた。そして、丁度その試作品と言える

ものを持っていたのだ。

「そういえば楯無さんのIS、バーススロット拡張領域の空きあります？」

「拡張領域？少しなら余ってるけど」

「是非とも楯無さんに試してもらいたい装備があるんですよ」

せつかくなのでそのテストをこちらの楯無にして貰おうというのだ。その後、楯無の了承を得た雪兎はシユテルとも合流し、アリーナへと向かった。

「これが試してほしい装備？」

それは長い柄の石突きの部分に飾り布を持ち、複数のパーツで構成された大型の刃を持つ変わった形状のランスだった。

「ええ、試作武装・メリクリウス。そのミステリアス・レイデイの機能を強化する目的で開発した装備です」

このメリクリウスは以前にあちらで開発したパッケージ・ミストラルにも使用したアクア・クリスタルの強化版とも呼べるアクア・スフィアを搭載しており、その内部の拡張領域にアクアナノマシン入りの水を大量にストックしており、水分の少ないフィールドでも存分に力を発揮出来るようになっていた。また、アクア・スフィアによりアクアナノマシンの制御能力が向上し、アクアナノマシン入りの水をまるで生き物のようにコントロールする事も可能にしてしまうという装備なのだ。また、刃のパーツは複数に分離し、それらをアクアナノマシン入りの水で繋ぐことで蛇腹剣のように伸ばしたり、刃全体を覆って巨大な刃にしたりする事も可能なんだとか。飾り布もただの飾りではなく、特殊な合金繊維で出来ており、防御や相手の拘束にも使えるのだ。

「なるほどね．．．でも、こんな装備、本当に貰ってもいいの？」
「あくまで試作品ですし、データ収集に協力してもらおうお礼ですよ」

当然それだけではない。楯無のミステリアス・レイデイは一夏達より実戦経験豊富なIS。それがメリクリウスのアクア・スフィアという外的要因によって刺激を受ければ

二次移行の発生がし易くなる。それにより二次移行したミスティアス・レイデイの能力がどうなるのか？そのデータが欲しいのだ。要は「同じISに同じような武装を与えた場合、同じような進化をするのだろうか？」という平行世界ならではの貴重なデータを取るつもりなのだ。

「まあいいわ、パラレルボトル奪還作戦も近い事だし、有効利用させて貰うわね」

楯無は雪兎に何らかの思惑があるのは察したものの、損は無いと判断し有り難くメリクリウスを戴く事にした。

その翌日、葛城が例のデータを精査した結果、現在難波重工が拠点に行っているとされる研究所を特定する事に成功した。その後、主要メンバーを集め、パラレルロボット奪還作戦の作戦会議が行われた。

「雪兎君が提供してくれたデータにより、難波重工がパラレルロボットの解析を行っているとされる拠点が判明した」

「そこで我々はパラレルロボット奪還の為、この拠点へ突入する事を決定した」

奪還作戦に参加するメンバーは葛城、一海、三羽鳥、一夏達専用機持ち、楯無、そして雪兎とシユテルの14名の突入部隊とサポートに更識の暗部や千冬や真耶が加わる事になる。

(・・・雪華は奥の手として温存しておいて、俺は引き続きクロスでいくか)

既に 그리스コート・ヴォルフのテストでシユテルがルシユフェリオンを使用しているが、あれはジャミングフィールドをアリーナに展開していたからであり、未だに雪兎達がISを実戦投入するのは不味い。また、雪兎自身もまだ雪華を使うタイミングでは無いと判断し、引き続きレプリカライダー・クロスを使用することにした。

(となると、もう少しくらい戦力を増強してもバチは当たらんよな?)

作戦会議後に雪兎は一海を一人呼び出した。

「で? わざわざ呼び出してどうしたんだ?」

「ちよつと渡しておくもんがあつてな」

「？」

首傾げる一海に雪兎はグリスと同じ黒と金のカラーリングの storage を手渡した。

「そいつには完成させた新型ナツクルと成分の定着に成功した属性元素ボトルが一式入ってる」

「えっ!？」

「もしもの時の備えつてやつだ。武器は多いに越した事ねえだろ？」

「それはそうだな・・・」

試しに一海がナツクルを取り出すと、カラーリングや中央のマークがクローズナツクルとは異なるナツクルが現れる。

「取説は storage で確認出来るようにしてある。どう使うかはお前次第だ」

「サンキュー」

「それと、こいつはオマケだ」

そう言つて雪兎はもう一つクリアブルーのフルボトルを一海に投げ渡す。

「おっと・・・これは、フルボトル?」

そのフルボトルにはロボット、キャッスル、スタッグ、オウルのマークが描かれてい

る。

「ちよつとした御守りみたいなものさ、無くすなよ?」

「御守り、ねえ……」

御守りなんて雪兎らしくないと思いつつも、一海はそのフルボトルを胸ポケットにし
まう。

「さて、用も済んだし、食堂でカツカレーうどん定食でも食うか」

「お前、好きだな、あのメニュー……俺なんて雪兎が頼むまであんなメニューあるな
んて知らなかったぞ」

「俺もこっちにもあるとは思わなんだわ」

そんな事を話しながら二人は食堂へと向かうのであった。

149話 パラレルボトル奪還作戦・序 兎、やつぱりやらかす

作戦当日、雪兎は一足早く外で準備を行っていた。ちなみにシユテルは学園に住み着いている猫の餌やりに行っている。そこへ一海がやって来た。

「お、一海か」

「雪兎」

「ついに作戦が始まるな。機体の確認はしておいたか」

「おう。スラスターの調子も全部しておいたぜ」

挨拶がてらIISの調子を聞いておく。どうもこの前シユテルとの模擬戦でレゾナンス・イクニッションブースト【共鳴型瞬時加速】なる瞬時加速の応用をさせてせっかく新調したスラスターをオシヤカ手前にしていたのだ。確かに数回分の瞬時加速の力を溜めて放つその加速力は凄まじいがスラスターへの負担を度外視したもので、スラスターを改良して一度だけなら問題無く使用出来るようにしておいた。

「……なあ、雪兎」

「ん、どうした？」

すると、一海が改まって雪兎に訊ねる。

「お前ってシャルロットの事が好きなのか？」

「おう」

「そっかって即答!？」

全く悩んだ様子も無く即答する雪兎に驚く一海だが、雪兎にとっては自身の世界でほぼ世界中に知られている事なので隠す必要が無いのだ。

「逆に聞くが悩む必要ってあるか？」

「あー、確かにそうだな」

雪兎のその言葉に一海はつい頷く。言われてみればという感じだろう。

「そーゆーお前だって、楯無さんのこと好きだろ」

「え、なんで確定事項!？」

今度は逆に雪兎にそう断言されて一海が焦った顔する。どうも一海は考えが顔に出易いようだ。

「だってみーたん? よりも楯無さんの方が反応がアレだし」

「いや、そうかもしれないけど! 聞くなよ恥ずかしい!」

「それさっきの質問思い出しながら聞けるのか？」

雪兎が気付いた理由を説明すれば、一海は顔を真っ赤にして反論する。

「で、実際どうなんだよ」

「そ、そりゃあ好きだけだよ……何か問題でもあったか？」

その答えを聞き、やはりあのポトルを渡しておいたのは正しかったと確信する雪兎。

「いや、『問題』は無いな。お守りを渡しといて正解だったと思っただけだ」

「え、あのポトル恋愛祈願のお守りなのか!？」

「うーん、どちらかと言うと縁結び?」

具体的な効果は暈し、誤魔化すように次の質問を投げ掛けた。

「で、何処が好きなんだ？」

「全部って言っちゃダメか？」

「逆に言わなかったら許さなかった」

全部と返した一海にこれなら大丈夫そうだと雪兎は安堵する。

「一応言つとくが……一海、絶対にその気持ちを忘れるなよ。それがきつとお前の
原点だ」
オリジン

「原点……おう、分かった。なんでそんな事を言ったのかは分かんねえが」

「取り戻そうぜ、パラレルポトル」

「おう」

二人が拳を合わせるとそれを朝日が照らす。そして、2つの世界の命運を賭けた戦い

が幕を開けた。

そして作戦決行の時となり、葛城はビルドフォンをバイクに変形させ、雪兎とシユテルはかつて渡った異世界から持ち帰ったライドボードを取り出し、他のメンバーはトレーラーで移動する事になったのだが。

「二海、バイク持ってねえの？」

「ああ、夏休みの始めに免除は取ったんだがな」

ちなみに、雪兎は既に夏休みに中型免許を取得している。

「免除はあるのか、だったら．．．」

ライダーでありながらバイクを持たないと聞き、雪兎は storage から大きめの錠前のような物を取り出し一海に投げ渡す。その表面の蓋のようなパーツには蘭の絵柄が描かれている。

「そいつを使え」

「これは？」

「ロックビークル・ランクルーザー、横のスイッチを押して投げてみ」

「えっと、こうか？」

『Lock Off!』

錠前が開き、音声が鳴ったの確認した一海がそれを投げると、錠前が変形しながらビルドフォンのように巨大化し、一台のバイクへと早変わりした。

「お、おおー！バイクに変形したぞ！」

「ライダーがバイク無いのは名折れだからな、やるよ」

「ありがとな」

「じゃあ、行こうか」

「ところで皆はあのボードには突っ込まないの？」

そこで黄羽が中々聞き出せなかった事を口にするが．．．

「「まあ、雪兎だし」」

「この皆もいい感じに兎に毒されつつあった。」

エネルギー研究所近辺まで近付くと流石に警備のガーディアン等が見られ、正面突破は難しくはないが、こちらにも相応の被害が出ると雪兎は計算する。

「・・・仕方ない、アレを使うか」

「そこで雪兎はとあるものの使用に踏み切る事に。」

「アレ？まだ何かあるのかよ」

「ちよつと正面突破は割に合わないんでな、プラン変更で」

「つつてもどうやって侵入するんだよ？」

「ほう？天野には正面突破よりもマシな作戦があると？」

「ええ、シユテル」

「なるほど、そういう事ですか」

雪兎がシユテルに目配せすると、シユテルもそれが何なのか察したようだ。

「……セオリーつてのは無視するもんなのさー」

すると、シユテルがエグザを展開し、紅いシヨベルカーのような物が描かれたボトルをベルトに装填する。

『Powerd EXA』

現れたのは恐竜のような真紅。パワーシヨベル・パワードエグザ。この瞬間、その場にはいた全員が雪兎達のやろうとしている事を察した。

「ま、まさか!？」

「壁をぶち抜く気!？」

そんな一同を置いてきぼりにし、パワードエグザに搭乗したシユテルはバケツトをドリルへと換装し、研究所の外壁をぶち抜き、そのまま研究所の壁までぶち抜いてしまう。

「よし、シヨートカット成功」

その後ろを平然と進む雪兎に少々毒されてきた一海らも流石に啞然となる。

「まさかホントに突入に成功するとは……」

「言つたら？セオリーは無視するもんだってな」

無視するとしてもやり過ぎである。

『侵入口は私が守ります。皆さんは進んでパラレルボトルの奪還を』

「頼んだぞ、シユテル」

侵入口を退路としても使うべく、シユテルとパスワードエグザに任せ、雪兎と正気に

戻った一海達。

「一気に最深部まで行ってボトルを取り返すよ！」

「[[[[はい！]]]]」

更に葛城さんの一言で行動を開始する。ISやライダー、ハードスマツシユは目立つ為、雪兎が持ち込んだスタンロット等を使い警備を無力化しながら進む一行。

「結構簡単に進むな」

「一夏、気を抜くなよ。ここは敵地だからな」

「分かつてる」

一夏の一言にラウラが念を押すと、一夏が頷く。だが、雪兎がクロストリガーを引き抜いて一夏の方を……正確にはその後ろにある空間を射つ。突然の行動に一同は驚

くが、雪兎が意味も無くそんな事をするはずもなく。

「キヤツ!？」

すると、一夏の背後から蝶のようなスマツシユ・バタフライハードスマツシユが姿を現した。ちなみに弾丸はハンドアックスのような物で防いだ模様。

「なんで分かったの!？」

「教えると思うか? まあ天災だからって事で完結してくれ」

一同がバタフライに身構えるが、それを楯無が手で制する。

「楯無さん……?」

「ここは私に任せて皆は先に行つて」

楯無はミステリアス・レイデイを展開し、バタフライハードスマツシユと一海達の間
に立つ。

「だったら俺も……!」

「ダメよ一海くん。貴方は先に行つて、ボトルを取り返さなきゃ」

「だったら楯無さんも……」

「一海くん」

よくアニメ等にもある「ここは任せて先に行け!」なシーンである。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫。私には秘策があるから」

「楯無さん……行くぞお前らー！」

そんな一幕を見て、雪兎は何故か安堵していた。それは雪兎が一海に懐いていたとある問題の糸口は既に用意されていると知ったからだ。

「そう簡単には行かせないよー！」

バタフライがそう言うのと、ガーディアンやハードガーディアンが通路からワラワラと現れる。

「もう隠す必要がないか」

「ですね」

葛城と雪兎がそう呟くと、専用機持ちは待機状態のISを、三羽ガラスはボトルを、一海と葛城さんはそれぞれのドライバーを、雪兎はクロストリガーを構える。

「来るよー！」

専用機持ちはISを纏い、三羽ガラスはハードスマッシュになるが、残る雪兎達三人は近場にいたガーディアンを葛城はボトルを、一海はゼリーを握った拳で殴打。雪兎はクロストリガーで撃ち抜いた。

『トラ！ UFO！ ベストマッチ！』

『ロボットゼリー！』

『Operation Start』

そして、変身の為の隙を作り、変身シーケンスを開始する。だが、その前に雪兎は一海に声を掛ける。

「……一海」

「……んだよ」

「誰かを愛する事って、信じる事なんだぜ」

「ツ……そうだな。すまねえ、少し取り乱した」

「それでこそ一海だ……行くぜ」

楯無の事で少しテンションの低かった一海に発破をかけ、三人は横並びになって最後の行程を終える。

「変身！」

「装着」

『未確認ジャングルハンター！トラUFO！イエーイ！』

『潰れる！流れる！溢れ出る！ロボット・イン・グリス！ブラア！』

三人は同時に変身を終えると、それぞれ駆け出した。

「楯無さん……後ろは任せたぜゴラアアアアア!!」

「ドリアアアアアッ!!」

雪兎が弾丸で耐久値を減らした硬い扉を一海がその拳で突き破り、一同が一斉に部屋になだれ込む。そこはこれまでの道や部屋と比べて一段大きな部屋だった。

「ここは……」

「最深部なんだけど……コレは一体、何なんだ?」

その部屋には明らかに人為的に作り出されたであろう黒いエネルギーの渦があった。

「これは……ワームホールか」

「その通りだ、ラビット・ディザスター兎の皮を被った災害」

雪兎が渦の正体を言うと、いかにもインテリ眼鏡な男・内海が突然現れて雪兎が正解である事を告げる。

「ようやく分かったぜ。狙いは俺じゃなくて俺の手掛けたもんだったんだな」

「貴方が我々の言う事を聞かない事なんて既に分かり切っています。ならば作つたものを我々の手で解析して利用すればいい」

それを聞き、雪兎は拳を握り締める。つまり内海とやらはこう言つたのだ「本人が言う事を聞かないだろうから、その周りにいる者達から奪えばいい」雪兎「人の成果を無断で利用（おそらく兵器転用）する」と……これが雪兎の世界の人間ならばどれだけ愚かな行為か知っており、余程の度胸が無ければ行えない行為なのだが。

「アンタら、俺の仲間や恋人を狙うだなんていい度胸してるな」

「今から大人しく技術提供をしてくれれば考えますよ」

それを聞いた雪兎は下を向いて呆れたように首を横に振つた。

「残念だが、アンタらみたいな奴らにくれるヤツなんて一つもないぜ」

「それは、残念だ」

『バット……!』

雪兎の返答を聞いた内海は以前にも遭遇したブラッドスタークが使っていた黒い銃・トランスチームガンにバットフルボトルを装填すると、トリガーを引いた。

「蒸血」

『ミストマッチ！バット．．．バツバット．．．！ファイア！』

トランスチームガンから放たれた煙を纏うと内海はブラッドスタークに酷似した、しかし、その姿はブラッドスタークとは違う蝙蝠をモチーフにした姿・ナイトローグへと変貌する。

「お前達にはここでいてもらおう。ワームホールも直に開く」

「そんな事させない！科学の力を悪用させてたまるか！」

葛城がそうはさせまいと走り出す、それを阻むように右半身が白い歯車で覆われたパワードスーツと、それとは反対に左半身が緑色の歯車で覆われたパワードスーツが立ち塞がる。葛城から事前に貰った情報によると白いのがエンジンプロス、緑の方がリモコンプロスというらしい。

「愚かな科学者如きが、我々の邪魔など！」

「大人しく他人事で終わらせておけば良かったものを！」

ブロス達は葛城と戦闘を始め、一海達が増勢に向かおうとすると、チェスルークのようなスマッシュが8体とそれを従えるチェスハードスマッシュが現れた。

「今度はお前かよ！」

「そう簡単に通すだけでも？内海、貴方は3人組のハードスマッシュを」

「分かった」

更にはハードガーディアンも駆けつけ雪兎達はあっさり分断されてしまったのが……先程とは真逆に今度は雪兎がテンションを下げてしまう。それも氷点下というレベルの謎の寒さと共に。

「……何、アレ？風竜、雷竜のパチモン？」

そう、雪兎はブロス兄弟の姿を見て、シヨボさにガツカリしていたのだ。

「……えっ？」

これには流石に皆、一度動きを止めた。ブロス兄弟までもが、だ。

「今、聞き捨てならない言葉を聞いた気がしましたか？」

「俺達、難波重工の最終兵器がパチモンだど!？」

「うん、そのデザインからして左右で合体すんだろ？しかもパーツ構成からして片方だけの歯車っぽいパーツ移すだけの合体とも呼べねえ駄作、パチモンと呼ばずに何と呼ぶ？プロトタイプかモデルに赤炎の電と青水の電のでもいるんじゃないやねえか？」

初見でその機構をほぼ察した雪兎からしたらパチモンにしか見えなかったのである。完全に余談だが、ブロスの元となったカイザーシステムには確かに赤カイザーパースのカイザーと青カイザーのカイザーがいたりする。なのでこの指摘は当たっているのだが……言いたい放題過ぎる。

※雪兎はエグゼイド以降のライダーを知りません。

「き、貴様!!」

「許さんぞ!!」

言いたい放題の雪兎にキレルブロス兄弟だが……

「で?余所見してていいのかい?パチモン兄弟」

「はっ!?!」

慌てて2人が後ろを振り返ると、そこにはいつの間にかゴリラモンドへとビルドアツプし、拳を振りかざしたビルドの姿が……。そう、雪兎は本音も交えた挑発でブロス兄弟の隙を生み、その隙にビルドに奇襲させたのだ。

「さて、次はこのうざったいチエス野郎か」

「分かつてはいたが、やっぱコイツは敵にしたくねえ……」

言葉だけでブロス兄弟をあつさり翻弄して見せた雪兎に一海は改めて味方で良かったと思った。

「……三羽鳥も何かヤバそうだし、これでいつか」

「何!?!」

三羽鳥のピンチと聞いて一海が慌てて援護に向かおうとするが、正気に戻ったチエスがルークを差し向けてそれを妨害する。

「クソ硬え!このままじゃアイツらが……!」

「任せろ！」

雪兎はクロストリガーのスロットにとあるガジェットキーを挿し込み、その姿を大きく変化させる。他のガジェットキーとは違い、音声は無く、それは逆三角形のような銃身に3つの銃口を持った大型の銃。それを構えると雪兎は眩く。

「モード・魔銃……解凍」

おそらく、その時の雪兎の顔を見た者がいればこう言った事だろう……「何か知らんがアレはやべー！」と。

そして、それは始まった。

「お前達に相応しいソイルは決まった！」

「ソイル!？」

雪兎のセリフに一海と葛城が反応するが、雪兎は気にも留めずに腰のベルトからまずは真紅のソイルが詰まった弾丸をセレクトする。

『湧き上がる血の滾り』ヒートクリムゾン！」

雪兎がそれを指で弾くと、それは綺麗な放物線を描きながら銃身のシリンダーへと納まる。

『大空を超える無限』スカイブルー！」

次に空色のソイルが詰まった弾丸をベルトから引き抜き、先程と同じ手順でシリ

ダーへと装填する。

「そして……『闇を貫く閃光』ライトニングイエロー!」

最後は少しだけ溜めを作ってから黄色のソイルが詰まった弾丸を引き抜き指で弾く。この間、何故か誰も妨害する事が出来なかった。それはまるでヒーローの変身バンクのような一種の強制力があつたのだ。もし、ここに雪兎の世界の簪がいれば大興奮物だったろう。3つの弾丸が装填されると、魔銃へと変貌したクロストリガーは凄まじい音を発し、明らかに強力なエネルギーを感じされる。ここでチェスがいち早く復活し、妨害を試みるが、既に時は遅い。

「再誕せよ!三羽鳥!」

雪兎がそう告げて引き金を引くと、銃口から3色の光で螺旋の軌道を描き、正面に向けてそれを放たれた。3色の弾丸はそれぞれ三羽鳥へ、赤はキャツスル、青はスタッグ、黄色はオウルに命中した。

「ちよ、お前らあ!」

まさかのフレンドリーファイアに戸惑いを隠せない一海だが、すると、三羽鳥の命中点から赤、青、黄色の煙が放たれて全身を覆った。

「う、うおー!?!何だコレ!?!スゲー力が漲る!」

「少し寒くねえか?」

「うわ、凄いパチパチするよコレ！ほら、パチパチー！」

キヤツスルは身体中から炎を、スタツグは冷気を、オウルは電気を放つ。

「こ、コレは……」

「ソイル^砂状に変化させた属性元素ボトルの成分を三羽鳥にぶち込んで強化したのさ」

唾然とする一海に自慢げに説明する雪兔。どうやら最近伸び悩んでいた三羽鳥の話をシユテルから聞き、密かに用意していたものらしい。三羽鳥の方はもう大丈夫だと判断した雪兔はチエスの方へと向き直る。

「次はお前だ」

チエスを指差してそう言い、再び弾丸をセレクトし始める雪兔。その様子にチエスは感じた事の無い未知の恐怖を覚え、今度はさせまいとルークを差し向けるが、今度は一海がそれを阻む。

「雪兔！」

「おう！お前に相応しいソイルは決まった！『死を包む眠り』スチールグレー！」

最初に取り出したのは灰色の弾丸、それを装填する。

「『湧き上がる血の滾り』ヒートクリムゾン！」

次に取り出したのは先程も使った真紅の弾丸。

「そして……『闇を貫く閃光』ライトニングイエロー！」

最後に選んだ弾丸も先程と同じ黄色の弾丸だった。

「くっ、一体何を」

「見てればわかる……唸れ！召喚獣！イクシオン!!」

再び引き金を引き、3つの光が交差すると、そこには装甲に身を包み、尋常では無い稲妻を纏った一角獣がいた。

「何だ、あれは!?!」

「ソイル化したネビュラガスは一定の組み合わせと特殊な力を加える事で実態を持った存在を一時的に顕現する事が出来る。それが召喚獣さ……まあ、この造形になるように少し調整はしたがな」

尚、使用した弾丸は再利用不可能らしく、完成な使い切りなので多用は出来ないとの事。

「やれ！イクシオン!」

イクシオンと呼ばれた一角獣は嘶きと共に翼を広げチェスと配下のルーク達に向かって雷撃を放つ。咄嗟にルークを呼び戻しガードするも、雷撃が収まり、イクシオンが消滅する頃にはルークは全滅していた。

「くっ……こんなハズでは……!!」

丁度同じタイミングで内海も三羽鳥に破れたのか、悔しさを顔に浮かべながらトラン

スチームガンから煙を巻いて逃走。

「クツ、このままではまずいですね……ハードガーディアン！」

チエスもイクシオンによつてルークが全滅した事に焦りを感じ、ハードガーディアンを増援として呼び出した。

「この調子ならゲートの解放を防げる。行くぞ！」

『おう！』

しかし、難波重工のしぶとさはこんなものではなかった。

150話 パラレルボトル奪還作戦・破 兎、ブロスを弄る

雪兎達がワームホールのある最奥の部屋で戦いを繰り広げていた丁度その頃、シユテルの元にも一体のハードスマツシユが現れていた。

「おや？ 新手ですか」

しかし、その場に現れたクラツシユハードスマツシユこと黒川解製は困惑していた。
（何だ、これは？）

それは先行していたハードガーディアン達が巨大なパワーシヨベルによってスクラツプにされ、これまたどこから出したのか巨大なコンテナに箱詰めされていたのだ。しかもハードガーディアン達はそれぞれ破壊されている部位が異なるので、数機分で一機のハードガーディアンが組めるようになっていた。つまり……

（コイツ、持って帰る気か!?)

そう、シユテルは何もただ出口を確保するだけの為にこの場に残ったのではなく、あわよくばハードガーディアン達を回収するつもりだったのだ。

「ちよつと好き勝手が過ぎないか？」

「おや？これ異なることを・・・最初にマスター雪を利用してしようとしたのはそちらでは？ならばやり返されるのは道理かと」

「うぐつ」

シユテルの言葉に言い返す事が出来ないクラツシユ。そうこうしている間にもハードガーディアンは次々とコンテナに詰められていく。

「こうなったら実力行使だ」

そう言うのと、クラツシユはそのハードスマツシユの特性を利用し、未回収のハードガーディアンの山を操り自身の元へと呼び集め巨大なパワーローダーのようなものを作り上げた。

「ほう、貴方の能力は残骸を操る事でしたか」

「そのパワーシヨベルもスクラップにして我らの力にしてくれる」

「出来ると思いますか？」

「ただの重機と巨大兵器、差は歴然だろうか？」

「ただの重機、ですか」

だが、クラツシユにとつての誤算は、ワードエグザがただの重機ではなかった事だ。「では見せて差し上げましょう・・・このワードエグザの真の姿を」

シユテルはそう言いながら運転席から降りてワードエグザのバケット部分へと飛

び乗る。

「な、何をするつもりだ!？」

「ごうりがつたい・・・剛力合体」

すると、パワードエグザの上部が半分に分断され、無限軌道より上のパーツが起き上がる。その真ん中のハッチが開くと中から頭部のようなものが現れ、空いたスペースにシユテルがバケツトから再び飛び移る。そして、ハッチが閉じると無限軌道も起き上がり、頭部のツインアイが輝きを放つ。

「ま、まさか、それは・・・」

『せっかく残りのスクラップを一纏めにしてくださったのですから、丁重におもてなしさせていただきます』

「冗談は隊長だけにしてくれ」

「ハア！ドリアツ！」

ナイトローグとチエスを破った事で勢いつく一海達はワームホールが開くのを阻止すべくハードガーディアンと戦っていた。

「この調子なら、行けそうだな」

「どうだ！俺達を舐めんじゃねえ！」

状況は確かに有利ではあるが、雪兎からすればまだ危ういと感じていた。丁度そこへ以前遭遇した紫のライダーが姿を現す。

「あの時の、仮面ライダー……!?!」

「アイツ……(ふーん、まだソツチなのか)」

既に難波に従う理由のいくつかは無いのだろう幻徳が扮するローグを見る雪兎。ローグも一瞬だけ雪兎の方を見るが「手出しするな！」と言っているような気がした。

「あのライダーって……」

そのライダーを見たこちらの世界のシャルロットは何かを感じ取ったようだが、ローグはその白い指を動かして一海らを挑発する。

「へえ、大人数でも勝てる自信があるって事ね」

「カシラが相手する前に倒してやろう！」

そこからは鈴とラウラや一夏が挑むもあえなく撃沈。特に一夏はビルドのキードラゴンフォームで挑むが、ローグの両足から繰り出されるデスロールで壁に叩きつけられ変身解除され、その側に箒達が駆け寄る。その間にローグはベルトからボトルを引き抜き、その姿を顕にする。

「やはり、お前だったか……！」

それは黒と赤のスーツを着た氷室幻徳。

「なん、何で、お前……！」

「嘘……」

声を上げているのは一海とシャルロットの二人だが、雪兎を除く他のメンバーも何も言わないだけで驚いていた。

「……久しいな」

「幻徳……何で、何で難波なんか……！」

関係が深いと思われるこちらの世界のシャルロットがいち早くそう叫ぶが……

「俺の目的を達成するにはこうするしか無かった。ただそれだけの事だ」

幻徳は雪兎にしか分からないレベルで表情を歪ませながらそう返した。

「目的だと……!?!その為にお前はシャルロットを裏切ると言うのか!!」

（あー、裏事情知つてるとややこしいなあ、これ）

幻徳が難波に逆らえない理由を知る雪兎は、ラウラの発言を録音し、後で事情を知ったラウラに聞かせようかなあ……とか不謹慎な事を考えるくらいにはこの場で一番余裕があった。なのでソイツが現れた事にもすぐに気がついた。

『お取り込み中すまないが、感動の再開は終わりだ』

そう、毎度お馴染みブラッドスタークである。

「スターク……!」

『殺される予定だったコイツを、仮面ライダーにしてやったのさ。感謝してくれよ、生き延びさせる為にあの手この手を使ったからな』

そのあの手この手が心臓の爆弾とは皮肉なものだ。

『それに、『門』は開かれた!』

そして、スタークの宣言と共に、ワームホールが遂に時空を貫いた。

「雪兎くん、あのIS学園は……」

「はい、俺のいる世界のI.S.学園です」

「クソ、開かれちゃったのか・・・!!」

それを待っていたかのように新たなハードガーディアン達が隊列を組んで現れ、その『門』を潜っていく。

『ブラボー! 素晴らしいねえ。じゃ、俺も行くとしますか』

「待て、スターク!」

「させるか!」

スタークもそれに続こうとし、葛城がそれを阻む為に駆け出すも、プロス兄弟がそれを見逃す訳が無い。しかし、フリーになつていた雪兎がプロス兄弟の足元に弾丸を撃ち込み阻止する。

「巧さん、このパチモン兄弟は任せてください」

「任せたよ! ビルドアップ!」

『ラビットタンク!』

ビルドへと変身しつつスタークへと向かう葛城を見送ると、雪兎はプロス兄弟へと向き直る。

「またパチモン呼ばわりとは!」

「余程死にたいらしいな!」

ちやつかり再び自身にブロス兄弟のヘイトを向けさせる雪兎。

「なら見せてみるよ？そのブロスとかいうやつを」

「舐めるなああああ!!」

激昂した二人がそれぞれネビュラスチームガンとスチームブレードで襲い掛かるが、ブレードトンファーとクロストリガーでなんなく防ぎ切る雪兎。

「連携の練度は高いが、これくらいウチの連中ならやれて当然だな」

「くっ」

「これならどうだっ！」

「想定内だつての！」

ならばと、今度は二人揃って腕の歯車を巨大化させて飛ばしてくるが、雪兎に蹴り返されお互いの歯車を食らい吹っ飛んだ。

「うわあああああつ!!」

丁度その時、スタークの猛攻を受け、葛城がその場に膝をついて倒れてしまう。

「巧さん！」

雪兎が葛城を呼びかけるが反応は無い。見たところダメージ自体はそこまで大したものではない。つまり、スタークの言葉による精神的ダメージの方が深刻だった。なので、雪兎はとあるセリフを引用し、葛城に強く呼び掛ける。

「巧さん！俺が信じる貴方が信じる、科学を、正義を捨てないでくれ!!」

それを聞いた葛城はピクリと反応する。ゆっくりと雪兎の方を見てから、他の仲間達を見た。そして、両手に力を入れて踏ん張ると、立ち上がった。

「この力は、ビルドは！僕一人だけじゃ創れなかった。皆で作り上げてきたんだ！それを間違っているだなんて言わせない！」

立ち直った葛城は仲間達を背にハザードトリガーを取り出す。

「この力は、愛と平和の為の希望！僕は……僕を超えてみせるッ！」

『マックス！ハザードオン！』

だが、今までとは違い、葛城はボタンを二度押し自らオーバーフローモードを起動させてハザードトリガーをベルトにセットする。

『超えるだア？ハザードレベルの足りないお前が、ハザードトリガーを使っても何も変わらないのか？』

それで終わりではない。葛城にはまだ新たな力がある。そう、フルフルラビットタンクボトルが。

『ん？何だソレは……？』

葛城がそれを振ると、ピョン！ピョン！と兎の跳ねる音が鳴る。5回振ったところで金色の方の蓋を回転させ、緑の無地だったアイコンが赤いウサギへと変わる。

「まだ奥の手あんだろ？自称・難波重工の最終兵器さん？」

「どうなつても知らんぞ！雷！」

「分かった、兄貴！」

雪兎の挑発に乗り、リモコンブロスがエンジンブロスからギアエンジンを受け取り、ネビュラスチームガンにギアエンジン、ギアリモコンの順でセットする。

『ギアエンジン！』

『ギアリモコン！』

『ファンキーマツチ！』

「潤動っ！」

『フィーバー！』

すると、エンジンブロスから歯車が外れリモコンブロスへと向かい、リモコンブロスの歯車も一度外れてエンジンブロスの歯車と一緒に装着されていく。

『パーフェクト』

「ヘルブロス、参上」

そうして姿を現したヘルブロス。だが……

「うわぁ……想像してたより残念だわ、これ」

雪兎はヘルメット越しにも判るくらいガツカリしていた。

「な、何だと!？」

「だって、見た目は予想通りもいいとこだし、弟君は変身解除されてるし、何より強そうに見える」

「これじゃ劣化版撃龍神だわ」と雪兎はそれはもう誰が見ても判るくらいガツカリしている。確かにクロスのパイザーに仕込まれた計測器によれば計測上のスペックは大きく上昇しているが、そのスペックすら雪兎の想像を超えていなかったのだ。

「これが最終兵器? そりゃ俺のデータ狙うわな・・・」

雪兎からしたら残念過ぎる最終兵器に、雪兎は自身の技術が狙われた理由を察した。確かにこのレベルの技術しか扱えないなら雪兎の技術はオーパーツに等しいだろう。

(だが、それを扱う者達から簡単に奪えると思ってるのかね? こいつら)

残念兵器が量産されているならいざ知らず、ハードガーディアンレベルならあちらのシヤルロット達でも十分対応出来る範囲だ。念のために門が開いた直後に連絡はしてあるので今すぐにどうこうなっているとは思わないが、早急に帰る必要があるだろう。

「時間が惜しい、さっさと終わらせるか」

『Shell Bulletin Activate』

「ふつ、その武器のデータは収集済み! そんなものがヘルブロスに通用するともー」
「馬鹿か? 一度破られた武器をアップデートしてねえ訳無いだろうが」

「えっ?」

「その威力は自身で確かめな! 衝撃のお! ファーストブリット!!」

「があ!?!」

ゴリラモンド戦のデータから改修されていたシエルブリットのアツパーカットで打ち上げられるヘルブロス。

「まだまだ! 撃滅のお! セカンドブリット!!」

続けてそれを回転運動を加えながら凄まじい勢いで追い抜き、真下に向けて叩き落とす。

「ぐあっ!!」

そして……ゴリラモンド戦では使えなかった最後の一撃が放たれる。

「抹殺のおおお!! ラストブリットオオオオオ!!」

3つ目の羽を砕き、落下エネルギーも加算した彗星の如し一撃が炸裂し、それまでの戦闘で傷一つ付かなかつた床にヘルブロスをめり込ませる。

「あがあ……」

当然その直撃を受けたヘルブロスがただで済むはずがなく、許容ダメージを超えて強制変身解除された上にスーツ越しにダメージを軽減しきれずあばら骨を数本折られ戦闘不能になっていた。

「う、嘘だろ……」

あれだけ自信満々に出したヘルブロスがたった三撃で撃沈され、エンジンブロスに変身していた雷は今更ながら自分達が何に喧嘩を売っていたのかを理解する。

「ば、化け物だ……」

「ん？なんだ、まだいたのか」

ヘルブロスへの落胆ぶりからすっかり忘れていた雷の事を思い出した雪兎は怯える雷へとゆっくり近付いていく。

「く、来るなあ!!」

エンジンブロスへ変身しようにもネビュラスチームガンもギアエンジンも兄である風の元にある為、雷は完全に無防備だった。

「ヘルブロスだっけか？あれの欠陥の一つだな、こりゃ」

片方がヘルブロスになると、もう片方は完全に無防備になるなんて雪兎からしたら狙って下さいと言ってるようなものだ。最早完全に心折られた雷が慌てて逃げようとするも、その雷の足を赤い輪が拘束する。

「……バインド、シユテルか」

「はい、あちらはもう粗方片付きましたので、織斑女史に任せてきました」

「なるほど」

「くそっ！何なんだこれは!!」

バインドを必死に外そうとする雷だが、それは全く外れる気配が無い。そうこうして間に雷に雪兎が追い付いた。

「ひ、ひい!？」

そんな雷を見て、雪兎は何故か変身を解除する。

「へ?」

そんな雪兎の行動に疑問を感じる雷だったが、そんな暇があるなら逃げる為にもぐべきだった。何故なら雪兎は満面の笑顔を浮かべたままとある構えをとっていたからだ。

「霸王……断・空・拳!」

全身の筋肉をバネのように、足先から拳に全ての力を伝える霸王流カイザーアーツの基礎にして最奥の一撃が雷の顔面を捉え、バインドのせいで逃げ場を失っていた事も相まって歯が数本折れてしまう。

「……ちよつとやり過ぎたか?」

しかし、雷は既に白目を向いて気を失っていた。

『ぐあああッ!グッ……おのれ、おのれおのれおのれ……!!まあいい。今の目的はワームホールだからな……!』

同タイミングで葛城もスタークを破ったようだが、スタークは胸からコブラのようなエネルギー体を放つと、それに連れられるようにワームホールの中へと消えていった。

「しまった！」

「大丈夫ですよ、巧さん。向こうの皆は簡単にはやられません」

結局あちらにスタークを逃がしてしまった事に焦り出す葛城を雪兎が止める。それを見ていた幻徳はいつの間にもやら姿を消していた。

「敵は向こうの世界に行ってしまったか。後は俺に……って、言っても聞きませんよね」

「勿論。一海くん、付き合ってくださいかい？」

「分かりました……お前らはこっちの世界で待機してくれ。頼むぞ」

「了解！」

ここまできて後は任せた！とはいかないのは雪兎も承知のようで、仕方ないとばかりに葛城と一海の同行を認めた。

「……行くよー！」

「はいー！」

そして、戦場はあちらの^雪世界へと移るのであった。

151話 侵攻!難波重工! 兎、本領発揮する

雪兎達が難波重工と争っている頃。

「雪兎のやつ、また面倒事を……」

「ははは……いつもの事だろ?」

「それに、今回はどっちかというとな雪兎が狙われてたみたいだし、仕方ないんじゃない?」

雪兎から連絡を受けたシャルロットの召集で集まっていたいつものメンバーは学園のピッチかもしれないというのに緊張感はほとんどなかった。まあ、以前に迷い込んだ異世界での戦いに比べたら自分達のホームで迎撃出来るだけ気が楽なのかもしれない。

「我々が丁度学園に戻っているタイミングとは……敵も運が無い」

「ホントね」

更に言えばセシリアや鈴、ラウラ達も春休みの一次帰国から戻ってきたばかりで進級前の旧1-Aの全員が揃っている状況なのだ。

「さて、相手はあのIS馬鹿雪兎に喧嘩を売った大馬鹿共だ。ましてやこの学園に攻め込もうとしている以上、迎撃はやむ得まい」

「ついでにまだいるだろうこの世界のお馬鹿さん達にも私達に手を出したらどうなるか、今一度思い知ってもらおつか？」

「そうだな・・・ついでに他の小娘共田にも実践を経験させてやるか」

「だね、せっかくだしゆーくんがデータ足りないって言ってたあの娘達新型量産機のテストもしちゃおつか？」

千冬と東の言葉を簡略化するところなる「持てる力全てを使って難波を潰せ」と。

「これは、難波重工とやらに同情するよ」

「雪兎君を敵に回すとか、何考えてるんだろう？」

「それに、師匠がいなければ何とでもなると思われてるなんて不服」

そう、難波重工は忘れてている。この世界で厄介なのは雪兎だけではないという事を。

「やる気は十分のようだな？それでは作戦を開始する！」

「[[[はっ]]]」

ワームホールを越えて難波重工が辿り着いた場所はI S学園から少し離れた雑木林。海を挟んだすぐ向こう側にはI S学園が見える。

「転移座標が少しズレたか……まあいい、これより作戦を第二段階に移行する!」

現場指揮を任されたチエスがハードスマッシュを分隊長とし部隊をいくつかに分けて学園へと侵攻させる。

「この世界に恨みはないが、我々の目的の為だ」

「何故かとしてつもなく嫌な予感がするのだけれどね、僕は」

部隊A・ジュラシック、スイーツ

「別の世界って言ってもほとんど変わんねえんだろ?」

「ええ、変わりませんとも。断罪すべき対象であるのは何も変わらない」

部隊B・マッドドッグ、ジャツジメント

「何だろうな……嵐の前の静けさってやつか?これは」

「そうだな……何か致命的な見落としをしている気がする」

部隊C・セイルフィッシュ、ハザード

それ以外にもハードガーディアンとスマッシュの混成部隊を学園に向かわせた。

最初は難波重工の面々は上手くいっていると思っていた。しかし、それを撃ち砕いたのは一発の弾丸だった。

「な、なんだ!?!」

「センサーの範囲に反応は無かったはず!」

完全なレンジ外からの攻撃に困惑するマッドドッグとジャッジメント。だが、当然攻

撃は一発だけでは終わらない。続けて飛来したのは高密度エネルギーの矢。それが寸分の狂いなくマッドドッグを襲う。

「があ!?!」

咄嗟に回避しようとしたのが幸いし、かすった程度で済んだものの、ダメージはどう考えてもかすった程度のものでは無い。

「くっ、発射先の特定をー」

狙撃ならば場所を特定すればと、ジャツジメントが指示を飛ばそうとするも、それを遮るように三、四度目の狙撃がジャツジメントを襲う。

「別方向からだ?!? 一体どれだけの狙撃兵がいるというんだ!?!」

しかもその狙撃は全てレンジ外。その精密射撃の精度の高さから相手にはこちらが丸見えなのは明白だ。そうこうしている間にも弾丸とエネルギー矢が飛来し、ハードガーディアンが大破していく。

「ちくしょうっ! 隠れてねえで出てきやがれ!!」

「何故狙撃ばかり・・・まさか!?!」

そこでジャツジメントは気付く。何故自分達の部隊がこのような多角的狙撃を受けているのかを。

「私とマッドドッグの力を知られている?」

そう、彼らの能力は近くにいればいる程効力を得るもの。敵は何らかの方法で知り、狙撃によるなぶり殺しという戦法を取ったのだ。

「(ト)は一度退いてー」

不利と察し、チエス達の元へ一度戻ろうとするも、そこを狙ったかのように今度は光の雨が降り注ぐ。

「今のはイギリスのBT兵器!?だが、威力がデータにあるものと違い過ぎる!」

「もしかしたら敵の狙いは俺達の分断!」

『気付くのが遅過ぎましたよ?』

「セシリア、そのまま鳥籠の維持を……あの二人はこちらで仕留めよう」

『お任せしましたわ、箒さん、エリカさん』

狙撃を行っていたのはアルテミスとスナイパービットを使うエリカと刃衣装備の箒だった。ジャツジメントの予想通り、雪兎からもたらされたハードスマツシュ達のデータからマッドドッグとジャツジメントの能力を知った面々はレンジ外攻撃と、セシリアの制空権確保による隔離戦法というえげつない戦法で彼らを封殺していたのだ。

「さて、最近はあまり活躍出来ていませんでしたし、私も頑張りませんと」

「……実践ではエリカを敵には回したくないな」

アルテミスとスナイパービットの射程は兎印の中でもダントツで、ガト・グリスの高性能レーザーやエリカの精密射撃の腕も相まって恐ろしい命中率を誇る。箒も彼女のレーザーとコアネットワークを通じたリンクによって超精密射撃を可能としている。

「トーナメント後に付けられた2つ名は「魔弾の灰猫」だったな」

「ええ、それなりに気に入っていますわ」

そんな軽口を交わしながらハードガーディアンをまた一体射ち貫くエリカに、箒は戦慄しつつもマッドドッグへと穿千・極を放った。

一方、ジジュラシック、スイーツの部隊は突如上空から爆撃を受けていた。

「うおっ!? 何だこりゃ!」

「そ、そんな事より僕を助けたまえ!!」

爆撃の犯人はというと……

「今ので3割か……脆いな」

「だね、このままやつちやおっか」

インレの各所からマイクロミサイルをお見舞いしたラウラと、ブラストガンナーによる砲撃を放った聖だった。

「……ラウラ||ボーデヴィツヒ、と知らぬ少女? しかし、あのISは……」

ラウラは知ってはいるものの、そのISがあまりにも様変わりしているせいからかすぐには判らず、聖の事は知らない難波重工の面々。その為、二人の非常識なまでな重武装ISに言葉を失う。

「キハール起動」

「弾薬補充完了」

「fire!」

有線式小型端末キハールとインレの射撃と弾薬を補充し終えたブラストガンナーが再び火を吹き、ジュラシックとスイーツの部隊を襲う。

「ちよっ!? オーバーキルじゃないのか!? それ!」

「そんな事を言ってる暇があるなら逃げろ!」

「逃がさないよっ」と

「お前達は既に鳥籠の中だ」

すぐさま後退しようとする彼らだったが、聖がバイザーをビークルモードに切り換え回り込み逃げ道を塞ぎ、キハールで左右から囲い込み包囲するラウラ。

「ハードガーディアンがあつという間全滅だど……!?!」

「嫌な予感の正体はこれだったのか……」

「不幸だなんて言わせないよ? だって、これは貴方達が攻めてきたからなんだから」

そして、セイルフィツシユ、ハザードの部隊は海上で立ち往生させられていた。

「海で俺が逃げ切れないだど!?!」

「その程度でこのロツソアクイラからは逃げられないよつと!」

水中戦を得意とするセイルフィツシユだが、アレシアのロツソアクイラは水中でも速度があまり落ちない。しかも、水中には楯無がスタンバイしており、深く潜ろうとすればアクアナノマシンによる爆撃を食らわされ海面まで打ち上げられる始末。ボートで移動中だったハザードとハードガーディアン達は本音の新装備の1つ「番天印」のホー

ミングレーザーによりボートを沈められ、ハードガーディアン達も頭部を撃ち抜かれて水没、翼があった為に空へと逃げ延びたハザードは待ち構えていた晶に海面に落とされアクアナノマシンに拘束されていた。

「な、何だ、これは!?!」

「それは楯無先輩のアクアナノマシンによる水の拘束具。簡単に抜けられると思うなよ?」

「ご丁寧に手足だけでなく武器になりうるものは全て封殺されている。そんなハザードに晶は容赦無く蹴る殴るの乱撃を叩き込み、最後に虎咆穿でハザードを海に沈める。」

「ゴボゴボ!?!」

だが、それで終わりではなく、アクアナノマシンによる拘束によって再び海面へと引き戻される。

「プハッ!」

「よし、ラウンド2!」

「ちよっ待っ!?!」

その後も沈んでは浮上を繰り返しボコボコにされるハザード。

「フィッシュ!」

「ぎゃああああ!!」

セイルフィツシユもアレシアに蛇腹剣を巻き付けられて一本釣りされ、高い所でリリースして海面に叩き付けてもう一度という有り様だ。

「うん、これ、私いらなかつたよね？」

何となくだがハードガーディアンはアレシアと晶がいればどうにでもなつた気がする本音。

「かんちゃん達は大丈夫かなあ？」

「式の型、疾風！」

「ふっ飛びなさい!」

その他のハードガーディアンとクローンスマッシュの混成部隊には一夏達が対応していた。ハードスマッシュがいらない分隊だけが多い部隊だが、一夏や鈴にとっては数的に過ぎず、無双ゲーのような有り様になっているが……

「遅い!」

「きゅ!」

『ホームランなの!』

その一角にはマドカとミュウの姿もあつた。統率タイプをマドカが仕留め、残りをミュウがハンマーでまとめて一掃する。雪兎からハードガーディアンは十分数は確保したから遠慮無く破壊していいと伝言を貰っていたせいか、このハードガーディアン達は原形をほとんど残してはいない。

「何体か飛んでる個体が抜けたようだが……」

「あれはわざとよ……あつち屋産機の的にするんだって」

何体かのクローンフライングスマッシュがその包囲網を抜けたようだが、それはわざとで、学園で防衛ラインを任されているクラスメイト達の練習台にされているらしい。

「きゅきゅ!」

『次が来たの!』

「あーもう！数だけは多いんだから！」

「数だけだ」

「それに、あっちよりはマシさ」

一夏の言うあつちとは別ルートを進む混成部隊の対応をしている真耶やカテリナ、そして忍の所の事だ。真耶とカテリナがそれぞれヘキサフォートレスとG型装備と重火器装備で敵を薙ぎ払い、抜けた個体を忍が着実に仕留めるフォーメーションで凄まじい数の残骸の山を築いていた。ヘキサフォートレスはクアッドフアランクスを雪兔が真耶仕様に完全改修したもので、従来の身動き不可のものをインレの応用で動きは鈍いものの身動きが可能になり、超大型ガトリングガンも6門に増設させ、サブアームで保持した大型シールドで防御も堅くなった化け物のような装備だ。他にも打鉄・式式と同じマルチロツクミサイクルまで搭載しているせいでインレ並みの大型外装と化している。千冬曰く「現役の時よりヤバいだろ、あれは」との事。

「・・・山田先生、絶対に怒らせちゃ駄目だな」

「うんうん」

「きゅ」

『人は見かけによらないの』

「どういう事だ、これは・・・!?」

遅れてこちらにやってきた内海はこの惨状を見て思わずそう言わざる得なかった。雪兎以外は自分達の世界と大差無いものだと思えばこれである。ハードスマツシユの部隊は学園へと上陸も出来ず、残る部隊もほとんど壊滅させられた上で数体のクローンスマツシユは見たこともない量産機の試験運用に使われる有り様。

「これを彼^{雪兎}がもたらしたものだというのが」

雪兎は自分のみならず、一夏達やクラスメイト達の大幅な底上げを行っており、各企業にも協力的であった為に難波重工とは大きな戦力差が生まれていたのだ。

「何故こんな計算違いを．．．!? スタークか」

そこで内海は気付く。この可能性を知っていたであろう ブラッドスターク 男の事を。

「お取り込み中申し訳ないけど、君達が難波重工の指揮官でいいのかな?」

そんな内海の元にも兎の手の者が現れる。

「くつ、この世界のシャルロットⅡデュノアと更識簪か」

「私は向こうにはいない?」

現れたのはシャルロット、簪、カロリナの三名。シャルロットと簪はあちらの I S 学園にいた頃に調べたものの、明らかに使用している I S が違う。そして、カロリナについては全く知らない生徒であり、使う I S もどのような戦い方をするのかもデータが無い。

「仕方がない、あちらのデータが役に立たないなら収集するまでだ! クロム!」

「駒がまだ補充できていないというのに．．．わかりましたよ」

『バット．．．!』

『チェス．．．!』

「蒸血」

『ミストマッチ! バット．．．バツバツ．．．! ファイア!』

二人は即座にナイトローグとチェスハードスマッシュに変身する。

「僕はあの黒い方を相手にするから二人はあっちのチェスの方を」

「わかった」

「うん」

対してナイトローグにはシャルロットが、チェスには簪とカロリナが対峙する事に。

「こちらの世界でもシャルロットとデュノアの相手をするとはな」

「それは別の僕でしょ? 同じだと思ってると思う目見るよ?」

「そのようだな」

シャルロットが現在展開しているのはアンジュルグとネオウイザードの2つ。ナイトローグにとっては完全に未知の装備だ。

「はっ!」

最初に仕掛けたのはシャルロット。最早お馴染みのミラージュを展開してナイトローグを包囲すると左腕の楯から光の短槍・シャドウランサーを放ち面制圧攻撃を開始する。

「これは!」

回避、撃ち落とし、切り払いで何とか凌ぐものの、少しずつシャドウランサーがアーマーを掠りダメージを蓄積していく。

「くっ、エネルギーを物質化した槍か」

「まだまだいくよ、イリユージョンアロー！」

「今度は矢か！」

あと同時にシャドウランサーよりも高密度のエネルギー矢を放ちながら、その合間をミラージュソードで切りつけていくシャルロット。

「ぐつ、忍者フルボトルの分身とは違い、触れただけでもダメージになる上に、やられた消えるだけでなく、固めたエネルギーを解放して自爆まで可能とは……思った以上に厄介ですね」

「もうミラージュの特性を把握したんだ……腐っても技術者みたいだね」

その頃、チェスと対峙する簪、カロリナコンビはチェスの繰り出したチェスの駒と戦っていた。呼び出したのは最初は8つ全てポーンの駒だったが、すぐに半数のポーンプロモーションは成り上がりで2体は騎馬のようなナイトに、もう2体は魔術師のようなビショップに変異しており、ポーンと合わせてバランスの良い配置をしている。

「ルークがいらない？」

「ルークは貴様らのところの白兔にやられたんだよ！何なんだあの非常識なやつは！」

「あー、やっぱり非常識な事やってたんだ、雪兔」

「師匠が帰ってきたら聞かなきゃ」

「……今、もの凄く不穏な単語が聞こえたんだが」

そうこうしている間にナイトが簪に槍を突き放つが、カロリナがそれをブロックして弾き返し、今回は白雷装備できた簪が大型荷電粒子砲【白雷】で反撃し、ナイトの一体がその半身を撃ち砕かれ粒子に還る。

「ちっ、こいつらも非常識か!」

そうは言いつつも、チエスは後方で何かを操作していた。それはシャルロット達が強襲してくる前から準備していたとあるものを起動させる為のもの。つまり、ナイト達はその為の囷なのだ。簪達もそれには気付いているものの、ナイトの機動力とビショップの魔法のような援護攻撃、その隙を埋めるような動きをするポーンに阻まれ、チエスに攻撃出来ない。倒したナイトもポーンの内の一体が再びプロモーションでナイトに成り、減ったポーンが補填された為、数は減っていない。それでもプロモーション出来る数と一度に展開出来る数に限りがあるようだ。

「地味に、厄介」

「うん、それにまだ【クイーン】が未知数」

ルークはチエスの話を信じるなら雪兎に全滅させられたせいでインターバルが開けていなくも不在だが、未だに出してこないクイーンが存在が簪とカロリナを警戒させていた。そうやって手をこまねいていると。

「さっさと起きろ!クローンヘルブロス!」

チエスの背後に置いてあったコンテナから量産仕様のヘルブロスと言うべき存在であるクローンヘルブロスが4体姿を現した。その内の2体はシャルロットとナイトローグの方へと向かっていく。

「これが私のクイーン、クローンヘルブロスだ！」

「……何、あれ？ 撃龍神擬き？」

「カロリナ、それは言っちゃダメ」

「またその名前かつ!？」

「あ、既に雪兎に言われたんだ……」

何故か緩いノリのまま、2体のクローンヘルブロスが簪とカロリナの前に立ち塞がるが……

「はっ!」

突如そこへ紅の仮面ライダーが乱入し、その手に持つ大剣でCヘルブロスを押し返す。

「あ、あれはっ!？」

その姿を見た簪は思わず興奮してしまう。それも無理は無い。何故なら目の前に現れたのは憧れのヒーローの1つ【仮面ライダー】なのだから。

「ちっ、葛城巧!という事は!？」

「当然俺達もいるぜ? チェス野郎」

「追い付いたぞ! 難波重工!」

そこに久しぶりにISを纏った雪兎とグリスに変身済みの一海も参戦する。

「も、もう一人仮面ライダー!?!」

これには簪が再び大興奮。

「天野雪兎、助っ人引き連れ只今帰還つと」

「お帰り、師匠」

「おう、何かまたパチモン野郎もいるな?」

「やっぱりパチモンだった」

雪兎達の参戦で数的不利は解消されたものの、クロムは笑みを浮かべる。

「ふふ、それで勝ったつもりか? 残念だったな! クローンヘルブロスには既にお前達の最新データがインプット済みなんだよ!」

「俺、お前らにまだIS見せてないんだけど?」

「……その非常識以外のデータは全てインプット済みなんだよ!」

「……言い直した」

「うるさい! 勝てばいいんだよ! 勝てば!」

「ふふ、ふはははは!」

何故か自棄になり始めているチェス。だが、葛城が突然笑い出す。

「そのくらいこの僕が想定していないと思っっているのかい？」

「何だっ!?!」

すると、葛城はフルフルR/Tボトルを一度ベルトから外して棒状態に戻し、再びそれを振り始める。先程はピョンピョンという音が鳴った段階で止めたが、今回は更にボトルを振りドン!ドン!という砲撃のような音がしたところでキャップを回転。

『タンク!』

今度は青い戦車の絵柄が変わったそれを折り畳む。

『タンク&タンク!』

「ビルドアップ」

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!Are you ready?』

そして、レバーを回すと何処からともなく青い小さな戦車が現れクローンヘルブロスやチェスへと砲撃を開始する。

「くっ!小癩な!」

その際にビルドはラビットラビットアーマーをパージし、戦車型のタンクタンクアーマーを装着していく。

『オーバーフロー!鋼鉄のブルーウォーリア!タンクタンク!ヤベー!ツエー!』

「名付けて、仮面ライダービルド・タンクタンクフォーミュサー!」

「か、格好いい……」

尚、簪はその様子は全てハイパーセンサーも総動員して録画していた模様。

「さて、後は俺達に任せろ、簪」

「……ううん、私にやらせて」

「ほう」

クローンヘルブロスにデータがインプットされていない雪兎が簪に変わろうかと声を掛けるも、簪は何かを決意したかのように雪兎の前に進み出る。

「憧れのヒーローの隣でただ見ているだけなんて……私には出来ない!」

その簪の決意に応えるかのように打鉄・式式が光輝き出す。

「えっ?」

「その光は!」

「あー、ここにできたか」

そう、打鉄・式式は二次移行を開始したのだ。光が消えた時、簪の打鉄・式式の姿は大きく変化していた。その最大の違いは式式の時は様々な装備を付けていたのだが、その多くが小型化されよりスリムなシルエットに変化しており、各部にハードポイントが

増設されていた。

「【烈鋼^{れつこう}】それがこの子の新しい名前……」

だが、変化はそれだけでは無い。

「来て、撃龍！・蒼燕！・穿甲！」

そう言つて簪が展開したのは砲撃装備をした龍、蒼いクリアパーツの翼を持つ燕、2つのドリルを持つ戦車の自律型追加補助外装……つまり雪兎の白月や一夏の白鳳、シャルロットのコスモスと同じものを呼び出したのだ。

「……今度はそれかよ」

またしても雪兎のデータベースに無断アクセスした形跡を見つけ、雪兎はもうこれは避けられない事だと察した。すると、ビルドは簪の隣に立ち簪に耳を貸すように言う。ビルドは近づいた簪に耳打ちをすると、簪はコクリと頷いた。

「よし、準備は良いかい？」

「は、はい！」

ビルドと簪はほぼ同じタイミングでポーズを取った。

「勝利の法則は、決まった」

一方、ナイトローグと対峙していたシャルロットの方はというと……

「何者だ、お前は……」

『……』

増援としてやってきたCヘルブロスと共にシャルロットへ反撃しようとしたところに思わぬ乱入者が現れたのだ。それは全身装甲フルスキンの強固な装甲を持つ紫色のISだった。

「あれは、前に雪兎が作ってた……」

シャルロットはそのISに見覚えがあった。何故なら、それは黒雷と同様に普通の人間には扱えない、と雪兎が封印したはずの試作機……そう、雪兎が氷室幻徳に譲り渡したバルドローグだった。

152話 簪、決意の力！ 兎、サポートに回る

「勝利の法則は、決まった」

流石はヒーローオタク、葛城に一発でポーズとセリフを完全に合わせてみせた簪は既にやりきった表情だ。しかし、すぐに気持ちを切り替えてCヘルブロスへと攻撃を開始する。

「きてー！撃龍！」

簪の呼び声に応え、撃龍が烈鋼に近付くと、撃龍は幾つかのパーツに分かれ烈鋼へと装着されていく。その姿は白雷を元にした砲撃型で、頭部と長い首から構成される大型ランチャー【雷撃砲】、翼が変形した背面のツインリアレールクヤノン、尾が蛇腹剣となっており、追加された装甲には内蔵ミサイルポッドとかなり攻撃的である。

「また簪らしい進化したなあ、あれ・・・あれなら簪に任せても大丈夫だろ」

烈鋼から送られてきたそのデータからその無茶苦茶っぷりに呆れる雪兎。しかし、そのデータから簪がCヘルブロスに負けるとは思えなかった雪兎はチエスを止めに行つた一海の方に向かう事にした。

「firee！」

雷撃砲の一撃を何とか両腕をクロスしてガードしたCヘルブロスだが、その威力は凄まじく、両腕のギアパーツが融解しかけている。CヘルブロスがISとは違い元々ワールドを張っていないせいもあるが、その威力が白雷を凌駕しているのも理由の一つだろう。砲撃に耐え反撃に移ろうとしたCヘルブロスだが、今度は撃龍と共に呼び出された蒼燕がその刃のような翼ですれ違い際に切りつけ、よろめいたCヘルブロスの装甲を地面から飛び出してきた穿甲がドリルで抉る。

「切換、穿甲！」

その隙に簪は撃龍を分離させ、代わりに穿甲を纏う。穿甲を纏った烈鋼は両腕にドリルを装備し、背面の大型ブースターを点火させ接近すると、ドリルを高速回転させながら振るいCヘルブロスの装甲を削り切り、Cヘルブロスを弾き飛ばす。

「これも……いけ！ スパイラルブーストパンチ！」

再び距離が開いたところで右腕のドリルを再び高速回転させながらCヘルブロスへと向け、右腕のドリルを含む一部を射出し、対するCヘルブロスも歯車を飛ばして対抗するも歯車の歯が少しずつ削れていく。

「ぶち抜けええええ!!」

そしてとうとう歯車を撃ち砕き、そのせいで少し狙いが逸れたもののCヘルブロスの右肩の装甲を破壊した。

「これがドリルの力よ！」

すると、丁度そこへ葛城と戦っていたCヘルブロスが吹っ飛ばされてきて簪と戦っていたCヘルブロスと並ぶ。

「おっと、ちよつと飛ばし過ぎてしまったかな？」

そのCヘルブロスを追って何故か脚部が戦車のようなになった葛城もやってた。

「どっちももうちよつとみたいだし、ここは二人で決めるとしようか」

「はいっ！」

そう言うのと、葛城はフルフルR/Tポトルをフルポトルバスターにセット、簪は再び撃龍を纏う。

『フルフルマツチデース！』

「雷撃砲、チャージ！」

「いくよ？ 簪ちゃん」

「はい！」

『フルフルマツチブレイク！』

「メガライトニングバーストツ!!」

フルポトルバスターと雷撃砲から放たれた強力な砲撃が二体のCヘルブロスに直撃し、既にポロポロだった二体はそれに耐えられず爆散してしまった。

「うん、やはり僕の発明品はサイコーだね！」

「カツコ良かったです！」

「そうだろう！そうだろう！」

簪の素直な褒め言葉に気分を良くする葛城。

「あとは・・・一海君は雪兎君が一緒だから大丈夫だろうけど」

「大丈夫、あつちにはカロリナが向かったから」

「ああ、あの大きな盾を装備したISの娘か・・・なら、大丈夫かな？」

何となくではあるが、この世界の彼女らならば何とかなると思つた葛城はこれ以上の増援を阻止すべく、簪を連れてワームホールの方へと向かうのであつた。

その頃、チェスと再戦していた一海は劣勢を強いられていた。その理由はチェスが本来のクイーンを解禁し、雪兔にやられたルークの再使用時間が過ぎている状態だったからだ。

「くっ……」

「いくらライダーシステムといえど一人で私の駒達を相手にするのはキツイだろう！」

本体であるチェスを狙おうにもルーク二体のガード、素早いナイトに援護射撃のビショップ、替えが効くポーンに……そして、それ単体でハードスマッシュ並みの能力を持つクイーン。強力な駒程再使用時間は長いもの、これらを効果的に操るチェスは一海をしても強敵であった。

「よく粘る……だが、それもここまでだ！」

クイーンの斬撃を後ろに跳んで回避した一海をそれを見越して配置されたポーン二体が羽交い締めにし、ポーンもろともビショップの火炎弾が襲う。

「ぐあああああ!?!」

「まだだ！」

追撃に大きく跳び上がったナイトが一海を踏み付ける。

「があっ！」

「どうした！そんなものか！猿渡一海っ！」

今までの雪辱を晴らさんとばかりに畳み掛けるチエス。そして、変身解除されてしまった一海にトドメを刺さんとクイーンが一海を切りつけようとしたその時、突如クイーンが横から射たれ吹っ飛んだ。

「な、何だと!?!」

「……ゆ、雪兎？」

その射撃を行ったのは白と蒼白い装甲に、左腕全体を覆う巨大な拘束具を装備し、手で長身のソードライフルを構えた雪兎だった。

「また貴様かつ！」

チエスにとつてはもう怨敵と言っているほど邪魔をしてきた雪兎の登場にスマツシユの姿でも分かる程チエスは激昂する。

「おうおう、随分と嫌われたもんだな、俺は」

そう軽口を言いながら邪魔なナイトやポーンを射ち抜きながら雪兎はゆっくり一海へと近付く。

「よっ、また派手にやられたな？」

「うるせえ……ここから大逆転するところだったんだよ」

「そうか、それは悪い事をしたな」

すると、雪兎は何か思い出したかのように一海に手を差し伸べる。

「そ　う　い　や　ま　だ　言　つ　て　な　か　つ　た　な、　一　海　．　．　．
welcome to the world」

「ンだよそれだったく……おう、お邪魔させてもらうぜ」

その手を掴んで起き上がる一海。再び変身する為に一海がロボットゼリーを手にすると、雪兎が栄養ドリンクの瓶に似た物を手渡した。

「これは？」

「再変身の負荷を抑える薬だ……まあ、後からまとめて負荷くるから負荷をツケにするもんだと思え」

「今戦えるなら問題ねえ」

そう言つて一海はそれを一気に飲み干す。

「お、おう……それ、かなり不味いんだが、一気とはな」

「そういうのは先に言え！」

「さて、あちらさんもお待ちのようだし、変身したら？」

「後で覚えとけよ、変身！」

『ロボット・イン・グリス！ブラア！』

文句を言いつつも再度グリスへと変身した一海。

「ついでだ。お前にやったナツクル、ここで試しとけ」

「あつ、忘れてた」

『ブリザードナツクル!』

「な、何だそれは!?!よく分からんが、あれは使わせてはいけない気がする!」

ブリザードナツクルを見たチェスは本能的にそれが雪兎の手が加えられた物だと気づき、一海を止めるべく駒を差し向けようとするが……

「まあ、そう焦らさんなつてっ」

雪兎がソードライフルの正確無比な射撃で弾き返す。

「一海、ナツクルにあるボトルスロットに何でもいいからボトル挿してみろ」

「ボトルを?ならまずほこいつだ!」

『ボトルキーン!』

「次はナツクル正面の真ん中のボタンを押してチャージ」

挿したのはロボットフルボトル。そして、雪兎に言われるがまま一海はナツクルの正面にあるグリスのライダークレストが付いたボタンを長押しする。

「あとは手を離しておもいつきり振り抜け!」

「はあっ!!」

『グレイシャルナツクル！カチカチカチカチカチーン！』

すると、冷気で出来た口ポットアームが一海に迫っていたナイトを一発で打ち砕く。

「ナイトがたつた一発だど!？」

「お、おおつ！こりやすげえ……」

その威力二人が驚いていると、

「驚くのはまだ早いぜ？一海、次は属性元素ボトルだ」

「なら、こいつだ！」

『エレメントスプラッシュユ！』

続けて一海が選んだのはスプラッシュエレメントボトル。

「あとはさつきと一緒だ」

「ボトルを長押しして、離して……打ち抜く！」

『エレメンタルナツクル！ザバザバザバザバーン！』

再びライダークレストを長押しして放ったナツクルの先から渦巻く水流が放たれ、直撃したビシヨップはそのまま視界の外まで飛んでいった。

「属性元素ボトルとフルボトルを連続して装填すれば、その属性を得た攻撃も放てるし、エレメンタルナツクルをしなきゃその属性のまま通常攻撃も可能。便利だろ？」

「またとんでもないもん作ったな、雪兔……」

自慢気に語る雪兎に、一海は呆れながらもナツクルを握り直しチェスへと向かっていく。対する雪兎はチェスと一海の邪魔をしないように駒達の前に立ちはだかる。

「ここから先は通行止めだ。どうしてももってんなら俺を倒していくといい……倒せるもんならな」

そう言うのと、雪兎は左腕の拘束具の錠前に右手を翳す。

「せっかくだから見ていくといい……アドヴァンスド〔A t C：憑神 t y p e コルベニク〕モード2」

すると、錠前が外れ、左腕を覆っていた拘束具が弾けるように解かれ、隠されていたその姿を現す。それは他の部分の装甲の蒼白さとは真逆の赤黒い肩から生える先端が鉤爪のような第三の腕。更に左手にも禍々しいデザインの短剣が握られている。

「さあ、その目に焼き付けろー！」

ソードライフル、短剣、左腕の第三の腕、この3つが連動し駒達を3つの斬撃が襲い、地面に3つの焼けついた爪痕を残す。

「三爪痕、^{トライエッジ}中々イカすだろ？」

その問いにバラバラに切り刻まれた駒達は答える事はなかった。

「クツ・・・何処まで強くなるんだ、お前は！」

「仲間の為なら、幾らだって強くなってやるよ！」

『エレメントストリーム！』

一海は先程と同様にライダークレストを長押ししてナツクルを構える。

「あとな・・・カツコつけてえんだよ。別世界だろうが、会長の前ではなあ！」

『エレメントナツクル！ビュンビュンビュンビュン！』

一海がナツクルを前に突き出すと、ナツクルから吹雪が放たれ、チエスの体を氷漬けにする。

「トドメだ！」

『スクラップファイニッシュ！』

一海が跳躍すると、グリスの肩アーマーが90度後ろに回転してゼリーを噴出。チェスを蹴り飛ばした。

「グハアアアツ!!」

氷が砕け、蹴りが当たったチェスは見事に吹っ飛ばされる。

「クツ、駒も全て消されましたか……もうここまで来ると諦めるしか道は無さそうです
すね」

チェスはあまりのポコポコのされようのせいか逆にクールになると、キングからナイトへと姿を変えて逃げていった。

「ヘツ、ザマア”ツガアアアアツ！」

すると、一海の体に電撃が走って変身が解除される。

「雪兎が言ってた変身の反動ってヤツか……結構イテエ……！」

一海はあまりの痛さに膝をついて苦しむが、完全に動けない訳では無いのでゆつくりと立ち上がる。

「終わったか」

「雪兎。ああ、カッコ良くぶっ飛ばしておいたぜ」

「楯無さんにいい所見せたいからか？」

雪兎がニヤニヤしながら言うと、一海は吹き出して顔を真っ赤にする。

「ちよ、聞いてたのかよ！てか忘れろ、今すぐ忘れろ！」

「スマン録音済みなんだわ。どっちの楯無さんに聞かせようかなあ〜」

「頼むから止めろ！分かった金払う、払うから止めてくれ！」

雪兎と一海が周りを気にせず追いかけっこを始める。戦場とは思えない程の緩さだった。

一方、シャルロットとナイトローグの戦いはCヘルブロス2体とバルドローグの

「何でそのISが……」

『……今は余計な詮索をしている場合ではあるまい』

「雪兎がそれを託したって事は、信じてもいいんだよね？」

『……少なくともお前の敵になるつもりは無い』

そう言うと、バルドローグは長柄の鈍器〔バイスメイス〕を手にCヘルブロスへと向かっていく。

「僕もー」

シャルロットもアンジュルグからネオイエーガーの重複装備に換装し、両手にネオバスターライフルを展開する。

「君を破壊する」

重複装備ネオイエーガーの速さに対応出来ないCヘルブロスは移動しながら精密射撃を行ってくるシャルロットに防戦一方。バルドローグの方もISにあるまじき重装甲でCヘルブロスの攻撃をもともせず、バイスメイスで殴打を繰り返しへ口へ口になつたCヘルブロスにトドメを差すべく、バルドローグはバイスメイスの真の姿を解放する。

『さあ、存分に喰らえ』

それはまるで鰐が鰓を開いたような形をし、Cヘルブロスを挟み込むと内部の上下2

4 門の銃口から放たれたオレンジ色の閃光がCヘルブロスへと向かう。そのあまりの熱量に回避しようとするCヘルブロスだが、脚部の損傷が酷く回避する事は叶わずそのままその閃光に呑み込まれ姿を消した。残ったのはその余波で出来たクレーターだけである。

「……やり過ぎちゃった」

いくら無人機相手とはいえ、雪兎と会えなかったフラストレーションを爆発させてしまったシャルロットは文字通り塵すら残さぬ自分の諸行に「最近、雪兎に戦闘スタイルが似てきたなあ」と、苦笑するのだった。

「あつ、あのISは!?!」

そこでバルドローグの入手経路の事等を訊ねばとバルドローグを探すが、既にバルドローグの姿は無かった。

「結局助けてもらったのにお礼も言えなかったなあ」

その頃、サイボー．．．もとい、ナイトローグ内海はというと、

「くっ、この堅さはシールドエネルギーとは別口でバリアフィールドを展開しているのか？」

「この蝙蝠、思ったよりしぶとい．．．」

簪が援護不要になった為、念の為にシャルロットの援護をしに来たカロリナ相手に苦戦していた。通常のISならばナイトローグでもダメージを与える事は容易なのだが、カロリナのリリコンバーシユはこと防御に関しては兎製ISの中でもトップクラスであり、雪兎との模擬戦にて、あのアメイジングアルケミストの全力爆撃を一度は凌げるというレベルなのだ。簪がトーナメントで苦戦したのも当然である。

「ブレイクフィールド展開」

「またそれか！」

リリコンバーシユの最大の攻撃手段、それはバリアフィールドを展開したまま相手に

突撃しバリアフィールドで押し跳ばすシールドアクセラレーター。この技を使う時は機体前面に更にブレイクフィールドという部分展開型バリアを展開する為、正面からの攻撃はほぼ通用しなくなる。バルドログとは別方面の「防衛こそ最大の攻撃」という言葉を体現するISなのだ。

「シールドアクセラレーター！」

「ぐあつー！」

トランスチームシステムで保護されていて尚、生身で全速疾走のトラックに撥ね跳ばされるようなダメージを負う一撃に幾つものアラートがナイトログのバイザーに表示される。

「……非常に遺憾だが、こちらの戦力を見誤っていたようだ」

「……帰るの？」

撤退を考えていた内海にカロリナは攻撃の手を止めて少し寂しそうにそう訊ねる。

「何故攻撃を止めた？」

「貴方からは私や師匠達と同じ匂いがしたから」

「……なるほど、君も一人の技術者なのか」

自身の分析能力から同じ技術者と見抜かれたと気付いた内海は納得の表情を浮かべる。

「それに、私の役目は足止め、もう役目は果たした」

「つまり私以外全滅という訳か……それならば私一人取り逃がしても痛手では無いか」
「その蝙蝠も面白かったけど、今度は貴方の作品と戦ってみたい」

「……それは叶わぬ願いだな」

カロリナの突然の惜しみ無い称賛の言葉に一瞬だけ呆気に取られるも、内海はすぐにそう告げた。

「そう……」

「……だが、君との戦い^{実験}は実に有意義なものだったよ」

悲しげなカロリナにそう言い、トランスチームガンから黒い煙を放ちながら姿を消した。

「私も、楽しかったよ、蝙蝠さん」

Cヘルブプロスが全滅する頃には他のハードスマッシュの部隊も制圧され、結果を見れば雪兎達の完勝という結果に終わった。

「……話は聞いてはいたが、ここまでとは」

「ほとんどのメンバーが二次移行済みとは恐れ入るね」

その戦果に一海は勿論、葛城も驚いていた。

「まあ、雪兎の理不尽さに比べたら、な？」

「「うんうん」」

「うん、知ってた」

一夏が皆を代表してそう言えば、一海も納得の表情を見せる。

「ワームホールも消したし、これでこの一連の事件は解決だな」

「あつ！ワームホール無くなったら俺達どうやって帰んだよ!」

難波からの増援を阻止する為とはいえ、世界を繋いでいたワームホールが閉じられて

しまった事で元の世界に帰れなくなつたと一海が慌てて葛城に掴みかかる。

「まあまあ、落ち着きなつて、一海君」

「いや、帰れなくなつたんですよ!?!」

「一海君、僕がそれを考えずにいたと思うかい?」

「それに一海、私達がどうやって貴方達の世界を訪れたか、忘れましたか?」

「あつ……」

葛城とシユテルに言われて初めて一海はその事を思い出した。

「で、そんなに動いて大丈夫なのか?一海」

「何が大丈夫って、ぎやああああ?!?!」

「言わんこつちやない……」

未だに再変身の負荷が抜けきれていない一海は葛城に掴みかかった動きのせいで再び全身に激痛が走り悲鳴をあげる。

「どのみちあんな馬鹿デカいワームホールを開けたせいでクロスゲートは2・3日使えないんだ」

クロスゲートやパラレルボトルとは違い、ワームホールは直接世界と世界を無理矢理繋いだらしく、そのせいで次元の境界があやふやになつており、よくて数日のズレ、最悪何処か別の世界に跳ばされるとの事。

「一海も休ませる必要があるし、数日休んでけよ」

「いいのかい？」

「こちらはまだ幸いにも春休みなんで大丈夫でしょう。それに、巧さんのだけ見せてもらって俺のを見せないのはフェアじゃないでしょ？」

雪兎が言っているのは自身の工房の事だ。あちらでは葛城の研究室を見学させてもらったので、そのお返しのもつもりらしい。

「何だって!?!それは是非ともお願いしたい！」

「では早速、の前に・・・レヴィ、一海を医務室まで連れてってやってくれ」

「わかった！さあいくよカズミン！」

「お、おう、って腕引っ張るなあああああ・・・」

レヴィに勢いよく引っ張られて悲鳴をあげながら医務室へと一海は去っていった。

「狙って彼女に頼んだね？」

「はて？何のことやら」

153話 議論する兎と誓いの拳（ナツクル） 兎、送迎する

一海達と別れ、雪兎と葛城は学園の一角にあるプロジェクト・フロンティアの研究施設の雪兎のフロアを訪れていた。

「……プロジェクト・フロンティア、思っていたより大掛かりなプロジェクトみたいだね」

ここまでの道中にプロジェクト・フロンティアの説明を受けた葛城はその規模の大きさに軽く驚いていた。

「それよりも聞きたい事があるのでは？」

「やはり一海君を引き離したのは狙っていたんだね？」

そう言い、葛城は一海から預かっていたブリザードナツクルを近くの作業台に載せた。

「一海君から君に貰ったと聞いたけれど、これはどういふつもりだい？」

ブリザードナツクルがただのグリスの強化武器であれば葛城もこんな追い詰めるような事をする必要は無かった。だが、このブリザードナツクルには武器として以外にも

とある機能が内包されていた。それに気付いたからこそ、葛城は雪兎に問わねばならなかった。

「このブリザードナックルにはビルドドライバ―と接続して変身アイテムとして使用出来る機能が、クローズドラゴンを元にしたシステムを内蔵しているね？」

「流石は巧さん、この短時間でよく気が付きましたね？」

「雪兎君！君は自分がどういうモノを作り出したのか理解しているのかいつ！」

「一海のやつに何れ必要になると思ったから作った、それだけです」

「だがっ！」

「巧さん、俺だつて必要なければこんなもの作つたりしませんよ！貴方はまだ必要無いと言うー！だが、それはいつだ!?本当に必要な時に間に合うんですか!?!」

「うっ」

「前にも言いましたが、俺はやらずに後悔するくらいならやつて後悔する道を選びます！何もせずに一海^{ダチ}を死なせるような事になったら、俺は一生、いやいくら後悔してもしたりねえ！」

そう言う雪兎の気迫に葛城は圧倒される。

「……すみません、少し熱くなり過ぎました」

「いや、こちらこそすまない……君の覚悟を少し見誤っていたようだ」

言いたただけ言つた雪兎がクールダウンし謝ると、葛城も雪兎の真意を知り謝り返した。

「二応、もう一つ保険をかけてますし、そもそもあれを使うには今の一海ではハザードレベルが足りません。それに肝心なビルドドライバを一海は持っていない」

「そうだったね……」

雪兎の言葉を聞き一安心する葛城。

「さて、真面目な話はこれくらいにして技術交流といこうか、巧さん」

「見せてもらうよ、君の本来の技術力を」

その後、二人は深夜に戻つて来ない雪兎を心配したシャルロット来るまでハイテンションのまま技術交流を続けていたそうな……

様々な事があつた翌朝、それでもきつちり時間通りに起きてきた雪兎は多少回復した一海に学園を案内していた。尚、一海には世話役としてユーリが同伴している。

「色々ところつちとは違う部分はあるが、基本的な部分は変わんねえんだな」

「あはは……その色々の大多数にマスターが絡んでますけどね」

「雪兎エ……」

「これでも自重はしてるぞ？ 師匠がその気になってたら面影も無いレベルで改築されてるんだから」

「多少性格がマイルドになつてもあの人はあの人か」

今朝、この世界の多少性格がマイルドになつた束と遭遇した一海と葛城が驚愕しているのを見るに、あちらの束は原作通りかそれ以上に取っつき難い性格のようだ。

「そーいや表の方が騒がしかったが、何かあんのか？」

「ああ、今日は学園の入試でな」

「あく、入試ね……って、あんな事あつたのに普通に入試すんの!？」

「一海、色々あつて、マスターのせい、^兎と言えば大抵納得されるんですよ、この世界は」

「なるほど兎ラビット・テイザスターの皮を被った災害の2つ名は伊達じやねえって事かよ」

改めて雪兎の無茶苦茶っぷりを痛感する一海だが、そこでふと疑問が浮かぶ。

「あれ？学園の入試って外の会場でやってなかったか？」

「あつ、それは一夏が原因だ」

原作の冒頭で、主人公である一夏がIS学園の試験会場に迷い込んだのがそもその発端になっており、同じようなトラブルを避けるべく、試験会場はIS学園に限定したのだ。海外の受験者は交通費が国から支給されたり、宿泊先は学園が一括管理しており、大きなトラブルは今のところ起きてはいないとのこと。

「へえ〜」

「あと、今年は四人も男子が見つかったらしい」

「そうなのかあ〜・・・って、ええええええ!?!」

「驚くのは無理もねえとは思いますが事実だ」

一人は紫音の事なのだが、それとは別に全国一斉調査で三人もの適性者が見つかった。これは世界的にも大きなニュースになっていた程だ。

「東さん曰く、俺や一夏っていうサンプルがいたせいかな、ISコアが徐々にだが男を受け入れ始めてるんだとよ」

これには世の女性権利主義者達が大いに反発したものの、東の公式発表の場でそんな

発言をしたが故に、束に徹底的に言葉で叩きのめされたい。だが、その男子三人が何らかの手段で襲われる事を懸念し、学園が保護に動いているとの事。

「つつう訳で、今年は学園で試験をやるって訳だ」

「なるほど」

そこに丁度筆記試験が終わったと思われる受験生達が廊下に出てき始めた。

「あれが未来の後輩候補かぁ……って!?!」

その中に雪兎は見覚えのある人物を発見した。

「……雪兎先輩? 雪兎先輩ですよね!?!」

その人物は雪兎を見つめるや否や瞬歩と見間違うレベルのスピードで雪兎の目の前までやってきた。

「お久しぶりです! 雪兎先輩!!」

「お、おう、久しぶりだな、日向」

「雪兎、こいつは?」

「あつ、初めまして! 雪兎先輩の中学の後輩で紫陽日向しやうひなたと申します!」

その人物の正体は雪兎や一夏の中学の後輩である紫陽日向だった。その日向だが、雪兎とはある理由から彼女を苦手としていた。

「そして、先輩の一の妹分です!」

そう、日向は猛烈な雪兎の妹分信者の一人なのだ。一海は雪兎にじやれつく日向に嬉しそうにピコピコする犬耳とブンブンと振られる尻尾を幻視した。

(一)、濃い……)

まるで三羽鳥を凝縮したかのような濃さに流石の一海も少し引き気味だ。

「だあー!!いい加減に離れろ日向!」

「あつ、はい」

どうやら一年振りの雪兎との触れ合いで興奮していたようだ。

「……まさかお前にもIS適性があったとはな」

「A判定でした!」

「……来年から更に騒がしくなりそうだ」

日向をよく知る雪兎は、適性さえクリアしていればIS学園の入試程度なら日向の苦にならないと思いつき、少し遠い顔をしていた。

「日向さん、でしたか?そろそろ実技の時間では?」

「そうでした!!それでは先輩!またです!」

ユーリに時間を指摘され、日向はまた弾丸のように去っていった。

「……嵐のような娘だったな」

「あれの相手を毎日だぞ?まあ、落ち着けば普通に良い後輩なんだが……」

雪兎が絡むと度々ああなるらしい。

「何故か少しだけアイツにシンパシーを感じた」

「はあ!?!・・・あつ、そういう事か」

一海のシンパシー発言に雪兎は驚くが、すぐにその理由を察してニヤニヤし始める。

「お前、楯無さん大好きだもんなあ」

「ちよっ!?!お前!!」

「か、一海さん、ここは皆さん見ていますから! マスターも煽らないで下さい」

雪兎の指摘に顔を真っ赤にして拳を握る一海をユーリが慌てて宥める。

「仕方ない、一海弄りは後にするか」

「くっ、厄介な奴に知られちゃった・・・」

多少のトラブルはあったが、一海への学園の案内は無事に終わるのであった。

その頃、試験会場では一人の少女がおろおろとしていた。

「ど、どうしよう……」

その理由は年末に一時帰国していた代表候補生から受験のお守りにと預かった大切なブローチを人とぶつかった際に落としてしまったのだ。もうすぐ実技の試験も始まってしまふ為、早く見つけねばならないのだが、焦っているせいか中々見つからない……そんな時だった。

「もしかして、探してるのはこのブローチかい？」

少女の前に少女の探すブローチを持った淡い紫色の髪の少年・紫音が現れた。

「は、はい」

「良かった。綺麗なブローチだったからなくして困ってるんじゃないかと思ってたんだ」

そう微笑む紫音に少女は思わず見とれてしまう。

「良かったね、大切なものだったんでしょ？」

「はい、私の尊敬する方が受験のお守りにと貸して下さったもので」

「そうなんだ・・・でも、そのブローチ、君に良く似合うと思うよ」

「えっ？」

「そのブローチを選んだ人はセンスがあるんじゃないかな？」

「そ、そうでしょうか？」

紫音の素直な感想に少女は頬を赤く染める。

「あつ、そろそろ実技の時間じゃないのかな？」

「そ、そうでした!!」

「距離的にまだ時間に余裕があるから落ち着いて、君ならきつと合格出来るから・・・」

僕が保証する」

「は、はい!」

「それじゃあ僕はここで・・・来年、また会えるといいね」

「えっ?それはどういう・・・」

紫音が残した最後の言葉に、少女・イクスシシアハートは困惑するが、すぐにとある可能性に気付いた。

「セシリアお姉様のご学友の織斑一夏さんと天野雪兎さんの二人以外にこのIS学園に男性がいるとすれば・・・新しく見つかった四人の男性適性者の方ですわよね?」

そして、イクスは決意する。必ずこの試験に合格して彼に改めてお礼を言うのだと。

紫音

「まったく、姉さんも過保護だなあ……いや、年末のアレがあつたのだから仕方ないか」

ここにも一人、来年度I・S学園へと入学する男子がいた。彼の名はルーク・ファイルス。名前から判る通り福音の操者・ナターシャ・ファイルスの弟である。そして、年末のアレとは聖剣事変においてナターシャを利用してルーク達家族が人質に取られ

た事だ。あのときは雪兎の手配した影狼隊に救助されたが、あのとき程ルークが己の無力さを悔いた事は無い。

「でも、これからは僕だって．．．」

自身を助けてくれた影狼隊の隊員達やそれを手配してくれた雪兎にはルークは一種の憧れに近いものを抱いており、自身に I S 適性があり、雪兎の側で学べると知った時ルークは歓喜した程だ。

「そう言えば僕の他にも三人、男子がいるのだったな．．．」

ルークの他にも各地で男性適性者が現れ始めており、開発者の束曰く「そのうち I S は女性だけのものではなくなる」との事。ルークは自分以外の適性者がどんな人物なのか？出来ればお互いを高め合える相手であれば良いと思いつつ、実技試験へと挑むのであった。

その2日後、雪兎から次元の歪みがなくなつたとの報告を受け、一海と葛城が元の世界へと帰る事となつた。

「色々世話になつたな」

「気にすんな、俺も今回の件は色々得るものがあつたからな」

「それもお互い様だよ」

「送別会が出来ないのは少し残念だけどね」

「今回は一海が早く帰つて皆を安心させたいと言うので送別会は行わず、ちよつとしたお土産を渡すだけに留める事になつた。」

「お土産もたくさん貰つたし、これ以上は申し訳ないよ」

「難波とかパンドラボックスとか何かとそつちは物騒みただけど、あつちの俺達にもよろしく言つてくれ」

「カズミン、あつちのお姉ちゃんをよろしく」

「ああ、必ず！」

いつの間にか仲良くなった一夏と簪と握手を交わす一海。

「巧さん、またお互いの作品見せ合おう」

「ああ！是非ともまたやろう、カロリナちゃん」

一方の葛城も技術者の卵であるカロリナとも交流を深めていたようだ。

「そんなじゃ、ゲートを開くぞ？」

「ああ」

「お願いするよ、雪兎君」

別れの挨拶を終えた二人を連れ、雪兎は再び一海達の世界へと跳ぶ。

「ほい、到着」

「……本当に一瞬だな」

「改めて世界間の技術差の違いを感じるよ」

難波重工が必死になってワームホールを開いたのに対し、雪兎のクロスゲートは本当にレベルが違い過ぎた。

「それ、お出迎えがきたぞ？」

すると、一海達の反応を察知してこちらの皆が駆け寄ってくる。それを見て一安心すると、雪兎は再びクロスゲートを起動する。

「もう帰るのか？」

「生憎こつちにはまだやる事が山積みでな」

「そうか、わざわざ送迎してくれてありがとう、雪兔君」

「では、また道が交わる事があれば」

そう言つて雪兔はクロスゲートをくぐり帰つていった。

「また道が交わる事があれば、か・・・」

「きつとまた会えるさ」

ふと二人が見上げた空には白い兔のような形の雲が浮かんでいた。

一海達を送り届けた後、雪兎は一人でとある場所を訪れていた。

「よっ、待たせたな」

「いや、問題は無い」

そこにいたのは氷室幻徳とその仲間のこちらに来ていたクロコダイル隊の面々だった。

「プロス隊だっけか？アイツらもコンテナに箱詰めにして送り返してたもんでな」

そう、行方がわからなくなっていたハードスマッシュ達は雪兎達に捕らわれゲートが使えるようになるまで監禁されていたのだ。まあ、プロス隊はともかく、クロコダイル隊は幻徳の要請で幻徳預りになっていたが。

「さて、お前らも怪しまれないよう箱詰めされてもらうぞ？」

「うっ、確かに怪しまれない為には必要な処置なのだろうが……」

「諦めろ、プロス隊のように今日までミノムシにされなかつただけ我らの方が扱いがマシだ」

「確かに……」

「すまないな、こちらに非があるというのにこのような事まで」

「みなまで言うなよ。俺だってお前から色々データ取らせて貰ったんだから」

そう、クロコダイル隊は一時開放される条件として、雪兎の実験の手伝いを色々して

もらっていたのだ。

「向こうに戻ったら色々大変だとは思いますが、上手くやれよ?」

「ふっ、誰にもものを言っている」

幻徳と別れの言葉を交わしてからクロコダイル隊をコンテナ詰めにしてプロス隊と同じ座標へと転送する。

「じゃあな、幻徳」

「ではな、雪兎」

それとは別に幻徳をあちらの世界に帰し、漸く一連の事件は幕を閉じた。

ライダー達との物語はこれにて閉幕……これから先は彼らの物語、それを語るのはまた道が交わった時でしょう。

154話 雪舞う町を訪ねて 兎一味、旅行する

『雪兎くん、僕は君に多くを教えてくれた。大切な思いを、覚悟を忘れない事を学べた。もしかしたら、この先争いが起きて、誰かが悲しむ出来事が起きるかもしれない。

だが決して忘れないでほしい。皆が愛と平和を胸に生きていける世界を創るのは、僕達なんだと……ありがとね、雪兎くん。また会おう。

明日を ビルドする 創る 科学者、葛城巧より』

葛城が残していったメッセージをシャルロットとイヤホンを片方ずつ着けて聞きながら、雪兎は電車で揺られていた。一緒にいるのはいつもの特訓メンバー+ α ……俗に言う兎一味である。

「へえ、葛城さんがこんなメッセージを……」

「あの人らしいっちゃらしいけどな」

さて、何故雪兎達兎一味が電車に乗っているのかというと、数日前まで時間を遡る……

「旅行？」

一海達との邂逅から2・3日が経ったある日、「皆で旅行に行かない？」と聖がそんな提案をしてきたのだ。

「うん、旅行と言っても私の故郷に皆を招待しようかなあ、つてだけなんだけどね」
「聖の故郷というと、北の田舎町だつて言つてたな？」

冬休みは両親も不在だったとかで里帰りを延期した聖だったが、今回はそうもいかなかったらしい。

「夜間瀬よまさせつて言うんだけど」

「……夜間瀬?」

その名前に雪兔は聞き覚えがあった。

「聖、つかぬことを聞くが……こはるびより、という店を知ってるか?」

「あれ? 雪兔さんもあのお店知ってるんですか?」

「……OK、大体わかった」

この質問で雪兔は自分が知る「夜間瀬」が聖の故郷だと確信した。

「こはるびよりはどんな店なのだ?」

すると、ラウラが興味深そうに聖に訊ねる。

「和菓子のお店だよ。こはちや、友達の家でね、本当に美味しいんだよ」

「ほう! 和菓子か」

和菓子と聞いて目を輝かせるラウラに対し、この時、雪兔は飲んでいたコーヒーを吹き出しかけていた。

(やっぱり出てくんのかよ、あの^人ら)

こはるびよりの段階で覚悟はしていたが、もろにその関係者とは思っていなかった雪兔にとっては完全な不意打ちだったのだ。

(この分だと他にも別の作品が混ざっててもおかしくないな……てか、プロジェクトに参加してる企業にそれっぽい名前あったが、あれも限りなく俺の知ってるそれに近い

可能性もあんのかよ)

まさかこんな事でこの世界が純粋なI Sの世界ではなく、色々な世界の複合世界だと知るとは雪兎も思っても見なかった。

「それでね、せっかくだし里帰りも兼ねて皆で旅行しない？ つて事なの」

「いいな、それ」

「先日色々あったしな、ここらで息抜きしてもバチは当たるまい」

聖の誘いに一夏達は乗り気のようにだ。他の面々も乗り気である。

「雪兎さん達はどうします？」

「・・・ここで乗らなかつたら空気読めねえやつじゃねえか」

「「「やった!」」」

実質選択肢等あつて無いようなものであつたが、雪兎がそう答えると皆から歓声が上がった。

「どうせなら弾達も誘つてやるか」

「となればお姉ちゃん達にも声かけなきやね」

「・・・となると、旅館はあそこかな？」

そんなこんなあつて気付けばかなり大所帯での旅行になっていた。

そして現在に至る。千冬達教員は入試の関係で忙しいとの事で、今回は総勢29名の生徒達だけの旅行となったが、雪兎や虚、カテナがいれば大丈夫だろうと許可はあっさりと降りた。フライング・ラビットではなく電車で移動しているのは「旅行なのだからその旅路も楽しんでこそだろ？」と雪兎が言ったからである。

「へえ、スキー場もあるんだ」

「あの辺は雪が結構残るから今もやってるんじゃないか？」

「なら皆で行きたいね」

事前に聖が用意していた旅のしおりやパンフレットを見てウキウキしているシャル

ロットとそれを微笑ましく見ている雪兔。

「芙蓉亭っていう洋菓子店もあるのか」

「あそこのケーキも絶品だよ」

「お姉ちゃん、行ってみる？」

「是非とも！」

聖のオススメ店から芙蓉亭を見つけるラウラと我が事のように言う聖。アレシアも興味があるようで、カテリナを誘っていた。

「高社神社か」

「結構歴史のある神社みたいだな」

「そのようだ」

「行ってみましようよ、一夏」

「鈴さん、抜け駆けは許しませんわよ！」

神社の娘として高社神社に興味を持つ箒と一夏を中心としたいつもの面々。他にも皆思い思いに夜間瀬を観光しようと話している。

「とりあえず、今日は旅館で休んで、明日はグループ行動にするか」

「ですね。とりあえず行き先だけ聞いておけば夜間瀬は私がよく知ってますので」

「……ところで聖」

「はい」

「もしかして宿泊先の旅館って縁えんぎ嬉ぎか？」

「そうですけど・・・雪兎さん、もしかして夜間瀬せって」

「前世でISとは別の作品だが舞台になったゲームがあつてな」

「そういう事でしたか・・・という事はこはちゃん達も？」

「全く同一人物かは判らんが、限りなくそのゲームの登場人物に近いだろうな」

そう、雪兎もそのゲームをプレイした経験があつた。友人に勧められて購入してみたゲームだったが中々に面白かつた為にファンディスクや続編まで購入してしまった程である。

「ところで、どんなゲームだつたんですか？」

「・・・れ、恋愛系かな？」

「雪兎さんもそういうゲームやるんですね？」

「前世だと全く女メつ気キなかつたんだよ」

なんでも、前世ではあまりそういう縁えんがなかつたとの事。

「ふ〜ん」

それを聞いてシャルロットが不機嫌ふきげんそうな顔をする。どうやら恋愛ゲームと聞いて、そのヒロインと遭遇したら鼻はなを伸ばすのではないかと疑うたがっているようだ。

「いや、それは昔の話だからな!? 今更シャル以外にデレデレするかっての!」
「……ほんとに?」

「何でそんなに疑うのさ!?!」

「……だつて雪兔、手出してくれないし」

「それはちゃんと理由説明したよな!?!」

「相変わらず仲がいいよね、あの二人」

「というか、雪兔はまだ手出してなかったのか」

雪兔は意外にもそういうところはきっちりしており、「そういうのはちゃんと責任持てる年齢になってから」とシャルロットに言い聞かせているらしい。

「僕はもう大丈夫だつて言ってるのに……」

「アルベールさんにもこの前『孫はいつくらいに見られるんだい?』つて急かされたし、この世界はちよつとそういうの緩すぎないか?」

「ははは、雪兔、ドンマイ」

「他人事と思いやがつて……」

そうこうしているうちに電車は夜間瀬駅へと到着する。

「着いたか」

すると、聖は先に駅のホームに立ち、雪兔達にこう告げた。

「ようこそ夜間瀬へ！」

155話 雪と兎と温泉旅館 兎、遭遇する

夜間瀬町。東京に比べると雪の多いぐらいの田舎町でしかないこの町はその日軽いパニックに陥っていた。何故ならば半数以上が外国籍（しかも国はバラバラ）の集団が突然来訪したからだ。更に言えば、その集団は最近有名になりつつある兎一味なのだ。

「結構騒ぎになつてるね」

「まあ、過半数が元々代表候補生でそれなりに知名度はあつたのに、俺を筆頭に今年は色々やらかしたからなあ」

「……一応、やらかしてる自覚はあつたのね、あんた」

鈴のジト目を軽く流しつつも、一行は本日の宿である縁唄へと到着し、聖を先頭に雪兎達兎一味は縁唄へと足を踏み入れた。

「こんにちは、予約していた宮本ですが」

「いらつしやいませ、あつ！宮本先輩！」

（やつぱり知り合いかよ！）

一行を出迎えてくれたのは車イスの少女・くつのかなで杳野奏。この縁唄を営む祖父母の元に湯治を兼ねて長期滞在している少女だ。そして、雪兎は半ば予想していた事が的中し、額に

手を当てやれやれとため息をついた。

「あつ、この娘は杳野奏ちゃんといいまして、この縁唄のおじいちゃんとおばあちゃんのところに湯治に来てる娘なの」

「く、杳野奏と申します！どうぞよろしくお願いします！」

聖の紹介で少し緊張した様子で話す奏。無理も無い、まさかかつての先輩が連れてきたクラスメイトが超が付く有名人集団だったのだから。

「そんなかしこまらないでもいいぞ、年の1つか2つしか変わらねえし」

「そうですか？・・・あれ？私、自分の年言いましたっけ？」

「外見と聖を先輩って呼んでたからそこからの逆算さ」

「そうでしたか！」

奏とのやり取りでうっかりボロを出し掛けた雪兎だが、咄嗟に言い訳を思いつき、何とかその場のぐ・・・もつとも、シャルロットを筆頭に気付いているのも数名いたのだが。

「それではお部屋に案内しますね」

その後、自己紹介を終えた一行は数名ずつ部屋へと案内されていく。部屋割りはどうだ。

①雪兎、一夏、弾、数馬、紫音

② シャルロット、マドカ、蘭、クロエ

③ 箒、簪、本音、カオリナ

④ セシリア、エリカ、アレシア、ロラン

⑤ 鈴、聖、ラウラ、晶

⑥ 楯無、虚、忍、カテリナ

⑦ デイアーチエ、シユテル、レヴィ、ユーリ

雪兎とシャルロットを同室にしようという案もあつたが、「そういうのは二人っきりの時で十分だ」と雪兎が却下したそうなの。

「本当に彼女と一緒にじゃなくて良かったのか？」

「普段から同室なんだ。こういう時くらい離れてもいいだろう？」

「でもあの娘、すげーむくれてたぞ？」

「……正直に言くと、今のシャルと二人つきりが怖い」

「あつ、そういうことか」

学園の外であるこの旅館で二人つきりという状況と到着前のシャルロットの態度から危険だと雪兎の直感が告げているらしい。

「それに俺だつて久しぶりに男子とワイワイ騒ぎたいんだよ」

「あー、それわかる！」

「そうゆうもんか」

「そうゆうもんだ」

その後、部屋に荷物を置いた後、夕食までの空き時間に女性陣は縁唄にある温泉に入る事にし、男性陣は少し町を散策する事にした。

「ほんと、如何にも温泉街って感じだな」

「まあな、確かこの辺には縁唄以外にもいくつか温泉宿があるって話だし」

「ねえ、雪兎兄、あそこにあるお店って」

そんな話をしながら通りを歩いていると、紫音がある店を見つめる。そこには『こはるびより』という看板があった。

「ここって、雪兎が前に話してた和菓子屋だっけ？」

「ああ、そういやこの通りだったな、この店あるのは」

雪兎もゲームの知識しかなかった為、この店の正確な位置は把握していなかったようだ。

「確か、縁嬉のお茶請けの菓子もここの和菓子だったはずだが」

「包装に書いてありましたね、こはるびより、って」

「よく見てんなあ」

「今は夕食前だし、寄るのはまた今度でいいだろ」

「それにそろそろいい時間だしな」

という訳で縁嬉へと戻ろうと通りを引き返していると、前方に緑の着物のような服装で何やら大きな荷物を抱えた少女を見つけた。

「……噂をすればなんとやらってか、どういうエンカウント率だよ」

その少女に見覚えがあった雪兎がそう呟くと、着物の少女は未だに残る雪に足を捕られて転びそうになる。

「あわわわ!？」

「つたくー！」

それを黙って見ている事が出来なかった雪兎はすぐに少女に追い付くと、少女を片腕で支えてもう片腕で落としそうになっていた荷物を掴んだ。

「無事か？」

「は、はい……あ、ありがとうございます、ございます」

突然の事に驚く少女だったが、すぐに雪兎から離れると頭を下げてお礼を告げる。

「おーい雪兎！その娘も大丈夫か？」

「ああ、間一髪だったかな」

「は、はい。私も大丈夫です」

そこに一夏達も追い付き、一夏が少女の安否を確認すると、少女は改めて雪兎に礼を告げる。

「危ないところを助けていただきありがとうございます、ありがとうございました」

「……見過ごせなかっただけだ」

「ふふ、良い人なんですネ」

雪兎が素っ気なくそう返すと、少女は何かを思い出すかのように優しくそう笑う。

「ところでそんな大きな荷物を持って何処へ行くつもりだったんだ？」

「あっ!?!そうでした！私、配達の途中なんです！」

「配達?」

「はい、私の家はこはるびよりって和菓子屋さんで、その和菓子を配達していただきます(やっぱりこの娘、『星川こはる』だったか)」

そう、その少女は奏と同様、雪兎が知るゲームの登場人物の一人である星川^{ほしかわ}こはるだったのだ。

「そんな大きな荷物を?この先なんだったら俺達が持つぜ?」

「そんな、悪いですよ」

「俺達、この先の縁嬉って旅館に泊まってんだ。だからついでにだよ、ついで」

「えっ?縁嬉にですか?偶然ですね、私、その縁嬉に配達するところだったんです!」

そして、数馬がそう提案すると、こはるから行き先が同じだった事が告げられた。

「まあ、その物量からしてそんな気はしてたが・・・ドンピシャかよ」

「どんな確率だよ」と雪兎が思っているうちに、行き先も同じだからと、こはるも一緒に縁嬉に向かう事となった。

「へえ、じゃあ、紫音君以外は皆同い年なんですわ・・・それに一夏君と雪兎君はあのIS学園の・・・あれ?私、もしかして物凄い有名人と一緒にいるんじゃない?」

「あははは・・・今はオフの旅行中だし、普通に接してくれるとありがたいかな?」

「あー、なんとなくわかります。私の先輩にも同じような悩みを抱えてた先輩がいます

たから」

そんな事を話していると、あつという間に縁嬉に到着する。

「荷物を持つてもらってありがとうございます。お土産を買う際には是非ともこはるびよりをよろしくお願いしますね?」

「店のアピールも忘れないとは……まあ、土産を買う際には寄らせてもらおうよ」とすると、

「あれ?こはちゃんに雪兎さん達?」

たまたまエントランスに出ていた聖と遭遇した。

「聖ちゃん!久しぶり!」

「うん、久しぶり……で、何で皆が一緒に?」

「あはは、実は配達中に転びそうになったところを雪兎君達に助けて貰いまして……」

「あく、こはちゃんらしいというか、何と言うか……」

その後、他のメンバーも合流し、すっかり仲良くなった一行は滞在中のどこかでこはるびよりに立ち寄り約束をしてこはると別れるのであった。

156話 巫女姫と旦那様 兎、危険を感じる

旅行2日目。特に大きな問題もなく、その日はいくつかのグループに分かれて夜間瀬を観光する事になったのだが、その前に皆で高社神社へ参拝する事となった。

「高社神社・・・何故だろう、嫌な予感がしてならないんだが」

「ただの神社なんだろう？そこまで気にする必要も無いさ」

「・・・だよな」

雪兎の知る限り、高社神社に神様が出ただの、不可思議現象が起きたただのという話は無いはずだ。なので一夏の言う通り気にし過ぎだと雪兎は気を持ち直す。しかし、雪兎は失念していた・・・今が時期的に1作目と2作目の間に該当するという事は、1作目の主人公・須賀川勇希すががわゆうき※1が既にどのヒロインかと付き合っているという事を※2。

(※1 デフォルト、変更可なのでこの世界の彼がこの名前かは不明)

(※2 昨日の様子から星川こはるではないと確定しているので残り二人のどちらか)

「あつ、申し遅れました。自分は天野雪兔、聖のクラスメイトです」

「あら、そうでしたか……あれ？あいえす学園は女性の学校だと聞いていましたが？」

「例外の男性適性者が二人いたんだよ。だろ？天野雪兔君」

そう紗雪が小首を傾げると、社務所の方から一人の男性が現れ紗雪の疑問に答え、雪兔に声掛けた。そして、雪兔はその男性を見て固まった。その理由は……

「旦那様！」

「「「えっ?!旦那様!?!」」」

(紗雪ルートかよ!?)

そう、紗雪が旦那様と呼ぶその男性こそ1作目の主人公・須賀川勇希その人だったのだ。

「あの、紗雪先輩がお付き合いを通り越して旦那様って……」

「ははは、それにはまあ色々あつてね」

その後、改めて自己紹介した面々（やはり名前は須賀川勇希であった）は、主に女性陣（特に箒達一夏狙いの者達）が二人の馴れ初めについて色々と質問をし始めた。

「何かすみません、勇希さん」

「あはは、婚約した当初は俺の周りもこんなだったよ」

一つしか歳が変わらないのに、勇希の対応は慣れたものである。だが、話を聞いてい

るうちにどんどん箒達の様子が暗いものになりだした。

「……………負けた」

「……………こ、これが本物のヒロイン」

「……………正に大和撫子ですわ」

「……………」

そう、日頃から何かと手が出がちだった箒達は、大和撫子を絵に描いたような紗雪のあまりの女子力ヒロインに打ちひしがれてしまったのだ。特に同じ神社の娘たる箒には、特攻ダメージだったらしく、既に真っ白になっている始末だ。

「死屍累々だな、これ……………」

「まあ、自分達から聞いたんだから自業自得といえますか」

それを他人事のように見ていた雪兎だが、次の瞬間には青ざめる事となる。

「こ、婚約つて事は、その……………キスの先までしたんですか?」

それは紗雪同様に雪兎と婚約に近い状態にあるシャルロットの質問である。その答えを知る雪兎は旅館での嫌な予感の原因が何だったのかを察する。

「それは……………その……………」

質問された紗雪も恥ずかしさから流石に口にはしないものの、顔を真っ赤にして照れている様子から答えは明白である。シャルロットが笑顔で雪兎を振り返り、つられて一

行が雪兔を見ると……雪兔は幼馴染の一夏達すら見たこともない滝のような冷や汗を流し思わず後退る。

「だって、雪兔♪」

「……疾風ダツシュ！」

「逃がさないよ！」

雪兔はかつてない速度で高社神社から逃げ出した。しかし、シャルロットも雪兔達の早朝特訓で鍛えた脚力を活かして雪兔を追って行き、それを「面白そう！」とレヴィも追いかけていった。

「……大丈夫かな？雪兔兄」

「シャルロット、恐ろしい娘」

雪兔の事になると恐ろしいアグレッシブさを見せるシャルロットに戦慄する一行だが、「雪兔なら大丈夫だろう」と勇希や紗雪と別れてそれぞれのグループで観光を始める事にした。尚、箒が立ち直るまで一夏のグループだけは高社神社に残り続けたらしい。

「くそっ！あんなところに伏兵がいたとは！」

念の為にと登山等の滑り止め完備のブーツで夜間瀬を疾走する雪兎。今のシャルロットに捕まるとどうなるか分からない為、正真正銘の全力疾走だ。

「ゆう〜きい〜とお〜!!」

対するシャルロットは精々市販の滑り止め程度の靴なのに滑る事なく雪兎を追走している。尚、レヴィは逆に滑りながら二人を追っている。こうして、雪兎の平穩な旅行のかかった逃走劇が幕を開けた。

「今回ばかりは何が何でも負けられねえ！」

何とかしてシャルロットを撒こうと、雪兎は某逃走劇番組の様に角を利用してシャルロットの視界から逃れようとするが、曲がった先にいたオツドアイの女性とぶつかりそうになってしまう。

「えっ!？」

「やべっ!？」

だが、履いていたブーツのおかげでブレーキが間に合い、正面衝突を回避する。

「あ、危ないじゃない!」

「す、すみません!?!少し急いでるものでっ!」

手短かに謝罪をすると、雪兎は再び走り出し去っていく。するとそれほど間を空けずシャルロットもその女性の横を通り抜けていった。

「……一体何だったのかしら?」

残された女性ごと、1作目の最後のヒロイン・上林^{かんばやしみずき}聖は首を傾げるのであった。

「うくん、二人共速すぎるよおく!見失っちゃったじゃないか!」

そんな聖の前に次はレヴィがやって来る。

「とうか、ここ、どこ?」

完全に雪兎とシャルロットに撒かれて見失ってしまったようだ。

「あら?この辺りでは見ない顔の娘だけど、迷子?」

「うん、そうみたい」

「素直でよろしい。どこか分かる場所の名前は?」

「エンギって旅館とこはるびより!」

「あらあら、なら案内してあげるわ。お姉さんも丁度こはるびよりに行くところだったのよ」

そんなこんなでレヴィは聖に助けられ、こはるびよりにてディアーチェ達と無事に合流する事が出来たのであった。

一方、雪兎は一先ずシャルロットを撒く事に成功し、一息ついていた。

「・・・今日もエンカウント率やべえな、これは」

紗雪、勇希に続いて聖ともエンカウントした事で雪兎は「この旅行中にこの時期に夜

間瀬にいる主要キャラと全員接触するのでは？」と疑い始めていた。そんな時だった。

「最悪だ……何でこう簡単にはぐれるのかねえ、あの筋肉馬鹿は」

「戦兔、ポテトもない」

「アイツは方向音痴でしょうが……」

どこかで見たようなトレンチコートの男性と革ジャンの男性が誰かを探しているようだった。

「……似てる」

トレンチコートの男性は葛城巧に似ているが、革ジャンの男性の言葉から戦兔という別人のようだ。

「もしかしたらこの世界の巧さんに相当する人なのか？」

雪兔がそんな事を考えていると、その二人が雪兔に近付いてきた。

「ちよつと君！」

「お、俺ですか？」

「ああ、この辺りで如何にも頭の悪そうなエビフライのような編み込みをしたやつと、モッズコートを着たドルオタみたいなやつを見なかつたか？」

「（龍我と一海だろ、そいつら……）い、いえ、俺は見えてないですね」

「そっか……幻さん、あつちの方を見に行ってみよう！」

戦兎のその言葉に幻さんと呼ばれた男性は革ジャンの下に着た「急ぐぞ!」と書かれたTシャツを見せて頷くとあつという間に去っていった。

「……なるほど、あれは幻徳ポジか」

「あつ!見つけたよ雪兎!」

「やばっ!?!」

Tシャツでの会話で彼が幻徳に相当する人物だと察したところで、雪兎も追つ手シャルロットに見つかりその場を走り去っていく。そして、問題の龍我と一海に相当する人物達はというと……

「戦兎お、何処にいつちまったんだよお」

「きつと戦兎達はこつちだ!」

「そつちはさつき俺達が来た道だつてのお!方向音痴なんだから大人しくしやがれ!このドルオタ!」

「何だ?やんのかエビフライ!その頭にソースぶっかけんぞ、コラア!」

迷子になっているというのに喧嘩を始めていた。その後、たまたまそこを通り掛かったレヴィと聖に助けられ、無事に戦兎達と合流出来たそうな。

「ぜえ、ぜえ……こんなに、全力で、走つたの、いつ振りだよ、全く……」

何とか再びシャルロットを撒いた雪兎だったが、シャルロットの猛追跡に流石の雪兎も疲労を隠せない。

「つてか、ここ、何処だよ……」

そして、逃げるのに必死過ぎて雪兎も現在地が何処か分からなくなっていた。

「えっと、何か目印になるもんは……ん？」

そこで雪兎が見つけたのは「山ノ内荘」という看板だった。

「……何で俺、彼女に追われながら作品の名所巡り聖地巡礼してんの？」

そう、この山ノ内荘は勇希や聖が下宿している場所なのだ。

「まあ、ここが山ノ内荘なら道は大体判ったようなもんだがー」

その時、雪兎は一人のお婆さんが荷物を持って歩いているのを見かけた。

「大丈夫か？お婆さん」

「おや、この辺では見ない顔だね？観光かい？」

「ええ、そんなところです。ところでその荷物は？」

「これかい？これはウチの孫の忘れ物だね。お爺さんがぎっくり腰で動けないから私が届けてやろうと思つてね」

「へえ、何処まで？」

「高社神社は分かるかい？孫は今その手伝いをしててね」

「……お婆さん、そのお孫さんの名前、勇希だったりしません？」

「おやまあ！孫を知っているのかい？」

「ええ、丁度今朝知り合いました……」

その後、雪兎はお婆さんの荷物を持って高社神社まで同行し、無事に勇希に忘れ物を届ける事が出来た。

「ありがとうね、お兄さん」

「俺からも礼を言うよ」

「たまたま通り掛かっただけですよ」

ここで終われば良い話で済んだのだが、そうは問屋が卸さなかった。二人と別れ再び逃走を開始しようとした雪兎の肩をガツシリと掴む手があったからだ。

「やっとならぬよ？雪兎」

「い、いつの間に追いついたんだ、シャル……」

そう、その手の持ち主はシャルロットさんである。

「ちよつと待て、話せば判る！つてか、勇希さん!?何合掌してんですか!?グルか！グルなんだな!」

どうやら勇希から聖^{ひじり}經由でシャルロットに情報がリークされていたらしい。

「さあ、雪兎……二人で色々と話し合おつか?」

その日、縁嬉の部屋が新しく一部屋埋まった。

157話 和菓子VS洋菓子 兎、巻き込まれる

「……この、薄情者共、め……」

翌朝、上機嫌なシャルロットとは正反対にげっそりとし、一夏達を怨めしい顔で現れた雪兎に一行は昨夜に何があったのかを察する。しかし、一夏達も観光ついでに雪兎の位置情報をシャルロットに伝えていたので雪兎からすれば売られたようなもの思っても無理は無い。

「いや、すまん……こっちもこっちで大変で」

「けっ！優柔不断のハーレム野郎が」

「うぐっ」

「お、落ち着きたまえよ、雪兎」

「お前は黙つてろ、塚ヤロウ」

「はい……」

「雪兎がやさぐれた!?!」

思った以上に雪兎の精神的ダメージは大きかったようで、一夏達に発する言葉には強烈な棘が含まれていた。そこで数馬が無理矢理話題を変えようとする。

「き、今日はこはるびよりに寄るんだったよな!？」

「……らしいな、俺とシャルがいないうちに決めやがって」

「頼むから機嫌直してくれよ、雪兎!」

「ふん」

「やべえ……ガチで怒ってやがる」

「まあ、私達もデリケートな問題に面白半分で首突っ込んだものね」

「だから止めようって言ったのに」

まさか雪兎がここまで怒るとは思っていなかった一夏達はどうしたものかと途方に暮れる。そこで手を挙げたのはシユテルだった。

「では、もう一つの菓子店・芙蓉亭に向かう組とこはるびよりに寄る組に分かれてみてはどうでしょう?」

全員一度ではこはるびよりは手狭では?という事から今回の騒ぎに関与した面々とそれ以外で分かれてはどうかという提案だ。

「……なら俺は芙蓉亭に行く」

その提案に雪兎が折れ、一行は二手に分かれて午前と午後で入れ替わる形で行動する事となった。

芙蓉亭。夜間瀬でこはるびよりと人気を二分する洋菓子の老舗で、夜間瀬でケーキといえは芙蓉亭というぐらい有名なんだとか。こちらにやってきたのは雪兎、シャルロット、簪、本音、エリカ、アレシア、カロリナ、カテリナ、マドカ、蘭、マテリアルズ、紫音のメンバーである。

「・・・で、何とかならんのか、アレは」

「ダイアーチエの言うアレとは、不機嫌オーラ全開の雪兎と、その雪兎と腕を（無理矢理）組んで幸せオーラ全開のシャルロットの事だ。」

「まるで氷河期と春が同時に来たような居心地の悪さね」

「あまあま、あそこまで不機嫌なの初めてだよね？」

大抵雪兎が不機嫌になつても一過性というかすぐにやり返して発散していたのだが、今回に至つてはそれが出来ずにやさぐれてしまった訳だ。

「ふへへ〜♪」

そして、シャルロットは不安だつた点が解消されたせいか幸せそうに雪兎に甘えており、雪兎もシャルロットに当たるつもりは無いようで、させたいままにしている。

「とりあえずお土産のケーキを確保しましょう」

という事で仕方なく雪兎達の問題は先送りにしてケーキを物色していると……

「……ん？あれは確か」

店内で雪兎がとある人物を発見する。その人物とは先日遭遇した高社紗雪の妹である高社雪静だった。

「……あつ、昨日の」

あちらも雪兎達に気付いたようだ。するとシユテルが雪静に話し掛ける。

「ユズカでしたか、どうしてここに？」

どうやら雪兎とシャルロットがいなくなつた後に読書が趣味という者同士意気投合したらしい。

「お姉ちゃん達と食べようと思ってケーキを買いに来たの」

「そうでしたか」

「それで、そっちの二人が？」

「ええ、私のマスターである雪兎とその婚約者のシャルロットです」

本来ならば雪静は人見知りか激しい性格なのだが、シュテルは普通に話している。余程本の趣味が合ったのだろう。そうこうしていると、店の奥から同年代と思われる男性が現れ、ショーケースにケーキを並べ始めた。

「そっか、もうすぐ帰っちゃうんだね」

「ええ、でも必ずまたここに来ますから」

「この後はどうするの？」

「この後は昼食を取ってこはるびよりに寄る予定です」

「こはる、びより、だと？」

すると、ケーキを並べていた男性の手が止まる。

（あつ、こいつもしかして幕岩か）

幕岩とは二作目に登場した主人公のクラスメイトの一人で、この芙蓉亭の息子なのだ。そのせいか、こはるびよりに対抗心を持っているキャラだったと雪兎は記憶している。

「店員さん、ちよつといいか?」

なので雪兎は幕岩が暴走する前に彼に声を掛けた。

「あつ、はい。何でしよう?」

「そのシヨートケーキとチーズケーキ、レアチーズにガトーシヨコラにそのとあれも……各20くれ」

「に、20!?!」

雪兎の大量注文に驚く幕岩。まあ、一度に20も注文する客は普通いらないだろう。しかも、合計ではなく、各種ケーキを20ずつだ。

「心配しなくてもちやんと持つて帰れるから安心しろ」

「は、はあ、分かりました」

その後、支払いはカード一括払い、更に大量のケーキを一瞬でstorageに収納して芙蓉亭の面々を驚愕させた。

「あつ、ありがとうございます!」

事件は雪兎達がこはるびよりに向かう前に昼食を取っていた時に起こった。簪の端末に楯無から連絡があり、何やら芙蓉亭で問題が発生したらしい。

「どうしてそんな事に？」

『それが、お店でこはるびよりの話をしたら店員さんが……』

「……やりやがったか」

どうやら一夏達も幕岩の前でこはるびよりの話題を口にしてしまったらしい。地元出身の聖がいても止められなかった事から余程こはるびよりと比較されるのが嫌らしい。そして、幕岩は一夏達に凄い剣幕で洋菓子について語り出し、止まらなくなったの事。

「どうするの？」

「聖がいて止まらんとなれば俺が行っても無駄だろ……予定通りこはるびよりに行くぞ」

だが、雪兎はあつさり一夏達を見捨ててこはるびよりに向かう事を決めた……のだが。

「今日という今日ははつきりとさせようではないか！」

「ええ、挑むところですよ！」

雪兎達がこはるびよりに到着すると、何故か幕岩がおり、こはるとお菓子作り対決に発展していた。

「……なんでさ」

「あはは、なんかごめんね？」

「ごめんなさい、雪兎さん」

また、雪兎と聖、そして偶然こはるびよりで出会った硯川すずりかわユーフラジエるいか涙香の三名がその審査員に抜擢されてしまった。

「とうか、何故この面子なんだ？」

「涙香先輩は常連客、私は両親がそれぞれのお店で修行してた関係で、雪兎さんはお料理に厳しい方という事で」

「そういう事か……ならば半端なものが出てこようものなら某毒舌絵本作家の如く扱

き下ろしてくれる」

「うわぁ……」

そんなこんなで始まったお菓子作り対決なのだが……二人が作ったのはショートケーキと大福だった。

「なるほど、二人とも季節の果物を選んだのね」

涙香はただ美味しそうと、その2つを眺めるも、雪兎と聖の表情は何故か険しい。

「どうしたの？二人とも」

「ええつとですね、もうこの段階で私達二人の結論が出たといえますか」

「星川こはるの勝ちだな」

「な、何故だ!?食べてもいないのに何故そんな事が判る!?!」

雪兎の予想外の宣言に幕岩が声を上げるが……

「このショートケーキに使われた苺……」完熟のやよいひめ” だろう?」

「あ、ああ! そうだ! それがなんだとー」

「やよいひめは甘味が強く酸味が低い苺、完熟ともなれば当然そのその甘味や酸味の強弱も相応のものになるだろう」

「ですけど、ショートケーキに使う苺としてはダメですね」

「なっ!?!」

「ショートケーキの苺はショートケーキ自体の甘さと苺の甘さでくどくならないように酸味の強い早摘みの苺を使うのが正しい。更に行くならば完熟の苺は痛み易いから持ち帰りには向かない・・・つまり、幕岩。お前のこのショートケーキは苺選びの段階でアウトって訳だ」

「し、しまった!?!」

幕岩はこはるへの對抗心から普段ならしないような致命的なミスをしていたのだ。

「い、苺一つでそんな事まで!?!」

一方の涙香は苺一つでそこまで見抜いた二人に絶句する。

「はむ・・・こはちゃんのいちご大福の苺は“紅ほつぺ”かな?」

「だな。いちご大福も苺が中で発酵糖分を分解して発生した炭酸ガスでピリピリまたはシュワシュワとして好みが分かれますからそれを避ける為に鮮度が良いものを使い、早めに食べてもらうのが好ましい。こはるのいちご大福はそれを見越して早摘みの鮮度が良いものを使っているな」

対してこはるのいちご大福は十分合格点らしい。

「・・・ショートケーキの苺が何で酸っぱかったのかよくわかった」

「いちご大福のあのシュワシュワとした感じって発酵だったのね」

ギャラリィとなっていた一行も二人の解説になるほどと頷く。

「まあ、幕岩のショートケーキも不味い訳じゃない。ただ、評価するとなればああ言わざる得ない」

「まだまだ勉強が足りないという訳か・・・すまない、菓子作りに私情を込めてしまった俺の不徳か」

「料理は総じて”誰かに食べてもらう事”を念頭に置かないといけないって事だ」

「私も偉そうな事言っただけ、負けてられないなあ」

こうして唐突に始まった菓子作り対決は幕を閉じるのだった。

158話 スキー場の兎達 兎、雪ではしやぐ

お菓子対決の翌日。兎一味は近くのスキー場を訪れていた。

「ヒヤッハー！」

その日の雪兎は先日までの鬱憤を晴らさんとばかりにスノーボードでゲレンデを疾走していた。

「何だあの白髪!? コークスクリューを平然と決めたと思ったら次はロデオ!?!」

その様子を常連客達は啞然としながら見ていた。

「よっぽどストレス溜まったのね、あいつ……」

「ご主人楽しそう! ボクもやる〜!」

「ねえねえゆうーたん（ユーリの事）、私達は雪だるま作るつか?」

「はい、目指せ35体!」

「6世帯も作る気か!?!」

他の面々も好き勝手しているようだ。

「皆〜、お昼には麓に集合だよ〜!」

「[[[[は〜こ]]]]」

そこからはスキー、スノーボード、上級、中級、初心者で分かれ滑り始めた。

「ええつと、こう、かな？」

「そうそう、上手だよ、紫音」

「えへへ、シャル姉の教え方が上手いからだよ」

スキー初心者の紫音に色々教えているシャルロット。

「でも、僕についててよかったの？シャル姉、本当は雪兎兄のとこ行きたかったんでしょ？」

「それはそうなんだけどね……」

「ワッフー！」

「あれにはついていけないよ」

「……確かに」

シャルロットも雪兎についていきたかったが、ストレスのせいかな普段より飛ばしている雪兎に追い付けないと察し、こうして紫音に手解きをしているのだ。

「イナズマジャンプ！」

そして、そんな雪兎に追従するレヴィも何やら複雑な動きで跳んだり回転している。

「スキーなんて久しぶりだな」

「そうなのか？」

「ああ、弾達と前に行った事があってな……それよりも、またフォームが崩れてきてるぞ」

一方、一夏はスキーの経験があるらしく、初心者の箒に指導していた。いつもとは真逆の状況に二人共楽しそうである。それを悔しそうに見る三人がいた。

「うぐぐ……スキー経験がここで仇となるなんて」

「不覚ですわ」

「初心者を偽ったところで、このようなものは直ぐに動きに出てしまうからな」

鈴、セシリア、ラウラの三人だ。

「三人共、そんな事しないで滑ろうよ」

「あと、ここで割って入ろうとすれば逆に好感度が下がりますわよ？」

「そうね……ここは雪兔みたいに楽しませよ！」

「……師匠のあれはやりすぎだと思っけど」

しばらく二人を眺めていた三人だったが、聖やエリカの言葉で今は楽しむ事を優先することにしたようだ。

「そーいや、シユテルやユーリ達は？」

「あそー」

カロリナが指差す方を見ると、そこには雪まつりも真つ青な雪像がいくつか出来上

がっていた。

「・・・何やってんのよ、あの子」

しかも、他の客に写真を撮られまくっており、オーナーらしき人物がシュテルに頭を下げていた。

「あの雪像、やっぱりシュテルのだったか」

「申し訳ありません、やりすぎました」

「結果的にはお礼言われたんだろ？なら俺がとやかく言うつもりはねえよ」

夕方、集合する頃にはストレスを発散し切ったのか、雪兎の機嫌は普段のものへと戻っていた。

「もう旅行も明日で終わりかあ」

「もう？ やつとの間違いだろ」

そんなこんなでその日も縁嬉へと戻っていく一同。しかし、この日も雪兎はシャルロットに二人部屋へと引き摺られていく。

「あゝ、シャルロットさん？」

「……今日はずっと構ってくれなかったから夜は一緒がいい」

どうやら昼間ほったらかしにされた事を少し根に持っているようだ。

「……わかったよ」

だが、雪兎もそれを自覚していたようで今回は大人しくしている。

「ねえ、雪兎」

「何だ？」

「いつか二人つきりで来ようね」

「それはいいかもな」

159話 桜舞う季節 兔一味、帰還

「わざわざ見送りしてくれてありがとな、奏ちゃん、小春」

「いえ、これも立派なお仕事なので」

「皆さんにはたくさん買っていただきましたからね」

夜間瀬での滞在期間が過ぎ、雪兔達が学園へと帰る日がやってきた。その見送りに奏とたまたま縁嬉で顔を合わせた小春が駅まで付いてきてくれたのだ。

「お世話になりました」

「またお越しの際は是非また縁嬉をご利用下さい」

「こはるびよりも是非」

「商売上手だな、この娘らは……」

「ユズカにもよろしく伝えておいて下さい」

そんなこんなで二人に見送られながら雪兔達は学園へと帰っていくのであった。

IS学園の辺りまで戻ってくると、周りには桜が満開になっていた。

「桜か」

「夜間瀬はまだ寒かったからな」

「そうだ！」

雪の残る夜間瀬との違いに皆が桜に目を奪われる中、シャルロットがある提案をする。

「皆でお花見しない？」

「お花見？」

「そうか、紫音は知らないのか……」

「お花見つてのは桜を見ながらその下で騒ぐ宴みたいなもんだ」

「楽しそうですね！」

話を聞いて目をキラキラさせる紫音に一同は思わず笑みを浮かべる。

「となると料理がいるな……シャル、一夏、箒、鈴、デアーチエ、シユテル、手伝え。他は場所取りと飲み物の買い出しだ」

「『おー！』」

その後、一度学園に戻った一同はお花見の準備の為に動き出す。途中で別れた弾達や旅行には同席出来なかった千冬達も呼んでお花見は大宴会となった。

「綺麗ですわね」

「去年はドタバタしててやれなかったけど、やっぱり日本の春はこうでなくっちゃ」

「桜の下で食べる桜餅は格別だ」

紫音と同じく初めの花見であるセシリアはその花卉が舞う光景にうっとりとし、鈴は久しぶりの花見を楽しんでいた。また、ラウラは花より団子というべきか、桜餅をハムハムと頬張っている。

「これは……箒にも迫る美しさだね」

「うるさいぞ、ロラン．．．一夏、この玉子焼きは上手くできたと思うのだが」
「ああ、また腕を上げたな、箒」

ロランは花より箒のようだが相手にされず、その箒は玉子焼きを一夏に褒められ密かにガッツポーズを取る。

「綺麗ですね」

「王様達の料理も言うこと無しだし、最高だね」

「褒めても料理しか出ぬぞ、レヴィ」

「私も微力ながらお手伝いさせていただきました」

「僕も料理覚えようかな？」

マテリアルズと紫音もちやんと楽しんでいるようだ。

「かんちゃん、ひじりん、これ美味しいよ」

「あつ、本音、口元に付いてる」

「そんなに慌てなくてもたくさんあるから」

「簪ちゃんとまたお花見できるなんて．．．」

更識姉妹と本音に聖は同じシートで集まっているようだ。

虚は？それは．．．再び呼ばれた弾と一緒に良い雰囲気になっていた。

「まさか、私が花見をする日が来るとはな」

「なら来年も、その次も皆でやろ、マドカ」

「……そうだな」

マドカと蘭は毎年花見をしようと約束する。

「皆楽しんでるね」

「だな……後で酔いどれ集団も回収しないとイケないけどな」

そんな皆の様子を見ながら雪兎とシャルロットは二人で桜を見上げる。

「ほんと、色々あり過ぎた一年だったが、思い返せば楽しかったもんだ」

「雪兔と一緒にいた一年は思った以上に濃密だったよ」

ふと、そこで雪兔が少し影のある顔を見せる。

「けど、ここからは俺にも全く想像がつかない領域だ。何が起こるのかさっぱり予想が
出来ない」

「大丈夫だよ。雪兔は一人じゃないんだから・・・皆が一緒ならきつと」

「・・・ありがとな、シャル」

シャルロットの言葉で迷いが晴れたのか、雪兔は立ち上がると storage から
色々とももの取り出し始める。

「よし、お前ら！本番のバーベキュー始めるぞ！」

「「「おーっ!!」」」

「えっ!?まだ食べるんですか、皆さん!」

「何だ?真耶は食わんのか?」

「ゆーくんの厳選お肉だよ!絶対美味しいって」

「ふっ、飛驒牛の直卸店の肉だ・・・存分に味わえ!」

こうして、お花見はいつしかバーベキューパーティーとなり、日が暮れても明かりを
灯して続けられたのであった。

※お花見でバーベキューをする際はちゃんとやって良い場所か確認し、許可を取って

行いましょう。

断章―とある前日談―

とある前日談

某県●●市、都会とも田舎とも言えない変哲もない地方都市。これはそんな●●市に住むとある人々の話。

「おはよう、兄貴」

「おはようさん、八雲。直に朝飯出来るから顔洗ってこい」

「はーよ」

村上家。両親は既に亡く、既に社会人で少し年の離れた長男・雪人が高校生の弟（八雲）と妹（時雨）を世話しているシチュエーション的には少し特殊だがありふれた一家だ。

「……おはよ」

そこに末っ子の妹・時雨が眠そうにリビングにやってきた。

「おはようさん、時雨。また衣装作りで徹夜か？」

「うん……次のイベントで着るやつだから急いでて」

衣装というのはコスプレの衣装の事で、時雨は衣装から小道具まで自作で揃えている

(主に金銭的な都合で)。しかもクオリティも割りと高い為、その手の業界では有名な人らしい。

「そうか。手伝つてやりたいところだが、ここのところ忙しいからなあ」

「お兄ちゃんこそ忙しいんだつたら無理して皆のお弁当まで作らなくていいのに……」

両親がいない為、村上家では朝食と昼のお弁当は雪人。夕食は時間があれば雪人、雪人が遅い日は八雲が作るかお惣菜コーナーの見切り品になる事が多い。

「まあ、半分趣味みたいなもんだから気にすんな………食費も浮くしな」

「お兄ちゃん、いい主夫になりそう」

「はいはい、時雨もさっさと顔洗つてこい」

「は〜い」

八雲と丁度入れ替わるように洗面所に向かった時雨を横目に雪人は今日の朝食の準備を終える。メニューはチーズオムレツに焼いたウインナーと付け合わせのレタス、そして雑穀ご飯にマグカップに入ったコスソメスープである。

「いただきます」

「いただきますす！」

三人揃ったところで朝食を開始する。雪人も下二人の面倒を見るために朝に余裕のある会社に勤めており、このように三人揃つて朝食を取る事が当たり前になっている。

「二人共、今日は帰りが遅くなりそうだから昨日の残りのシチューで晩飯は済ませてくれ」

「はいよ」

「らじや」

朝食を終えた二人はそれぞれ部活の朝練の為に弁当を持って家を出る。八雲はテニス部、時雨は演劇部に所属している。当初二人は部活には入らずに家計の為にバイトをしようとしていたのだが、雪人に「親父達の遺産も残ってるし、お前らにそんな心配される程火の車じゃねえつての」と、言いくるめられ青春を満喫している。

家を出てしばらくすると、二人の幼馴染で八雲のクラスメイトの森園慎一が二人を待っていた。

「時間通りか、流石は我が相棒だな」

「オッス、慎。そう言うお前も毎朝早いよな」

「おはよ、慎くん。あとお兄ちゃんから今日のお弁当」

「いつもすまん……本当にあの人には頭が上がりないぜ」

森園慎一……先も説明したが、二人の、というか村上三兄弟の幼馴染であり、

三兄弟同様両親が不在の為、雪人が弁当等ちよくちよく世話を焼いているのだ。雪人曰く、「もう一人の弟みたいなもの」とのこと。

「で、また危ない橋渡つてねえだろうな？ 慎」

「……少なくとも雪人さんに迷惑掛けるような事は何も」

「お兄ちゃん、怒ると怖いよ？」

「安心しろ……あの時のようなのは俺ももうごめん」

慎一は趣味兼特技の情報収集を使って情報屋のような事をしており、以前に危ない橋を渡りかけて雪人に助けられた挙げ句にキツイお説教を受けているのだ。

「まあ、何かあったらちちゃんと俺達にも相談しろよ？」

「わかってるよ……というか、お前は俺の母親か！」

「兄さんが母親だとしたら……お兄ちゃんは父親？」

今更だが、時雨は二人の兄の呼び方をお兄ちゃん↓雪人、兄さん↓八雲、という風に区別している。

「……全く違和感ねえな」

「おいっ！ 俺は男だ！」

「そんな事より早くしないと朝練遅れるよ?」

「ちつ……そんじやまた後でな、慎」

「じゃあね、慎君」

そう言うと、二人は風のように学校へと走り去っていった。

「……相変わらず嵐のような兄妹だな」

二人と違い部活には所属していない慎一は受け取った弁当を鞆にしまい、ゆつくりと学校へ向けて歩き出した。

そしてあつという間に放課後。部活が職員会議の為に無かったその日は幼馴染三人で下校していた。

「雪人さん、最近忙しそうだな?」

「まあな、何でも『やる仕事の範囲が一気に増えた』とか何とか」

「顔には出して無いけど、かなり疲れてそうなんだよね、お兄ちゃん……」

そう、ここ数ヶ月雪人は帰りが遅い日が増えていた。雪人は「朝の時間を融通してもらってるんだから当たり前だろ?」と言って平気そうな顔をしているが、実際には趣味のプラモを作る暇が無いくらいに疲れているのを二人は知っていた。

「もう少ししたら一区切りつくとは言ってたんだが……」

そんな時だった。突如八雲の携帯が鳴り始めたのだ。

「うん？寺川さん（雪人の同僚）から？何だろう？」

『あつ、八雲君!』

珍しい人からの電話に首を傾げながら通話ボタンを押すと、切羽詰まった様子の声が聞こえた。

「ど、どうしたんですか、寺川さん……」

『ごめんなさい。でも、落ち着いて聞いて……君のお兄さん、雪人君が交通事故で搬送されたの』

「……………えっ？」

「悪いな、寺川。こんな事に付き合わせて」

「そう思うなら少しは休んだらどうなの？雪人君」

時は少し遡り、仕事の関係で社外に出ていた雪人とその同僚の寺川恵の二人。同僚以前にこの二人は中学時代の同級生で、偶然にも入社した会社が同じで、雪人は腐れ縁のようなものだと思っている。その寺川は連日遅くまで仕事をしている雪人を心配してこうして同行していたのだ。

「今の仕事に区切りが着いたら溜まった有休でも使うさ」

「そういうところ、中学から本当に変わってないのね?」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

幸い大した用ではなく、既に用は済ませて後は社用車で会社に戻るだけだった。しかし、とある交差点を通過しようとした時に悲劇は訪れた。

「えっ?」

「くっ!」

二人の乗る社用車に信号を無視したトラックが右側に激突し、車は数十M程弾き飛ばされてしまったのだ。

「……………うう……………」

助手席側の寺川には不幸中の幸いというべきか怪我は大したことはなかった。だが……………

「はっ! 雪人君!」

運転席にいた雪人の方は血まみれになっており、呼吸も細かい危険な状態だった。それから近くの人の通報で駆けつけた救急車で雪人と寺川は病院まで搬送され、緊急手術となった雪人の事を報せるべく、寺川は八雲へと電話を掛けたのだった。

「兄貴!」

「お兄ちゃんー！」

それから慌てて病院へと駆けつけた八雲達だったが、そこで待っていたのは泣き崩れた寺川と辛い表情の医者の方だった。

「ご遺族の方ですか？」

「ご遺族って、まさか……」

「我々も手を尽くしたのですが……」

聞けば雪人はつい先程に息を引き取ったのだと言う。

「嘘、だよね……」

未だに雪人の死が受け入れられない時雨が寺川や医者を見るが、二人は首を横に振るだけで、時雨もとうとう泣き崩れてしまう。

「……事故の原因は？」

「相手のドライバーの居眠り運転だったそうだ」

「急ぎの荷物だったそうで、徹夜で運転していた疲れで眠ってしまったそうよ」

一方で慎一はその事故原因を医者と看護師から聞き、拳を強く握り締め壁を殴りつけようとするが、寸前で八雲に止められる。

「落ち着けよ、慎」

「落ち着けられるか！ ってか、何で相棒はそんな冷静なんだよ!？」

「俺だつて頭ん中ぐちゃぐちゃで訳がわかんねえよ！」

もし、この場にそのトラックのドライバーが居れば八雲もすぐさま殴りかかっていただろう。それくらい八雲とて悔しさが滲んでいた。

「……わりの、俺よりもお前の方が辛いよな」

それを察し、慎一も怒りを鎮める。

「……兄貴、いえ、兄の遺体は？」

「こちらです」

幸いな事に雪人の遺体は怪我は酷かったものの見れない程酷い損傷はなかった。また、雪人は自身に何かあったらと、少し高めの生命保険も加入しており、雪人の貯金や両親の遺産に加えて多くの保険金が二人に遺されていた。そして、両親の遺産に至っては八雲と時雨の為にしか使われておらず、未だに多くの金額が残っていた。

「バカ兄貴……少しぐらい楽しんで罰なんざ当たらなかつただろうに」

それを知り、八雲は怒りよりも呆れが先にきたと言う。

一方、時雨の方はショックのあまり数日自室に引きこもってしまった。

時雨が何とか立ち直り、雪人の葬儀を終えた八雲と時雨。葬儀には多くの人が駆けつけてくれ、雪人の交友関係の広さを実感していた。特に寺川は何かと二人の心配をして

くれ、時雨が立ち直る切っ掛けにもなってくれていた。

「もしかして寺川さんって……」

「だと思っよ」

雪人はただの腐れ縁の友人と言っていたが、彼女の方は違ったのだろう。

そして、数ヶ月が経つ頃には八雲も時雨も何とか以前と同じように笑う事が出来るようになっていた。

一方で、慎一は表面上は変化が無いように見えていたが、ある日を境に学校へ姿を見せなくなった。八雲への最後の連絡では詳細は語らず「へまやった」とだけメールしていた。

「……つたく、あんなへまするとは俺も焼きが回ったわ」

その慎一が今いるのはとある下水道の通路。たまたま収集していた情報にとある“ヤ”のつく者達に関するもの混じっており、流失したその情報を揉み消そうとする過激派から慎一は狙われてしまったのだ。

「いたぞー!」

そして、一週間にも及ぶ逃走劇の果てにとうとう慎一は追い詰められてしまう。

「……一高校生が一週間も逃げ延びればよくやった方か」

この一週間で慎一も随分と参ってしまったようで、最早逃げるつもりはなかった。

「やるんなら出来るだけ痛くないように頼みますわ」

「ふん、一週間も逃げ延びたくせに最後は随分と潔いではないか」

「ただ単に逃げるのに疲れたんですわ……おたくらしっこすぎますって」

「……最後に確認だ。他にあの情報は洩らしていないだろうか？」

「あんな情報、俺の手に余りますって……誰に流してもガキの悪戯扱いされると思っ
て手つけてませんよ。それくらいおたくらなら調査済みだろ？」

「確かにな……まあいい、ならば望み通りにしてやろう」

「……感謝します」

それから更に数ヶ月が経った。兄に続き、幼馴染が行方不明となった事で八雲は少
ずつ部活をサボるようになった。元々レギュラーでもなかった事もあって部員や顧問
もあまりとやかく言ってくる事はなかった。一方、時雨は部活の無い日等の放課後は特
に宛もなく町をうろろするようになった。もしかしたらフラツと幼馴染が現れるの
ではないかと期待しているのだろう。そんなある日、その日も時雨は特に宛もなく町を
うろろしていた。

「……やっぱりないか」

普段なら近付かない路地裏等も回つてみたが収穫はゼロ。情報収集を得意とする慎一と違い、時雨はどちらかと言うと直感で動くタイプの為にこのような地道な作業は向いていないのだ。

「……あんまし遅くなるとまた兄さんに怒られるし、帰ろっか」

なんとなく今日はこれ以上の収穫は無いと察し、回れ右をして帰ろうとしたその時だった。薄暗いはずの夕方の路地裏が何故か明るくなったのだ……しかも、時雨の足下から。

「ん？つて、なんじゃこりゃ!？」

光を放っていたのは時雨を中心とした「魔法陣」のようなものだった。

「ちよつと待つて、これつてももしかしたらもしかしてももしかするの!？」

その間にも光はドンドン強くなりあまりの眩しさに時雨が目を閉じると、次の瞬間には路地裏に少女の姿はなくなっていた。

それから一ヶ月。妹まで行方不明となり、八雲はどうとう一人になった。慎一と時雨の搜索は一応続けられているが、八雲はなんとなく二人は見つかからないような気がしていた。

「……流石にここまで立て続けに色々起これば作為的なもん感じるよなあ」

某学園都市の不幸自慢ならば「不幸だあー！」と叫んでいるところだろう。

「というか、何でいきなり豪雨なんだよ……天気予報じゃ一日晴れだったじゃん」

その日も部活をサボり、見晴らしの良い高台の上でのんびりしていたのだが、突然の豪雨で高台にある小屋の屋根下に避難する羽目になり、八雲は今朝のニュースの天気予報を思い出し悪態をつく。

「というか、止む気配ゼロだな……」

それどころか雷まで鳴り出している。

「うわあ……最悪だな。これは風邪引くの覚悟で走って帰った方がいいかもしれないな」

そんな事を考えていた八雲だったが、その時、一際大きな雷鳴が響く。

「……あれ？これ、かなり近くね？」

そう思つて上を見上げると、丁度八雲の真上の雲がやけに蒼白い光が灯る。

「あつ、やべ」

次の瞬間、先程よりも更に大きな雷鳴と共に八雲のいた小屋目掛けて雷が落ちた。